

上越新幹線關係
埋藏文化財発掘調査報告

第 6 集

下佐野遺跡

II 地区 (I)

縄文時代・古墳時代編

1986

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋藏文化財調査事業団
日本鉄道建設公団

下佐野遺跡Ⅱ地区 正誤表 群馬県埋蔵文化財調査事業団

頁	行	誤	正
P2	下から 10行目	調査個所	調査箇所
P10	上から 2行目	昭和10年	昭和13年
P19	第6図		断面に土層番号1を入れる。
P69	下から 5行目	刀幅	刃幅
P97	下から 10行目	結晶片変岩類	結晶片岩類
P112	下から 7行目	ロームを掘残して	ロームを掘り残して
P239	下から 8行目	沖積底地	沖積低地
P241	上から 3行目	昭和9年	昭和13年
P246	上から 3行目	刀幅	刃幅
P440	第98表	馬具計測値	第471図(P645)参照
P636	下から 17行目	槍	槍(こしき)
P638	註 16	1984. 5.16	1984. 6.16
P639	参考文献	服部敬史 「関東地方の竈掘出土…	服部敬史 「関東地方の竈址出土…

資料	(財)群馬県埋蔵文化財	01-310
	調査事業団保管	
NO. 4-108	昭和61年5月30日	(4)

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第6集

下佐野遺跡

II 地区(1)

縄文時代・古墳時代編

1986

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本鉄道建設公団



7区62号土城馬具



7区2号古墳人物埴輪

序

上越新幹線は太平洋と日本海を結ぶ大動脈として昭和60年3月全線開通し、両地域の間は約2時間で結ばれることとなりました。

この建設工事に先行して実施された埋蔵文化財の緊急発掘調査は、文字記録などの文献資料に乏しい県内の原始古代社会解明に多大な資料をもたらしました。特に高崎市佐野地区は、国特別史跡「山ノ上碑、金井沢碑」や史跡「浅間山古墳」、「大鶴巻古墳」などの分布が示すように古代群馬の中枢的な役割りをはたして来た地域の中心にあります。

この度の発掘調査によって、本地域の歴史解明、さらには県域の地域史の解明に有力な鍵となる多くの資料を得ることができました。

発掘調査ならびに報告書作成にあられた方々および、調査遂行にあたりご尽力を頂きました関係各位にたいし、衷心より感謝申し上げます。

本書が古代社会解明の資料として、あるいは地域理解を深める学習の資料として、広く県民の皆様に利用されるとともに斯学に寄与する資料として活用されることを期待します。

昭和60年11月30日

（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1 本書は、上越新幹線建設に伴う事前調査として、昭和52年度から同57年度にかけて実施した、群馬県高崎市上・下佐野町所在の^{しもさの}下佐野遺跡II地区の発掘調査報告書である。

2 下佐野遺跡は、発掘調査の段階で、北から「寺前遺跡」、「下佐野 I 遺跡」、「下佐野 II 遺跡」としたが、整理事業の段階で「下佐野遺跡」として統一をした。従って、寺前遺跡を寺前地区、下佐野 I 遺跡を I 地区、同 II 遺跡を II 地区と変更をした。II 地区は、事前の分布調査で13地区、14地区と称した地点であり、所在地は次のとおりである。

13地区 高崎山下佐野町字川窪1331番地他、同字川籠石1275番地他

14地区 // // 字川籠石1201番地他、同字鍛冶風1019番地他、同字稻荷塚608番地他、同字長者屋敷1001番地他

また、調査時の概要は、上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概要 V（1979、群馬県教育委員会）、年報 1（1982、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団）に掲載をした。

3 調査の実施は、日本鉄道建設公団と群馬県教育委員会および(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団との委託契約に基づいて行われた。

13地区調査担当 群馬県教育委員会文化財保護課

細野雅男（現在 伊勢崎市立名和小学校）

前沢和之

中束耕志（旧姓佐藤 群馬県立歴史博物館）

14地区調査担当 群馬県教育委員会文化財保護課

長谷部達雄（現在 富岡市立富岡中学校）

能登健（ // 群馬県県史編さん室）

桜場一寿（ // 当事業団調査員）

下城正（ // // 主任）

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

女屋和志雄

井川達雄

小安和順（現在 甘楽町教育委員会）

調査員

外山政子

宮下万喜子

新井順二

4 整理事業は、昭和59年4月から昭和60年9月にかけて、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施をした。

整理担当 女屋和志雄

整理作業 外山政子、金子典子、藤井輝子、植杉紀代子、今井サチ子、高橋伸子
一倉洋子、須田はつ江、清水秀子

保存処理 関 邦一、北爪健二

遺物写真 佐藤元彦

編 集 女屋和志雄、外山政子

5 石器・石製品の石材鑑定は、飯島静男氏（群馬県地質研究会）の教示を得た。「玉作」に関しては、寺村光晴氏（和洋女子大学）、亀井正道氏（東京国立博物館）の教示を得た。特に、亀井氏には遺物実測図の提供を得、あわせて感謝の意を表わす次第である。

6 馬骨の鑑定については、宮崎重雄氏（群馬県立前橋第二高校）に依頼をし、その成果に関する玉稿を賜った。

7 調査成果のまとめについては、個々の問題点を一部明らかにする程度にとどめた。下佐野遺跡の全体像の把握は、1988年刊行予定の「下佐野遺跡 I地区・寺前地区」の報告書の中で、予定をしている。

8 本書の体裁は、2分冊とする。第1分冊は縄文時代・古墳時代編、第2分冊は平安時代・中近世編とし、分冊の末尾に時代別のまとめを付した。

9 本書の執筆分担

第1章 森田秀策（群馬県教育委員会文化財保護課長）

第2章～第4章 女屋和志雄

第5章 飯塚卓二、女屋和志雄

第6章 13地区 中束耕志

14地区 遺構は、各調査担当が分担し、文末に名を記した。

縄文時代遺構・遺物 新井順二

遺物観察表 外山政子 2号古墳人物埴輪 梅沢重昭

まとめ 縄文時代 新井、古墳時代 女屋、平安時代 外山、女屋

10 本書の作成にあたり、下記の諸氏に御指導、御協力を得た。記して感謝したい。（敬称略）
小林起久治、沢井良之助、白石保三郎、梅沢重昭、井上唯雄、松本浩一、大沢秋良、上原啓己、近藤平志、秋池 武、定方 隆、国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、吉田笑子、吉田恵子、野島のぶ江、並木綾子、今井もと子、須永光一、大塚昌彦、志村 哲、桜井 衛、茂木由行、国平健三、若尾正成、橋本澄朗、大越道正、江原雅美

11 発掘調査にあたっては地元関係者ならびに大勢の発掘作業員の御協力があり、ここに記して厚く感謝の意を表わす次第である。

凡 例

- 1 遺構番号は、調査時のままを原則としたが、欠番及び新たに番号を付けたものがある。
- 2 遺構図面の縮尺は、原則として以下のとおりである。

竪穴住居跡	1/60	方形周溝墓	1/120	1/60
カマド	1/30	古墳	1/200	1/60
掘立柱建物跡	1/60	溝	1/200	1/60
墓塚・土塚・井戸	1/40			

- 3 遺構図の方位は磁北をし、竪穴住居跡はカマドからの垂線に平行する一辺をもって計測した。
- 4 遺物番号は、4区1号住居跡を最初にして、時代・調査区・種類を問わず、全て通しとした。従って、遺構図、遺物図、遺物観察表、写真図版の各番号は同一の意味を持ち、共通する。その番号付けの基準は、床面直上か近い状態を第一とし、堀方出土、覆土中等の遺物で遺構説明に欠かせないものを、例外的に扱い参考資料とした。玉作工房跡の玉未成品類については、調査時のままとし、覆土中のものを「F」と略称し、この原則外にある。
- 5 遺物図面の縮尺は、原則として1/3に統一をしたが、甕・壺・円筒埴輪等は1/4、1/6とした。

石鏃・古銭	1/1	土錘	1/2
玉類未成品	1/1	1/2	

- 6 遺物観察表の記載項目

- a 法量 完存か近い状態は数字のみ、遺存値は（ ）、推定値は〔 〕とした。
- b 色調 「新版標準土色帖」（農林省農林水産技術会議事務局監修・1976年）に従った。
- c 焼成 須恵器については、硬質が焼き締まりのあるもの、やや軟質が所謂、軟質須恵、やや軟質も軟質須恵や土師質と呼ばれる器種に見られる具合である。
- d 焼成の酸化、還元かは発色の具合で見た。
- e 土器類口縁部ヨコナデ、甕類口縁～頸部のヨコナデ乃至、坏・埴類の体部ヨコナデ調整は、特に必要な場合を除いて記入していない。
- f 備考は、出土地点及び用途等で特記されることをあげた。

- 7 灰釉陶器の釉表現は、全て点描による。
- 8 遺物のうち、縄文時代、古墳時代玉作工房の未成品類については本文中に記載した。
- 9 遺構図中のスクリントーンは次のことを表わす。

 焼土

- 10 第1図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図（前橋・高崎・榛名山・富岡）、付図1は、高崎市都市計画図2千5百分の1。
- 11 出土遺物・記録資料類は、群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。

目 次

第1分冊（縄文時代・古墳時代編）

巻頭図版

序

例 言

凡 例

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査の経過	5
第3章 調査の方法	6
第4章 基本土層	7
第5章 遺跡の位置と周辺の遺跡	8
第6章 検出された遺構と遺物	
1 13地区の調査	14
2 14地区の調査	18
(1) 縄文時代	19
(2) 古墳時代	
① 前期	
1 玉作工房跡	57
2 竪穴住居跡	110
3 土 壇	138
4 方形周溝墓	141
② 中期	149
③ 後期	156
④ 古墳	201
3 ま と め	235
(1) 縄文時代	235
(2) 古墳時代	241
下佐野遺跡(13地区)出土の馬骨について	
群馬県立前橋第二高校 宮崎重雄	252

第2分冊（平安時代・中・近世編）

第6章 検出された遺構と遺物

2	14地区の調査	
(3)	平安時代	257
1	竪穴住居跡	257
2	掘立柱建物跡	540
3	溝	554
4	墓 塚	565
(4)	中・近世その他	575
1	土 塚	575
2	井 戸	603
3	溝	613
4	道路状遺構	615
5	近世遺構群	617
6	グリット遺物その他	618
3	ま と め	620
(3)	平安時代	620
結		646

付図1 調査区位置図及び佐野古墳群位置図

付図2 下佐野遺跡II地区全体図(1)、(2)

付図3 時代別遺構分布図

付図4 平安時代の甔

插图目次

第 1 图	基本土層柱状图	7	第 44 图	6 区 9 号住居跡遺物图 (5)	63
第 2 图	遺跡位置图	10—11	第 45 图	7 区 22 号住居跡遺構图	65
第 3 图	13 地区遺構全体图	15	第 46 图	7 区 22 号住居跡遺物分布图	66
第 4 图	土坑、溝状遺構平面图	16	第 47 图	7 区 22 号住居跡遺物图 (1)	67
第 5 图	2 号溝断面图	17	第 48 图	7 区 22 号住居跡遺物图 (2)	68
第 6 图	7 区 11 号住居跡遺構图	19	第 49 图	7 区 22 号住居跡遺物图 (3)	69
第 7 图	7 区 28 号住居跡遺構、遺物图	20	第 50 图	7 区 23 号住居跡遺構图	70
第 8 图	7 区 34 号住居跡遺構图	21	第 51 图	7 区 23 号住居跡遺物分布图	71
第 9 图	7 区 34 号住居跡遺物图	22	第 52 图	7 区 23 号住居跡遺物图 (1)	72
第 10 图	7 区 35 号住居跡遺構、遺物图	23	第 53 图	7 区 23 号住居跡遺物图 (2)	73
第 11 图	7 区 42 号住居跡遺構图	23	第 54 图	7 区 24 号住居跡遺構图 (1)	74
第 12 图	7 区 42 号住居跡遺物图	24	第 55 图	7 区 24 号住居跡遺構图 (2)	75
第 13 图	7 区 58 号住居跡遺構、遺物图	26	第 56 图	7 区 24 号住居跡遺物分布图	76
第 14 图	8 区 1 号住居跡遺構图	26	第 57 图	7 区 24 号住居跡遺物图 (1)	77
第 15 图	8 区 1 号住居跡遺物图 (1)	27	第 58 图	7 区 24 号住居跡遺物图 (2)	78
第 16 图	8 区 1 号住居跡遺物图 (2)	28	第 59 图	7 区 24 号住居跡遺物图 (3)	79
第 17 图	8 区 3 号住居跡遺構、遺物图	28	第 60 图	7 区 24 号住居跡遺物图 (4)	80
第 18 图	7 区 75.76.77 号土坑遺構图	30	第 61 图	7 区 24 号住居跡遺物图 (5)	81
第 19 图	7 区 75.76.77 号土坑遺物图	31	第 62 图	7 区 24 号住居跡遺物图 (6)	82
第 20 图	7 区 77 号土坑遺物图	32	第 63 图	7 区 24 号住居跡遺物图 (7)	83
第 21 图	7 区 108.109.110 号土坑遺構图	33	第 64 图	7 区 24 号住居跡遺物图 (8)	84
第 22 图	7 区 108.109.110 号土坑遺物图	35	第 65 图	7 区 30 号住居跡遺構图	87
第 23 图	縄文土坑 (1)	36	第 66 图	7 区 30 号住居跡遺物分布图	88
第 24 图	縄文土坑 (2)	37	第 67 图	7 区 30 号住居跡遺物图 (1)	89
第 25 图	縄文土坑 (3)	38	第 68 图	7 区 30 号住居跡遺物图 (2)	90
第 26 图	縄文土坑遺物图 (1)	39	第 69 图	7 区 30 号住居跡遺物图 (3)	91
第 27 图	縄文土坑遺物图 (2)	40	第 70 图	7 区 30 号住居跡遺物图 (4)	92
第 28 图	縄文土坑遺物图 (3)	41	第 71 图	7 区 30 号住居跡遺物图 (5)	93
第 29 图	縄文土坑遺物图 (4)	42	第 72 图	7 区 41 号住居跡遺構图 (1)	95
第 30 图	縄文土坑遺物图 (5)	43	第 73 图	7 区 41 号住居跡遺構图 (2)	96
第 31 图	縄文土坑遺物图 (6)	44	第 74 图	7 区 41 号住居跡遺物分布图	97
第 32 图	遺構外遺物縄文土器 (1)	49	第 75 图	7 区 41 号住居跡遺物图 (1)	98
第 33 图	遺構外遺物縄文土器 (2)	50	第 76 图	7 区 41 号住居跡遺物图 (2)	99
第 34 图	遺構外遺物石器 (1)	51	第 77 图	7 区 41 号住居跡遺物图 (3)	100
第 35 图	遺構外遺物石器 (2)	52	第 78 图	7 区 41 号住居跡遺物图 (4)	101
第 36 图	遺構外遺物石器 (3)	53	第 79 图	7 区 41 号住居跡遺物图 (5)	102
第 37 图	遺構外遺物石器 (4)	54	第 80 图	7 区 41 号住居跡遺物图 (6)	103
第 38 图	6 区 9 号住居跡遺構图	57	第 81 图	7 区 51 号住居跡遺構图	105
第 39 图	6 区 9 号住居跡遺物分布图	58	第 82 图	7 区 51 号住居跡遺物分布图	106
第 40 图	6 区 9 号住居跡遺物图 (1)	59	第 83 图	7 区 51 号住居跡遺物图 (1)	107
第 41 图	6 区 9 号住居跡遺物图 (2)	60	第 84 图	7 区 51 号住居跡遺物图 (2)	108
第 42 图	6 区 9 号住居跡遺物图 (3)	61	第 85 图	7 区 51 号住居跡遺物图 (3)	109
第 43 图	6 区 9 号住居跡遺物图 (4)	62	第 86 图	6 区 20 号住居跡遺構图	110

第87図	6区20号住居跡遺物図	111	第134図	5区5B、5C号住居跡遺物図(1)	173
第88図	6区22号住居跡遺構図	112	第135図	5区5B、5C号住居跡遺物図(2)	174
第89図	6区22号住居跡遺物図	113	第136図	5区57号住居跡遺構図(1)	176
第90図	7区25号住居跡遺構図	115	第137図	5区57号住居跡遺構図(2)	177
第91図	7区25号住居跡遺物図	116	第138図	5区57号住居跡遺物図(1)	178
第92図	7区45号住居跡遺構図	118	第139図	5区57号住居跡遺物図(2)	179
第93図	7区45号住居跡遺物図(1)	119	第140図	5区57号住居跡遺物図(3)	180
第94図	7区45号住居跡遺物図(2)	120	第141図	5区57号住居跡遺物図(4)	181
第95図	7区45号住居跡遺物図(3)	121	第142図	5区57号住居跡遺物図(5)	182
第96図	7区45号住居跡遺物図(4)	122	第143図	5区58号住居跡遺構図	185
第97図	7区45号住居跡遺物図(5)	123	第144図	5区58号住居跡遺物図(1)	186
第98図	7区45号住居跡遺物図(6)	124	第145図	5区58号住居跡遺物図(2)	187
第99図	7区57号住居跡遺構図	130	第146図	5区58号住居跡遺物図(3)	188
第100図	7区48号住居跡遺構図	131	第147図	5区58号住居跡遺物図(4)	189
第101図	7区48号住居跡遺物図(1)	132	第148図	5区70号住居跡遺構、遺物図	190
第102図	7区48号住居跡遺物図(2)	133	第149図	6区7号住居跡遺構図	192
第103図	7区56号住居跡遺構図	136	第150図	6区7号住居跡遺物図(1)	193
第104図	7区56号住居跡遺物図	137	第151図	6区7号住居跡遺物図(2)	194
第105図	6区12号土壇遺構図	138	第152図	6区7号住居跡遺物図(3)	195
第106図	6区12号土壇遺物図	139	第153図	6区7号住居跡遺物図(4)	196
第107図	7区111号土壇遺構、遺物図	139	第154図	6区7号住居跡遺物図(5)	197
第108図	7区1号方形周溝墓遺構図	141	第155図	6区18号住居跡遺構図	200
第109図	7区1号方形周溝墓遺物図	141	第156図	6区18号住居跡遺物図	200
第110図	7区2号方形周溝墓遺構図	142	第157図	7区1号古墳遺構図	201
第111図	7区3号方形周溝墓遺構図	143	第158図	7区1号古墳遺物図(1)	202
第112図	7区3号方形周溝墓遺物図(1)	144	第159図	7区1号古墳遺物図(2)	203
第113図	7区3号方形周溝墓遺物図(2)	145	第160図	7区2号古墳遺構図	206
第114図	7区4号方形周溝墓遺構図	147	第161図	7区2号古墳遺物図(1)	209
第115図	7区4号方形周溝墓遺物図	148	第162図	7区2号古墳遺物図(2)	210
第116図	7区5号方形周溝墓遺構図	148	第163図	7区2号古墳遺物図(3)	211
第117図	5区7C号住居跡遺構図	149	第164図	7区3号古墳遺構図(1)	214
第118図	5区7C号住居跡遺物図	151	第165図	7区3号古墳遺構図(2)	215
第119図	5区69号住居跡遺構図	152	第166図	7区3号古墳石室平、断面図(1)	217
第120図	5区69号住居跡遺物図(1)	153	第167図	7区3号古墳石室平、断面(2)、遺物図	218
第121図	5区69号住居跡遺物図(2)	154	第168図	7区3号古墳遺物図(1)	219
第122図	5区2号住居跡遺構図	156	第169図	7区3号古墳遺物図(2)	220
第123図	5区2号住居跡遺物図(1)	157	第170図	7区3号古墳遺物図(3)	221
第124図	5区2号住居跡遺物図(2)	158	第171図	7区3号古墳遺物図(4)	222
第125図	5区2号住居跡遺物図(3)	159	第172図	7区3号古墳遺物図(5)	223
第126図	5区4号住居跡遺構図	162	第173図	7区4号古墳遺構図	231
第127図	5区4号住居跡遺構(2)、遺物図(1)	163	第174図	7区4号古墳遺物図	232
第128図	5区4号住居跡遺物図(2)	164	第175図	7区5号古墳遺構図	233
第129図	5区4号住居跡遺物図(3)	165	第176図	7区6号古墳遺構図	234
第130図	5区4号住居跡遺物図(4)	166	第177図	縄文時代時期別遺構分布図	236
第131図	5区4号住居跡遺物図(5)	167	第178図	縄文土器集成図	238
第132図	5区4号住居跡遺物図(6)	168	第179図	周辺遺跡位置図	240
第133図	5区5B、5C号住居跡遺構図	172	第180図	県内玉作工房跡と石製品出土古墳	243

第181図	6区9号住居跡未成品分布図	245
第182図	7区41号住居跡未成品分布図	245
第183図	玉作製作模式図	247

第184図	工房群の推定図	249
第185図	琴柱状品分布図	250
第186図	以下第2分冊	

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	11
第2表	遺構外出土石器一覧表	56
第3表	6区9号住居跡出土遺物観察表	64
第4表	7区22号住居跡出土遺物観察表	69
第5表	7区24号住居跡出土遺物観察表	85
第6表	7区30号住居跡出土遺物観察表	93
第7表	7区41号住居跡出土遺物観察表	104
第8表	6区20号住居跡出土遺物観察表	111
第9表	6区22号住居跡出土遺物観察表	114
第10表	7区25号住居跡出土遺物観察表	117
第11表	7区45号住居跡出土遺物観察表	125
第12表	7区48号住居跡出土遺物観察表	134
第13表	7区56号住居跡出土遺物観察表	137
第14表	6区12、7区111号土壇出土遺物観察表	140
第15表	7区3号方形周溝墓出土遺物観察表	146
第16表	7区4号方形周溝墓出土遺物観察表	148
第17表	5区7C号住居跡出土遺物観察表	150
第18表	5区69号住居跡出土遺物観察表	155

第19表	5区2号住居跡出土遺物観察表	160
第20表	5区4号住居跡出土遺物観察表	168
第21表	5区5B、5C号住居跡出土遺物観察表	175
第22表	5区57号住居跡出土遺物観察表	183
第23表	5区58号住居跡出土遺物観察表	189
第24表	5区70号住居跡出土遺物観察表	191
第25表	6区7号住居跡出土遺物観察表	197
第26表	6区18号住居跡出土遺物観察表	200
第27表	7区1号古墳出土遺物観察表	204
第28表	7区2号古墳出土埴輪女子立像計測値表	208
第29表	7区2号古墳出土遺物観察表	212
第30表	7区3号古墳出土遺物観察表	224
第31表	7区4号古墳出土遺物観察表	232
第32表	古墳時代竪穴住居跡一覧表	242
第33表	工房跡別工程集計表	246
第34表	下佐野遺跡(13地区)馬骨の計測値表	255
第35表	下佐野遺跡(13地区)出土馬歯の計測値表	256
第36表	以下第2分冊	

図 版 目 次

図版 1	遺跡遠景(観音山丘陵から)
〃	同上
図版 2	調査風景(1、2区付近)
〃	全景(7、8区)
図版 3	作業風景
〃	同上
〃	同上
図版 4	13地区全景(北)
〃	1、2、3号馬骨(南)
図版 5	1号馬骨(南)
〃	2号馬骨(南)
図版 6	3号馬骨(南)
〃	2号溝断面(西)
図版 7	7区28号住居跡全景(南)
〃	7区42号住居跡全景(南)

図版 8	8区1号住居跡全景(南)
〃	8区1号住居跡炉跡(南)
図版 9	7区77号土壇(南)
〃	7区82号土壇(南)
〃	7区114号土壇(南)
図版 10	7区108、109、110号土壇(西)
〃	7区108号土壇(南)
〃	7区110号土壇(西)
図版 11	縄文土器(1)
図版 12	同上(2)
図版 13	7区28、34、42号住居跡遺物
図版 14	8区1号住居跡遺物
図版 15	7区7、91号土壇遺物
図版 16	7区75、77号土壇遺物
図版 17	7区89、90、92号土壇遺物

- 図版 18 縄文遺構外遺物
- 図版 19 6区9号住居跡全景(南)
// 6区9号住居跡工作用ピット(西南)
- 図版 20 6区9号住居跡遺物(1)
// 同上(2)
- 図版 21 同上(3)
// 6区9号、7区22号住居跡遺物(4)
- 図版 22 7区22号住居跡全景(南)
// 7区22号住居跡ピット内土器
- 図版 23 7区22号住居跡遺物(1)
// 同上(2)
- 図版 24 7区23号住居跡全景(北)
// 7区23号住居跡遺物
- 図版 25 7区24号住居跡全景(南)
// 7区24号住居跡工作台と砥石
- 図版 26 7区24号住居跡未成品出土状態
// 工作台
// 石核
- 図版 27~30 7区24号住居跡遺物(1)~(8)
- 図版 31 7区30号住居跡全景(東)
// 7区30号住居跡遺物出土状態
- 図版 32~33 7区30号住居跡遺物(1)~(4)
- 図版 34 7区41号住居跡全景(東)
// 7区41号住居跡工作用ピット
- 図版 35~37 7区41号住居跡遺物(1)~(6)
- 図版 37 7区30号住居跡遺物(5)
- 図版 38 7区51号住居跡全景(西)
// 7区51号住居跡遺物出土状態
- 図版 39 7区51号住居跡遺物(1)
// 同上(2)
- 図版 40 6区20号住居跡全景(北西)
// 6区22号住居跡全景(北)
- 図版 41 6区20、22号、7区25号住居跡遺物
- 図版 42 7区45号住居跡全景(南)
// 7区45号住居跡遺物出土状態
- 図版 43~45 7区45号住居跡遺物(1)~(3)
- 図版 46 7区48号住居跡遺物
- 図版 47 7区56号住居跡全景(西)
// 7区56号住居跡遺物
- 図版 48 6区12号土壇全景(西)
// 6区12号、7区111号土壇遺物
- 図版 49 7区1、2、3、5号方形周溝墓(東)
// 7区1号方形周溝墓全景(西)
- 図版 50 7区2号方形周溝墓全景(西)
// 7区3号方形周溝墓全景(南)
- 図版 51 7区4号方形周溝墓全景(北西)
// 7区5号方形周溝墓全景(西)
- 図版 52 7区1、3、4号方形周溝墓遺物
- 図版 53 5区7C号住居跡全景(北)
// 5区7C号住居跡遺物出土状態(北)
- 図版 54 5区7C号住居跡遺物
// 5区69号住居跡全景(北)
- 図版 55 5区69号住居跡遺物出土状態(北)
// 5区69号住居跡遺物
- 図版 56 5区2号住居跡全景(西南)
// 5区2号住居跡遺物出土状態(南)
- 図版 57 5区2号住居跡遺物
- 図版 58 5区4号住居跡全景(東南)
// 5区4号住居跡遺物出土状態(東南)
- 図版 59 5区4号住居跡炭化物出土状態
// 5区4号住居跡遺物(1)
- 図版 60 同上(2)
- 図版 61 5区5B、5C号住居跡全景(北)
// 5区5B号住居跡遺物(1)
- 図版 62 5区5B号住居跡遺物(2)
// 5区57号住居跡全景(西)
- 図版 63 5区57号住居跡遺物出土状態(西)
// 5区57号住居跡カマド(西)
- 図版 64 5区57号住居跡遺物(1)
- 図版 65 同上(2)
- 図版 66 5区58号住居跡全景(北西)
// 5区58号住居跡カマド(北西)
- 図版 67 5区58号住居跡遺物
// 6区7号住居跡全景(北)
- 図版 68 6区7号住居跡遺物出土状態(北)
// 6区7号住居跡カマド(北)
- 図版 69 6区7号住居跡遺物
- 図版 70 7区1号古墳形象埴輪
// 7区1号古墳から3号古墳を望む
- 図版 71 7区2号古墳全景(西)
// 7区2号古墳人物埴輪
- 図版 72 7区2号古墳形象埴輪
// 7区2号古墳円筒埴輪
- 図版 73 7区3号古墳全景(前方部から)
// 7区3号古墳全景(後円部から)
- 図版 74 7区3号古墳円筒埴輪
- 図版 75 7区3号古墳形象埴輪(1)
// 同上(2)
- 図版 76 同上(3)
// 7区3号古墳主体部遺物
- 図版 77 7区4号古墳全景(東)
// 7区4号古墳遺物
- 図版 78以下第2分冊

しも さ の
下佐野遺跡II地区

第1章 調査に至る経過

上越新幹線の建設工事に伴い破壊が予想される遺跡について、昭和48年度以来、群馬県教育委員会は日本鉄道建設公団との間で委託契約により記録保存のための発掘調査を実施してきた。当初の要調査対象遺跡は22カ所にのぼっており、効率的な方法は南なり北から順次着手していくことであるが、実際には地域によって用地事情や買収状況、工事の発注工程などが異なり、また、当初本線敷(巾12m)で入ったところがこれに側道が追加され、対象面積が倍増する所などさまざまな条件によって左右され、与えられた条件下での調査を強いられるというのが実態であった。また調査体制上からみて、限られた調査担当者により現地の調査が実施されるということから一定の調査箇所しか併行できず、計画的な箇所づけということが各年度ごとの建設に当る鉄建公団側と調査に当たった県教委(昭和53年度からは財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)側との間の大きな調整事項であった。

昭和48年度以降、50年度に至る群馬県下における上越新幹線地域の埋蔵文化財調査経過は下記のとおりであった。

昭和48年度	・利根郡月夜野町上津	十二原遺跡(48.5.7~48.10.6)	終了
	・利根郡月夜野町上津	大原遺跡(48.8.1~48.10.6)	一年次
	・高崎市下小鳥町	下小鳥遺跡(48.10.22~49.3.30)	一年次
昭和49年度	・高崎市大八木町	融通寺遺跡(49.4.15~50.2.15)	一年次
	・	熊野堂遺跡(49.9.9~50.3.28)	一年次
	・利根郡月夜野町	大原遺跡(49.9.10~49.10.16)	二年次、終了
	・高崎市内上佐野町	舟橋遺跡(49.11.21~50.3.31)	一年次
昭和50年度	・高崎市内上佐野町	舟橋遺跡(50.4.7~50.6.25)	二年次
	・	寺前遺跡(50.4.7~50.7.15)	一年次
	・利根郡月夜野町	前中原遺跡(50.10.1~50.11.30)	一年次
	・	洞遺跡(50.10.1~50.12.20)	一年次
	・高崎市木部町	寺東遺跡(50.10.6~51.3.16)	一年次

以上の経過でも明らかなように月夜野町内と高崎市内のごく一部というのがスタート時点での対象地域であったが、鉄建公団側の意向はできるだけ全県的な箇所でも着手したいことと、烏川架橋のように長大橋地域については時間的にもかかるため早期に着工したいこと、部分的にも調査の終了した所では建設工事に移行したいこと等が前提であった。昭和51年春以降、その重点が高崎市内上佐野町第2町内(烏川架橋より)に集中してきた。地元事情も従来の絶対反対から文化財調査と測量のための立入りなら認めてよいという空気になってきているとの情報ももたらされてきていた。しかし教育委員会側の調査体制としては、年度途中における急な変更は不可能であり、

第1章 調査に至る経過

現在進行中の箇所が一段落をみせる時期でないと対応はとれない点を主張して理解を求めた。

昭和51年11月16日に至り、鉄建公団側からの申入れは、①藤岡市森遺跡は11月に終了、中遺跡は52年2月中旬に終了を希望、②下佐野II地区は本年12月から1班編成でどうしても入ってほしいこと、それに伴う借地は鉄建側とする、③52年度の実施予定箇所は6カ所とする、というものであり、総体的に、用地買収及び工事が急ピッチに進行してきた気配が感じられた。しかし同年11月29日に至り、現地での地権者説明会の開催は12月5日に総選挙があるためそれ以前では無理であること、従って早くて現地入りは12月10日以降であろうという予想であった。しかし、諸般の情勢から12月中の現地での説明会や調査入りは事実上不可能となり年を越すことになった。52年1月6日になり、鉄建公団からの情報では、①近日中に地権者会が開ける情勢になってきていること、②河川敷に入るについては、あらかじめ建設省へ届出ることが必要であることなどであった。同月24日の夜7時から高崎市下佐野第2町内の地権者会が地元公民館において開催され、鉄建公団と共に、調査に当る群馬県教育委員会側も4人が出席して、調査の目的、方法などを説明し、地元での協力、理解を求めた。しかし、この日はさまざまな質問が出てそれに答えるということまで進行し、調査立入りを承諾するというところまでには至らなかった。

現地での地権者への説明会では、調査の目的として、おおよそ次のごとき内容を述べた。もともと佐野、ことに下佐野の地は古代から有名で、国特別史跡の山上碑及び金井沢碑の碑文中に出てくる「佐野三家（さののみやけ）」及び「下賛郷高田里（しもさぬごうたかだのさと）」の地に推定されるものであり、さらに倉賀野古墳群（国史跡浅間山・大鶴巻古墳）も近く、必ず当時の人々の住居跡が多くあるだろう。また伝説では長者屋敷というものもあり、佐野の舟橋の伝説地も近い所にある。地名にも川籠石（こうごいし）という興味深いものもある。何れにしても上越新幹線全線の中でも有数の遺跡が集中していることは確実である……等であった。

昭和52年2月16日の夜に開催された下佐野第2町内の地権者会において、町内における文化財調査立入りについて了解に達したとの報告を受け、2月21日に鉄建公団と協議をした結果、とりあえず3月1日以降、下佐野第2町内の河川敷部分に調査入りすることとし、2月28日から器材運搬等の準備に入った。そして3月29日に至り、52年度の調査箇所については、既に進行中の藤岡市中・高崎市下佐野I、同II、月夜野町洞の4班体制とすることになった。

以上のような経過で下佐野II（下佐野第2町内に所在ということから命名）遺跡のうち先ず河川敷部分から着手したが、烏川の流路部分では遺構を検出することはなかったが、烏川左岸にかかる部分においては若干の遺構や遺物等を検出したため当初の予定がずれて、河川敷地域が終了したのは昭和52年6月11日であった。この調査体制は工事日程の急がれていた藤岡市中遺跡への応援強化へと引継がれ、8月中旬までの追い込み調査となった。

このように一時期中断の経過があったが、中遺跡の終了をもって、昭和52年9月からの調査体制は月夜野町は2班で1班追加のほか下佐野IIへ入ることが決まり、8月25日の用地契約を待つて細部の協議を重ね、9月15日から南部の烏川寄りから北上することで調査が開始された。この

調査は翌53年3月末日まで続行された結果、烏川左岸寄りには比較的少なく、北上するに従って住居跡の存在など密度が濃くなることが確認されたものの年度末でもって一旦中断することとし、下佐野Ⅰ地区のみ続行とし、群馬町町内の三ツ寺地区や、東下井出地区が新たに始まった外、烏川右岸の阿久津町内での発掘調査が開始されるなど昭和53年度は全県的な発掘調査の展開となった。

昭和54年度における調査工程は4月6日鉄建公団側と協議した結果、月夜野町深沢遺跡（11月14日調査終了）、群馬町渡田遺跡（8月31日終了）、同三ツ寺Ⅲ遺跡（11月22日終了）、高崎市熊野堂遺跡（9月14日までで4年次調査終了）、下佐野Ⅰ遺跡（年度末まで継続）が年度当初からの着手箇所であった。年度後半に入った所は高崎市上佐野寺前遺跡（12月3日～昭和55年3月24日）、同阿久津遺跡（11月26日～3月27日）、同木部寺東遺跡（11月16日～3月11日）と、下佐野Ⅱ遺跡（12月3日～3月24日）の4区であった。ところで、昭和54年度に入って間もなく、4月18日と同月25日になって、鉄建公団から、下佐野Ⅱ遺跡に接して、烏川寄りの地点において「き電区分所」という名称の建設計画のあることが知らされた。き（饋）電というのは、発電所や変電所などから他の発電所や変電所を通らずに直接幹線や電車の架空線に配電することをいうのだそうであり、一般的にはなじみの薄い名称であるが、新幹線のような大型電力消費の事業には当然付随する施設であった。その際の説明によれば、大宮起点73km603mから694mに至る91mを底辺にして上辺が約80m、高さ（東西の長さ）42mという台形の用地で、その面積は約3600㎡である。計画によれば、この用地の中に配電盤室、切替遮断器室、延長用遮断器室、単巻変圧器室などを配置し、周囲には本線の側道から連続した通路を設けるというものであり、き電区分所の最も西側の部分は烏川左岸の保全区域（河川区域から20m）の中に入って、殆ど河川区域に接する位置であった。そして鉄建公団側の工程では、昭和55年7月～9月に土木工事、10月から翌56年6月までが諸施設の建設と配電工事を予定しているとのことであった。これまでの下佐野Ⅰ・Ⅱ遺跡での調査結果を基にして考えると、き電区分所の予定地にも当然遺構の延びが想定され、工事に先立つ事前調査は欠かすことができないこと、また調査日程は従来からの計画で進行中の本線・側道部と一体的に進めたい旨の意志表示をしてきた。なお、き電区分所内の対応については、昭和54年9月5日に、予定地内2カ所において地耐力調査が行われ、県教委文化財保護課員が立合っている。

その後、昭和55年1月24日及び2月22日の県教委と鉄建公団との協議において、上越新幹線の開通は昭和56年秋に予定しており、そのためにはすべての現地工事は1年前の55年秋には完了していなければならない、従って文化財調査は早急に終了するように促進して欲しい旨の要望が出された。このように切迫した情勢をうけて具体的にどうした手だてをとることが打開策になるかということで、遺構検出後における平板測量の外部委託、人夫雇用の強化とマイクロバスによる送迎委託、本線敷区域のみの先行問題などが協議された。前二者については予算的な裏づけさえ整えば実施可能であり、事実さっそく実施に踏切ったのであるが、本線敷のみ先行するという委託者（鉄建公団）側の要望に対しては慎重に協議が繰返された。埋蔵文化財発掘調査の精度や効率

第1章 調査に至る経過

からみて本線敷(12m)や側道(左右各6m)を一体的に調査を進めるのが最善であることはいうまでもない。更に調査現場における安全管理が必要である。本線工事が進む中で側道の発掘調査を併行することは不測の事態を招きかねないという心配もあった。鉄建側では両側道を2次調査に残すという提案もなされたが、2次に延ばすというのは最低面積とすることで、工事工程に合わせて右又は左側道の何れかにとどめることとして、下佐野II遺跡の4区からと、群馬町三ツ寺II遺跡などで側道部の一方を残す方式が採られることとなった。

昭和55年度における下佐野II遺跡は、前年度からの継続で、5・6区を調査し、5月6日から10月27日まで実施してこの地区(73km550m～73km700m)の本線敷き(右側の側道含み)を終了、11月からようやく電区分所内の調査に入ることができた。この地区は順調に進めば翌56年2月末には終了できる予定であったが、縄文～古墳時代の住居跡の外に、石製模造品を製作した工房跡、古墳や方形周溝墓など精査を要する遺構の発見により日程が延び延びとなり、一段落したのは翌年度の昭和56年4月30日であり、下佐野II遺跡4～6区の左側道のすべての調査が終了したのは昭和57年2月27日で、52年3月からの第1次から、苦節6年(ただし昭和53年度のみ中断)、前後6次にわたる長期調査となったのである。

なお当初は群馬県教育委員会文化財保護課が調査に当たっていたが、昭和53年7月15日付けで設立認可となった(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団と、昭和55年4月1日に発足した群馬県埋蔵文化財調査センターの機構改革により、昭和55年度以降は、日本鉄道建設公団と群馬県教育委員会からの委託を受けて、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査主体となって実施された。

(森田秀策)

第2章 調査経過



調査範囲は、新幹線大宮起点72km500mから、15地区と接する73km725mまで長さ1225mあり、幅約24mで、面積は約26000m²である。調査区は、73km00mを境界点として南を13地区、北を14地区に分け（付図1）、調査は各々に分けて実施された。

13地区は、殆どが烏川の河川敷で、14地区をのせる台地南端馬骨出土地点が含まれる。調査は、第1次（昭和52年3月）と第2次（昭和52年4月～6月）の二度に分けて実施された。河川敷部分には、2×2mのグリット約130ヶ所が設けられ、遺構の有無を目的としたが、地表面下約2m前後まで掘り下げたが、河川のはん乱による細粒の砂質土が小礫と互層を成し、遺構の確認はできなかった。遺物もはん乱層中で磨滅した土器片や陶磁器片等が少量見られたにすぎない。しかし、台地寄りのグリットからは、台地上から流出したと思われる土器片が、古墳時代前期を最古として出土している。その状態から台地上に遺構の存在する可能性は高い。台地上の調査区からは、馬骨を埋葬した土坑3基、溝及び溝状遺構6条が確認されている。

14地区は、台地上を崖線際に沿って南北に貫いている。大宮起点73km725mを境界点として北の15地区と接する。調査は、用地買収、対象用地を新幹線本線敷と側道敷とに分ける等の事情で都合4回に及び、13地区に続けて第3次～第6次とした。

第3次（昭和52年10月～53年2月実施）、1～3区、5区の一部を調査。この結果、3区北半で住居跡4、井戸、土坑、溝、5区で住居跡18、土坑等が確認された。1～3区南半までは、遺構らしいものはなく、遺構分布の南縁を知る。

第4次（昭和54年12月～55年3月実施）、3区の一部、片側道敷を残した4区を調査。この結果、3区では土坑状のものに、多数の風倒木痕が確認された。4区では、住居跡47、掘立柱建物跡2、井戸、土坑、溝等の平安時代に属する遺構が確認された。住居跡は、殆どが東カマドで、規模、方位を同じくするなどの特徴を持っていた。

第5次（昭和55年4月～56年4月実施）、5区～8区と7区に含めたき電区分所用地を調査。この結果、住居跡86、掘立柱建物跡、古墳、方形周溝墓、土坑、井戸、溝、近世遺構と本遺跡での主な時代の遺構が全て揃った感がある。住居跡の中には古墳時代前期に属する玉作工房跡7が含まれ、古墳時代の遺構が多い中であって、特色となっている。

第6次（昭和56年12月～57年2月実施）、3～6区の左側道敷を調査。この結果、住居跡17、土坑、溝、井戸等が確認された。

以上により、13、14地区合せて6次に及ぶ調査が、昭和57年2月27日で終了した。

第3章 調査方法

下佐野II地区の調査範囲は、全長1225m、幅約24mで上越新幹線大宮起点72km500mから73km725mの間で、73km00mを境として南を13地区、北を14地区に分け、北に15地区(下佐野I地区)16地区(船橋遺跡)と続く(付図1)。調査区域は、烏川の崖線際に沿って北上し、東へ緩くカーブしている。調査方法は、調査期間が長く、用地等の事情で各調査区に若干の異なりが見られるが、13、14地区として、次の様に要約される。

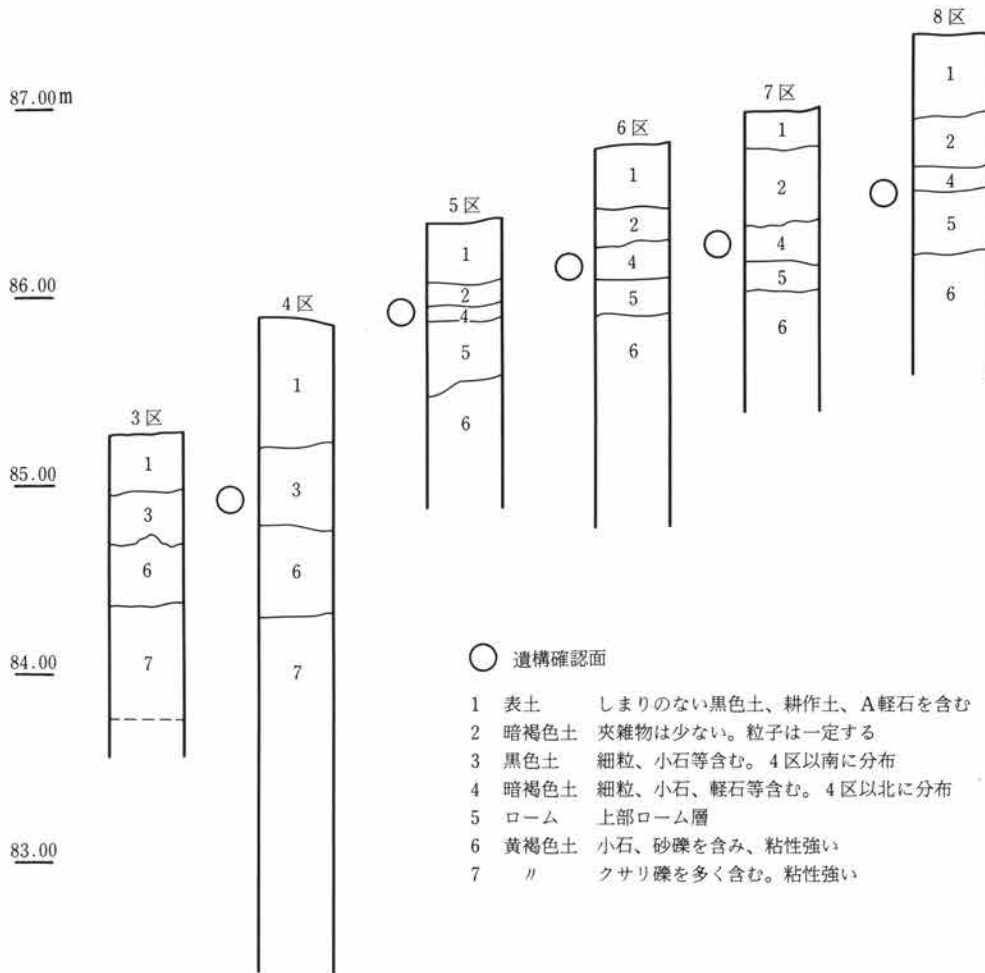
13地区は、14地区全体をのせる台地の最南端の一部を含むが、殆どは烏川の河川敷である。調査方法は、以下の点を基準として実施した。

- (1) グリット設定の基軸線は、新幹線建設用杭に準拠し、 2×2 mを基本単位とする。
- (2) 調査区は、南端の新幹線大宮起点72km500mを基準に、100m毎に1調査区を設定し、南から1～5区とした。
- (3) 各グリットの表示は、基軸線に平行する南北方向を算用数字、直交する東西方向をアルファベットで表わし、その組合せで南西隅の交点に拠った。
- (4) 調査対象範囲は、72km500mから73km00mまでである。

14地区は、台地上に広がり、73km00mを境界点として13地区に接する。調査方法は、ほぼ13地区と同じだが、以下の点を基準として実施した。

- (1) グリット設定の基軸線は、新幹線建設用杭に準拠し、 3×3 mを基本単位とする。ただし、昭和52年度調査の3区、5区の一部は、 5×5 mを単位としたが上記に改変した。
- (2) 調査区は、13地区と接する大宮起点73km00mを基準に、100m毎に1調査区を設定し、南から1～8区とした。ただし、4区と5区については、調査年度の関係から4区が北へ約30mずれ、調査内容に従った。また、7区については、崖線側にき電区分用地が台形状に付くが、同一区として扱った。
- (3) 各グリットの表示は、13地区の原則に同じだが、先の7区に含まれるき電区分用地については、東西方向にAに続けて再度Z以下アルファベットを続けた。
- (4) 調査対象範囲は、73km00mから73km725mまでである。
- (5) 遺構番号は、調査区設定の原則に従い、1調査区毎としたが、4区と5区については例外として一連の番号が住居跡以下に付けられている。

第4章 基本土層



第1図 基本土層柱状図

調査区内の土層は、色調、性状から8層に整理した。遺構確認面は、3区で第3層黒色土、4区以北は第4層暗褐色土とした。現地形では、3区から8区にかけて約2mの比高差があり、全体に東南側の粕沢川方面に緩い傾斜を持っている。全体には第6層黄褐色土を基盤とした安定した状態にあるが、3区中央付近での第5層ロームの有無を持って、土層の性状に南で粘性が強まり、竪穴住居跡を主とした北からの遺構分布が稀薄になる。逆に、ローム層の分布が遺構分布を規制しているものか。県内の遺跡に特徴的な火山灰等は、古墳周堀で浅間山B軽石が、近世の遺構覆土で同A軽石が二次堆積の状態で見られたが一般的ではない。

第5章 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡立地と範囲

遺跡は、高崎市の西南端に近い上佐野町、下佐野町にまたがり、高崎線倉賀野駅西方約2kmに位置する。

県中央部の地形は、赤城、榛名の両火山を両翼にひかえ、渋川市付近を扇の要とする南北約10km、東西約6kmの平坦な前橋台地が一望にひらける。榛名山東南麓では、新期火山活動に伴う火砕流が、この台地上に堆積し、標高約120m付近の末端崖をのぞかせる複合地形をなしている。本遺跡は、この前橋台地の南端に位置し、榛名山西麓に水源を持つ烏川が緩やかに蛇行しながら西を流れ、榛名山麓を抜ける榛名町下室田付近から続く、高さ7～10mの崖線が形成されている。本遺跡周辺の地形は、烏川とそれに合流する白川、碓氷川、鐮川、鮎川、井野川等により分けられ、碓氷川右岸の剣崎台地、遺跡対岸の観音山丘陵、それに続く岩野谷丘陵、鐮川兩岸の河岸段丘、鮎川と神流川等で形成された藤岡台地が、特徴的な地形である。本遺跡付近では、赤城、榛名両火山の間に形成された平坦な前橋台地と、県西部に発する河川により開析された、第三紀以前に基盤を持つ各地形とが、東南流する烏川を境界として出合う所でもある。

この前橋台地は、洪積世後期の前橋泥流堆積物を基盤にし、上部ロームで被覆され、本遺跡付近で標高約85～88m、渋川市付近で約170mと緩傾斜の地形である。しかも、榛名山東南麓を下る井野川を始めとする河川により開析され、6世紀代の榛名山二ツ岳の二度にわたる噴火に伴う火砕流等で、低台地、微高地、谷地等の微地形が見られる。本遺跡も、烏川微高地状部分に相当するが、北の井野川までの間には幾筋かのロームを基盤とする微高地が発達し、弥生時代以降の集落適地となり、周囲には生産跡が広がる。

遺跡の範囲は、大枠に於いて西の烏川と東の粕沢川との自然地形をもって画されるが、この中でも烏川崖線際で少し高くなる部分、南北約2.5km、東西0.3kmと推定される。この部分は、南北を烏川の旧河道とはん乱原とで仕切られ、台形状に突き出している。現在の崖線は、旧河道の存在や調査した遺構のあり方からすると、東へ後退したものか。また、北の船橋遺跡は、旧河道に面した島状微高地にあり、本遺跡と約7mの比高差のある地形ながら古墳時代から平安時代の集落が営まれている。本遺跡を特色付ける古墳分布は、崖線際を幅広く、帯状にめぐり倉賀野、玉村方面へと続いている。遺跡範囲については、半ば重層する複合遺跡の性格から、崖線際に依拠しつつも、古墳に代表される様に時代毎に変化し、常に東方への拡大をはかったか。

参考文献

- 新井房夫 1962 関東盆地北西部地域の第四紀編年（群馬大学紀要自然科学編10巻4号）
木崎喜雄他編 1977 群馬のおいたちをたずねて（下） 上毛新聞社

2 周辺の遺跡

佐野の地は、昭和10年の『上毛古墳綜覧』に約80基の古墳が記載され、その数が多い所として知られてきた。現在は、その大半が開墾等で姿を消しているが、東方約1kmには墳丘規模約172mの浅間山古墳や大鶴巻古墳等が望まれ、調査区に隣接して漆山古墳等が残っている。また、万葉集巻十四の東歌にも「上毛野 佐野の船橋取り放し 親は離くれど 吾は離るがへ」と詠まれ、船橋の長者伝説を生み、時代が下っては謡曲『梅鉢』のモデルともされる、佐野源左衛門常世の伝説地でもある。以下、周辺の遺跡を時代毎に概観していく。

先土器、縄文時代 先土器時代の遺跡は、県北部を中心に調査が増加しているが、本遺跡周辺では藤岡市北山、緑埜の両遺跡があるにすぎない。北山ではナイフ、スクレイパー、緑埜では縦長剝片等が出土している。このほか、周辺台地から石槍等が出土している。

縄文時代は遺跡数も増加するが、観音山丘陵上の大平台遺跡で中期全般にわたる住居跡42軒等調査され、集落の一部が見られるだけである。このほか、若田、大島原、大八木箱田池、倉賀野万福寺遺跡等で住居跡が散見され、地域の概観にとどまる。遺跡は、中期まで立地に変化はないが後、晩期になると、弥生時代以降へと結びつく沖積微高地への進出が始まっている。

弥生時代 本遺跡北方2km付近には、研究史上欠かせない竜見町、競馬場等の遺跡があり、更に北の井野川流域の微高地、台地上では、最近までの調査で熊野堂、浜尻、新保、日高といった中期後半から後期に及ぶ集落跡が水田跡や方形周溝墓を伴って並んでいる。また、同道、御布呂、芦田貝戸の遺跡からは、広範囲に及ぶ浅間山C軽石降下水田跡が調査されている。新保や日高では、微高地上に住居と墓、谷地には狭い水田といった弥生のムラの景観が復原されている。遺跡立地は、前橋台地上では縄文時代の空白域を埋めるかの様に微高地上へと進出し、浜尻では環濠集落も推定されている。しかし、古墳時代前期以降の立地とは、必ずしも一致せず、生産適地を主とした漸進的な動きと見られる。

古墳時代 4世紀後半から5世紀初頭になって平野部には、S字状口縁台付甕を主体とした集落を背景にして古墳が出現する。本遺跡も「佐野古墳群」と重複し、『上毛古墳綜覧』には約80基が記載され、調査で約25基が新たに追加されている。東の粕沢川沿いには浅間山、大鶴巻、小鶴巻古墳といった大型前方後円墳があり、被葬者は5世紀代「毛野」の首長と目されている。この烏川左岸から井野川流域にかけては、4世紀後半の元島名將軍塚から6世紀後半の観音山古墳まで墳丘規模100m前後の大型古墳が数多く分布し、「毛野」全体の中でも中枢を占めた地域とされている。これら古墳は、台地や微高地上に密集して位置するが、それを支えた集落は前期を始めとして多くが微高地上にある。その立地は、弥生時代に見た微高地と谷地田を脱して、平坦部全

第5章 遺跡の位置と周辺の遺跡

体に開墾を進め、弥生時代の遺跡が稀薄であった低地へも進出している。また、井野川流域では6世紀代に二度の噴火をした榛名山ニツ岳のFA、FPの降下を受けた水田跡、畠跡が広範囲に重層して調査されている。広い範囲に及ぶ生産跡は、大型古墳に象徴される組織的な動きと熊野堂遺跡の溜井の様に新たな灌漑技術の導入をもって可能にしたのであろう。

奈良、平安時代 本遺跡周辺の歴史は、日本書紀安閑天皇二年(532年)の「佐野屯倉」、「緑野屯倉」の存否をめぐる注目されてきた。周辺に数多くの遺跡を持ち、文献と対応するかの様な山ノ上碑、金井沢碑、多胡碑の碑文内容、現在の地名との結びつきを、その理由とする。

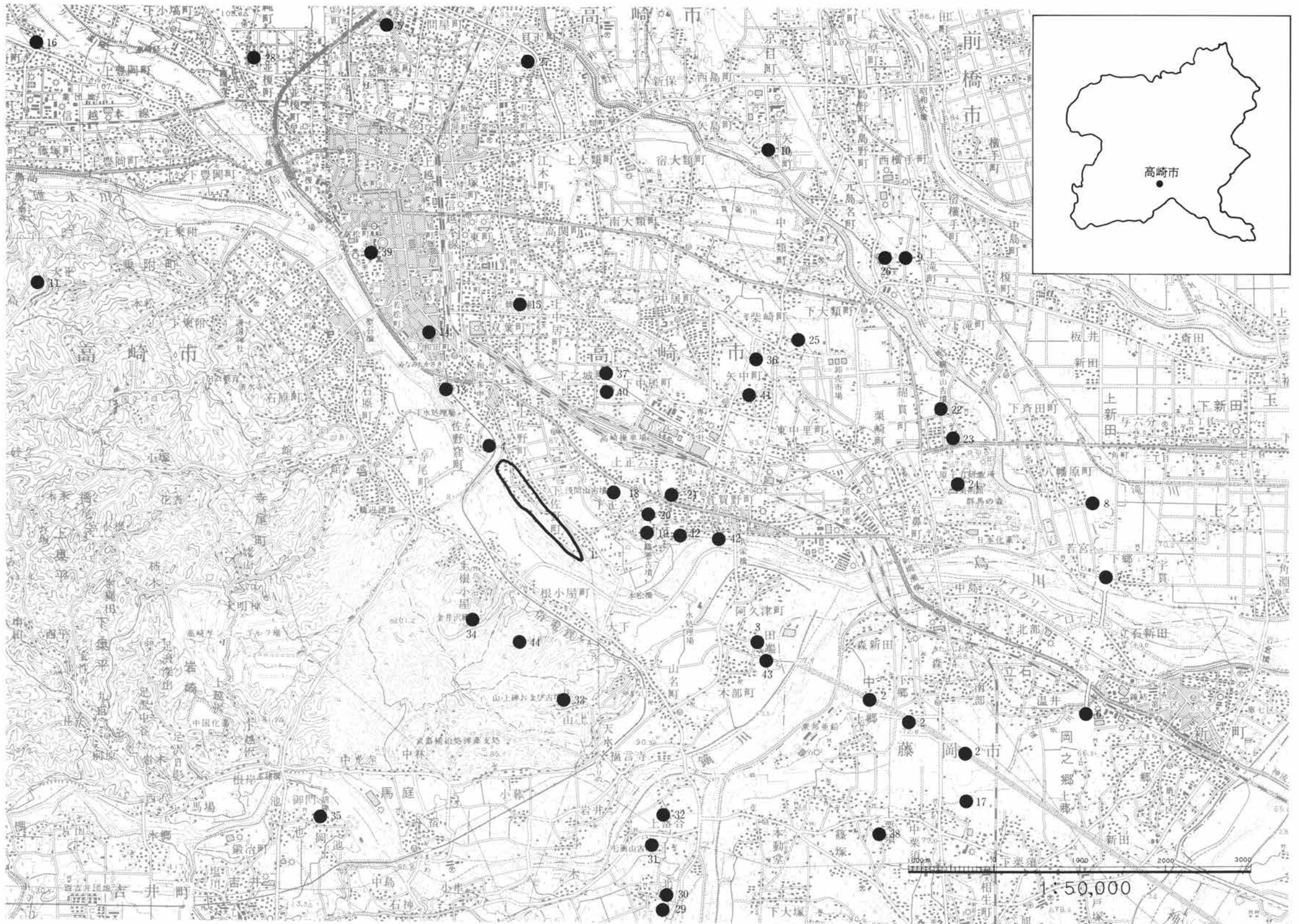
観音山丘陵中にある山ノ上碑、金井沢碑には、「佐野三家」、「下賛郷高田里」、「三家子孫」「放光寺僧 長利」等の地名、人名が記され、屯倉の存否だけでなく、物部、磯部らの氏族の動き、仏教信仰に代表される新しい文化の導入等を見ることができる。多胡碑からは、片岡、緑野、甘良、多胡の郡の存在と、そこに果した渡来人の足跡を見てとれる。現在、これら金石文、文献と考古学上の資料とが直接に結びつくものではないが、集落跡、広範囲での浅間山B軽石降下水田跡、条里遺構の存在などが明らかになりつつある。

中、近世 榛名山東南麓には、城館、屋敷跡が多い。古代の遺跡と結びつくものではないが、古くは新田義重が居城したと伝えられる寺尾城が観音山丘陵中にある(吾妻鏡)。これらは、水陸交通上の要害を占め、戦国時代の上杉、武田両氏の攻防やそれに呼応する土豪達の居城である。井野川流域には長野氏に係わるものが多く、そのうちの矢島、寺の内館が発掘され、内堀と土塁に囲まれた中に大小の建物跡と井戸等がある。

箕輪城、和田城、倉賀野城等は、中世を通じて拠点となったが、その末期には相次いで没落し、慶長三年、井伊直政が箕輪城に入り、その拠点を和田城跡に築城した高崎城に移すに及んで、中世が終りを告げる。高崎、倉賀野には中仙道の宿が置かれ、利根川上流で重要な役割を果たした倉賀野の河岸も慶長年間に開設され、上信越方面と江戸を結ぶ水陸接点として繁栄した。

佐野に関する文献

尾崎喜左雄 1968 「さぬ」群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編第18巻5号



第2図 遺跡位置図

第 1 表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代		註
1	下佐野遺跡	高崎市下佐野町字長者屋敷、鍛冶風、寺前	縄文～中世	本報告	
2	森、中 I、II 遺跡	藤岡市大字森、中	縄文、古墳 奈良～平安	鏡川、鮎川等の形成した沖積微高地に位置、森は古墳時代を主とする集落跡、中は平安時代集落跡	1
3	田端、寺東遺跡	高崎市阿久津町、木部町	縄文、古墳 ～平安	鏡川と鳥川の形成した沖積微高地に位置、田端は奈良、平安時代を主とする集落跡、寺東は古墳～平安時代にかけての集落跡、水田跡あり	2
4	舟橋遺跡	高崎市内上佐野町字舟橋	古墳～平安	鳥川旧河道に面する微高地上、古墳時代前期～平安時代の集落跡、住居113、古墳、溝、土壇等あり	2
5	下小鳥遺跡	高崎市内下小鳥町	弥生～平安	井野川沿いの微高地上に弥生～平安の住居、溝、井戸、土壇、B 軽石下水田跡あり	2
6	温井遺跡	藤岡市岡之郷字温井	古墳	鏡川と鳥川等が形成した沖積微高地に位置、古墳時代後期の集落跡、住居37、土壇、溝がある	3
7	下郷遺跡	玉村町大字八幡原字下郷	古墳	鳥川左岸段丘上に位置、古墳時代前期の方形周溝墓群を始め、古墳、住居、土壇等あり	4
8	八幡原 A、B 遺跡	高崎市八幡原町	縄文、中・近世	井野川左岸台地上に位置、縄文前期住居、中世溝等多数あり	5
9	上滝遺跡	高崎市内上滝町	古墳、奈良 中・近世	井野川左岸台地上に位置、古墳時代前期、奈良時代の住居、中・近世の溝等あり	5
10	鈴ノ宮遺跡	高崎市矢島町鈴ノ宮	弥生～平安	井野川左岸台地上、弥生～平安時代の集落跡、方形周溝墓、土壇、溝多い	6
11	大平台遺跡	高崎市乗附町五ツ塚	縄文	観音山丘陵上、中期五領ケ台、阿玉台、加曾利 E 式期の住居跡42、土壇、溝あり	7
12	倉賀野万福寺遺跡	高崎市倉賀野町字万福寺	縄文、古墳 ～平安	鳥川左岸台地上、大鶴巻古墳に隣接し、方形周溝墓12墓、古墳11墓、住居13等あり	8
13	城南小校庭遺跡	高崎市新後閑町寺廻	弥生	鳥川左岸台地上、住居跡あり	
14	竜見町遺跡	高崎市竜見町	弥生	鳥川左岸台地上、包蔵地、中期後半竜見町式土器の標式遺跡	9
15	競馬場遺跡	高崎市内上中居町	弥生	包蔵地	9
16	引間遺跡	高崎市金井測町字引間	弥生、奈良 ～平安	鳥川右岸の台地上、弥生～平安時代にかけての集落跡、住居、土壇、溝等多い。和銅開弥出土	
17	谷地遺跡	藤岡市中栗須字谷地	縄文～平安	藤岡台地縁辺部、縄文晩期～弥生にかけての包含層あり、沖積地に埋設土器あり	

第5章 遺跡の位置と周辺の遺跡

18	浅間山古墳	高崎市倉賀野町字正六	古墳	前方後円墳、全長171.5m、墳丘二段築造、二重の周堀がめぐり、周庭帯残る、主体部竪穴式か	10
19	大鶴巻古墳	高崎市倉賀野町字正六	古墳	前方後円墳、全長123m、墳丘二段築造、馬蹄形状の周堀がめぐり、主体部竪穴式か	10
20	小鶴巻古墳	高崎市倉賀野町字正六	古墳	前方後円墳、全長87.5m、馬蹄形状の周堀がめぐり、明治40年発掘、主体部舟型石棺	10
21	安楽寺古墳	高崎市倉賀野町字正六	古墳	円墳、主体部横穴式両袖型石室、玄室は家形石棺を模して内部をしつらえた石棺式石室	10
22	観音山古墳	高崎市綿貫町	古墳	前方後円墳、全長98m、墳丘二段築造、二重の周堀、横穴式石室、馬具等の副葬品豊富	10
23	不動山古墳	高崎市岩鼻町	古墳	前方後円墳、全長94m、墳丘二段築造、後円部北側くびれ部寄りに造り出しあり、主体部舟形石棺、埴輪列あり	10
24	岩鼻二子山古墳	高崎市岩鼻町	古墳	前方後円墳、全長約120m、主体部舟形石棺、埴輪列あり、神獣鏡、大刀、鉄鍬、鉄鎌、槍、石製模造品出土	10
25	柴崎蟹沢古墳	高崎市柴崎町	古墳	円墳か、明治43年頃平夷、正始元年銘三角縁神獣鏡のほか鏡3面、鉄斧、鉾等出土	10
26	元島名將軍塚古墳	高崎市元島名町	古墳	前方後方墳、全長90m、明治44年主体部発掘、粘土槨から獣形鏡1面、石釧、刀、鉋等出土	10
27	五霊神社古墳	高崎市貝沢町字井野前	古墳	前方後円墳	
28	稲荷山古墳	高崎市上並榎町	古墳	前方後円墳、明治年間に発掘、主体部舟形石棺	
29	白石稲荷山古墳	藤岡市白石稲荷原1374	古墳	前方後円墳、全長92.5m、昭和8年発掘、後円部に礎床が東西に並列、石枕、鏡、玉類、石製模造品等出土	10 16
30	十二天古墳	藤岡市白石稲荷原1346	古墳	前方後円墳	
31	七輿山古墳	藤岡市上落合字七輿	古墳	前方後円墳、全長140m、二重の周堀を持つ	10
32	伊勢塚古墳	藤岡市上落合字岡	古墳	円墳、東西27m、高さ5m、胴張横穴式石室、壁はアーチ型に模様積	10
33	山ノ上碑	高崎市山名町	辛巳歳 (681年)	山ノ上古墳の脇にあり、辛巳歳に放光寺僧長利が母黒壳刀自のために建てた墓碑とされる	11
34	金井沢碑	高崎市山名町字金井沢	神龜三年 (726年)	神龜三年に、佐野三家子孫が祖先のために建てた供養の石碑、奈良時代における民間の仏教信仰を示す史料	11
35	多胡碑	吉井町大字池字御門	和銅四年 (711年)	和銅四年三月に設置された多胡建郡を示す碑	11

36	矢中遺跡群	高崎市矢中町	古墳～平安	天王前、村東等の遺跡あり、微高地に古墳時代以降の住居、方形周溝墓等がある。周囲はB軽石降下水田跡	12
37	下之城条里遺構	高崎市下之城町	奈良	倉賀野条里遺構の一部、条里の推定範囲3×4里、長地型と半折型の混在か	13
38	上栗須遺跡	藤岡市上栗須町	縄文、古墳～平安	藤岡台地上、縄文土城、方形周溝墓、古墳、奈良、平安時代の住居、掘立等あり	14
39	高崎城、和田城	高崎市高松町	室町、江戸	和田城は正長年間に和田義信が築城、単郭式、高崎城は慶長三年井伊直政が築城、囲郭式	15
40	下之城	高崎市下之城町	室町	和田城の支城、永禄十一年和田正盛築城、四方向連郭の構造で、後に囲郭式に改修	15
41	矢中七騎の館	高崎市矢中町	室町	和田城主の和田業繁の家臣松本九郎兵衛、大沢備後、栗原内記の屋敷跡、天正年間頃に居城	15
42	倉賀野城	高崎市倉賀野町	鎌倉、室町	烏川に面した崖端城、平城、応永年間に倉賀野三郎高俊が築城	15
43	木部城	高崎市木部町	室町	天文～永禄頃、木部氏築城か、囲郭式二重堀の平城、北の阿久津町玄頂寺に支城の木部北城あり	15
44	根小屋城	高崎市山名町、根小屋町	室町	永禄十一年、武田信玄が築城、囲郭式、同じ丘陵上には寺尾上、中、下の三城、茶臼山城、山名城が連らなる。	15

- 註 1 長谷部達雄 『森・中I・中II遺跡』 1983 (勸群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- 2 『上越新幹線地域埋蔵文化財調査概報』 I～VI 1975～1980 群馬県教育委員会
- 3 真下高行 『温井遺跡』 1981 群馬県教育委員会、(勸)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 4 中 隆之 『下郷遺跡』 1980 群馬県教育委員会
- 5 佐藤明人 『八幡原A・B、上滝、元島名A遺跡』 1981 群馬県教育委員会、(勸)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 6 『鈴ノ宮遺跡』 1978 高崎市教育委員会
- 7 『大平台遺跡』 1974 群馬県教育委員会
- 8 『倉賀野万福寺遺跡』 1984 倉賀野遺跡調査会
- 9 杉原莊介、乙益重隆 『高崎市付近の弥生式遺跡』 『考古学』 10巻10号 1939
- 10 『群馬県史 資料編 3』 1983 県史編さん委員会
- 11 尾崎喜佐雄 『上野三碑の研究』 1980
- 12 『矢中遺跡群』(I)～(VII) 1978～1984 高崎市教育委員会
- 13 『下之城条里遺構』 1983 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 14 『上栗須遺跡』 『年報』3 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 15 山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』 1970
- 16 昭和60年度 藤岡市教育委員会の範囲確認調査の結果では、全長が170～180mと推定されている。(藤岡市教委、志村 哲氏教示)

第6章 検出された遺構と遺物

1 13地区の調査

(1) 概要

13地区の調査は、烏川河川敷部分（字戸崎）と14地区全体をのせる台地部分の最南端部分（字川籠石）とからなる。調査区は、72km500mを基点に100m毎に1区を設け、1～5区までとした。調査方法は、2×2mのメッシュを全域に採用し、偶数列を原則にグリット発掘を行い、その南面と西面とで断面の観察並びに記録をした。

河川敷部分は、半ば規則的に約120ヶ所のグリット発掘を実施したが、遺構は存在せず、各グリットの地表下3～4m付近まで河川堆積物が見られた。その状態は、水成堆積層と砂層、砂礫層の互層をなし、上層部分から近・現代に相当する陶磁器片等が少量出土した。この河川敷部分は、遺物が出土したものの、土層の堆積状態、遺物の磨滅した状態からは乱原をなす。しかし、台地際のグリットでは、台地上から流れ出したと推定される遺物が、古墳時代前期を最古として出土し、遺構に結びつく資料と判断され、河川敷部分の中でもやや様相を異にするか。

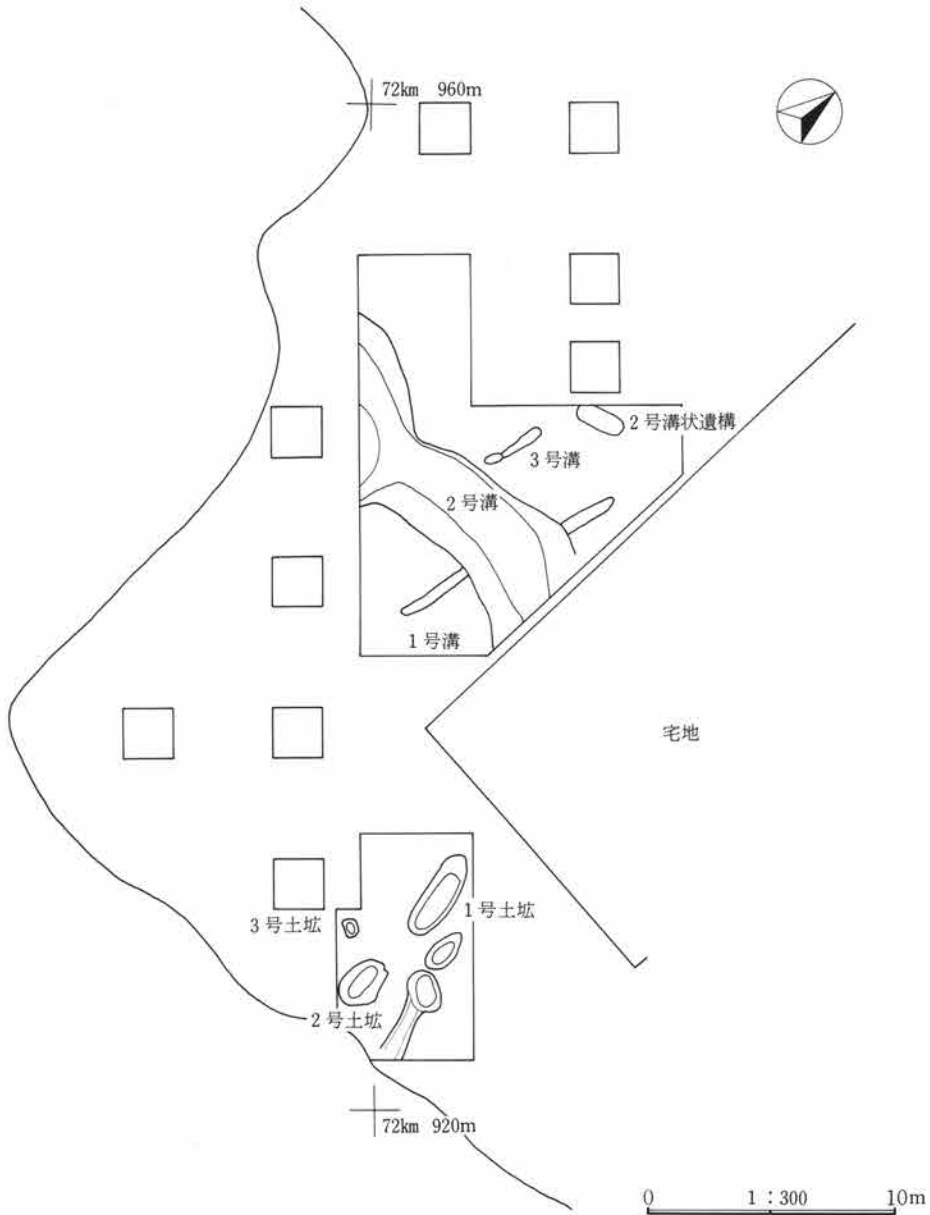
台地部分は、崖線に直接面するが、14地区の1区とは幅約25m、烏川側に開口する小谷戸により仕切られている。台地上は平坦で標高約83m、河川敷部分とは約8mの比高差を持つ。調査区及び調査方法は、河川敷と同様だが、馬骨の出土した土壇や溝が確認されたため、その範囲について拡張して調査を実施した。確認された遺構には、馬を埋葬した土壇3基、溝3条、溝状遺構2条のほかに、不明瞭な土壇状のものがある。

(2) 馬骨出土土壇

馬骨を出土した土壇は3基ある。崖線際に面し、相接近した位置関係にある。1、2号の2基は長軸を南北にとり、馬骨の遺存状態も一体分に近く、大型の堀方である。3号は、主に肋骨が遺存し、先の2基に直交する東西に長軸をとり、小型である。いずれも、地山に相当する黄褐色土に掘り込まれ、上面を削平した状態で確認されたために、地上部分の盛土の有無や、何らかの標示物等の有無については不明である。

1号土壇は、南北走向の1号溝状遺構に隣接し、2号土壇の北側約1.50mの位置にある。規模は、南北3.70m、東西0.92m、深さ約90cmの不整長方形を呈する。馬骨は、このうち南寄りの約1.50mの範囲に、頭部を北、後脚を南にした俯せの状態で、ほぼ全骨格が出土した。

2号土壇は、1号の南で3号に隣接する。規模は、南北1.64m、東西1.08m深さ約1mで、隅丸方形を呈する。馬骨は、平坦な底面に接した状態で、1号と同じく頭部を北にし、後脚を南に向けた横位の状態で出土した。馬骨の遺存状態は、1号と同様だが、土壇の大きさが馬一体分に相

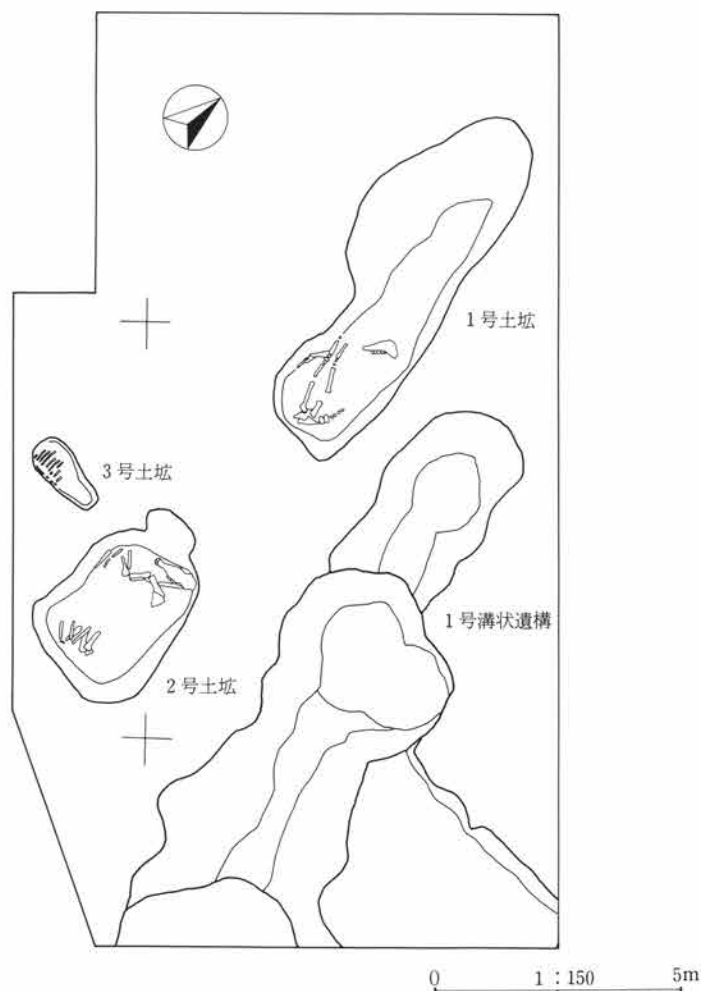


第3図 13地区遺構全体図

当し、きちんとした掘り方の印象を与える。

3号土塚は、2号の西側に位置する。規模は、東西81cm、南北約40cm、深さ約30cmの浅い皿状の落ち込みで、楕円形を呈し、3基の中では唯一、東西に長軸を持つ。馬骨は、脊柱と肋骨が出土したが、他の2基に比較すると、遺存状態が悪く、部分骨の状態が本来のものか不明である。土塚の形状もしっかりせず、3基の中では、馬骨の遺存状態も悪く、不明部分が多い。

以上、3基について、明確な伴出遺物がなく、時期は不明である。



第4図 土壇、溝状遺構平面図

(3) 溝及び溝状遺構

調査した範囲の中央部で、溝3条と溝状遺構2条が確認された。これらは、地表下30~40cmの黄褐色土面で確認されたが、2号溝を除いて浅く、小規模である。

1号、3号溝は、浅い「U」字形の掘り方形状、幅約70cm、地形傾斜に沿う南北の走向等で一致した特徴を持ち、平行した位置にもあり、相互に関係したものか。

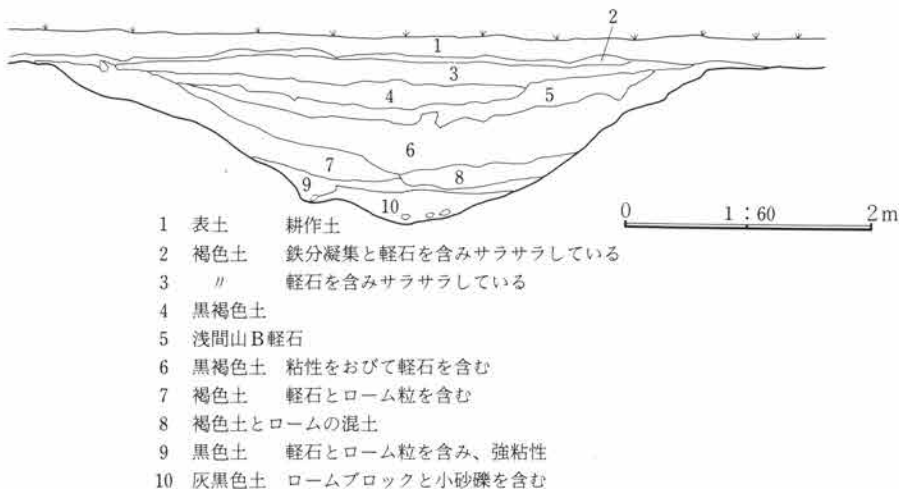
2号溝は、調査区の制約から部分的な範囲にとどまるが、全体に弧をえがき、西端は小谷戸まで達するか。規模は中央部付近で上幅約4.50m、深さ約1.40mを測り、底面がほぼ平坦で断面「U」字形を呈する。谷戸寄りの西端では、半円状に大きく幅を広げ、中段を持ちながら、溝の底面より1m以上も深くなる。この部分は、谷戸内にむかう凹部の可能性もあるが、現状では判断しがたい。しかし、溝底面から一段と深くなる部分までは、黒褐色砂質土が流れ出した状態で約20cm

堆積し、同じ頃に埋没が始ったことを示している。また、深くなる肩の部分、黒褐色砂質土の上
 面には、径10~20cmの河原石円礫を帯状に連ねた仕切り状の部分が見られた。溝全体の覆土は、
 中位に約10cmの厚さで浅間山B軽石の二次堆積層があり、以下、粘性に富んだ土層が互層状態
 で続き、自然埋没したものである。遺物は、覆土中位から底面まであり、底面東側にやや多い。い
 ずれも破片状態だが、古墳時代前期の台付甕から土師器、須恵器の坏、甕等がある。遺構の時期
 は、重複する1号溝よりは古く、覆土中位に見られた浅間山B軽石の存在、出土遺物の特徴から
 平安時代に求められる。遺構の性格としては、覆土全体の様子が14地区で確認されている古墳周
 堀に類似し、全体に弧をえがくが、古墳か否かは現状の範囲では決定しがたい。位置は、西側
 ある小谷戸を意識して掘られ、西への傾斜もあることから水を流すことも可能である。

以上、3条の溝は、2号溝については平安時代に掘られ、集落に付随すれば大溝的な性格を持
 つと考えられるが、1号、3号溝は時期不明、一時的な枝溝とも推定できる。

溝状遺構は、2条あるが、2号については長さ約1.92m、幅0.70m、深さ約20cmで隅丸長方形で
 土壇状でもある。河原石が10点程混入する位で出土遺物はない。1号は、馬骨出土の1号、2号
 土壇に平行し、隣接する。長さ約6m、一部は土壇状のものが連続するかの様だが、幅約80cm、南
 への傾斜を持ち、崖線に達する。一方の端である北は、地形の傾斜で消えるが、現状より少し長
 いものと推定される。北側半分は、土壇状のものが連続し、底面に凹凸が見られ、その凹部には、
 径5~10cm位の河原石円礫が集石状態にあった。その下部には黒褐色土を覆土とする掘方があり、
 土壇が重複するともとれるが判然としない。1号、2号とも遺物がなく、時期不明である。

以上が13地区の遺構であるが、平安時代に属す2号溝を除いて、時期、性格に不明なものが多
 い。馬骨出土土壇は、本地区の特色であり、台地先端に占地する墓地の一面に相当するか。尚、
 各遺構の覆土や台地際のグリットからの遺物からすると、本地区を含めて台地際に遺構の存在す
 る可能性が高いが、表採資料からすると小谷戸をはさんだ西側一帯に求められるか。 (中東)



第5図 2号溝断面図

2 14地区の調査

調査の結果、縄文時代、古墳時代、平安時代、中世以降の遺構が確認された。遺構の分布が濃密なのは3区北半から8区までで、ローム層の分布と一致し、3区南半から1区にかけては時期不明の溝状遺構や土壇状のものがあるにすぎない。3区南半では風倒木痕が多く、集落周辺の景観を示すものか。

縄文時代 7、8区を中心として竪穴住居跡9軒、土壇21基が確認された。この分布傾向は15地区へと続くもので、崖線際にかけて広い展開が推定される。しかし、遺構の大半は、古墳等の重複で遺存状態が悪く、他の遺構覆土中にも多量の遺物が流れ込んでいる。時期別に見ると、前期黒浜式から後期加曾利B式頃までの遺物が見られるが、遺構の時期は凡そ中期加曾利E式頃に集中する。

古墳時代 前期から後期までの竪穴住居跡25軒(32表)、方形周溝墓5基、古墳6基、土壇2基がある。その分布傾向は、5区南半にある4号住居跡を南限とし、15地区からの広がりを示すもので、縄文時代とほぼ重複する。時期別の分布として、崖線際に依拠しながらも、南するに従い新しくなる傾向を示す。7区付近では、竪穴住居跡、方形周溝墓、古墳が一部重複しながらも隣接し、中でも前期に属する玉作工房跡7軒を含み、大きな特徴となっている。5区南半は、古墳分布の南限とも重複するが、3、4区付近の遺構覆土中にも遺物が混入することから、全体の広がりは崖線に沿って帯状にのびるものか。

平安時代 3区北半から8区まで、竪穴住居跡134軒、掘立柱建物跡18棟、墓壇4基、溝10条が切れ間なく確認された。このうち竪穴住居跡(第145表)は、平面形、規模、カマドの方位をほぼ同じくする上に、全体の分布でも3区北半から6区にかけては規則的でもあり、大きな特徴である。6区8号溝を境として、北では古墳の周辺に群在する傾向が見え、好対称をなす。遺構の動きは、南から漸次北上し、古墳の間に進出していく様が、北の15地区で一層顕著になる。

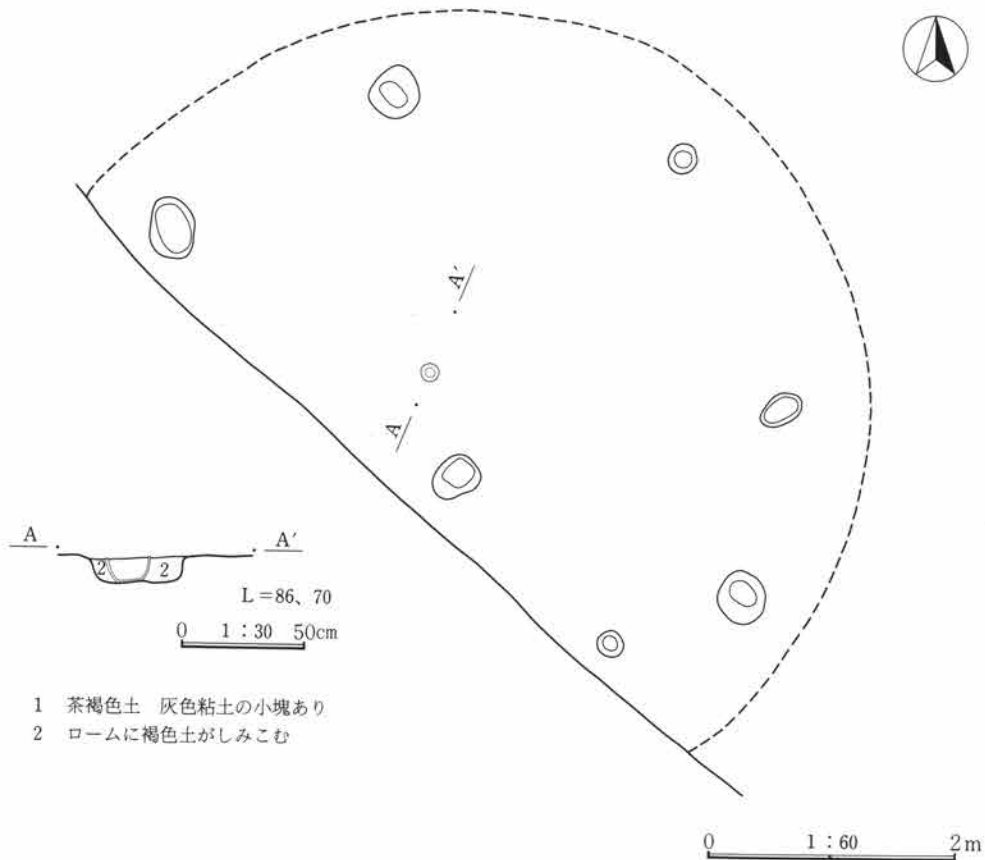
中世以降 近世として明らかなものに、調査区全体からの時期不明の遺構を含む。土壇180基を最高に、井戸20基、溝10条、道路状遺構1、近世屋敷跡の一部である。土壇の中には、明確な伴出遺物がないものの、遺構の重複関係、覆土中に含まれる浅間山B軽石、同A軽石のあり方から、平安時代、江戸時代として帰属を明らかにするものが多い。また、近世後期頃の民家跡から、土壇、溝、内部の建物といった面的にとらえられる遺構もある。

以下、上記の時代別の順に従い、個々の遺構を報告していく。

(女屋)

(1) 縄文時代

1 竪穴住居跡

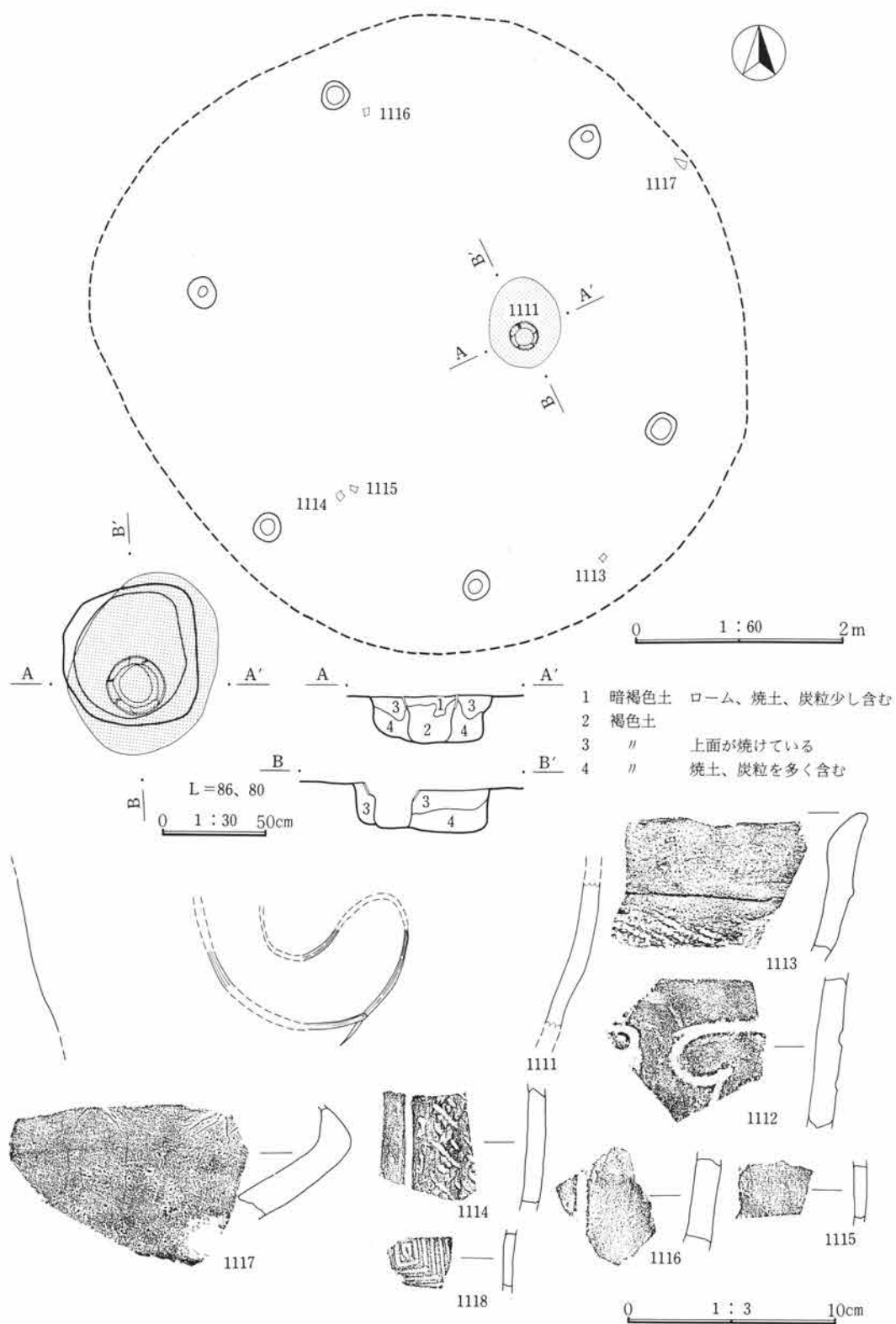


第6図 7区11号住居跡遺構図

7区11号住居跡（第6図、図版11）

本住居跡は、基本土層の第5層ローム上面で確認された。西南側は道路敷のため未調査である。規模は推定6.40mを測り、平面形は円形を呈する。壁、床面は調査時には削平されてなく、埋甕の確認面であるローム層上面にあったと推定される。柱穴は、埋甕を中心にして5本がある。埋甕は、住居の中央北寄りに位置し、確認面のロームを10cm程円形に掘り込み、深鉢形土器を正位に埋設している。覆土中には、焼土粒、炭化物は見られないが、土器自体は二次焼成を受けている。遺物は、埋甕以外に明確なものはなく、遺構の時期は、この埋甕の特徴から中期加曾利E II期とされる。

出土土器（埋甕）1100は、胴部上半欠損の深鉢形土器で現存器高10.5cm、底径9.7cmを測る。文様は、胴部全面に縦方向の撚糸文を施し、底部近くに無文帯を持つ。胎土には砂粒を多く含み色調は二次焼成を受け、鈍い橙色を呈する。



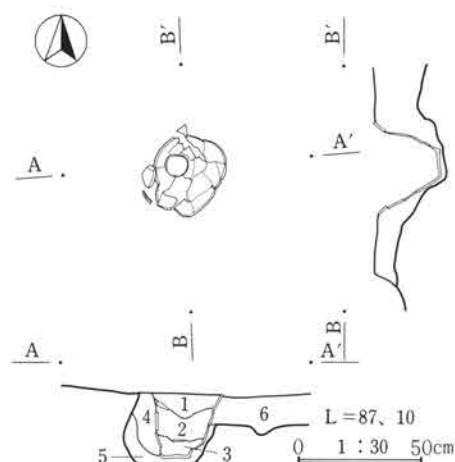
第7図 7区28号住居跡遺構、遺物図

7区28号住居跡（第7図、図版7・11・13）

本住居跡は、基本土層第5層ローム上面で確認された。規模は推定5.73mを測り、平面形は円形を呈する。壁は削平され、床面はロームを踏み固めて平坦にしているが、中央部を除いて軟弱である。柱穴は炉跡を中心にして6本がある。炉は住居の中央東寄りに位置し、床面を15cm掘り込み、胴部中央部のみの深鉢形土器を正位に埋設している。炉の覆土には、焼土粒、炭粒があり、炉周囲の床面には焼土の分布が見られた。遺物は、床面及び覆土より土器片が出土しており、遺構の時期は埋甕の特徴から後期称名寺II期である。

1111は、現存器高6.8cm、径27.5cmを測り、文様は沈線文によるJ字文を施文する。胎土は砂粒を含み、焼成が良く黄橙色を呈する。1112、1116は沈線文によるJ字文を施文。1113は隆帯により区画する口縁部片で地文にRL縄文を施文。1114は沈線文により磨消無文帯を垂下させLR縄文を施文。1115、1117は無文。1118は沈線文により四角形の陰刻を重ねて施文する。

以上、出土土器は1113、1114が加曾利EⅢ～Ⅳ式、1111、1112、1116が称名寺Ⅱ式、1118が堀之内Ⅱ式に比定される。



- 1 暗褐色土 焼土、炭粒を少し含む
- 2 〃
- 3 ロームの小ブロック
- 4 褐色土 ローム粒多く含む
- 5 〃 ローム粒多く、粘性あり
- 6 暗褐色土 ローム粒少しあり

第8図 7区34号住居跡遺構図

7区34号住居跡（第8・9図、図版11・13）

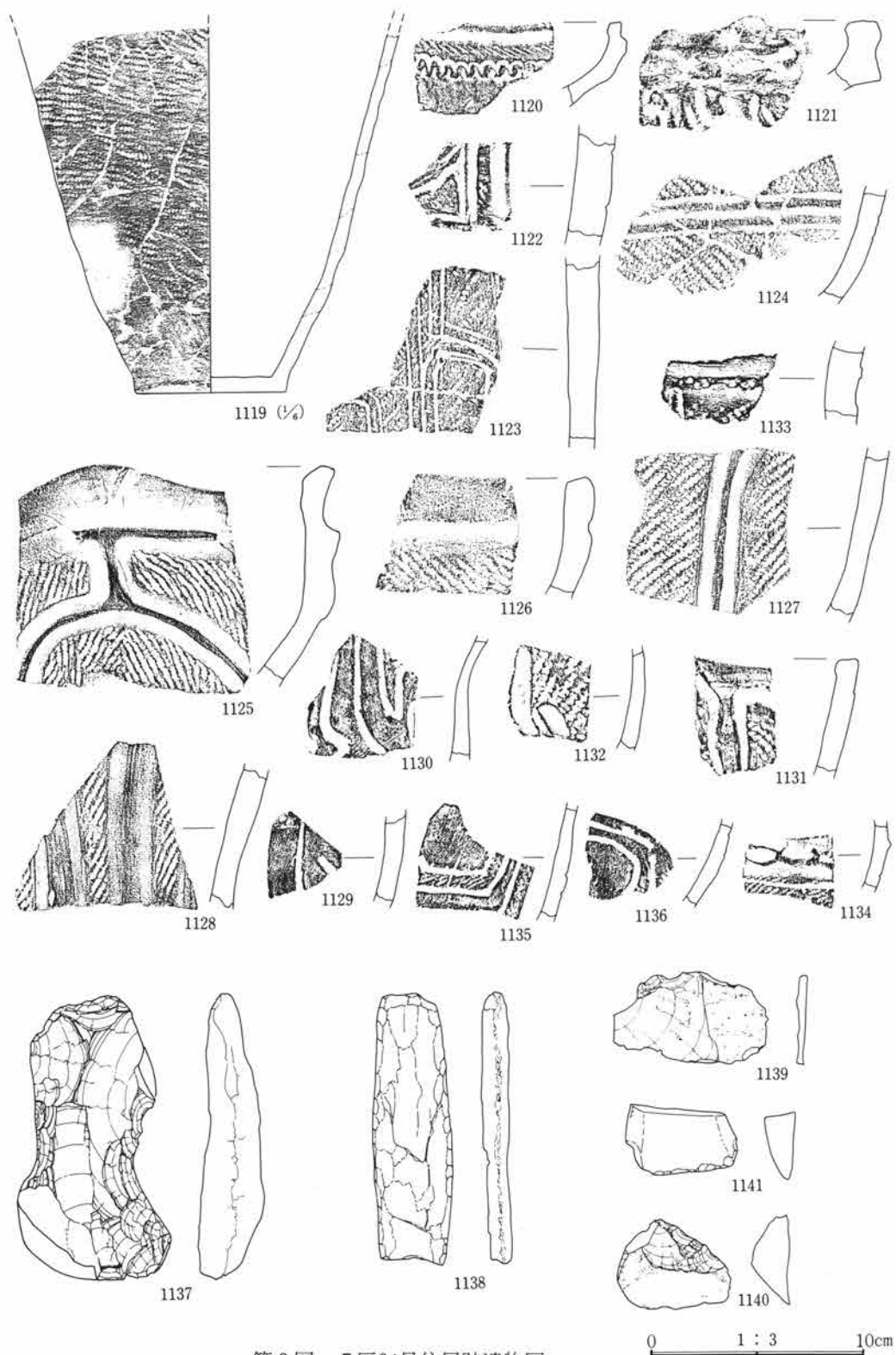
本住居跡は、基本土層の第5層ローム上面で確認され、南側で1号方形周溝墓が重複している。規模、平面形は柱穴等が確認されないため不明だが、埋甕がある。この埋甕は、ロームを約30cm掘り込み、胴部上半欠損の深鉢形土器を正位に埋設している。覆土には焼土を少量混入させ、土器は、二次焼成を受け風化している。遺物は、埋甕周辺より土器、石器が多く出土しており、遺構の時期は埋甕の特徴から中期加曾利EⅢ期である。

1119の埋甕は、器高33cm、底径14cm、最大径35cmを測り、文様は全面にLR縄文を施し、色調は二次焼成を受け明黄色を呈する。1120～1122は半截竹管による沈線、波状文、三角文や刻目文を施文。1123、1124は地文にRL縄文施文後に沈線を施文。

1125～1128は沈線、隆帯により区画し、RL縄文を

施文。1129～1132は曲線的な沈線で区画。1133、1134は隆帯に指頭圧痕、縄文を施文。1135、1136は沈線により直線、曲線文を施しLR縄文を施文。1137、1138は打製石斧で1137は分銅形、1138は短冊形を呈する。1139～1141は搔器である。

以上、出土土器は1120～1124、1133が勝坂式、1125～1128が加曾利EⅢ式、1129～1132が称名寺Ⅱ式、1135、1136が堀之内Ⅱ式、1134が加曾利B式に比定される。

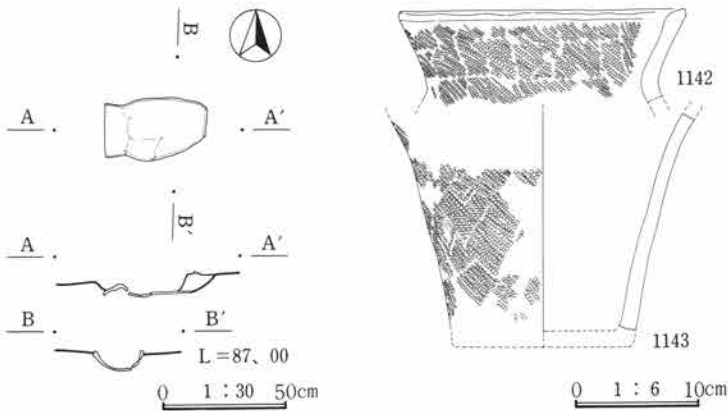


第9図 7区34号住居跡遺物図

7区35号住居跡

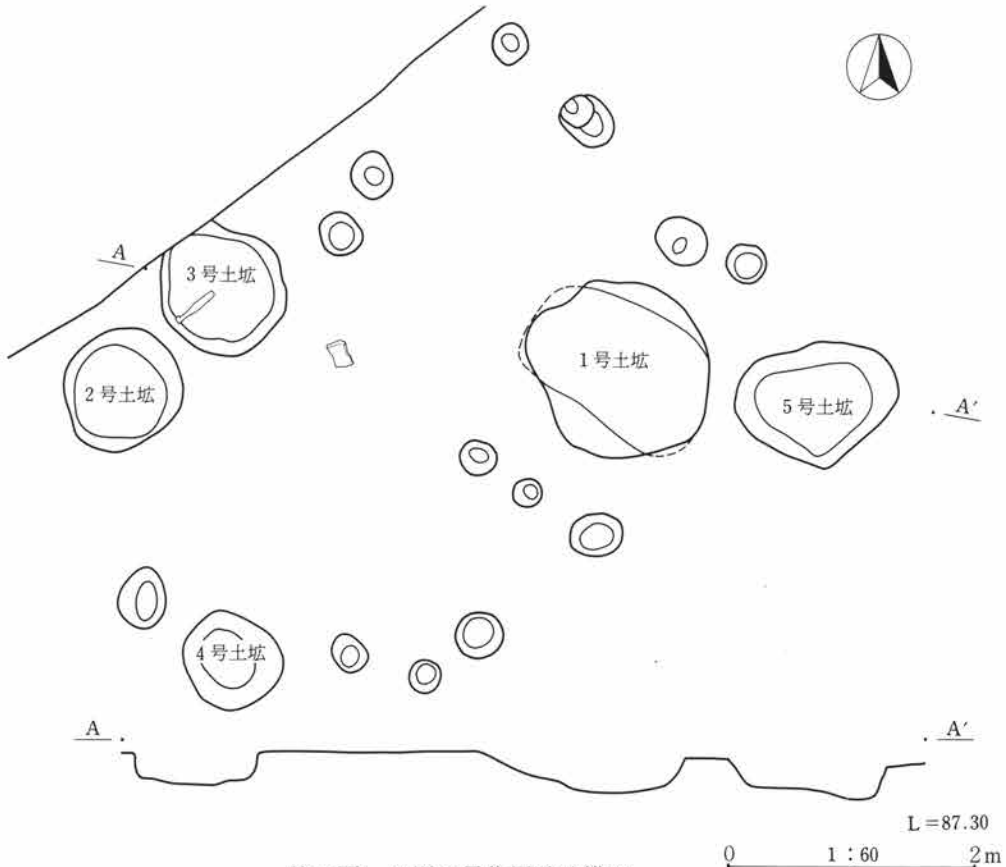
（第10図、図版11）

本住居跡は、基本土層第5層ローム上面、2号方形周溝墓方台部上で確認された。規模、平面形は柱穴等が確認されないため不明だが埋甕がある。ローム面を浅く皿状に掘り下げ、土器が横に倒れた状態にある。覆土及び周辺には焼土等が見られなかった。遺物には埋甕以外に、土器、石器等が少量ある。遺構の時期は、埋甕の特徴から中期勝坂期である。埋甕は、口縁が外反し頸部がくびれ最大径を胴部上半に持つ深鉢形土器である。推定器高約40cm、口縁部径23cmを測り、文様は全面にRL縄文を施し、口唇部を磨消している。

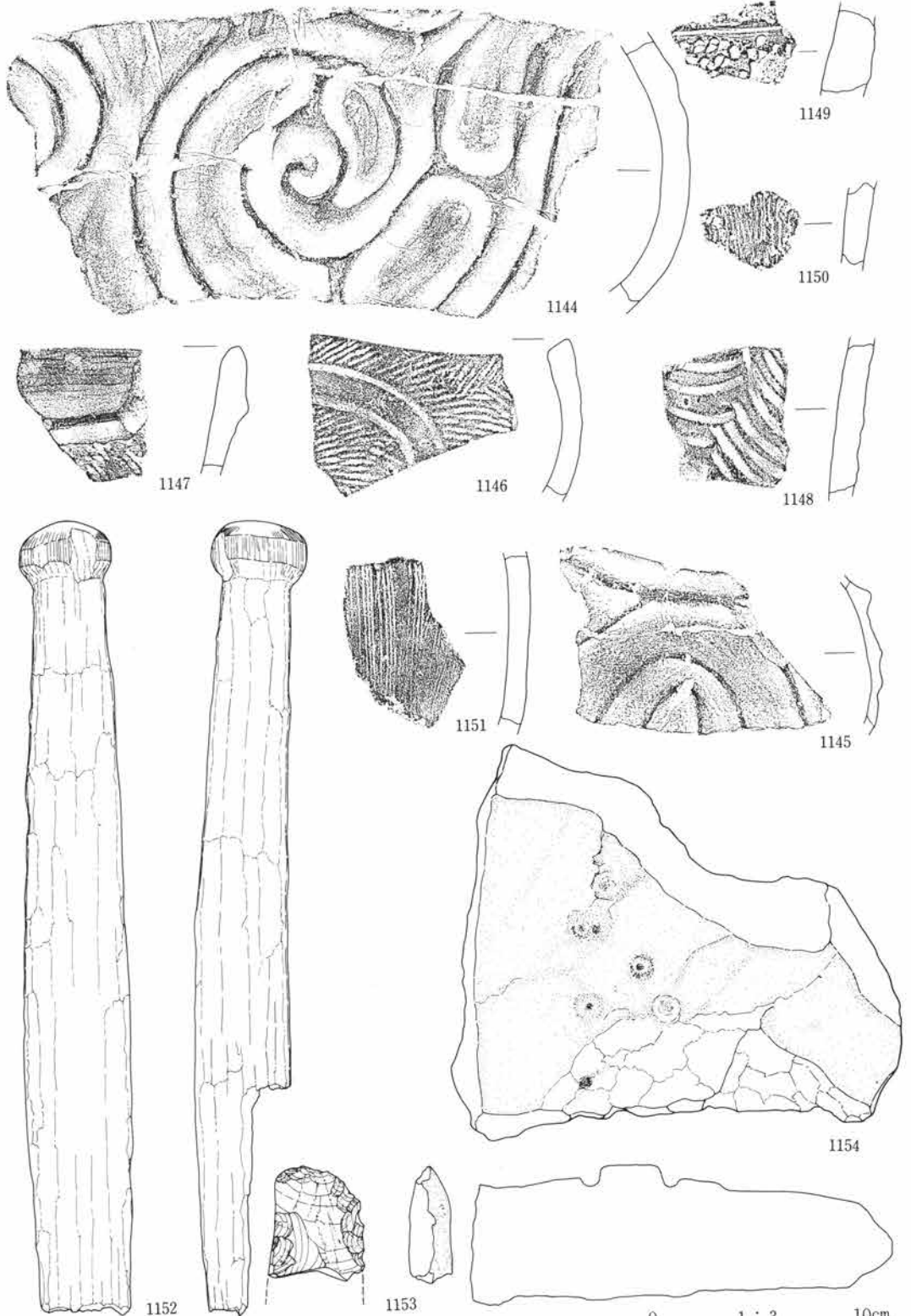


第10図 7区35号住居跡遺構、遺物図

見られなかった。遺物には埋甕以外に、土器、石器等が少量ある。遺構の時期は、埋甕の特徴から中期勝坂期である。埋甕は、口縁が外反し頸部がくびれ最大径を胴部上半に持つ深鉢形土器である。推定器高約40cm、口縁部径23cmを測り、文様は全面にRL縄文を施し、口唇部を磨消している。



第11図 7区42号住居跡遺構図



第12図 7区42号住居跡遺物図

7区42号住居跡（第11・12図、図版7・13）

本遺構は、基本土層の第5層ローム上面で確認され、一部は調査区外にある。規模は推定6mを測り、円形を呈する。壁は確認されず、床面も同様であった。炉は不明だが、中央部にローム面を掘り下げた落ち込みがあり、火熱を受けた多孔石がある。これを炉跡とすると、この周辺には多数のピットがあり、5～7本の柱穴と推定される。遺物は、住居範囲内に大小5基の土壇があり、この土壇群を主に多くの遺物が出土している。特に1号土壇内からは有孔鏝付注口土器の破片が、3号土壇内からは大型土器片や石棒がある。遺構の時期は、覆土出土の土器片や土壇内出土した遺物の特徴から中期加曾利EIV期である。

出土土器1144は、3号土壇内から出土したP-1、3、12、19、21で深鉢形土器の胴部片で内湾し、文様は地文を持たず微隆起線により渦巻文を施す。1145は、1号土壇内出土で有孔鏝付注口土器の胴部上半の破片である。口縁部に隆帯による鏝と小孔があり、断面三角形の微隆起線により渦巻文を施す。同じ渦巻文を施文しながら1144と比較し、器肉が薄いのが特徴で、胎土中に砂粒もある。1146、1147は深鉢の口縁部片で、1146は沈線、1147は隆帯を施し、区画内にRL縄文をともに施文する。1148はやや幅の広い沈線で重孤文を施文。1149は沈線で区画した中に細い棒状刺突文を施文する。1150、1151は縦位の櫛歯状工具による沈線文を施す胴部片である。1144、1148は黄褐色、1145、1147は褐色、1146、1149、1151は橙色、1150は暗褐色の色調である。

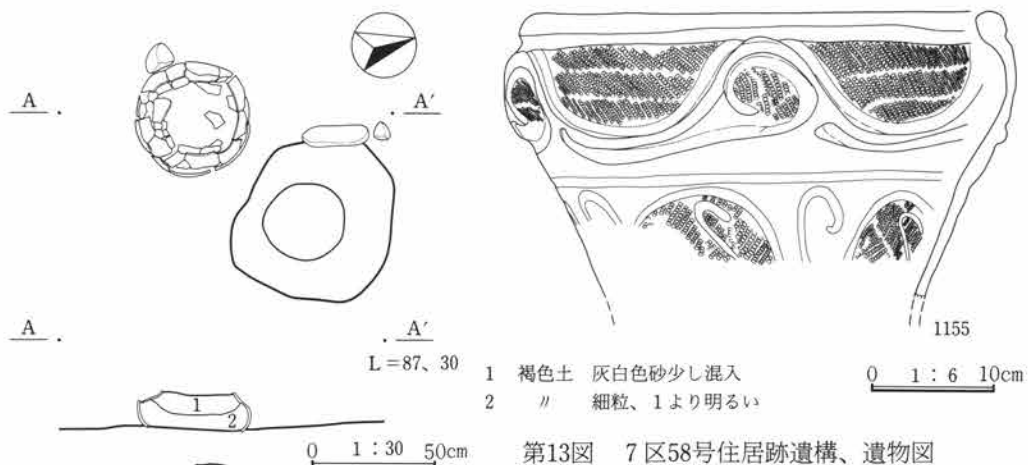
出土石器1152は、下端の一部を欠損している石棒である。黒色片岩の棒状礫を素材とし、一方の端部に敲打と研磨により握り部状を作る。この握り部状側面に人為的な打ち欠きによる調整痕が見られる。長さ37.5cm、径5cm、重量1250gを測る。1153は打製石斧の頭部片で裏面に礫皮を残す。1154は輝石安山岩の扁平礫使用の多孔石で、長さ17.8cm、幅21cm、厚さ6.2cmを測り、片面にのみ小孔が見られる。一部を残して周縁は打ち欠かれている。

本遺構は、住居跡として報告するが、その推定プラン内に5基の土壇があり、周辺に同時期頃の土壇が多く分布すること、伴出遺物に石棒を持ち共通点があげられることから土壇群としての性格も否定できない。石棒、多孔石の存在を強調すると祭祀的な性格もあげられる。

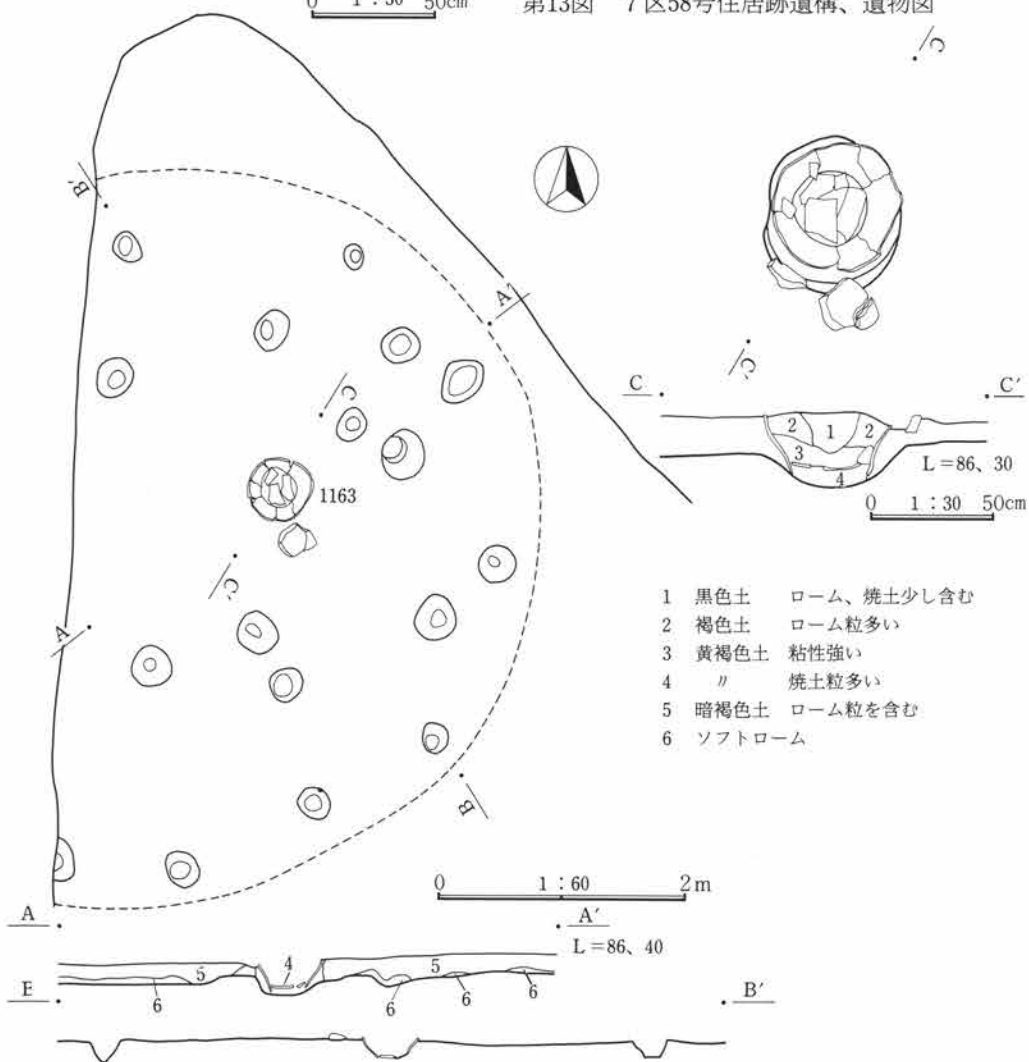
7区58号住居跡（第13図、図版11）

本遺構は、3号古墳羨道部下の暗褐色土中で確認された。胴部下半を欠いた深鉢形土器が倒位の状態で確認され、脇に円形土壇があるが焼土、柱穴等はなく110号土壇と同様な埋甕を伴う遺構と推定される。遺構の時期は、埋甕の特徴から中期加曾利EIII期である。

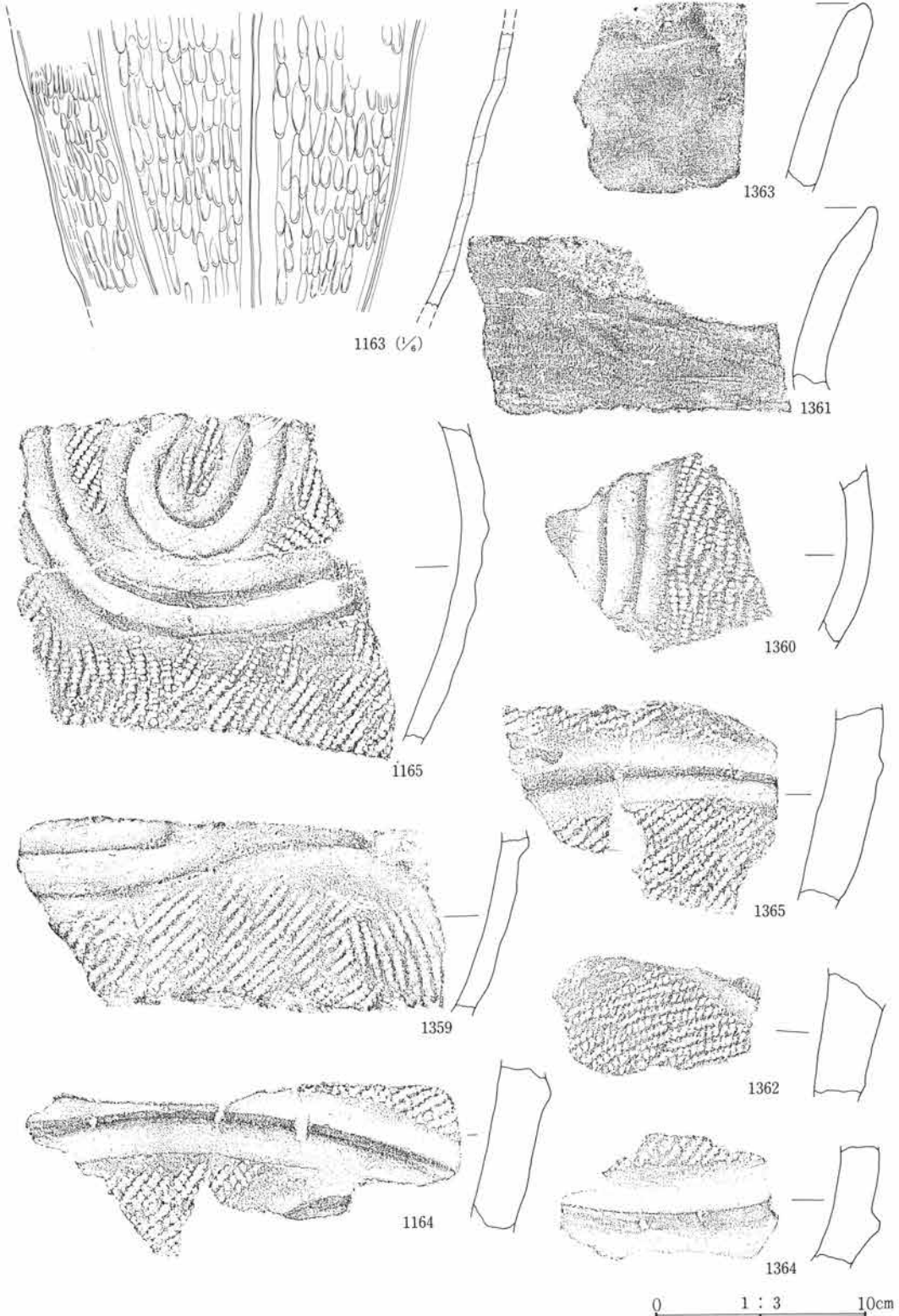
1155は、平口縁でキャリパー形を呈する深鉢形土器である。文様は口縁部、頸部、胴部の三文様帯に構成される。口縁部文様帯は、隆帯と沈線により楕円区画を設け、区画内にRL縄文を施文。頸部文様帯は横なでによる無文帯で、胴部文様帯はアーチ状の沈線文と蕨手状の懸垂文により区画し、地文にRL縄文、更に蕨手状文を区画内に施文する。このほか土壇覆土から刃部欠損の打製石斧片がある。両側縁に使用痕が見られる。



第13図 7区58号住居跡遺構、遺物図

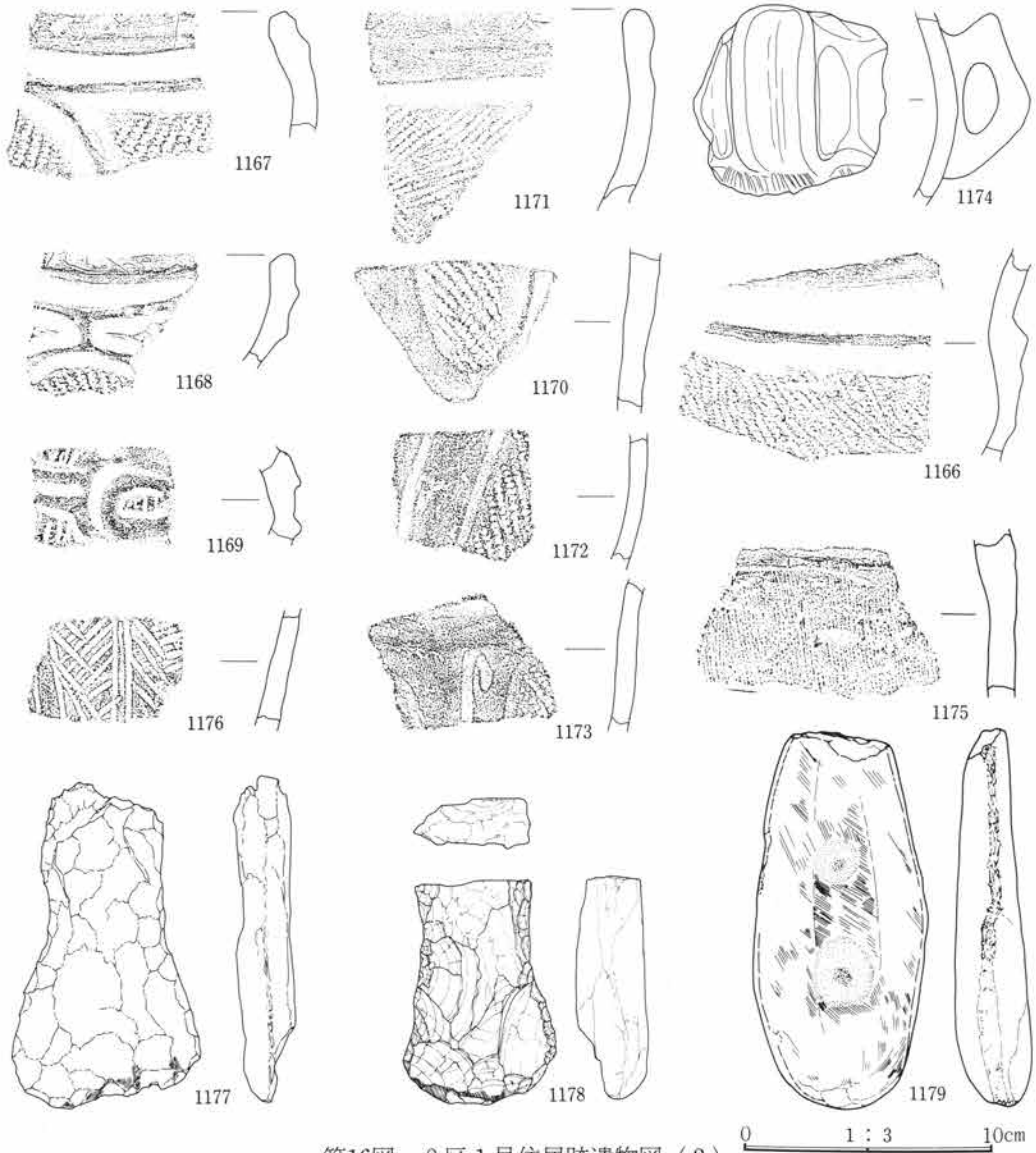


第14図 8区1号住居跡遺構図



第15図 8区1号住居跡遺物図（1）

第6章 検出された遺構と遺物



第16図 8区1号住居跡遺物図(2)



第17図 8区3号住居跡遺構、遺物図

8区1号住居跡（第14～16図、図版8・11・14）

本住居跡は、基本土層の第5層ローム上面で確認され、西側は調査区外にある。規模は推定6mを測り、円形住居である。上面は床面を残すのみで殆ど削平されているが、柱穴のあり方から建替えが推定される。床面は粘性を持つ暗褐色土とロームを踏み固めている。柱穴は多数のピットを確認したが、炉跡を中心に二重に廻る6～8本の主柱穴である。炉は住居の中央東寄りに位置し、床面を30cm程掘り下げ、口縁部と胴部下半を欠く深鉢形土器を正位に埋設し、南側の一部を別個体の大型土器片で二重にしている。また、埋設土器の底部に同一個体の土器片を全面に敷き底面としている。炉の覆土及び底面より焼土を少量確認した。遺物は、床面及び覆土中より土器片、石器が多量に出土した。遺構の時期は、埋甕の特徴から中期加曾利E III・IV期である。

出土土器1163は、胴部上半と底部を欠く深鉢形土器で、器高26cm、上径50cm、下径30cmを測り、文様は隆帯による懸垂文を施し、区画内に指頭によるなでを器全面に施す。以下、下半部は櫛歯による縦位の沈線文を施文。器面は二次焼成を受け風化し黄橙色を呈する。1164、1165、1359～1365は同一個体で埋甕の中敷と外枠に使用している。1361、1363は口縁部片で口縁下に隆帯を施して区画構成し、無文帯とする。他は胴部片で幅の広い沈線を曲線的に施し、隆帯を作出して渦巻文を描き、地文にRL縄文を施文する。1166～1169は隆帯で区画文を描く。1167～1169は口縁部片で隆帯により楕円区画文で文様を構成する。1167はLR縄文、1168はRL縄文を施し、1169は区画内に縦位の沈線文を施文する。1170～1173は沈線により区画文を描く。1170は沈線でアーチ状の文様を構成し、区画内にRL縄文を施文する。1173は蕨手状文を施文する。1172は懸垂無文帯を持つ。1174は胴部で把手を有し、以下に櫛歯状工具による沈線文を縦位に施文する。1175は隆帯下に縦位の櫛歯状沈線文を施し、1176は2本1単位の懸垂文間に沈線による綾杉文を施す。

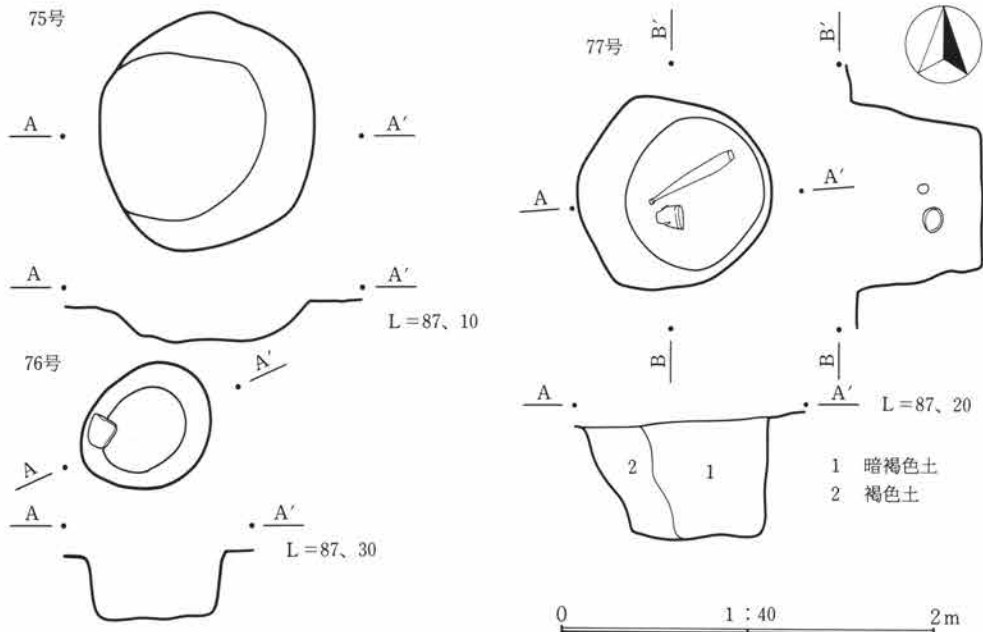
出土土器1177、1178は打製石斧で分銅形である。1177は輝石安山岩で長さ12.9cm、幅7.6cm、厚さ2.2cm、重量195gを測り、刃部表裏に磨耗痕が著しい。1178は輝石安山岩で長さ8.9cm、幅6.1cm、厚さ2.8cm、重量160gを測り、刃部に磨耗痕があり頭部欠損。1179は凹石から転用した磨製石斧、変輝緑岩で長さ14.7cm、幅6.7cm、厚さ2.9cm、重量440gを測り、両側縁には調整と使用による打痕がある。

8区3号住居跡（第17図、図版12）

本住居跡は、基本土層の第5層ローム上面で確認された。確認時、炉跡に伴う埋設土器が露呈し、周囲にピットがいくつか見られたものの規模、平面形は不明である。埋設土器はローム面を約10cm掘り下げ、胴部下半を欠損した深鉢である。覆土中に焼土が少量混入し、土器も二次焼成を受けていることから炉に伴うものである。周囲のピットとの関係を明らかにできなかったが、凡そ直径4～5mの円形住居と推定され、その時期は埋設土器の特徴から加曾利E III期である。

出土土器1180は、深鉢で現存器高11.3cm、口径25.5cmを測り、波状口縁を呈する。地文にLR縄文を施し、沈線で蕨手状文を描き区画内を磨消している。区画外には沈線による蕨手状文を施し、口縁部に無文帯を有する。

2 土 坑



第18図 7区75号、76号、77号土坑遺構図

7区75号、76号、77号土坑 (第18~20図、図版9・12・16)

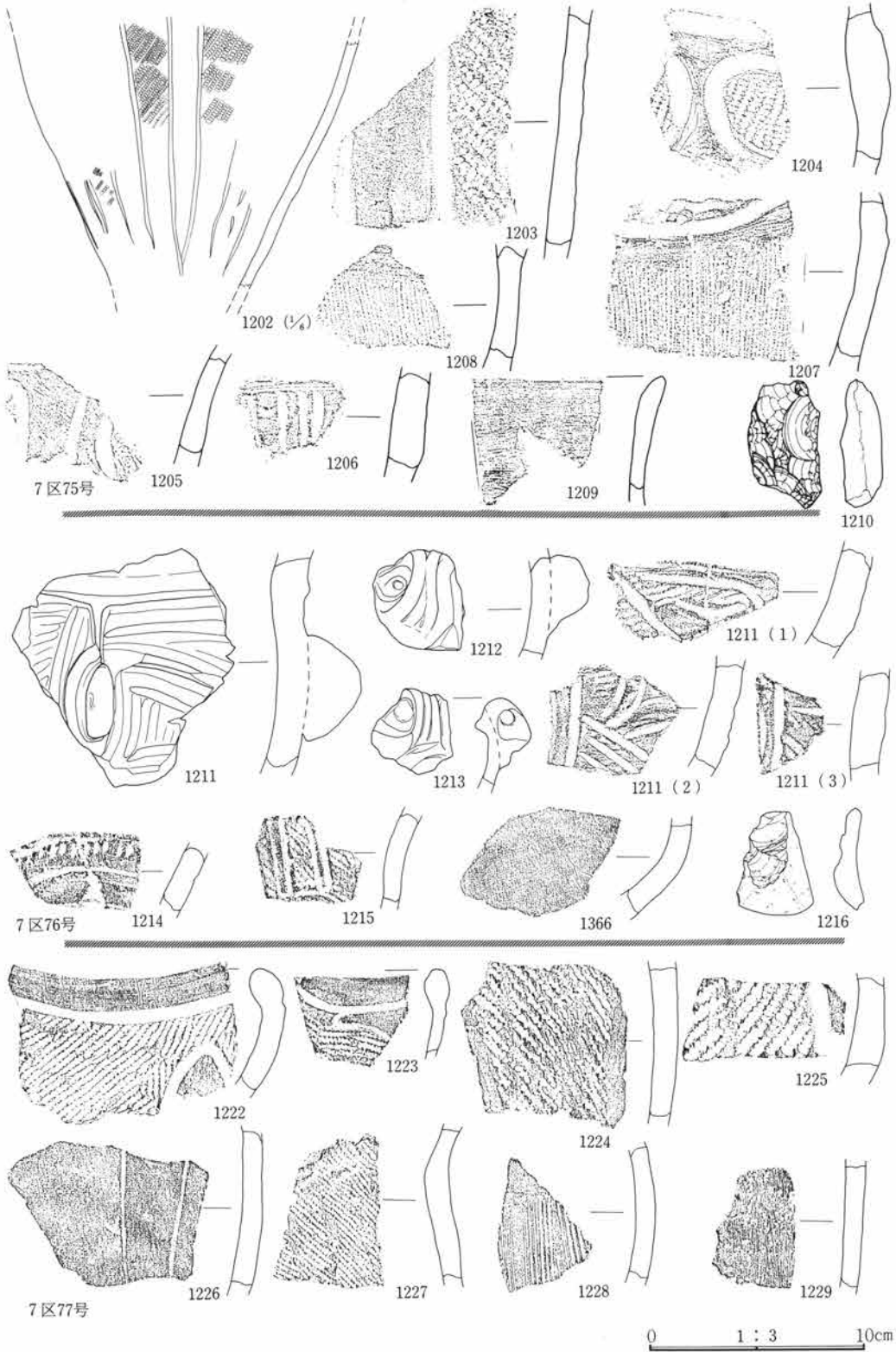
この3基の土坑は、崖線近くでまともって確認された。周囲には78号、79号土坑、42号住居跡といった遺構が分布する。

75号土坑は、径119cm、深さ21cmの円形を呈し、底面は平坦である。遺物は、大型深鉢形土器の胴部片、打製石斧がある。

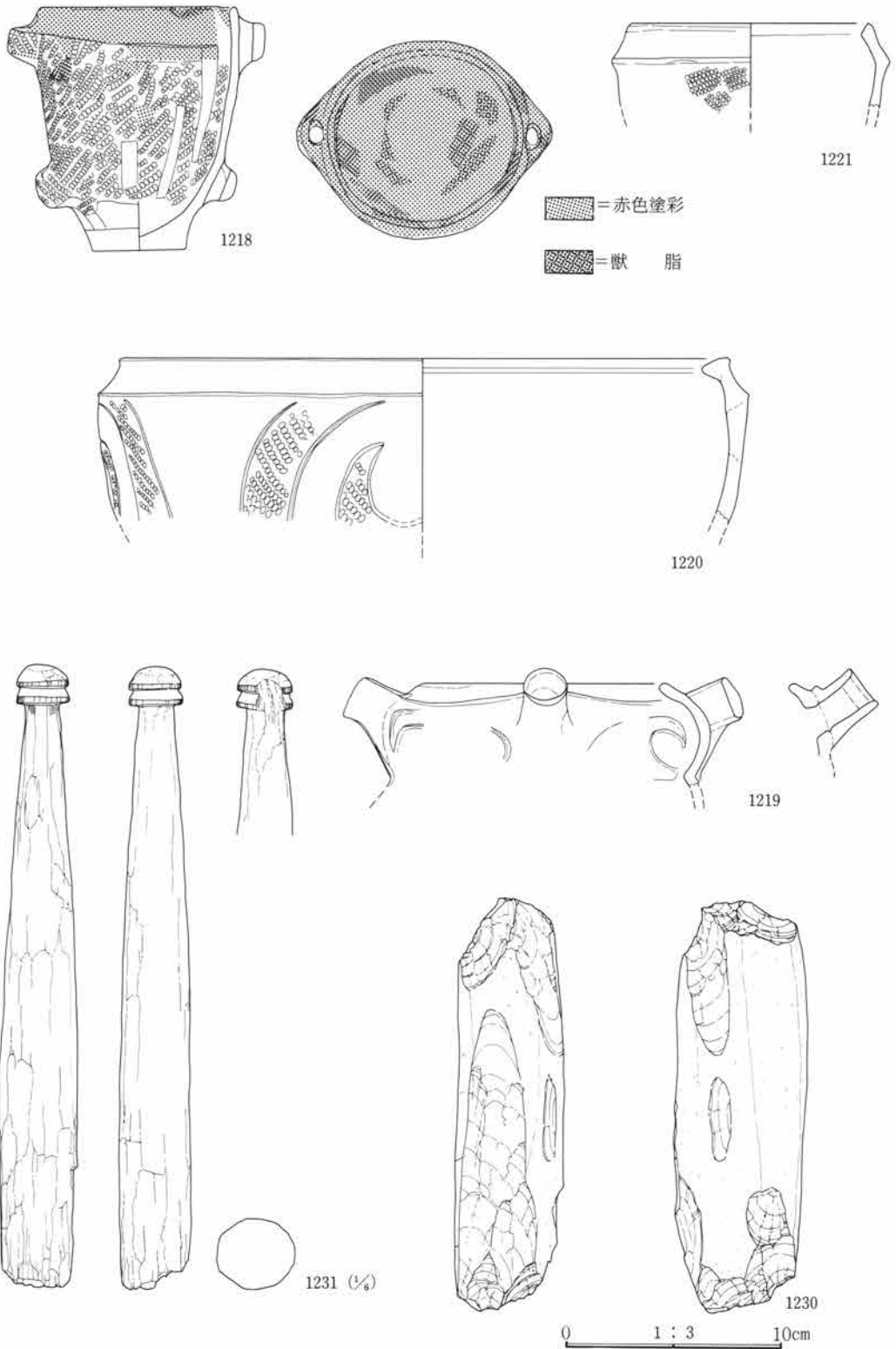
76号土坑は、75×60cm、深さ38cmの円形を呈する。壁は直立に近く、底面は平坦で断面円筒状である。遺物は、深鉢形土器、浅鉢の破片、打製石斧頭部片がある。

77号土坑は、130×100cm、深さ62cmの円形を呈する。76号と同様に平坦な底面で断面円筒状である。遺物は、覆土の中位から集中して出土した。土器片約60点、剥片11点がある。1218は小型異形土器で高さ11cm、口径9cm、口縁部及び胴部下半に1対ずつの橋状把手がつく。器全面にRL縄文を施し、口縁部には無文帯を持ち、内外面に赤色塗彩と内面に漆塗布が見られる。1221も塗彩等のあり方から同様の例である。1220は口縁部片で、内湾し内稜を持つ。細い沈線での渦巻文区画内にLR縄文を施文する。1219は胴部下半が欠損しているが、瓢箪形注口土器である。口縁部に橋状把手が1対つき、注口部は橋状把手の中間に上向きに付く。文様は地文を持たず、断面三角形の微隆起線により注口部を中心として対称に渦巻文を施す。胎土は精選され、赤色塗彩している。1230は礫器、1231は緑色片岩製の石棒で長さ52.6cm、最大径7.1cmである。上端は敲打と研磨で整形し、中位以下は自然面である。上端側面には人為的な打ち欠きがある。

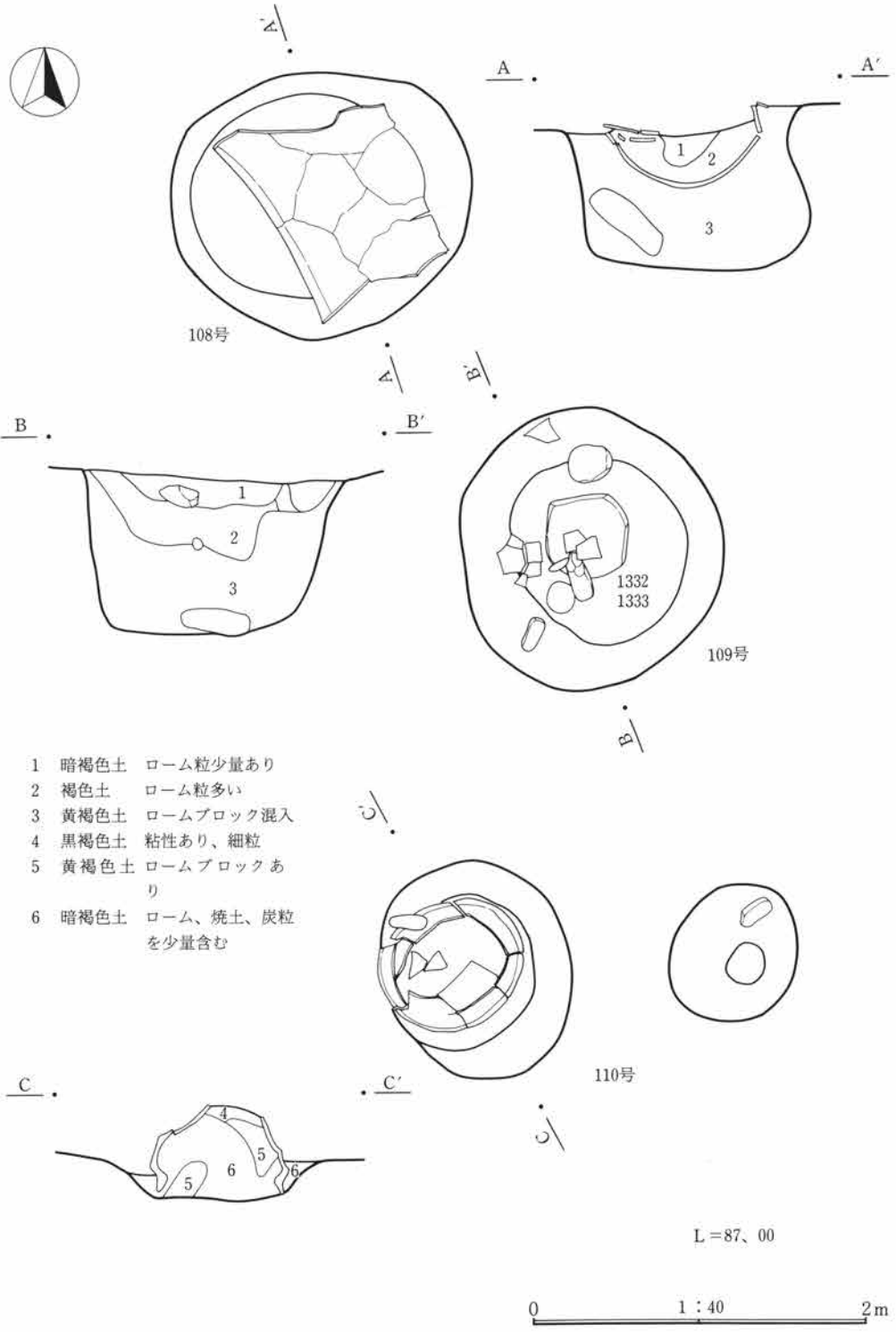
遺構の時期は、75号は加曽利EIII期、76号は勝坂期、77号は加曽利EIV期である。



第19図 7区75号、76号、77号土坑遺物図



第20図 7区77号土塚遺物図



第21図 7区108号、109号、110号土坑遺構図

7区108号土坑（第21・22図、図版10、12）

本土坑は、109、110号とともに3号古墳前方部葺石列下で確認された。規模は90×65cm、深さ46cm、主軸N-60°-Eを示し、円形を呈する。壁は北側でオーバーハングし、他はほぼ垂直に立ち上がり、底面は殆ど平坦である。覆土はロームブロック混入の黄褐色土で、遺物は上面より胴部下半欠損の大型深鉢形土器が倒れた状態で出土している。遺構の時期は、出土遺物の特徴から中期加曽利EⅢ期である。

1264は、大型深鉢形土器で、平口縁、キャリパー形を呈する。口縁部文様帯と胴部文様帯とに構成され、前者は隆帯と沈線により楕円区画を表出し、区画内にRL縄文を施文する。後者は隆帯2本1単位により楕円区画を表出し、地文にRL縄文を施文する。また、区画内に蕨手状の沈線文を施す。

7区109号土坑（第21・22図、図版10）

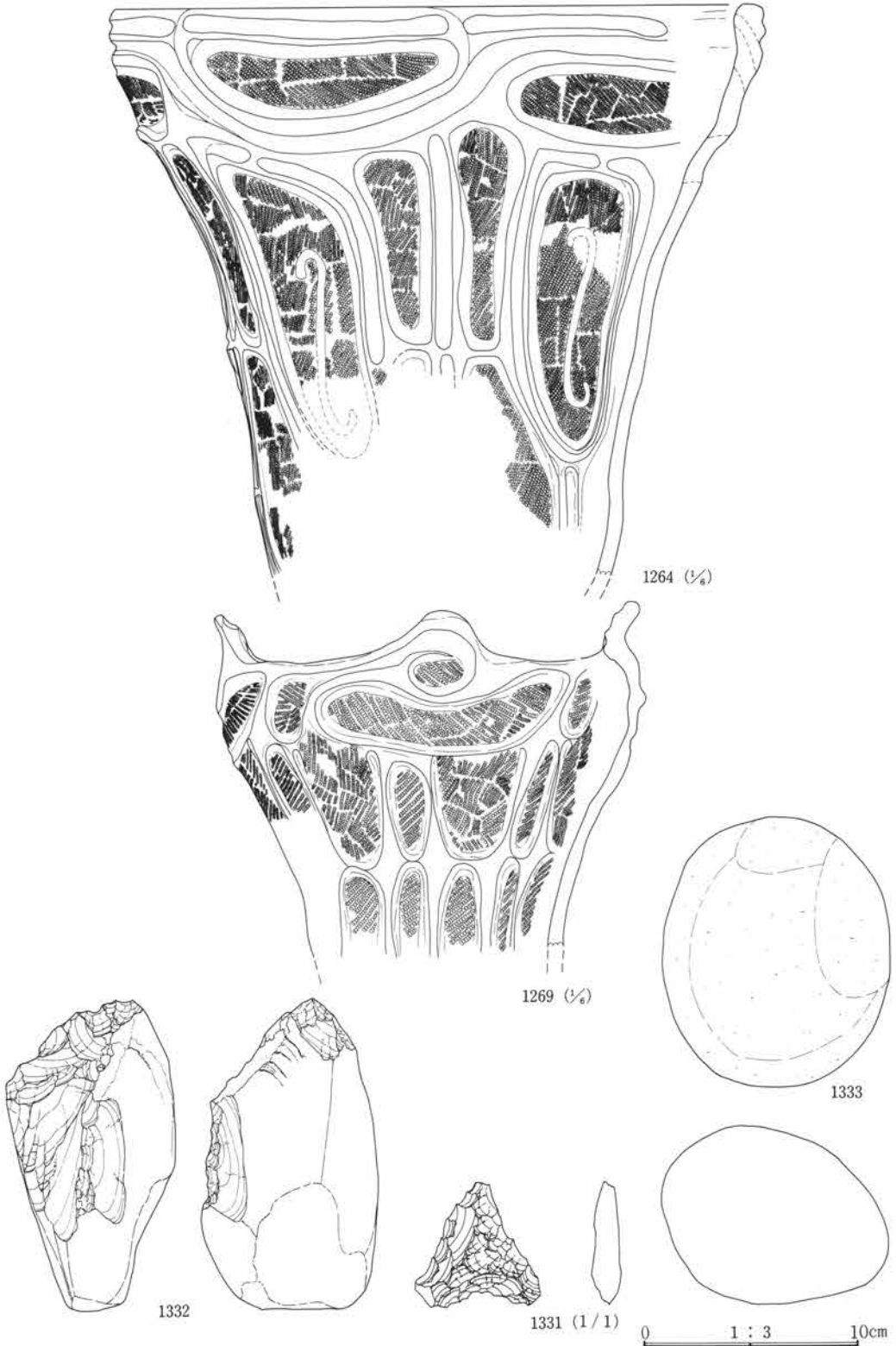
本土坑は、3基のうち真ん中に位置する。規模は82×78cm、深さ31cmの円形を呈する。主軸はE-52°-Sを示し、断面円筒形、底面は平坦、中央部に据え置かれた様な状態で、扁平な河原石が見られた。覆土は108号と同様でロームブロック混入の黄褐色土である。遺物は、覆土上面で深鉢の胴部破片や石鏝が出土した。遺構の時期は、出土遺物の特徴から中期加曽利EⅢ期である。

1331は、チャート製の石鏝である。1332は、黒色頁岩の角柱状の礫を用いた礫器である。各稜線を打面としながら、粗い加工を施し、上端に刃部を作出する。1333は、輝石安山岩による磨石で全体に風化している。

7区110号土坑（第21・22図、図版10・12）

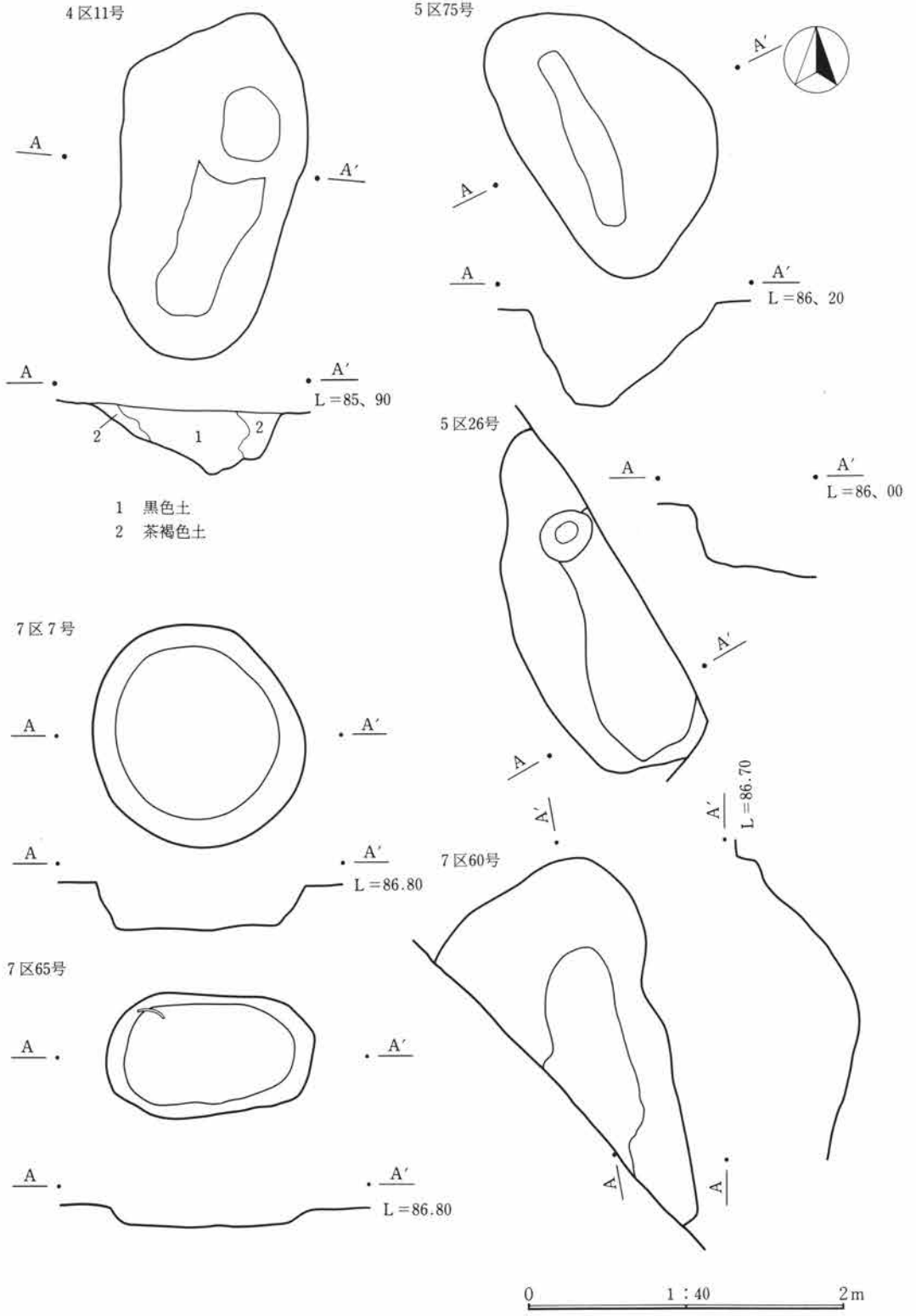
本土坑は、65×56cm、深さ19cm、主軸E-56°-Sの円形を呈する。壁は緩やかな立ち上がりを持ち、西側は3号古墳により切られている。底面は平坦で、口縁部を接し、伏せた状態で胴部下半を欠損した深鉢形土器が出土した。覆土はロームブロックを混入する黄褐色土である。遺構の時期は、出土遺物の特徴から中期加曽利EⅢ期である。その出土状態から見て埋甕を伴う土坑であり、隣接する108号と同様なものである。

1269は、胴部下半欠損の深鉢形土器で器高31.8cm、口径39.5cmを測り、波状口縁を持ちキャリパー形を呈する。文様は口縁部文様帯と胴部文様帯とに構成されている。口縁部文様帯は、波状口縁に沿って沈線による渦巻文と楕円区画を表出し、区画内にRL縄文を施文する。胴部文様帯は、沈線によるアーチ状・楕円区画を二段に表出し、地文にRL縄文を施文し、区画間を磨消文とする。

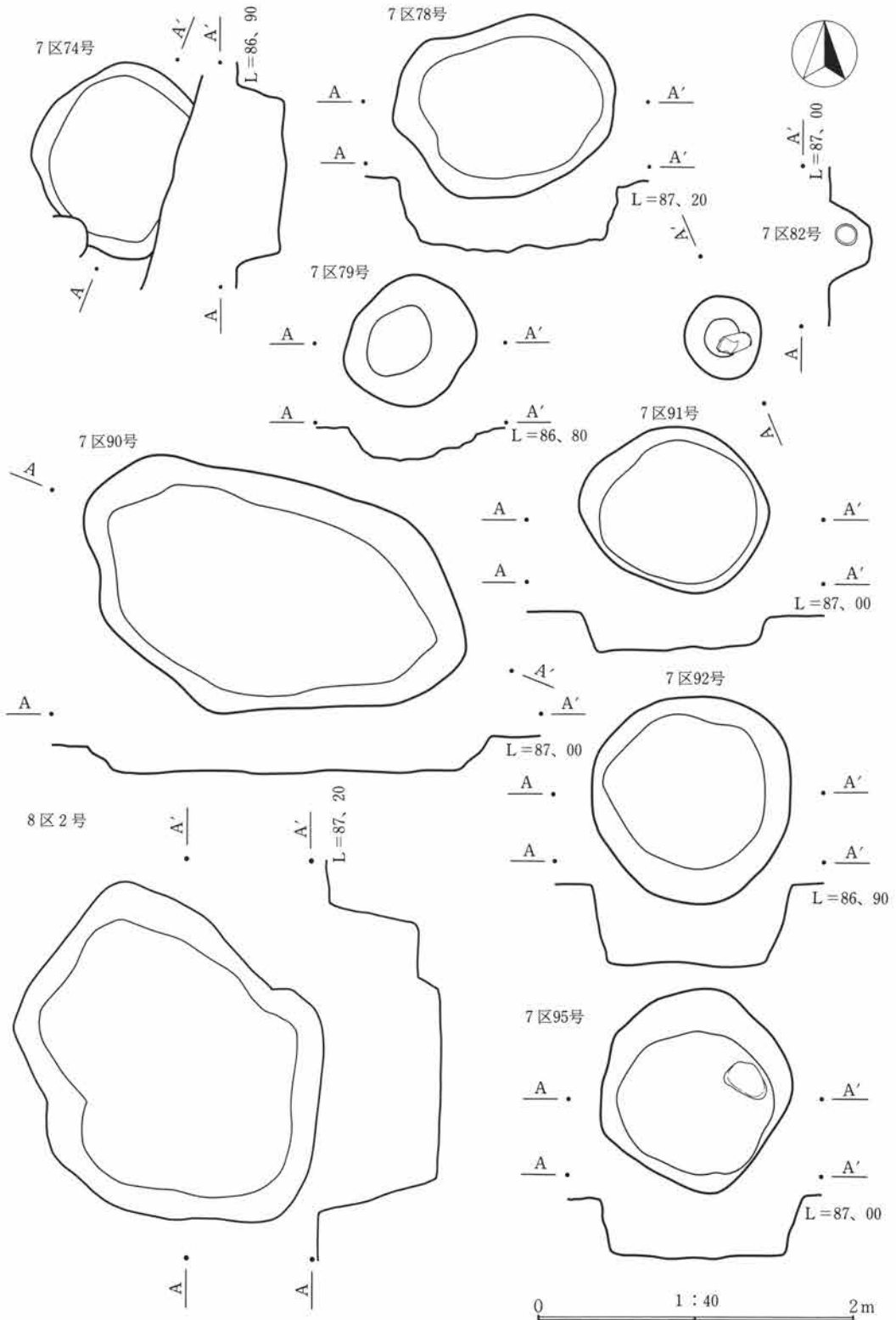


第22図 7区108号、109号、110号土坑遺物図

第6章 検出された遺構と遺物

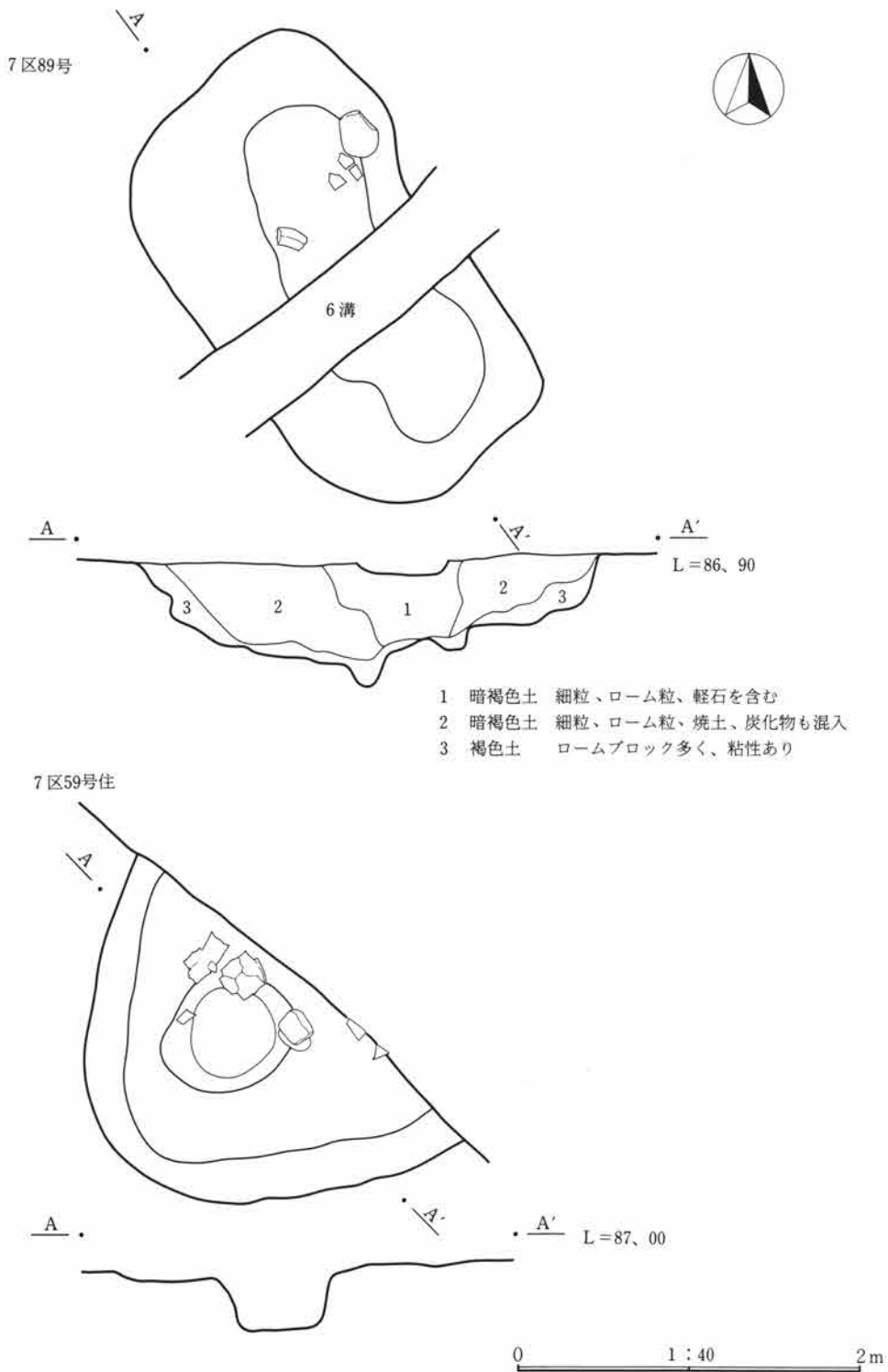


第23図 縄文土坑 (1)

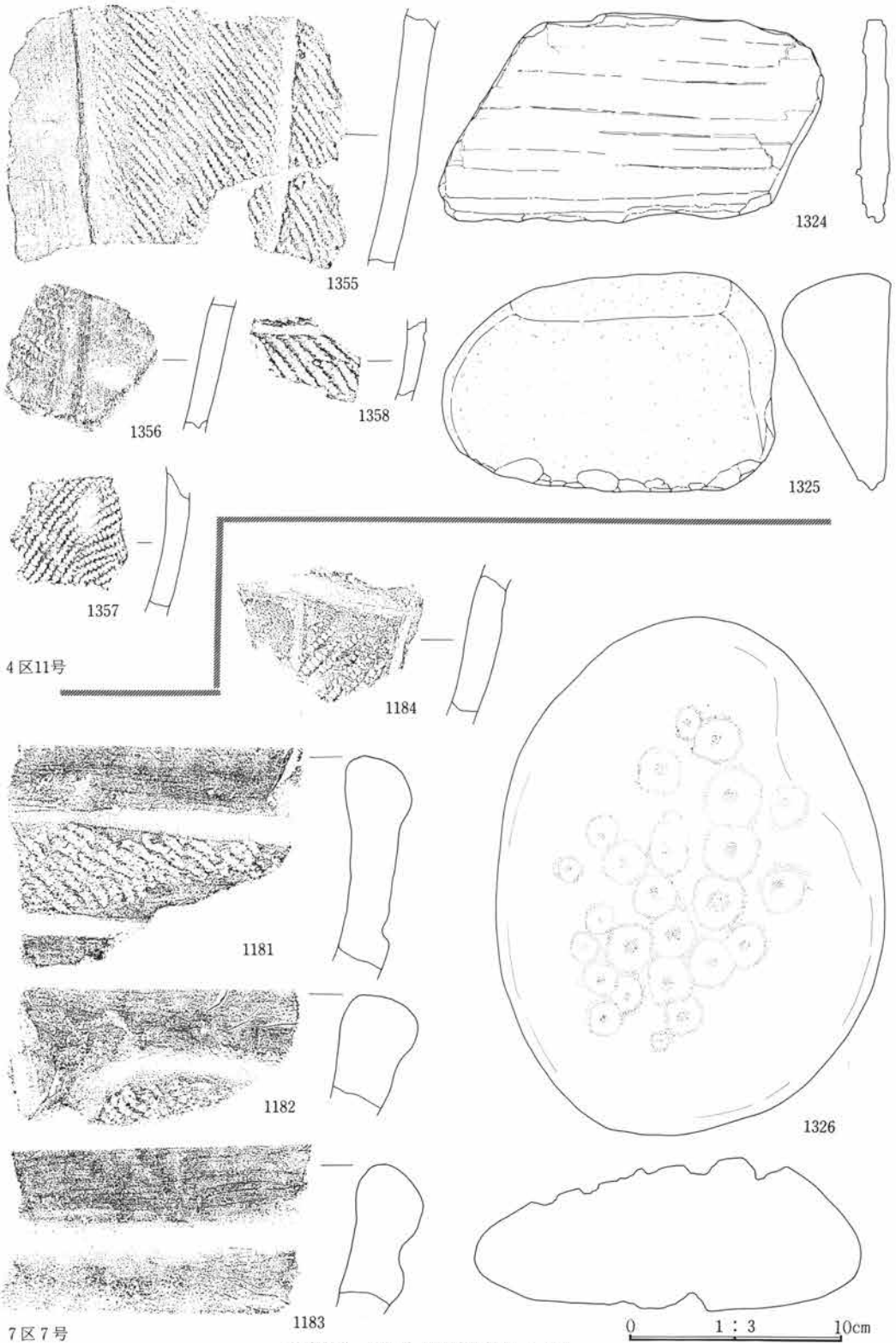


第24図 縄文土坑（2）

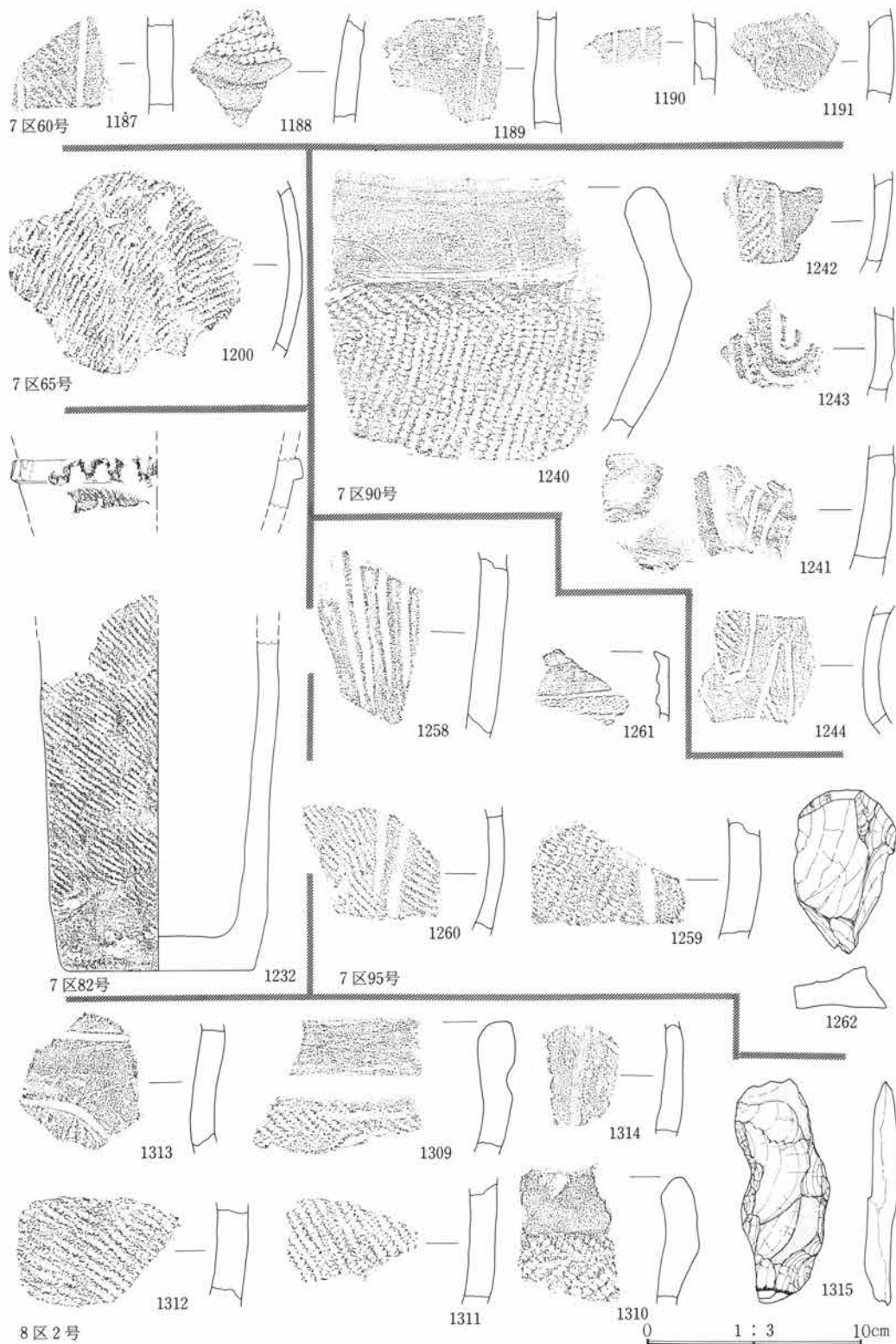
第6章 検出された遺構と遺物



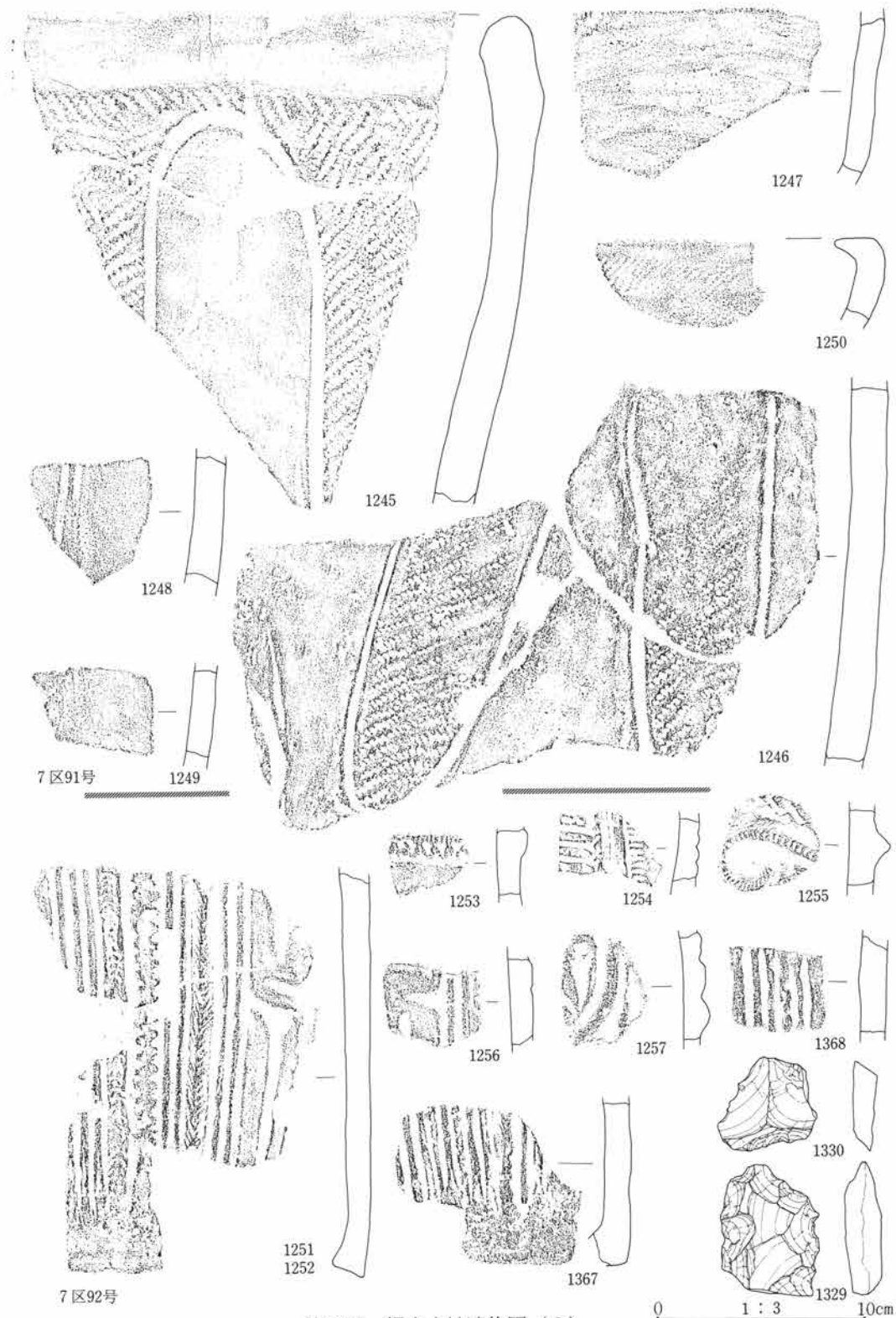
第25図 縄文土坑 (3)



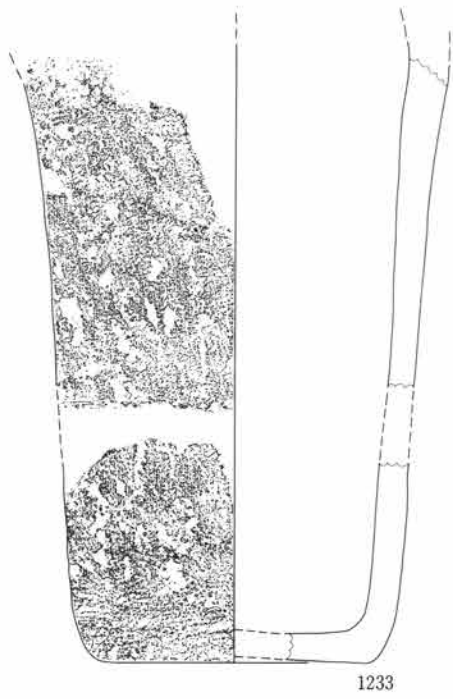
第26図 縄文土坑遺物図（1）



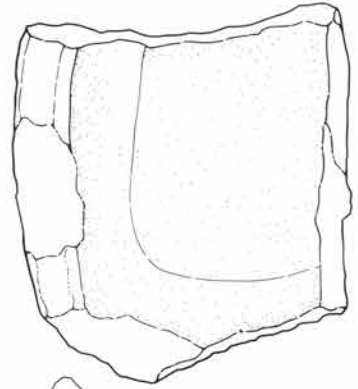
第27図 縄文土埴遺物図 (2)



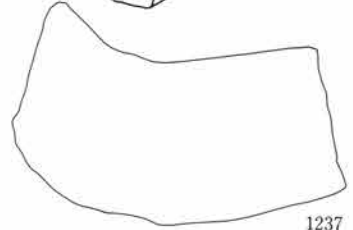
第28図 縄文土埴遺物図（3）



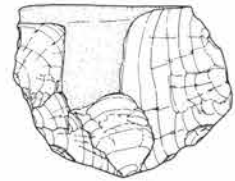
1233



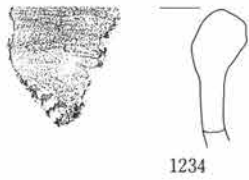
1237



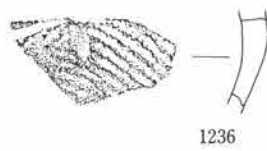
1238



1239



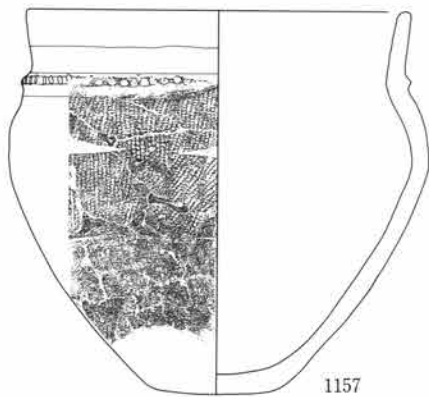
1234



1236

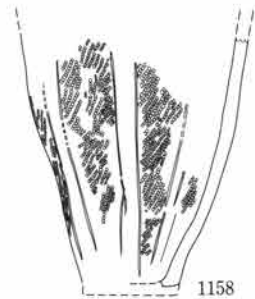
7区89号

0 1 : 3 10cm



1157

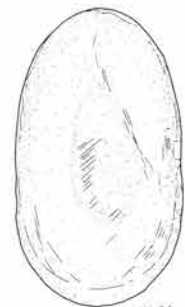
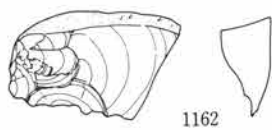
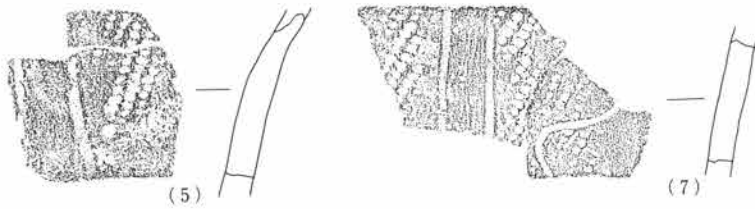
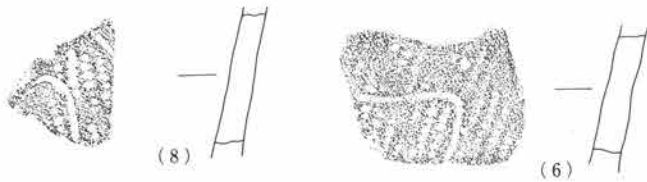
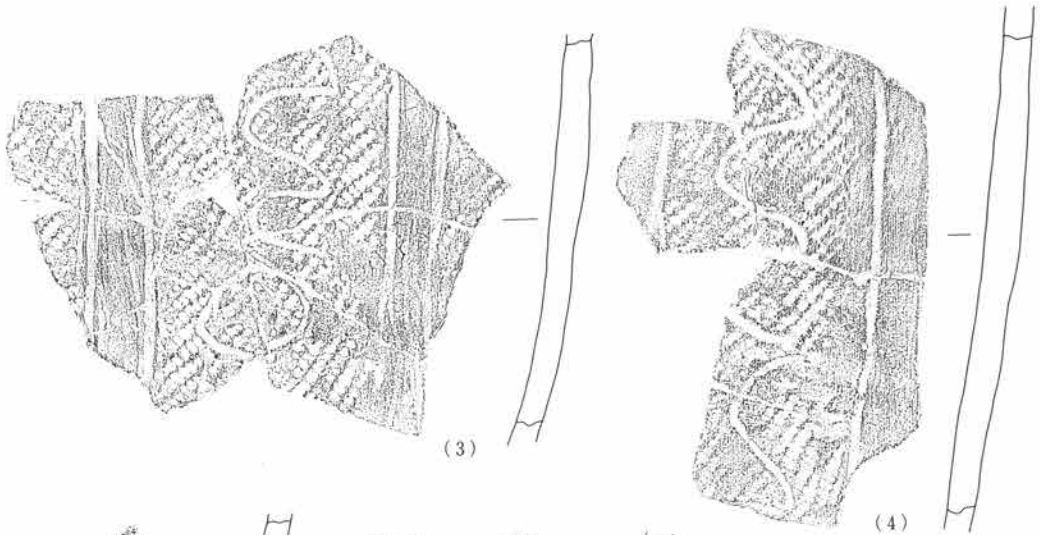
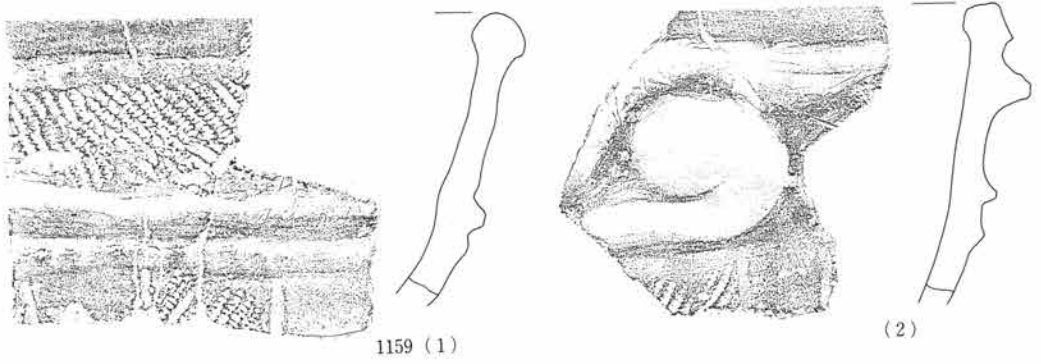
7区59号住



1158

0 1 : 6 20cm

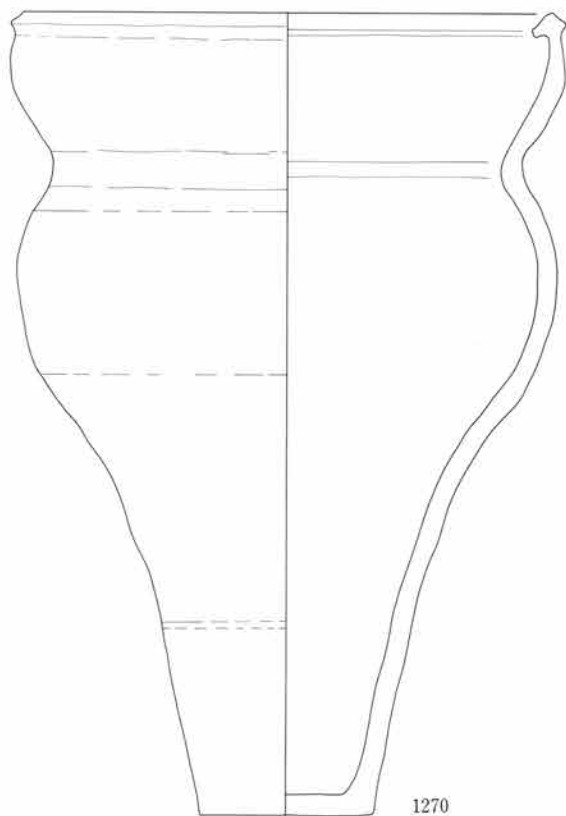
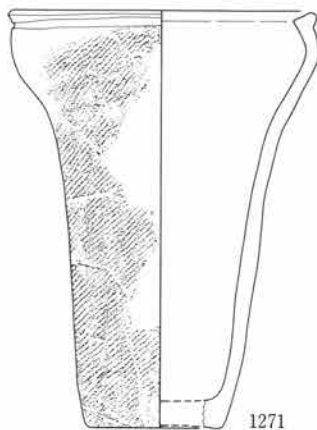
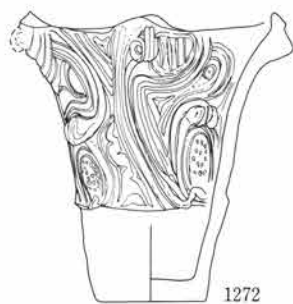
第29図 縄文土坑遺物図(4)



0 1 : 3 10cm

7区59号住

第30図 縄文土坑遺物図（5）



7区114号

0 1 : 6 20cm

第31図 縄文土壇遺物図(6)

4 区11号土坑（第23・26図）

本土坑は、基本土層第4層暗褐色土で確認された。規模は長径220cm、短径118cm、深さ52cm、主軸N-17°-Eで、平面形は楕円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸が目立つ。遺物は、中期加曾利EⅢ式深鉢破片と礫器2点がある。

1355、1356、1358は隆帯による懸垂文間を磨消縄文とする胴部片である。1324、1325は礫器で1324は上下の側端に、1325は同じく下端部に敲打痕がある。

5 区26号土坑（第23図）

本土坑は、基本土層第4層暗褐色土で確認された。東辺側は調査区外のため不明だが、規模は長径226cm、短径86cm、深さ64cm、主軸E-61°-S、平面形は不整形を呈する。壁は緩傾斜で、底面はほぼ平坦である。遺物は、深鉢破片少量がある。

5 区75号土坑（第23図）

本土坑は、基本土層第4層暗褐色土で確認された。規模は長径182cm、短径116cm、深さ64cm、主軸E-66°-Sで平面形は不整形を呈する。遺物は、深鉢破片少量がある。

7 区7号土坑（第23・26図、図版15）

本土坑は、基本土層第5層ローム上面で確認された。規模は長径140cm、短径130cm、深さ33cmの円形を呈する。底面は平らで、断面円筒形を呈する。遺物は、大形の深鉢破片と多孔石1点がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から中期後半加曾利EⅢ期である。

1811～1813は沈線文により区画された口縁部片、1184は沈線文により懸垂文間を磨消す胴部片、1326は輝石安山岩を石材とする多孔石である。

7 区60号土坑（第23・27図）

本土坑は、基本土層第5層ローム上面で確認された。西南側は調査区外のため不明である。規模は長径190cm、短径100cm、深さ78cm、壁、底面は一定せず、凹凸があり、主軸N-20°-W、不整楕円形を呈する。遺物は、加曾利E式深鉢破片が少量ある。

1187、1188は沈線文により懸垂文間を磨消す胴部片、1189～1191は細い沈線文を直線または曲線文を施文する。

7 区65号土坑（第23・27図）

本土坑は、基本土層第5層ローム上面で確認された。長径139cm、短径75cm、深さ14cm、主軸N-72°-Wで、隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、東北隅に接して土器が出土した。

1200は器面全体に斜縄文を施文、器肉は薄く胎土に砂粒を多量に含む。

7 区74号土坑（第24図）

本土坑は、基本土層第5層ローム上面で確認された。南辺は33号住居に切られているが、規模は長径117cm、短径90cm、深さ30cm、主軸N-36°-Eで、平面形は円形を呈する。壁は急傾斜で、底面は殆ど平坦である。

第6章 検出された遺構と遺物

7区78号土坑（第24図）

本土坑は、25号住居跡の東北隅に重複して確認された。長径140cm、短径105cm、深さ46cm、主軸N-78°-E、楕円形を呈する。壁は緩傾斜で、底面は殆ど平坦である。遺物は、中期加曾利E式の深鉢破片が出土し、25号住居跡の覆土中にも多量に混入している。

7区79号土坑（第24図）

本土坑は、25号住居跡西南隅近くの床面下で確認された。長径85cm、短径71cm、深さ20cmで、ほぼ円形を呈する。壁は、緩傾斜で、底面は丸い。覆土はローム粒の多い褐色土で、遺物は中期加曾利E式の深鉢破片が少量出土している。

7区82号土坑（第24・27図、図版9・12）

本土坑は、基本土層第5層で確認された。規模は長径52cm、短径47cm、深さ16cmの円形を呈する。壁は緩傾斜で、底面はやや平坦である。遺物は、胴部上半を欠いた深鉢形土器が倒れ込んだ状態で出土した。この土器1232は、底径7.8cm、殆ど円筒形に近く、頸部相当部分に細い粘土紐を波状に貼付した隆帯がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から中期勝坂期に比定される。

7区89号土坑（第25・29図、図版17）

本土坑は、基本土層第5層ローム上面で6号溝と重複して確認された。規模は長径265cm、短径145cm、深さ80cm、主軸N-40°-Wで、平面形は長方形を呈する。壁は緩傾斜で、底面は凹凸が多く、断面舟底状である。覆土中に焼土と炭化物が見られた。遺物は、下胴部のみ深鉢、石斧、石皿等がある。遺構の時期は、中期加曾利EⅢ期である。

1233は口縁部欠損の深鉢形土器で表面になで痕を残す。1234は口縁に沿って沈線を施し、区画内に縄文を施文する。1236は横位に沈線を施し、以下LR縄文を施す。1237は輝石安山岩を石材とする石皿の破片、1238、1239は横長剝片を素材とした搔器である。縁辺部に調整加工し、下端に磨耗痕を残す。

7区90号土坑（第24・27図、図版17）

本土坑は、基本土層第5層ローム上面で確認された。規模は長径255cm、短径151cm、深さ37cmの不整楕円形を呈する。底面は一部に凹凸が見られるが平坦で、壁は緩傾斜である。遺物は、深鉢形土器の口縁部破片等少量がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から中期加曾利EⅣ期である。1242は沈線文による懸垂文間を磨消す胴部片、1240は微隆帯のある口縁部片、1241、1243、1244は沈線文による楕円区画をし、区画内に1241、1243は沈線文、1244はLR縄文を施す。

7区91号土坑（第24・28図、図版15）

本土坑は、92号とともに4号方形周溝墓方台部上で確認された。規模は長径119cm、短径99cm、深さ22cmの円形を呈する。覆土は黒褐色土の単純層で、上面から深鉢形土器の胴部片や剝片が出土している。遺構の時期は、出土遺物の特徴から中期加曾利EⅣ期である。

1245は口縁部片で口縁部文様帯が喪失し、沈線文によるアーチ状文で区画し、区画内にRL縄文を施文する。1246は、1245と同一個体の胴部片である。1247～1249は胴部無文帯で1248は沈線

文を垂下する。1250は口縁部片で内湾し、器面全体にLR縄文を施文する。

7区92号土坑（第24・28図、図版17）

本土坑は、長径124cm、短径117cm、深さ53cmの円形を呈する。壁は緩傾斜で、底面は平坦である。覆土は黒褐色土の単純層で、底面近くから深鉢形土器の破片や剥片が出土している。遺構の時期は、出土遺物の特徴から中期勝坂Ⅱ～Ⅲ期である。

1251～1253、1367、1368は同一個体胴下半部片である。半截竹管による沈線文を縦位に施し、隆帯上には爪形文、刻目文、波状文を施文する。1254は沈線文と爪形文を施し、1255は隆帯上に刻目文、1256、1257は三角陰刻文を施文する。1329は刃部欠損の打製石斧である。黒色頁岩を素材とし、中位に磨耗痕を有する。1330は搔器、黒色頁岩で横剥ぎの剥片を素材としている。下端部と側縁の一部に調整加工がある。

7区95号土坑（第24・27図）

本土坑は、3号古墳後円部墳丘下で確認された。長径118cm、短径112cm、深さ56cmの円形を呈する。壁は緩傾斜で、底面は平坦である。遺物は、覆土中より深鉢形土器片や剥片が出土し、底面には扁平な礫が置かれた状態にあった。遺構の時期は、出土遺物の特徴から中期加曾利EⅢ～Ⅳ期である。

1260は隆帯による懸垂文で区画し、地文にLR縄文を施す。1259は沈線による懸垂文間を磨消縄文とする胴部片、1258は棒状工具による沈線文を縦位に施す胴部片、1261は器表に横位の細い沈線文で区画し、区画内に無節LR縄文を施し、裏面は幅広で深い沈線を横位に施す。内外面ともに研磨している。1262は黒色頁岩製の剥片である。

8区2号土坑（第24・27図）

本土坑は、基本土層第5層ローム上面で確認された。隣接しては、8区1号、3号住居跡といった同じ加曾利EⅢ～Ⅳ期の遺構がある。規模は長径160cm、短径150cm、深さ75cmの方形土坑と、長径170cm、短径150cm、深さ56cmの方形土坑とが重複している。壁は、ともに垂直に近い立ち上がりを持ち、底面は平坦である。遺物は、覆土中位付近から深鉢形土器の胴部片や打製石斧が出土している。遺構の時期は、出土遺物の特徴から中期加曾利EⅢ～Ⅳ期である。

1309、1310は口縁下に沈線、隆帯文で区画し、RL縄文を施す口縁部片である。1311、1312は表面にLR縄文、1313は沈線により区画し、区画間を磨消す。1314は沈線による懸垂文を施す胴部片である。1315は打製石斧、珪質頁岩で横広の剥片を素材にし、表裏ともに粗い加工で調整する。刃部に磨耗痕が見られる。

7区59号住居跡（第25・29・30図、図版11）

この遺構は、3号古墳後円部墳丘下で半分程確認された。調査時は住居跡として扱ったが、整理に於いて周辺での土坑との比較から土坑として報告する。規模は、径3.8mの不整円形内に径約1mの円形土坑が一段深い堀方として伴う。壁は緩傾斜で、底面は凹凸が目立つが比較的堅緻である。遺物は、円形土坑の周囲から深鉢形土器の胴部破片、剥片が出土している。遺構の時期は、

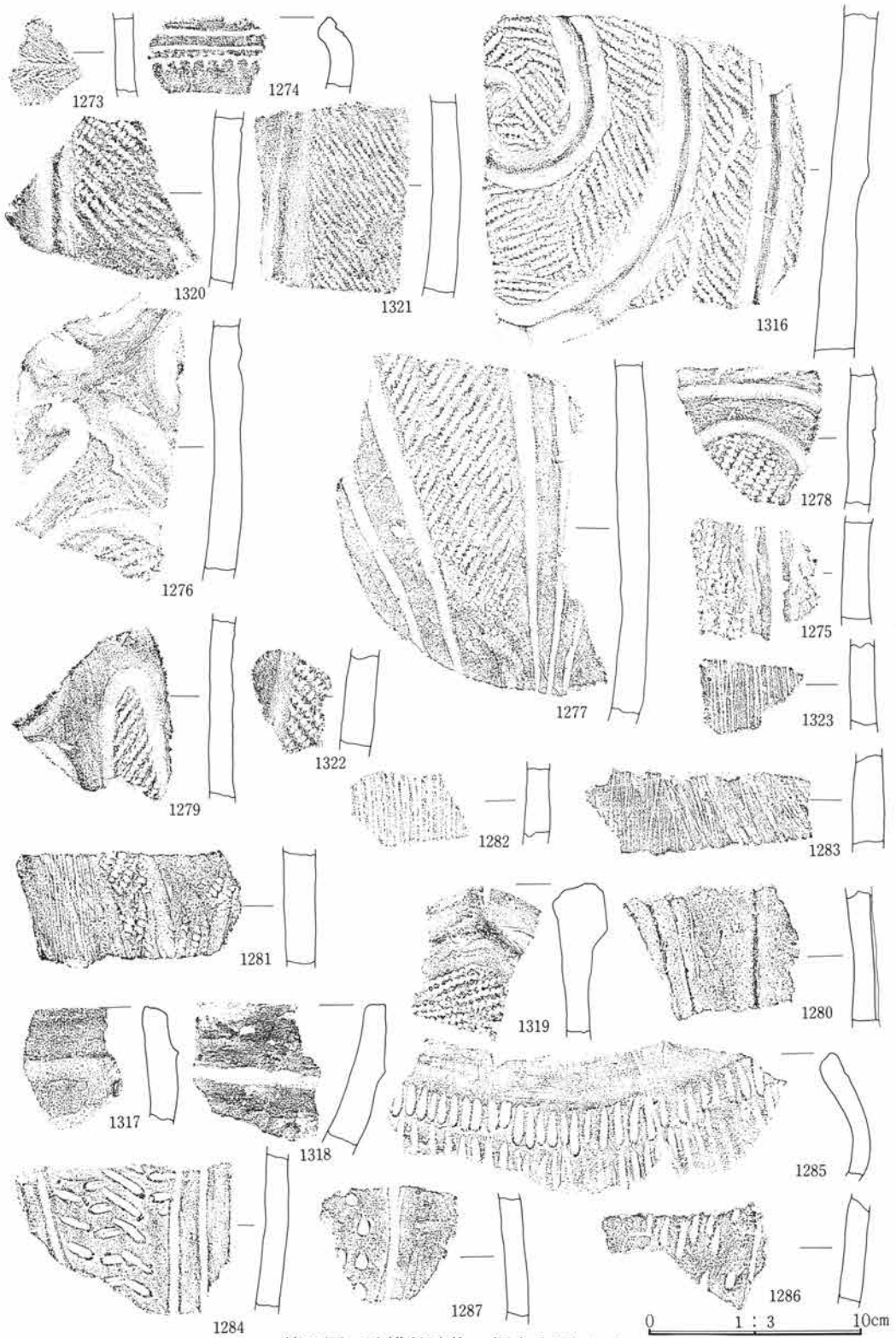
出土遺物の特徴から中期加曾利E III期である。

1157は口径31cm、底径10.8cm、器高30.7cmを測る鉢形土器である。文様は頸部に隆帯を施し、その上に棒状工具により円形刺突を施す。胴部は上半までを縦方向の斜縄文とし、以下底部まで無文帯とする。1158は胴部上半と底部を欠く深鉢形土器。現存器高21cm、底径7.5cmを測る。沈線による懸垂文間を磨消し、地文にはRL縄文を粗く施文する。1159は口縁部文様帯に隆帯による渦巻文を施し、区画内にRL縄文を施文する。胴部文様帯は沈線による懸垂文間を磨消し、地文にRL縄文、更に縄文地に蛇行懸垂文を沈線により施文する。1160は磨石、扁平な円礫の表裏面に敲打痕と磨耗面が見られる。1161、1162は搔器、ともに黒色頁岩の剝片を素材とし、側縁部に刃付け様の細かな調整が見られる。

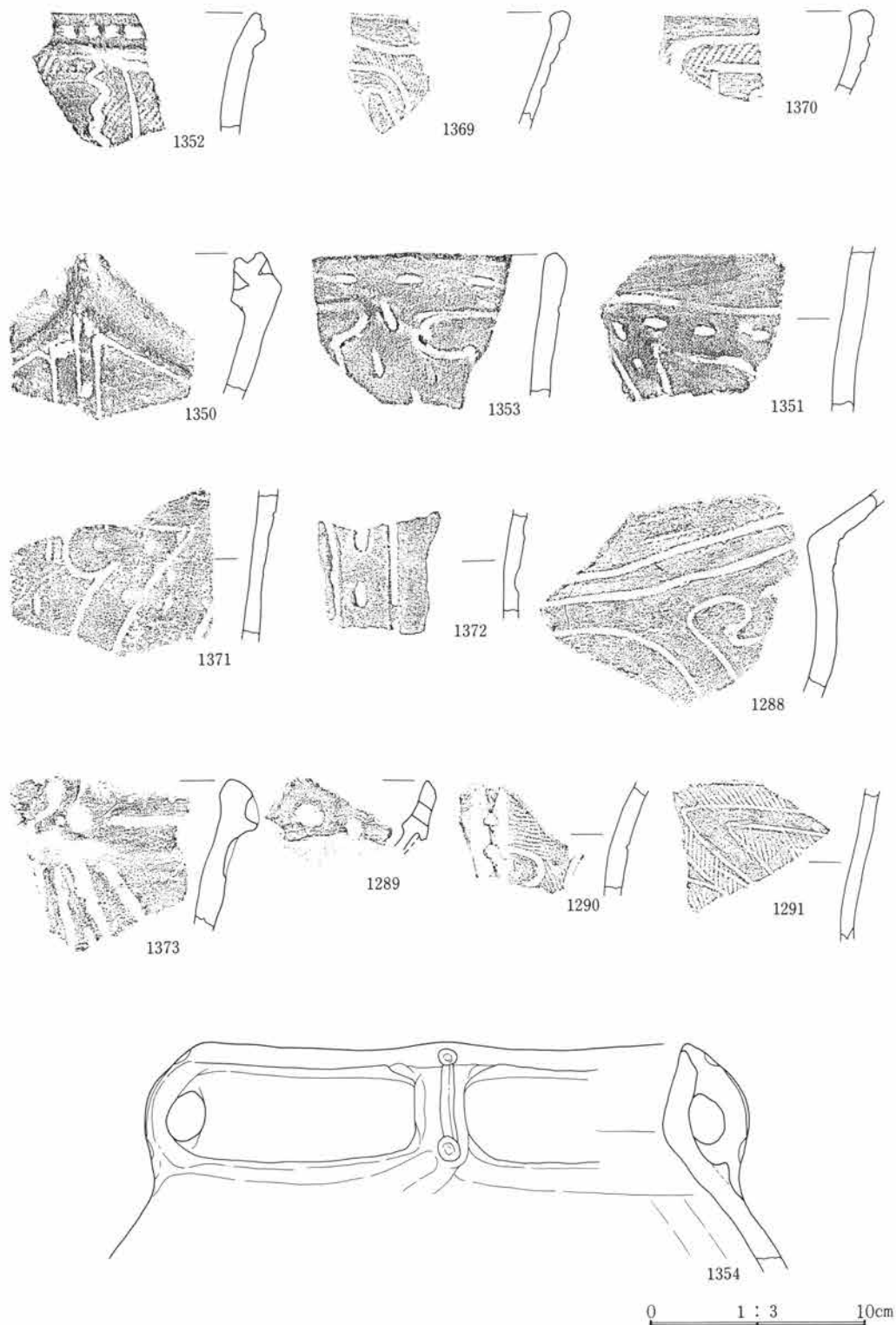
7区114号土坑（第31図、図版9・12）

本土坑は、3号古墳後円部墳丘下で確認されたが、調査終了後の埋戻し途中のため、規模、位置については不明である。接近した遺構としては、95号土坑、59号住居跡等があるが、規模と形状については95号と同様な径120cm前後、底面の平坦な円形土坑と推定される。覆土は、ローム粒を多く含む暗褐色土である。遺物は、3個体の深鉢形土器が東西方向で折り重なる様な状態で出土した。これは、土器を埋設したものと考えられる。遺構の時期は、出土遺物の特徴から中期勝坂期だが、文様構成等から中部地方井戸尻系の要素を含むと思われる。

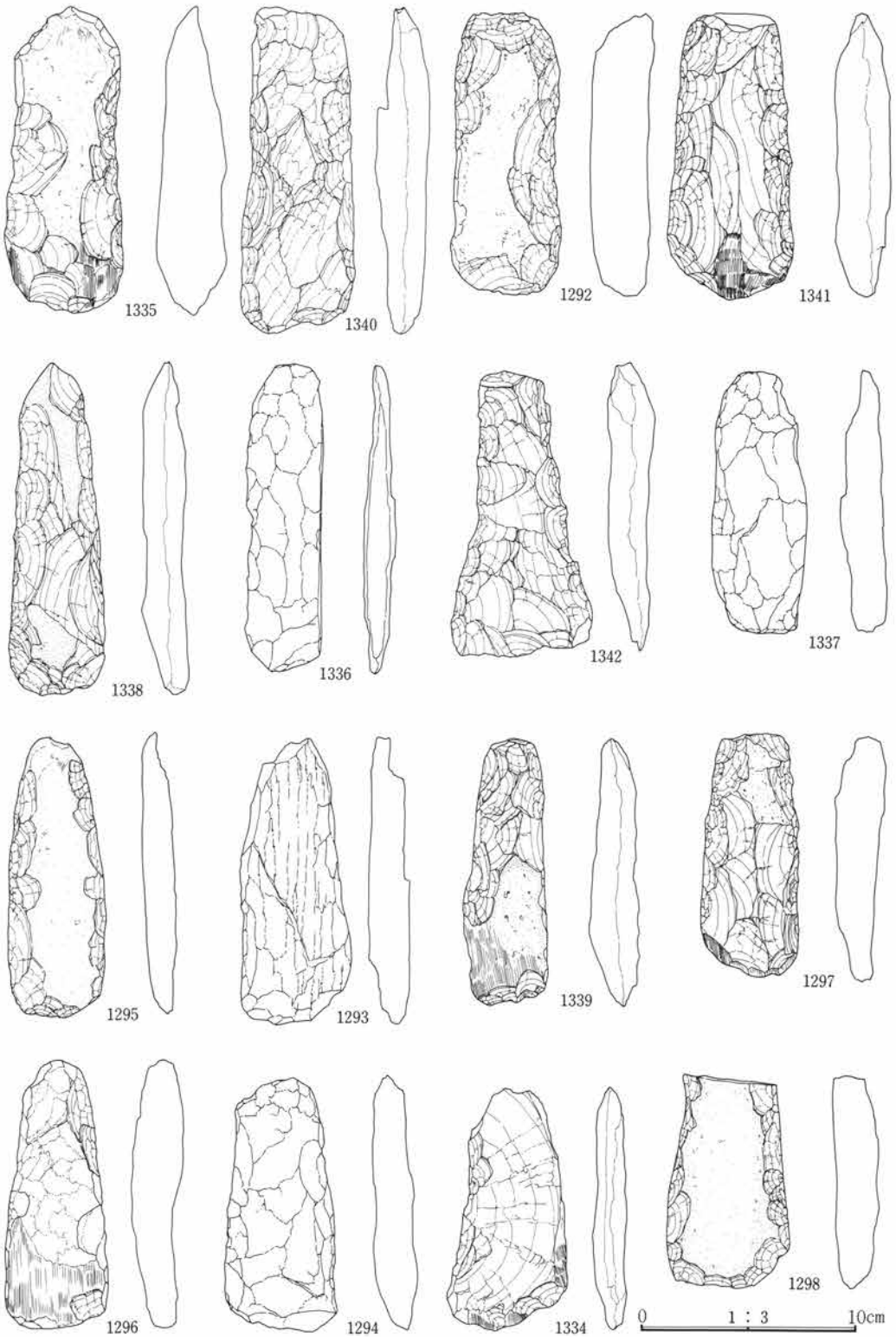
1272は、器高22cm、口径19.5cm、底径9cmを測り、口縁の一部を欠くだけの深鉢形土器である。口縁部は外反し、口唇には内稜を持ち、波状口縁を呈する。文様は胴部の上下で二分される。胴上半部は、波状口縁に2対の小突起を有し、曲線的な隆帯と沈線で三角形・楕円区画を構成し、区画内に三角陰刻文、刺突文を施文する。以下胴部は横なで調整による無文帯である。1271は、器高33.4cm、口径24cm、底径10.6cmを測る深鉢形土器である。胴部上半部に丸みを持った張りが見られ、下半部は円筒状である。口唇部は平滑で内外に稜を持つ。文様は、口縁下に棒状工具による沈線を1条めぐらし、以下底部まで全面にRL縄文を施文する。1270は、3個体の中でも最も下にあったもので前2個体は、この中に納められていた可能性もある。器高63.8cm、口径42.8cm、底径14cmを測る深鉢形土器である。口縁部は平滑で、内稜を持つ。頸部は大きくくびれ、胴部上半が丸みを持って張る。表面は無文で横なで調整している。



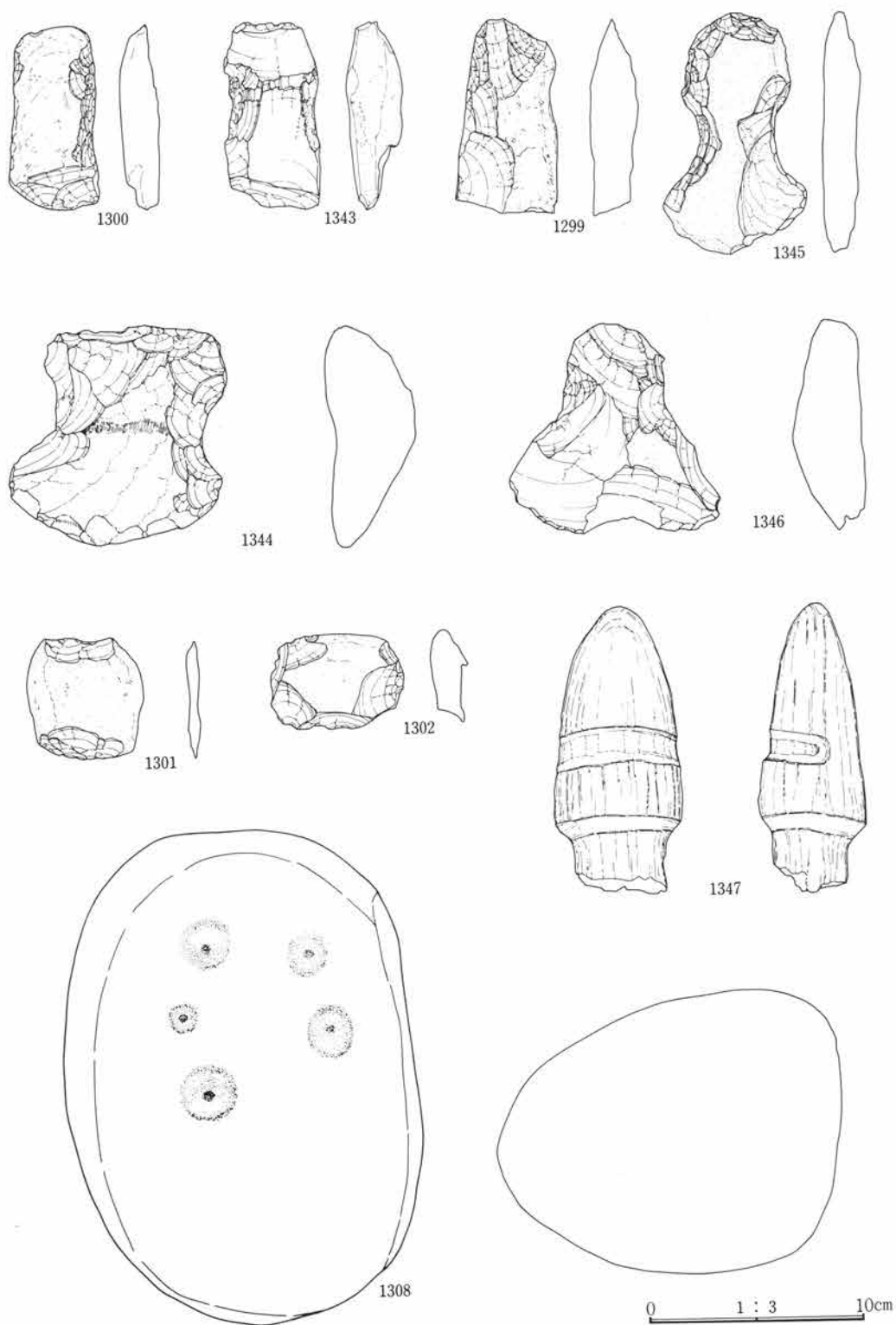
第32図 遺構外遺物、縄文土器（1）



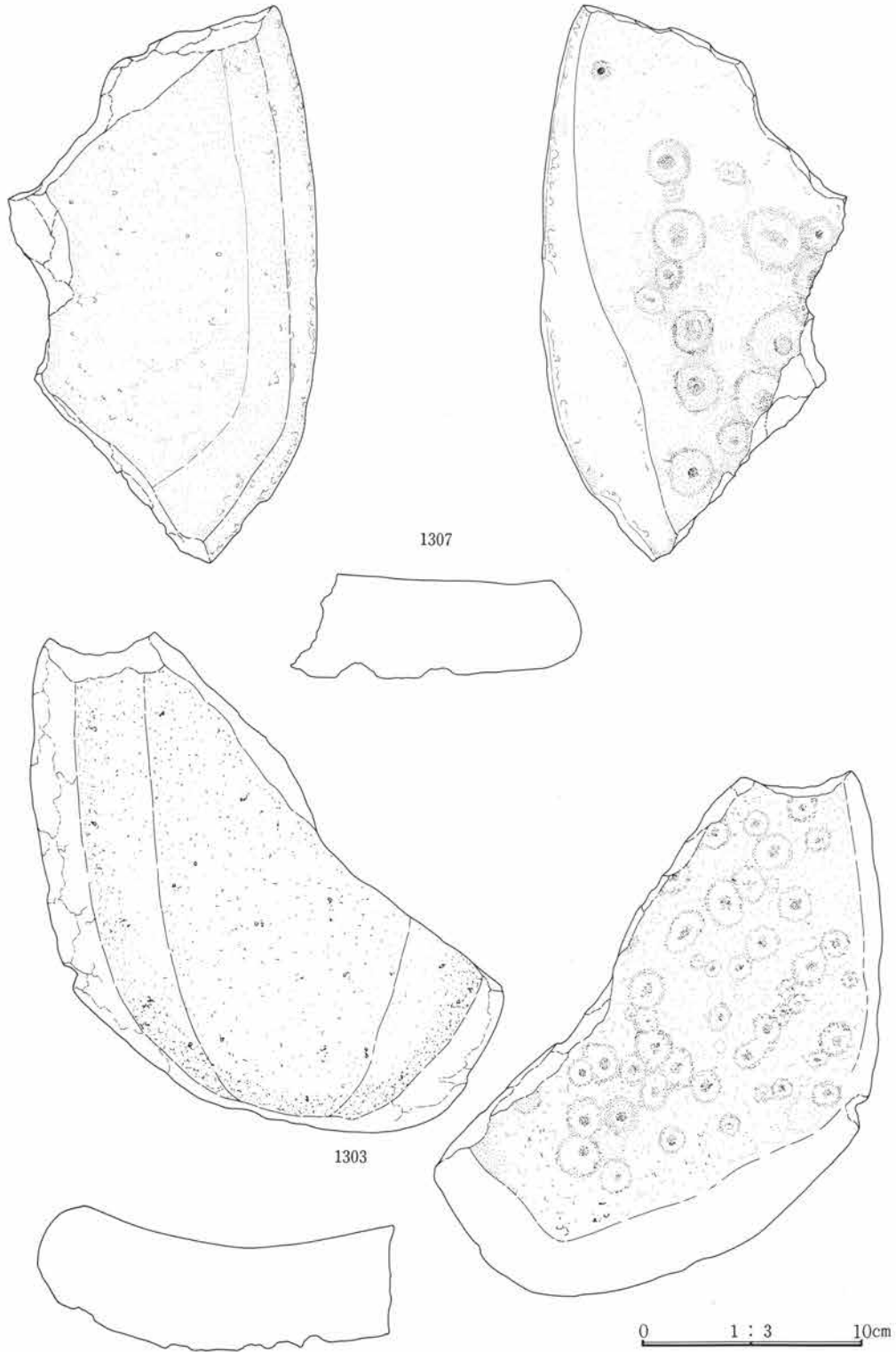
第33図 遺構外遺物、縄文土器（2）



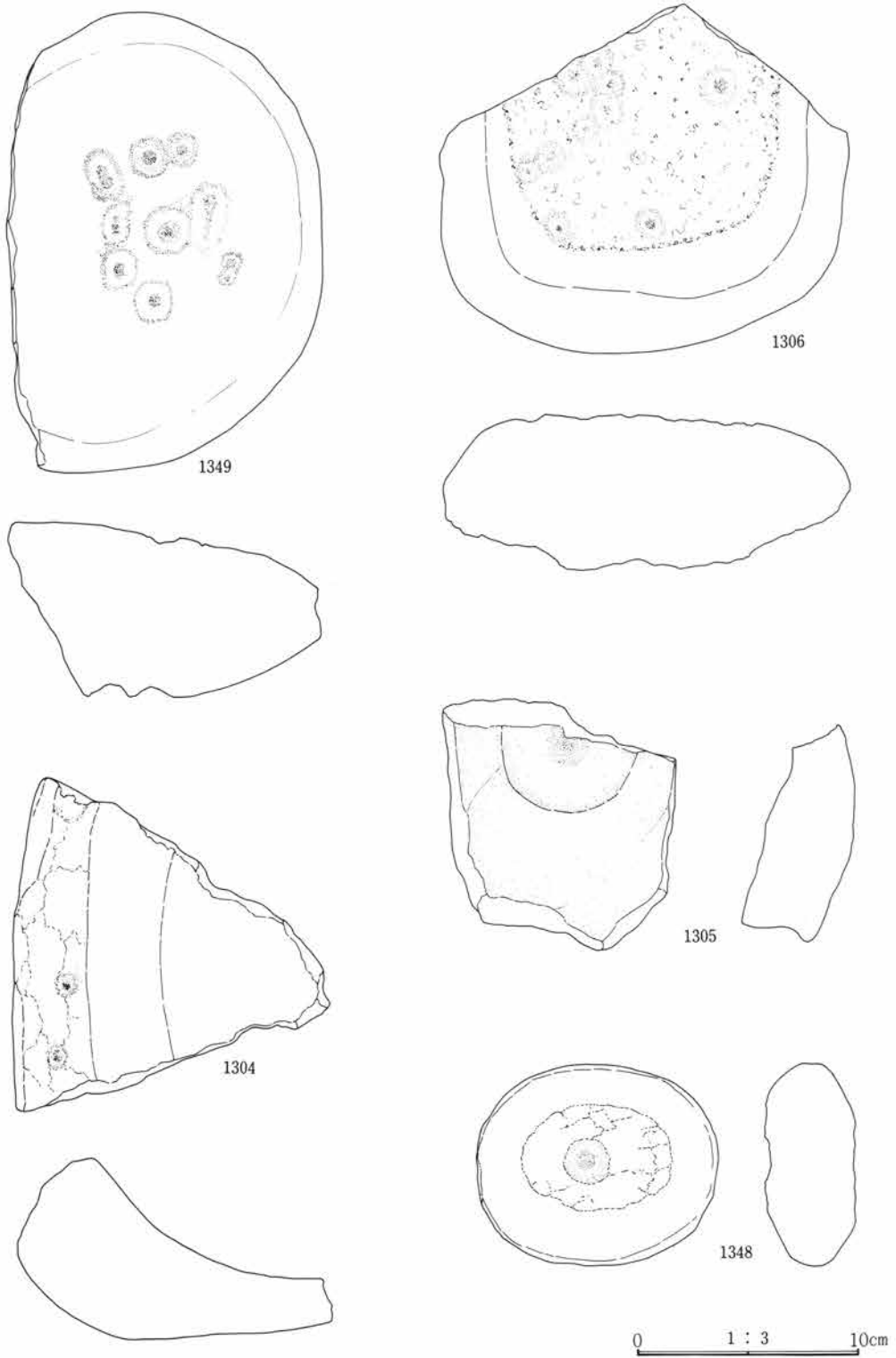
第34図 遺構外遺物、石器（1）



第35図 遺構外遺物、石器 (2)



第36図 遺構外遺物、石器 (3)



第37図 遺構外遺物、石器（4）

3 遺構外出土の土器（第32・33図、図版18）

縄文時代の土器は、前期から後期のものまでが出土しているが、中期、後期が主体量を占める。これらを大別すると第1群から第4群に分類される。

第1群土器 前期後半諸磯式土器である。地文にR L縄文を施す浮線文土器で諸磯b式である。1273、1点だが、同C式、黒浜式土器も数点ある。

第2群土器 勝坂式を一括した。1274は半截竹管により平行沈線文を施文し勝坂III式である。遺構としては92号、114号土壇等がある。

第3群土器 中期後半の加曾利E式及びそれに併行する土器群を一括する。1316、1320、1321は隆帯で渦巻文、懸垂文を表出する胴部片で地文にL R縄文を施文する。1276～1279、1322は沈線文による懸垂文間を磨消縄文とする胴部片で、1276は区画間に蕨手状文を施し、1276、1277、1279はR L縄文、1278、1322はL R縄文を施文。1281～1283、1323は櫛歯状工具による沈線文を縦位、斜位に施す胴部で、1281は懸垂文により沈線文と縄文とを区画し、地文にR L縄文を施す。1317～1319は口縁下に微隆帯を施し、区画する口縁部片で、1317、1318は区画内が無文、1319はL R縄文を施文する。1280は微隆帯を施す胴部片である。1284～1287は棒状工具による沈線文を施す一群で、1285は口縁部片で全面に、1284、1286、1287は沈線文による懸垂文を施し、区画間に刺突を施す。1284は綾杉文がある。以上、1276～1279、1316、1320～1322は加曾利E III式、他は加曾利E IV式に比定され、1284～1287は曾利系に比定される。

第4群土器 後期前半の土器を一括した。以下、2類に分ける。

1類 称名寺式を一括する。1352、1369、1370は沈線間を縄文で充填する口縁部片である。1352は口唇部直下に竹管により押圧を廻らし、以下充填縄文地に蛇行懸垂文を施す。1369、1379は口唇に稜を持ち、やや内湾する。口縁には無文帯を持ち、以下沈線間を縄文で充填する。1352、1370は地文にL R縄文、1369はR L縄文を施す。1350、1351、1353、1371、1372は沈線間を刺突で充填する土器群である。J字状文と矢印状文で文様を構成し、区画間に刺突文を施文。1350、1351、1353は口縁部片である。1288は沈線のみで文様構成する口縁部片である。以上、1352、1369、1370は称名寺I式、他は称名寺II式に比定される。

2類 堀之内式土器を一括する。1354は頸部がくの字状に折れ曲がり、胴部が強く張り出す深鉢形土器である。頸部には橋状把手が付けられ、把手の上下端に指先による刺突文を施し、その間を凹線でつないでいる。1373は口縁部に無文帯を持ち、口唇部に文様を構成する口縁部片である。波状口縁で口唇部に刺突と沈線により渦巻文を施し、以下、斜位に沈線を施文する。1289は波状口縁で波頂部に円孔を持ち、周囲に刺突をする。1290、1291は胴部片で沈線により三角形の区画文を構成し、沈線間を縄文で充填する。1290は隆帯に圧痕を持ち、曲線的であるのに対して、1291は直線的な文様を描いている。地文にはともにR L縄文を施文している。以上、1354、1378、1289は堀之内I式、1290、1291は堀之内II式に比定される。

4 遺構外出土の石器 (第34～37図、第2表、図版18)

石器は、遺構が確認されている7区を中心として多数出土している。器種としては、打製、磨製の石斧、石棒、凹石、磨石、石皿、多孔石、石鏃、搔器に及び、剥片類は少ない。

石斧 短冊型、撥型、分銅型があり、部厚い剥片や棒状の円礫をそのまま素材としたものが多く、粗い調整剝離し、表裏やその一部に磨耗痕を持つものが目立つ。

石棒 緑色岩類を素材とし、遺構出土品と比較すると扁平で円錐形の頭部に特徴がある。

凹石、磨石、多孔石、石皿 輝石安山岩、多孔質安山岩を素材とし、転用品、破損品の多いのが特徴である。石鏃 黒耀石、チャート質のものがある。

第2表 遺構外出土石器一覧表

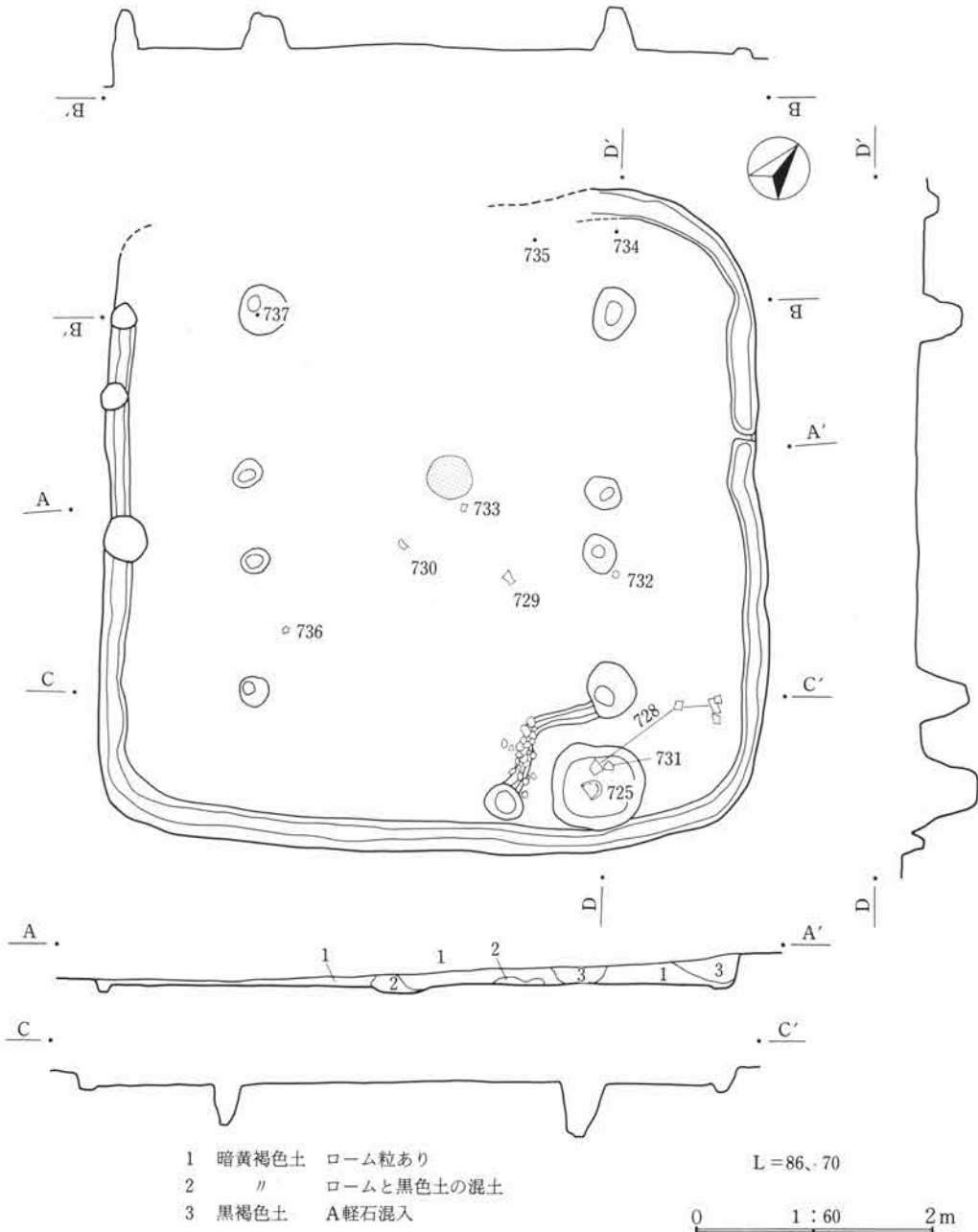
(第34～37図、図版 18)

番号	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	備考
1335	7区3墳南堀フク	打製石斧	14.1	5.6	3.2	290	珩質泥岩	刃部に磨耗痕を有す
1340	7区6井戸フク	〃	14.9	5.3	2.4	230	チャート質準片岩	
1292	7区表土-20	〃	12.9	5.0	2.6	260	安山岩	磨耗痕有り
1341	7 A22グリット	〃	13.0	5.8	2.4	215	輝石安山岩	〃
1338	7区3墳北堀フク	〃	15.2	4.4	2.1	145	〃	〃
1336	7区3墳フク	〃	14.1	3.7	1.5	105	珩質泥岩	
1342	7 x 26グリット	〃	13.2	6.5	2.2	150	泥岩	磨耗痕有り
1337	7区3墳南堀フク	〃	12.0	4.4	2.0	120	頁岩	
1295	7区表土-23	〃	12.9	4.5	1.5	110	輝緑岩	
1293	7区表土-21	〃	13.1	5.1	1.9	150	緑色片岩	
1339	7区3方周-36	〃	12.2	3.9	2.4	135	珩質泥岩	磨耗痕有り
1297	7区表土-25	〃	11.2	4.4	2.2	140	頁岩	〃
1296	7区表土-24	〃	12.3	4.7	2.3	180	緑色岩類	〃
1294	7区表土-22	〃	11.6	5.0	1.9	145	ホルンフェルス	
1334	7区22住-266	〃	11.1	5.6	1.4	95	珩質泥岩	磨耗痕有り
1298	7区表土-26	〃	9.8	5.6	2.0	150	輝緑岩	
1300	7区表土-28	〃	8.5	4.1	1.8	80	灰色安山岩	刃部欠損
1343	7 K14グリット	〃	8.6	4.4	2.6	130	泥岩	〃
1299	7区表土-27	〃	9.0	4.6	2.2	110	黒色頁岩	〃
1344	7区3墳東北	〃	10.2	9.8	3.8	315	珩質泥岩	磨耗痕と敲打痕を有す
1345	7区3墳東北	〃	11.0	6.6	1.6	110	頁岩	使用痕・柄着痕を有す
1346	7 C22グリット	〃	9.6	9.6	3.2	140	珩質泥岩	
1301	7区表土-29	搔器	5.6	5.3	0.5	—	黒色頁岩	
1302	7区表土-30	〃	4.4	6.1	1.8	—	〃	
1347	7区24住-4682	石棒	13.3	6.0	5.0	—	緑色岩類	欠損品
1308	7区表土-36	多孔石					輝石安山岩	
1307	7区表土-35	石皿					〃	欠損品
1303	7区表土-31	〃					〃	〃
1349	7区表土	多孔石	20.5	14.1	7.7		〃	〃
1306	7区表土-34	〃					〃	〃
1305	7区表土-33	凹石					〃	〃
1304	7区表土-32	石皿					〃	〃
1348	7区3墳	凹石	10.8	9.0	4.1		〃	〃

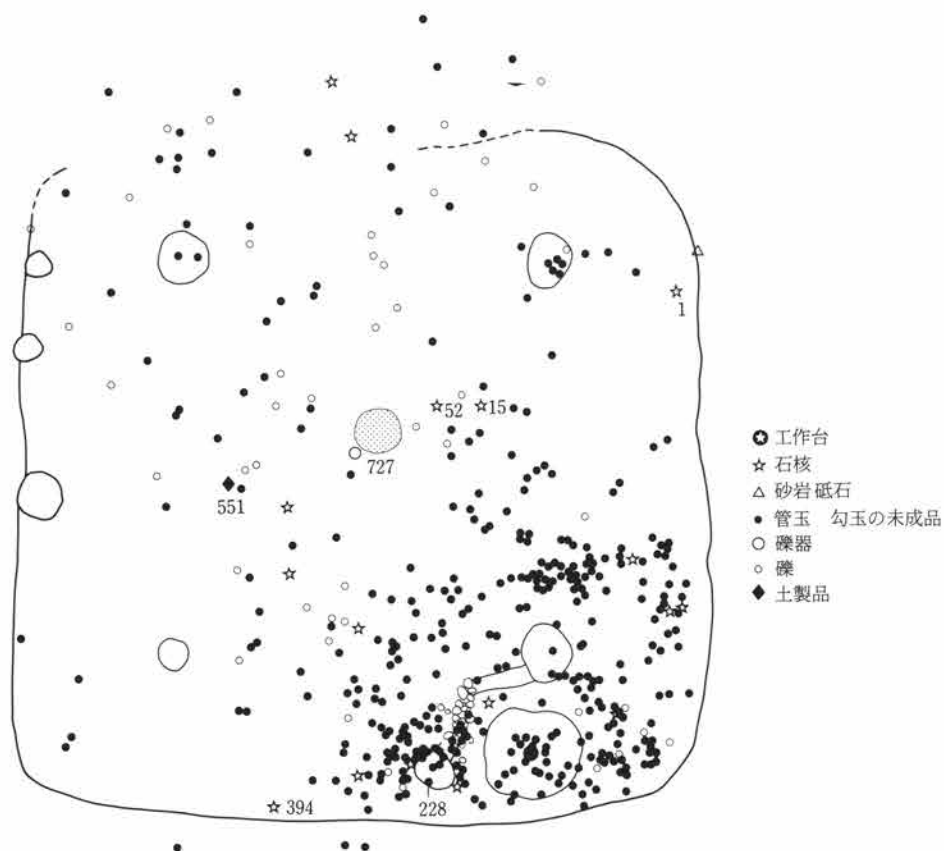
(2) 古墳時代

① 古墳時代前期

1 玉作工房跡



第38図 6区9号住居跡遺構図



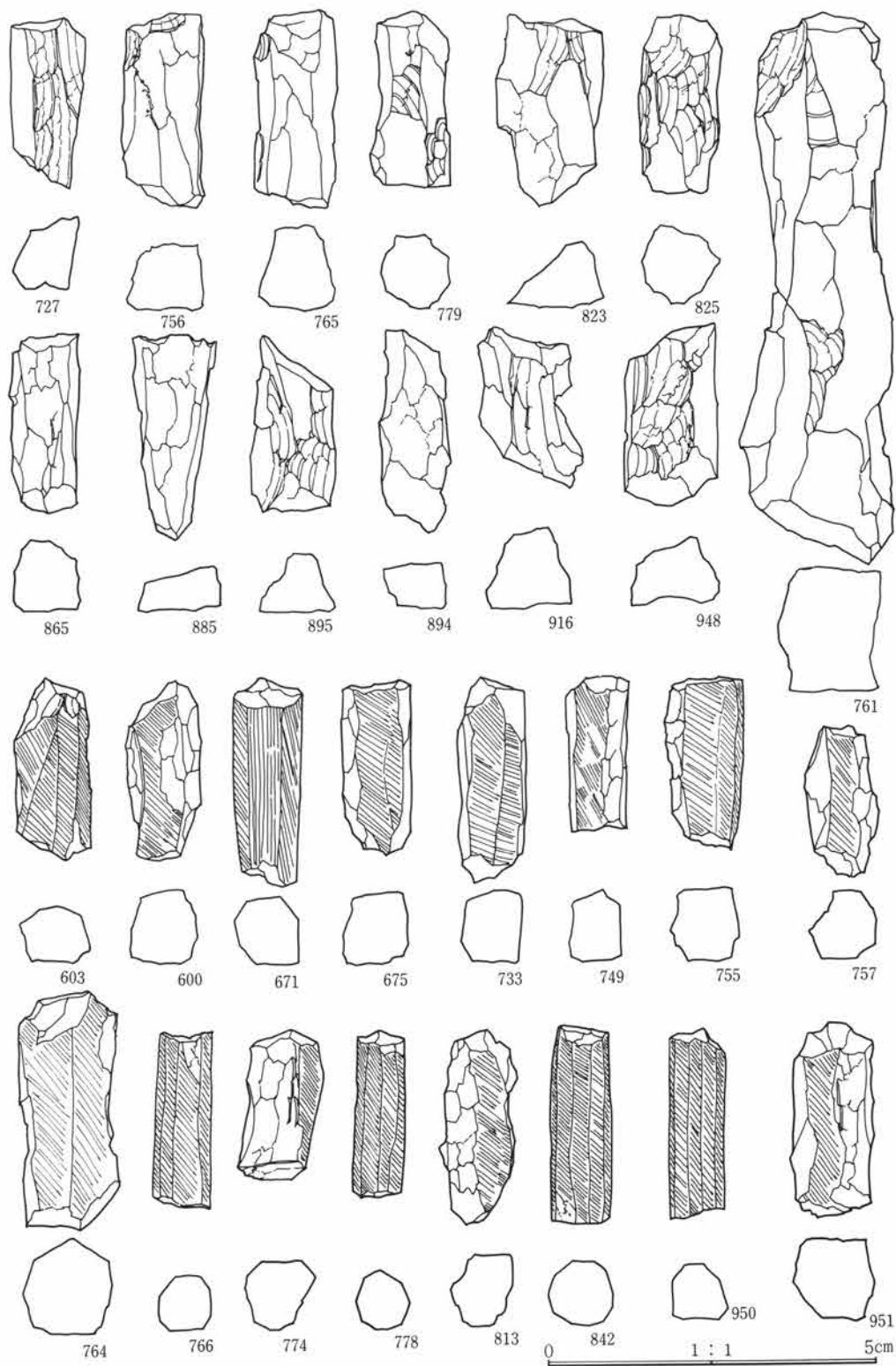
第39図 6区9号住居跡遺物分布図

6区9号住居跡（玉作工房跡）（第38～44図、第3表、図版19～21）

本工房跡は、7区の一軒とは南に約90m離れて確認され、崖線からも少し奥まった位置にある。規模は、東辺5.48m、南辺5.45mでほぼ方形を呈するが、北辺側は6区1号溝と重複するために不明である。方位は西辺でN-58°-Wを示す。壁は緩傾斜で高さ26cmである。床面は、地山のロームを少し掘り下げて暗褐色土を用いた貼床としている。壁際は少し軟弱である。柱穴は、主柱穴が4本、径20～40cm、床面からの深さ30cm前後、このほかに炉跡をはさんで東西軸上で補助柱穴が2対ある。炉跡は、中央部に円形の浅い掘り方を持った地床炉がある。焼け方は稀薄で、焼土、炭粒の量も少ない。周溝は、北辺を除いて確認されている。

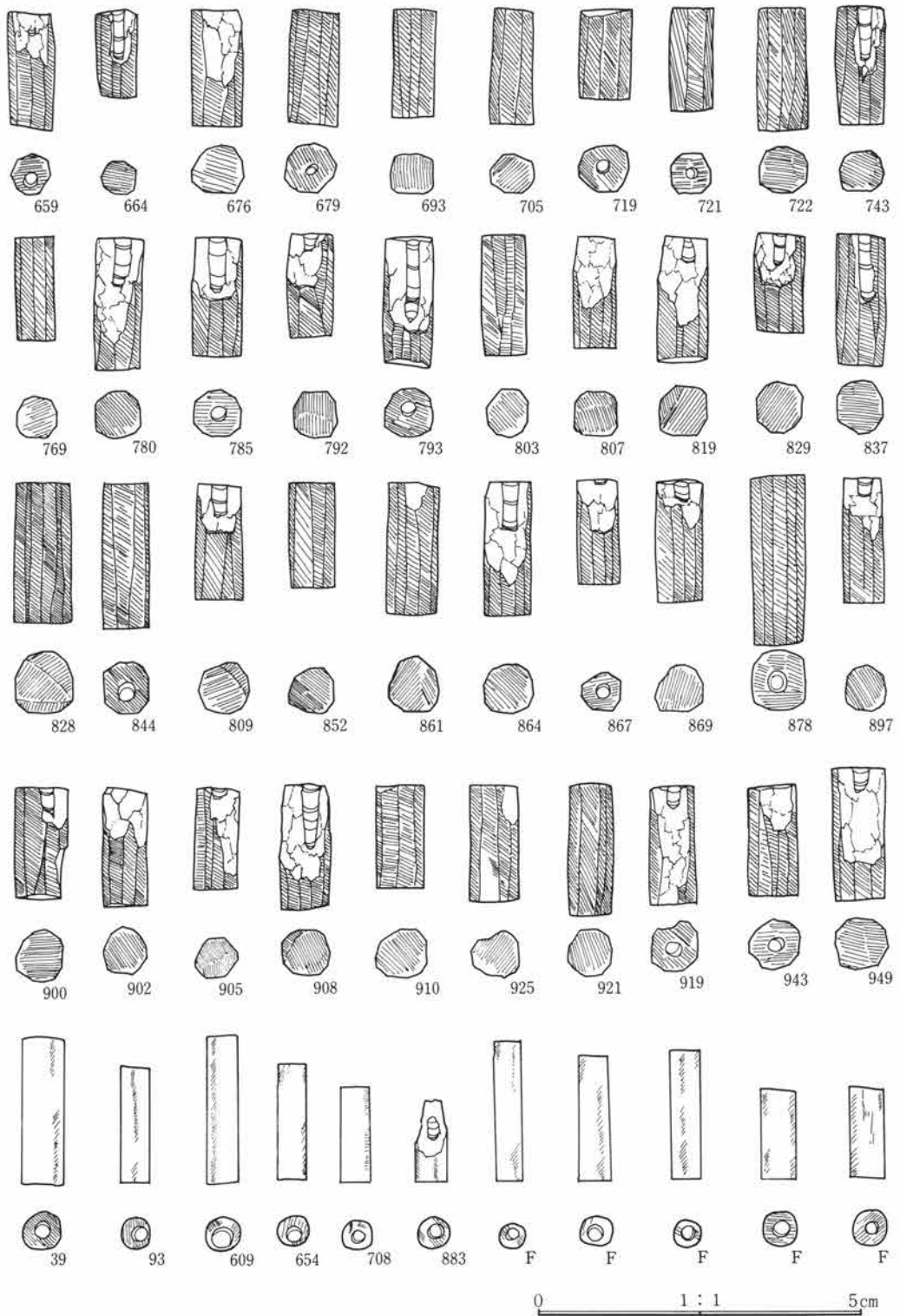
工作用施設は、東南隅を周溝で間仕切った中に、70×68cm、床面からの深さ57cmの工作用ピットがある。間仕切り溝には、径1～5cmの小砂利敷があり、半ば埋められた状態にある。工作用ピットは、底面近くに乳白色粘土が貼られた形跡があり、保水効果を目的としたものか。

遺物分布は、土器を含めて全体に見られるが、土器の個体数は少ない。工作用ピットを中心にした南辺側は特に多く、ピット内から工作台、台付甕が出土している。器種別には、管玉を主として勾玉、琴柱状、平玉等があげられ、各工程別の資料が揃っている。工程別の分布傾向はつかめないが、工作用ピットのある南辺側に主たる工作の場があったか。遺構の時期としては、伴出

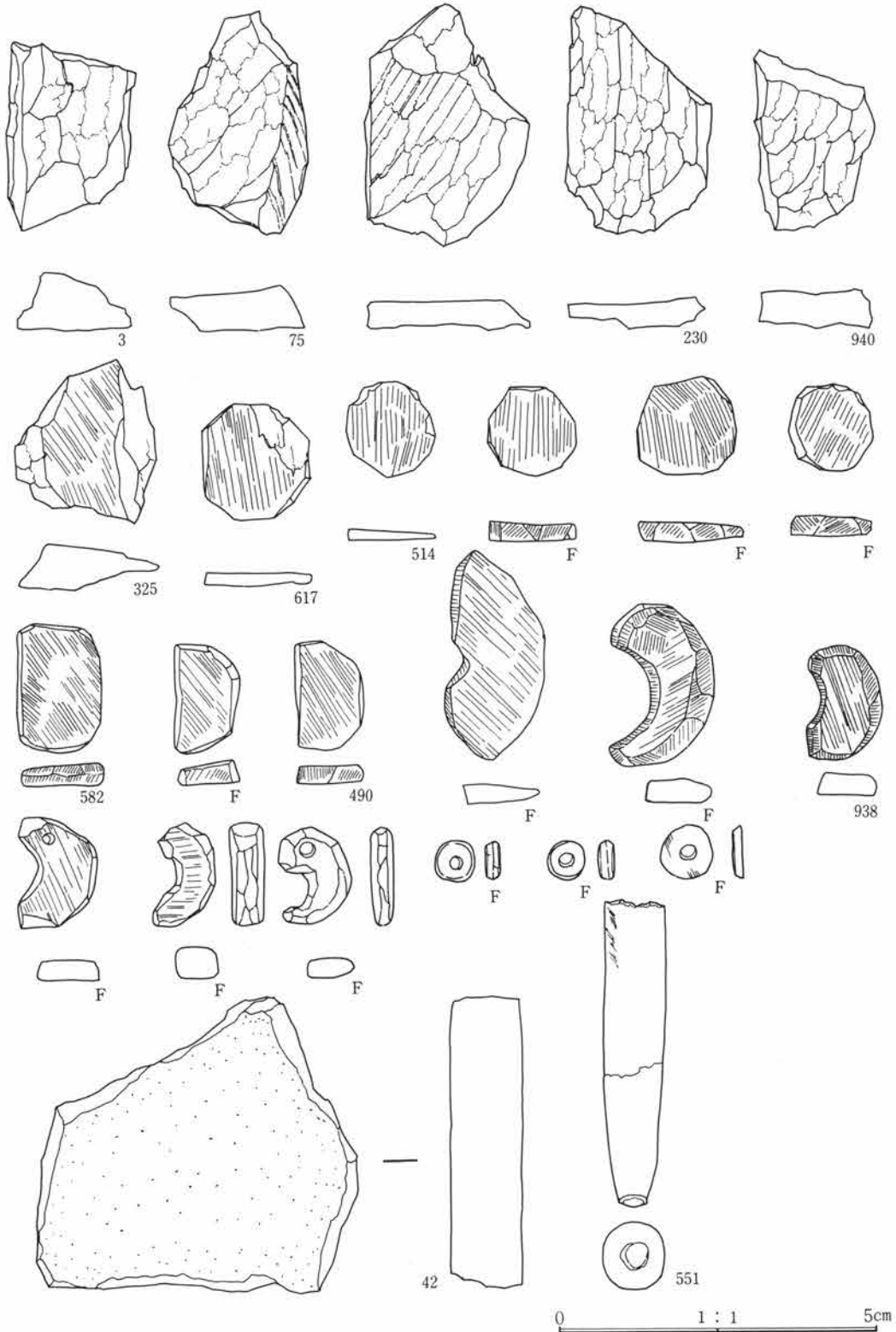


第40図 6区9号住居跡遺物図（1）

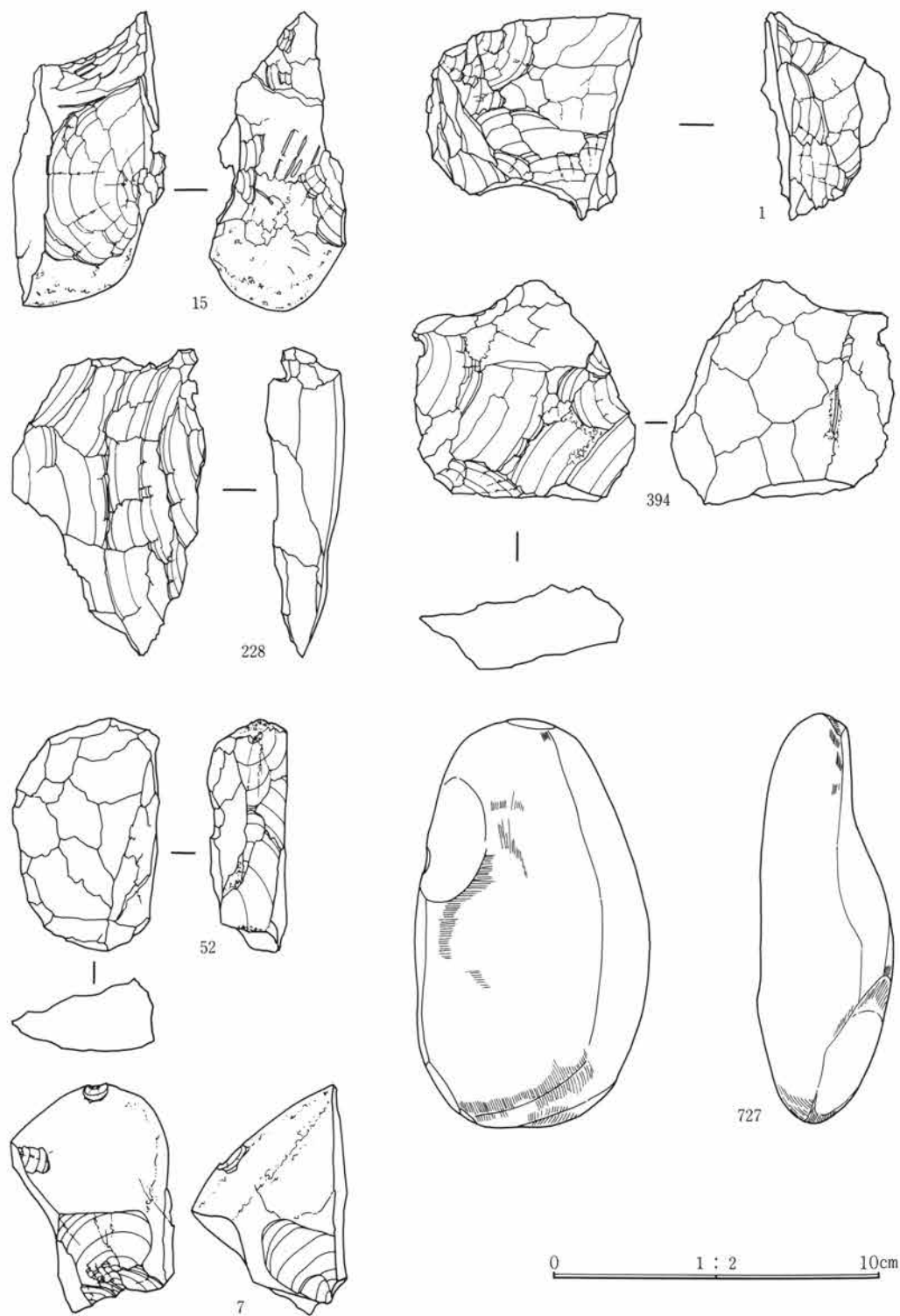
第6章 検出された遺構と遺物



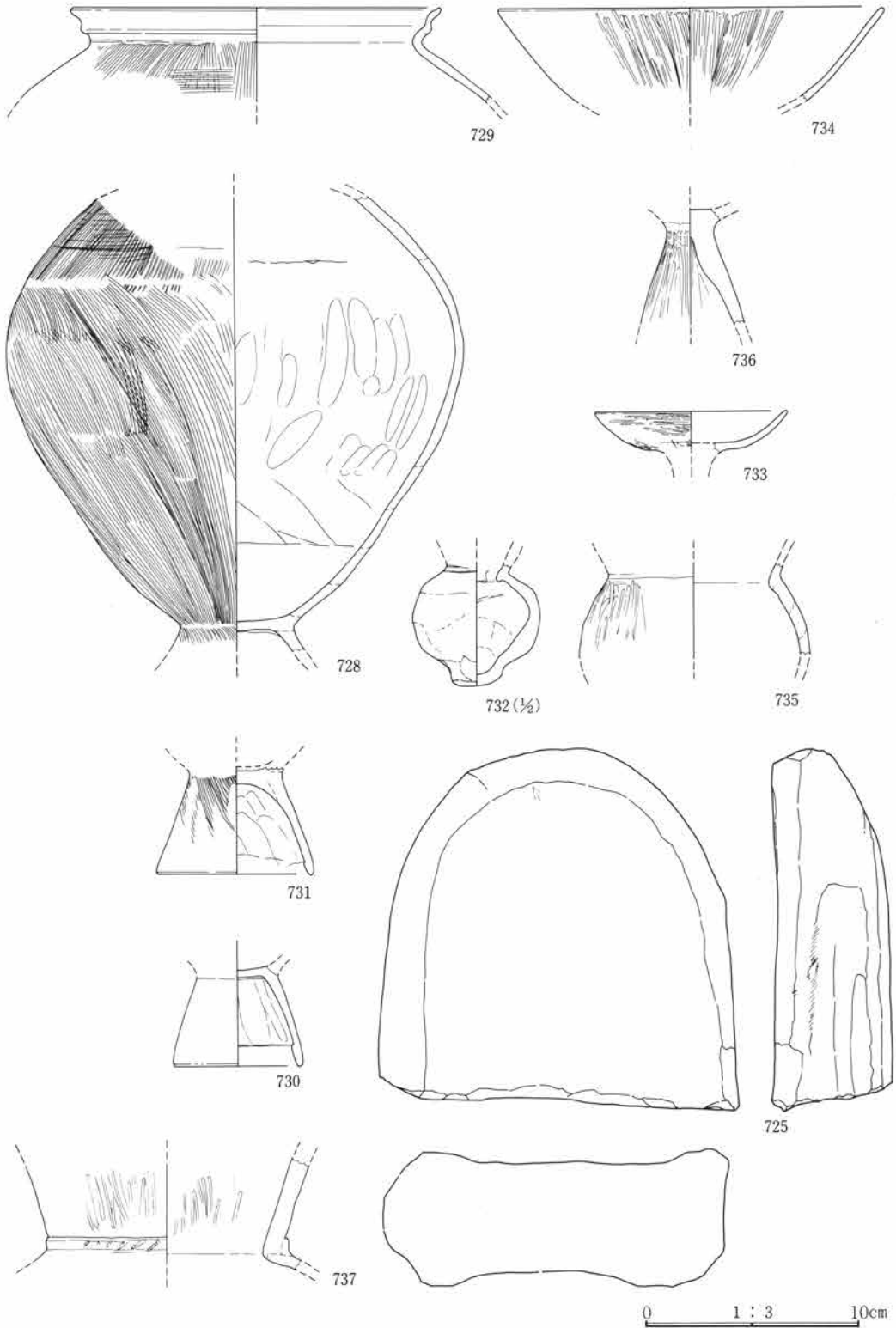
第41図 6区9号住居跡遺物図(2)



第42図 6区9号住居跡遺物図(3)



第43図 6区9号住居跡遺物図(4)



第44図 6区9号住居跡遺物図(5)

第3表 6区9号住居跡出土遺物観察表

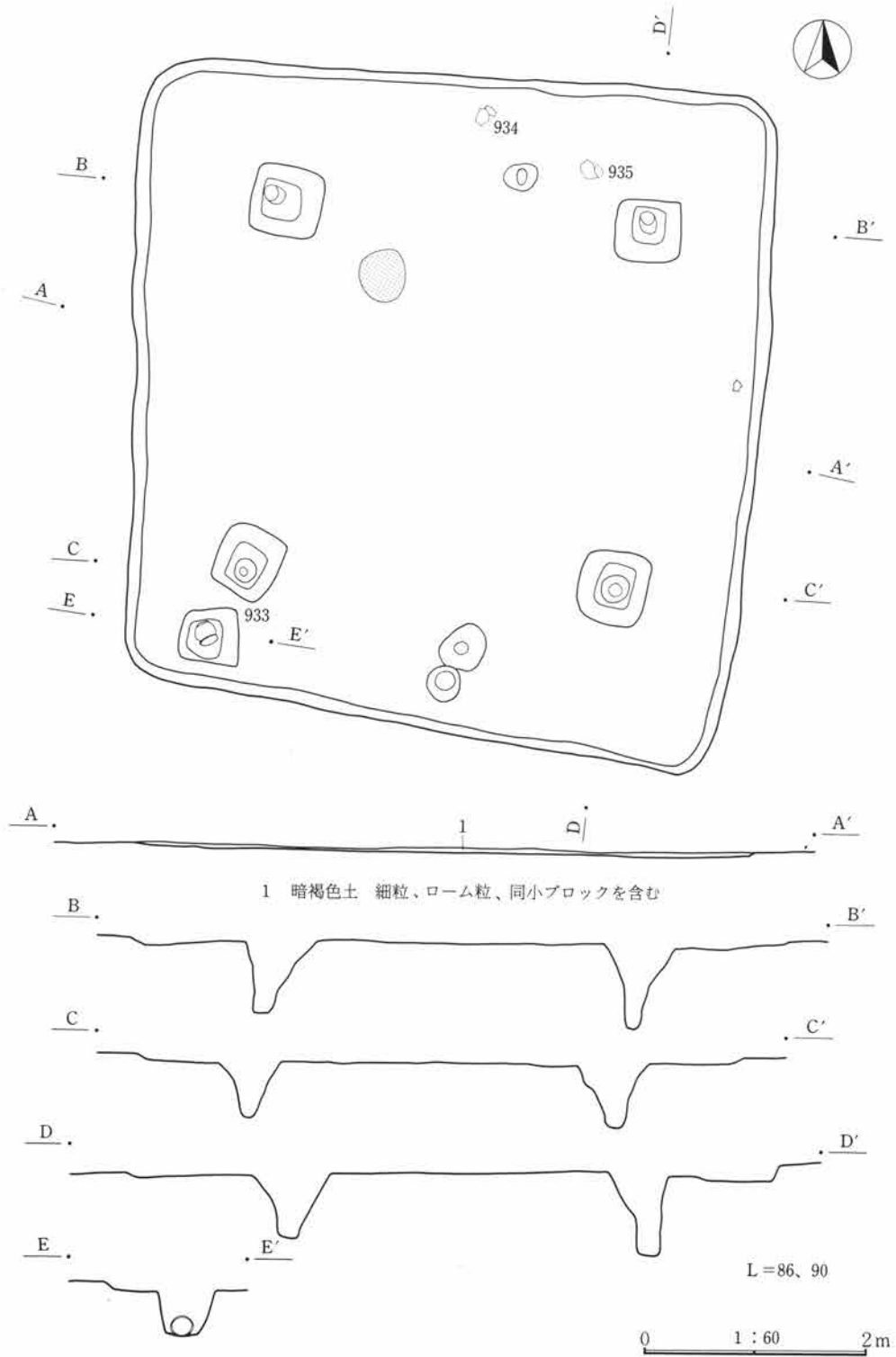
(第44図、図版 20・21)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
728	甕 土師器	胴-[21.4]、底- 5.3、高-(21.0) ○ $\frac{1}{3}$	砂粒、黒色輝石を含む。 酸化、軟質。淡黄橙色	台付甕。体上部で最大径をもつ。上 部タテ、ヨコハケ目、中～下部ナナ メ、タテハケ目、内面、ナナメヘラ ナデ、タテナデ。器肉、薄手	工作用ピットよ り出土 内外、スス、炭 化物付着
729	甕 土師器	口-[17.4]、高- (4.2) ○小片	砂粒を多く含む。酸化、 軟質。浅黄橙色	S字状口縁の甕。口縁端部内側に沈 線めぐる。体上部、タテ、ヨコハケ 目、内面、指ナデ痕あり。器肉、薄手	
730	甕 土師器	底-3.7、脚裾-6. 0、高-(4.6) ○ 脚台のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい黄橙色	小型台付甕、脚部。ハの字にひらき、 端部、内側に、折りかえしあり。外 面、ナデ調整、内面、ユビナデ	
731	甕 土師器	底-4.4、脚裾-7. 3、高-(4.9) ○ 脚台のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい黄橙色	台付甕脚部、小型か。ハの字にひら き、端部、内側に折りかえしあり。 外面、ナナメハケ目後、タテナデ、 内面、ユビナデ痕あり	
732	手捏 土師器	胴-[4.0]、高- (3.8) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 浅黄橙色	手捏ね、壺形のミニチュア、体部の 張りを強張した作り	
733	器台 土師器	口-[9.0]、高- (1.9) ○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい褐色	内湾してひろがる坏部。内外、ヘラ 磨きを施す	
734	高坏 土師器	口-[18.0]、高- (4.3) ○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい橙色	大きく鉢形にひらく高坏、坏部。器 肉、薄手、均質。内外面、タテ、ヘ ラ磨き	
735	埴 土師器	胴-[10.7]、高- (4.3) ○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい橙色	体部、丸味をもち、頸部、くの字に 外反する。外面、タテヘラ磨き、内 面、ナデ	
736	高杯 土師器	底-2.3、高-(5. 3) ○脚部のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい黄橙色	高坏、脚部。外面、タテヘラ磨き、 内面、しぼりじわあり	
737	壺 土師器	頸-[11.3]、高- (5.0) ○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい赤褐色	頸部に、凸帯めぐり、クシ状工具に よる刺突文あり。タテヘラ磨きあり	

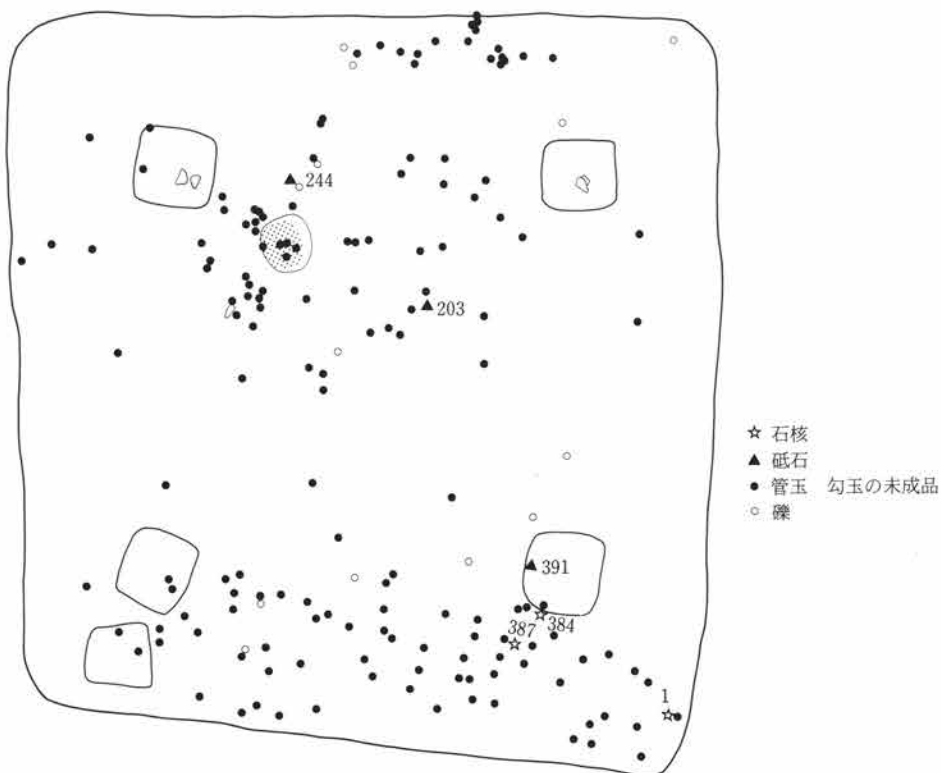
土器の特徴から古墳時代前期とする。

玉類未成品類は11559点ある。管玉工程品1423点、勾玉工程品34点が主な内訳である。管玉は第40、41図に示したが、長さ1.60cm前後と2cm前後に量比の中心があり、成品としての二形態か。勾玉は第42図で、長さ1.60cm前後、C字形が強く、断面やや扁平なことを特徴とする。

第44図725は変質流紋岩製の工作台である。15.7×15.8cm、厚さ5cmの石皿形、重量感がある。表裏二面に大小無数の敲打痕、両側面に金属器用らしい砥面まで持つ万能工作台か。敲打は、輝石安山岩の棒状礫を使用し、長さを約15cm前後に割るなどして調整している。551は土錘状の破損品である。長さ4.70cmで一方の端部に径3mmの小孔があり、土製コマに相当するか。(女屋)



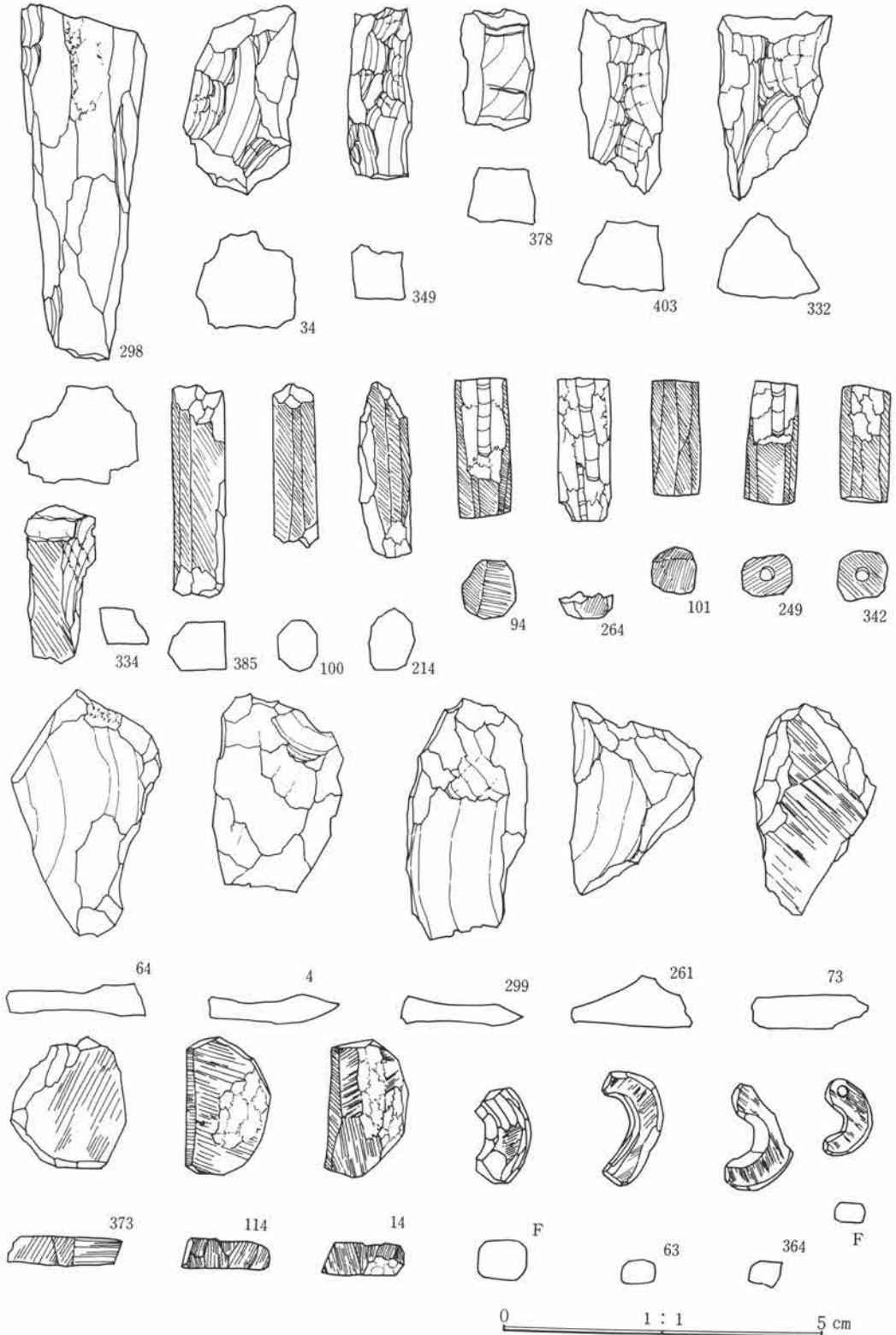
第45図 7区22号住居跡遺構図



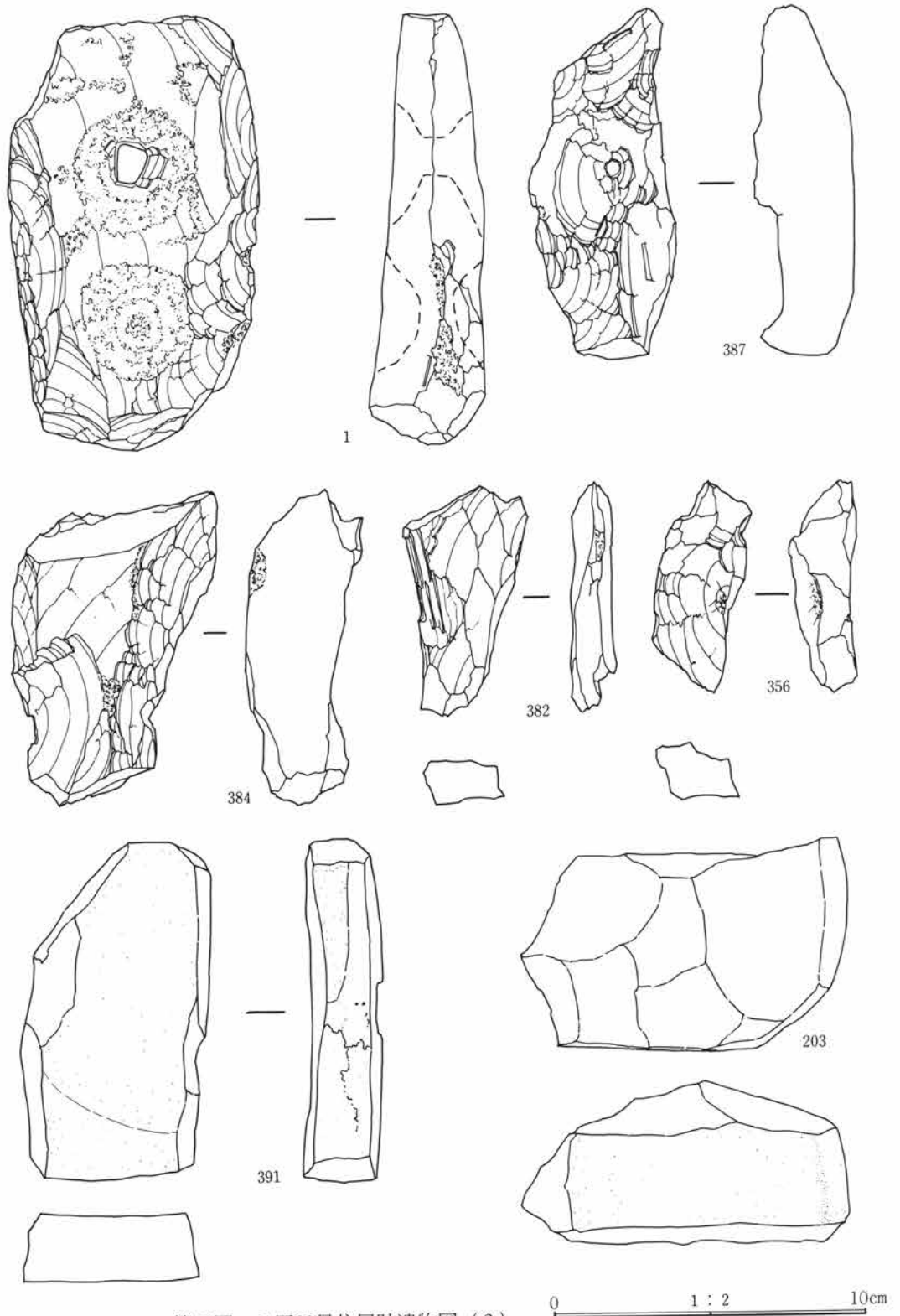
第46図 7区22号住居跡遺物分布図

7区22号住居跡（玉作工房跡）（第45～49図、第4表、図版21～23）

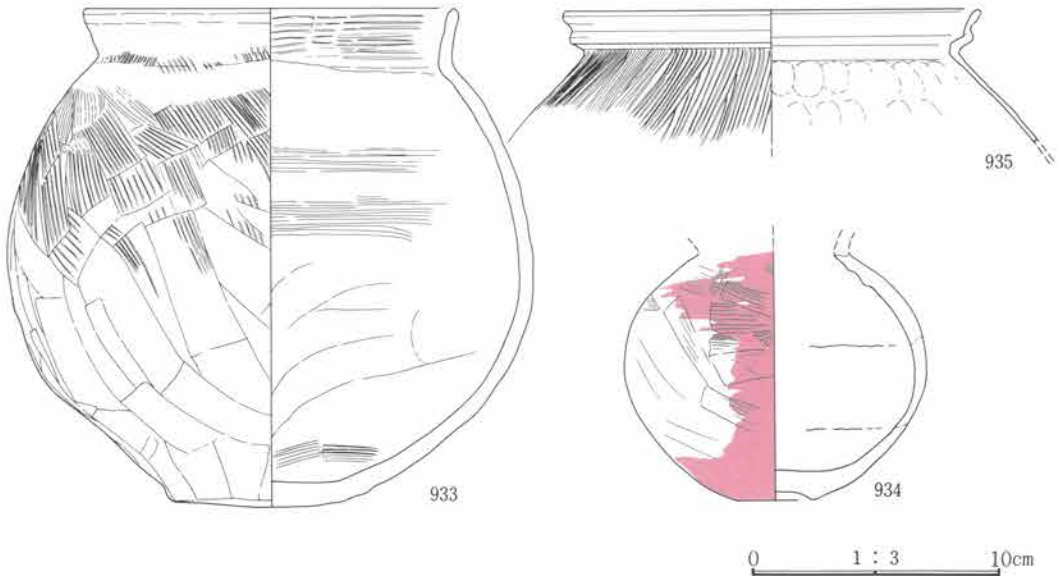
本工房跡は、7区の崖線際にまとまる一群として確認された。23号とは隣接し、時期差が考えられる。規模は、東辺6.15m、西辺5.60m、南辺5.40m、北辺5.70mを測り、台形をなす。方位は西辺でN-3°-Eである。壁は、確認時床面が露呈した状態に近く、数cmが残存したにすぎない。床面は、暗褐色土を踏み固めており、平坦でやや堅緻である。柱穴は、主柱穴が4本ある。確認面では方形をなし、径15cm前後の柱痕を持つ。このほかに南北軸中央の位置で対をなす補助柱穴がある。炉跡は、中央西北寄りで浅い掘り方を持つ地床炉が確認されたが、焼け方は稀薄である。周溝は、掘り方でも確認されなかった。工作用施設は、柱穴以外のピットが3カ所あるが、西南隅のものは方約50cmで中に広口甕1個体が置かれた状態にあり、貯蔵穴様のものか。これを除く、西南隅のピットについては、遺物分布と合せると稀薄であるが、位置の点からしても工作用ピットの可能性が高い。不整形、楕円形状を持ち、東南隅のものには遺物が多い。遺物分布は、確認の状況もあり、土器を合せても少ない。玉未成品には管玉、勾玉、琴柱状があるが、南辺側と北辺側とに二分される特徴を持つ。南辺側の遺物には、工作台様のもの、石核が含まれるが、敲石を主とする礫器の存在が不明瞭である。遺構の時期としては、伴出土器の特徴から古墳時代前期とする。



第47図 7区22号住居跡遺物図(1)



第48図 7区22号住居跡遺物図(2)



第49図 7区22号住居跡出土物図(3)

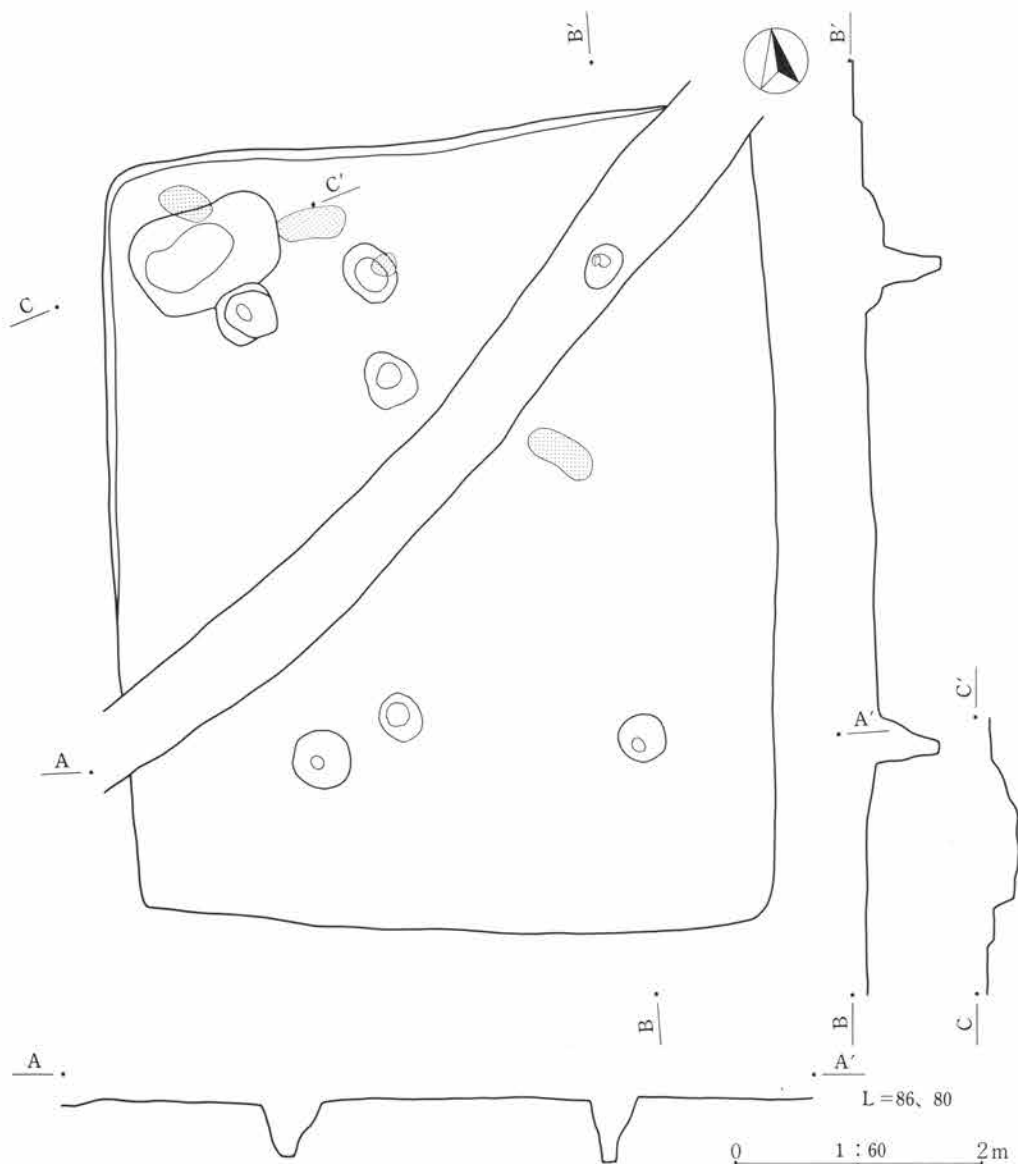
第4表 7区22号住居跡出土遺物観察表

(第49図、図版 21・23)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
933	壺 土師器	口-14.9、胴-21.1、底-7.8、高-19.8○略完存	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。橙色	体部下位で張りをもつ、下ぶくれの丸胴甕。口縁部、ゆるいくの字状、端部丸味あり。外面、タテ、ナナメハケ目、ナデ調整、内面、粘土積痕残り、ヨコハケ、ヘラナデ調整	貯蔵穴内出土
934	柑 土師器	底-3.0、胴-12.2、高-(9.8)○ $\frac{2}{3}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	肩部で丸く張りをもち、底部、小さく凹状。体部、ハケナデ、ナデ調整。内面、ハケ、ヘラナデ	赤色塗彩あり
935	壺 土師器	口-[16.6]、高-(5.3)○小片	砂粒、多く含む。酸化、軟質。浅黄~灰色	S字状口縁の壺。外面、タテハケ目、内面、ナデ調整。器肉、薄手	

玉類未成品類は550点がある。床面が露呈に近い状態のため、分割～研磨、穿孔工程品の比率が高い。管玉195点、勾玉工程品6点が主な内訳である。第47図は管玉と勾玉を示したが、管玉は長さ1.50～2.20cm、勾玉は1.20～2.05cmと幅があり、勾玉はC字形が強く、断面のやや扁平化したものである。第48図は石核と砥石である。356、384等は石核だが、長さ6～11cm位で、剥片利用の不定形のもの、円盤形とに分けられ、刀幅約2cmの刀痕と打痕が多く残る。管玉用と思われる調整剥片が勾玉、琴柱状品へと進むか。砥石は、蒲鉾型の砂岩製と角砥の流紋岩製がある。第48図1は、13.6×8cm、厚さ2.70cmの石斧様の形状で、表裏二方向からの敲打による凹部各二ヶ所があり、一方は貫通している。敲打痕、刀痕の形状から分割、形割工程に使用された工作台に代わるものか。

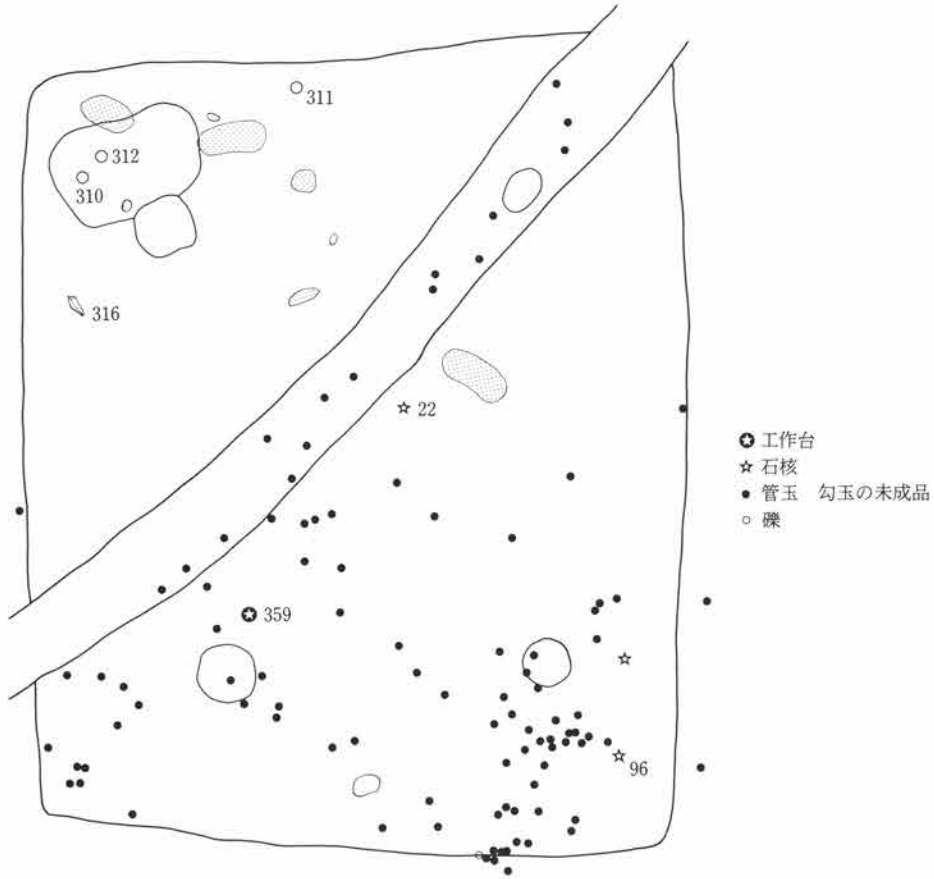
(女屋)



第50図 7区23号住居跡遺構図

7区23号住居跡（玉作工房跡）（第50～53図、図版24）

本工房跡は、22号住居跡と同様に床面が露呈に近い状態で確認された。更に6号溝が東北から西南隅にかけて斜めに大きく重複している。規模は、東辺6.65m、西辺6.10m、南、北辺5.70mを測り、平面形は長方形に近い台形状である。方位は西辺で $N-9^{\circ}-E$ を示し、各辺はわずかな弧をえがく。床面は、暗褐色土を踏み固めて平坦にしているが、壁際はやや軟弱である。柱穴は主柱穴4本と南北の長軸上で対の位置を取る補助柱穴2本がある。主柱穴は径30～50cm、床面からの深さ50cm前後で径10～15cm位の柱痕がある。補助柱穴は、主柱穴と同様な径を持つが少し浅いのが特徴である。周溝は堀方に於いても確認されなかった。炉跡は、中央部北寄り縁石を持つ



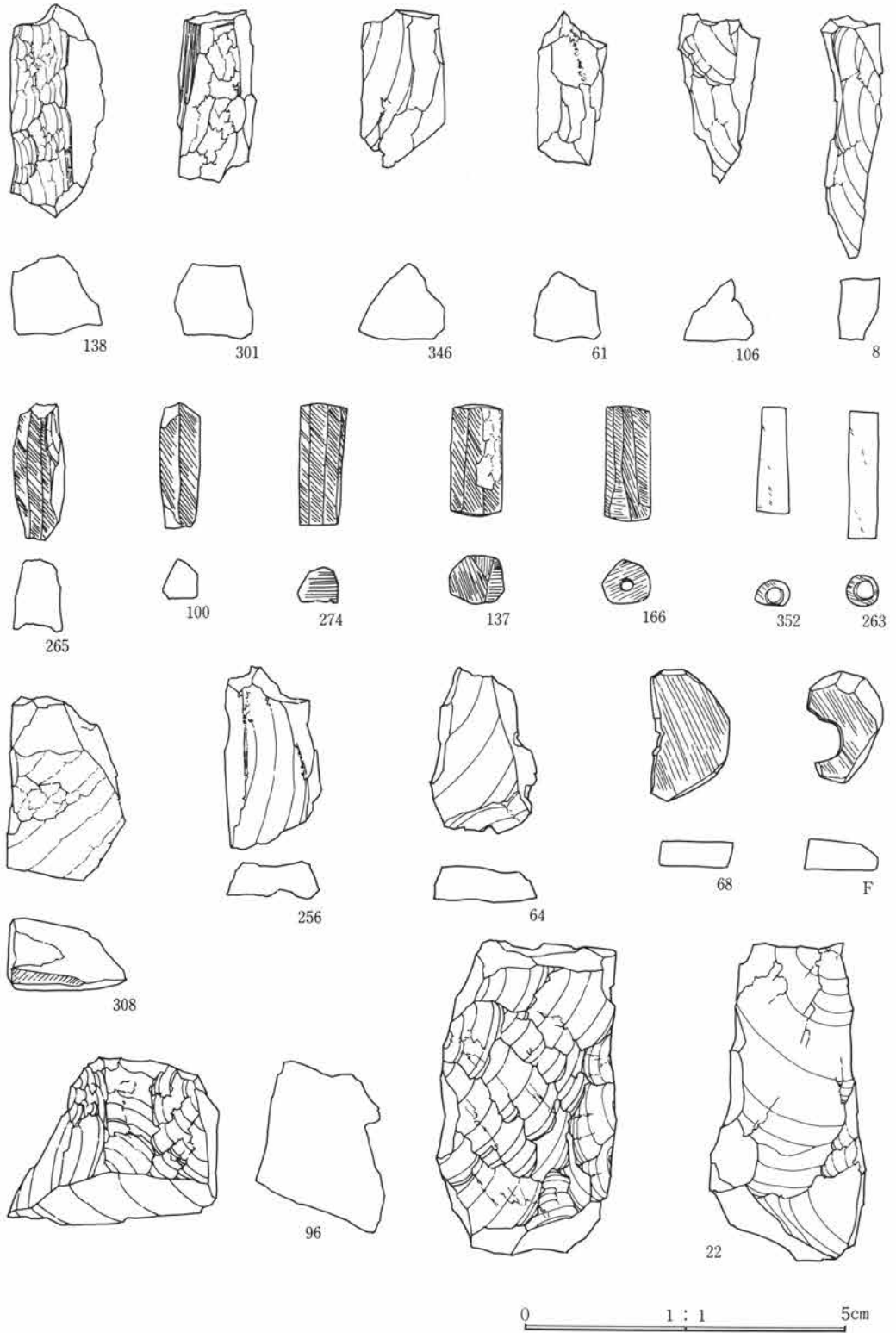
第51図 7区23号住居跡遺物分布図

た地床炉が確認されている。このほかに西北隅寄りにかけて床面より1～2cm浮いた状態での焼土分布が4ヶ所ある。炭化物等を混じえるものではなく、単に焼けた状態を示し、特定の遺物分布とも結びつかない。

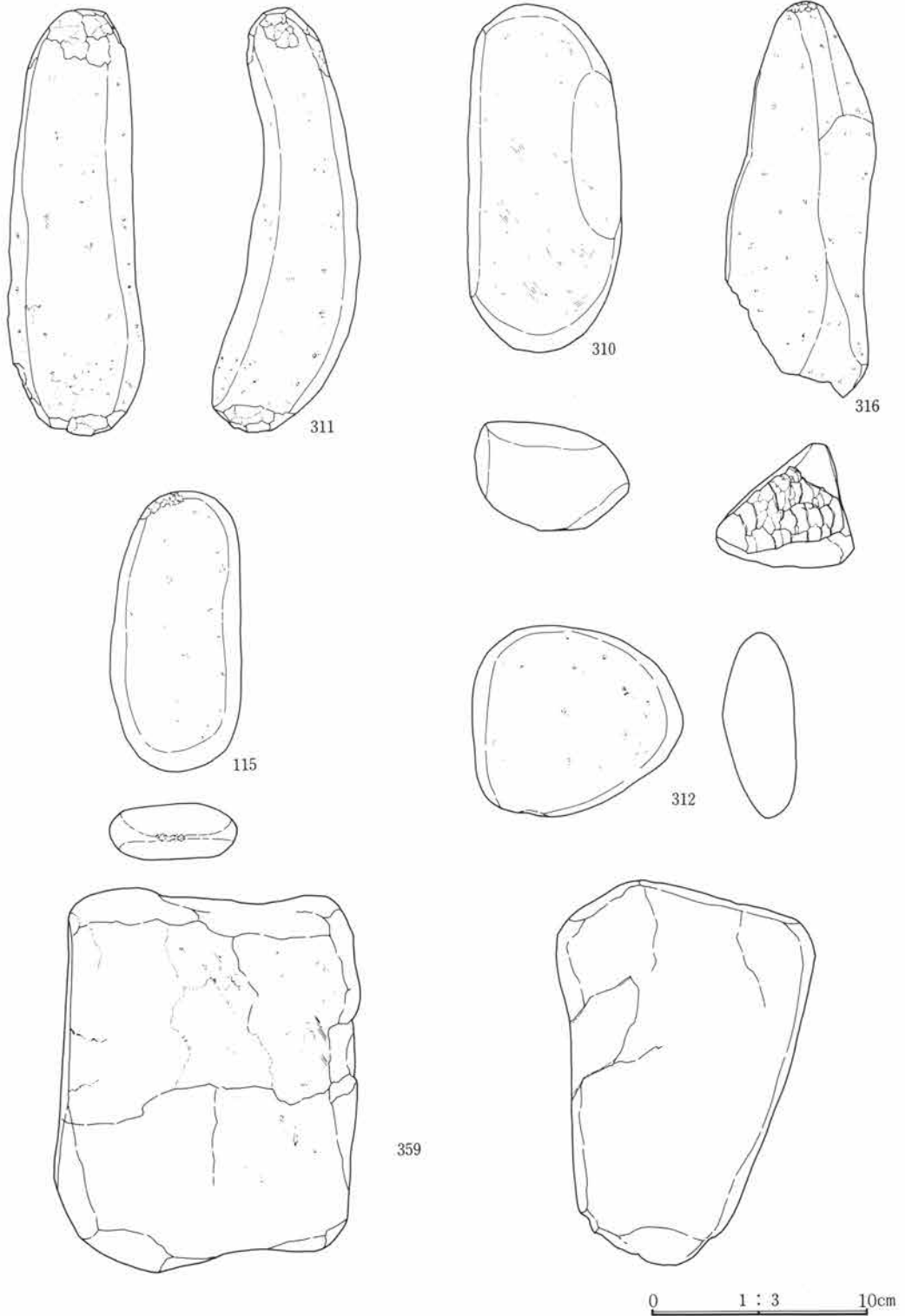
工作用施設は、西北と西南の各隅とで隅丸方形の土壇が確認されているが、西北隅のものが工作用のピットと思われる。規模は1.22×0.79mで断面舟底状を示す。周囲に焼土の分布と敲石を始めとする棒状の礫が見られたが、玉未成品は殆ど見られなかった。

全体の遺物分布は、上面を削平されているため傾向を知る程度だが、全体的に南半分が多く、管玉に見る形割工程以上の分布でも同様のことがいえる。この南半分の中には、輝石安山岩の工作台や管玉用と思われる石核数点が含まれている。器種としては、管玉、勾玉がある。道具類としては工作台を始めとして敲石、磨石がある。土器はいずれも破片状態で、復原図示できるものはなかった。遺構の時期は、伴出土器の特徴から古墳時代前期とする。 (女屋)

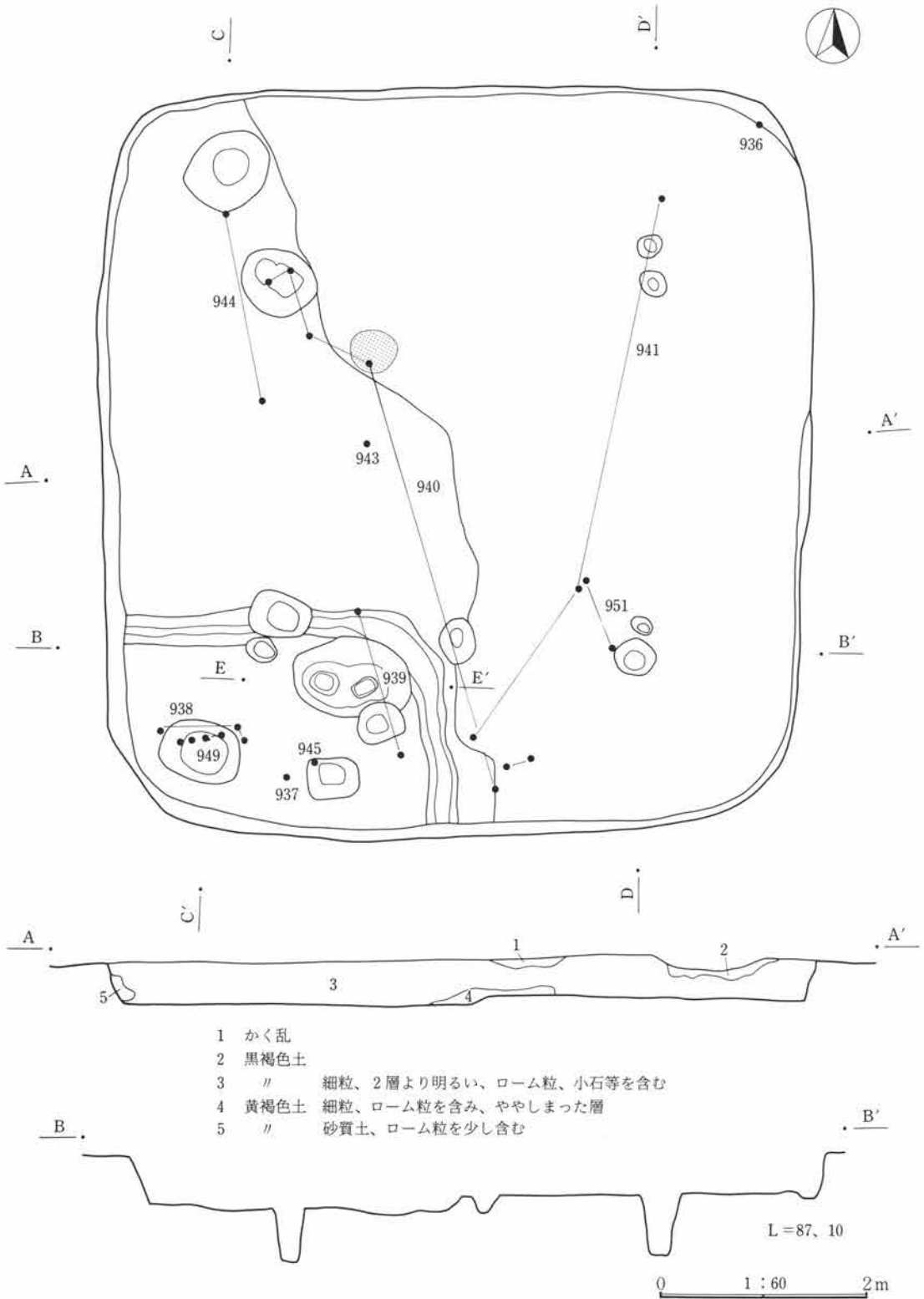
第6章 検出された遺構と遺物



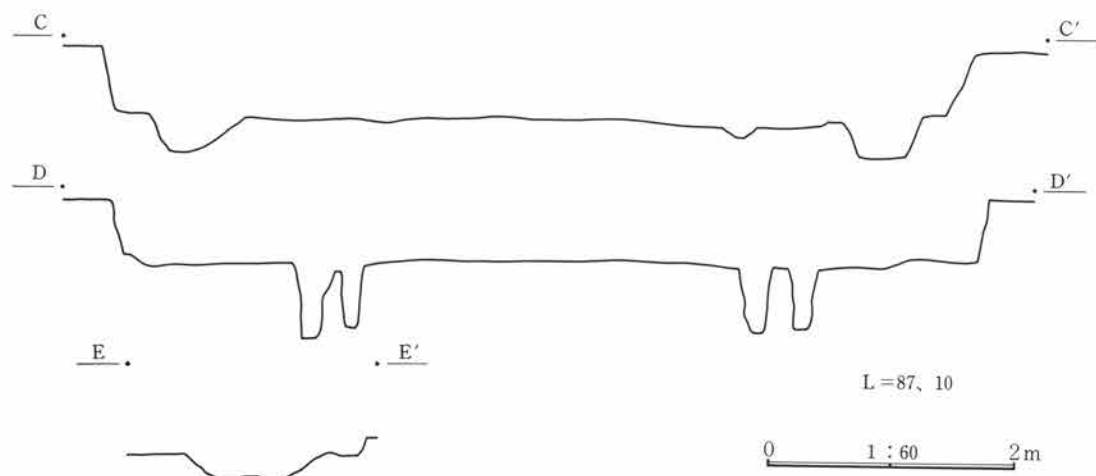
第52図 7区23号住居跡遺物図(1)



第53図 7区23号住居跡遺物図（2）



第54図 7区24号住居跡遺構図(1)



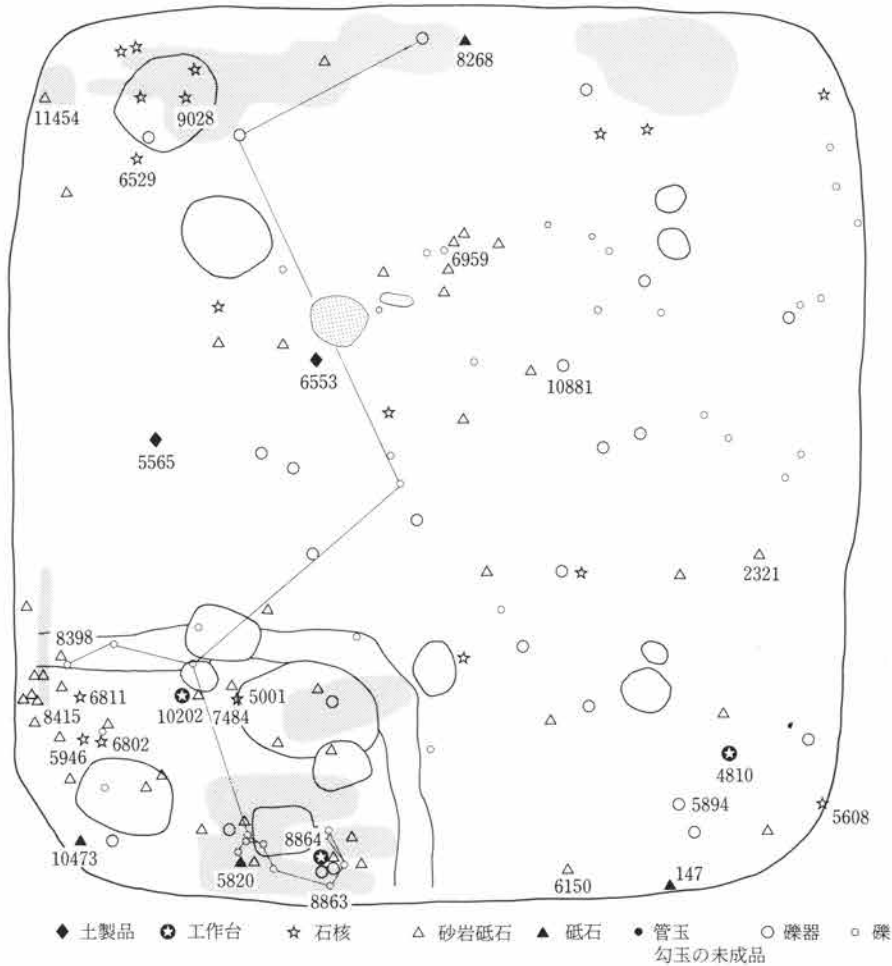
第55図 7区24号住居跡遺構図(2)

7区24号住居跡(玉作工房跡)(第54~64図、第5表、図版25~30)

本工房跡は、7区の工房跡の中では北端に位置し、東北隅に3号古墳周堀が重複するが、最良の状態を確認された。規模は、南北7.13m、東西6.86mで隅丸方形を呈する。方位は東辺が北をさす。壁は垂直に近く、東辺で50cmを測る。床面は、ローム漸移土まで掘り下げ、暗褐色土を用いて貼床とし、平坦に踏み固めている。貼床下の状況は、炉跡付近を境界とし、東半分がロームを地山に持ち、西の工作用ピットを含む範囲は地山の砂層である。柱穴は、4本の主柱穴が重複を伴って2組確認され、建替えがある。このほかに南辺側中央に補助柱穴1本がある。柱穴は径20~50cmと不揃いだが、床面からの深さは総じて50cm前後ある。炉跡は、中央北寄りで縁石を持つ地床炉が確認された。

工作用施設は、西南隅と西北隅で工作用ピットが確認された。西南隅は、周溝をめぐるして約3×2mの範囲を仕切った中に、大小4基の方形土坑がある。この4基は、大小の形態差とともに建替えに伴う新旧が考えられるが明確にできない。また、床面も周囲より一段低く、他の工房跡と比較するとその存在が明瞭である。一方の西北隅のものは、単独で存在し、85×70cm、床面からの深さ30cmで方形を呈する。

遺物の出土状態は、確認面から床面まで、玉未成品、土器を合せて約7万点の出土量がある。土器の個体数は少ないが、台付甕、罎、器台、甑、壺と一般の住居跡に劣らない器種がある。玉成品を器種別に見ると、管玉を主に勾玉、琴柱状、棗玉があり、管玉の多さがここでも目を引く。工程別には、多様な石核を始めとして荒割剥片、分割以下仕上げまで、管玉、勾玉について一連の工程を復原することが可能である。石質も蛇紋岩質に混じって瑪瑙原石2点がある。この瑪瑙は成品の出土例がないものの、その存在が暗示される。道具には、工作台3点を始めとして、敲打痕、磨耗痕を持つ礫器5点、擦痕等を持つ礫、砂岩質砥石約20個体、結晶質片岩の砥石1点、泥岩質の大型砥石1点がある。土製品として、球状のものが2点あり、土製コマに相当する。工作

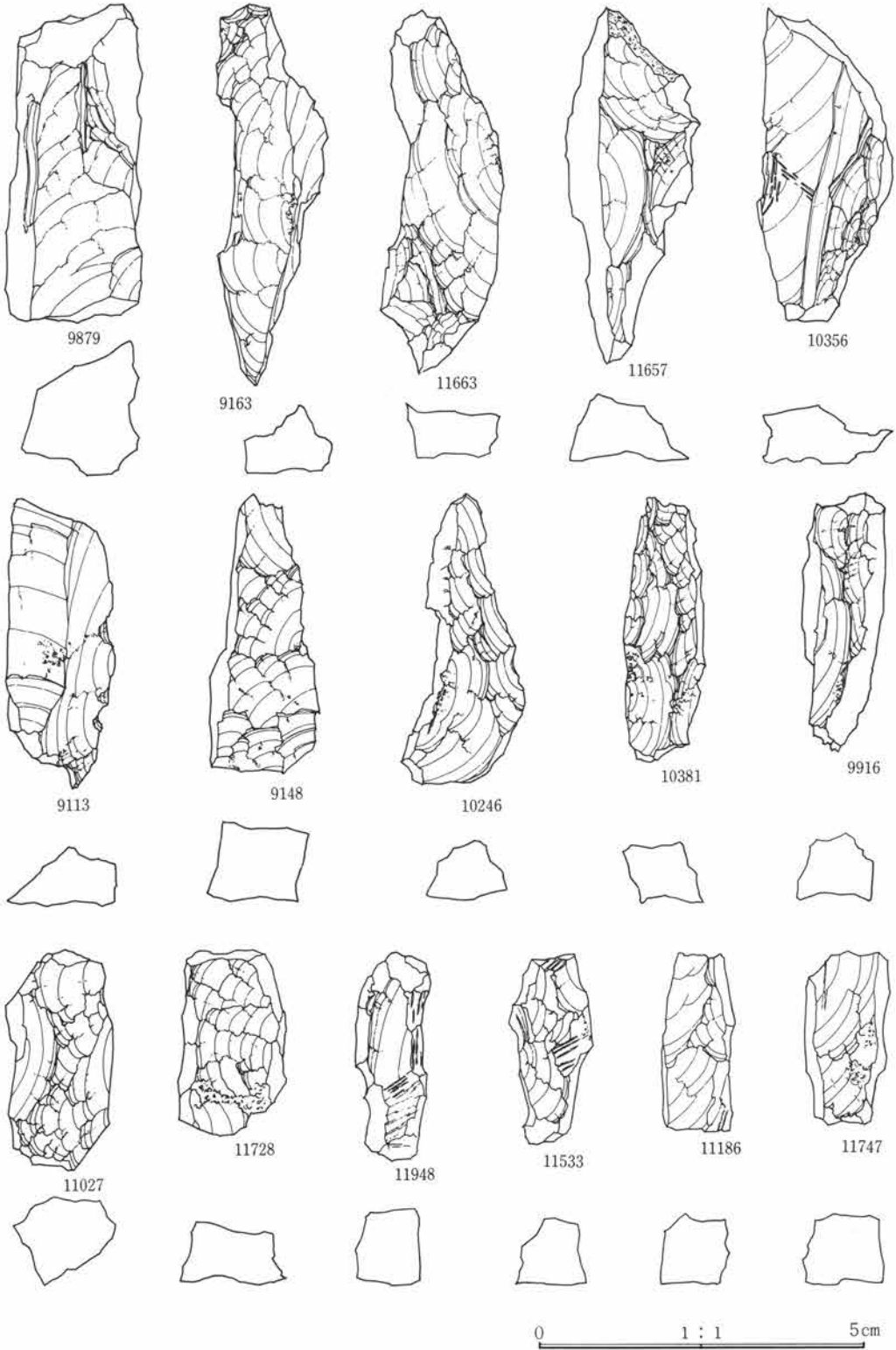


第56図 7区24号住居跡遺物分布図

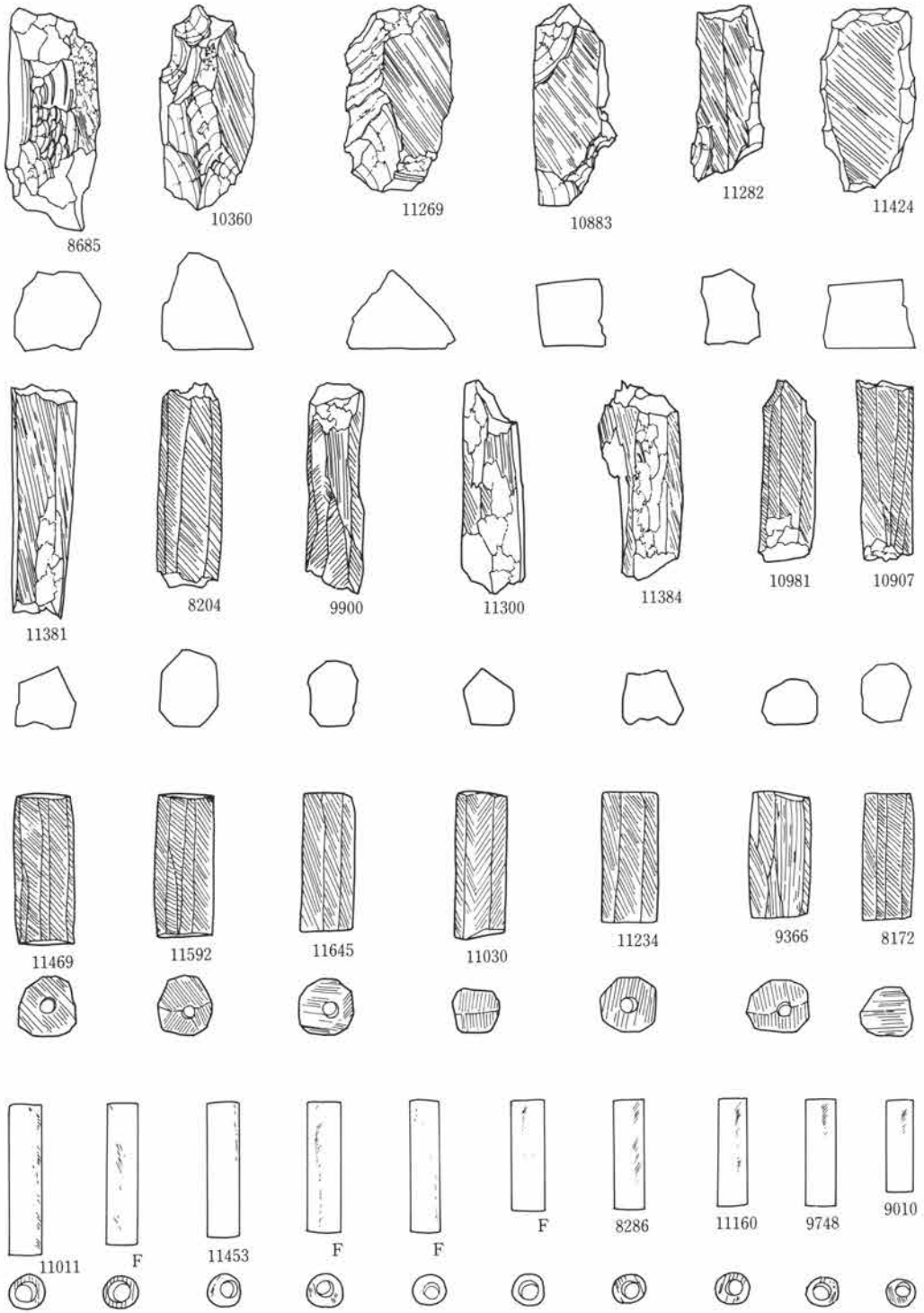
台は板状でやや厚手の河原石に敲打痕、研磨痕を持つが、使用頻度だけではなく、工作用ピットとの位置関係で、用途の違いがあるか。礫器の特徴は、大きさの点で手で握れる上に長さ15cm前後の棒状という共通項があり、数も多い。砥石は、硬軟の石質差だけではなく、形状から石皿様の大型品から半月型、短冊型の小型のものまである。置砥、手持ち砥の使用法だけではなく、玉成品の研磨から金属器への使用まで広い用途が考えられる。

分布上の特徴としては、床面上全体に密な分布が見られるが、特に工作用ピットに道具類とともに集中する傾向と、北辺際に代表される壁際でのブロック状密集分布があげられる。工程別に見た特定の傾向は、遺物の多量さゆえにつかめないが、道具分布からは西南隅工作用ピット付近には据え置かれた状態の工作台を始めとして、主要道具が集中、炉跡東側には礫器が集中する。西南隅工作用ピットには分割、研磨を始めとする主要機能が集約され、壁際には形割品等を仮置きする場であったか。

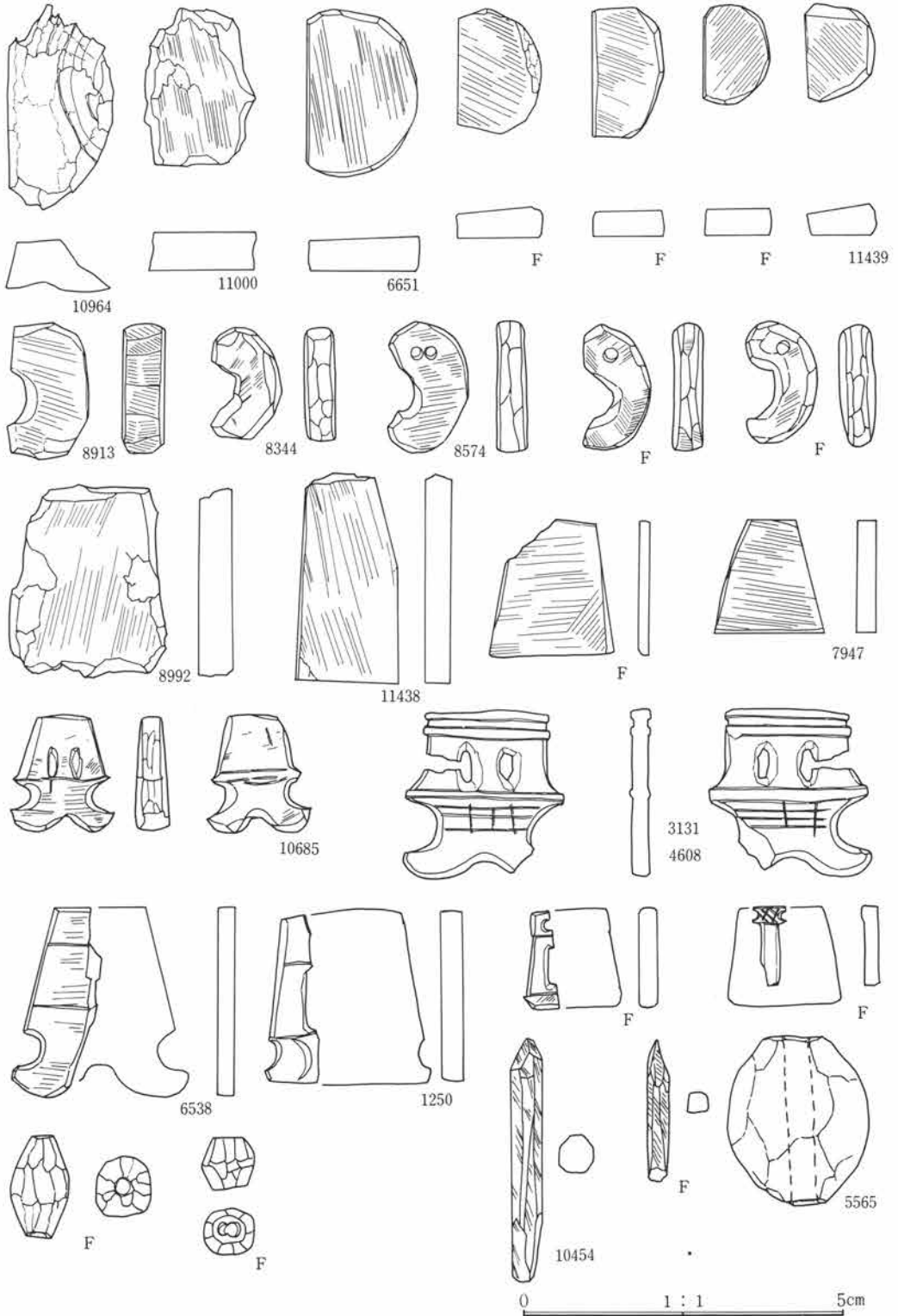
遺構の時期は、伴出土器の特徴から古墳時代前期とする。



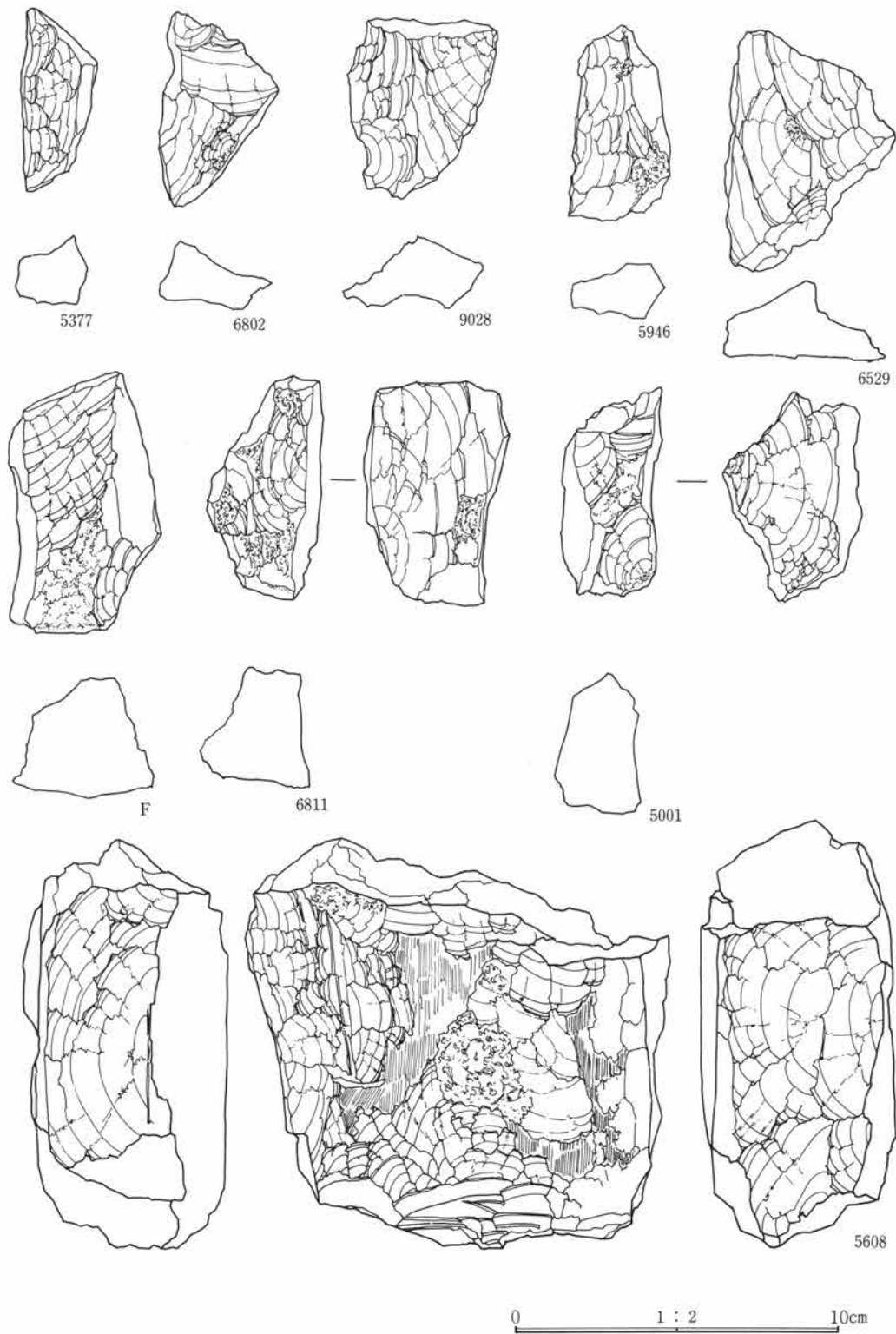
第57図 7区24号住居跡遺物図（1）



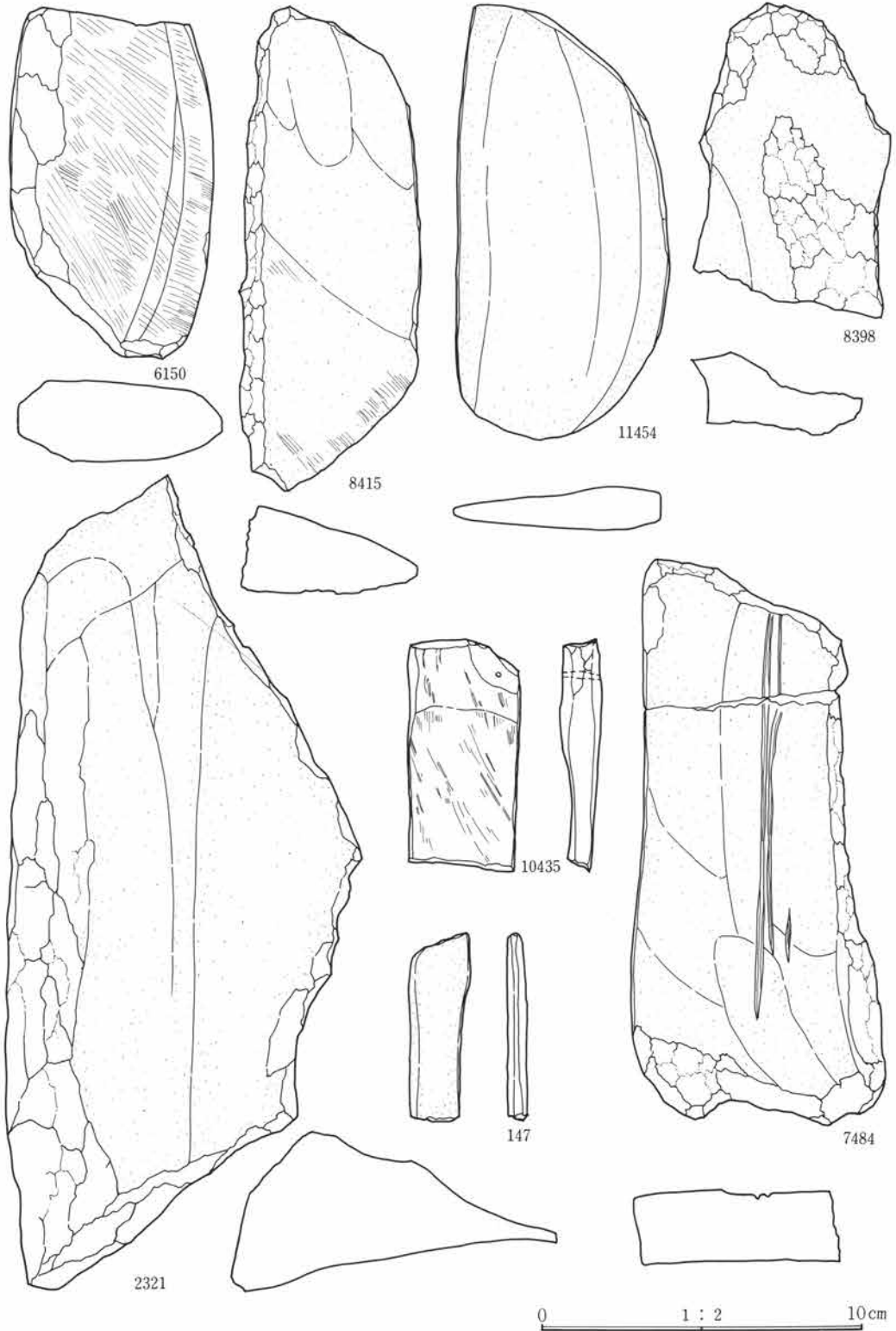
第58図 7区24号住居跡遺物図(2)



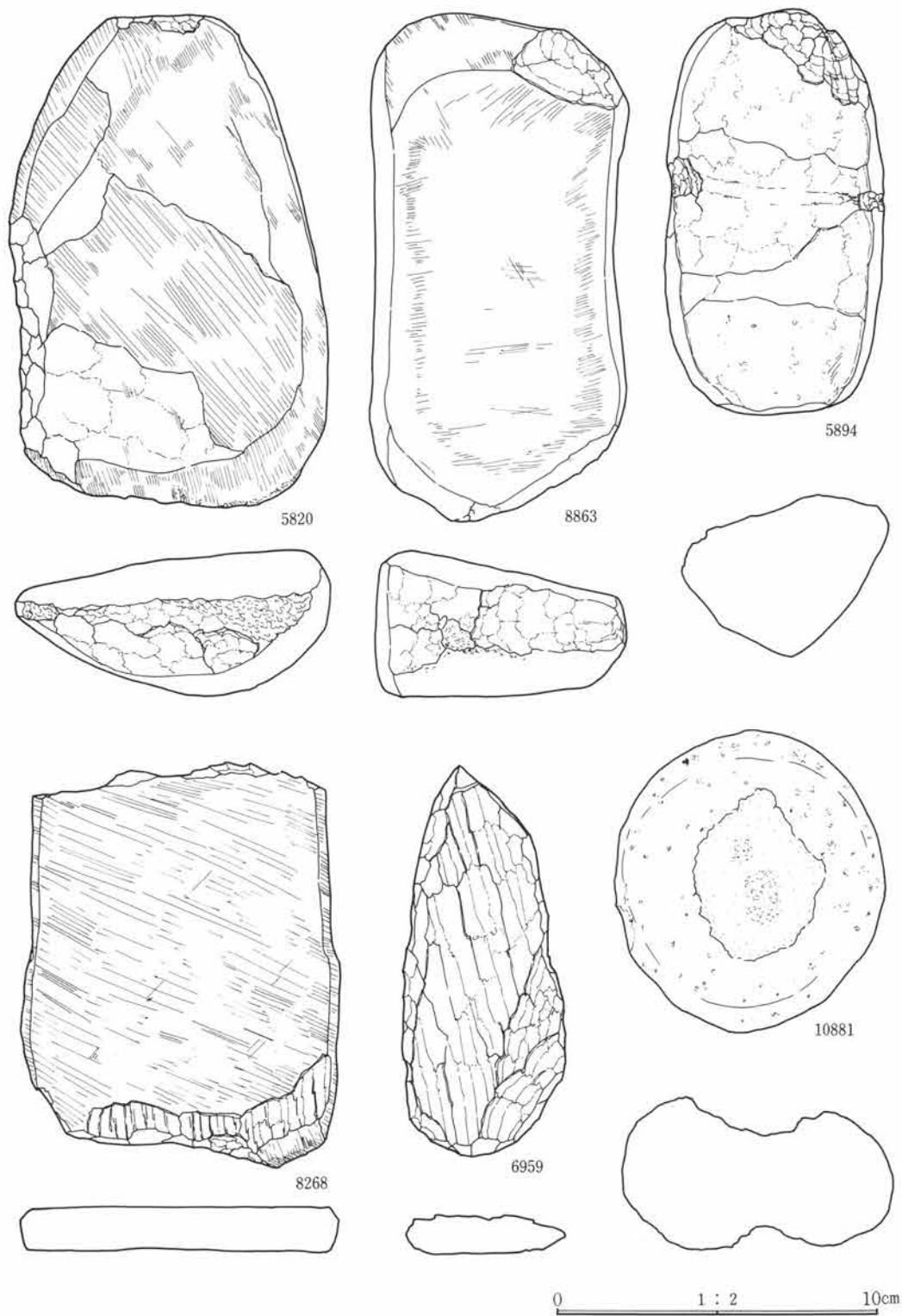
第59図 7区24号住居跡遺物図(3)



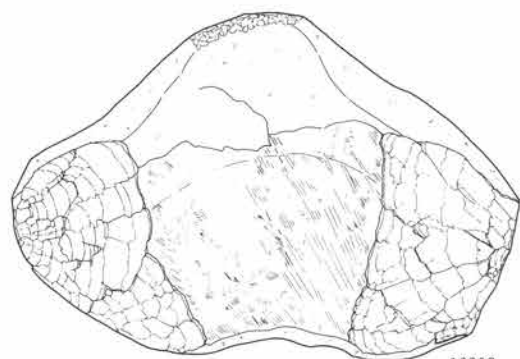
第60図 7区24号住居跡遺物図(4)



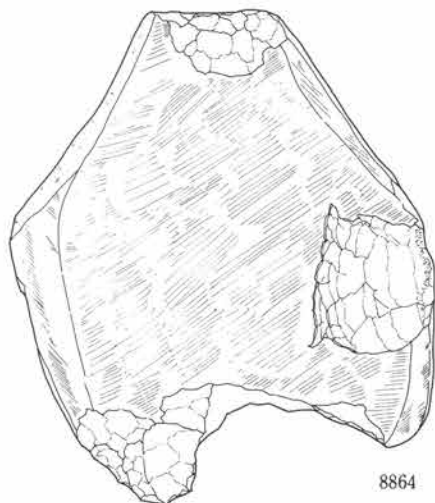
第61図 7区24号住居跡遺物図（5）



第62図 7区24号住居跡遺物図(6)



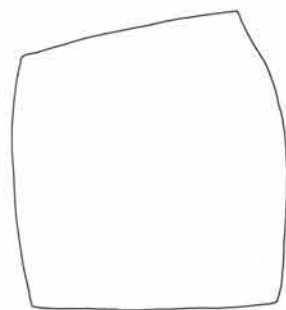
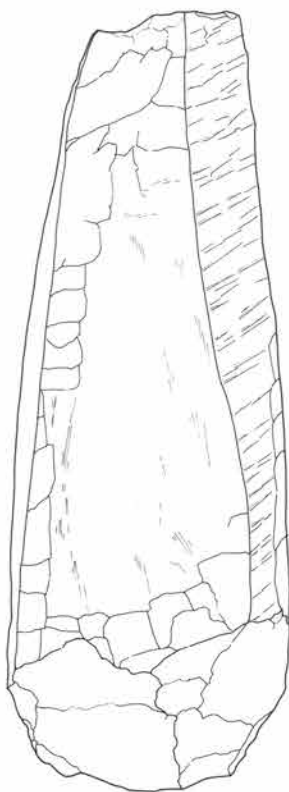
10202



8864

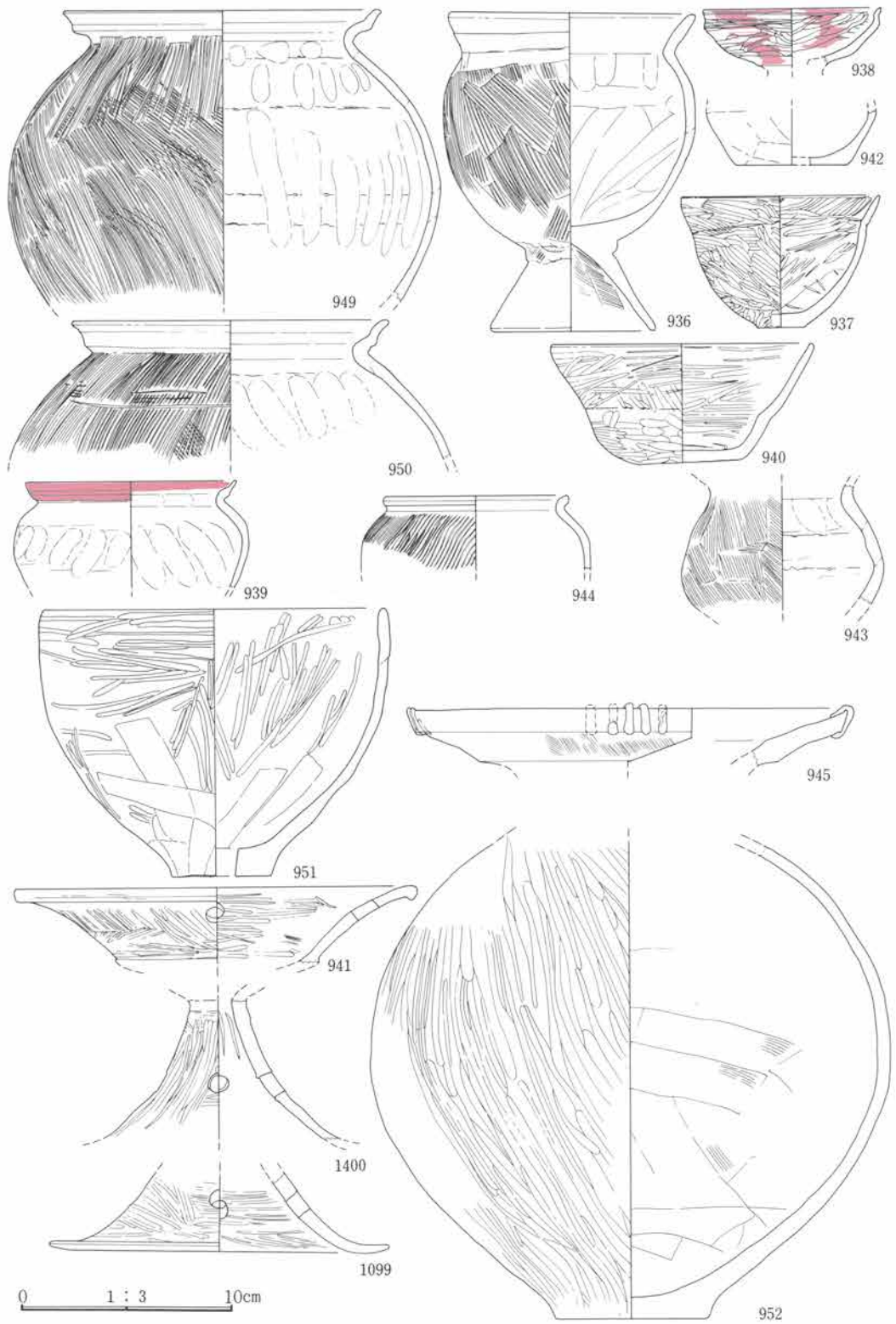


10473



0 1 : 3 10cm

第63図 7区24号住居跡遺物図(7)



第64図 7区24号住居跡遺物図(8)

第 5 表 7区24号住居跡出土遺物観察表

(第64図、図版 27~30)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
936	甕 土師器	口-11.7、胴-11.8、底-4.1、脚裾-7.8、高-15.0○略完存	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	小型台付甕。くの字状の口縁、体部丸味あり。体外面、タテ、ナナメハケナデ、内面、ヘラナデあげ。脚部ハの字状、内面ヘラナデ、体部との接合、粘土巻き付け。粗雑、厚手	
937	埴 土師器	口-9.3、底-2.3、高-6.1○略完存	砂粒を含むが細密。酸化、軟質。明褐色	小型、底部小さく、体下部で丸く内湾してひろがる。口縁、折り返し、内稜あり。内外、ヘラ磨き調整	
938	器台 土師器	口-8.4、底-[3.2]、高-(2.1)○坏部	砂粒を含む。酸化、軟質。赤橙色	体下部で、丸い稜をもち、口縁部、丸い稜をもってたちあがり、小さく外反する。内稜あり。内外ヘラ磨き調整	赤色塗彩あり
939	埴 土師器	口-[10.0]、高-(5.0)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	体部、丸く、上位で張りをもつ、口縁部、ゆるいS字状。体外面、ナデ調整、内面、指頭痕あり	口縁部、赤色塗彩あり
940	埴 土師器	口-[12.4]、底-5.1、高-5.6○ $\frac{3}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	平底、体部、内湾し、口縁部へ区切りをもって、わずかに内湾してひろがる。内外、ヨコ、ナナメのヘラ磨き調整。器肉、厚手	
941	器台 土師器	口-[19.0]、高-(3.5)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含むが、細密。酸化、軟質。明赤褐色	装飾器台。坏部のみ。坏底部に、体部、上乘せ貼付。大きく外反し、口縁端部、外縁帯をもつ。円形の透し孔あり。外面、タテ、下部ヨコ、内面ヨコヘラ磨き調整	
942	埴 土師器	底-[5.2]、高-(2.5)○小片	砂粒を含むが、細密。酸化、軟質。浅黄橙色	平底、体部、直線的にひろがり、折れて内湾する。ナデ調整のみ	
943	甕 土師器	胴-[9.6]、頸-[6.7]、高-(5.7)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。浅黄橙色	小型甕。頸部しまり、体部中位に最大径をもつ。外面、タテハケナデ、内面、ヨコナデ調整。器肉、厚手	
944	甕 土師器	口-[8.6]、高-(4.5)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含むが細密。酸化、軟質。にぶい黄橙色	体部、丸く、口縁部S字状と思われる、小型甕。口縁部、破損の後の再利用か、擦り切り痕あり。外面、ナナメハケ目、内面、ヨコナデ調整	
945	壺 土師器	口-[20.6]、高-(2.7)○小片	砂粒、黒色石粒を含む。酸化、軟質。明黄褐色	有段口縁の壺。頸部より、稜をもってひろがり、口縁部外縁帯めぐり、五本の粘土紐、縦に貼付。外面、ナナメハケナデ後、ヨコナデ、内面、ヨコナデ調整。器肉、薄手の仕上げ。やや小型か	

第6章 検出された遺構と遺物

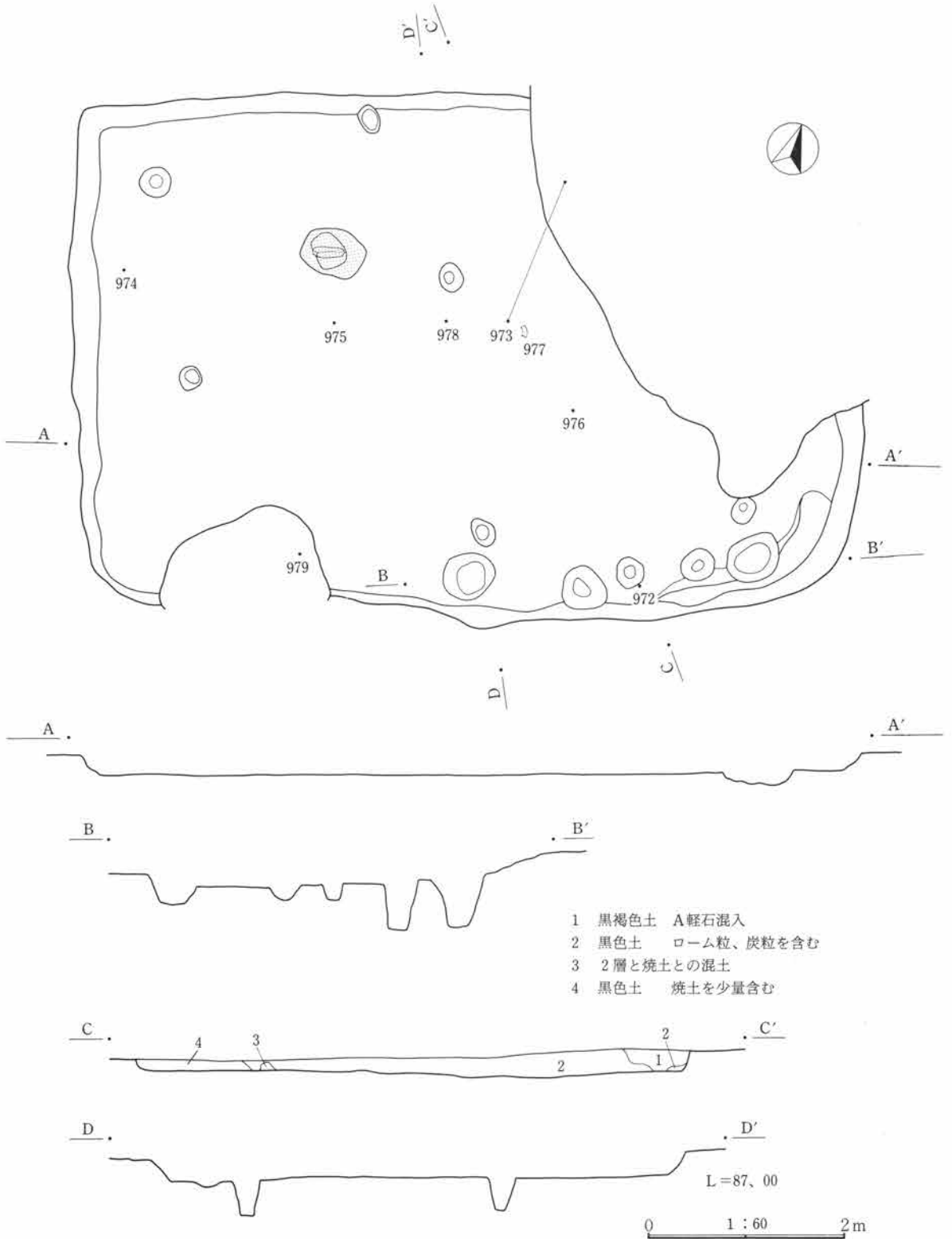
949 7区24号 住	甕 土師器	口-15.0、胴- [20.3]、高-(13. 8) $\circ\frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。 酸化、軟質。浅黄橙色	S字状口縁の甕。体部中位に最大径をもつ。丸味の強い胴部。口縁部、外反強く、端部、角ばった平坦面をもつ。外面、タテ、ナナメハケ目、内面、指頭痕残り、ヨコナデ。口へ頸部、内側、ヘラナデ	外面、スス附着
950	甕 土師器	口-15.0、高-(6. 5) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒を多く含む。酸化、 軟質。にぶい黄橙色	S字状口縁の甕。体部やや上位で最大径をもつ。口縁部、外反し、端部丸味あり。外面、タテ、ヨコハケ目下部、ナナメハケ目、内面、ナデ	外面、スス附着
951	甕 土師器	口-[16.2]、底- 4.7、高-12.5 $\circ\frac{3}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。明赤褐色	底部、小さく凸状に作り出し、体部丸く、内湾してひろがる。口縁部、折り返し、端部丸味あり。体内外面下位、ヘラナデ、上位タテヘラ磨き調整。底部、小孔あり	
952	壺 土師器	胴-[24.5]、底- [7.2]、高-(22. 2) $\circ\frac{1}{2}$	砂粒、白色石粒を含む。 酸化、軟質。橙～淡橙色	球胴で底部、凸状。外面、ハケナデ後、タテヘラ磨き調整。内面、粘土積痕残り、ハケナデ、ヘラナデ調整	
1400 参	器台 土師器	底-2.7、高-(6. 5) \circ 脚部のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。 明褐色	器台、脚部のみ。裾部へハの字にひらく。透し孔、円形、4個。外面、タテヘラ磨き調整、内面、ヘラナデ	
1099 参	高坏 土師器	脚裾-[16.0]、 高-(3.7) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 黄橙色	脚部のみ。ハの字に大きくひらく。裾端部、そりかえる。円形、透孔、4個と思われる。外面、ヘラ磨き調整、内面、ヘラナデ調整	

玉類未成品類は約7万点あり、7軒の工房跡の中で最も豊富な内容に富んでいる。管玉工程品6216点、勾玉工程品220点、琴柱状品17点が主な内訳で、全体に占めるチップの比率は88%と高い。管玉は第57、58図に示したが、長さで1.85~2.05cmと1.60cm前後という二形態がここでも見られる。勾玉の特徴も他と同様で長さ1.50cmと1.80cm前後がある。第59図の下段に示した琴柱状品は、6538、1250、覆土の二例と三つの形態があり、管玉、勾玉と同様に大小が見られる。

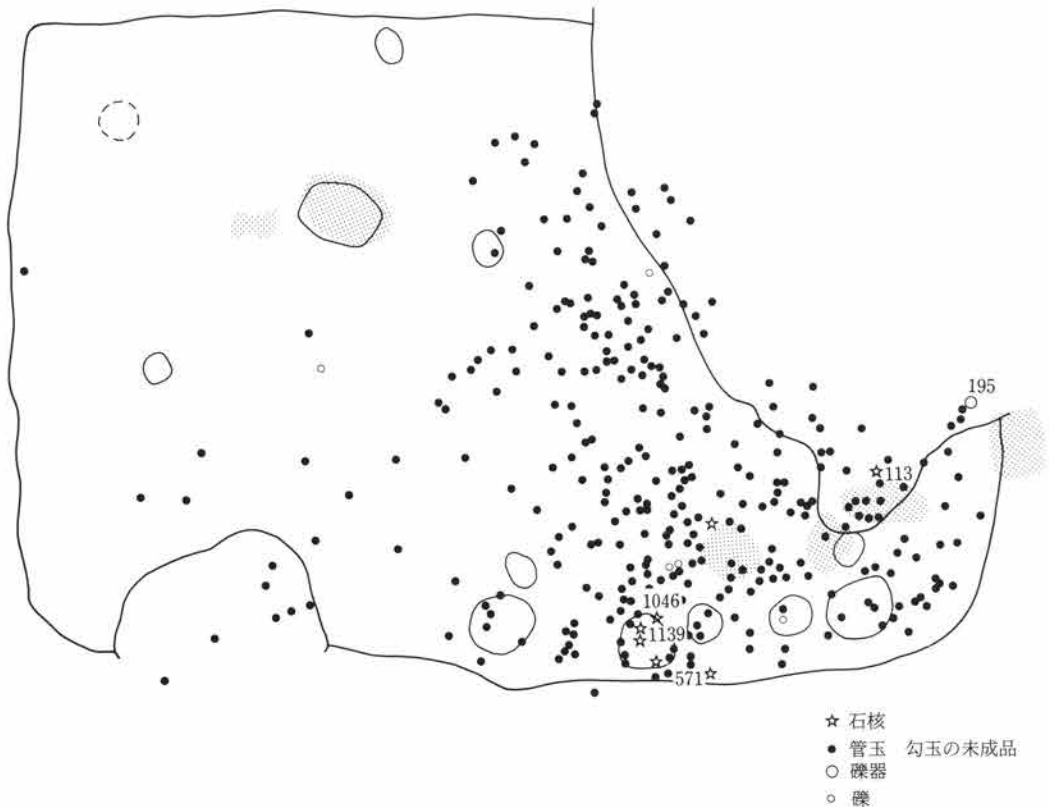
第60図は石核である。円盤形と不定形の二者があり、5608に至っては12.6×12.8cm、厚さ5.90cmの大型品で、研磨面と打痕、刀痕が各所に残る。垂角礫を素材としたものか。

第61図は砥石である。形態、石質で細分されるが、砂岩製については石皿形の大型のものが破棄、分割されて三日月形の手持ち砥へと再利用されたのが2321、8415等からわかる。第63図の10473は西南隅に立てかけた泥岩製の置砥である。31×11.2cm、厚さ11.6cmの四面体、金属器用か。

第62、63図は礫器、工作台である。礫器は輝石安山岩製で、長さ15cm前後のものが多く、砥面を持つものもある。工作台は、台石様の4810、敲打痕、擦痕を持つ10202、8864に分けられ、用途差があるか。第59図5565は土製コマで長さ2.60cm、孔径3mmの大きさで、2点ある。(女屋)



第65図 7区30号住居跡遺構図



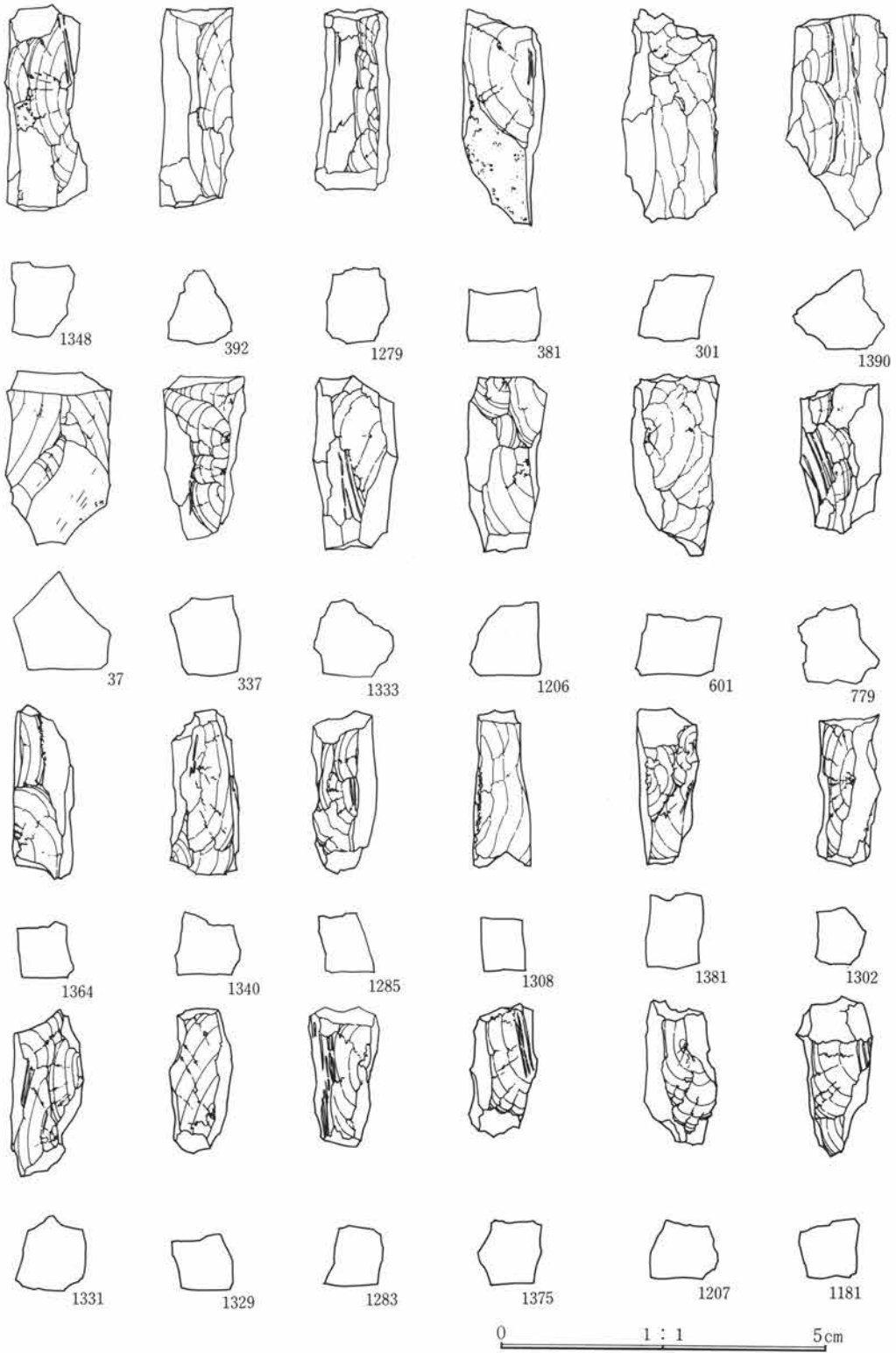
第66図 7区30号住居跡遺物分布図

7区30号住居跡（玉作工房跡）（第65～71図、第6表、図版31～33・37）

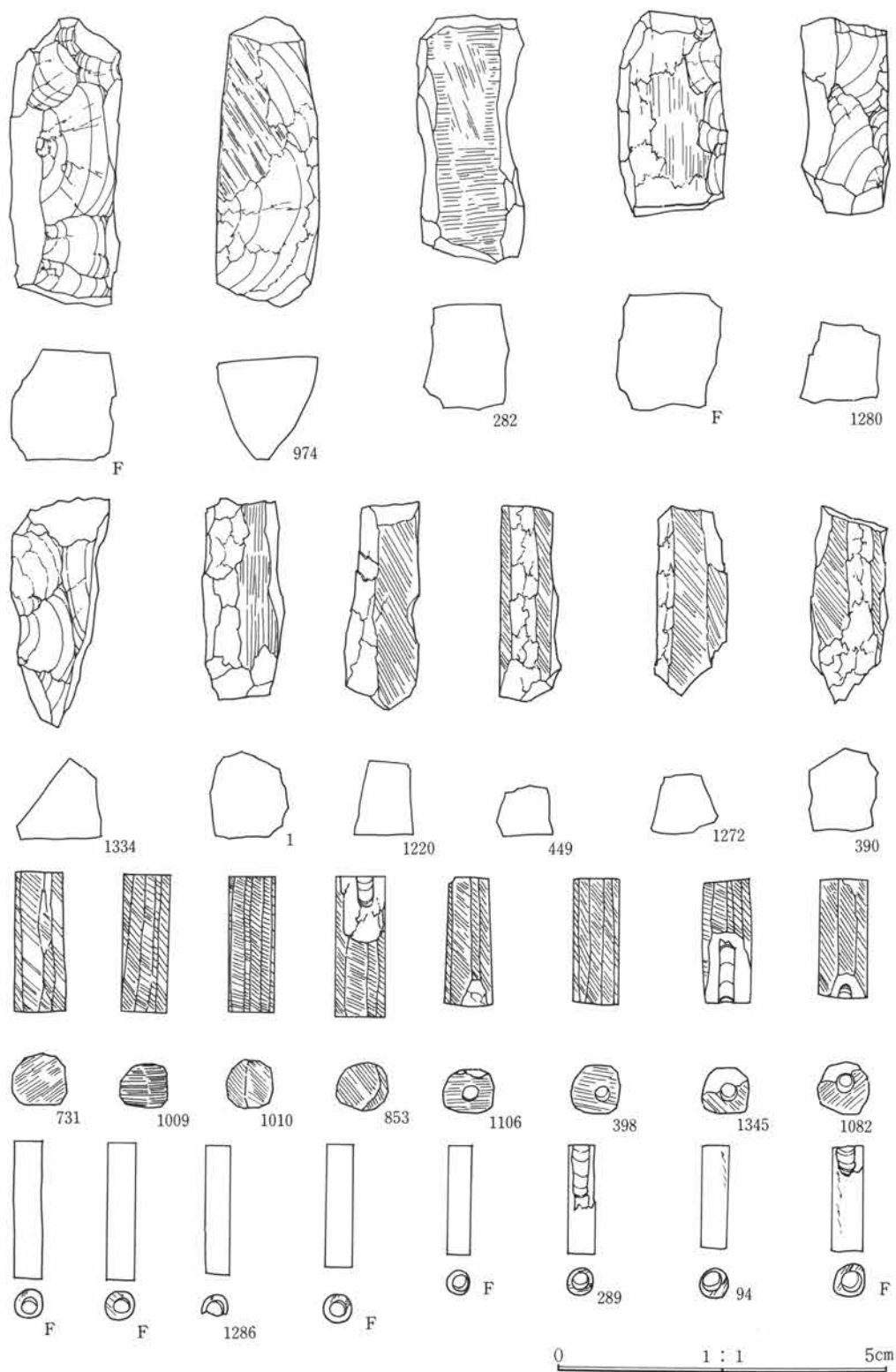
本工房跡は、7区の一群の中では南端の位置で確認された。東北隅と南辺の一部に攪乱を受けている。規模は、東南7.90m、南北5.21mで工房跡の中では唯一の長方形を呈する。方位は、西辺でN-20°-Wを測る。壁は、緩傾斜で高さ22cmを測る。床面は、ロームを若干掘り下げ、暗褐色土を踏み固めている。柱穴は、径20cm前後のピットが不整列な状態で6ヶ所確認されているが、攪乱部分を含めると東西軸に沿った3対のあり方か。炉跡は、西北隅寄りで縁石を持った地床炉が確認されている。これとは別に、床面から1～3cm位浮いた状態での焼土が、炉脇で1ヶ所、東南隅寄りで3ヶ所見られるが、東南隅寄りのものには遺物分布が重複する。この焼土は炉跡とは直接の関係はなく、形割、分割等の工程と関連するものか。

工作用施設は、南辺側に並列した5基の円形ピットが相当する。径30～60cmで、隅寄りの2基は床面から60cm前後と深いのが特徴で、他の3基は浅くなるものの石核が集中するものがあり、機能的に異なるか。特に間仕切り等の施設はなく、壁際に並列するのが特徴となっている。

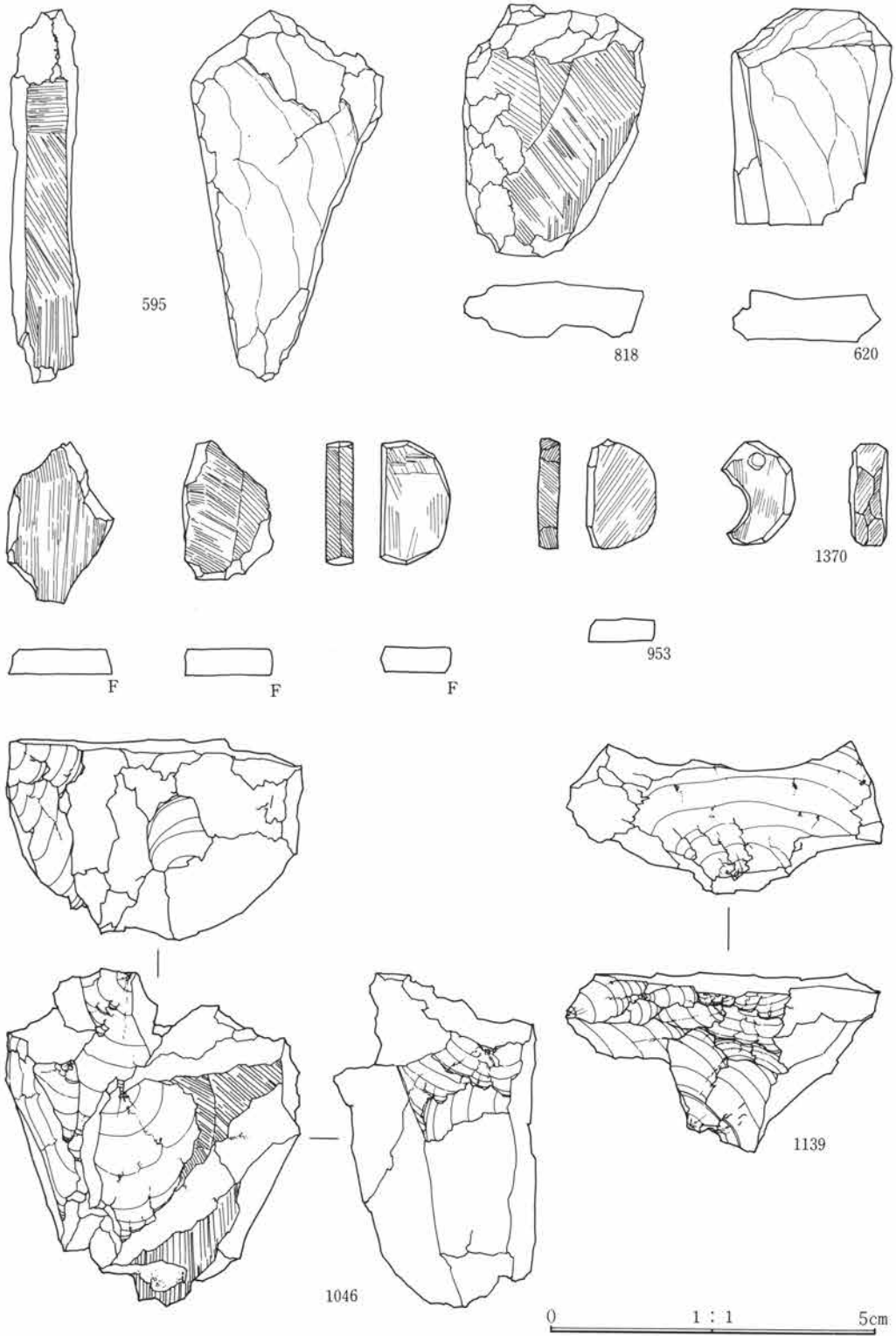
遺物分布は、東半分が濃密で西のあり方と対照的で特徴となっている。器種としては、管玉を主に勾玉、琴柱状があり、工程別では形割、穿孔のものが工作用ピット周辺に集中する。このほかに砥面を持つ礫器、坩等がある。遺構の時期は、伴出土器の特徴から古墳時代前期とする。



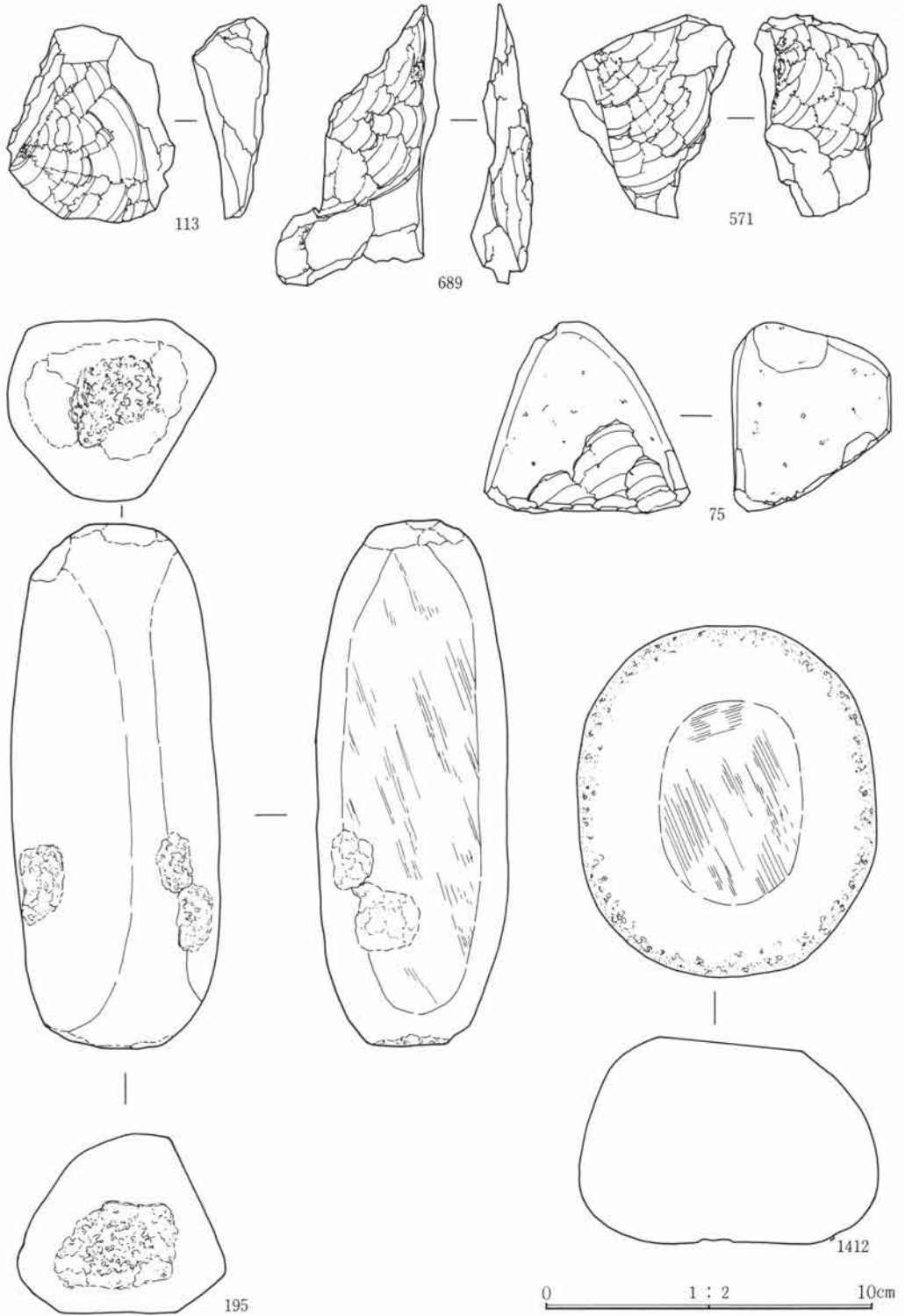
第67図 7区30号住居跡遺物図（1）



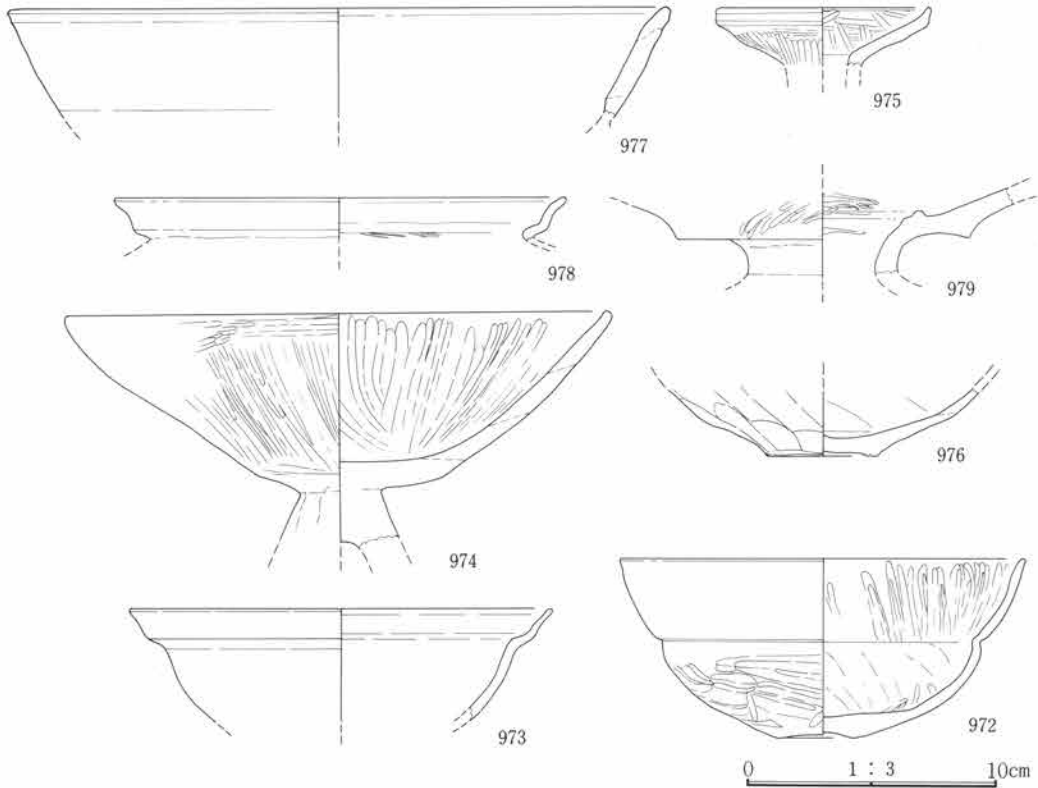
第68図 7区30号住居跡遺物図(2)



第69図 7区30号住居跡遺物図（3）



第70図 7区30号住居跡遺物図(4)



第71図 7区30号住居跡遺物図(5)

第6表 7区30号住居跡出土遺物観察表

(第71図、図版 32・33・37)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
972	坏土師器	口-16.2、底-3.0、高-7.1○完存	砂粒を多く含む。酸化、軟質。浅黄橙色	小さな凹底をもち、体部内湾して大きくひろがり、中位でたちあがり、区切りをもって、口縁部内湾する。内側、稜をもつ。体外面、下位ヘラケズリ、中位、ヘラ磨き、口縁部ヨコナデ、内面ヘラ磨き。器肉、薄手	広口罎(?)
973	坏土師器	口-[17.0]、高-(4.5)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。赤褐色~橙色	体部、内湾してひろがり、口縁部、段をもってたちあがり、端部、薄く、わずかに外反する。外面ヨコナデ、内面、体部、ヨコナデの後、ヘラ磨き調整	
974	高坏土師器	口-[21.8]、底-[7.5]、高-(9.0)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	坏底部に稜をもち、大きく鉢状にひろく、高坏。脚部を欠く。口縁端部内湾して丸味あり。ヨコナデ後、タテヘラ磨き調整。器肉、厚手	

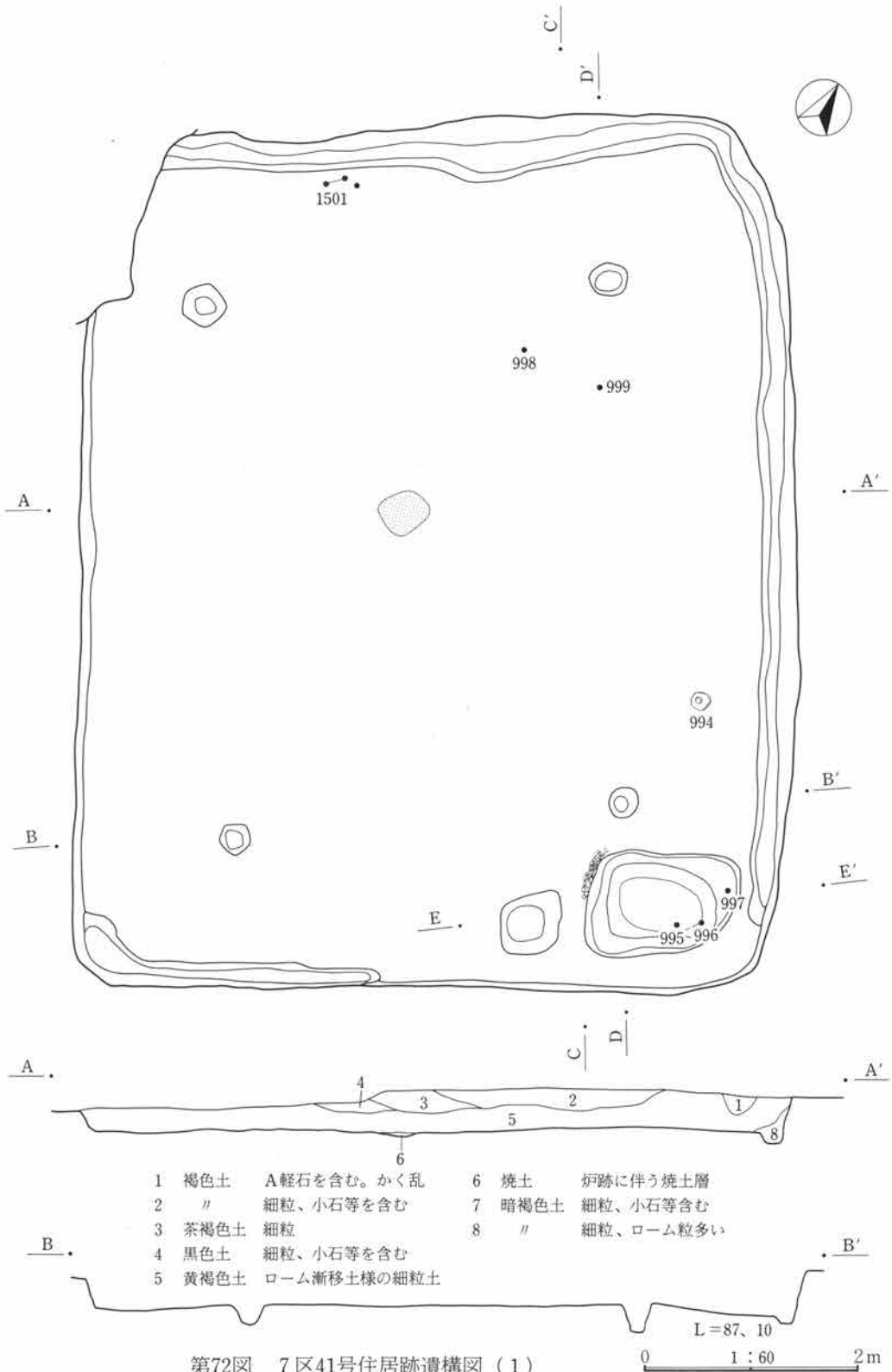
第6章 検出された遺構と遺物

975 7区30号 住	器台 土師器	口-8.6、高-(2.3) ○坏部のみ	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	口縁部、外側、丸い稜をもってたちあがる。内面、ナナメ、ヨコヘラ磨き、外面、タテヘラ磨き調整	同一個体と思われる脚部あり
976	壺 土師器	底-4.3、高-(2.6) ○小片	砂粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい黄褐色	やや小型の壺。体部下位で大きくひらき内湾する。底部、凹み底。体部外面、タテヘラケズリ、内面ヨコナデ調整、内底面、粒子粗い	
977	甕 土師器	口-[26.6]、高-(4.3) ○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄褐色	大型の甕。口縁部、長くのび、端部外側にゆるい稜をもつ。頸部はS字状と同様の段を有する	
978	甕 土師器	口-[18.2]、高-(1.7) ○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄褐色	S字状口縁の甕。頸部内面、ハケ目調整	外面、スス付着
979	壺 土師器	頸-[6.1]、高-(3.4) ○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	有段口縁の壺。頸部しまつて、口縁部、大きく外反する。角ばった段をもち、さらに外反。内面、中段に凸帯めぐる。外面、タテ、ヨコ、ヘラ磨き、内面、ヨコヘラ磨き。頸部内面、ヘラナデ調整	

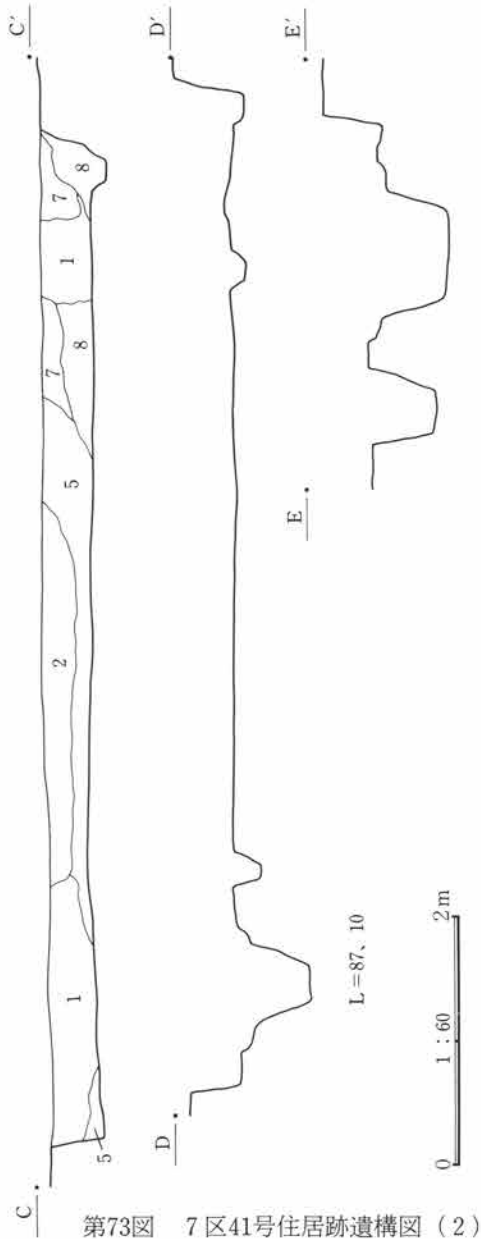
玉類未成品類は6530点がある。管玉工程品1165点、勾玉工程品8点と極端な比率である。管玉は第67、68図に示したが、他の工房跡同様に長さ1.60cmと2cm前後に量比の中心がある。いずれも蛇紋岩類だが、第68図の最上段に示した5点は石質と技法がやや異なり、規格外のものか。5点ともに円盤状の定形化した石核から作出、分割されているが、最小の1280を例にとると、打面を右回りに転移させながら側面と両側端を平坦に調整し、長さ2.90cmの直方体に仕上げている。刀痕が殆ど見られないことから、調整の剥離で1点毎に仕上げていく工程か。しかし、微小なチップ類を少量伴うものの、剥片等がないことから、この成品に限り、工房外で石核から作出、荒割されたもので、工房内搬入時は最後の調整を残す程度で直ちに研磨へと移行したか。石質は珪質頁岩、珪質変質岩で、蛇紋岩類の深緑色に対して青灰色を呈し、22号住居跡に少量の類例があるだけで、形態からすると規格外の大型品に相当するか。

勾玉は第69図上段に示したが、595、818の大型の研磨品に対して、通例の長さ1.50cm前後のものもあり、管玉と同様に大小があるか。

第69図下段、70図は石核、礫器である。石核は、定形化したのは少なく、横広の剥片を素材としたものを113、689等に見ることができ、これらには打痕、刀痕が残る。195は、長さ15.6cm、幅6.20×5.40cmで重量感があり、上下両端に敲打痕、側面は砥面と指かけ用か敲打部がある。石英閃緑岩製、1412は、輝石安山岩の転石の表裏中央部に砥面を持つ手持ち砥である。(女屋)



第72図 7区41号住居跡遺構図(1)



第73図 7区41号住居跡遺構図(2)

7区41号住居跡(玉作工房跡)

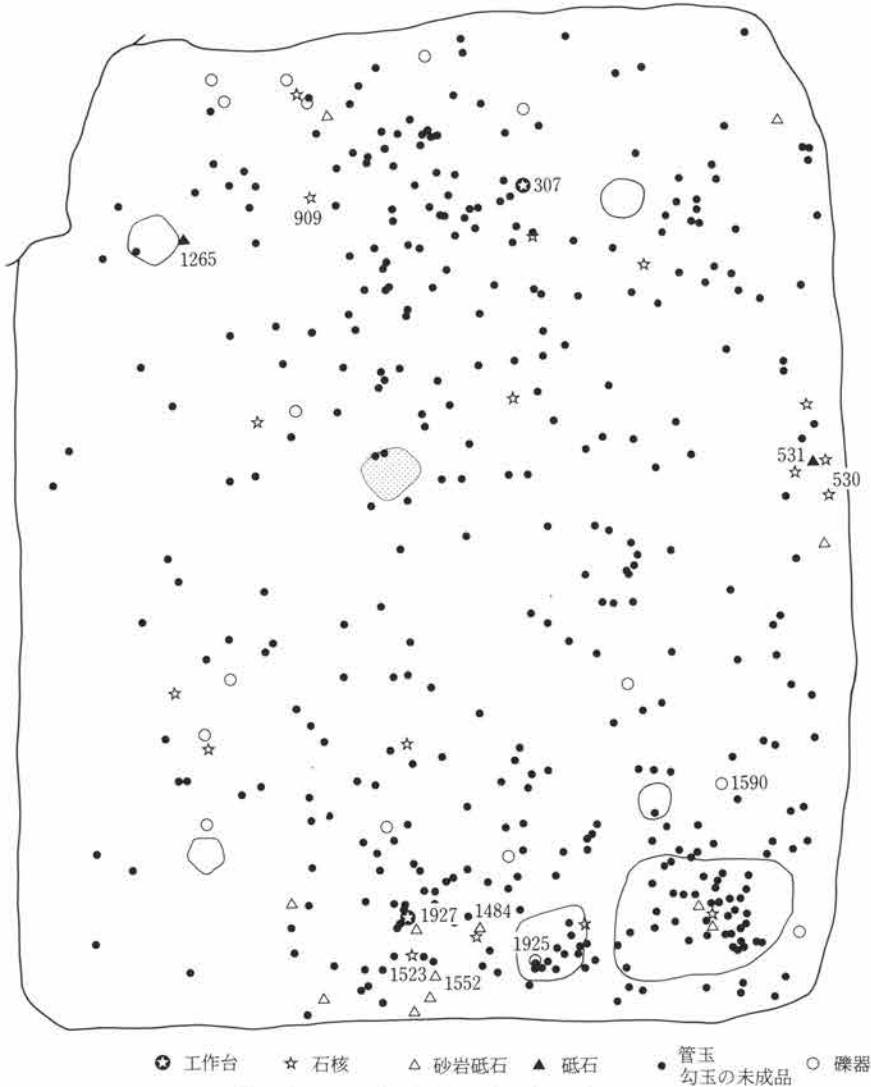
(第72～80図、第7表、図版34～37)

本工房跡は、7区の一群の中央部で確認された。南辺側の上面には浅間山A軽石を伴う攪乱が見られるが、遺存状態は良好である。規模は、東辺で8.13m、西辺7.84m、南辺6.68m、北辺6.70mで隅丸の長方形を呈する。方位は東辺でN-31°-Wを示す。壁は、垂直に近く、高さ41cmを測る。床面は、ローム漸移土まで掘り下げ、平坦に踏み固めている。柱穴は、支柱穴が4本あり、径30cm前後、深さ20～30cmと一定せず、西辺側の床面で確認された2本を加えて考えると建替えを伴うか。炉跡は、中央部に円形の浅い掘り方を持つ地床炉が確認されたが、その焼け方は稀薄で、焼土、炭化物も少ない。このほかに東南隅の工作用ピット北約1mの位置で、床面から約3cm位浮いた状態で焼土の分布が見られたが、炭化物等を伴うものではなく、23号、30号住居跡の例と同様に工作用ピットに近く、分割や形割工程に関係のある一時的な焚き火の跡か。周溝は、工作用ピットのある東南隅付近と西辺を除いて確認されたが、幅は20cm前後で床面からの深さ10cm位である。

工作用施設は、東南隅で新旧2基の工作用ピットがある。隅寄りで大形の1号ピットは1.05×0.68mの長方形で、外周には床面と約10cmの段差を持つ掘り方がある。この西縁隅のみ玉砂利敷がある。底面には乳白色粘土が少量見られた。1号の西に隣接する2号ピットは壁際の貼床下から確認されたもので、1号の半分の規模を持つ。方約50cm、床面から

の深さ55cmで、底面には1号と同様乳白色粘土が一部貼付された状態で残っていた。この2基は、規模の点で大小があるものの、掘り方、形状等の特徴は同じで、機能差ではなく、柱穴の様子と対応して2号から1号への時期差を示すものである。

遺物分布は、土器を含めて確認面から床面まで多く見られるが、他の工房跡同様に土器の個体数は少ない。玉未成品については、器種として管玉を主に勾玉、琴柱状、棗玉、平玉がある。工程別には、管玉、勾玉について各工程品が揃い、一連の工程を复原することが可能である。道具

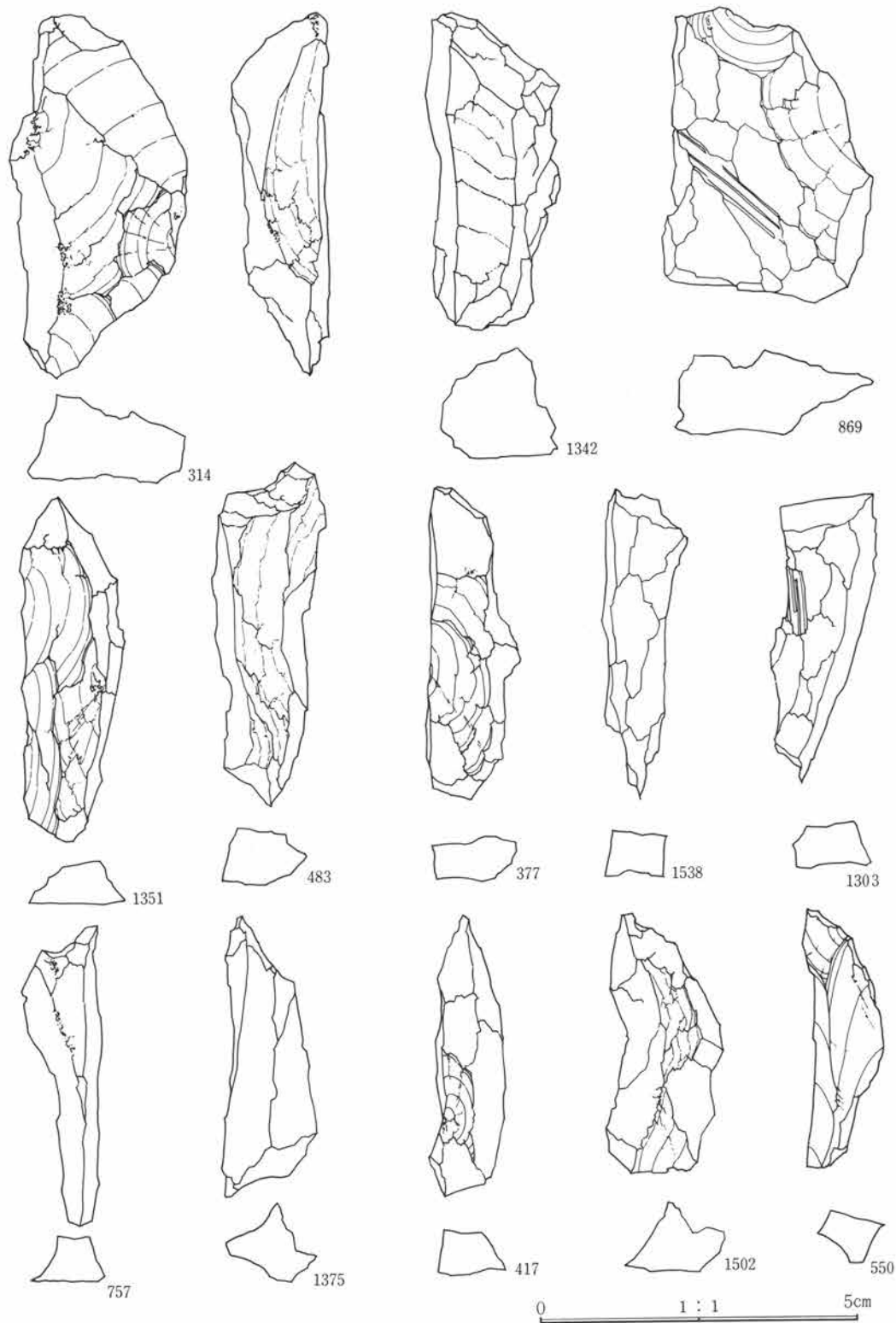


第74図 7区41号住居跡遺物分布図

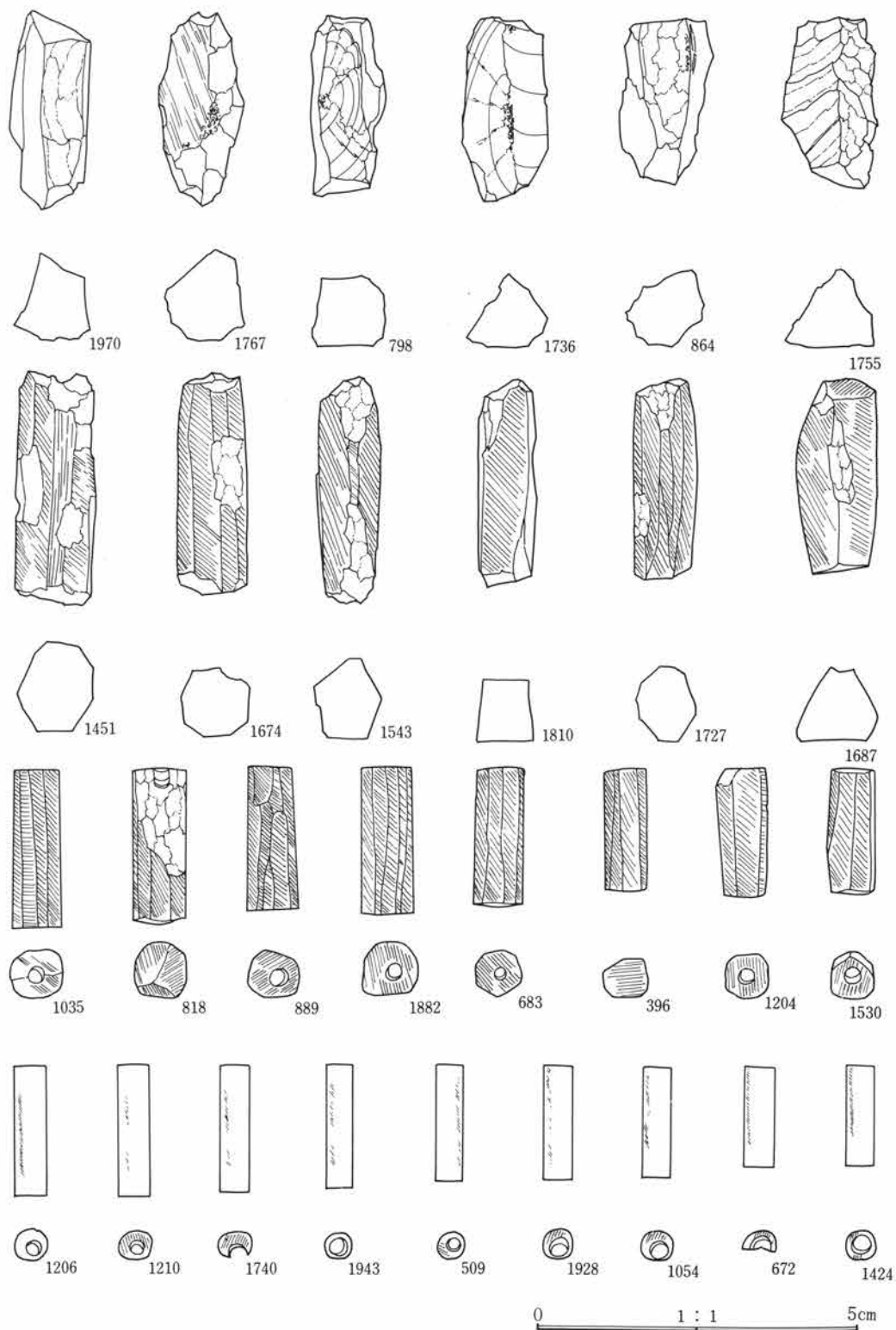
の組成としては、工作台2点を筆頭に敲打痕、磨耗痕を持つ礫器、砂岩、結晶片変岩類を用いた各様の砥石類がある。礫器、礫の多さが特徴で、これに金属器を加えたのが道具の組成か。

分布の特徴としては、各成品の形割工程以上で見ると(第74図)、全体では炉跡をはさんで南北に二分された集中傾向がある。南北ともに、工作台、礫器、砥石、石核を分布の中に持ち、特に工作台は、分布上の中心で対応した位置にある。礫器、砥石も工作台周辺に集中し、東辺際の中央部にも集中箇所がある。工作用ピットからは未成品類の出土量が多いが、道具の分布とは一致せず、底面に貼ったと考えられる乳白色粘土の存在と合せると、分割から研磨工程品までを一時的に仮置き、もしくは水づけしていたものか。土器は、台付甕、壺、埴等があるが、個体数は少なく、分布上の中心をなすものではない。

遺構の時期は、伴出土器の特徴から古墳時代前期とする。

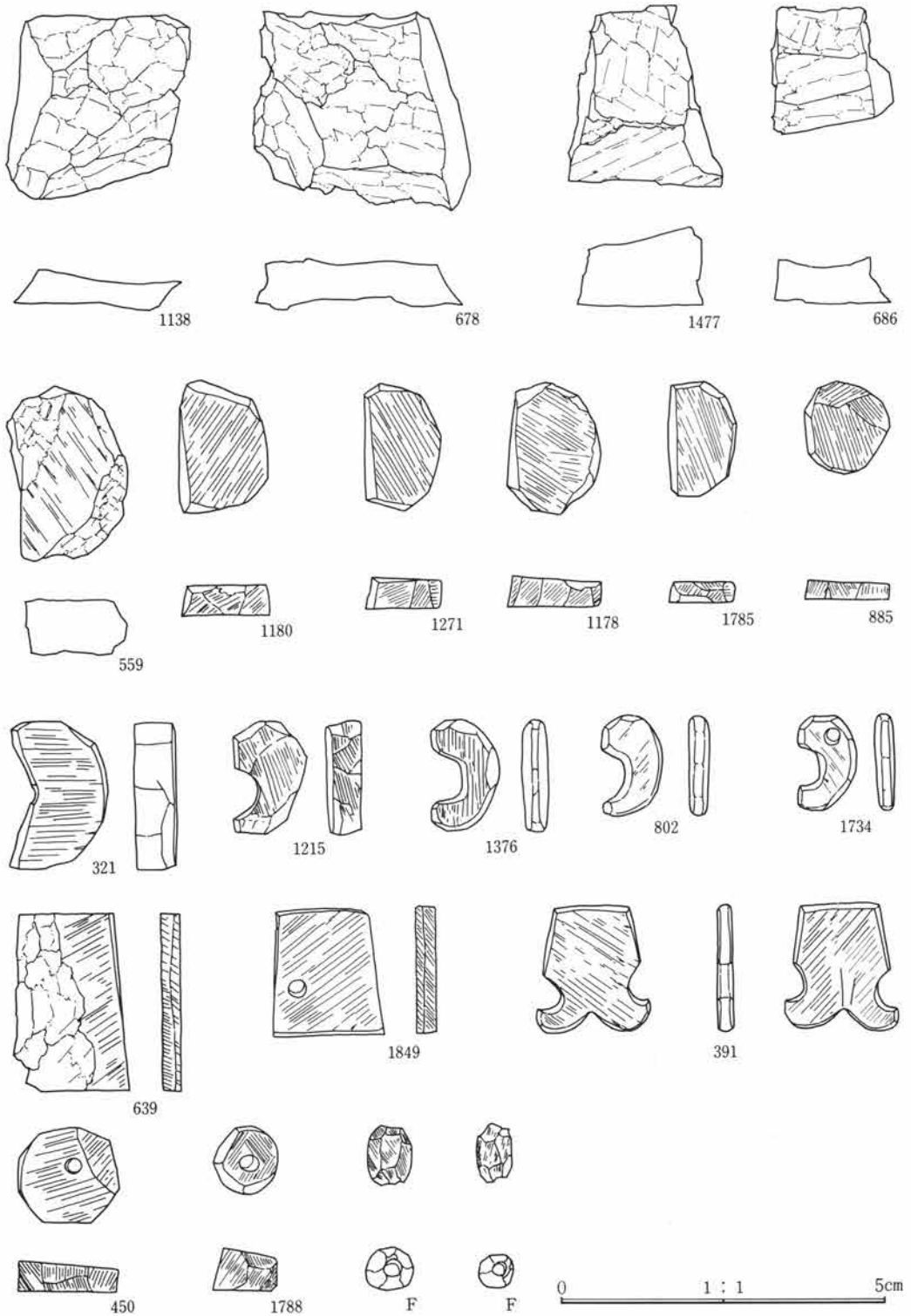


第75図 7区41号住居跡遺物図(1)

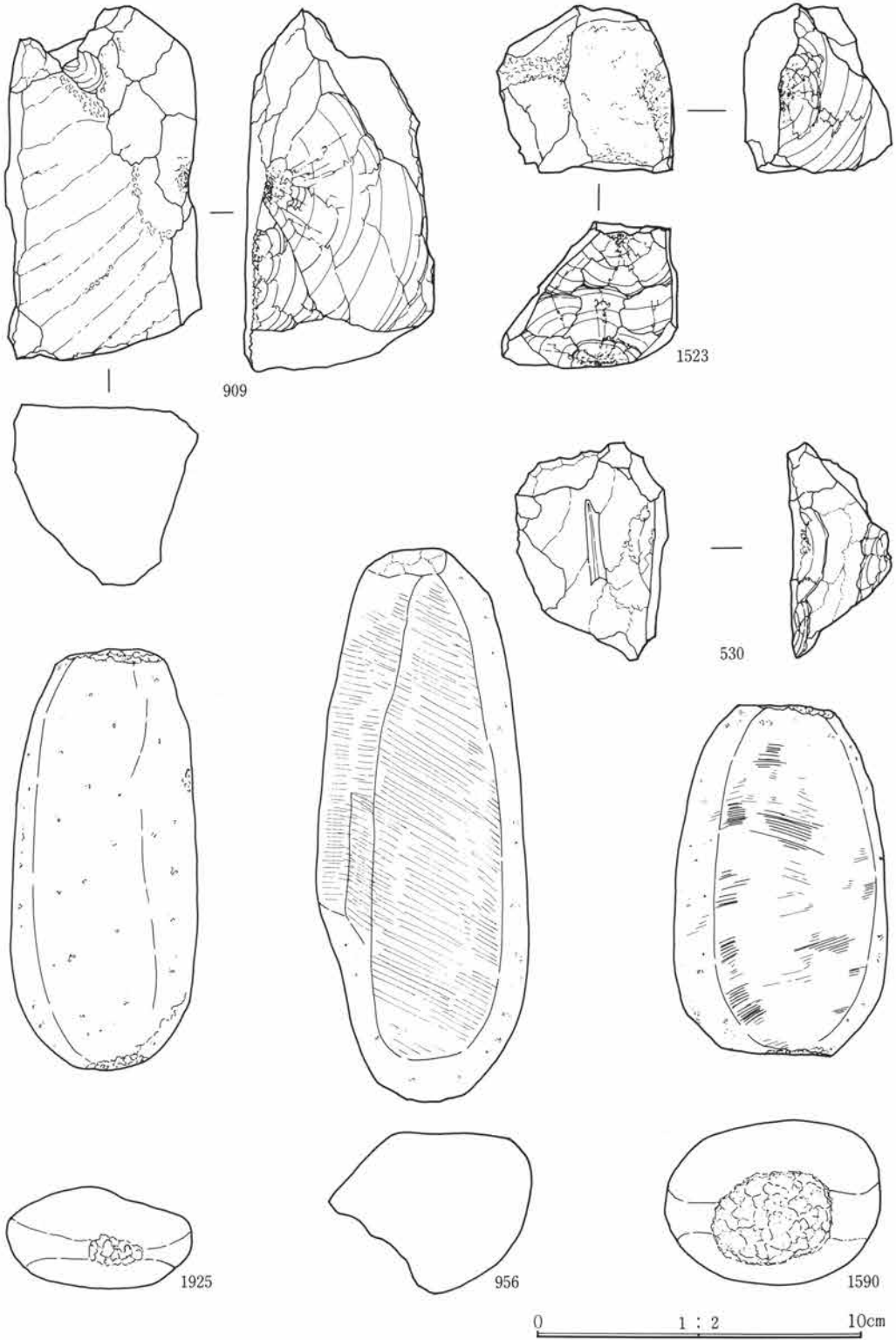


第76図 7区41号住居跡遺物図（2）

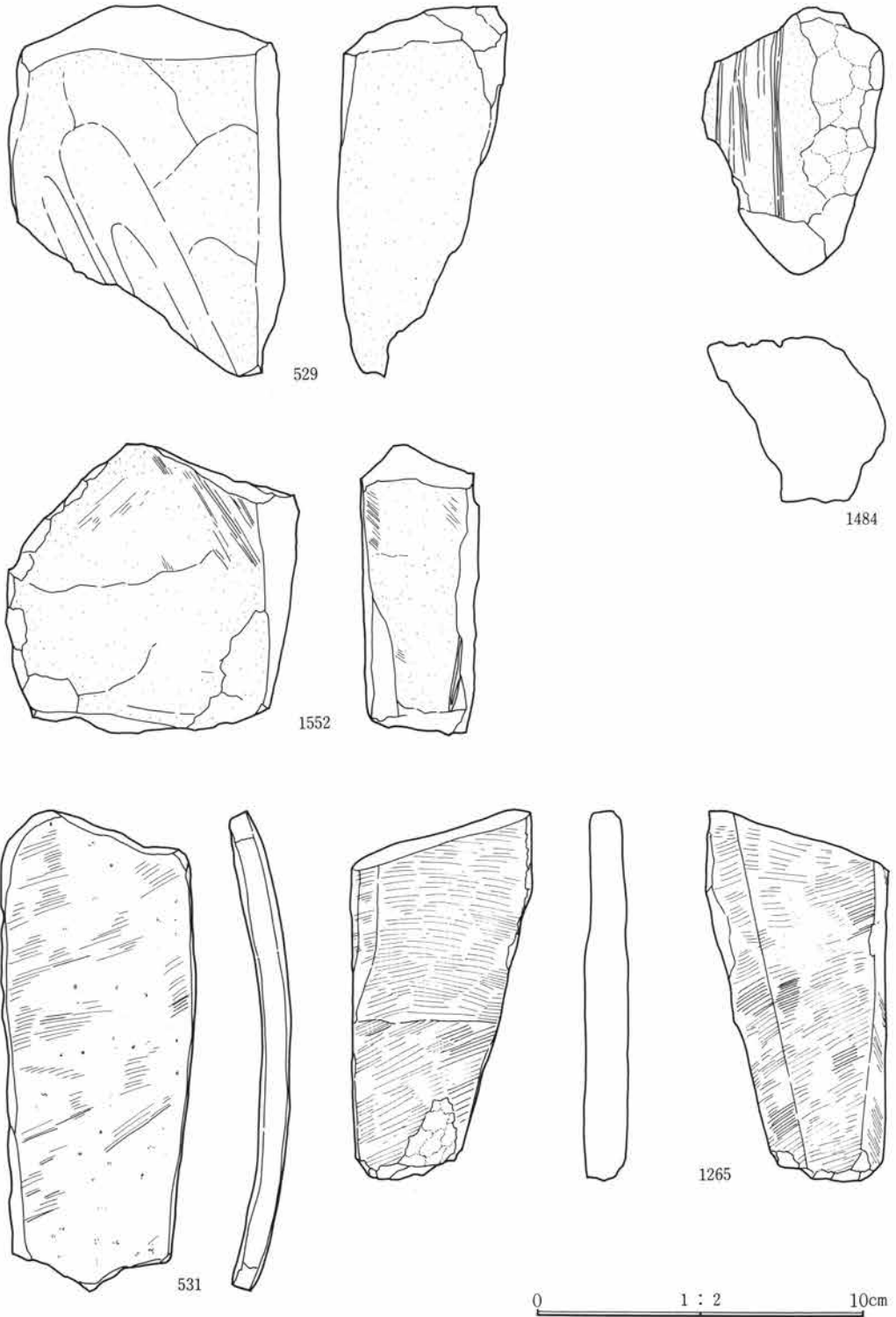
第6章 検出された遺構と遺物



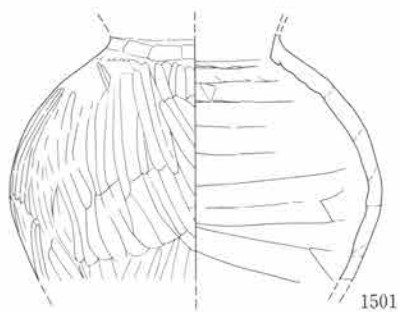
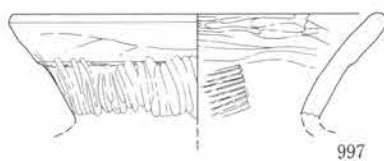
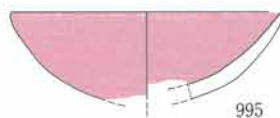
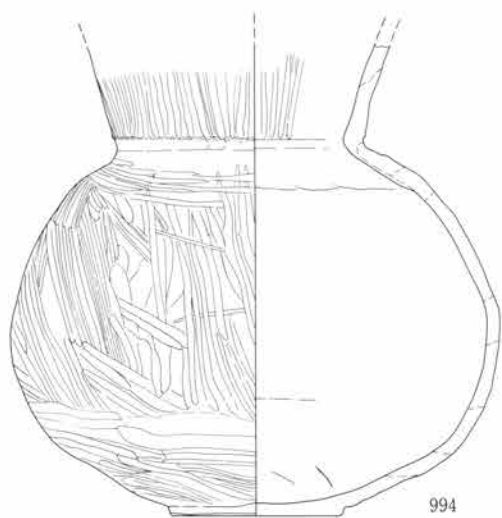
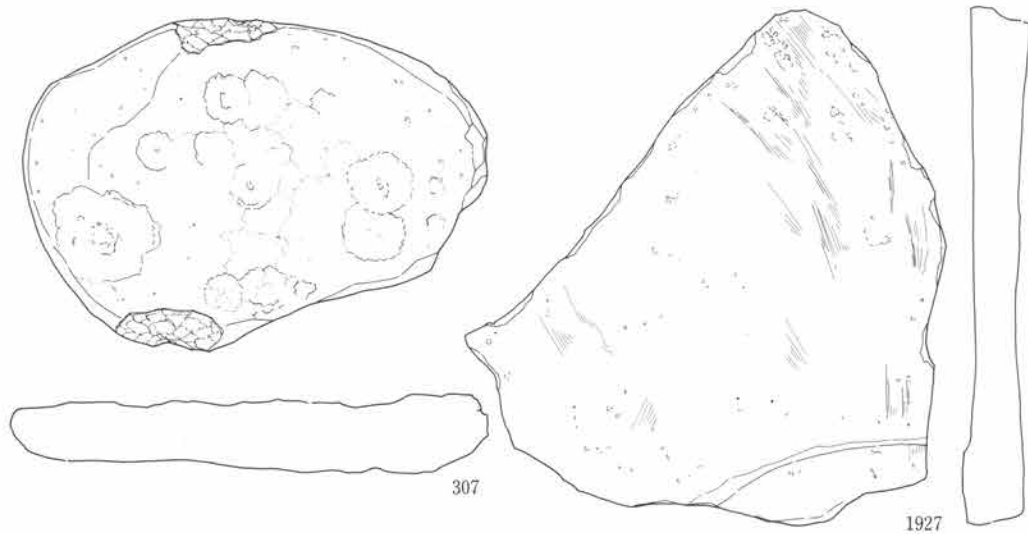
第77図 7区41号住居跡遺物図(3)



第78図 7区41号住居跡遺物図(4)



第79図 7区41号住居跡遺物図(5)



第80図 7区41号住居跡遺物図(6)

0 1 : 3 10cm

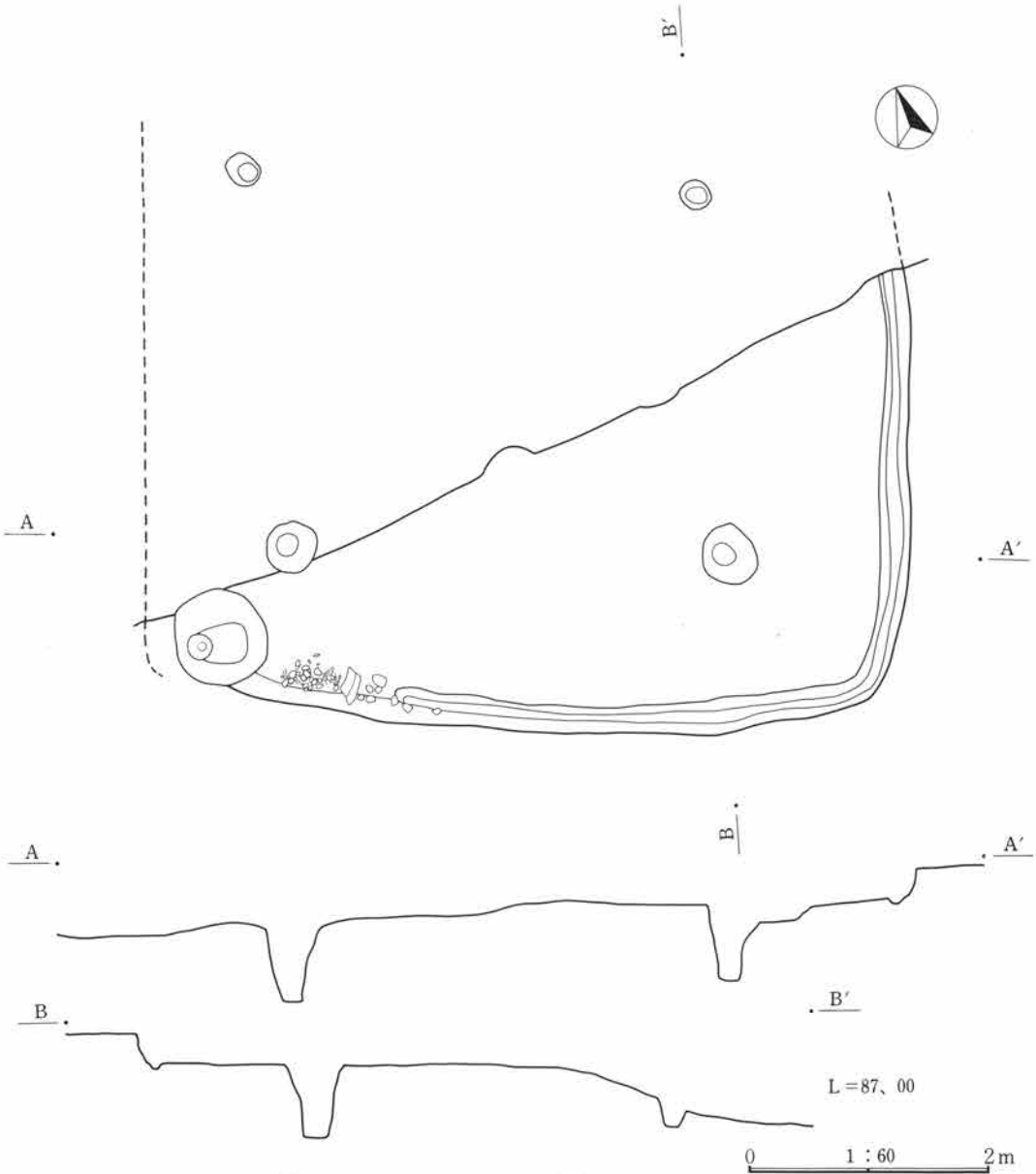
第7表 7区41号住居跡出土遺物観察表

(第80図、図版 35・36・37)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
994	壺 土師器	頸-9.9、胴-19.6、底-7.0、高-(18.8) ○口縁部を欠くのみ	砂粒を含む。酸化、軟質。橙色	平底、球胴の壺。最大径、体部やや下位にあり。体外面、口頸部内面、ヘラ磨き調整。体内面、ていねいなナデ調整、頸部内面、粘土積痕あり	
995	器台 土師器	口-[11.0]、高-(3.5) ○坏部	砂粒を含む。酸化、軟質。赤橙色	内湾して、ひろく体部の坏部。内外面、ヘラ磨き調整	内外面、赤色塗彩あり
996	埴 土師器	口-[13.0]、高-[6.0] ○ $\frac{1}{8}$	砂粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	小型丸底埴。体部上位で張りをもつ。頸部～口縁部、沈線で区切り、くの字に外反する。外面、ハケナデ後、ヘラ磨き調整	
997	壺 土師器	口-[15.1]、頸-[9.8]、高-(4.3) ○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	折りかえし複合口縁の壺。口縁部ヨコナデ、頸部、タテヘラ磨き、内面ヨコヘラ磨き、頸部、ヘラナデ調整	外面、黒色付着物あり
998	甕 土師器	底-5.3、脚裾-9.0、高-(5.4) ○脚部のみ	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	台付甕。脚台部、ハの字にひらき、端部、折りかえし。体外面、ナナメハケナデ後、タテナデ調整	
999	埴? 土師器	底-[3.0]、高-(1.1) ○小片	砂粒を多く含む。酸化、軟質。明褐色	平底。体部、大きくひろく。内外、ナデ調整。器肉、薄手。ミニチュアか	
1501	埴 土師器	頸-[6.8]、胴-[14.8] ○ $\frac{1}{8}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。赤褐色、内面黒色	体部、球形。中位より下に、最大径をもつ。外面、ヘラ磨き調整、内面粘土積痕あり、ヨコナデ調整。頸部内面、粘土接合痕あり	

玉類未成品類は6750点ある。管玉工程品1308点、勾玉工程品61点、琴柱状工程品104点が主な内訳だが、琴柱状品の形割が多いのが特徴である。管玉と勾玉は、他の工房と同様に長さ1.50cmと2cm前後に分けられる。第75、76図は管玉の石核から成品までを示したが、円盤状に復原される石核の大きさは長さ4～6cmの大きさが一般的で、打痕、刀痕を多く残している。同様に第78図上段の530、909、1523の3点の石核は、打痕、刀痕を残しており、工房内搬入時が亜角礫、円礫に近い状態であったことを示している。最大の909は、長さ10.6cm、幅、厚さ5.50cmの亜角礫で平坦面を利用した粗い剝離面があり、530は分割目印の刀痕を残している。

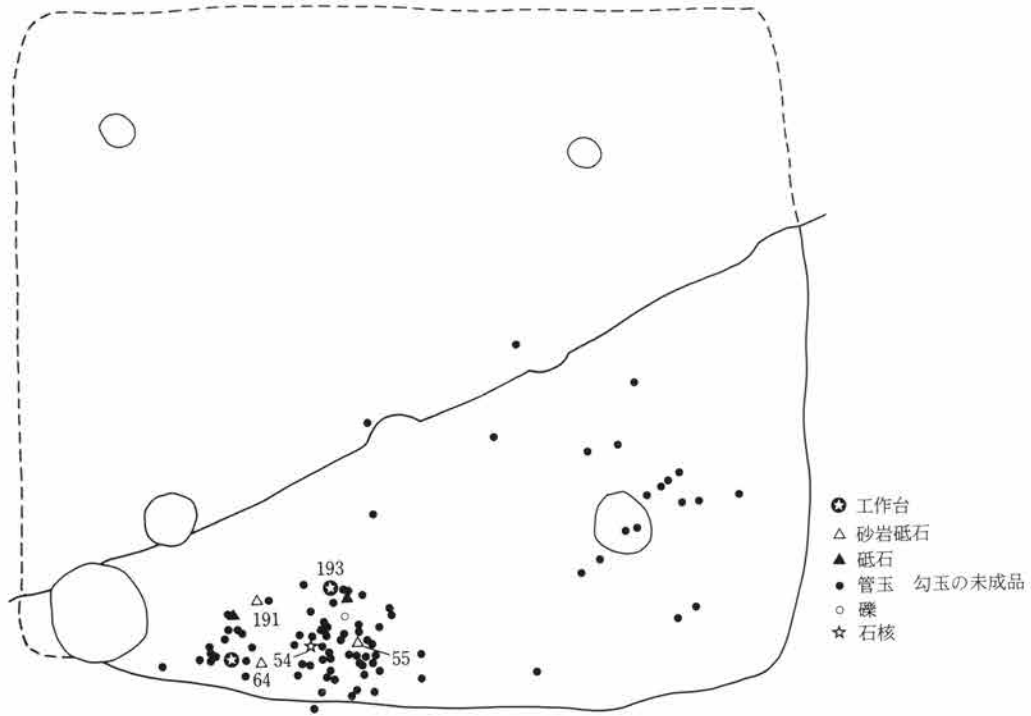
工具、砥石類も多い。棒状礫を使用し、砥面を持つ956、上下両端に敲打痕を持つ1590、1925は代表的な礫器で輝石安山岩、307、1927の工作台は、擦痕、敲打痕を持ち、割石と扁平礫を使用している。307はひん岩、1927は輝石安山岩である。第79図は砥石である。1265の緑色片岩を除いて、いずれも砂岩製で、1484は条痕を持つ。石質の硬軟で用途が異なるか。(女屋)



第81図 7区51号住居跡遺構図

7区51号住居跡（玉作工房跡）（第81～85図、図版38・39）

本工房跡は、3号古墳周堀、50号住居跡と重複するため、南半分のみ確認されただけで北半分は推定による。規模は、南辺6m、東辺推定6mを測り方形を呈する。方位は東辺で $N-19^{\circ}-E$ を示す。壁は、東辺で24cmを測り緩傾斜である。床面は、ローム漸移土まで掘り下げ、平坦に踏み固めているが、わずかに北側にかけて低くなる。柱穴は、主柱穴4本と推定され、径30～40cm、床面からの深さ60cm前後である。周溝は、西南隅を除いて確認され、他にもめぐる可能性は高い。炉跡は、確認範囲にはなく、他の例からして中央部寄りの位置が推定される。



第82図 7区51号住居跡遺物分布図

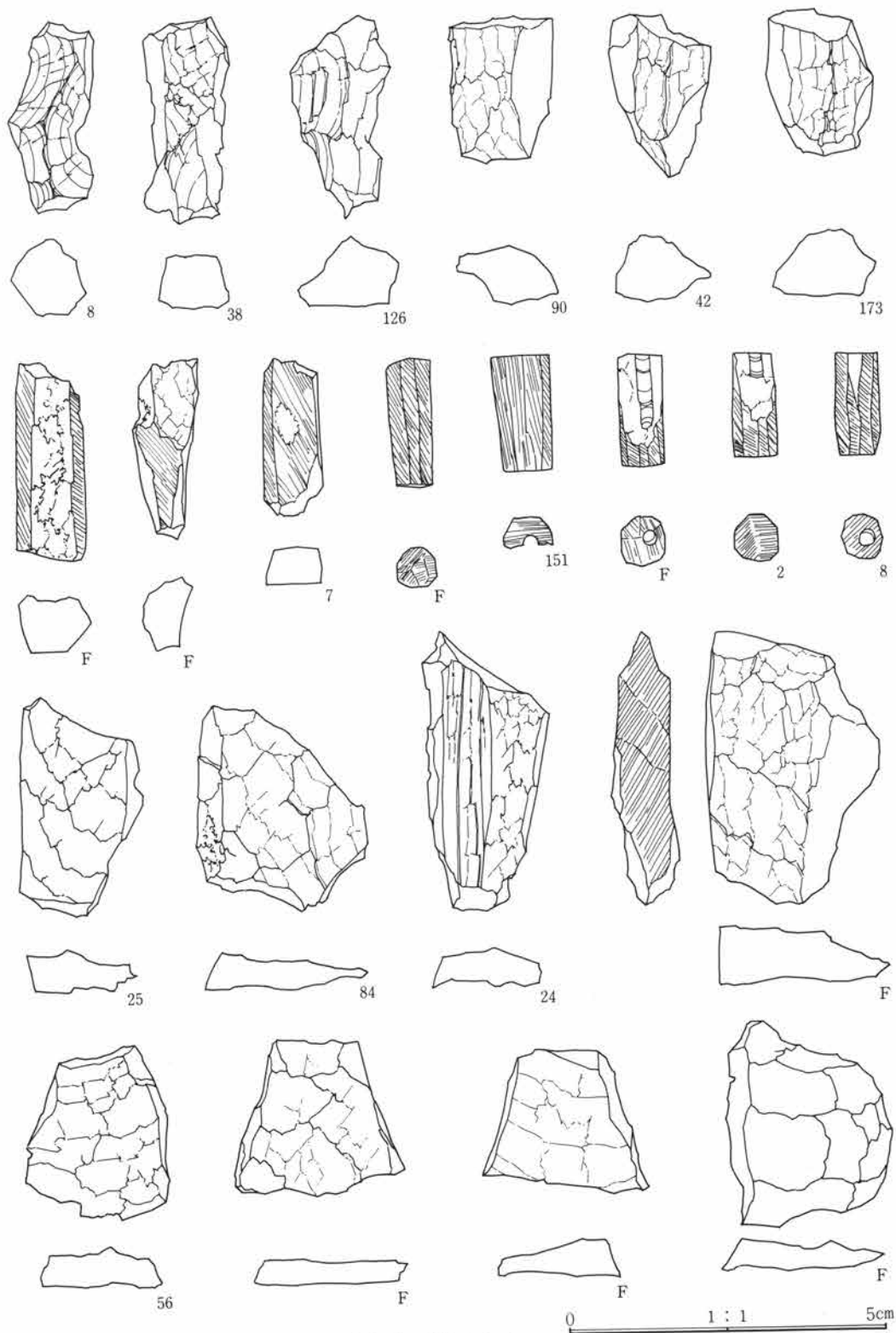
工作用施設は、柱穴を除いて大小7基の円形を主とする土壇が確認されたが、床面下のものも含まれ、工作用ピットとしては、遺物集中箇所隣接する西南隅にかかる79×76cm、床面からの深さ30cmの円形土壇が相当する。このピット際から壁際にかけて幅約10cm、長さ約40cmの帯状の範囲で玉砂利敷があり、工作台、砥石、玉未成品の遺物が集中している。この玉砂利敷は、6区9号、7区41号の工作用ピットにかかって確認されたが、それに比べて石が大きく、壁際に帯状に分布するのが特徴である。

遺物分布は、確認範囲全体と古墳周堀内に混入した状態で多量の未成品等がある。他の工房跡と同様に、土器の個体数は極めて少なく、台付甕の破片等を見るにすぎない。玉成品は器種別に見ると、管玉、勾玉、琴柱状があり、琴柱状には良好な資料がある。工程別では、管玉以下、一連の工程をたどれる資料が石核以下揃っているが、全体量が少なく、傾向を見るにすぎない。道具の組成は、玉砂利敷に接して緑泥片岩の板石を用いた工作台、砂岩質の砥石、擦痕を持つ礫がある。他の工房跡で一般的な礫器の存在が貧弱で、古墳周堀で削りされた北辺側にその存在が求められるか。砥石は、いずれも破片だが石皿状、蒲鉾状、手持ち砥などの形状がある。

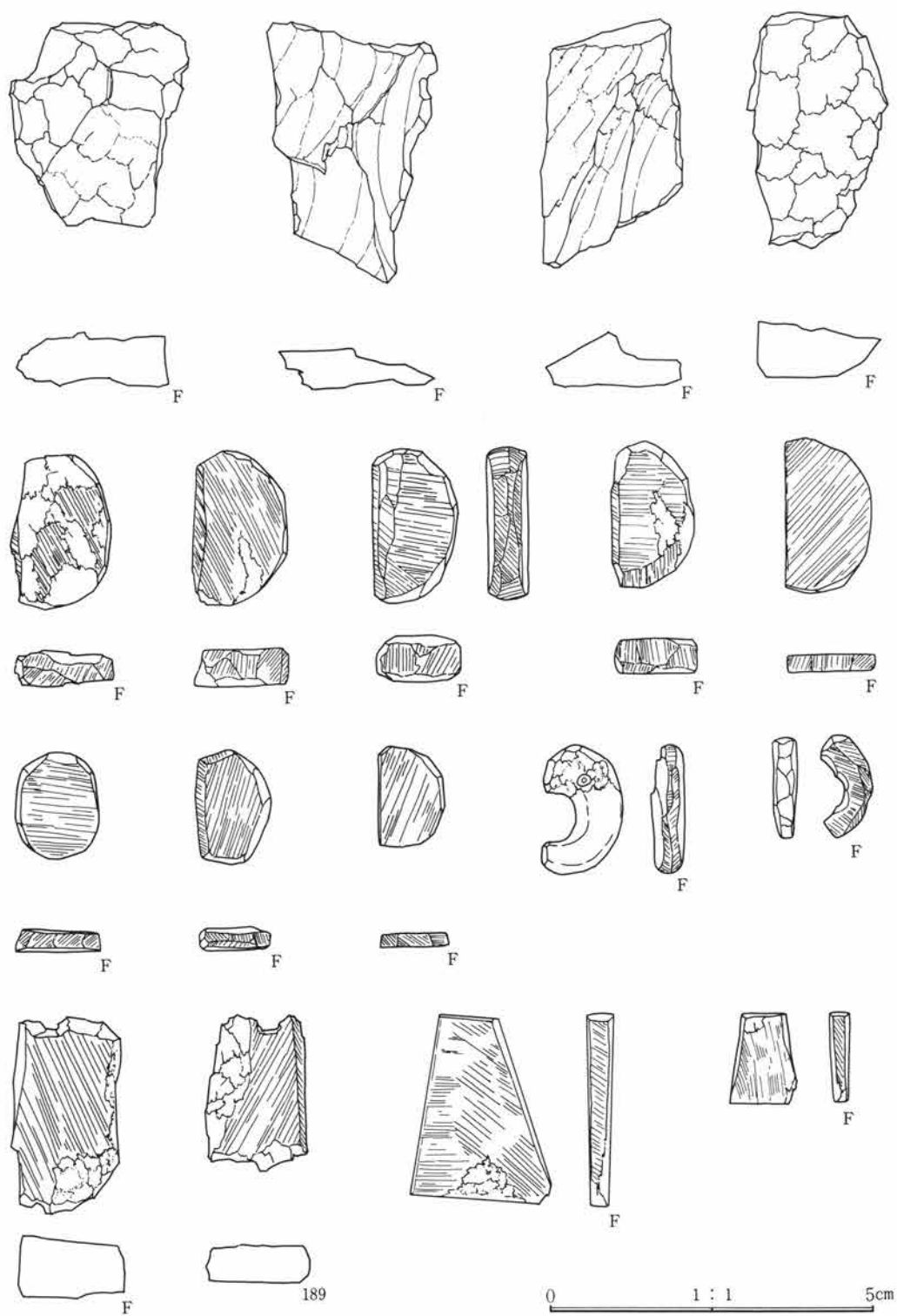
分布上の特徴としては、形割工程以上で見ると工作用ピット内に殆ど見られず、工作台を含む玉砂利敷の周囲に集中があり、道具分布と合せて、形割、研磨等の場が推定される。

遺構の時期は、伴出土器の特徴から古墳時代前期である。

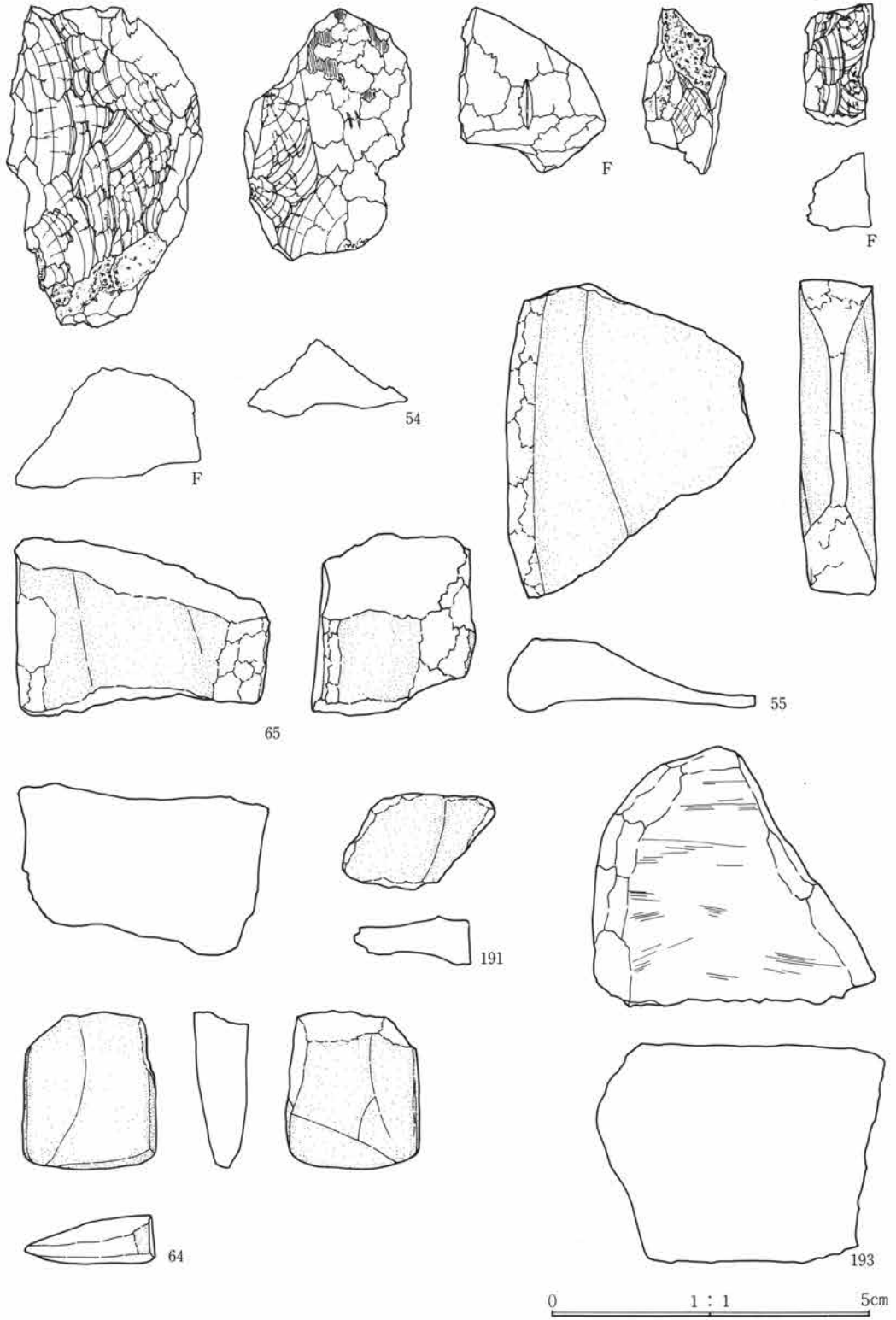
(女屋)



第83図 7区51号住居跡遺物図(1)

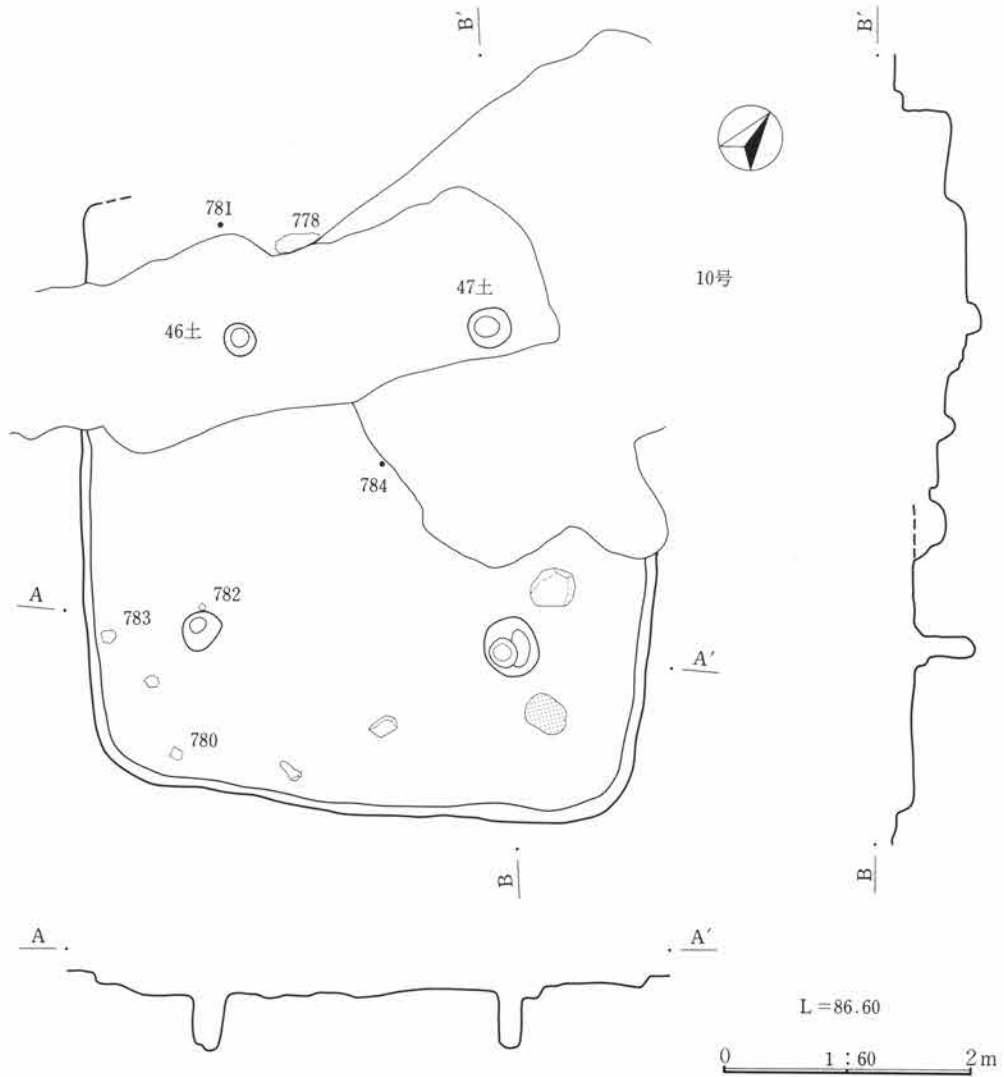


第84図 7区51号住居跡遺物図(2)



第85図 7区51号住居跡遺物図 (3)

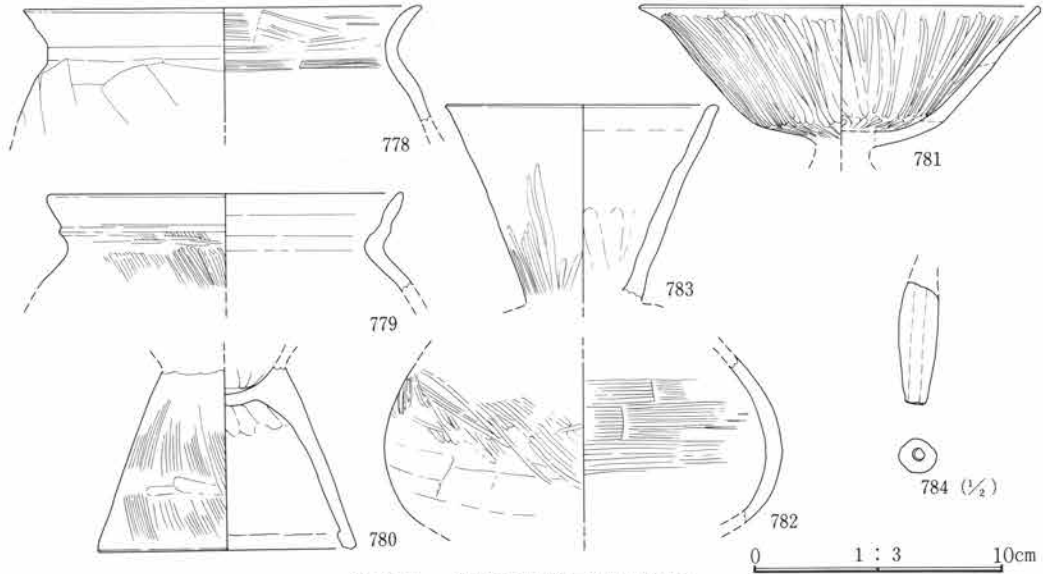
2 竪穴住居跡



第86図 6区20号住居跡遺構図

6区20号住居跡 (第86・87図、第8表、図版40・41)

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。北辺側に10号住居跡、西辺に46、47号土壇が重複し、最も古い。これら遺構との重複と確認面が浅いため、北辺側は詳細さを欠く。規模は、南辺4.60m、西辺は推定4.85mを測り、平面形は台形状である。方位は西辺でN-46°-Wである。床面は、ロームを踏み固めているが重複等により全体の遺存状態は悪い。柱穴は主柱穴が4本確認された。直径25~43cmの円形で、床面からの深さ44~51cm、柱間2.05~2.60mである。炉跡は確認されなかったが、東南隅寄りで焼土分布数ヶ所がある。遺物は、甕、台付甕、高坏、長頸埴があるが個体数は少ない。遺構の時期は、出土遺物の特徴により古墳時代前期とする。(新井)

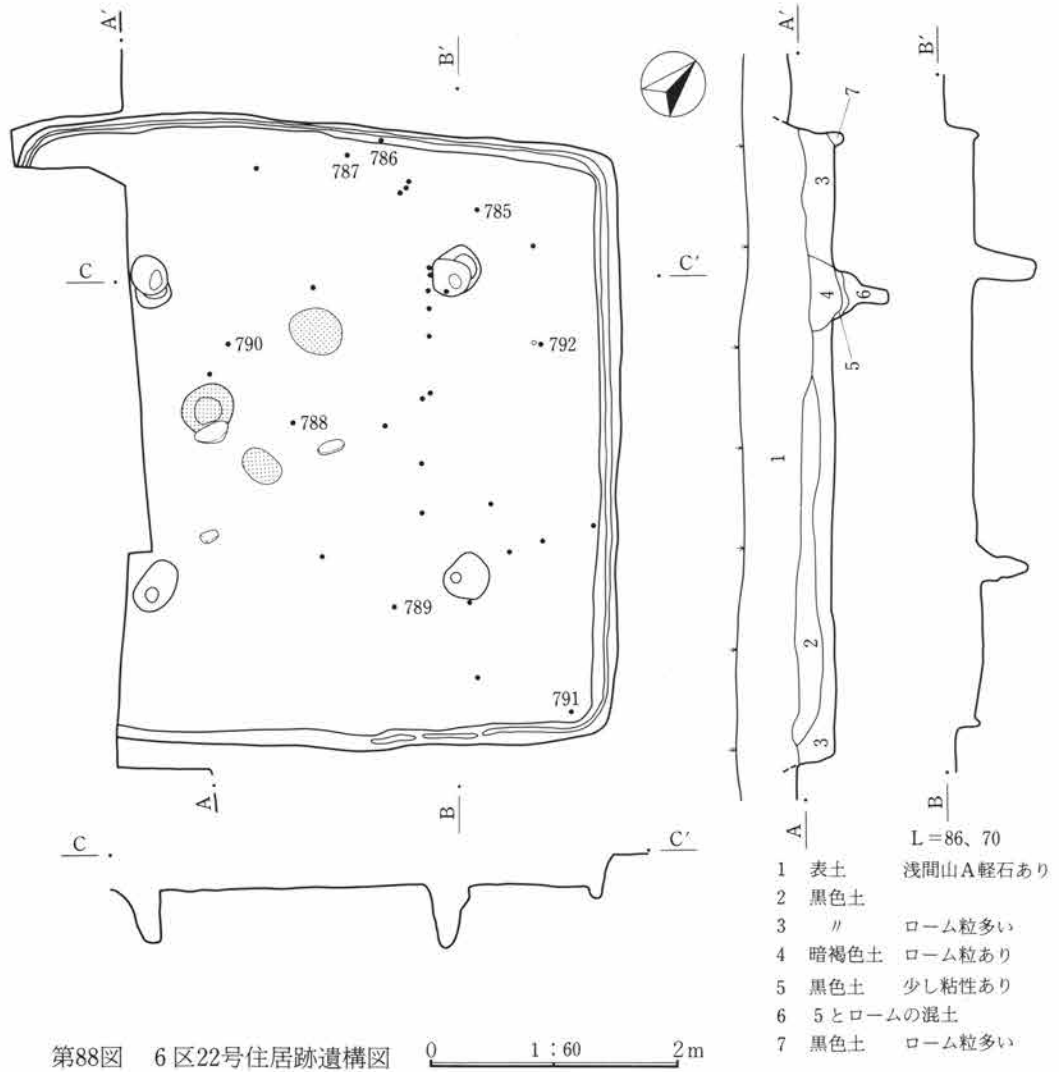


第87図 6区20号住居跡遺物図

第 8 表 6区20号住居跡出土遺物観察表

(第87図、図版 41)

番 号	土 器 種 類	法量 (口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
778	甕 土 師 器	口-[16.0]、高-(4.5) ○小片	砂粒、輝石を含む。酸化、軟質。暗褐色	くの字に外反する口縁の甕。体外面タテヘラケズリ、内面ヨコナデ、頸部内側、ヨコハケ目あり	
779	甕 土 師 器	口-[14.2]、高-(3.7) ○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	S字状が変化した口縁の甕。体外面ハケナデ調整。内面、ヨコナデ。器肉、やや厚手	フク土出土
780	甕 土 師 器	底-5.0、脚裾-10.4○脚台部のみ	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	台付甕。脚部、ハの字にひらき、端部、内側に折り返しあり、外面、全面、ハケナデ調整。底部、内底部、指おさえ痕あり	
781	高 坏 土 師 器	口-16.2、底-7.6、高-(15.6) ○坏部のみ	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	底部から体部へ、丸い稜をもち、直線的にひろがって、口縁わずかに外反。内外、タテヘラ磨き調整	
782	埴 土 師 器	胴-[16.0]、高-(7.6) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	体部下位に最大径をもつ。上位、ヘラ磨き、下位、ヘラナデ、内面ハケナデ調整	
783	埴 土 師 器	口-[11.0]、頸-[4.8] ○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	埴の口縁部。直線的にひらき、端部わずかに外反。外面、ヘラ磨き調整 内面、ナデ調整	
784	土 鍾	長-(3.25)、径-1.0、孔径-(0.25)、端部細く、中ぶくらみのタイプ			

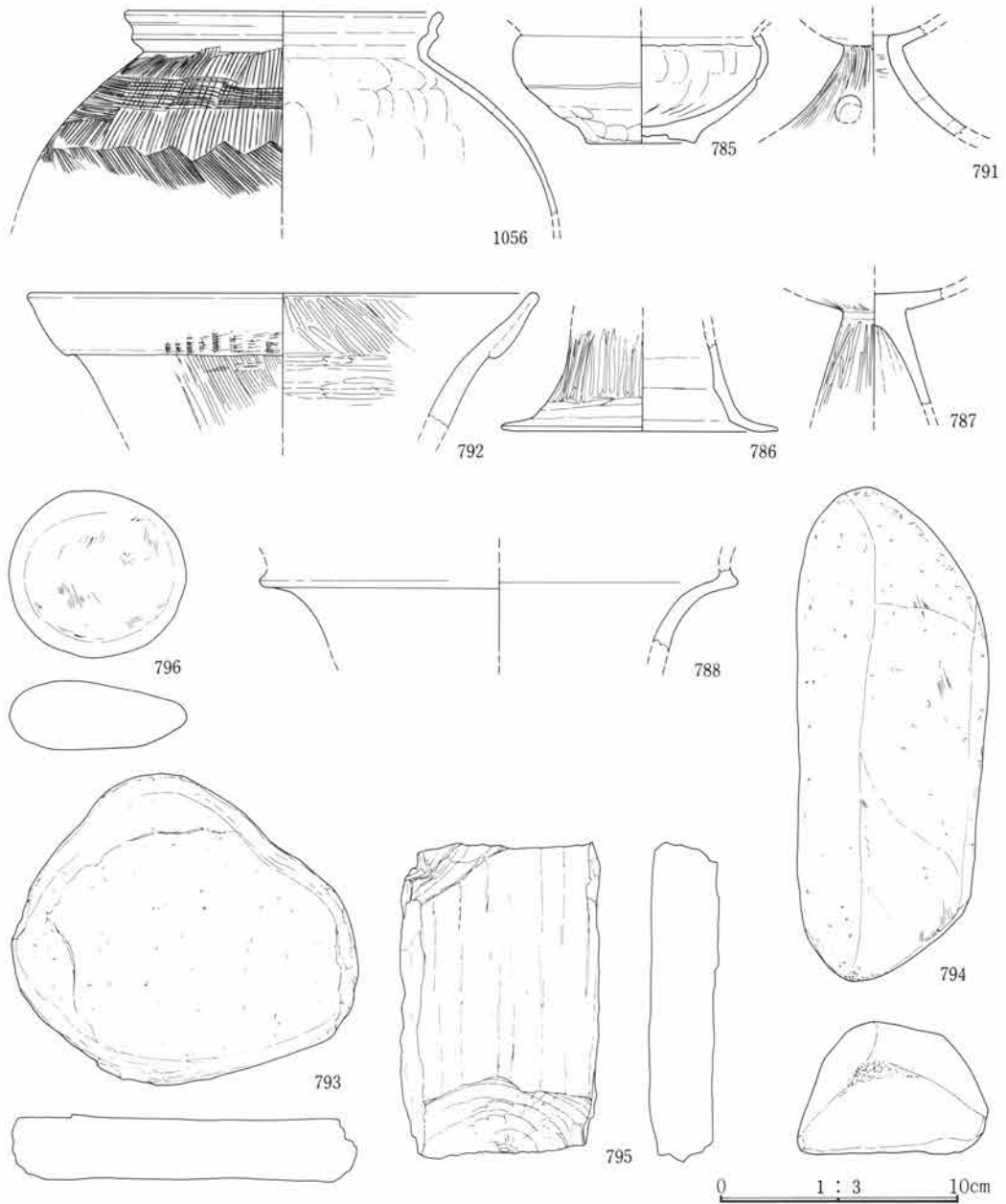


第88図 6区22号住居跡遺構図 0 1 : 60 2m

6区22号住居跡 (第88・89図、第9表、図版40・41)

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。西辺側は調査区外にあるが、西北隅を確認出来たことで全体の様子を推定する。規模は、東辺で4.60m、北辺で4.76mを測り、平面形は方形を呈する。方位は東辺でN-47°-Wを測り、6区同時期の竪穴住居跡とほぼ一致している。床面は、ほぼ柱穴を結んだ中央部では、ロームを掘残して踏み固め、壁際は約1mの帯状に黒色土を用いて貼床としているが軟弱である。壁は、西辺側断面によると垂直に近い立ち上がりを持ち、高さ約38cmである。南辺側の西半分を除く壁際には、幅約15cm、深さ10cmの周溝がめぐっている。周溝が確認されなかった部分では、床面が周囲よりわずかに高くなるのが認められ、入口状のものに相当するか。柱穴は、主柱穴が4本確認された。北辺側の2本には重複が見られ建替えによるものか。柱穴の直径は28~35cmのほぼ円形で、床面からの深さ28~50cmと北辺側が深い。柱間は2.46~2.52mである。炉跡は、中央部西辺寄り縁石を持つ地床炉が確認された。直径約40cmの円形

で浅い皿状の堀方を持ち、焼土量も多く炭化物も含み、よく焼けている様子が見られた。この炉脇にも焼土分布2ヶ所が見られたが、床面より1～3cm浮いた状態で、堀方を持たない。遺物は全体に見られたが壁際には少ない。また、個体数は多いものの破片状態のものが殆どで器形を窺えるものが少ない。台付甕、壺、高坏、小型鉢、器台、敲石、砥石、礫器がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴により古墳時代前期である。 (女屋)

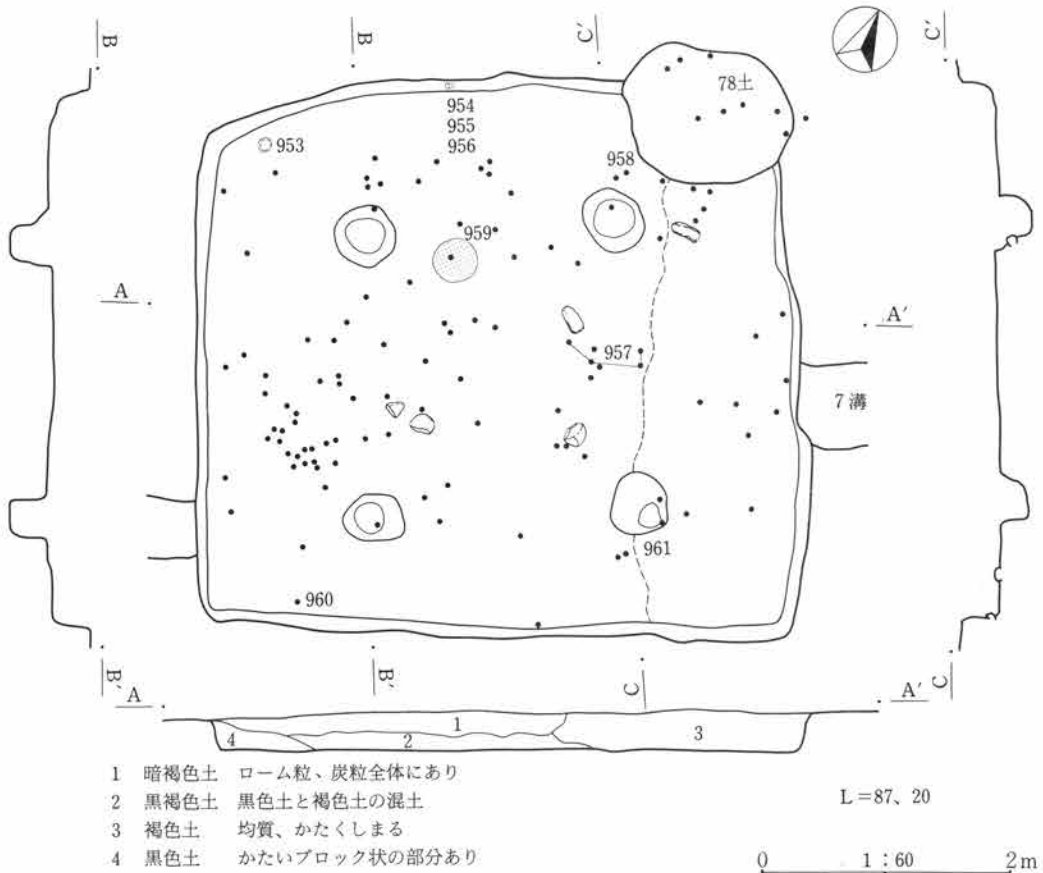


第89図 6区22号住居跡遺物図

第9表 6区22号住居跡出土遺物観察表

(第89図、図版 41)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
785	鉢 土師器	頸-[10.1]、底-4.6、高-(4.5) ○ $\frac{1}{3}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい黄橙色	凹底、小型の鉢。底部より、たちあがって、体部上位で大きく内湾し張りをもつ。粘土積痕残しヨコナデ調整、下部ヘラナデ調整	
786	高坏 土師器	脚裾-[11.2]、高-(3.8) ○ $\frac{1}{6}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい橙色	脚部のみ。直線的にひろがり、裾部で、急激に折れまがる。内側、稜をもつ。外面、タテヘラ磨き調整	
787	高坏 土師器	底-[2.6]、高-(4.8) ○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。 橙色	体〜脚部の一部のみ。外面、ヘラ磨き調整、内面、しぼりあり	
788	壺 土師器	○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。 橙色	有段口縁の壺。器肉、薄手。内外、ナデ調整	
791	器台 土師器	底-2.4、高-(4.5) ○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい褐色	大きくひろがる脚部、透孔、3個あり。外面、タテヘラ磨き調整、内面、ヘラナデ	
792	壺 土師器	口-[21.4]、高-(5.6) ○小片	砂粒、輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	折り返し複合口縁の壺。折り返し下部に、クシ目による刺突文、頸部、タテハケ目、内面、ヘラ磨き調整	
1056	甕 土師器	口-[13.2]、高-(8.3) ○ $\frac{1}{6}$	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	S字状口縁の甕。体部、丸味強い。体部、ヘラケズリ後、タテハケ目、体部上位にヨコハケ目、下位ナナメハケ目、体内面、指おさえ痕あり	
793	礫器	長-13.0、巾-14.3、厚-2.4、輝石安山岩、板状の円礫、明瞭な加工痕、磨耗痕はないが、工作台様の用途か			
794	敲石	長-20.5、巾-8.0、厚-5.0、ひん岩、下端部に敲打痕がかすかに見られる			
795	礫器	長-13.2、巾-8.3、厚-2.8、雲母石英片岩、板状礫の一方の端部に、刃付け様の剝離を施している			
796	磨石	径-6.9×7.4、厚-2.9、輝石安山岩、表裏面にかすかに線条痕あり			



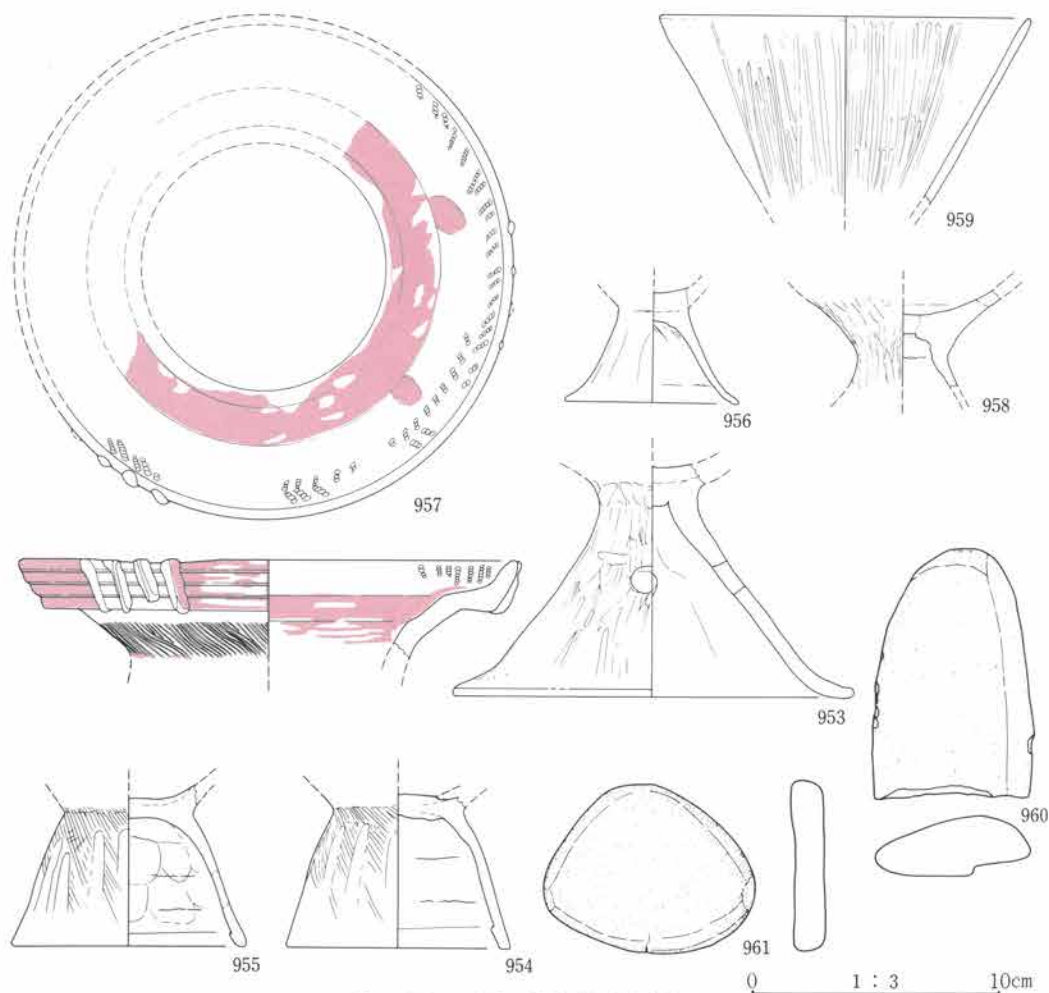
第90図 7区25号住居跡遺構図

7区25号住居跡 (第90・91図、第10表、図版41)

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。78、79号土坑、7号溝、3号古墳周堀と重複し、古い方から78、79号土坑、25号住居跡、3号古墳、7号溝の順である。玉作工房跡の24号住居跡とは南北に隣接し、3号古墳前方上部上の56、57号住居跡とともに玉作工房跡群との南辺境界を成す住居跡として位置付けられる。

規模は、北辺4.70m、西辺3.96mを測り、平面形は東西方向が少し長い方形を呈し、北辺は緩やかな弧を描く。方位は南辺でN-66°-Eを測る。床面は、全体的にローム層を掘り下げて平坦にしているが、東辺側の壁際から約1mの範囲が黒褐色土を用いて貼床にしている。壁の状態は南辺側は溝との重複で上面を失うが、四辺とも垂直に近い掘り方を持ち、高さは約30cmである。周溝は、北辺壁際に不整列の浅い帯状の落ち込みが見られたが断定できなかった。柱穴は、主柱穴4本と北辺側に大小のピット4本が確認された。主柱穴は、直径約45cmの角形に近い掘り方を持ち、底面中央部には径10cm程の固い部分が見られ、柱痕を示すものか。床面からの深さは23~38cmあり、柱間は2~2.30mである。北辺側のピットは2本が住居に伴うが、入口状のものとはならず不

整列である。炉跡は、中央部北寄りで地床炉1ヶ所が確認された。円形の浅い堀方を持つが、上面がわずかに焼けた程度で残存する焼土の量も少ない。また縁石もない。遺物は、全体に散漫な状態で出土し、縄文時代の78、79号土坑からの混入が大半である。その中であって当住居跡に伴うものは、壁際に少なく中央部に偏在している。器種としては、台付甕、有段口縁壺、高坏、器台、埴、砥石、礫器がある。台付甕は脚部の個体数が多く、胴部等の破片が少ない。有段口縁壺は、口唇部に粘土紐3～4条を単位として貼付し、内面には縄文を施文している。更に内外面全体に丹彩を施している。No.954～956の3個体は北辺壁中段に密着して、ソケット状にはめ込まれた状態で出土した。砥石、礫器のほかにも、床直もしくは数cm浮いた状態で河原石6点が中央部に散在してある。加工、調整痕を持たないものの当住居に伴うものか。遺構の時期は、出土遺物の特徴から古墳時代前期である。 (女屋)



第91図 7区25号住居跡遺物図

第10表 7区25号住居跡出土遺物観察表

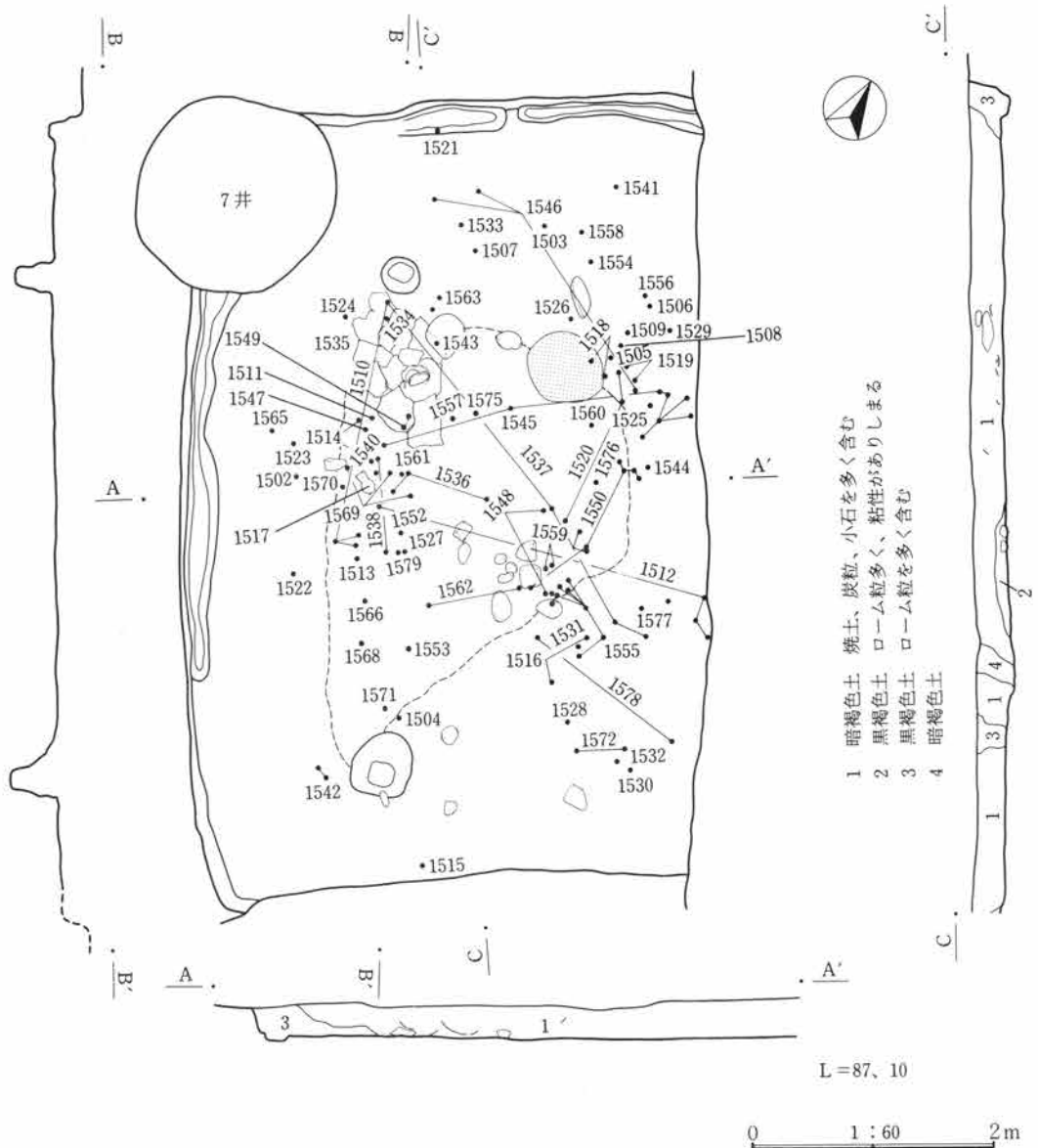
（第91図、図版 41）

番号	土器種類	法量（口径・底径・器高）遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
953	高坏土師器	底-4.2、脚裾-16.1、高一(9.3) ○脚部のみ	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	脚部、大きくハの字にひろく、裾端部、丸味あり、坏部との接合、ホゾによる。外面、タテヘラ磨き調整、内面ヨコナデ。透し円孔、4個あり	
954	甕土師器	底-5.2、脚裾-9.0、高一(6.1) ○脚部のみ	砂粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい橙色	台付甕。脚部、ハの字にひろく。裾端部折りかえしあり。外面、ナナメのハケ目、ナデ消し、内面、粘土積痕あり、ヨコナデ	
955	甕土師器	底-5.2、脚裾-9.4、高一(6.4) ○脚部のみ	砂粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	台付甕。脚部、ハの字にひろく、裾端部、内側に折り返しあり。外面、ナナメのハケ目、ナデ消し、内面、粘土積痕あり、ヨコナデ	
956	高坏土師器	底-2.8、脚裾-7.0、高一4.6 ○脚部のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	小型の高坏。脚部、ハの字にひろがり、裾部で、ややたちあがり、ゆるく内湾してひろがる。端部、平坦。外面、ていねいなナデ、坏部内面、黒色処理、ヘラ磨き調整	
957	壺土師器	口-[20.0]・頸-[11.2]、高一(3.9) ○口頸部のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。淡黄色	有段口縁の壺。くっきりと、はり出した外縁帯上に、沈線3本めぐり、4本1単位の棒状浮文を貼付する。口縁部内面、クシ状工具による、羽状刺突文あり、頸部、外面、タテハケ目あり	口縁外縁帯、頸部、外面、内面下位に赤色塗彩あり
958	器台土師器	底-3.6、高一(3.8)○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。橙色	体部、大きくひろく器台。内外、ヘラ磨き調整	赤色塗彩あり
959	埴土師器	口-[14.8]、高一(8.0)○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。橙色	頸部〜口縁部、直線的にひろがる。口縁端部、薄手の仕上がり。内外、タテヘラ磨き調整	
960	磨石	長-(9.9)、巾-6.4、厚-2.3、砂岩。扁平、蒲鉾状の礫の一面に軽い砥面あり、両側面に打痕あり。破損			
961	磨石	長-6.7、巾-8.4、厚-1.2、砂岩。扁平な小礫の両面に、使用痕あり。完存			

7区45号住居跡（第92～98図、第11表、図版42～45）

本住居跡は、5号古墳々丘下であり、南辺は周堀に切られ、東辺側は道路敷下にある。住居内中央部に密集して出土した土器は、その出土状態とともに大きな特徴となっている。

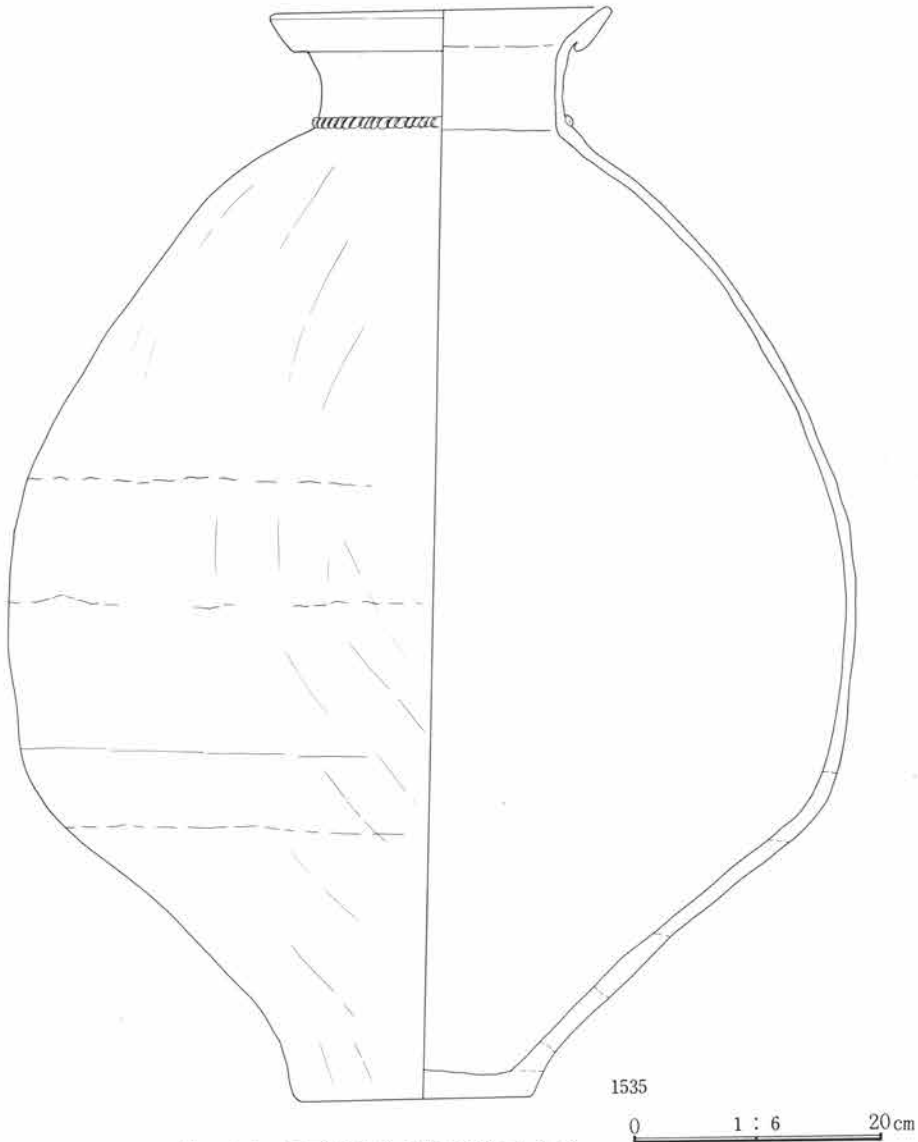
規模は、西辺推定6.50m、北辺4m以上で、平面形は隅丸方形か。方位は北辺でN-60°-Eを示す。床面は、ローム層全体を掘り下げているが、中央部を残して平坦に踏み固め、壁際は黒褐



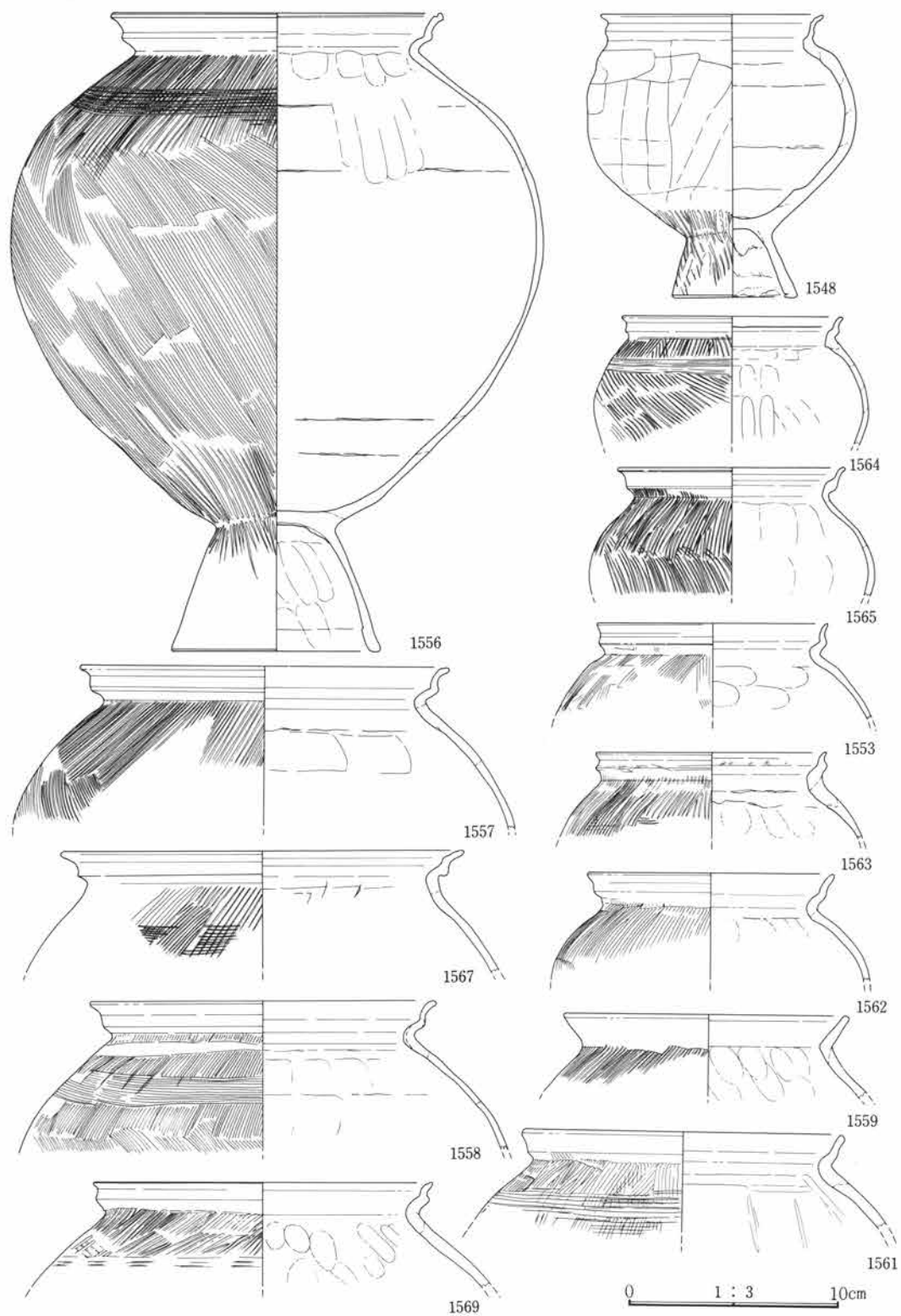
第92図 7区45号住居跡遺構図

色土混じりの土を用いて貼床としている。周溝は、北辺と西辺中程までめぐり、上幅約20cm、床面からの深さ10~15cmを測る。柱穴は、西辺側の主柱穴2本が確認された。直径28~45cmの円形で、床面からの深さ30~43cm、柱間は4.10mを測る。中央部北寄り、円形の浅い地床炉が確認されたが、焼土の量は少ない。覆土は、壁際を除いて焼土、炭粒を全体に含む暗褐色土が広く分布する。この土層中には、多量の遺物があり、台付甕、広口甕、有段・単口縁の壺、高坏、器台、長頸埴、甑、ミニチュア土器等がある。この豊富な器種揃えは、他の住居跡の内容を網羅し、しかも台付甕だけで、126個体以上を筆頭にした多量の土器群は、本遺構の大きな特徴である。その出土状態でも、中央部に壺棺と推定される器高92.5cmの大型壺が、口縁を上にして据えた状態に

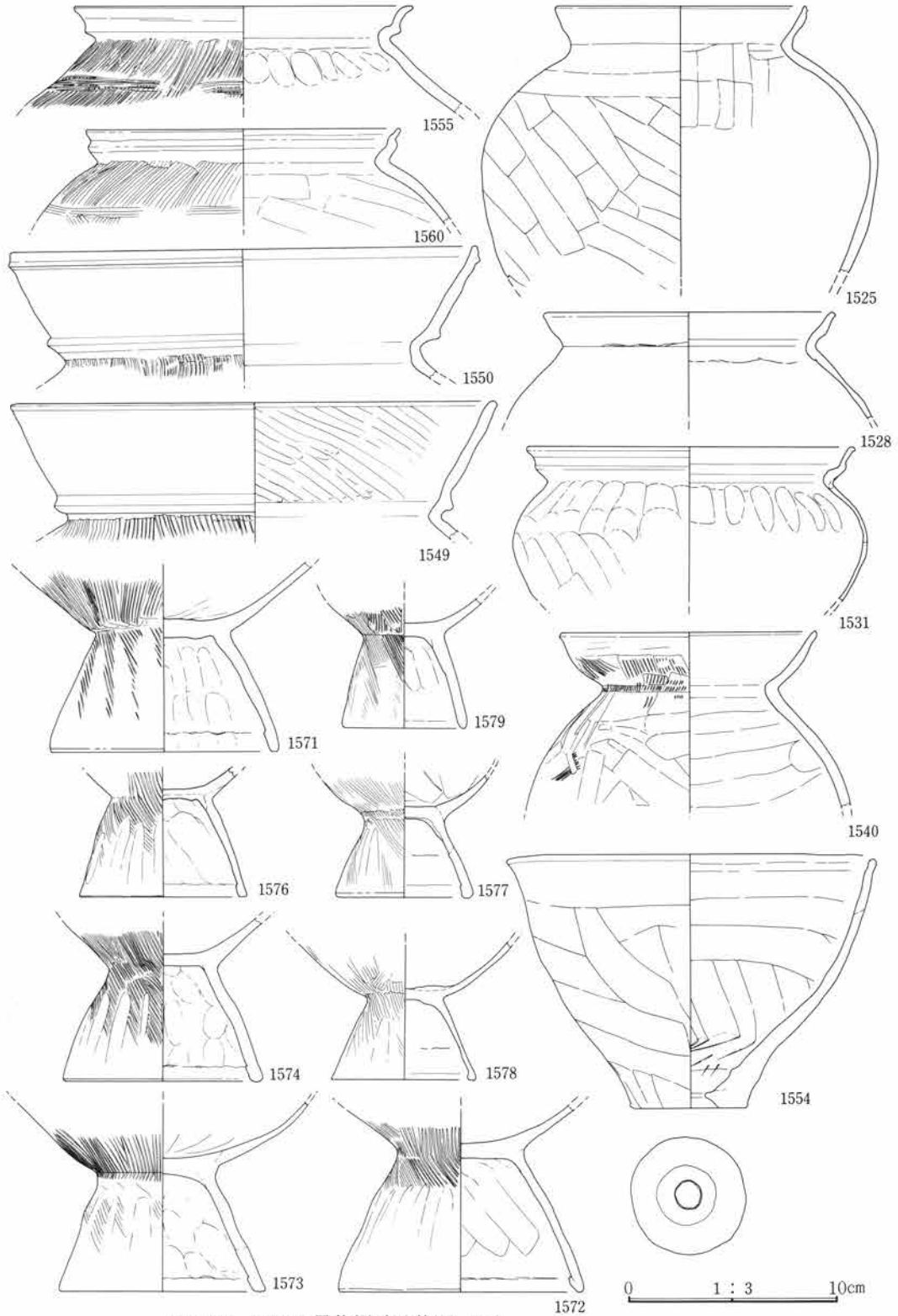
あり、他の土器群は、器種毎の傾向はつかめないが、これを取り囲む様に床面直上で雑然と折り重なっていた。土器には、故意に破損した様子や特定器種の配置といったものは見られない。また、大型壺の口縁部内には、口径より少し小さい河原石があり蓋石の可能性がある。他にも土器と混在して、大小の河原石があり、大型壺と同様に覆うことを目的としたものか。しかし、覆土観察の所見からは盛土と断定できるものはなく、あるいは露呈していたものか。遺構の時期は、古墳時代前期だが、新旧、異系統の土器が混在し、他の住居跡と異なったあり方である。遺構の性格は、弥生時代の壺棺に通ずる大型壺と、他の住居跡に見られない混在した土器のあり方から住居を利用した壺棺を伴う墓とする。 (女屋)



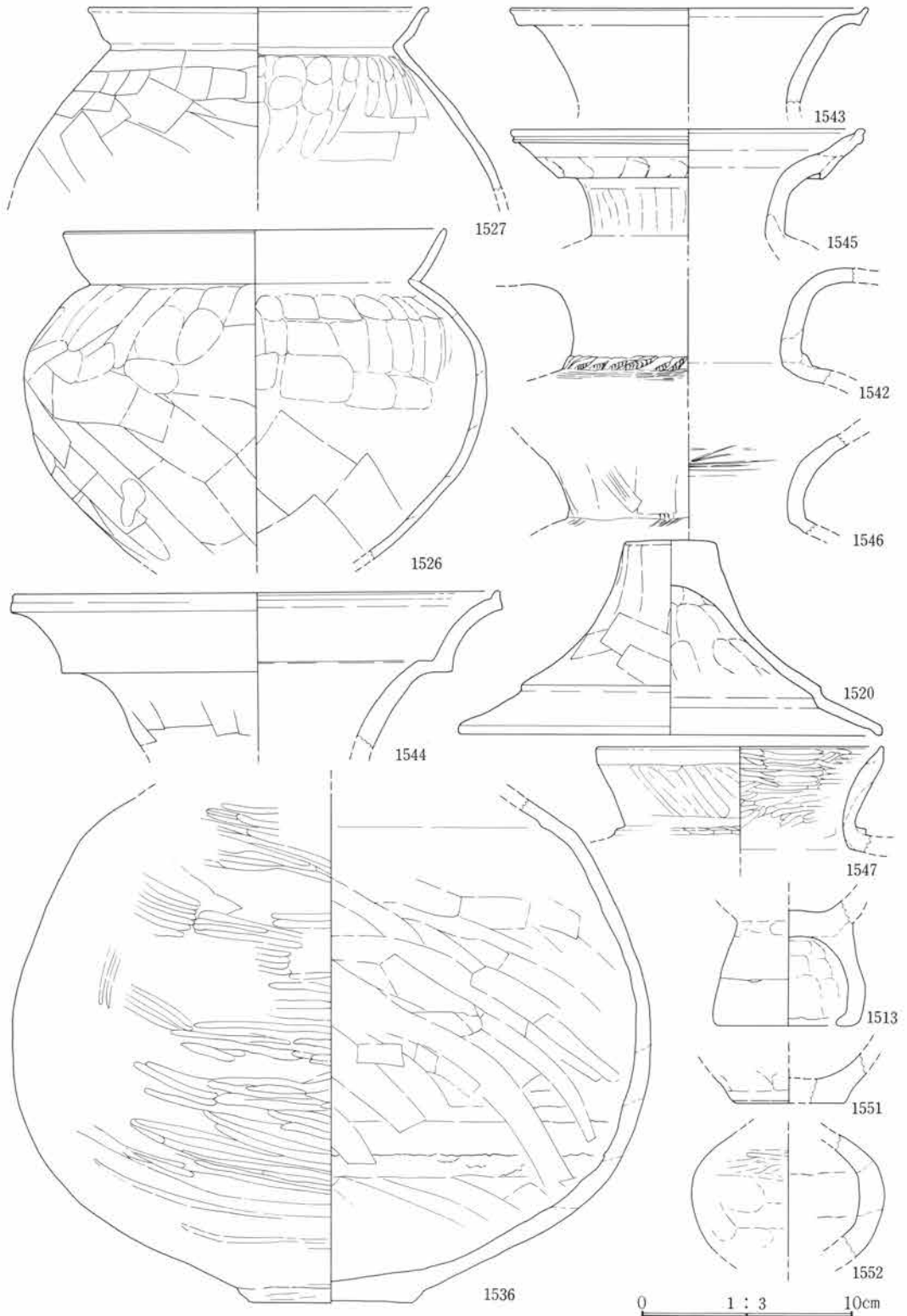
第93図 7区45号住居跡遺物図(1)



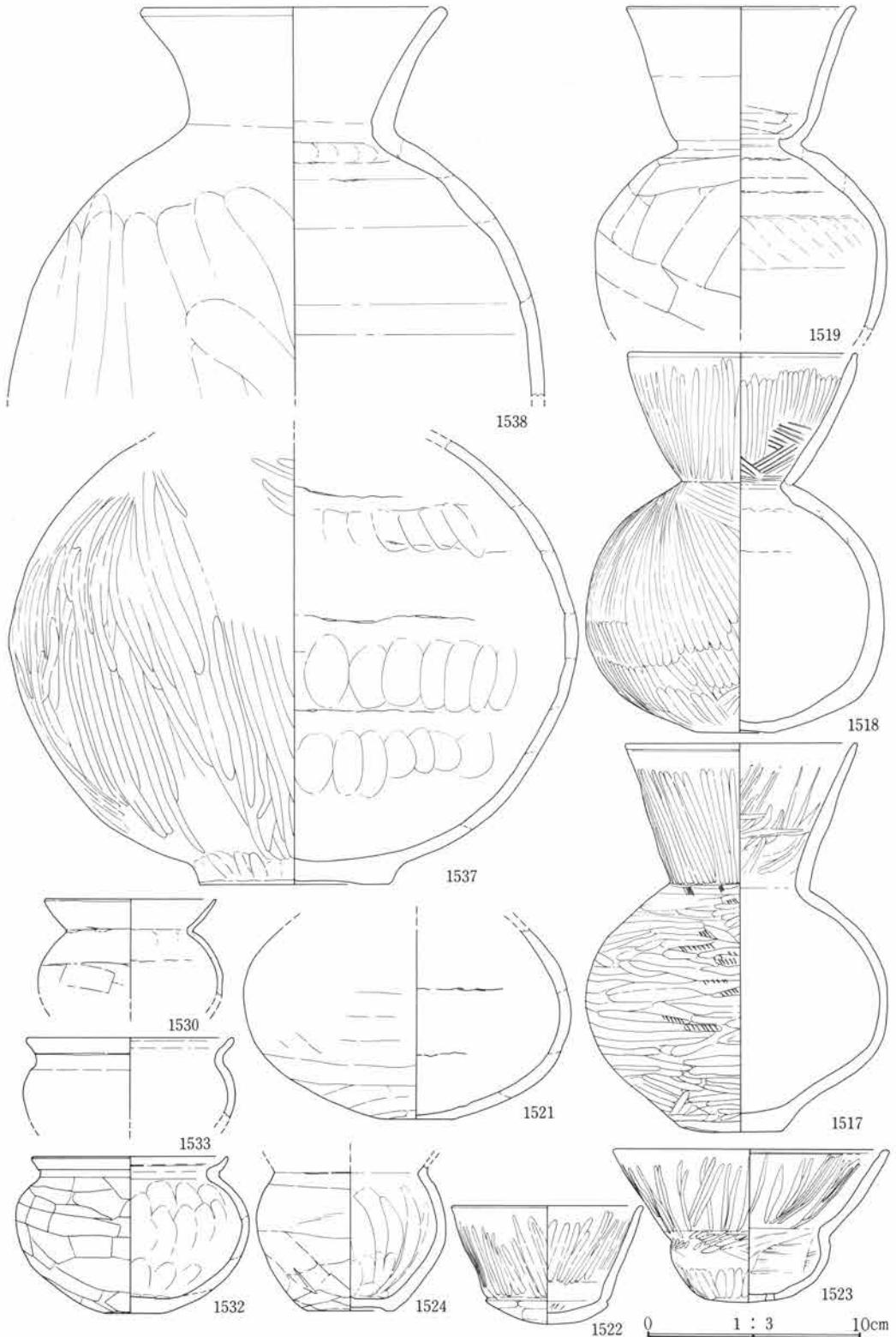
第94図 7区45号住居跡遺物図(2)



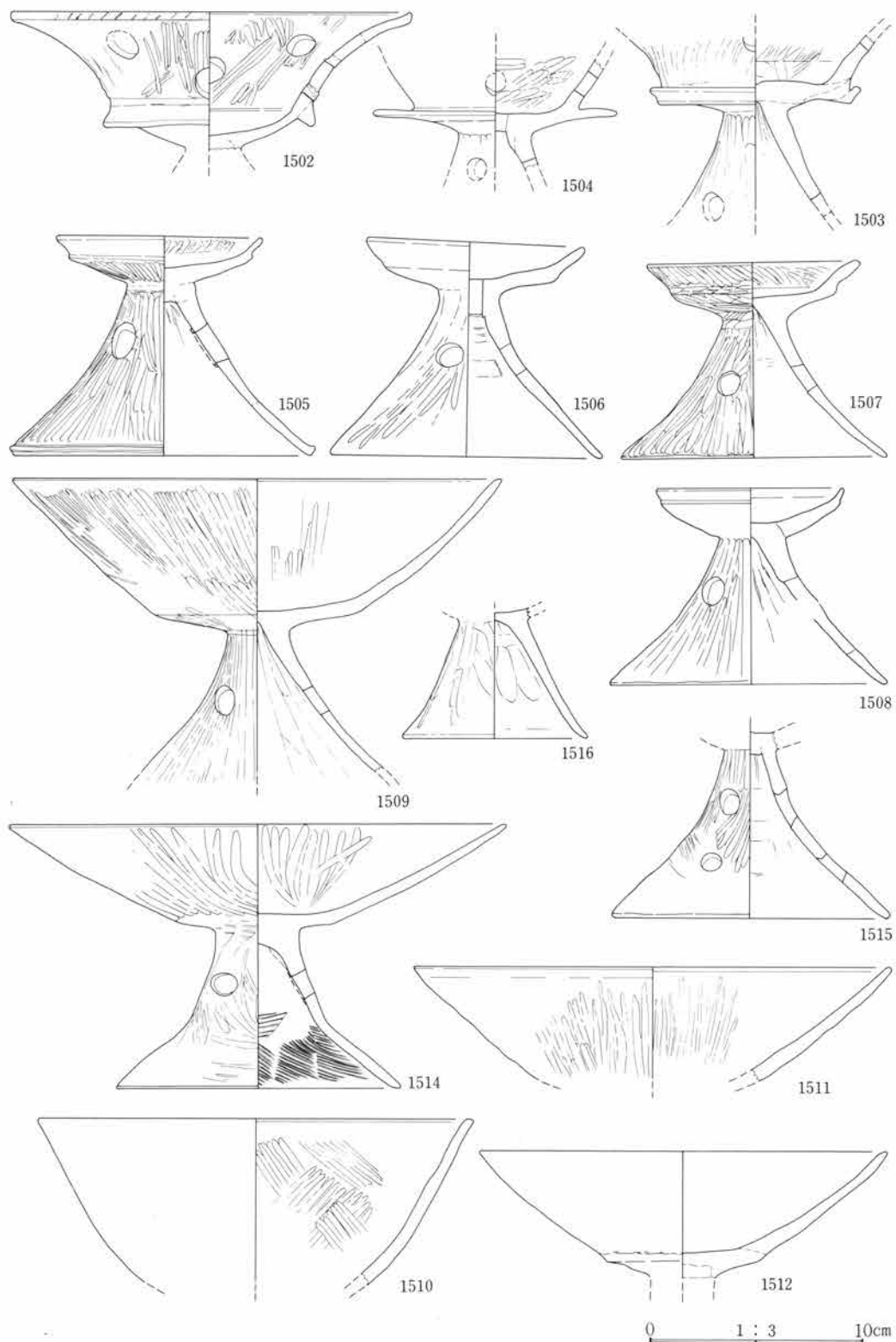
第95図 7区45号住居跡遺物図(3)



第96図 7区45号住居跡遺物図(4)



第97図 7区45号住居跡遺物図 (5)



第98図 7区45号住居跡遺物図(6)

第 11 表 7区45号住居跡出土遺物観察表

(第93～98図、図版 44・45)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
1502	器台 土師器	口-[18.7]、底- 9.9、高-(6.4) ○坏部のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。 橙色	特殊器台。やや内湾する底部。大きく外反する体部。底端部、外縁帯めぐる。口縁端部外側に、クシ目刺突文あり。体部、上下に各4個、計8個の円形透孔、交互に施す。ヘラ磨き調整。器肉、薄手	内底部、スズ状の炭化物付着
1503	器台 土師器	底-[9.0]、高-(7.6)○坏~脚部 接合部のみ	砂粒を多く含む。酸化、軟質。橙色	特殊器台。底部、平坦、体部、外反する。底部外縁帯、S字状口縁様、白色化粧土貼付。体部、円形透孔4個か。脚、透孔、3個、脚内側、しぼり込み。外面、体内面ヘラ磨き	
1504	器台 土師器	底-[11.4]、高-(4.9)○坏~脚部 のみ	砂粒を多く含む。酸化、軟質。橙色	特殊器台。水平な円盤状底部に、体部取付け。体部、外行する。内底部、貫通孔。円形透孔、体部4個、脚部3個。体内面、ヘラ磨き調整	
1505	器台 土師器	口-9.4、底-8.6、 脚裾-13.9、高- 10.1○完存	砂粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	坏部小さく、S字状口縁。脚部、円錐状。端部丸味あり、円形透孔、脚部4個。外面、体内面、ヘラ磨き	
1506	器台 土師器	口-[10.2]、底-[8.0]、脚裾-12.7、高-9.8○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。赤~橙色	坏部小さく、口縁部、稜をもって、外反。脚部、円錐状、裾部でわずかに内湾。円形透孔、脚部、3個。外面、ヘラ磨き調整	内底部、貫通孔あり
1507	器台 土師器	口-9.8、底-7.1、 脚裾-12.4、高- 9.1○完存	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	底部内湾し、口縁部段をもつ。口縁端部丸味あり。脚部円錐状、裾部で外反ぎみ。外面、体内面、ヘラ磨き、脚内面、ヘラナデ調整。器肉、厚手	
1508	器台 土師器	口-8.6、底-8.3、 脚裾-12.9、高- 9.1○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。酸化、軟質。橙色	底部やや内湾し、口縁部、稜をもつ。脚部円錐状で、裾部、外反ぎみ。外面、ヘラ磨き。円形透孔脚部3個	
1509	高坏 土師器	口-[22.8]、底- 9.4、高-(13.5) ○脚裾部を欠く	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	底部、平らで、体部へ稜をもってたちあがる。鉢形で、上位でわずかに内湾する。脚部、円錐状、円形透孔3個。外面、体内面、ヘラ磨き調整脚内面、ナデ調整	
1510	高坏 土師器	口-[20.2]、高-(6.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む。酸化、軟質。浅黄色	坏部のみ。鉢状に大きくひらく。口縁端部、平坦。内面、ヘラ磨き調整。外面、剝離して調整不明	
1511	高坏 土師器	口-[22.2]、高-(5.2)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、褐色石粒を含む。酸化、軟質。明黄褐色	坏部のみ。鉢状に大きくひらき、わずかに内湾する。口縁端部、薄手で丸味あり。体内外面、ヘラ磨き調整	

第6章 検出された遺構と遺物

1512 7区45号住	高坏土師器	口-[18.9]、底-[7.2]、高一(5.8)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。浅黄橙色	坏部のみ。底部より、体部へわずかに稜をもって、たちあがり、口縁部わずかに内湾する。内外面、荒れて調整痕不明。脚部に、底部を巻き付けて成形	
1513	手捏ね土師器	底-3.8、脚裾-4.7、高一(3.9)○脚台部のみ	砂粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい橙色	手捏ね、ミニチュアの台付甕	
1514	高坏土師器	口-[23.2]、底-[7.0]、脚裾-13.2、高一12.1○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	底部より、体部に稜をもってひろがる、鉢状の高坏。脚部、中位でわずかに折れ、裾部、内湾してひろがる。体内外面、脚部外面、ヘラ磨き調整、脚内面、裾部、ハケナデ、上位、ヘラナデ、円形透孔、3個あり	
1515	高坏土師器	脚頸-2.4、脚裾-[13.0]、高一(8.6)○脚部のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	脚部、大きくひろがり、中位から裾部は、わずかに内湾する。円形の透孔、上下にならんで2列、3個づつ計6個あり。外面、ヘラ磨き、内面ヘラナデ、ヘラ削り調整	
1516	高坏土師器	脚頸-3.2、脚裾-[8.6]、高一(6.0)○脚部のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	小型の高坏。脚部、ハの字にひろく。外面、ヘラナデ、ヘラ磨き調整。内面、ナデ調整	
1517	埴土師器	口-10.8、頸-6.5、胴-14.2、底-4.7、高一18.0○完存	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	長頸埴。平底で、外反しながらひろがり、体下部で張りをもつ。胴部最大径、やや下位にあり、上位は、丸く張りをもつ、頸部〜口縁部、直線的。体外面、ハケナデ後、ヨコヘラ磨き、口頸部、ヨコナデ後、タテヘラ磨き	
1518	埴土師器	口-[10.8]、頸-5.3、胴-14.0、底-3.6、高一17.6○略完存	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	長頸埴。底部、凹底、体下部に丸い張りをもち、下ぶくれの丸胴。頸部小さく、口縁部内湾きみ。口縁部内外、体部外面、タテヘラ磨き調整	
1519	埴土師器	口-10.7、頸-5.7、胴-13.7、高一(15.0)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、軟質。浅黄橙色	長頸埴。底部〜下胴部を欠く。球胴。頸部より、内湾してたちあがり、口縁部やや外反する。内外、ヘラナデ調整。頸部内側の体部口径小さく鱗状にとび出す。粗雑な作り	
1520	蓋土師器	口-[19.9]、天井-4.4、高一9.1○ $\frac{1}{4}$	砂粒を多く含む。酸化、軟質。浅黄橙色	円筒状の天井部より、円錐状にひろき、裾、中位に段をもつ、端部内側短かい返りあり	
1521	埴土師器	胴-[15.3]、底-3.6、高一(8.8)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を多く含む。酸化、軟質。橙色	長頸埴。底部小さく、凹底。体部やや下位に張りをもつ、扁平な球胴。外面、ヘラナデ、ヘラ磨き調整。内面、粘土積痕残り、ナデ調整	

1522 7区45号 住	埴 土師器	口-[8.9]、底- 5.7、高-5.5○ $\frac{3}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい黄橙色	小型丸底の埴。口縁部へほぼ直線的 にひろがる。底部、外縁に沈線めぐ る。体部内外、ヘラ磨き調整。底部、 ヘラケズリ。器肉、薄手	
1523	埴 土師器	口-12.9、胴-7. 4、底-3.8、高- 8.1○略完存	砂粒を含む。酸化、軟質。 浅黄橙色	小型丸底埴。底部、わずかに平らな 部分あり。体部内湾して、口縁部区 切りをもって、大きくひらく。わず かに内湾する。口縁端部内側、沈線 めぐる。体外面、口縁内外、ヘラ磨 き調整。体内面、ナデ調整	
1524	埴? 土師器	頸-[7.2]、胴- [8.8]、底-4.2、 高-(6.7)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む。酸化、 軟質。にぶい黄橙色	小さい凹底。体部、丸く、口縁部く の字に折れて外反する。底部外縁、 ヘラケズリ調整。体内外面、ナデ調 整。甕の小型品か、埴か?	
1525	甕 土師器	口-12.0、胴- [18.9]、高-(12. 5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい黄橙色	体上部で張りをもち、丸い胴でく の字状口縁の甕。口縁部、わずかに内 湾。肩~口縁部、ヨコナデ。体部ヘ ラケズリ、内面、ヨコナデ	
1526	甕 土師器	口-[18.1]、胴- [21.8]、高-(15. 6)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 淡橙色	体上部で大きく張りをもち、体下部 内湾しながら、急激にすぼまる。口 縁部、くの字に折れまがり、内湾し てたちあがる。体部外面、ヘラケズ リ、内面、ていねいなナデ調整	外面、スス様の 炭化物付着
1527	甕 土師器	口-[16.0]、高- (8.5)○ $\frac{1}{10}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい橙色	体部丸く、口縁部くの字に折れまが る。受け口状に内湾してたちあがり、 口縁端部外側に丸味をもつ。体部外 面、ヘラケズリ、内面、ナデ調整。 器肉、薄手	口縁部の作り、 布留系甕の手法 に似るか?
1528	甕 土師器	口-[13.6]、高- (5.0)○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい橙色	くの字の口縁の甕。口縁部わずかに 内湾してひろがる。器肉、薄手	
1530	甕 土師器	口-[8.0]、胴- [8.7]、高-(4. 4)○ $\frac{1}{10}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい黄橙色	くの字口縁の小型甕。口縁部わずか に内湾。体下部ヘラケズリ調整。内 面ナデ調整。器肉、薄手	
1531	甕 土師器	口-[15.6]、胴- [16.8]、高-(7. 3)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい黄橙色	S字状口縁、中型の甕。体上部で張 りをもつ。口縁端部、外側にかえり あり。体外面、ヘラナデ。内面、ナ デ調整。器肉、薄手	
1532	甕 土師器	口-[9.2]、胴- [10.9]、底-2.8、 高-7.3○ $\frac{1}{4}$	砂粒多く含む。酸化、軟 質。にぶい黄橙色	S字状口縁を模す小型甕。底部小さ く、体部中位で張りをもつ。体外面 ヘラケズリ、内面ナデ調整	
1533	甕 土師器	口-[9.8]、高- (3.8)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を多く含む。酸化、 軟質。橙色	くの字口縁の小型甕。口縁小さく内 湾し、端部やや丸味をもつ。体内外、 ナデ調整。器肉、やや厚手	

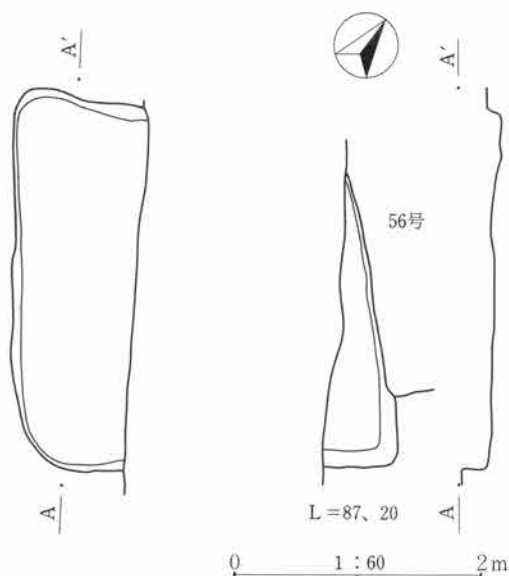
第6章 検出された遺構と遺物

1535 7区45号 住	壺 土師器	口-[27.4]、頸- 20.0、胴-[68.0]、 底-[18.8] ○ $\frac{3}{8}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい橙色	折り返し口縁の大型壺。平底。大き く外反し、最大径、体下部。頸部立 ちあがり、内稜をもって外反。頸部 粘土紐貼付、クシ状工具による刺突 文。全面、ヘラナデ調整
1536	壺 土師器	胴-[30.2]、底- [7.6]、高-(23. 6) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、軟質。橙色	凹底、球胴の壺。底部一度立ちあがっ て、体部へ至る。体外面、ヘラナデ 後、ヘラ磨き。内面ナデ調整
1537	壺 土師器	胴-[26.6]、底- [8.8]、高-(20. 5) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。にぶい橙色	凹底、球胴の壺。底部一度立ちあがっ て、体部へ至る。体外面、ヘラナデ 後、ヘラ磨き。内面ナデ調整
1538	壺 土師器	口-14.5、頸-9. 7、胴-25.2、高- (18.0) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。橙色	球胴、単口縁の壺。体外面、ヘラナ デ。内面ナデ調整。器肉、厚手
1540	壺 土師器	口-12.2、高-(8. 3) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。明赤褐色	広口、単口縁の小型壺。口縁部、内 湾し受け口状、体外面、ハケナデ後 ナデ。内面、ヨコナデ調整
1542	壺 土師器	頸-[10.9]、高- (5.4) ○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。外面赤褐色、内面 にぶい黄橙色	有段口縁の壺。頸部に粘土紐貼付、 クシ状工具による刺突刻み目。肩部 ヨコハケ目。内外ナデ調整
1543	壺 土師器	口-[17.0]、頸- [10.5]、高-(4. 4) ○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。にぶい黄橙色	口縁部強く外反し、外縁帯をもつ。 内外、ヨコナデ調整
1544	壺 土師器	口-[22.9]、頸- [10.8]、高-7.4 ○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。にぶい橙色	有段口縁の壺。口縁部立ちあがっ て外縁帯を作り、内側につまみあげ あり。内外ナデ調整
1545	壺 土師器	口-16.8、頸- [19.2]、高-(5. 0) ○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。浅黄色	折り返し口縁。口縁部、短かく立 ちあがり、凹縁めぐる。内外面、ナ デ調整
1546	壺 土師器	頸-[11.3]、高- (4.8) ○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。橙色	大きく外反する口縁の壺。内外面、 ハケナデ後、ナデ調整
1547	壺 土師器	口-[13.6]、高- (5.0) ○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい橙色	単口縁の壺。口縁部立ちあがる。 頸部、粘土紐貼付、刻みあり。内外 ヘラ磨き調整
1548	甕 土師器	口-[10.5]、胴- [12.7]、底-4.0、 裾-5.9 ○ $\frac{3}{8}$	砂粒を多く含む。酸化、 軟質。にぶい黄橙色	S字状口縁、小型台付甕。粗雑。体 下位～脚部、ハケ目、体部、ヘラナ デ、ナデ調整。ゆがみあり
1549	甕 土師器	口-[23.2]、高- (6.2) ○ $\frac{1}{8}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 浅黄色	口縁部長大化する甕。体部、ハケ目。 口縁外、ナデ。内、ヘラ磨き
1550	甕 土師器	口-22.2、高-(6. 2) ○ $\frac{1}{8}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい黄褐色	口縁部長大化する甕。口縁部、外 稜あり。内外ヨコナデ。体部ハケ目

1551 7区45住	手握ね壺 土師器	底-[3.8]、高一 (0.9)○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。 灰褐色	平底のミニチュア壺。器肉、厚手。 ナデ調整	
1552	手握ね壺 土師器	胴-[6.1]、高一 (3.9)○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい橙色	球胴のミニチュア壺。体外面、ヘラ 磨き調整	
1553	甕 土師器	口-[11.0]、高一 (4.5)○ $\frac{1}{8}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい橙色	S字状口縁の小型甕。体部、丸味あり。 体外面、ハケ目。内面ナデ調整	
1554	甕 土師器	口-17.7、底-4. 4、高一12.0○完存	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。にぶい黄橙色	鉢形の甕。体部、内湾してたちあがる。 内外ヘラナデ調整。底部、穿孔 1個	
1555	甕 土師器	口-16.1、高一(4. 7)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。にぶい黄橙色	S字状口縁の甕。体外面、タテハケ 後、ヨコハケあり。内面指頭痕あり	
1556	甕 土師器	口-15.8、胴-[25.4]、底-5.7、 裾-10.0、高一30. 0○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい黄橙色	S字状口縁の台付甕。体上部に最大 径をもつ。口縁端部内側に沈線めぐ る。体外面、タテハケ後、ヨコハケ あり。脚裾端部折りかえしあり	体部内外、スス 炭化物付着
1557	甕 土師器	口-18.1、高一(8. 7)○ $\frac{1}{10}$	砂粒、石英を含む。酸化、 軟質。淡黄～灰色	S字状口縁の甕、口縁端部、強い外 反。体外面、ハケ目調整	
1558	甕 土師器	口-[16.4]、高一 (7.0)○ $\frac{1}{10}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい橙色	S字状口縁の甕。口縁端部丸味あり。 体外面、タテハケ後、ヨコハケ目	
1559	甕 土師器	口-13.5、高一(3. 7)○ $\frac{1}{10}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい橙色	くの字口縁の甕。口縁端部内側に凹 線あり。外面、ハケ目。器肉、厚手	
1560	甕 土師器	口-[15.0]、高一 (4.3)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。にぶい橙色	S字状口縁の甕。体外面、タテハケ 後、ヨコハケ目あり。内面ヘラナデ	体部外面赤色塗 彩あり
1561	甕 土師器	口-[15.4]、高一 (4.3)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。橙色	S字状口縁の甕。口縁部丸味強い。 体外面、ヨコハケ目あり。器肉、厚 手	体外面、スス、 炭化物付着
1562	甕 土師器	口-[11.8]、高一 (5.0)○ $\frac{1}{10}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。にぶい褐色	S字状口縁の小型甕。体部丸く、タ テハケ目。内面、ナデ調整	体外面、スス、 炭化物付着
1563	甕 土師器	口-[11.0]、高一 (4.0)○ $\frac{1}{10}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい橙色	S字状口縁の小型甕。頸部～口縁部 器肉、厚手。外面、ヨコハケ目あり	
1564	甕 土師器	口-[10.4]、高一 (6.0)○ $\frac{1}{8}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 浅黄橙色	S字状口縁の小型甕。体外面、タテ ハケ後、ヨコハケ目。器肉、薄手	
1565	甕 土師器	口-[10.7]、高一 (6.0)○ $\frac{1}{8}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 明赤褐色	S字状口縁の小型甕。体外面、タテ ハケ目。内面ナデ調整。器肉、薄手	体内外、スス、 炭化物付着
1567	甕 土師器	口-[19.0]、高一 (5.0)○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい黄橙色	S字状口縁の甕。口縁端部、丸味あり。 体外面、ヨコハケ目あり	体外面、赤色塗 彩あり
1569	甕 土師器	口-[16.0]、高一 (4.8)○ $\frac{1}{10}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 褐灰色	S字状口縁の甕。体外面、ヘラケズ リ後ヘラ小口によるナデでハケ目を 模す	体外面、スス、 炭化物付着

第6章 検出された遺構と遺物

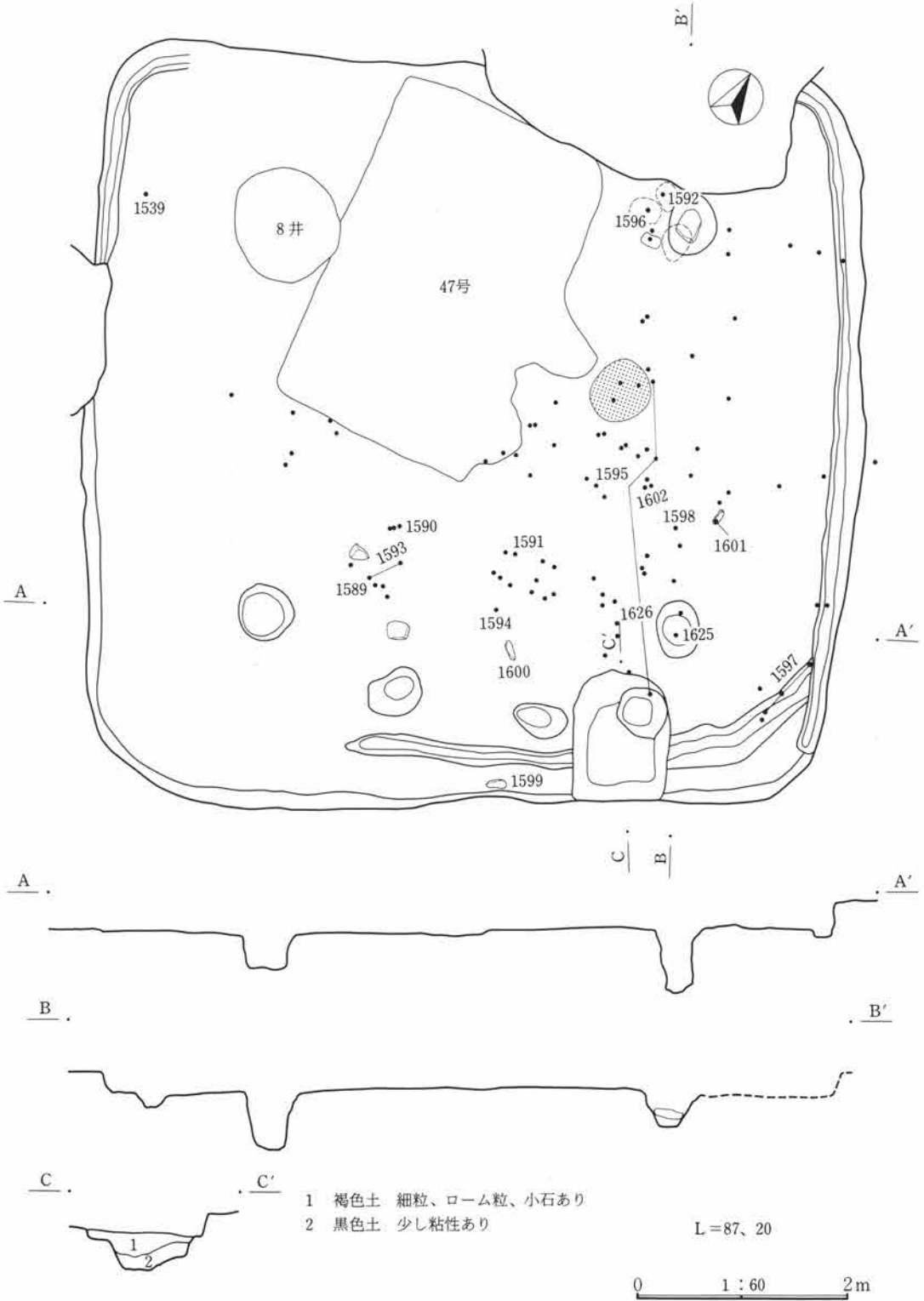
1571 7区45号 住	甕 土師器	底-6.1、裾-10.8、高-(8.8)○ 脚台部のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。 橙色	台付甕。体外面、ハケ目、脚上部、ハケ目、タテナデ。内面、端部折返しあり、タテナデ調整	
1572	甕 土師器	底-6.1、裾-[11.4]、高-(8.7)○ 脚台部のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい橙色	台付甕。体外面、脚上部、ハケ目、下部タテナデ。内面、端部折返しあり、タテナデ調整	
1573	甕 土師器	底-5.7、裾-9.6、高-(9.0)○脚台部のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい黄橙色	台付甕。体外面、脚上部、ハケ目、下部、タテナデ。脚端部折返しあり、タテナデ調整	
1574	甕 土師器	底-5.2、裾-9.5、高-(7.6)○脚台部のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。 淡黄色	台付甕。体外面、ハケ目、脚下部タテナデ、脚端部折返しあり。器肉、厚手	
1576	甕 土師器	底-4.8、裾-8.0、高-(6.0)○脚台部のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。 橙色	台付甕。体外面～脚部、ハケ目、脚下部、タテナデ、脚端部折返しあり内面、指ナデ調整	
1577	甕 土師器	底-3.9、裾-6.6、高-(5.6)○脚台部のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい橙色	台付甕。体外面～脚部、ハケ目、脚下部、タテナデ、脚端部折返しあり。内面、ナデ調整	
1578	甕 土師器	底-3.7、裾-[6.9]、高-(6.4)○脚台部のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい黄橙色	台付甕。器肉、薄手で小型品。体～脚部、ハケ目、タテナデ。脚端部折返し、ナデ調整	
1579	甕 土師器	底-3.8、裾-[5.8]、高-(5.9)○脚台部のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい黄橙色	台付甕。小型品。体～脚、ハケ目。タテナデ粗雑。脚端部折返し、ナデ調整	外面、赤色塗料か？



第99図 7区57号住居跡遺構図

7区57号住居跡（第99図）

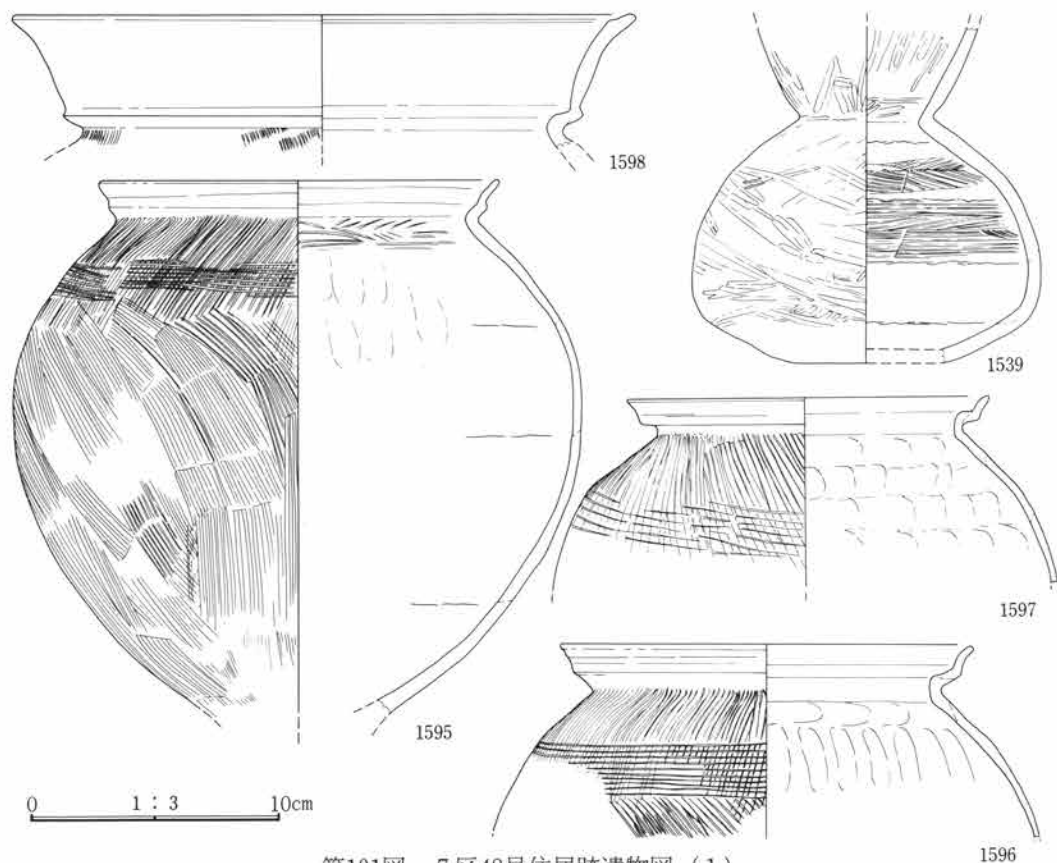
本住居跡は、56号と重複して3号古墳前方部墳丘下で確認された。住居の中央部に攪乱を受け、更に古墳築造に伴う整地で、住居としての輪郭にとぼしい。規模は、推定方3mの方形を呈すが、北隅付近が鈍角に開く。方位は西辺側でN-40°-Wを示す。床面は、基本土層4層下位のローム漸移土付近を平坦にしているらしいが詳細さを欠く。遺構の時期は、台付甕の破片が少量あり、出土遺物と重複関係から56号より古い古墳時代前期とする。（宮下）

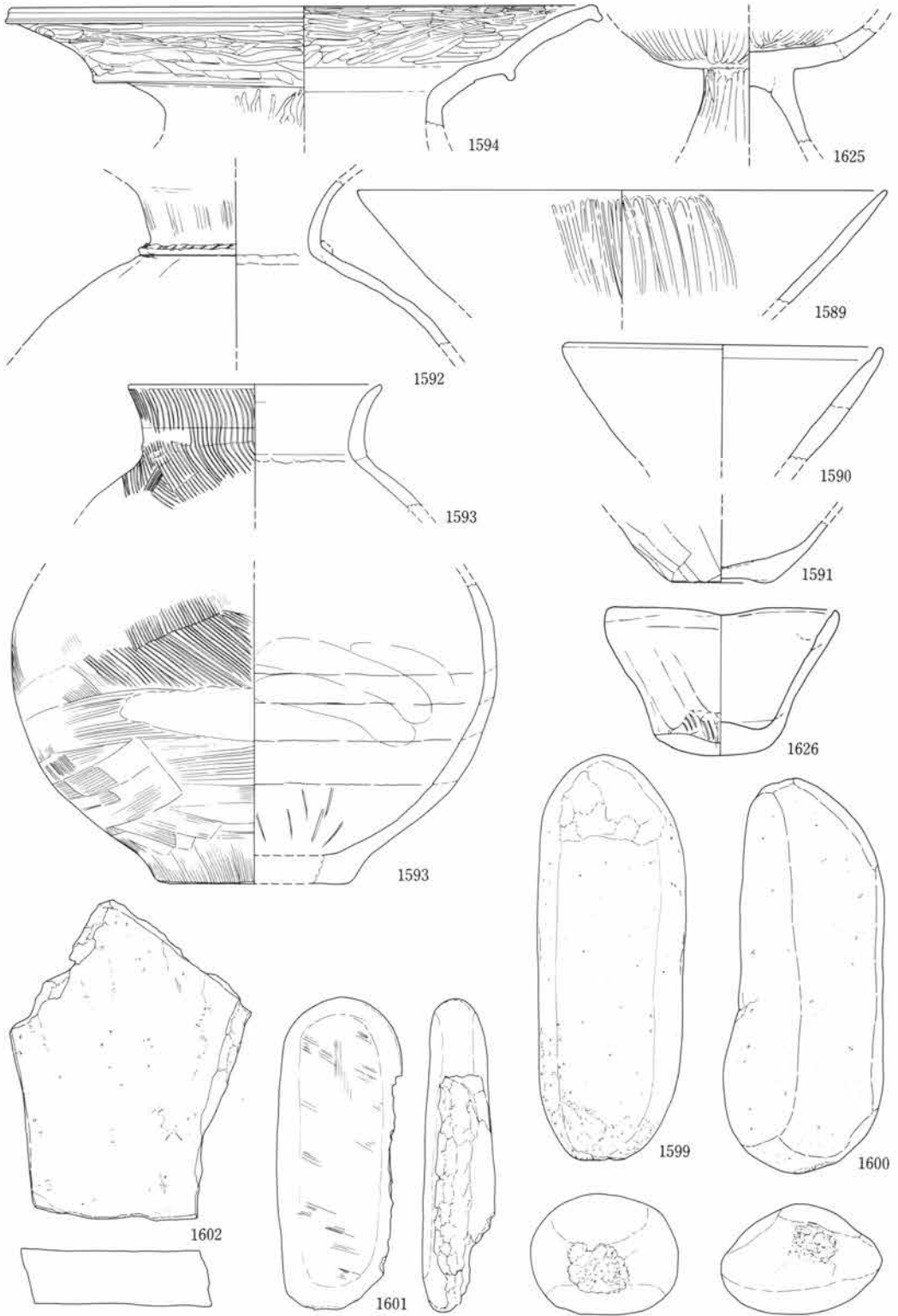


第100図 7区48号住居跡遺構図

7区48号住居跡（第100～102図、第12表、図版46）

本住居跡は、3号、4号古墳、47号住居跡、8号井戸と重複して確認され、本住居跡が最も古い。北辺の一部は、攪乱を受け、古墳周堀との重複部分の壁は上半部を失っている。規模は、東辺側6.90m、西辺7.20m、南辺7.05mを測り、平面形は隅丸方形である。方位は南辺でN-60°-Eを示す。床面は、全体に堅緻で、ローム層上面まで掘り下げ、暗褐色土を用いて貼床としている。周溝は、南隅付近を除いた全体にめぐり、南辺では貼床下からも確認され、切合い関係を持つことから拡張に伴うものか。上幅は約10cmで、床面からの深さは、6～12cmで一定している。壁の状態は、東辺側の残りのよい部分で高さ42cmを測り、垂直に近い。柱穴は、主柱穴3本と入口の施設に相当するの南辺側で対を示す2本が確認されている。主柱穴は、直径約50cmの円形～楕円形の堀方で深さは30～68cm、北隅側のものには、扁平な河原石が崩落していた。柱間は約3.80mである。入口相当のものは、楕円形に近い堀方で直径約45cm、深さ30～45cmで柱間1.90mである。炉跡は、中央部東寄り地床炉が確認された。南辺中央を外れた位置に方形を呈する貯蔵穴が確認された。長軸1.18m、短軸0.92m、深さ約30cmで遺物はない。遺物は、壁際に少なく、中央部に集中する。口縁形態の異なる台付甕、有段口縁、単口縁の壺、長頸埴、高坏、砥石、敲石等がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴により古墳時代前期である。 (女屋)





第102図 7区48号住居跡遺物図(2)

第12表 7区48号住居跡出土遺物観察表

(第101・102図、図版 46)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
1539	埴土師器	頸-5.4、胴-[14.0]、高-(13.3)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、黒色石粒を含む。酸化、軟質。浅黄橙色	長頸埴。体下部に最大径をもち、下ぶくれ状。体外面、頸内面、ヘラ磨き、体内面、ハケナデ、粘土積痕	
1589	高坏土師器	口-[24.8]、高-(5.2)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、黒色石粒を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	鉢状の坏部。体部、直線的。体内外、ヨコナデ後、タテ、ヘラ磨き調整	
1590	埴土師器	口-[14.6]、高-(5.2)○小片	砂粒、片岩粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	長頸埴。口縁部やや内湾し、内側に凹線めぐる。器肉、厚手。内外、ナデ調整	
1591	埴土師器	底-[4.6]、高-(2.7)○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。浅黄橙色	底部凹底。体部丸味をもつ。外面、ヘラナデ調整	
1592	壺土師器	頸-8.0、高-(7.6)○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。淡黄色	球胴。頸部、外側、粘土紐めぐり、刻み目あり。頸部外面、タテハケ目	
1593	壺土師器	口-[11.8]、頸-[10.4]、高-[23.0]○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙～灰黄色	広口、単口縁の壺。底部より一度たちあがり、体部球胴、頸部たちあがり、口縁部で外反。外面、タテ、ナメ、ヨコハケ目。内面、粘土積痕あり、ヘラナデ調整。器肉、厚手	同一個体と思われる。不完全な接合
1594	壺土師器	口-[27.4]、高-(5.7)○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	有段口縁の壺。口縁端部、外縁帯をもち、凹線めぐる。内外面、ヘラ磨き調整	
1595	甕土師器	口-16.0、胴-22.8、高-(21.2)○ $\frac{1}{8}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	S字状口縁の甕。口縁端部、丸く内側に凹線あり。体上部で丸く張りをもつ。体上部タテハケ後、ヨコハケ目、頸部内側、ヨコハケ目	体部、内外面、スズ、炭化物付着
1596	甕土師器	口-[16.6]、高-(7.6)○ $\frac{1}{8}$	砂粒を含む。還元、軟質。灰黒色	S字状口縁の甕。口縁端部、外反し、体上部、丸く張りをもつ。体上部、タテハケ後、ヨコハケ目、頸部内側、ヘラナデ、体内面、粘土積痕を残し、ヨコヘラナデ	
1597	甕土師器	口-[14.5]、高-(7.5)○ $\frac{1}{8}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	S字状口縁の甕。体部丸味強く、口縁端部、薄手。体上部、タテハケ後ヨコハケ目、体内面、指ナデ、指頭痕あり	
1598	甕土師器	口-[25.0]、頸-[19.2]、高-(5.2)○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄色	口縁部の長大化する甕。頸部よりの段、はつきりともち、口縁部、やや外反する。口縁端部内側、稜と凹線めぐる。体外面、タテハケ目、口縁部、内外、ヨコナデ調整	体部外面、スズ付着

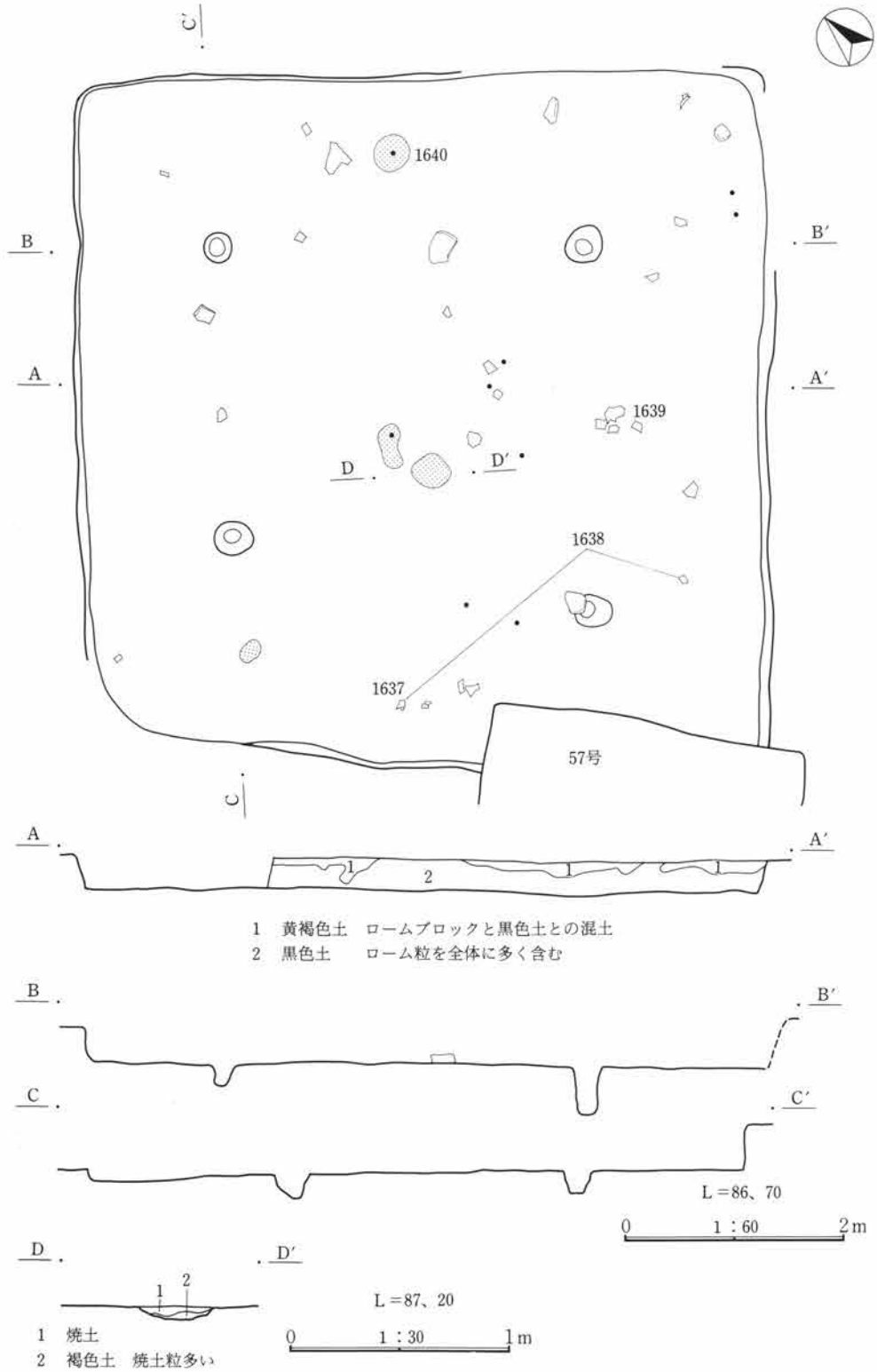
1625 7区48号 住	高 坏 土 師 器	底-9.0、高-(5.1)○坏~脚部接合部分のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	坏底部~体部へ、稜をもって立ちあがる。脚部との接合、柄使用、体外面、坏内面、ヘラ磨き調整。器肉、厚手	
1626	手捏ね 土 師 器	口-[7.2]、底-[3.3]、高-4.6 ○ $\frac{3}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	小型丸底の埴。手捏ねのミニチュア品。口縁部、ゆがみがあるが、内湾の特徴を示す。器肉、厚手。やや粗	
1599	敲 石	長-18.8、径-7.0×4.5、輝石安山岩、下端部に敲打痕を持つ			
1600	敲 石	長-18.3、径-7.4×5.1、輝石安山岩、棒状の礫の、上、下両端に、敲き痕を持つ			
1601	磨 石	長-14.4、巾-5.6、厚-3.3、輝石安山岩、扁平な棒状礫の両面に、砥面を持ち、線条痕あり			
1602	板 状 礫	長-(14.8)、巾-(11.1)、厚-2.5、輝石安山岩、明瞭な、加工痕、磨耗痕はないが、工作台様の用途か			

7区56号住居跡 (第103・104図、第13表、図版47)

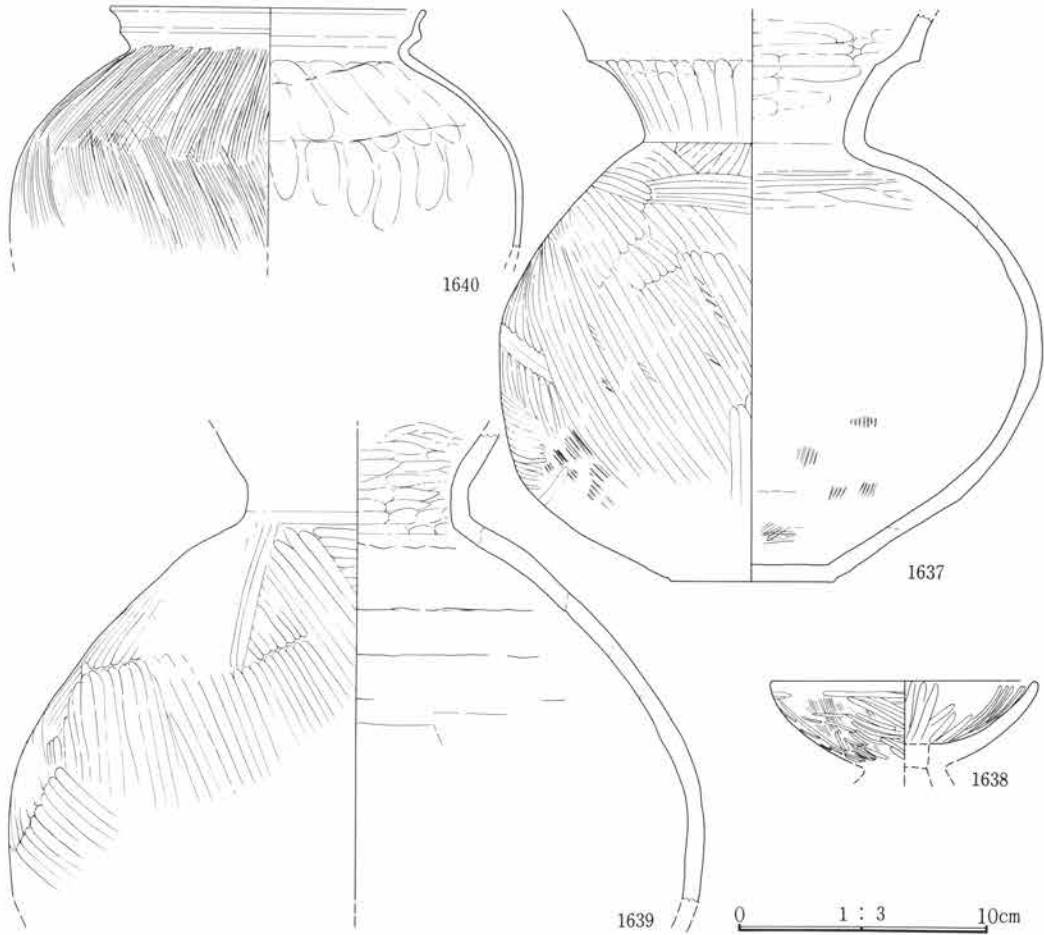
本住居跡は、3号古墳前方部の墳丘下で57号住居跡と重複して確認された。重複関係は、57号より新しい。西南隅は攪乱のため不明で、壁の一部は墳丘調査のため失われている。重複する57号と西側10mにある25号とともに玉作工房跡群との境界をなす住居跡として位置付けられる。

規模は、東辺6.21m、西辺推定6.15m、南辺推定6.25m、北辺5.73mを測り、平面形は南辺側に広く、台形に近い方形を呈する。方位は北辺でN-52°-Eである。床面は、基本土層4層暗褐色土を掘り下げ、平坦にしている。中央部がやや堅緻である。壁の状態は、四辺ともしっかりした掘り方を持ち、垂直に近い立ち上がりを示す。高さは北辺で約40cmある。周溝は確認されなかった。柱穴は、主柱穴が4本確認された。直径25~36cmの円形で、床面からの深さは18~43cm、柱間2.60~3.30mを測った。炉跡は、ほぼ中央部で地床炉が確認された。直径約30cmの円形で、深さ10cm程の皿状の堀方を持ち、上面が赤く焼けており焼土の量も多い。炉跡の北側20cmの範囲に炭化材の小塊と住居西北隅近くで炭化物と混在した焼土が見られた。床面が焼けておらず、覆土中にも焼土、炭化物が見られないことから、焼失住居と見ることは出来ない。遺物は、壁際を除いた住居内全体に散在した状態で見られた。器種としては、台付甕、有段口縁、単口縁の壺、器台があるが個体数は少ない。土器に混って、いずれも床直状態で扁平な河原石等があり工作台としての用途のものか。遺構の時期は、出土遺物の特徴により古墳時代前期とする。

また、貯蔵穴が確認されていないが、東北隅に近い東辺に111号土壇が重複し、壁外にわずかに張り出し、覆土の特徴に若干の差異が見られるもののその可能性を持つ。規模は1.80×1.68mの隅丸方形で、床面からの深さ20cmである。高坏1個体と台付甕の破片が少量ある。(女屋)



第103図 7区56号住居跡遺構図



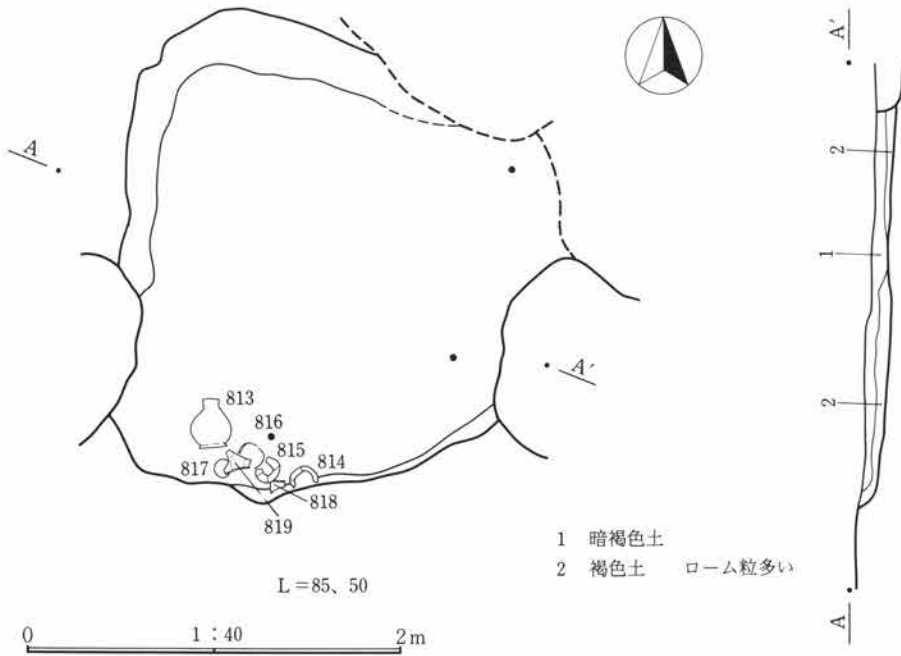
第104図 7区56号住居跡遺物図

第 13 表 7区56号住居跡出土遺物観察表

(第104図、図版 47)

番 号	土器種 器 種	法量(口径・底径・ 器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備 考
1637	壺 土師器	頸-[8.8]、胴-[21.7]、底-6.7、 高-(22.5) $\circ\frac{1}{2}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい黄橙色	有段口縁の壺。体部、球胴。平底。 体外面、ハケナデ後、ヘラ磨き調整 内面、ハケナデ、ヘラナデ調整	
1638	器台 土師器	口-[10.6]、高-[3.2) $\circ\frac{1}{8}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい橙色	内湾してひろがる坏部。細かいハケ ナデ後、ヘラ磨き調整。器肉、厚手	口縁部内外、赤 色塗彩か
1639	壺 土師器	頸-[9.0]、胴-[27.9]、高-(18. 6) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒、片岩粒を含む。酸 化、軟質。褐色	体中位～下位に張りをもつ壺。頸部 しまって小さい。外面、頸内面、ヘ ラ磨き、体内面、ヘラナデ調整	
1640	甕 土師器	口-12.7、胴-[20.5]、高-(9. 4) $\circ\frac{1}{3}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 にぶい黄橙色	S字状口縁の甕。体部丸味強い。外 面タテハケ目、内面ナデ。器肉、薄 手	

3 土 壇



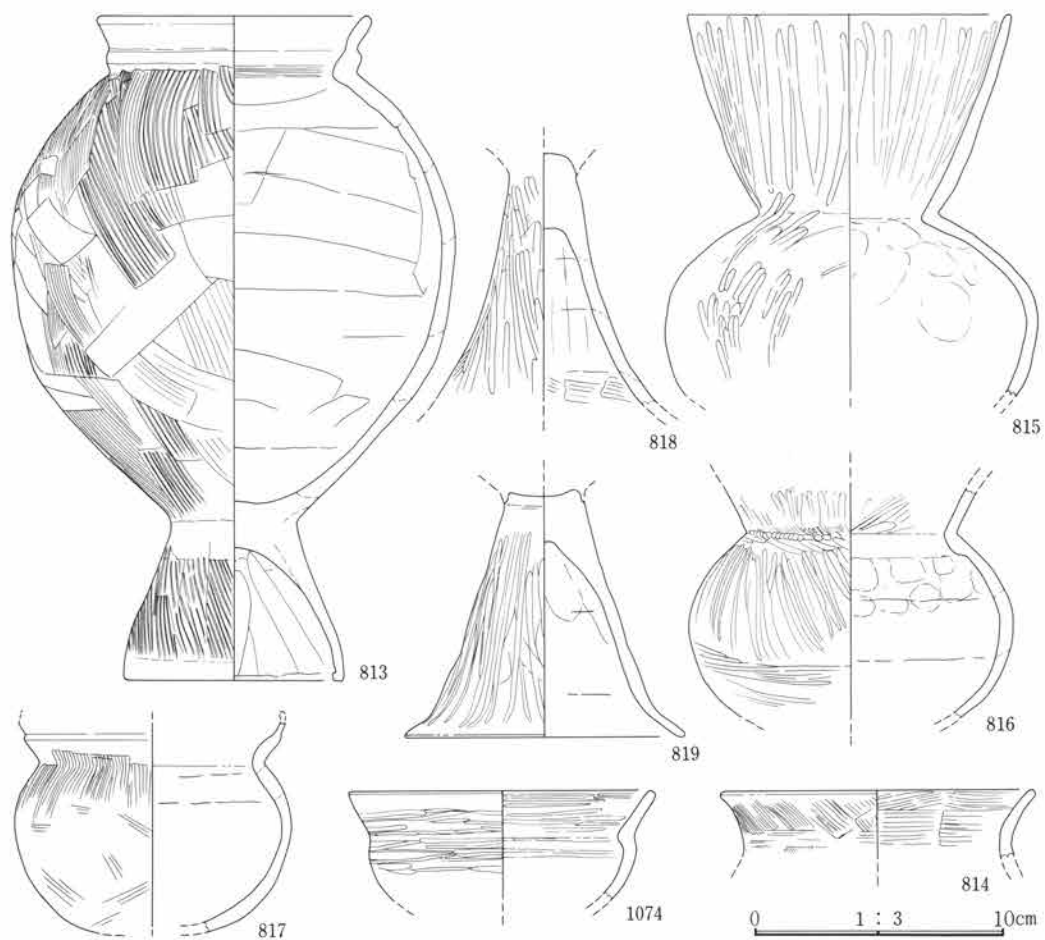
第105図 6区12号土壇遺構図

6区12号土壇 (第105・106図、第14表、図版48)

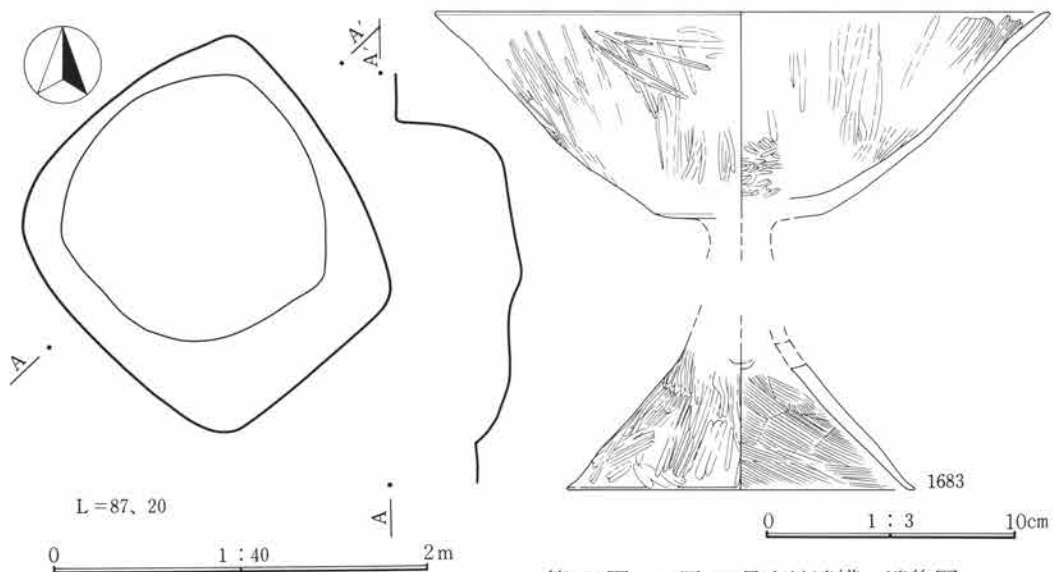
本土壇は、北辺の一部に攪乱がある上に、東、西辺に近世頃の9、10号土壇が重複し、更に、確認面が浅いこともあり、全貌がつかみにくい。位置としては玉作工房跡である6区9号住居跡の東側に隣接し、6区では数少ない古墳時代前期の遺構であると同時に、その広がりを知る資料である。規模は、東西2.50m、南北2.32mを測り、不整形を呈する。床面は、暗褐色土を平坦にしているが、中央部を除いてやや軟弱で、東南側へわずかに傾斜する。壁の様子は、その上面の大半を削平されているために不明だが、わずかに残る西北側で高さ15cmを測る。覆土は、上層に暗褐色土、下層で床面全体を覆ってローム粒を多く含む褐色土が自然埋没の状態で見られた。柱穴、炉跡及び焼土といったものは見られなかった。遺物は、西南隅近くに据え置かれた状態で台付甕、高坏、埴、小型甕6個体がある。時期としては7区の遺構よりやや新しく、5区7C号、69号住居跡に近い。全体の様子から小竪穴状のものとすべきか。 (女屋)

7区111号土壇 (第107図、第14表、図版48)

本土壇は、56号住居跡の北隅近くに重複した状態で確認された。覆土をほぼ同じくする点で、56号住居跡に付属する貯蔵穴様の施設ともとれ、微妙な関係だが、56号住居跡の床面確認の状況から本土壇がやや古いと判断した。規模は、南北方向1.78m、東西方向1.64mを測り、隅丸の方形



第106図 6区12号土坑遺物図



第107図 7区111号土坑遺構、遺物図

第6章 検出された遺構と遺物

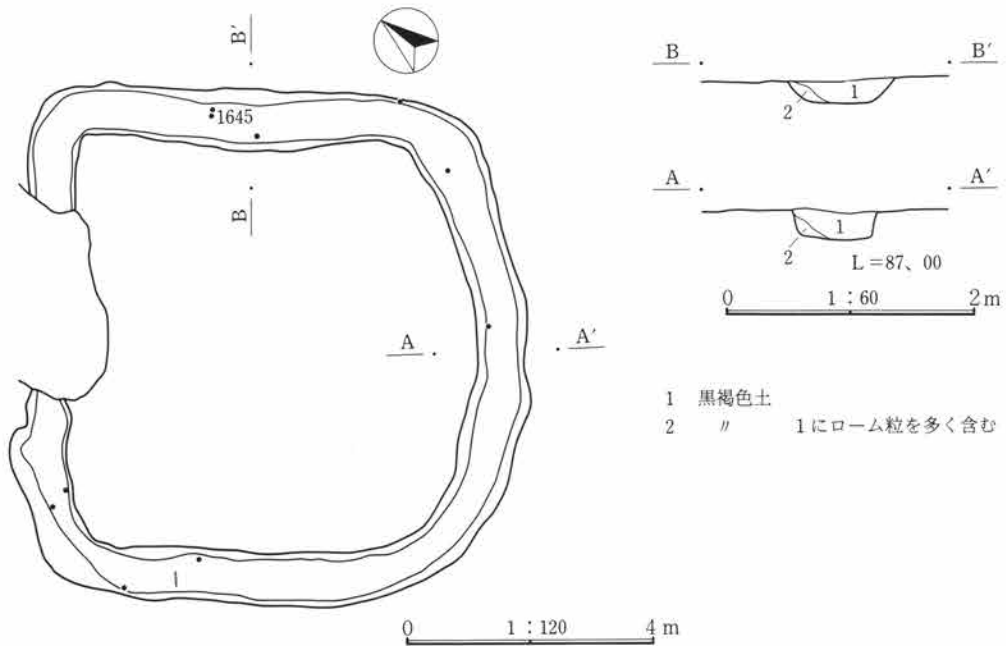
を呈する。床面はやや凹凸があり、断面形状は碗形を呈する。壁高は北側で48cmを測り、56号住居跡との床面差は約20cmである。覆土は、粗いローム粒をまばらに含む黒褐色土の単純層で、かたくしまり、自然埋没の状態を示す。遺物は、床面中央で、押しつぶれた様な状態での高坏1個体と、それに接した大形の河原石1点のみで、据え置かれたものか。時期としては、遺物の特徴から重複する56号住居跡に近いものと判断される。(宮下)

第14表 6区12号、7区111号土坑出土遺物観察表

(第106・107図、図版 48)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
813 6区12号 土坑	甕 土師器	口-[11.0]、胴-[17.8]、底-5.0、 裾-8.8、高-26.3 $\frac{1}{2}$	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。橙色	わずかにS字状口縁の名残を残す台付甕。体部中位で丸味をもち、脚部、細く丈あり。体外面、ヘラケズリ後、上位と下位、ハケ目。内頸部ヨコハケ、体内部ナデ。器肉、厚手	体内外面、スス、炭化物付着
814	甕 土師器	口-12.6、高-(2.6) $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	ゆるいくの字の口縁。外、タテハケ。内、ヨコハケ目。器肉、厚手	外面、スス、炭化物付着
815	埴 土師器	口-13.0、頸-7.2、胴-[15.0]、 高-(15.2) $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。酸化、軟質。橙色	長頸埴。体部、扁平な球形、頸部しまって、やや張りをもつ。口頸内外、体外面、ヘラ磨き調整。体内面、ナメヘラナデ調整	外面、スス、炭化物付着
816	埴 土師器	頸-7.6、胴-[12.6]、高-(8.0) $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	体中部に最大径をもつ、やや扁平な球胴。口頸内外、体外面、ハケナデ後、ヘラ磨き、内面、指ナデ調整	内外、スス、炭化物付着
817	甕 土師器	口-[10.6]、胴-[11.0]、高-(8.5) $\frac{1}{2}$	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。褐色	小型、丸底。頸部ゆるくしまって、S字状口縁。体部、球状。体上部、タテハケ、中位ヘラケズリ、ナデ、底部、ハケナデ、内面ナデ調整	外面、スス、炭化物付着
818	高坏 土師器	頸-2.7、高-(10.0) $\frac{1}{2}$ 脚部のみ	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	上部円柱状に作り出し、裾部、短かく、外反。外面、タテヘラ磨き、内面、ハケナデ、ナデ。円柱部、内側より、粘土塊、充填	
819	高坏 土師器	頸-2.4、裾-[11.2]、高-(9.8) $\frac{1}{2}$ 脚部のみ	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	円錐状にひらく。裾部、短かく外反。体外面、タテヘラ磨き調整。内面指ナデ、ナデ調整	
1074 参	坏 土師器	口-[12.4]、高-(4.4) $\frac{1}{4}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。橙~黒褐色	広口埴。口縁部、内稜をもって、外行する。体内外面、ていねいなヘラ磨き調整	内外面、スス、炭化物付着
1683 7区111 号土坑	高坏 土師器	口-[24.5]、底-[7.0]、坏高-8.2、 脚裾-[13.9]、高-(6.0)	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	鉢状に大きくひらく坏部、底部に、稜をもつ。脚部、円錐状、円形透孔4個。坏内外、脚外面、ヘラ磨き、脚内面、ハケナデ調整	坏~脚部、不完全な接合であるが、同一個体と思われる

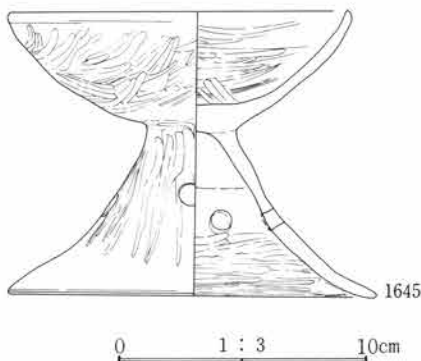
4 方形周溝墓



第108図 7区1号方形周溝墓遺構図

7区1号方形周溝墓（第108・109図、図版49・52）

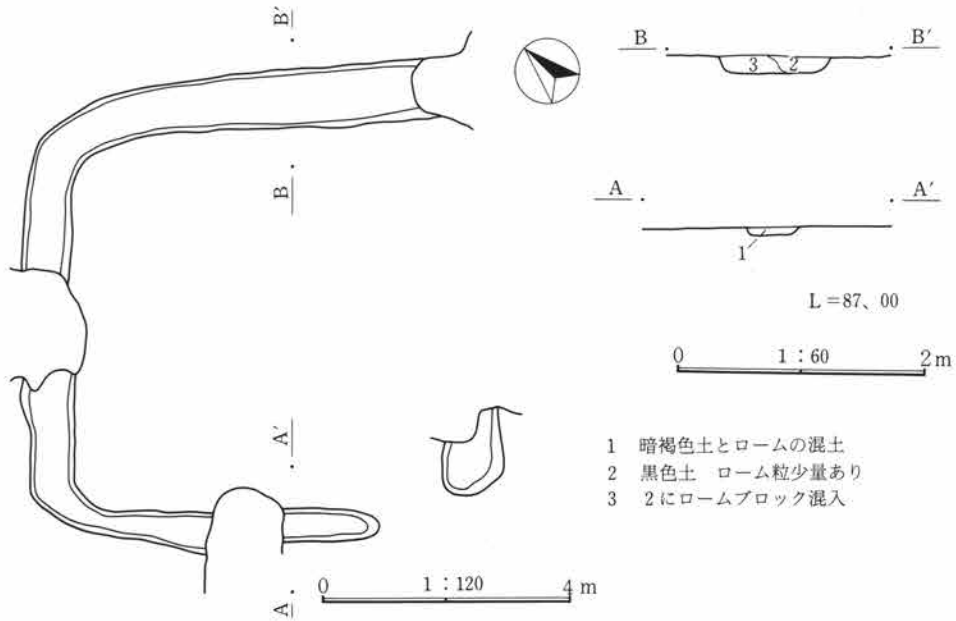
5号の東側に隣接する。4基東西方向に並列する中では、その東端に位置する。1号古墳々丘下にあるが、ともに上面を削平されている。周溝を含めた規模は、 8.30×8 m、方台部のみでは 6.55×6.45 mを測る。南辺側が少し弧を描くが、ほぼ方形に近い。平面形は2号と近似する。周溝幅は40～50cmで一定し、最深部は26cmで底面は平坦である。遺物は、東北隅に縄文時代の34号住居跡があるため混入が多い。当遺構に伴出するものとしては、東辺溝の中央部寄り、底面に接して据え置かれた様な状態で高坏1個体が出土している。遺構の時期は、遺物が少ないながら高坏等の特徴により古墳時代前期である。



第109図 7区1号方形周溝墓遺物図

1645の土師器高坏は、完存で、口径—13.7cm、頸径—4.6cm、裾径—14.7cm、坏高—5.8cm、脚高—6.6cmである。半球状の坏部と、円錐状で、裾部でわずかに外反する脚部からなり、脚部に、円形透孔4個を穿つ。坏内外、脚外面及び、脚裾内面に、ヘラ磨き調整を行っている。脚内部上位は、底部への粘土塊充填と、ナデ調整を行っている。焼成は、酸化、軟質で、外面、浅黄橙色、脚内面は黒色を呈する。

(女屋)



第110図 7区2号方形周溝墓遺構図

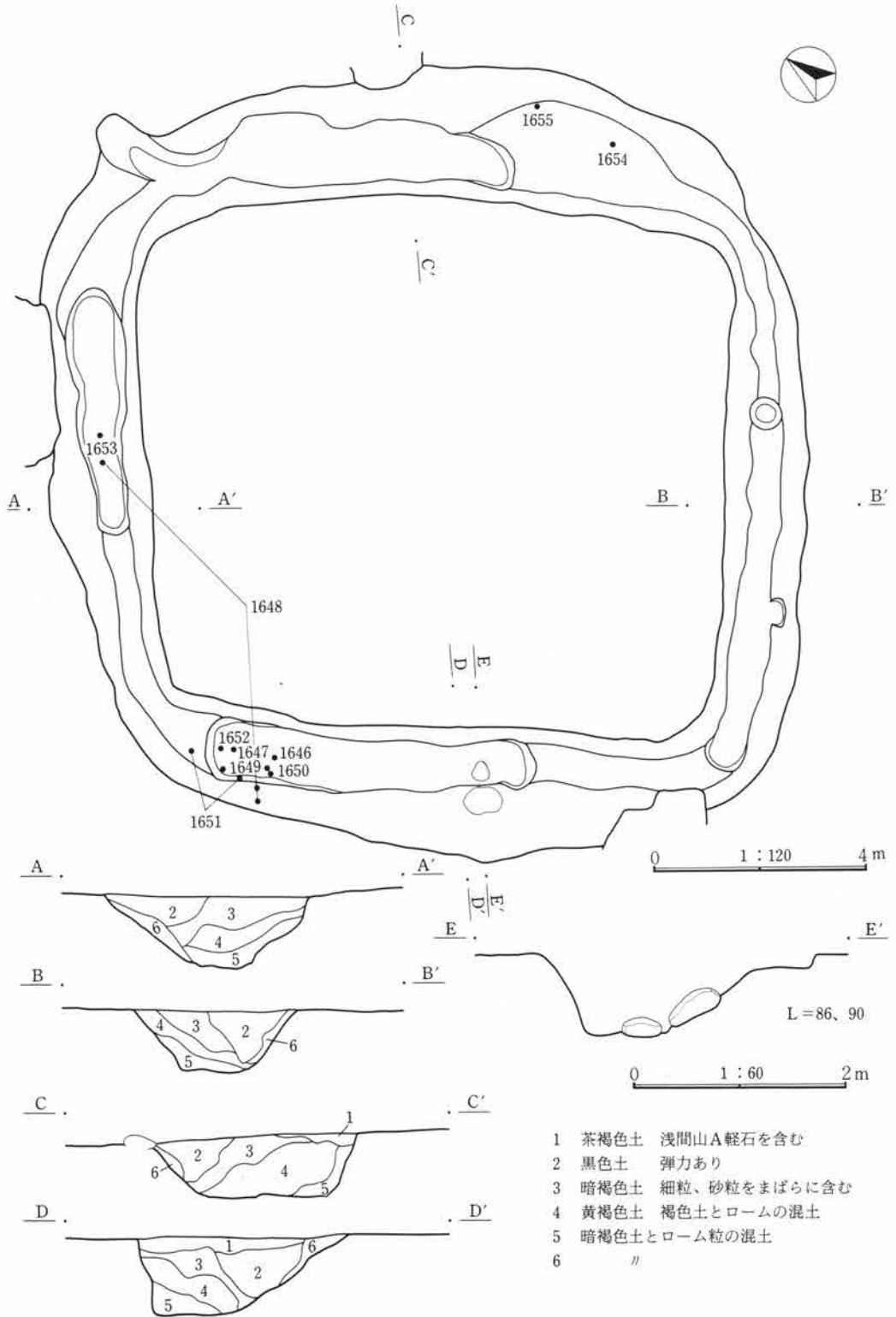
7区2号方形周溝墓 (第110図、図版49・50)

3号と5号とはさまれた位置にある。東南隅で5号と重複するが、1号古墳周堀が更に重複し、新旧関係は不明である。各辺とも攪乱を受けるが、周溝を含めた規模は方7.54m、方台部のみでは5.90×6mのほぼ方形である。周溝は南西隅が切れ全周しない。上幅65～75cm、最深部で16cmを測り、底面は平坦で一様である。主体部、盛土の有無は、上面が削平され不明である。遺物は、台付甕の破片が少量ある。時期は、特定できる遺物がないものの1号以下一群のものか。

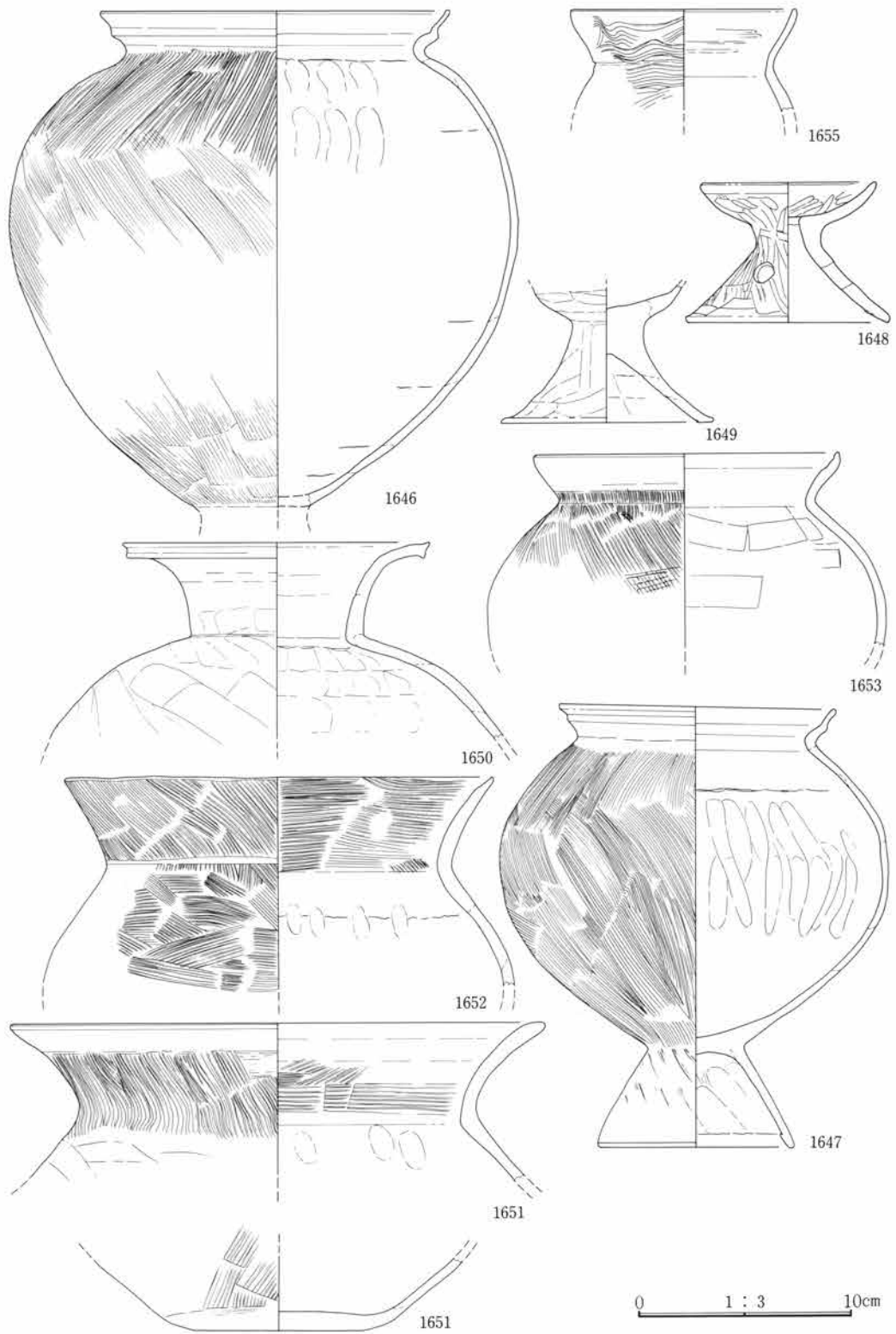
(女屋)

7区3号方形周溝墓 (第111～113図、第15表、図版49・50・52)

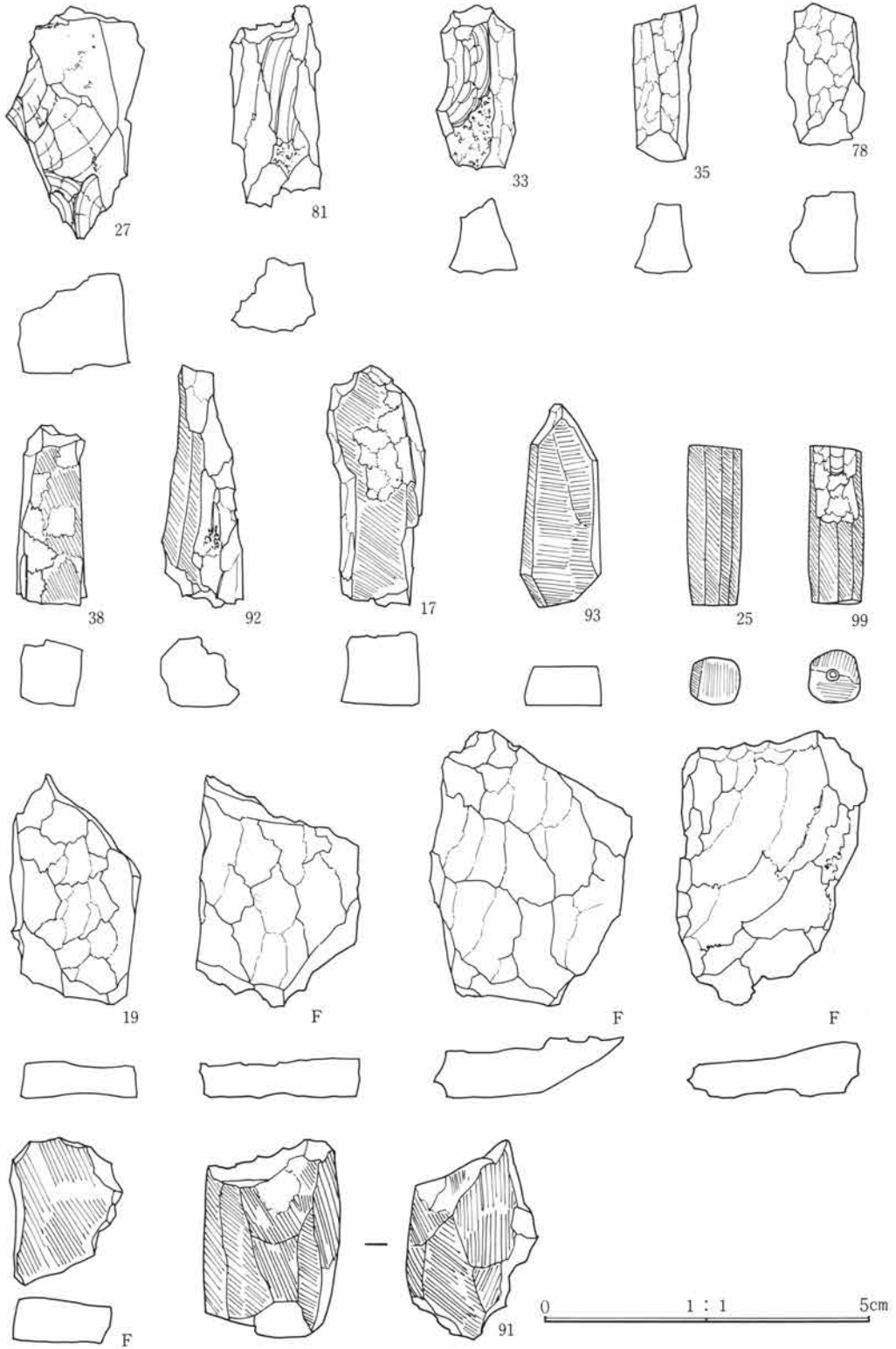
2号の西に位置し、東西に並列する西端にある。北辺に6号溝、方台部南辺側に平安時代の20、21、40号住居跡が重複する。周溝を含めた規模は14.16×14.5m、方台部は10.74×9.82mを測り、方位はN-56°-Eである。周溝は全周し、上幅130～150cm、最深部は58～62cm、断面はU字形を呈し、方台部側に直な立ち上がりを持つ。各辺の中央部に隅丸長方形の土壇状の凹部があり各隅が浅くなる。西辺の中央部には底面に密着させて大小2個の石が据え置かれている。遺物は、各辺で見られるが特に西辺で確認面から覆土中位までに集中する。台付甕20個体以上、甕、壺、器台等があり、方台部側から崩落した様につぶれた状態にあった。西北隅付近で土器と混在した状態で砥石を含む玉未成品類があり、4号の類例と合せて副葬用の一時的製作の跡か。主体は未確認だが、周溝内の土壇状のものが相当するか。盛土は、周溝内全体の覆土堆積方向から存在した可能性を持つ。遺構の時期は、伴出土器の特徴から古墳時代前期とするが、遺物が伴出する周溝墓の中では4号に近い時期か。



第111図 7区3号方形周溝墓遺構図



第112図 7区3号方形周溝墓遺物図(1)



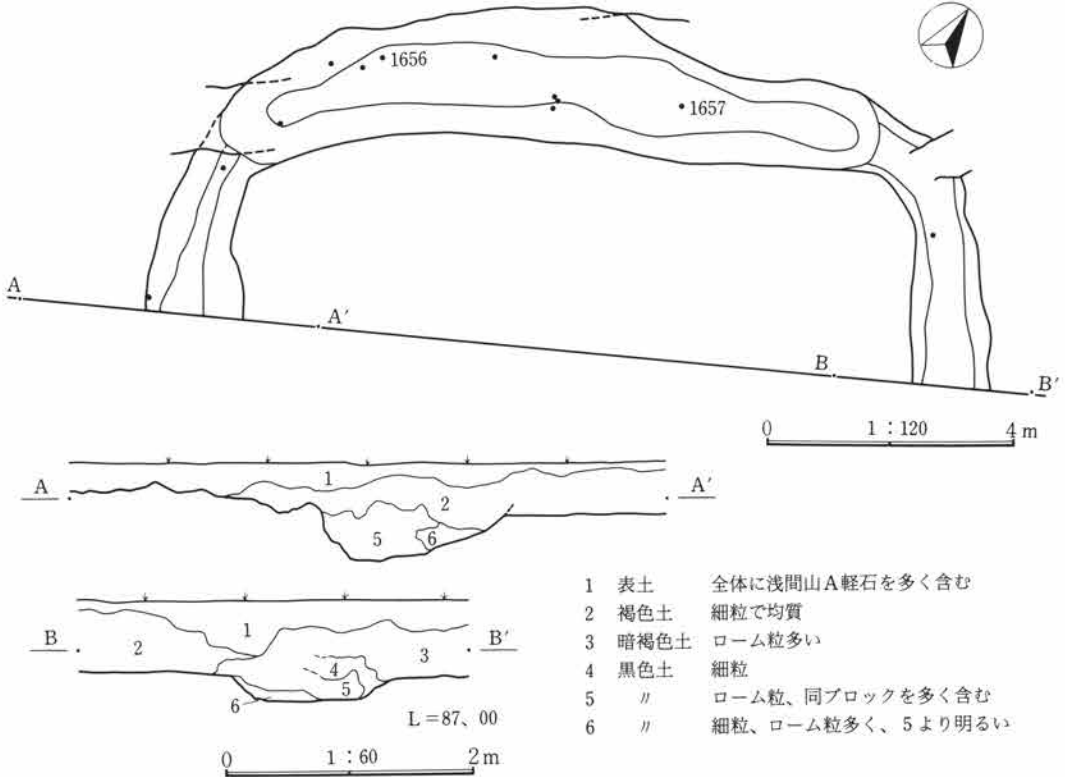
第113図 7区3号方形周溝墓遺物図(2)

第15表 7区3号方形周溝墓出土遺物観察表

(第112図、図版 52)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
1646	甕 土師器	口-16.3、胴-[23.8]、底-[5.3]、高-(23.0) $\circ\frac{3}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。灰褐色	S字状口縁の甕。脚台部を欠く。口縁部、のびて、端部、内湾する。体外面、タテハケ目。内面、指頭痕あり、ナデ調整	体外面下部、加熱による表面剥落
1647	甕 土師器	口-[12.9]、胴-[18.1]、底-4.5、裾-9.0 $\circ\frac{4}{5}$	砂粒を含む。酸化、軟質。浅黄橙色	S字状口縁、台付甕。体部外面、タテハケ目。内面、指頭痕、ナデ調整。脚裾端部、内側に折り返し、ナデ調整	
1648	器台 土師器	口-[8.2]、頸-3.5、裾-(9.5)、高-6.5 $\circ\frac{3}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	小さな、皿状の坏部、口縁、内湾してたちあがる。脚部、円錐状。坏内外、脚外面、ヘラ磨き、脚内面、ナデ、ヘラナデ調整。器肉、厚手	
1649	器台 土師器	頸-3.4、裾-[10.0]、高-(6.3) $\circ\frac{3}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	手握ね様、粗雑な作り。器肉、不均等。内外、ナデ調整	
1650	壺 土師器	口-14.4、頸-8.0、高-(9.1) $\circ\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、軟質。浅黄色	やや小型の壺。口縁部、外反し、端部外側に縁帯をもつ。凹線あり、体外面、ヘラナデ。内面、ナデ調整	
1651	壺 土師器	口-[24.9]、高-(7.4)、底-[8.2] \circ 小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。浅黄橙色	くの字に外反する単口縁の壺。口縁部ヨコナデ、頸部、タテハケ目、体上部ヘラケズリ、体下部、ハケナデ。口頸部内、ヨコハケ目、ナデ調整	不完全な接合であるが、同一個体と思われる
1652	壺 土師器	口-[20.0]、高-(9.5) \circ 小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明褐色	くの字に外反する単口縁の壺。口縁部内外、ハケ目、体外面ハケ目、内面、粘土積痕あり、ナデ調整。器肉薄手	
1653	甕 土師器	口-[14.3]、高-(9.0) $\circ\frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。褐色	くの字に外反する口縁の甕。口縁部受け口状にたちあがる。体外面、ナメハケ目、内面、ナデ調整	
1655	甕 土師器	口-[10.6]、高-(4.6) \circ 小片	砂粒、黒色輝石を多く含む。酸化、軟質。にぶい褐色	くの字に外反する口縁の小型甕。口縁部、内湾さみ、外側、二段の波状文、頸部、波状文、体部ハケナデ	口縁部外面、粉痕あり

第113図は、西北隅付近で土器と混在して出土した玉未成品の一部である。周囲に41号、51号住居跡といった玉作工房跡があり、流入遺物の可能性を持つが先述の土層傾斜と4号方形周溝墓にも少量の類例がある。内訳は、礫器、工具類を欠くが、緑色片岩の砥石を伴い、勾玉、管玉の分割から穿孔までの各工程品、石核等162点である。工房跡と比較した場合、同質の蛇紋岩類を用いて、同一の技法、工程をたどるが仕上げ品が皆無である。(女屋)



第114図 7区4号方形周溝墓遺構図

7区4号方形周溝墓 (第114・115図、第16表、図版51・52)

1、2、3、5号の東西に並列する一群とは南に約15m離れて単独に位置する。確認されたのは、調査区の制約から北側1/3にすぎない。方台部上を横切って近世の10、12号溝、縄文時代の91、92号土壇、北辺の溝に平安時代の16号住居跡が重複する。上面を削平されているが、周溝を含めた規模は7.50m以上×13.6mで、方台部は3.28m以上×11mを測る。その規模と平面形状は、3号とよく似ている。方位はN-58°-Eを示し、5号を除いた周溝墓とはほぼ同一である。周溝は全周すると推定され、上幅は約1.20mと一定しており、北辺側は全体に一段深く、最深部で48cm、東北隅と西北隅とが少し浅くなっている。この周溝内の様子も3号に似ているが、特に土坑状となり、深くなる箇所は見られない。盛土の有無についても不明だが、周溝内の覆土は方台部側からの流入方向を持ち、3号と同様に崩落した盛土とも考えられるが断定できない。遺物は、周溝内全体に見られたが、重複する遺構からの混入が殆どで、当遺構に伴う個体数は極めて少ない。北辺側中位のレベルに散在するが、西北隅近くで折り返し口縁に楕円波状文を施す、小型甕、中央部近くで器台、台付甕がある。また、3号と同じく西北隅に蛇紋岩類の石核と剝片が数点見られたが、少量で未成品もないことから混入の可能性を持つ。遺構の時期としては出土遺物から古墳時代前期とするが、3号に近い時期で、東西に並列する一群とは別な群を構成するものか。(女屋)

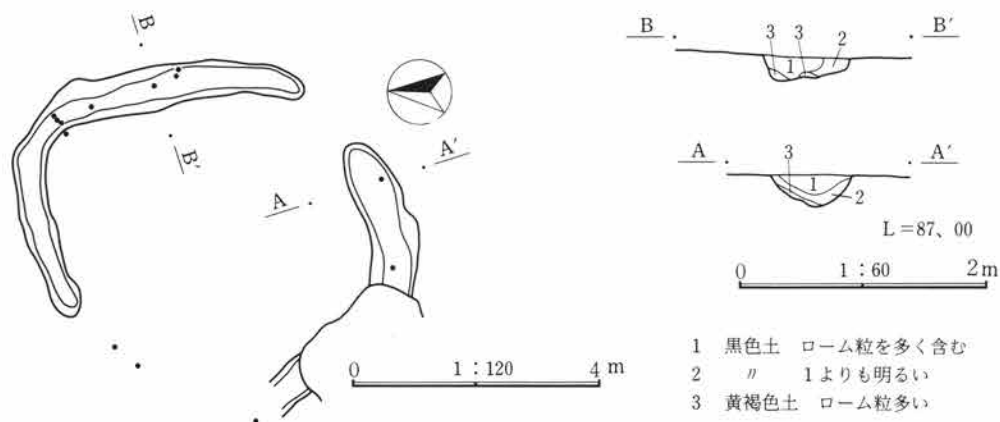


第115図 7区4号方形周溝墓遺物図

第16表 7区4号方形周溝墓出土遺物観察表

(第115図、図版52)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
1656	甕 土師器	口-9.3、胴-11.0、底-4.3、高-11.4○完存	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	折り返し口縁、球胴の小型甕。平底で一度たちあがって体部へ至る。口縁部、頸部、波状文。体内外ナデ	外面、スス、炭化物付着
1657	器台 土師器	口-[8.6]、高-(8.7)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。赤橙色	口縁部稜をもってたちあがり、端部丸味あり。ヘラ磨き。円形透孔3個	

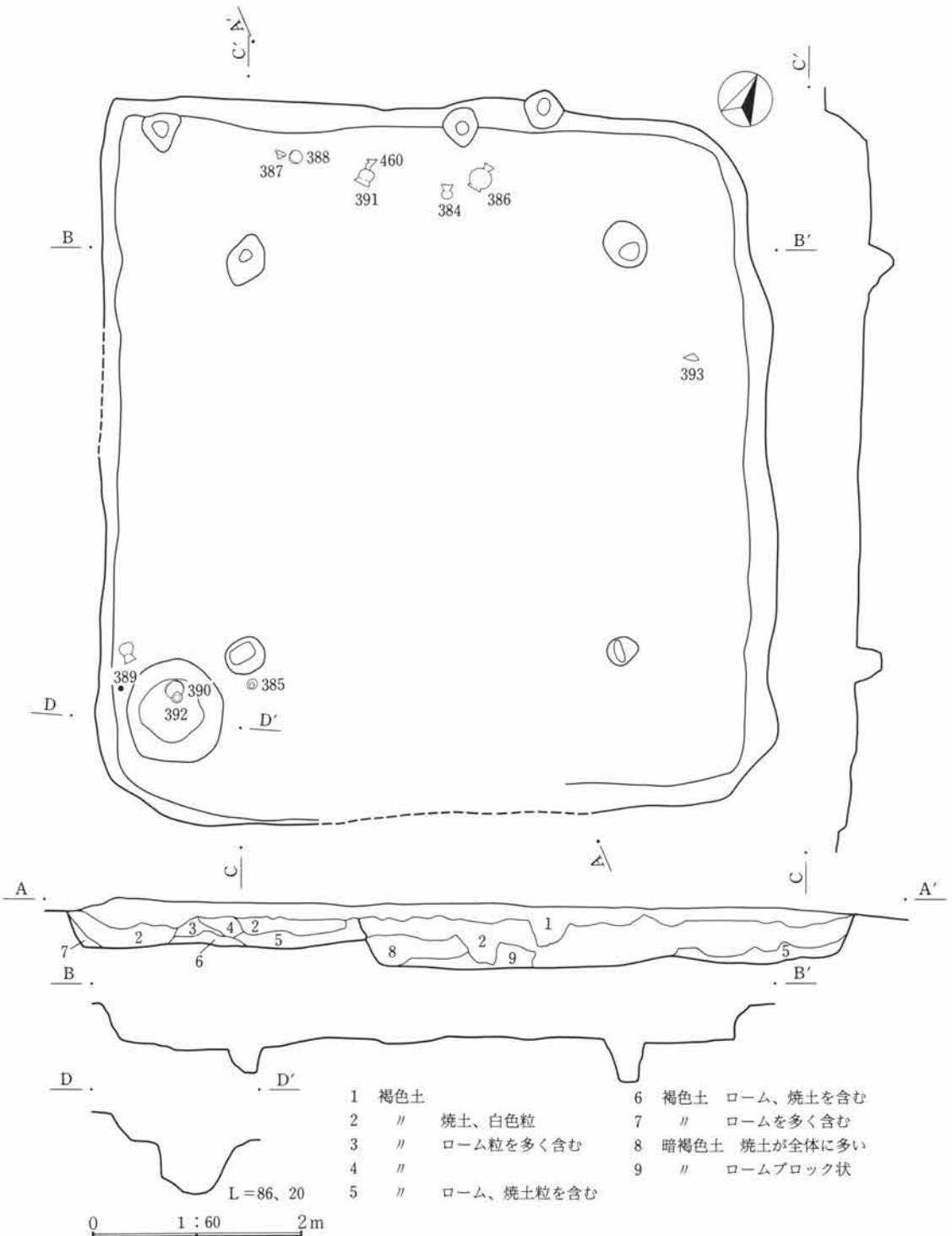


第116図 7区5号方形周溝墓遺構図

7区5号方形周溝墓 (第116図、図版49・51)

1号と2号との間で確認された。1号古墳々丘下であり、西辺側は周堀と重複している。5基の中では最小の規模で、周溝を含めても6.10×6m、方台部は4.70×4.60mを測る。方位はN-76°-Eを測り、東西に並列する中ではやや軸方向が異なる。周溝は全周せず、東南隅が切れる。上幅50~70cm、深さ22~34cm、断面はU字形を呈している。主体部は確認されず、盛土の有無も不明である。遺物は、周溝内から少量出土しているが、混入と思われ遺構の時期を特定できるものはない。東西に並列する4基の中では、位置関係から最も新しいか。(女屋)

② 古墳時代中期



第117図 5区7C号住居跡遺構図

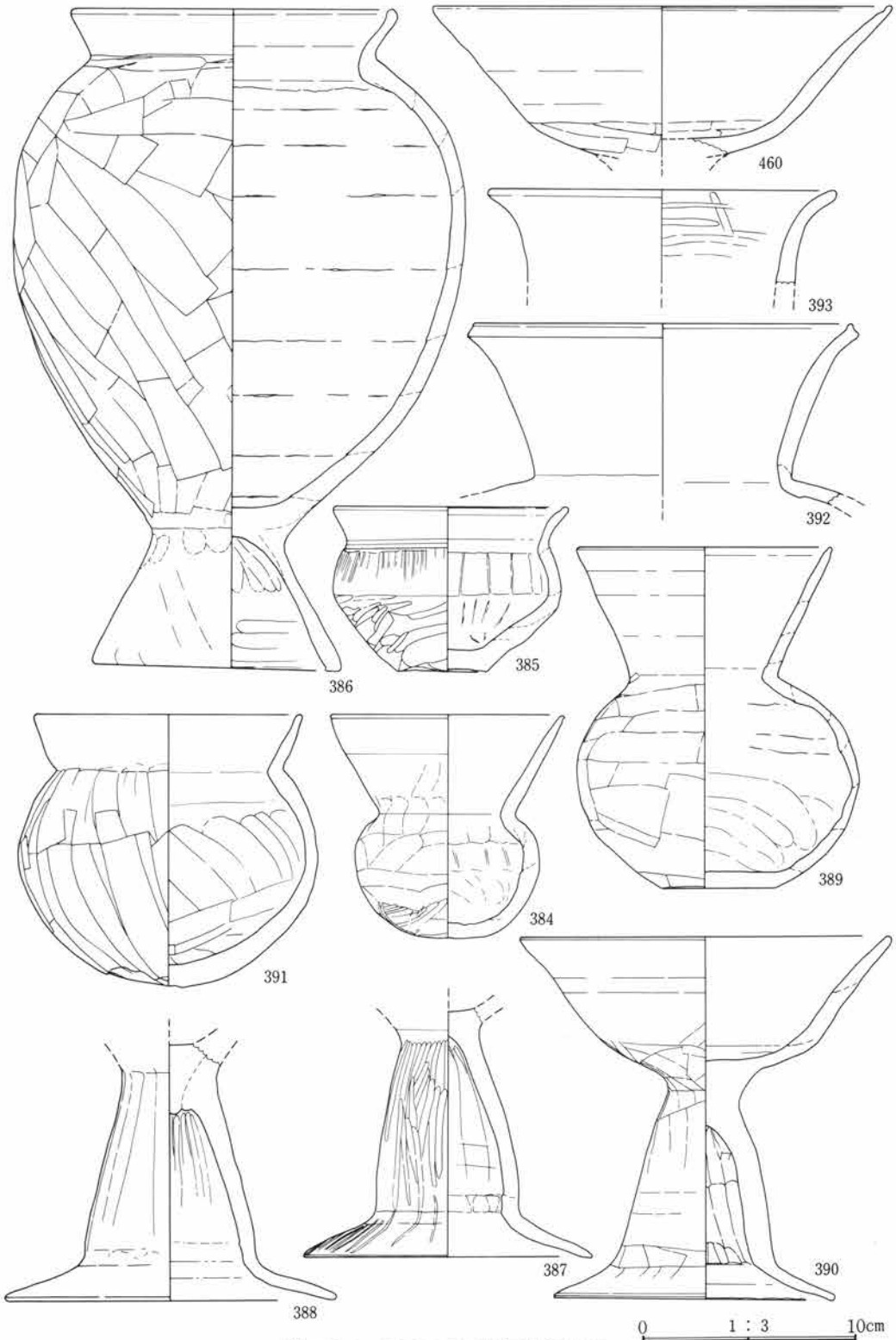
5区7C号住居跡（第117・118図、第17表、図版53・54）

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。拡張して全掘した、3軒重複のうち、最も古い時期の大型住居跡である。西辺、北寄りで、長方形土壇が、住居壁を壊して構築されていた。この土壇は大半が調査区外であるため、記載していない。住居規模は、東西6.30m×南北6.53mで、平面形は、ほぼ方形を呈する。壁は、32cmを測り、緩傾斜をもって、明確にたちあがる。床面は、中央部分が、7A号、7B号住によって壊されており、周辺部分は、軟弱であった。南側と北側では、床面の高さが異なり、南高北低の傾斜をもつ。柱穴は、4本確認できた。炉は、重複する住居のため確認できなかった。貯蔵穴は、西南隅に位置し、長径96cm×短径90cm×深さ47cmの円形である。遺物は、北辺壁際に完形に近い状態で、土師器台付甕、小型罎、小型甕、高坏と並んで確認された。又、西南隅の貯蔵穴には高坏が、その周辺には、長頸罎、鉢が出土している。時期は、出土遺物により、古墳時代中期（和泉期）と思われる。本遺跡では、当期の住居跡は少なく、他には、5区69号住居跡が認められているのみである。（長谷部）

第17表 5区7C号住居跡出土遺物観察表

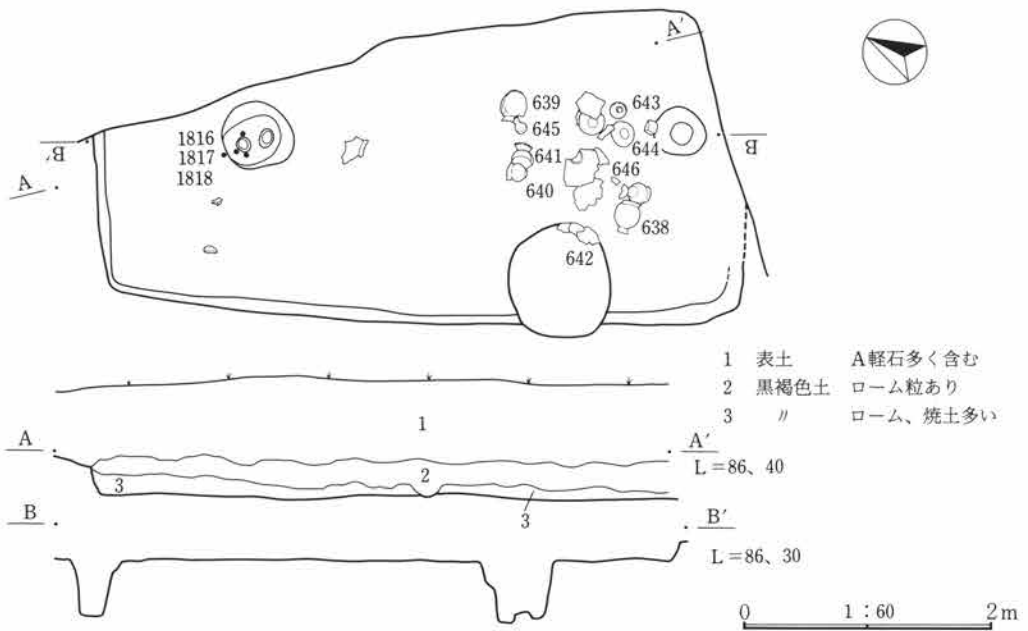
(第118図、図版 54)

番号	土器種類	法量（口径・底径・器高） 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
384	罎 土師器	口-10.9、頸-6.4、底-4.5、高-10.3○完存	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。橙色	平底、小型罎。肩部で張りをもち、口縁部、わずかに内湾、口縁部ヨコナデ、頸へ体部、ナデ、底へラ切り	
385	鉢 土師器	口-10.9、底-4.3、高-7.7○完存	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	口縁、内稜をもって外反。底部、わずかに凹む。肩、タテハケ、体下部へラケズリ、磨き。器肉、厚手	
386	甕 土師器	口-15.0、胴-21.0、底-6.5、裾-11.5、高-30.6○完存	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	くの字口縁の台付甕。体部、卵形。外面、ヨコ、ナナメヘラケズリ、内面、ナデ調整、脚部、端部平坦、内面ナデ調整。器肉厚く、重い	体内外、スス、炭化物付着
387	高坏 土師器	頸-3.7、裾-13.4、高-(11.5)○脚部のみ	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。赤褐色	円柱状で、中ぶくらみ。裾折れて外行。外面、タテヘラ磨き、内面、タテナデ、ヨコナデ	
388	高坏 土師器	頸-4.0、裾-[15.4]、高-(11.8)○脚部のみ	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	円柱状、裾は折れて外行。坏部との柄による接合、柱状部しぼり込み、外面、タテヘラ磨き調整	
389	罎 土師器	口-11.8、胴-13.1、底-5.3、高-15.7○完存	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	体部、球形、平底の長頸罎。体部ヨコヘラケズリ。内面、ユビナデ。器肉、厚手	
390	高坏 土師器	口-17.2、底-9.1、頸-4.0、裾-13.1、高-16.7○完存	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。浅黄橙色	底部に丸い稜をもつ。脚部円柱状でふくらみをもつ。裾折れて、短かく外行。内外、ナデ調整、脚内面タテ、ユビナデ調整	



第118図 5区7C号住居跡遺物図

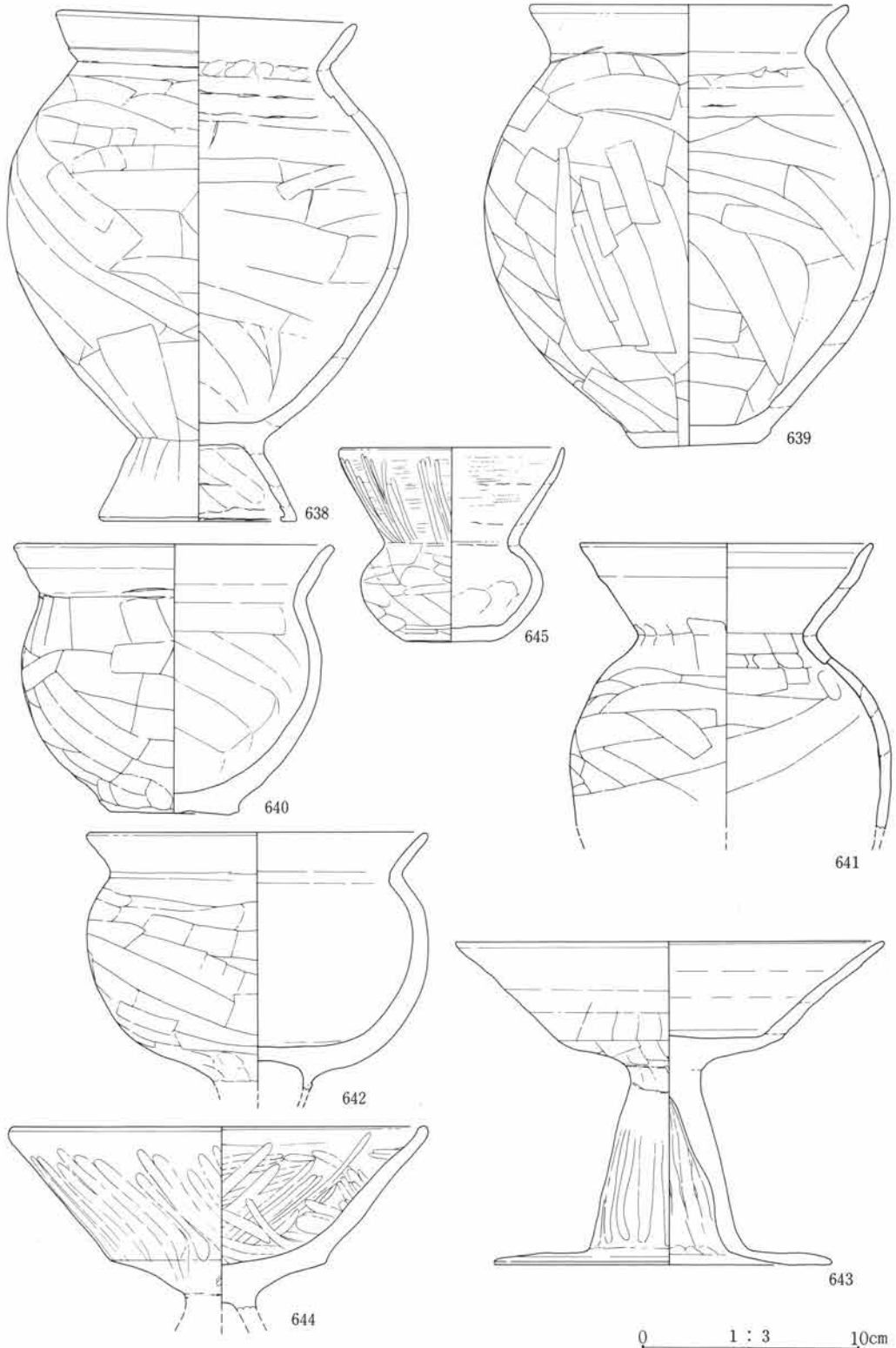
391 5区7C 号住	甕 土師器	□-12.6、胴-14.0、底-5.0、高-12.6の完存	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	丸底状、球胴、内稜をもつくの字に外反する口縁部をもつ。体外面、タテヘラケズリ、内面ヘラナデ調整	
392	壺 土師器	□-[17.6]、頸-[12.0]、高-(7.8)の○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	くの字に外反する口縁部、端部、外稜をもち、内側つまみあげあり。内外、ヨコナデ調整。器肉、均質	
393	甕 土師器	□-[16.2]、高-(4.3)の○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明褐色	口縁端部、丸味をもち、内面、ヘラ磨きあり、広口壺か	
460	高 坏 土師器	□-[21.4]、底-[12.0]、高-(6.8)の○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	底部から丸い稜をもってひろく、口縁端部、内側に丸いつまみ出しあり内外、ヘラナデ、底部ヘラケズリ	



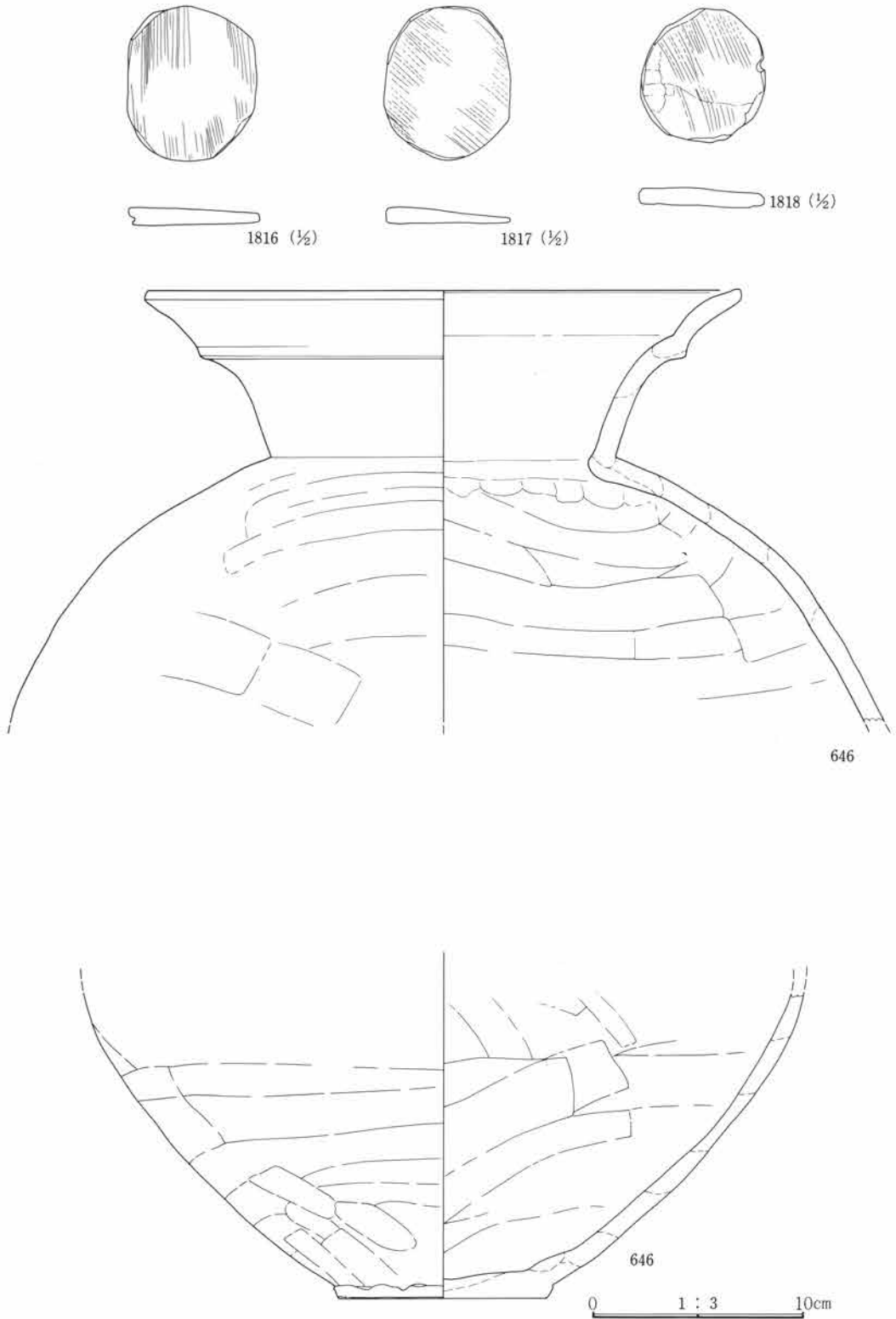
第119図 5区69号住居跡遺構図

5区69号住居跡 (第119~121図、第18表、図版54・55)

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。範囲は、調査区の制約から西辺側だけにとどまる。規模は、西辺で5.20m、南辺は2.50m以上あり、方位は北辺でN-64°-Eである。平面形は、方形を呈すると推定される。床面は、暗褐色土を踏み固めており、平坦でやや堅緻である。柱穴は、支柱穴が2本確認された。径は約35cm、床面からの深さ約40cmであるが柱穴間は3.30mある。遺物は、南辺寄りで壺、台付甕、小型甕、高坏がまとまった状態で見られた。また、滑石質の円板石製品、原石が出土している。遺構の時期は、出土遺物により古墳時代中期とする。(女屋)



第120図 5区69号住居跡遺物図(1)



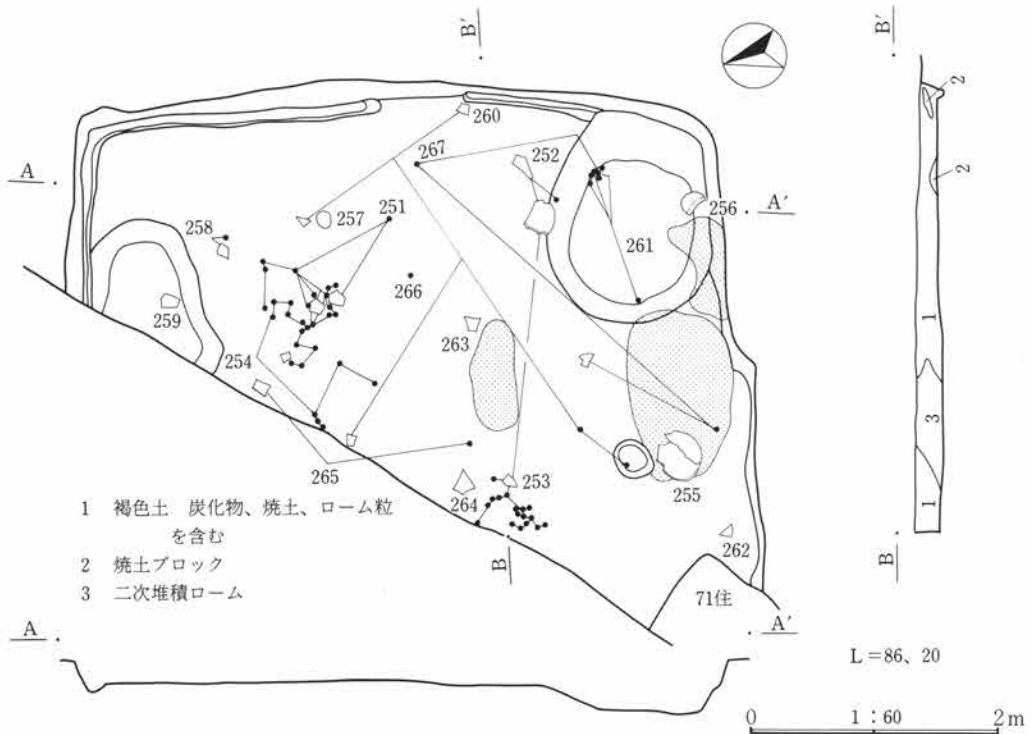
第121図 5区69号住居跡遺物図(2)

第 18 表 5 区69号住居跡出土遺物観察表

（第120・121図、図版 55）

番 号	土器 種類	法量（口径・底径・器高） 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備 考	
638	甕 土 師 器	口-[13.9]、胴-[18.5]、底-6.0、裾-9.0、高-22.7 $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい黄褐色	S字状口縁の名残りの段をもつ、台付甕。体中部で張りをもつ、卵形胴、脚短かめ、体外面、ヨコタテヘラケズリ、内面、ヘラナデ、脚端部、平坦、内側、折り込みあり。脚内底部への粘土貼付けあり。器肉、厚手		
639	甕 土 師 器	口-14.8、胴-[18.7]、底-5.4、高-20.2 \circ 略完存	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	平底、体中部で張りをもつ。口縁部短かく外反。体外面、ヨコ、タテヘラケズリ、内面、ナデ。器肉、厚手	外面、スス付着	
640	甕 土 師 器	口-[14.5]、底-5.9、高-12.3 $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	平底、口縁部くの字に外反する、小型甕。体外面、タテ、ヨコヘラケズリ、内面、ナデ調整。器肉、厚手		
641	埴 土 師 器	口-13.5、頸-8.2、胴-14.7、高-13.0 $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	口頸部、短かめで、口縁直下で、丸い稜をもって外行。肩部ナデ、体部ヨコヘラケズリ、内面、ナデ調整。器肉、厚手		
642	台付甕 土 師 器	口-15.8、高-(11.3)、底-5.6 \circ 脚部を欠く	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。赤褐色	体部、扁平な球胴、くの字に外反する口縁をもつ。鉢とすべきか。肩部ヨコナデ、体部、ヨコヘラケズリ、内面、ヨコナデ	内底部、スス、炭化物付着	
643	高 坏 土 師 器	口-19.8、底-19.4、頸-3.6、裾-15.5、高-14.8 \circ 略完存	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	底部、丸い稜をもって、坏部鉢状にひらく。脚部、円柱状、中ぶくらみで、裾部、折れて水平に近い広がり。内面、しぼり込みあり。脚外面、タテヘラナデ調整		
644	高 坏 土 師 器	口-19.2、底-10.0、高-(8.3) \circ 脚部を欠く	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	底部より、明瞭な稜をもつ。口縁端部、内湾して丸味あり。脚部との接合、柄状。体内外、ヘラ磨き調整。器肉、厚手、重い		
645	埴 土 師 器	口-[10.4]、高-8.9 $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	小型丸底埴、口へ肩部タテヘラ磨き、体部ヘラケズリ		
646	壺 土 師 器	口-[28.0]、頸-[16.3]、底-9.8、高-(21.2、14.3) $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	有段口縁、球胴、底部、やや凹状の大型壺、外面、ヨコヘラナデ、内面ヘラナデ	同一個体であるが不完全な接合ヘラナデ	
1816	石製模造品、長-4.7、巾-4.2、厚-0.4、珪質準片岩、	扁平な板状、表裏、側面擦痕				
1817	石製模造品、長-4.7、巾-4.0、厚-0.5、珪質準片岩、	扁平な板状、表裏、側面擦痕				
1818	石製模造品、長-4.2、巾-3.8、厚-0.5、珪質準片岩、	扁平な板状、表裏、側面擦痕				

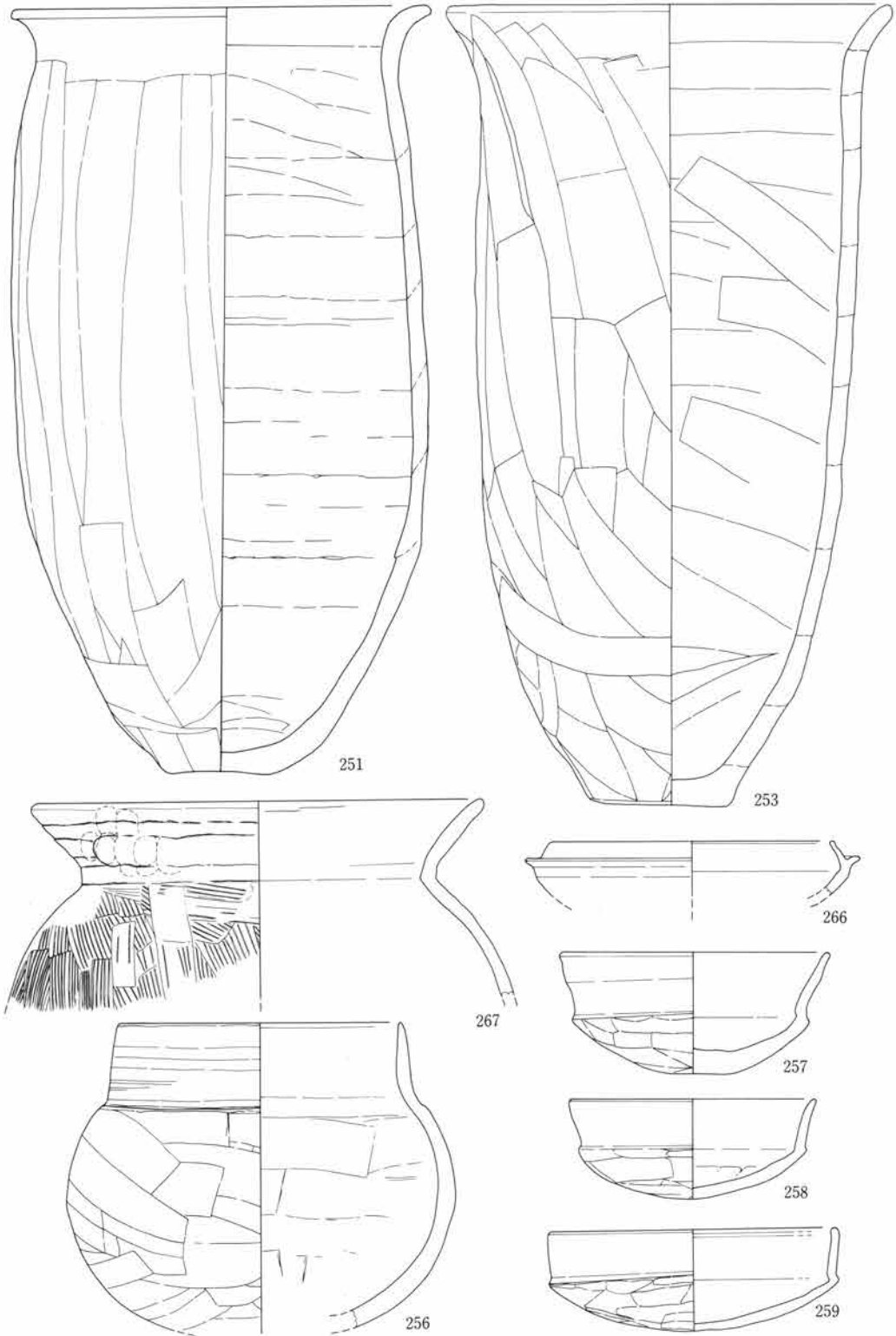
③ 古墳時代後期



第122図 5区2号住居跡遺構図

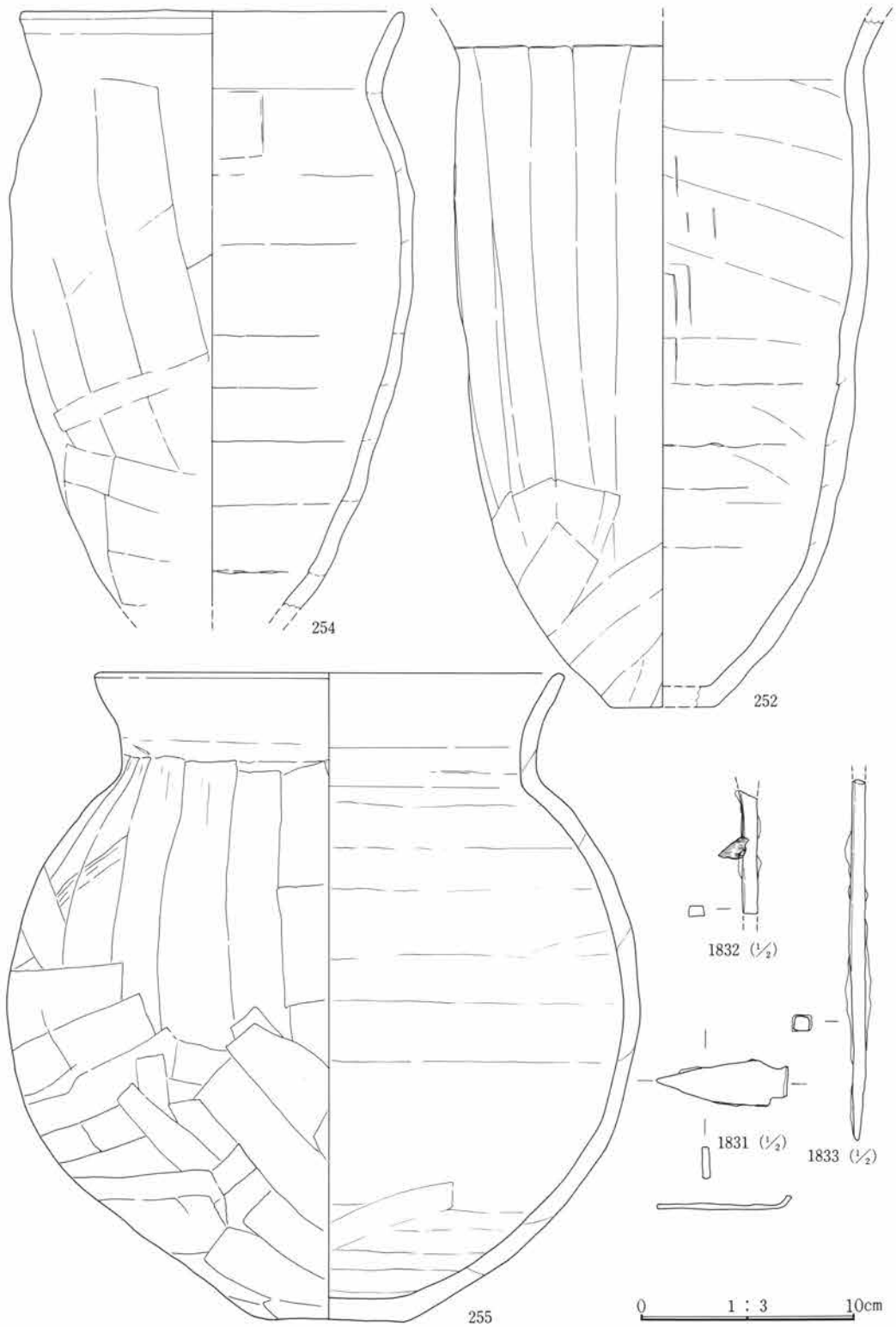
5区2号住居跡 (第122～125図、第19表、図版56・57)

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。住居跡の北西半分が、道路下に入り、未調査である。南西部で、5区71号住居跡と重複する。規模は、東辺5.30m、南辺(4.20m)で、ほぼ方形を呈する。方位は、E-13°-Sを示す。壁高は、21cmである。床面は、中央部が良好で、周辺部は軟弱であった。柱穴は確定できないが、東北隅より内側へ、1.20m程の所と、南辺中央寄りに、比較的良好的なピットが認められ、位置はずれるが、柱穴の可能性もある。周溝は、北辺～東辺に、巾約10cm、深さ3～6cmでめぐる。カマドは、原形をとどめていない。灰、焼土の分布が、南側にあり、東辺中央部で、周溝がとぎれる。その前部に方形の堀方土壇(横70cm×縦90cm×深さ10cm)が認められた。又、住居断面土層観察からも、東辺中央部に、カマドが設置されていたと考えている。カマドの形状は、住居内部に、焚口部、燃焼部を持ち、壁外に、長い煙道を持つものであったろう。貯蔵穴は、東南隅にあり、長径1.50m×短径1.30m×深さ0.2mの円形である。北辺中央寄りに、長辺(1.20m)×短辺0.8m×深さ0.24mの方形堀方土壇が認められた。遺物は、貯蔵穴周辺と、カマドをはさんで対応する北側に集中する。土師器長甕、丸胴甕、坏、須恵器坏、蓋、短頸壺、大小甕類があり、又、貯蔵穴縁辺からは、鉄片(鎌か?)、断面方形の釘状の鉄製品も出土している。時期は、古墳時代後期である。(長谷部)

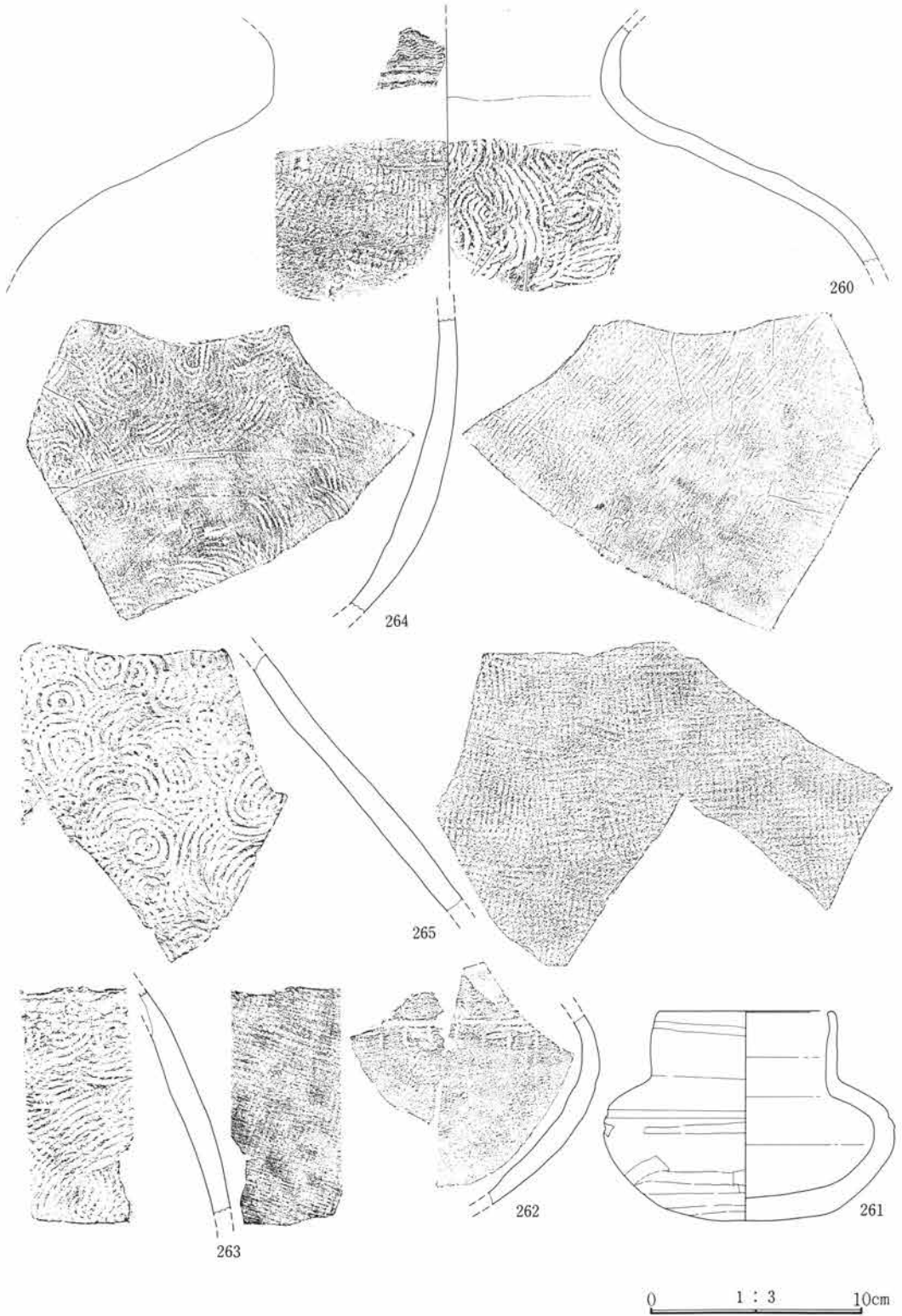


第123図 5区2号住居跡遺物図(1)

0 1:3 10cm



第124図 5区2号住居跡遺物図(2)



第125図 5区2号住居跡遺物図(3)

第19表 5区2号住居跡出土遺物観察表

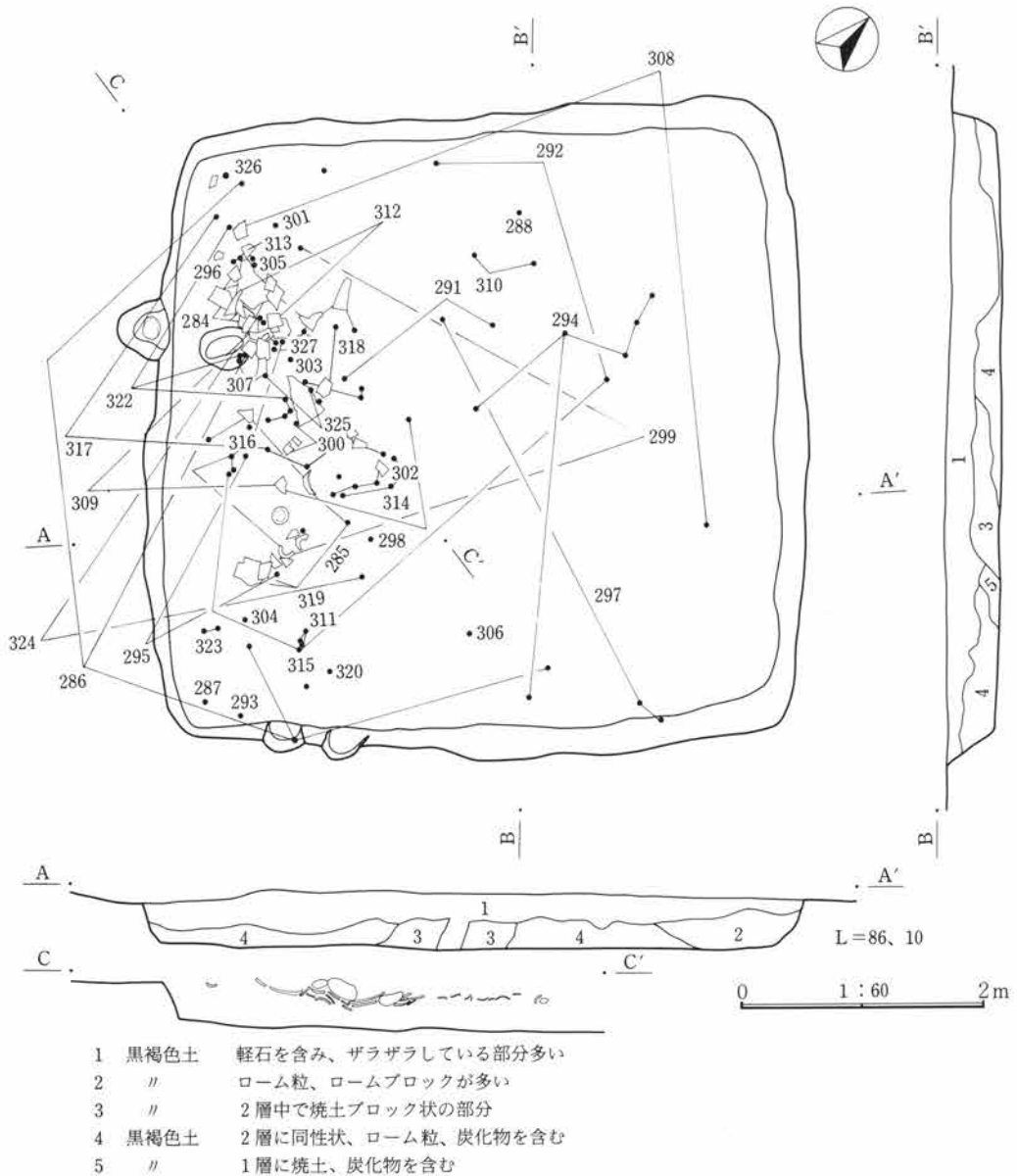
(第123~125図、図版 57)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
251	甕 土師器	口-[19.3]、底-5.0、高-35.3○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	長甕。体下部で張りをもち、口縁部短かく、外反。体外面、タテヘラケズリ、内面、ヨコヘラナデ調整	
252	甕 土師器	頸-[18.8]、底-[4.9]、高-(32.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石英、片岩粒を多く含む。酸化、軟質。褐色	長甕。底部小さく、体下部、丸く張りをもつ。口縁部外反。体外面、タテヘラケズリ、内面、ヨコヘラナデ	
253	甕 土師器	口-[20.4]、底-6.4、高-36.7○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石英、片岩粒を多く含む。酸化、軟質。橙色	長甕。底部、凸状にたちあがる。体下部で丸味をもつ。口縁部、外反。体外面、タテヘラケズリ、内面ヨコヘラナデ。器肉、厚手、重い	
254	甕 土師器	口-[18.0]、高-(27.5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。橙~褐色	体上位に張りをもつ。口縁部たちあがってやや外行。外面タテヘラケズリ、内面、ヨコナデ。器肉、薄手	
255	甕 土師器	口-[22.0]、胴-29.5、底-7.5、高-31.1○略完存	砂粒、石英、片岩粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	丸胴の甕。体中部に最大径をもつ。口縁部、ゆるい外反。体外面、タテヨコ、ナナメヘラケズリ、内面、ヨコナデ調整	体外面、スス、炭化物付着
256	甕 土師器	口-[13.0]、胴-[18.0]、高-(14.0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。赤褐色	体部、球形で、口縁、広口、直行する、小型甕。体外面、ヨコヘラケズリ、口縁部、ヨコナデ、内面、ていねいなヘラナデ	体内面、スス、炭化物付着
257	坏 土師器	口-12.5、高-5.6○完存	砂粒を含むが細密。酸化、軟質。橙色	丸い底部より、稜をもってたちあがる。ゆるく外反して、口縁部丸味をもつ。底外面、ヘラケズリ調整	
258	坏 土師器	口-[11.5]、高-4.6○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。酸化、軟質。橙色	丸い底部より、稜をもってたちあがる。口縁部、ほぼ直線的に外行する。底部、ヘラケズリ調整	
259	坏 土師器	口-[13.4]、高-4.6○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石英、黒色輝石を含む。酸化、軟質。黒色	丸い底部より、稜をもって、直線的にたちあがる。口縁部、丸味もち、内側に凹線めぐる。底部、ヘラケズリ、内面、黒色処理	
260	甕 須恵器	頸-[16.2]、高-(11.3)○小片	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	体上位で張りをもつ甕。口縁部、外反し、外面、波状文。体外面、平行タタキ目、ナデ、内面、同心円タタキ目、頸内部、ナデ	
261	壺 須恵器	口-[8.3]、胴-[13.7]、高-9.8○ $\frac{1}{2}$	砂粒、黒色斑文あり。還元、硬質。灰色	丸底、扁平な球胴、口縁部、たちあがって、わずかに内湾する、小型広口短頸壺。内外ロクロナデ調整、体下部、回転ヘラケズリ	

262 5区2号 住	壺 須恵器	○胴部小片	砂粒、黒色斑文あり。還元、硬質。灰色	体部、やや上位で張りをもつ。沈線で区画し、上に波状文、下に櫛状工具による刺突文を施す。内外、ロクロナデ調整	
263	甕 須恵器	○胴部小片	砂粒を含む。還元、硬質。灰色	大型甕。外面、擬似格子目、内面、同心円、タタキ目あり	外面、自然釉あり
264	甕 須恵器	○胴部小片	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色	大型甕。外面、平行タタキ目、内面同心円タタキ目、ナデ調整	
265	甕 須恵器	○胴部小片	砂粒、白色石粒を含む。還元、硬質。灰色	大型甕。外面、擬似格子目、内面、同心円、タタキ目	
266	坏 須恵器	口-[13.0]、高一(2.5) ○小片	砂粒含むが、細密。還元、硬質。灰色	坏身、蓋受け部、断面三角形の凸帯めぐる。口縁部、内傾してたちあがる。ロクロナデ調整	
267	甕 土師器	口-[21.0]、高一(9.0) ○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	口縁部くの字に外反する、丸胴の甕。口縁外面、粘土紐積痕を残し、指ナデおさえ。体外面、ナナメ、タテハケナデ。体内面、ていねいなナデ調整	
1831	鉄製品	長-(4.1)、巾-(1.4)、厚-0.2、片側端部折りまげあり、鎌残片か			
1832	釘 鉄製品	長-(3.8)、巾-0.5、厚-0.35、断面四角形の釘、直行して木目のみえる木片付着			
1833	釘 鉄製品	長-(11.1)、巾-0.5、厚-0.4、断面四角形の釘、片端、細く尖がる			

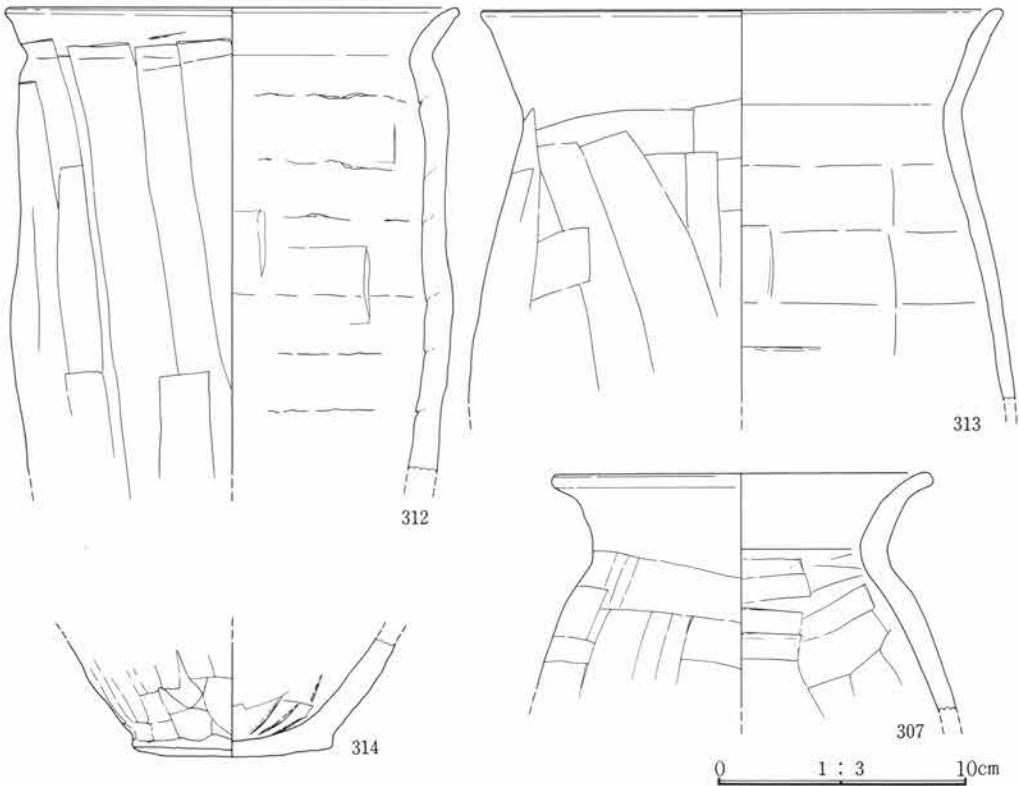
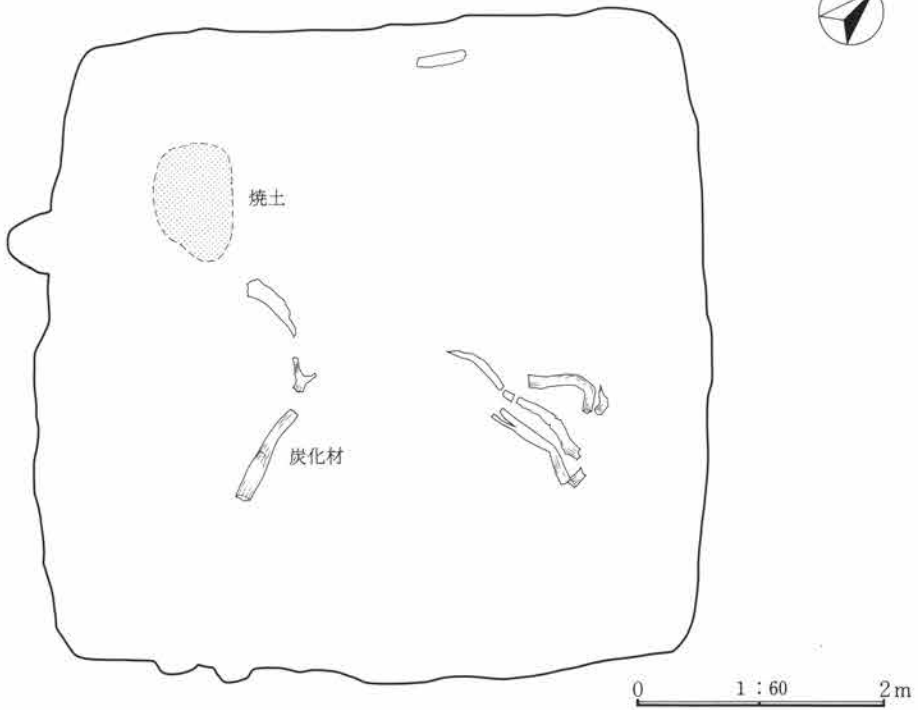
5区4号住居跡（第126～132図、第20表、図版58～60）

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。規模は、東西5.30m×南北5.05m、方位は、東辺でE-43°-Sを測る。平面形は方形を呈する。壁は、45cmあり緩傾斜をもつ。本調査区中では、単独で良好な検出状態をもつ遺構である。覆土は、上下2層に明瞭に分離できた。土層は、黒褐色土でザラつく砂質土を含む。下層は、明黒褐色土で、ロームブロック、焼土、炭化物を多く含む。住居跡北半より南へ傾斜をもって堆積している。床面は、ほぼ平坦で良好である。床面上には、炭化材が、住居四方の隅から、中心に向かって倒れ込む状態で検出された。焼土、灰の散布も認められている。柱穴は確認できなかったが、東隅を除く、三方の隅に浅い凹みが認められている。柱穴とは言えないが、それに代るべき施設であろうか。カマド及び周溝は、確認できなかった。遺物は、ほとんどが上層からの出土で、住居跡西半に集中する。須恵器の出土が目立ち、甕（大型、中型）、坏蓋、提瓶、横瓶、壺、短頸壺等器種も豊富である。土師器は、長甕、丸胴甕、甕、甑、坏が、又、刀子状鉄製品が出土している。須恵器大甕は、住居跡西隅に、破片状態で検出された。その中心に、人頭大程の河原石が認められ、さらに周辺にも、河原石が存在した。出土状

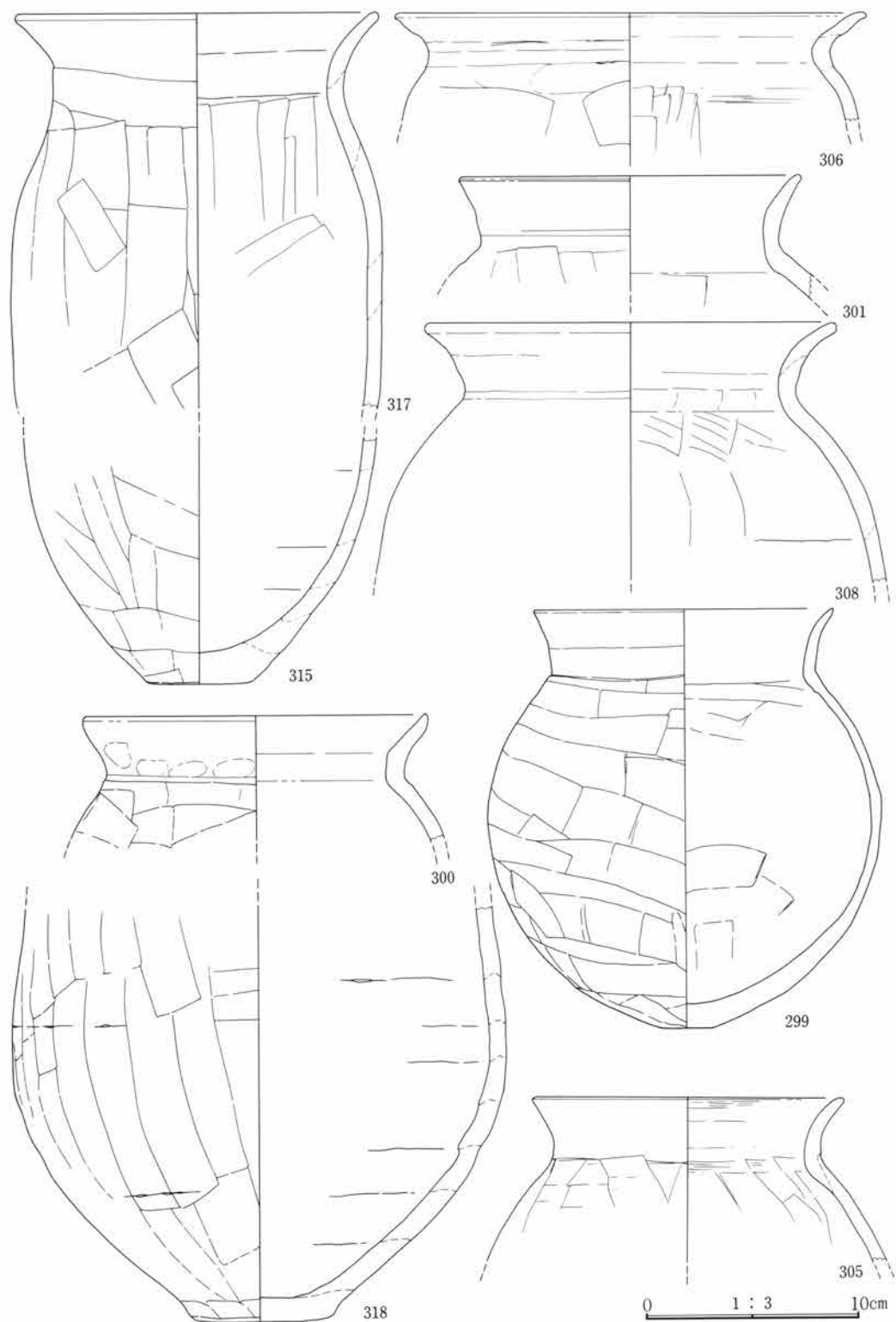


第126図 5区4号住居跡遺構図

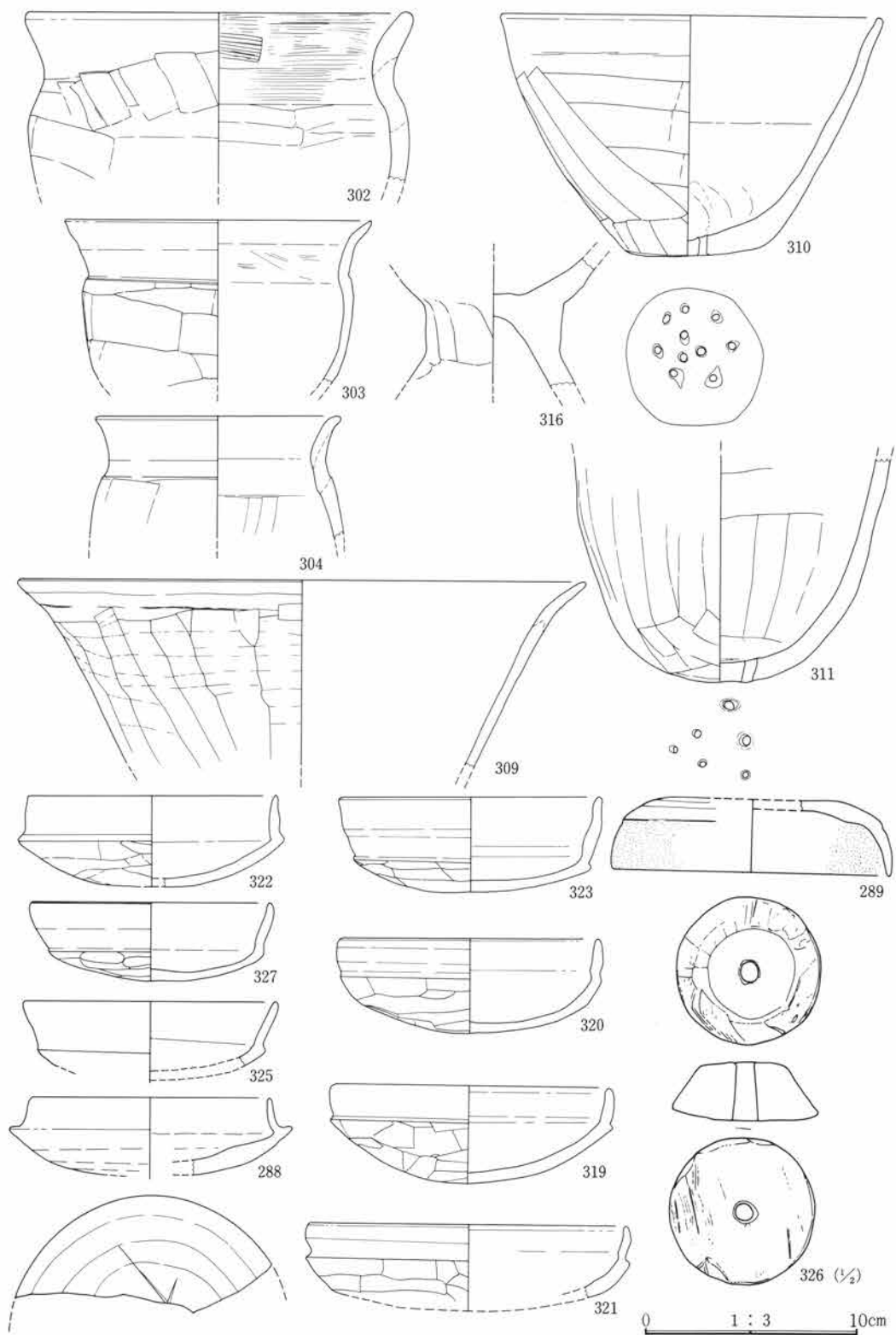
態から推定すると、大型甕を河原石で破壊したようにも考えられる。また、No285の須恵甕は、5区5B号住出土の甕と接合した。その他の土器も、5区5B号住出土のものと接合あるいは、同一個体と思われるものがあり、本住居跡上層の土器類の出自は、5区5B号住と考えられよう。本住居跡が廃棄された後、投棄されたものである。下層、及び床直上からの出土遺物は、極端に少なく、滑石製紡錘車、炭化米等である。時期は、住居形態が特殊であること（カマド、及び炉の見えないこと、柱穴のないこと、）床面に接する遺物の少ないこと等により、明らかにし難いが、上層の遺物のあり方より考えて、古墳時代で後期終末よりは古いものと考えておきたい。(能登)



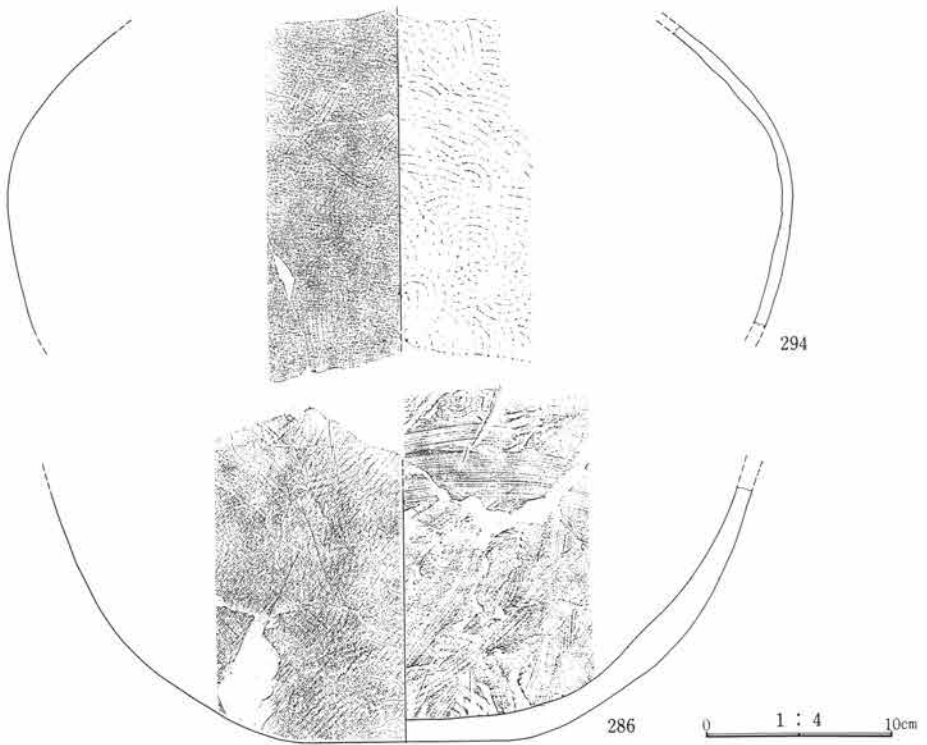
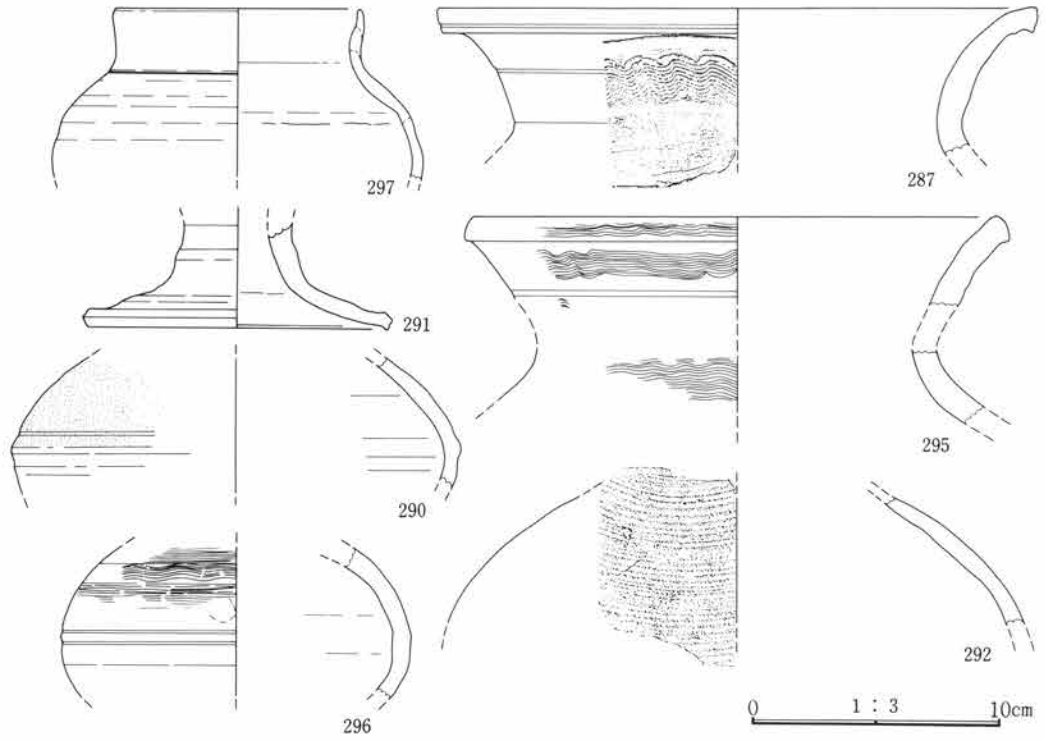
第127図 5区4号住居跡遺構(2)、遺物図(1)



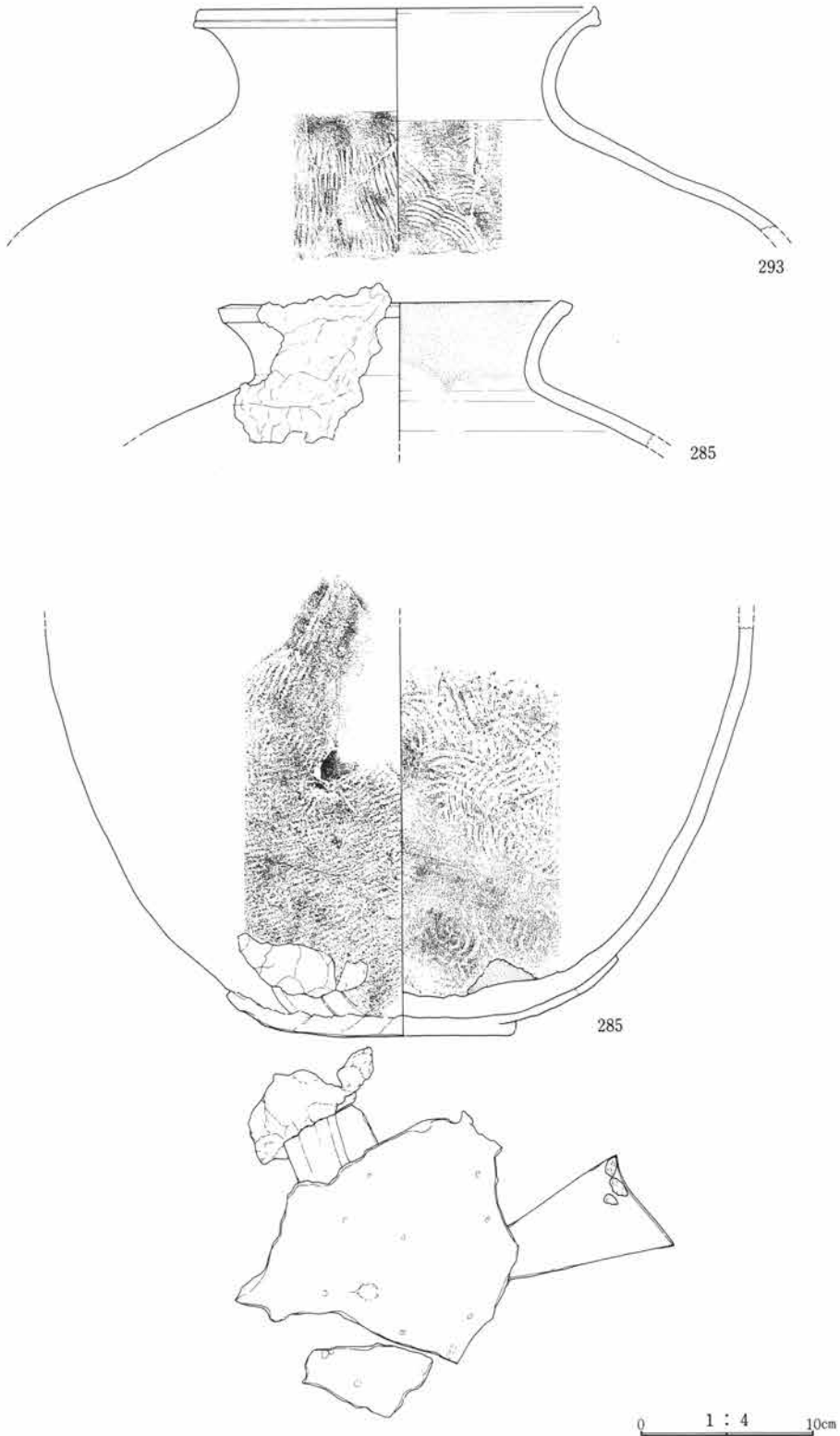
第128図 5区4号住居跡遺物図(2)



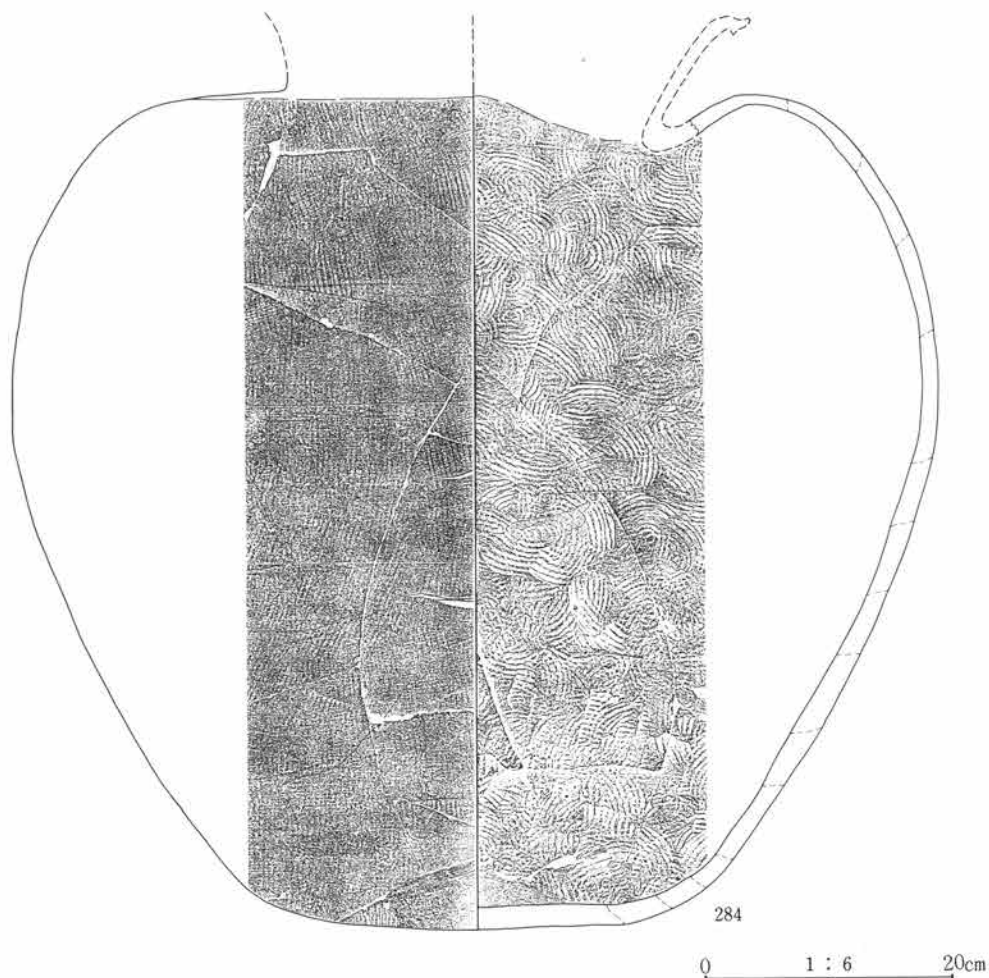
第129図 5区4号住居跡遺物図(3)



第130図 5区4号住居跡遺物図(4)



第131図 5区4号住居跡遺物図(5)



第132図 5区4号住居跡遺物図(6)

第20表 5区4号住居跡出土遺物観察表

(第127~132図、図版 59・60)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
284	甕 須恵器	胴-[74.0]、底-24.0、高-(66.0) $\circ\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色	大型の甕。口頸部を欠く。底部、平底で、丸く内湾しながら、体上部で最大径をもつ。体外面、全面に、擬似格子目、内面、同心円タタキ目、一部、ヘラナデあり	焼きひずみあり
285	甕 須恵器	口-20.5、胴-[41.0]、高-(8.2、23.4) $\circ\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含むが、細密。還元、硬質。黒色~黄褐色	丸底、球胴、中型の甕。口縁部、くの字に外反し、外縁帯をもつ。端部、平坦面あり。外面、平行、内面、同心円タタキ目、ナデ。器肉、薄手	同一個体であるが、不完全な接合。焼き台の須恵器、窯体付着

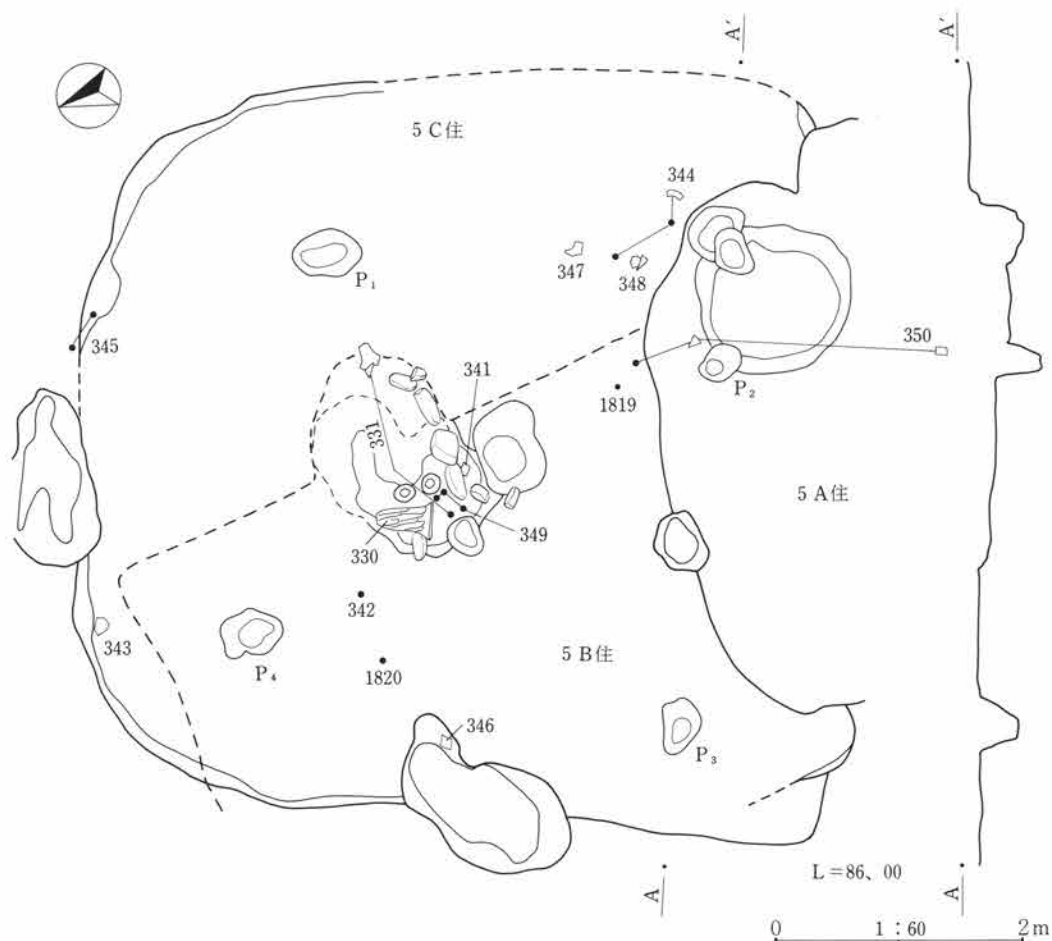
2 14地区の調査 (古墳時代)

286 5区4号住	甕 須恵器	高一(13.3)○小片	砂粒、石粒を含むが細密。還元、やや硬質。灰色～灰白色	丸底、球胴の甕。器肉、厚手、重い。外面、平行、内面、同心円のタタキ目、内面、ヘラナデあり	
287	甕 須恵器	□-[24.0]、高一(5.5)○小片	砂粒を含むが、細密。還元、硬質。灰色	口縁部、外反し、端部外縁帯をもつ。帯下位に沈線めぐる。頸部やや上に沈線めぐり、上に波状文。ロクロナデ調整	
288	坏 須恵器	□-[11.4]、高一3.6○ $\frac{1}{3}$	砂粒、褐色石粒を含む。還元、硬質。赤灰色	口縁部内傾、蓋受け部、三角形に突出する。底部、回転ヘラケズリ	底外面「X」印のヘラ記号あり
289	坏 蓋 須恵器	□-[13.0]、高一(3.4)○小片	砂粒、黒色斑文あり。還元、硬質。灰色	天井部、やや扁平で、口縁部、わずかに内湾して直行する。肩部、稜あり。天井部、回転ヘラケズリ	
290	壺 須恵器	胴-[18.0]、高一(5.2)○小片	砂粒、黒色斑文あり、細密。還元、硬質。灰色	体部やや上位に稜をもつて折れる壺。稜、上下に凹線めぐる。長頸壺か	自然釉あり
291	高 坏 須恵器	脚裾-[12.0]、高一(4.3)○小片	砂粒を含むが、細密。黒色斑文あり。還元、硬質。灰色	柱状ののびて、裾部大きくひろがる。端部二段の稜をもつ外縁帯で、内側、つまみあげ。頸部、ヘラナデ	
292	壺 須恵器	○胴部小片	砂粒、白色石粒を含む。還元、硬質。灰色	丸く張りをもつ胴部、外面、回転ハケナデ調整。内面ロクロナデ、横瓶か?	
293	甕 須恵器	□-[22.8]、高一(12.7)○小片	砂粒、褐色石粒を含む。還元、やや硬質。灰白～にぶい橙色	体上位で大きく張りをもつ甕。口縁部たちあがって、外反。端部、外縁帯めぐらし、内側つまみあげ。外縁帯上、沈線めぐる。外面平行、内面、同心円タタキ目。器肉、薄手	
294	甕 須恵器	胴-[42.0]、高一(16.0)○小片	砂粒、白色石粒を含むが、細密。還元、硬質。灰白～にぶい赤褐色	体上部で、大きく張りをもつ甕。外面、擬似格子目、内面、同心円タタキ目、外面ヘラナデあり。器肉薄手	
295	甕 須恵器	□-[21.0]、高一(3.5、2.9)○小片	砂粒、白色石粒を含むが、細密。還元、硬質。灰褐色	くの字に外反する口縁部。端部、外側に稜をもち、波状文、頸部、沈線めぐらし、上、下に波状文	
296	壺 須恵器	胴-[14.0]、高一(6.1)○小片	砂粒を含むが、細密。還元、硬質。灰色	小形壺。体部中位に張りをもち、沈線、2本めぐらす。回転ハケナデあり。提瓶となるか?	
297	壺 須恵器	□-[9.8]、胴-[14.9]、高一(6.7)○ $\frac{1}{8}$	砂粒を含むが、細密。還元、硬質。灰色	短頸壺。体上部で張りをもち、口縁部、ゆるやかにたちあがり、端部わずかに内湾、ロクロナデ、薄手	
299	甕 土師器	□-14.0、胴-[18.4]、高一19.4○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含むが、細密。酸化、軟質。橙色	丸底、球胴の甕。頸部たちあがって、口縁部外反する。口頸部中位にわずかに稜あり。体外面、ヨコヘラケズリ、内面、ナデ調整	内面、炭化物付着

第6章 検出された遺構と遺物

300 5区4号住	甕 土師器	口-[16.2]、高-(6.7)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	球胴の甕。口縁部たちあがって、外反、端部で内湾する。体外面、ヨコヘラケズリ、内面、ナデ調整
301	甕 土師器	口-[16.0]、高-(4.7)○小片	砂粒、石英、石粒を多く含む。酸化、軟質。明赤褐色	球胴の甕。口縁部たちあがって、端部で外反。外面、タテヘラケズリ、内面、ヘラナデ調整
302	甕 土師器	口-[18.2]、高-(7.8)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石英、片岩粒を含む。酸化、軟質。橙色	ゆるいくの字に外反する口縁の甕。体外面、ヨコヘラケズリ、内面ナデ調整。器肉、厚手
303	鉢 土師器	口-[14.4]、高-(7.0)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	体部、丸く、頸部、段をもってたちあがり、口縁部、ゆるい外反。体部ヨコヘラケズリ、内面、ナデ
304	甕 土師器	口-[11.6]、高-(5.6)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。橙色	小型甕。体部丸味をもち、口縁部、ゆるい外反。体外面、ヨコヘラケズリ、内面、ヘラナデ調整
305	甕 土師器	口-[14.5]、高-(7.5)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	球胴の甕。口縁部、外反。体外面、タテヘラケズリ、内面、タテヘラナデ調整
306	甕 土師器	口-[22.0]、高-(5.0)○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	口縁部、強く外反する甕。体部、肩部でやや張りをもつ。体外面、ヨコヘラケズリ、内面、ナデ調整
307	甕 土師器	口-[15.3]、高-(9.4)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	体部、やや丸味をもち、口頸部、くびれて、口縁部で外反する長甕。体外面、タテヘラケズリ調整
308	甕 土師器	口-[19.6]、胴-[23.9]、高-(12.0)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石英、白色石粒を含む。酸化、軟質。橙色	口縁部、くの字に外反する、丸胴の甕。口縁部丸味あり。体内外面、ヘラナデ調整
309	甕 土師器	口-[26.8]、高-(8.5)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、白色石粒を含むが、細密。酸化、軟質。赤褐色	口縁部外反する、鉢状の甕。体外面タテヘラケズリ、内面、ヨコナデ
310	甕 土師器	口-[17.8]、底-6.5、高-11.2○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	平底、鉢状の甕。体外面、タテ、ヨコヘラケズリ、内面、ていねいなナデ調整。底部ヘラケズリ後、10個の小孔、穿つ
311	甕 土師器	高-(10.5)○底部のみ	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	丸底の甕。体外面、ヘラケズリ、内面、ヘラナデ、底外面より6個穿孔
312	甕 土師器	口-[18.2]、高-(25.3)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石英粒を多く含む。酸化、軟質。橙色	長甕。口縁部、短かく外反する。外面、タテヘラケズリ、内面ヨコナデ
313	甕 土師器	口-[21.0]、高-(15.7)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石英粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい橙色	長甕。口縁部、ゆるいくの字に外反する。体外面、タテヘラケズリ、内面、ヨコナデ調整

314 5区4号 住	甕 土師器	底-8.0、高-(5.0) ○底部のみ	砂粒、石英、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	長甕の底部。体外面、タテヘラケズリ、内面、ヘラナデ。平底、ヘラケズリ	
315	甕 土師器	底-5.0、高-(11.6) ○底部のみ	砂粒、片岩粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	長甕の底部。体部下位で、丸く張りをもつ。底部、やや小さい平底。外面ヘラケズリ、内面、ヘラナデ	内外面、スス、炭化物付着
316	甕 土師器	底-6.5、高-(6.0) ○脚部のみ	砂粒、石英、片岩粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい橙色	台付甕と思われる。外面、ヘラケズリ、内面ナデ。器肉、厚手。粗雑な作り	
317	甕 土師器	口-17.0、高-(18.3) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石英、片岩粒を多く含む。酸化、軟質。橙色	長甕。体部中位で、ややふくらみを持つ。口縁部、くの字に外反。外面タテヘラケズリ、内面タテヘラナデ	
318	甕 土師器	底-[6.8]、胴-[23.0]、高-(19.3) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	底部、やや凸状、体下部で、丸く張りをもつ。丸胴の甕。体外面、タテヘラケズリ、ヘラナデ調整	
319	坏 土師器	口-13.4、高-4.5 ○完存	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	底部丸く、稜をもってたちあがり、口縁部、短かく、やや内湾。底部、手持ちヘラケズリ。器肉、厚手	
320	坏 土師器	口-[12.5]、高-4.4 ○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含むが、細密。酸化、軟質。橙色	底部丸くたちあがり、稜をもって、口縁部、短かく、やや内湾。底部、手持ちヘラケズリ	内外、スス、炭化物付着
321	坏 土師器	口-[15.0]、高-(3.4) ○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。褐色	底部丸く、明瞭な稜をもって、口縁部たちあがる。短かく、内湾する。底部、手持ちヘラケズリ	
322	坏 土師器	口-[11.6]、高-4.2 ○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含むが細密。酸化、軟質。良好。橙色	底部丸く、ひろがり、明瞭で丸い稜をもって、口縁部内傾しながらたちあがる。底部、手持ちヘラケズリ	
323	坏 土師器	口-12.4、高-4.4 ○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含むが細密。酸化、軟質。にぶい橙色	底部丸底、口縁部へ稜をもってたちあがる。口縁部、内湾して外行する。底部、手持ちヘラケズリ	坏蓋か?
325	坏 土師器	口-[12.0]、高-(2.0) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含むが細密。酸化、軟質。にぶい橙色	底部丸底で浅い。口縁部、ほぼ直線的に外行。底部手持ちヘラケズリ	
327	坏 土師器	口-[11.5]、高-3.6 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含むが細密。酸化、軟質。橙色	底部丸底で浅い。稜をもってたちあがり、口縁部やや内湾する。底部、回転ヘラケズリ。器肉、薄手	
326	紡錘車 石製品	下部径-4.5、上部径-2.7、厚-1.8、孔径-0.8。完存。蛇紋岩類。断面、台形状、側面、調整痕あり			

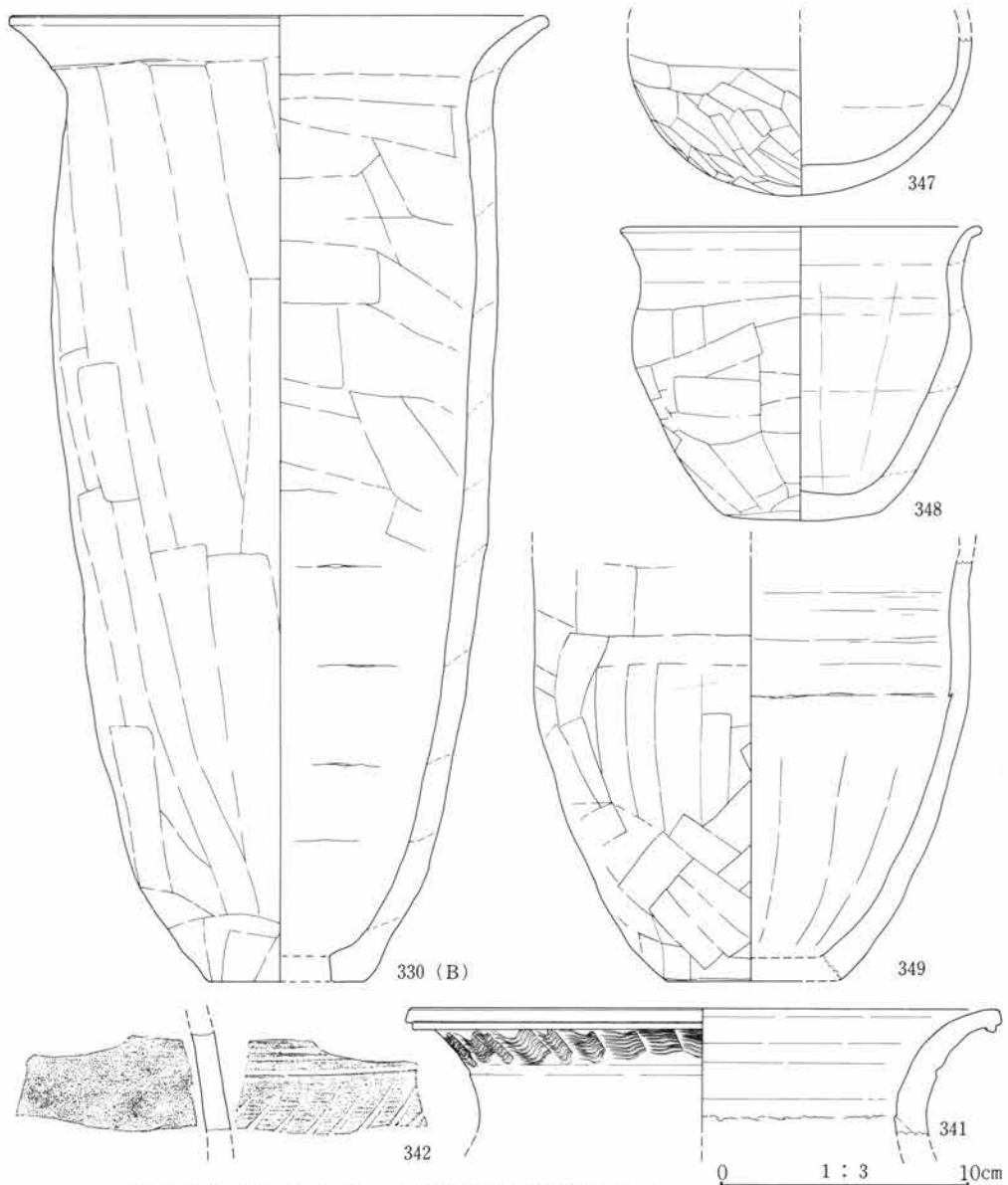


第133図 5区5B号、5C号住居跡遺構図

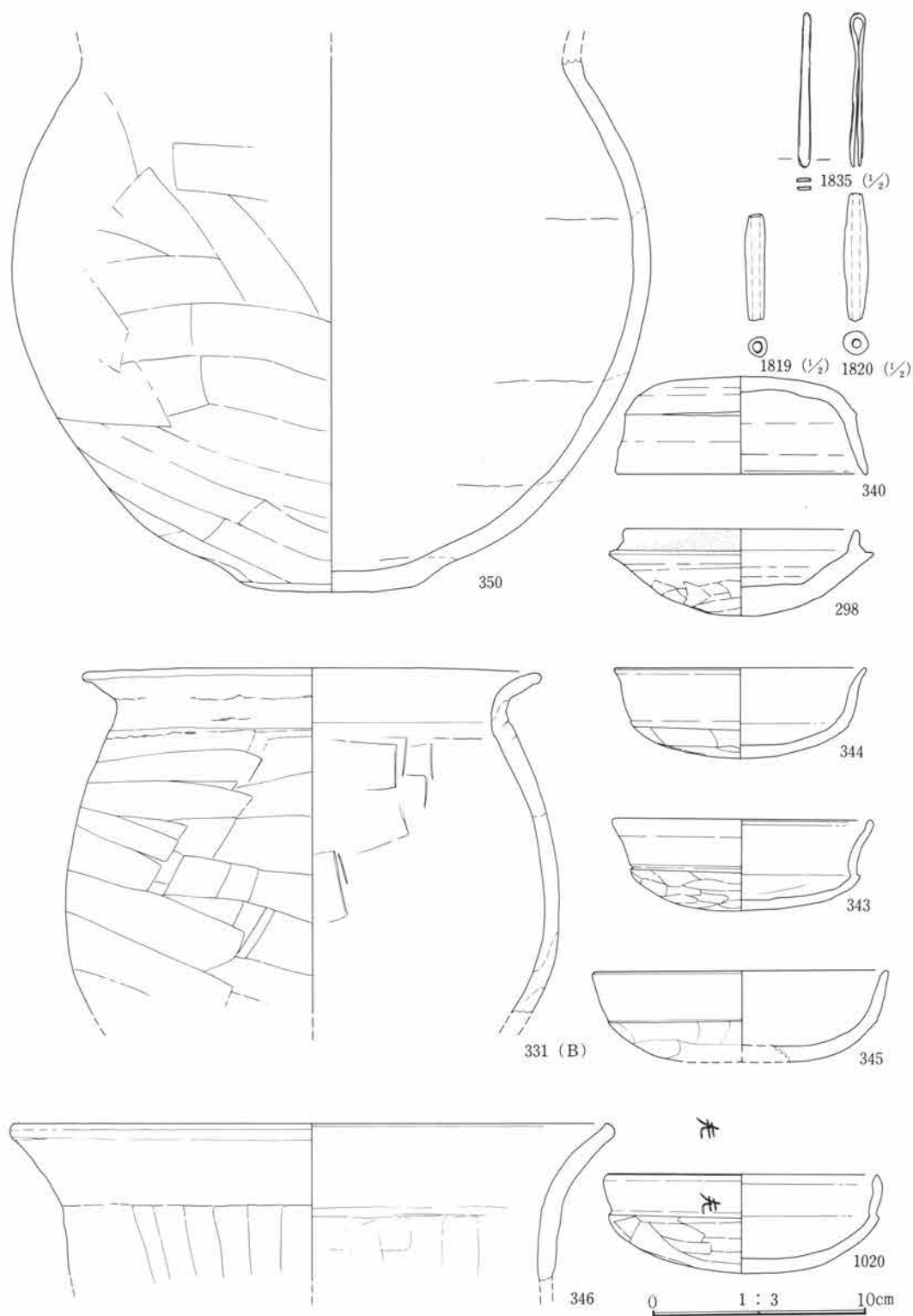
5区5B号、5C号住居跡 (第133~135図、第21表、図版61・62)

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。住居跡南側で、5A号住と重複する。確認時、床面の一部が、露呈していたと思われ十分に平面形を確認できなかった。整理を行ってゆく段階で、遺物の出土状況、柱穴様ピットの位置、貯蔵穴様土壇のあり方等から、5B号住としたものは、2軒重複で、5B号、5C号住と分離できると考えられ、それぞれ平面形を想定した。5B号住は、東西に石列が認められる部分が、石組カマドで、石列前面に、長甕が横だおしの状態で検出された。焼土も確認されている。カマド石組の南側に、長径70cm×短径50cm×深さ20cmを測る隅丸方形の土壇があり、カマドからの焼土の落ち込みもある。本住居跡の貯蔵穴として良いだろう。柱穴はいくつか想定できるが、確定し難い。平面形は、カマドのある部分を東辺とし、わずか数cmの段差ではあるが、5A号住西辺中央でまがる凹みを、西辺と想定して、横〔5.00m〕×縦〔3.80m〕程の横長の方角を呈すると考えた。5C号住は、5B号住の東側に大きく重複する。5B号住のカマドの残存状況から、5B号住より古い時期の住居跡と考えられる。規模は、推定で〔6.00m〕×〔5.60m〕程で、平面形は方角を呈する。柱穴と思われるのは、ピット1~4で、平面と

柱穴は、それぞれゆがみをもつ。床面、周溝、カマド、貯蔵穴は、不明である。遺物は、5 B号、5 C号住で、あえて分離しなかった。遺物量は多く、須恵器甕、坏蓋、土師器長甕、丸胴甕、小型甕、坏、甗で、5 B号住カマド前より、毛抜き状の青銅製品が出土している。本両住居跡出土の遺物は、5区4号住と接合関係を持つ物が多く、特に5 C号住においてその傾向が著しい。時期は、遺物より、古墳時代後期末であろう。なお、No.1020の坏は、5 C号住の東南部より出土した、土師器の坏である。口縁部外側に「左」の刻字が認められる。本遺跡の中では一番古い時期の刻字土器で、注目される。
(長谷部)



第134図 5区5 B号、5 C号住居跡遺物図 (1)



第135図 5区5B号、5C号住居跡遺物図(2)

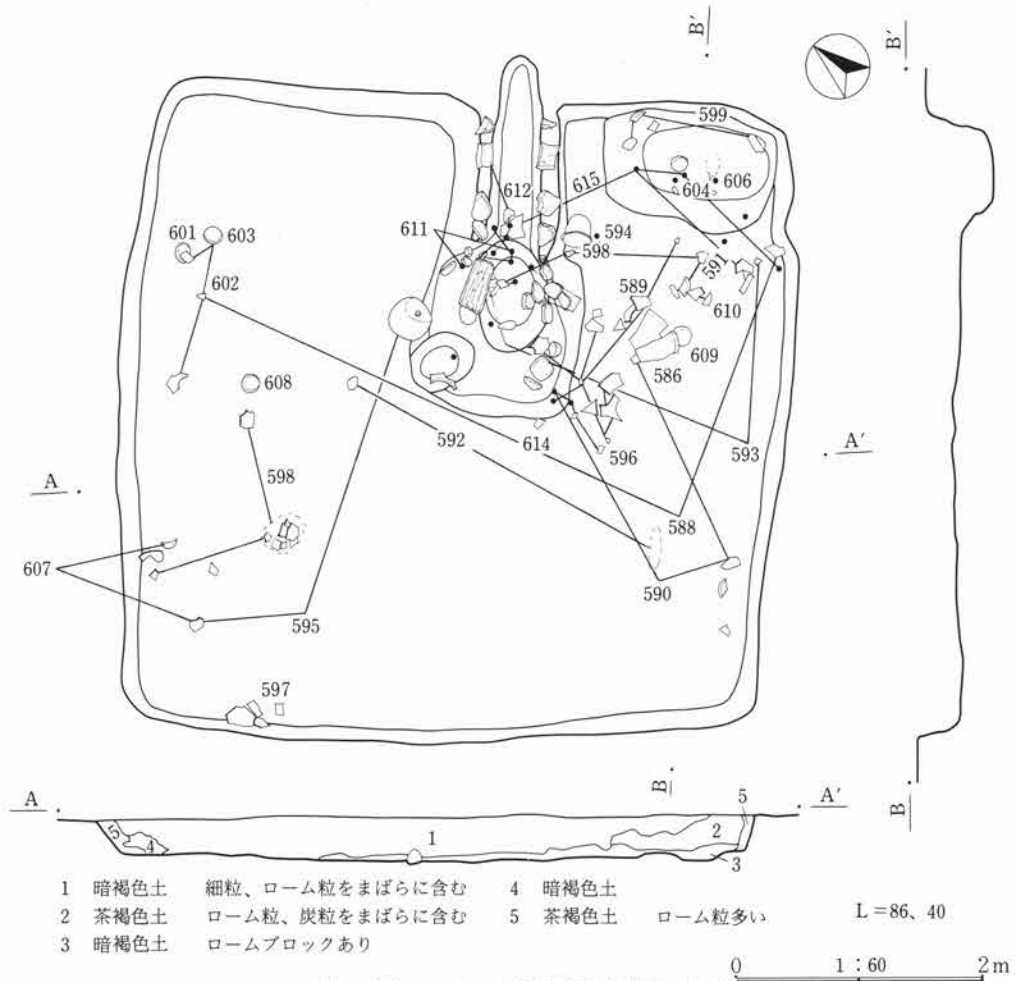
第21表 5区5B号、5C号住居跡出土遺物観察表

(第134・135図、図版 61・62)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
298	坏 須恵器	口-[10.8]、高- 4.0○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。還元、硬質。 灰色	有蓋坏の身部。受け線、大きく突出、 口縁部短かく内傾。底部ヘラケズリ 調整、粗雑な作り	自然釉あり
330	甕 土師器	口-21.8、底-[6. 2]○ $\frac{3}{4}$	砂粒、石英、片岩を含む。 酸化、軟質。橙色	口縁部外反する長甕。体外面、ヘラ ケズリ、内面ナデ調整、底部、焼成 後の打ち欠きあり、甕として転用か	内外、スス、炭 化物付着
331	甕 土師器	口-[21.2]、高- (15.8)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む、細密。 酸化、軟質。橙色	口縁部、強く外反する丸胴の甕。体 外面、ヨコヘラケズリ、内面、ナデ	内外、スス、炭 化物付着
340	蓋 須恵器	口-[11.8]、高- 4.5○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、白色鉱物を 含む。還元、硬質。灰色	天井部中央、平坦。口縁部へ稜をもっ て区切る。口縁部やや外行。天井部、 回転ヘラケズリ	
341	甕 須恵器	口-[23.7]、高- (5.0)○小片	砂粒を含むが、細。還元、 硬質。黄灰色	口縁部外反する甕。口縁部外縁帯に 沈線めぐらし、口頸部、沈線と波状 文を施す	
342	甕 須恵器	○頸部片	白色鉱物を含む、細密。 還元、硬質。灰色	横位、4本の沈線と、斜めのヘラが き沈線を施す、大型の甕	
343	坏 土師器	口-[12.2]、高- 4.3○ $\frac{3}{4}$	砂粒含むが、細密。酸化、 軟質。にぶい橙色	底部浅く、稜をもって、口縁部へた ちあがる。口縁部、内湾しながら外 行。底部、手持ちヘラケズリ	
344	坏 土師器	口-[11.8]、高- 4.2○ $\frac{1}{2}$	砂粒含むが、細密。酸化、 軟質。赤橙色	底部浅く、稜をもって、口縁部へた ちあがる。口縁部、わずかに外反。 底部、手持ちヘラケズリ	
345	坏 土師器	口-[13.8]、高- 4.0○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。 橙色	底部丸く、口縁部わずかに内湾。体 部、ゆるい稜をもつ。底部、手持ち ヘラケズリ	
346	甕 土師器	口-[28.2]、高- (7.0)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。明赤褐色	口縁部、外反し、端部丸く、内側に つまみ出しのある、鉢形の甕。体部 タテヘラケズリ、内面、ナデ調整	
347	埴 土師器	胴-[13.8]、高- (6.4)○ $\frac{3}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。にぶい橙色	丸底で球形の体部をもつ。外面、細 かいヘラケズリ、内面、ナデ調整	
348	甕 土師器	口-[14.6]、底- 6.4、高-11.7○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石英粒を含む。酸 化、軟質。明赤褐色	底部、やや凸状、体上部で張りをもち、 口縁部、ゆるく外反。体外面ヨ コヘラケズリ、内面、ナデ調整	
349	甕 土師器	胴-[17.5]、底- [7.2]、高-(16. 9)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。淡橙色	体部、ややふくらみをもつ長甕。体 外面、ヨコ、タテ、ヘラケズリ、内 面、粘土積痕残し、ヨコ、タテ、ナ デ調整	

第6章 検出された遺構と遺物

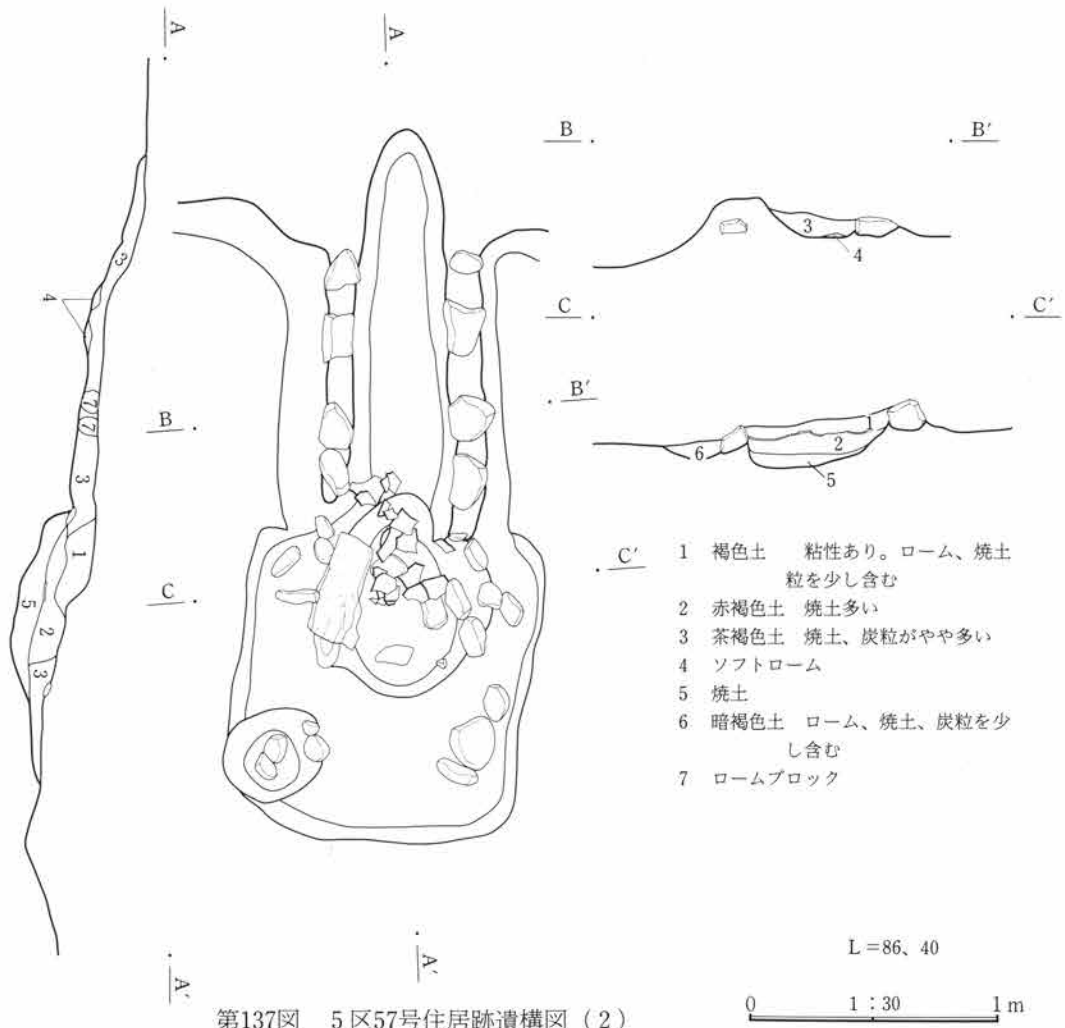
350 5区5B 5C住	甕 土師器	胴-[30.0]、底- 8.6、高-(24.8) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒、石英粒を含む。酸化、軟質。橙色	底部、凸状、球胴の甕。体外面、ナ ナメヘラナデ、内面、ナデ調整	
1020	坏 土師器	口-13.0、高-4. 6○略完存	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。にぶい橙色	底部、丸底でやや深め。稜をもって 口縁部たちあがり、内湾。底部、手 持ちヘラケズリ	口縁部外面、ヘ ラ刻字あり、 「左」字
1819	土 錘	長-3.3、径-0.6、孔径-0.3○略完存。細身、棒状の土錘			
1820	土 錘	長-4.0、径-0.8、孔径-0.3○完存。細身、中央部、ふくらみをもち、両端、すぼまる			
1835	青銅製品	長-4.8、巾-0.4、厚-0.1、ヘアピン状に折り曲げ、両端、巾、広く、扁平な嘴状となる。毛抜き状製品か			



第136図 5区57号住居跡遺構図(1)

5区57号住居跡(第136~142図、第22表、図版62~65)

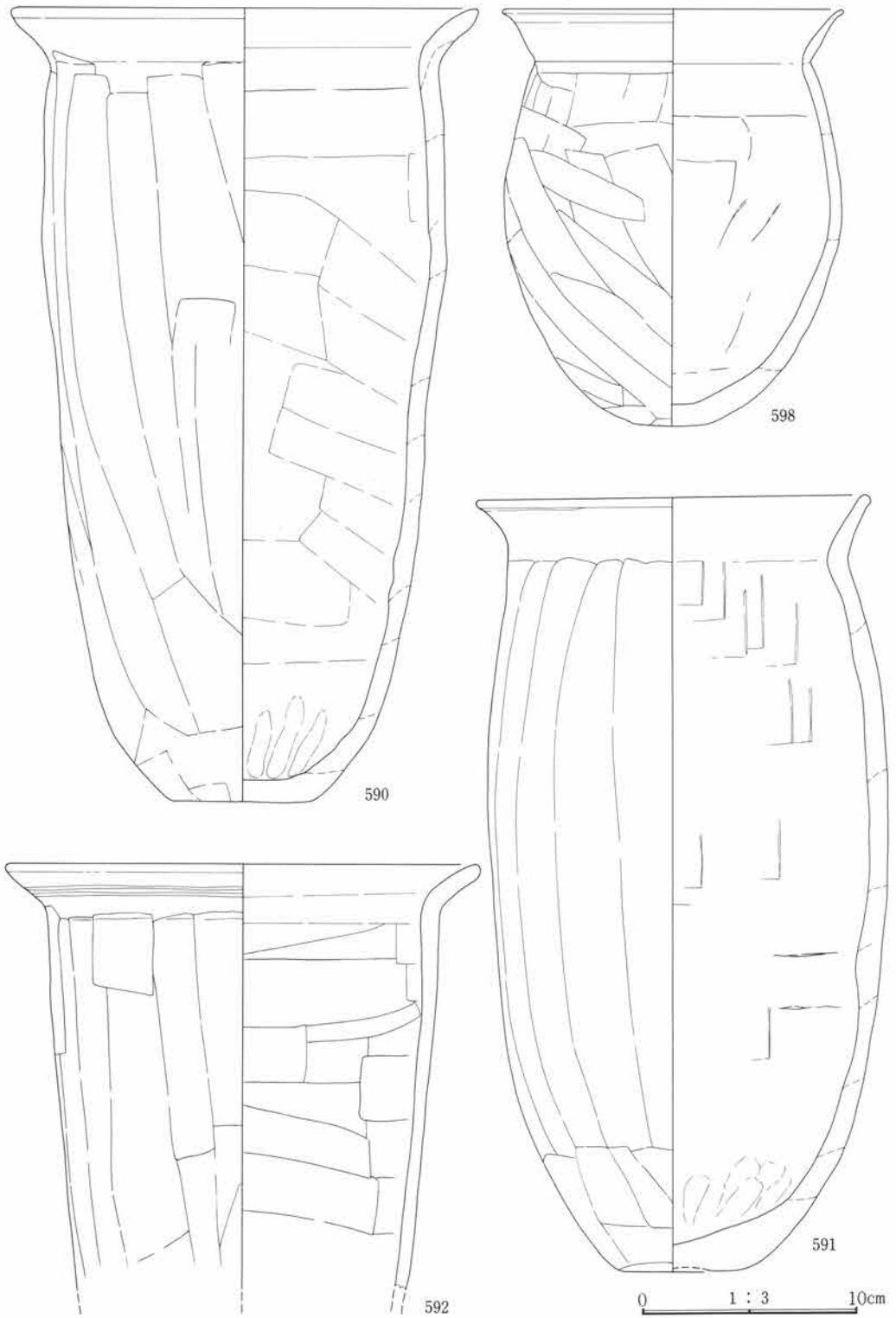
本住居跡は、基本土層第4層で確認された。規模は、西辺で5.38m、北辺で5.15m、方位は北辺



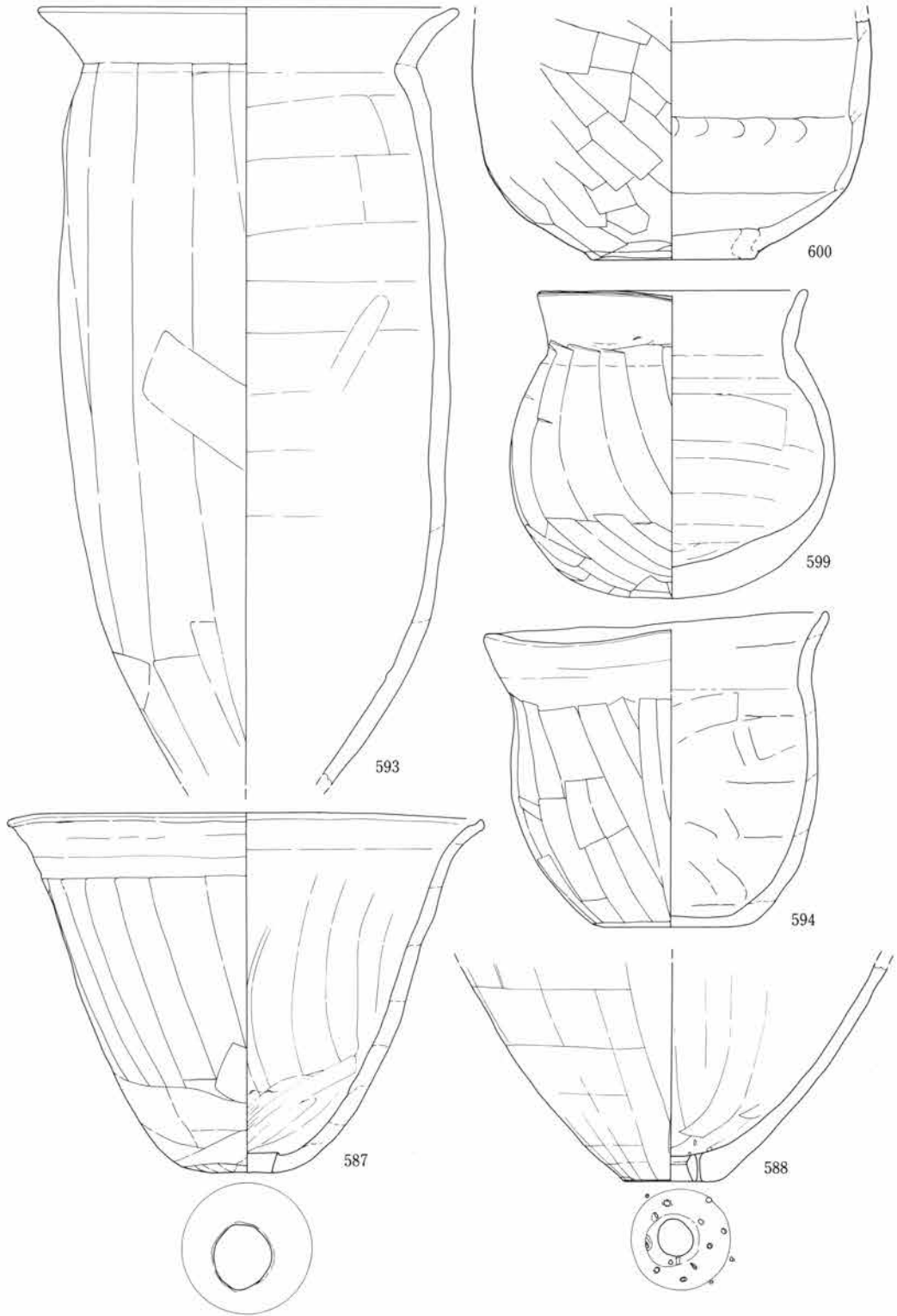
第137図 5区57号住居跡遺構図(2)

でN-55°-Eである。平面形は方形を呈し、貯蔵穴脇の南辺に一部屈曲がある。壁高は約35cmあり、四辺ともわずかな傾斜を持つ。床面は、ロームを踏み固めており、平坦で堅緻である。柱穴は、いくつかのピットが確認されたが、いずれも掘り方が不明瞭で浅いこと、不規則な配置であることから断定するに至らなかった。カマドは、東辺の中央部で確認された。焚口から煙道部にかけてロームを掘り残し、黄褐色土を用いて袖材等としている。焚口には、凝灰岩質の粗い面取りされた切石が据えられ、袖から煙道にかけても拳大の割石等が袖材の芯として用いられている。煙道は、壁外に約10cmのびる程度である。また、カマド手前の床面が、全体より約5cm低く方形を呈する。カマド内の焼土、炭化物の量は少なく、全体の焼け方も弱い。貯蔵穴は、カマド右脇、住居東南隅に接して長径1.38m、短径0.93m、深さ35cmの隅丸方形の土壇が確認された。遺物は、住居内全体に多く、特にカマド周辺に見られた。土師器長甕、丸胴の甕、坏、甗、須恵器甕が見られ、土師器については一器種の個体数も多く、甕は大、中、小の大きさによる特徴がある。遺構の時期は、出土遺物により古墳時代後期とする。

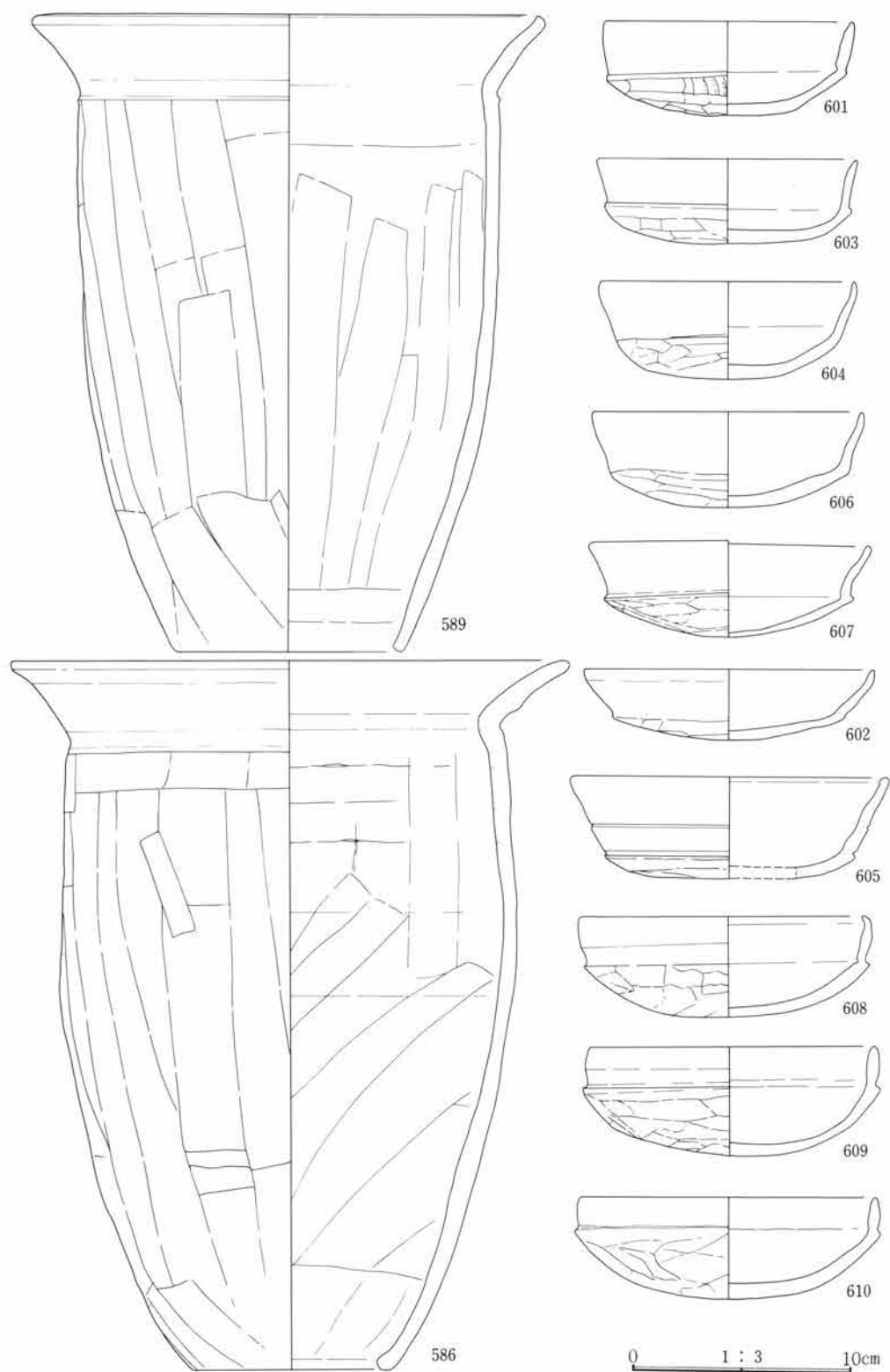
(新井)



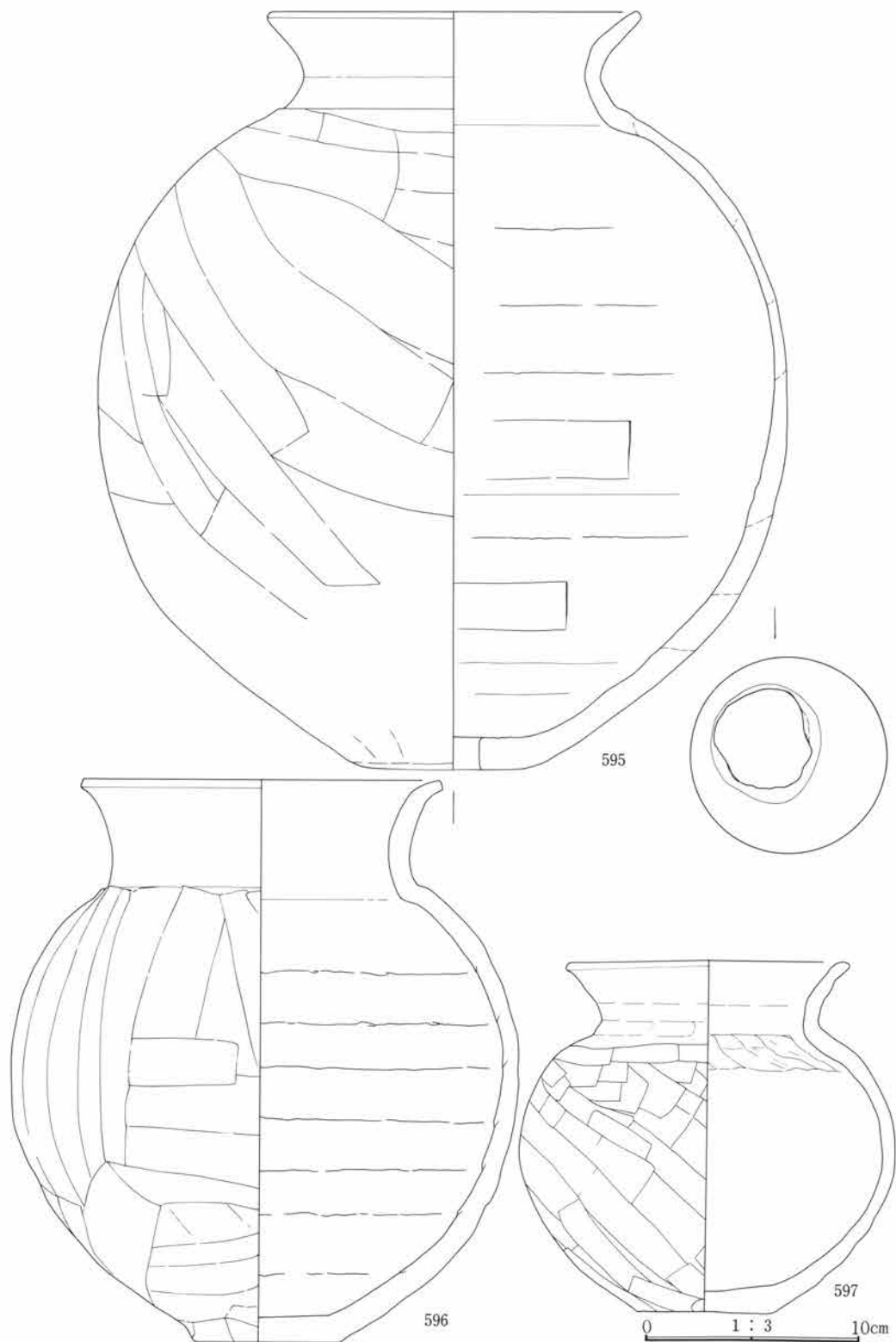
第138図 5区57号住居跡遺物図(1)



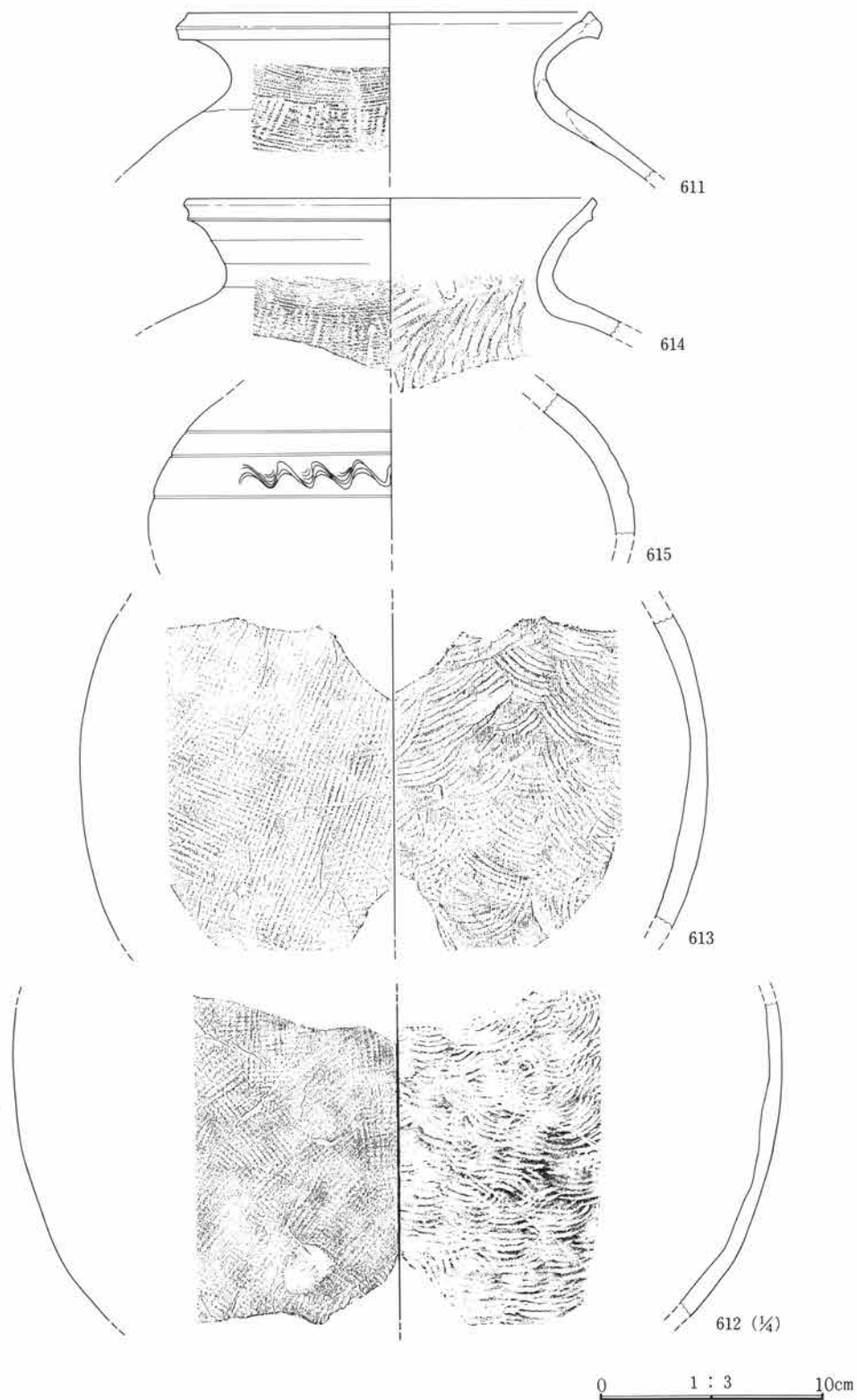
第139図 5区57号住居跡遺物図(2)



第140図 5区57号住居跡遺物図(3)



第141図 5区57号住居跡遺物図(4)



第142図 5区57号住居跡遺物図(5)

第 22 表 5 区57号住居跡出土遺物観察表

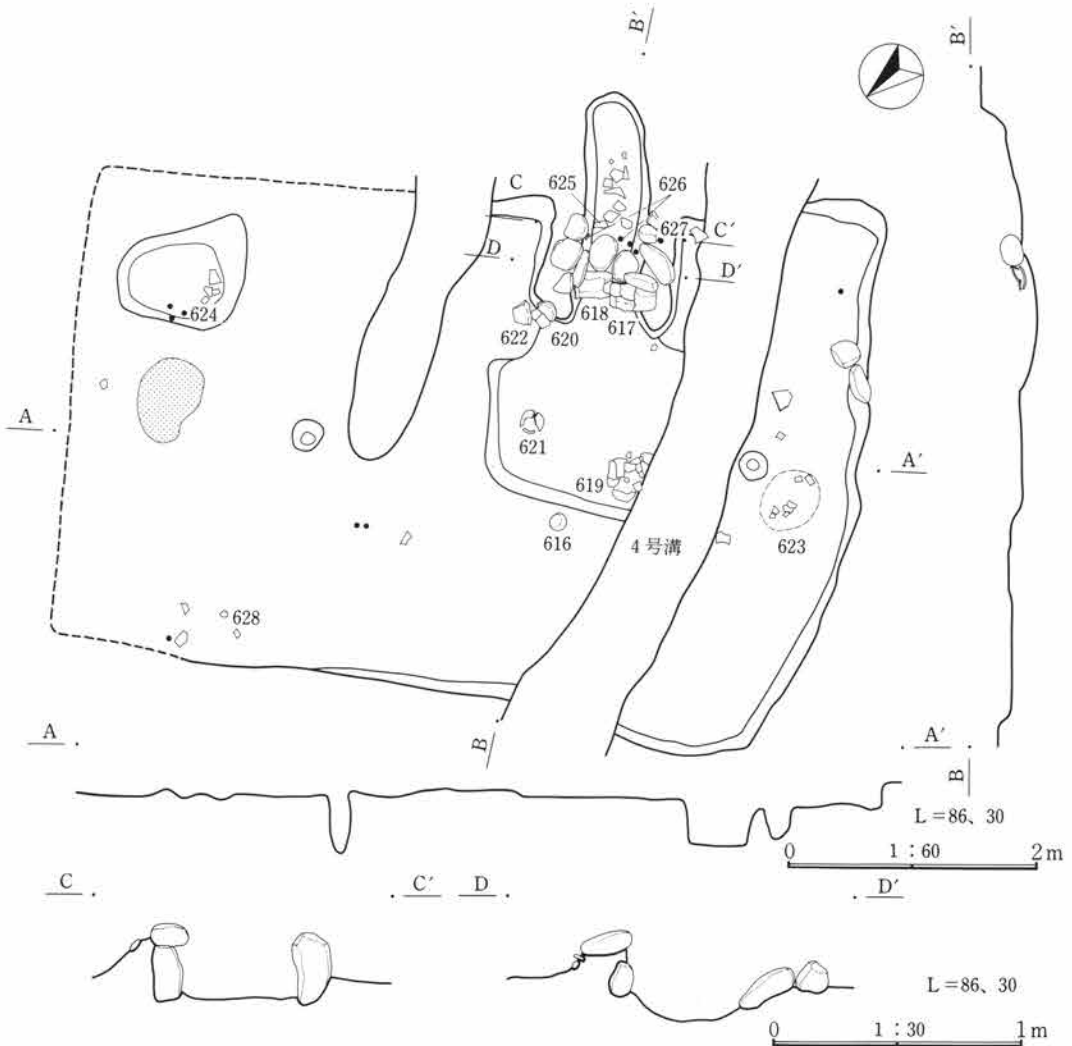
(第138~142図、図版 64・65)

番 号	土 器 種 類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
586	甌 土 師 器	口-25.5、底-[9.1]、高-32.1○略 完存	砂粒、石英、石粒を含む。 酸化、軟質。明赤褐色	口縁部、くの字に外反する長甕形の甌。底部、筒状に抜け、ヘラケズリ調整。体外面、タテヘラケズリ調整	
587	甌 土 師 器	口-22.1、底-6.0、高-16.6○完存	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。橙色	口縁部、ゆるく外反する鉢形の甌。底部、丸味をおび、ヘラ切りによる穿孔、1個。外面、タテヘラケズリ	
588	甌 土 師 器	底-4.4、高-(9.9)○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。橙色	鉢形の甌。小さい平底、体部わずかに内湾してひろがる。底部中央に1個、周辺に、内側より18個の小孔あり(うち貫通14個)。外面、ヨコヘラナデ、内面、タテナデ調整	
589	甌 土 師 器	口-[23.4]、底-[10.5]、高-28.8○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含むが、細。酸化、軟質。明赤褐色	甕形の甌。口縁部、くの字に外反、端部、外稜をもち、内側つまみ出しあり。底部、筒状に抜け、ヘラケズリ後、ナデ。外面、タテヘラケズリ	
590	甕 土 師 器	口-[21.7]、底-[6.6]、高-36.3○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石英、片岩粒を含む。酸化、軟質。褐色	長甕。平底、体下部でやや張りをもち、口縁部短かく、くの字に外反。外面、タテヘラケズリ、内面、ナデ	
591	甕 土 師 器	口-[18.2]、底-6.5、高-35.6○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明黄褐色	長甕。底部中央、凹みあり。体部、ややふくらみ、口縁部ゆるい外反、端部、外側に丸くめくれる。外面、タテヘラナデ、内面、ヨコヘラナデ	
592	甕 土 師 器	口-[22.0]、高-[19.6]○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石英、片岩粒を含む。酸化、軟質。褐色	長甕。口縁部、くの字に外反。外面、タテヘラケズリ、内面、ヨコナデ調整	
593	甕 土 師 器	口-19.7、高-(36.0)○底部欠損	砂粒、石英、片岩を含む。酸化、軟質。明赤褐色	体部、やや丸味をもつ長甕。口縁部くの字に、強い外反。外面、浅いタテヘラケズリ、内面、ヨコナデ調整	体外面、スス付着
594	甕 土 師 器	口-16.1、底-7.4、高-15.6○完存	砂粒、石英、片岩を含む。酸化、軟質。赤褐色	小型甕。平底、体部丸く、口縁部、ゆるい外反。外面、タテヘラケズリ、内面、ていねいなナデ調整	
595	甕 土 師 器	口-[17.5]、胴-[32.0]、底-9.3、高-35.0○ $\frac{3}{4}$	砂粒、石英、片岩を含む。酸化、軟質。明赤褐色	球胴の甕。口縁部は、頸部より、たちあがり、外反。底部、端部丸く平ら。焼成後の穿孔、1個あり。外面、ナナメヘラケズリ、内面、ナデ	体内面、油煙状炭化物、強く付着。甌として、転用か
596	甕 土 師 器	口-16.8、胴-23.6、底-6.8、高-26.0○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石英粒を多く含む。酸化、軟質。明赤褐色	球胴の甕。中型。口縁部、頸部よりたちあがって、外反。口縁端部、外稜をもち、中央に凹線めぐる。外面タテヘラケズリ、内面、ナデ調整粗	体内外面、表面の剝落あり

第6章 検出された遺構と遺物

597 5区57号 住	甕 土師器	口-13.1、胴-[17.5]、底-6.4 高-16.2 $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む。酸化、軟質。黄褐色	球胴の小型甕。平底、胴部やや扁平な球形、口縁部、くの字に外反。外面、ヨコ、ナナメヘラケズリ	体外面、口縁内面、スス、炭化物付着
598	甕 土師器	口-15.8、胴-[15.7]、高-19.1 $\frac{1}{2}$	砂粒、石英、片岩を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	丸底、丸胴の小型甕。口縁部、くの字に外反、端部、強い外反。体外面ヨコ、ナナメヘラケズリ、内面ナデ	
599	甕 土師器	口-[12.6]、胴-[15.2]、高-14.3 $\frac{3}{4}$	砂粒、片岩、軽石を含むが、細。酸化、軟質。橙色	丸底、丸胴の小型甕。口縁部、たちあがって、わずかに外反。体外面、タテヘラケズリ、内面、ナデ調整	
600	甕 土師器	底-[7.8]、胴-[19.3]、高-(11.1) $\frac{1}{4}$	砂粒を多く含む。酸化、軟質。明赤褐色	平底、体下部に丸く張りをもつ、丸胴の甕。体外面、ヨコ、ナナメの弱いヘラケズリ、内面、ナデ	
601	坏 土師器	口-11.4、高-4.2 $\frac{1}{2}$ 完存	砂粒を含むが、細密。酸化、軟質。橙色	底部、丸く、やや浅め、稜をもって口縁部たちあがる。底部、手持ちヘラケズリ、内外面、ていねいなナデ	
602	坏 土師器	口-[13.2]、高-3.2 $\frac{3}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	底部、浅く、稜をもって口縁部、ひろがる。底部、手持ちヘラケズリ	口縁部内外、黒色処理か
603	坏 土師器	口-11.8、高-3.8 $\frac{1}{2}$ 完存	砂粒を多く含む。酸化、軟質。橙色	底部、浅く、稜をもって口縁部、直線的にたちあがる。底部ヘラケズリ	
604	坏 土師器	口-11.8、高-4.4 $\frac{1}{2}$ 完存	砂粒を含むが、細密。酸化、軟質。橙色	底部、丸く、深く、丸い稜をもって口縁部たちあがる。底部ヘラケズリ	
605	坏 土師器	口-[14.4]、高-4.6 $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	底部、浅く、稜をもって口縁部、外行する。中央に沈線めぐる。口縁端部丸く、内側につまみ出す。底部ヘラケズリ	
606	坏 土師器	口-[12.4]、高-4.3 $\frac{3}{4}$	砂粒を含むが細。酸化、軟質。黄褐色	底部、浅く、丸い稜をもって口縁部たちあがる。口縁部わずかに内湾。底部、手持ちヘラケズリ	
607	坏 土師器	口-12.8、高-4.1 $\frac{1}{2}$ 完存	砂粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい橙色	底部丸底で、やや浅く、稜を明瞭にもち、口縁部わずかに外反。底部、手持ちヘラケズリ	内外面、スス、炭化物付着
608	坏 土師器	口-13.2、高-4.5 $\frac{1}{2}$ 完存	砂粒、褐色石粒を含む。酸化、やや軟質。赤褐色	底部丸底で、尖がった稜をもって、口縁部たちあがり、端部内湾。底部手持ちヘラケズリ	内外面、スス、炭化物付着
609	坏 土師器	口-13.5、高-4.9 $\frac{1}{2}$ 完存	砂粒、石英、片岩粒を含む。酸化、軟質。橙色	底部丸く深め、稜をもって口縁部たちあがる。短かく、わずかに内湾。底部、手持ちヘラケズリ	
610	坏 土師器	口-13.7、高-4.6 $\frac{1}{2}$	砂粒、石英、片岩を含む。酸化、軟質。橙色	底部丸く深め、口縁部へ稜をもってたちあがり、短かく、わずかに内湾。底部、手持ちヘラケズリ	No609と、胎土、焼成、器形とも近似する

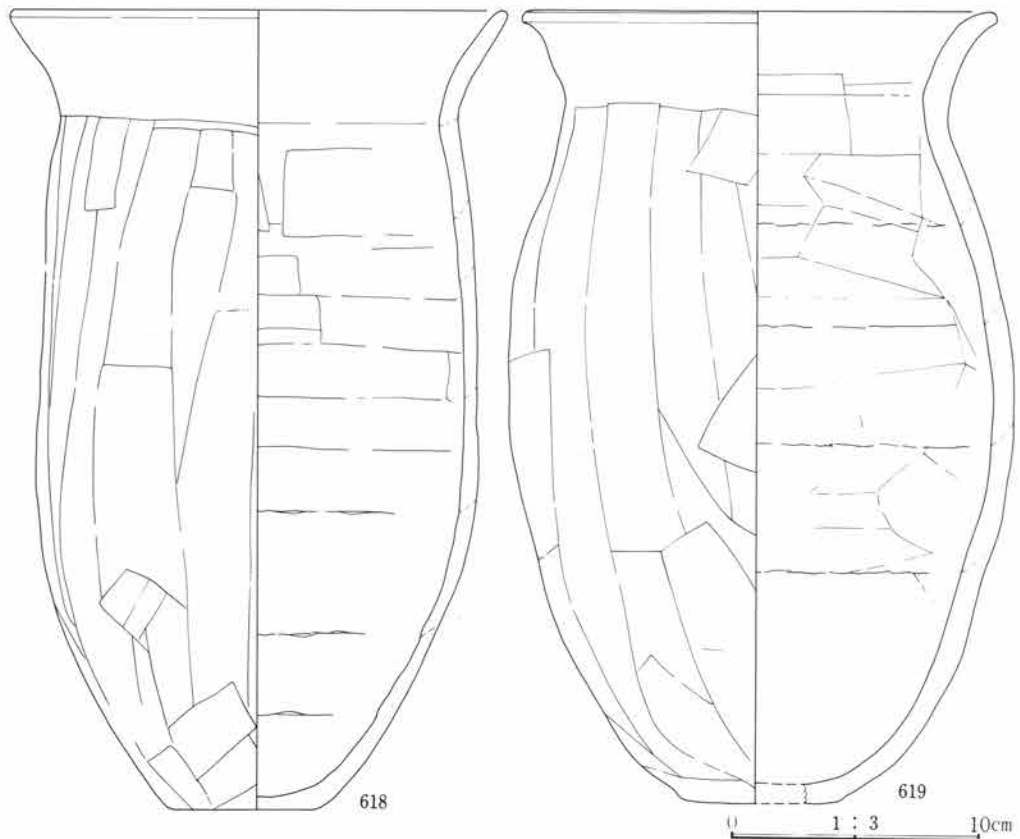
611 5区57住	甕 須恵器	口-[18.0]、高-(7.1) ○小片	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	口縁部外反する甕。口縁端部外縁帯あり。体外面タタキ目後ハケナデ	
612	甕 須恵器	胴-[45.8]、高-(18.6) ○小片	砂粒含むが細密。酸化、やや硬質。黄橙色	大型甕。外面、擬似格子目、内面、同心円のタタキ目。器肉、薄手	
613	甕 須恵器	胴-[28.0]、高-(13.8) ○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、硬質。にぶい黄橙色	体部丸い甕。外面、平行、内面、同心円のタタキ目	
614	甕 須恵器	口-[18.4]、高-(5.5) ○小片	砂粒を含む。還元、硬質。灰色	くの字に外反する口縁の甕。口縁端部外稜、凹線あり。外面、タタキ目後ハケナデ、内面、円弧タタキ目	
615	甕 須恵器	胴-[21.8]、高-(6.4) ○小片	砂粒を含む。還元、軟質。灰黄褐色	体中位で張りをもつ甕。壺か、3本の沈線と波状文をめぐらす	



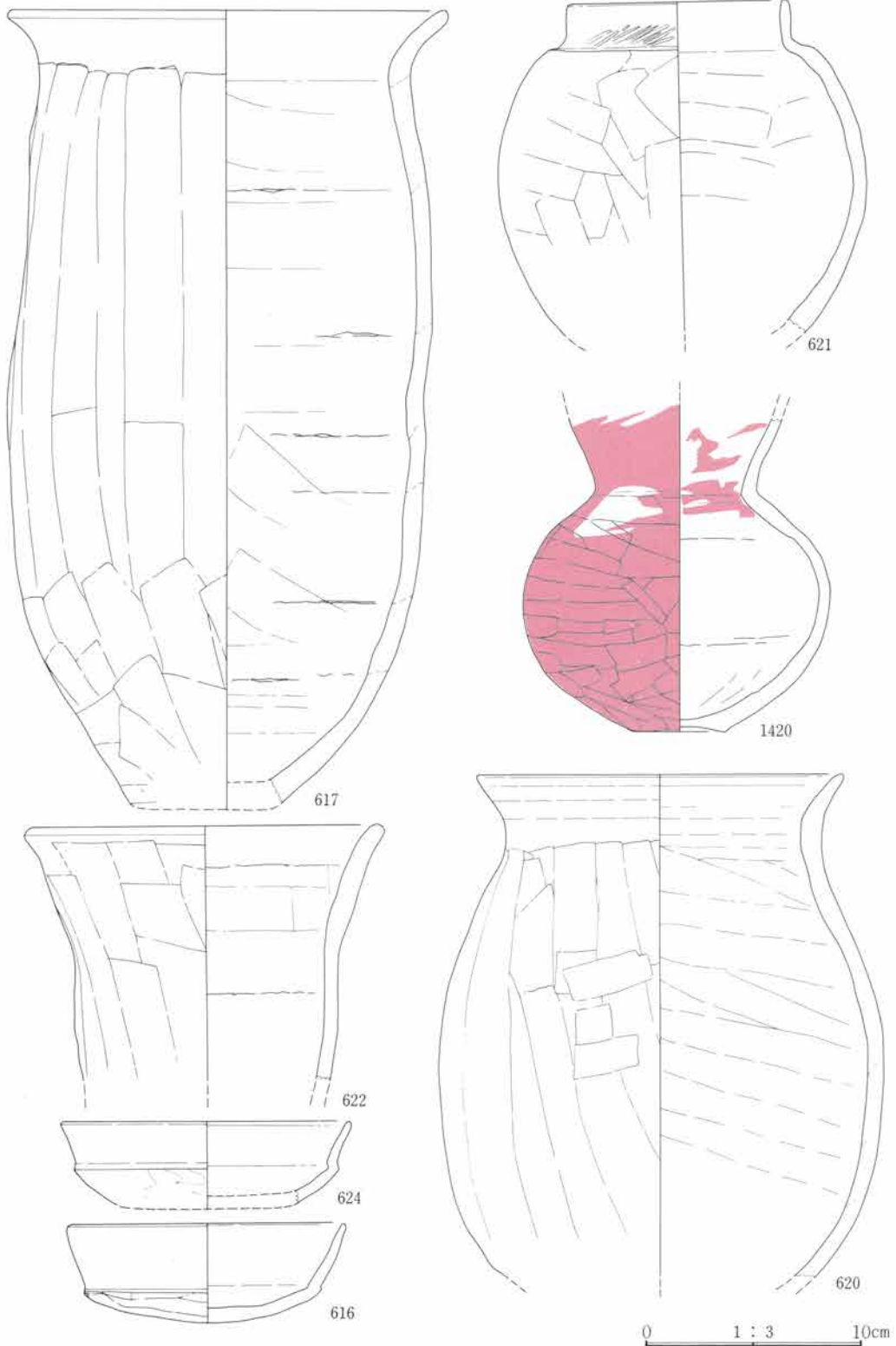
第143図 5区58号住居跡遺構図

5区58号住居跡（第143～147図、第23表、図版66・67）

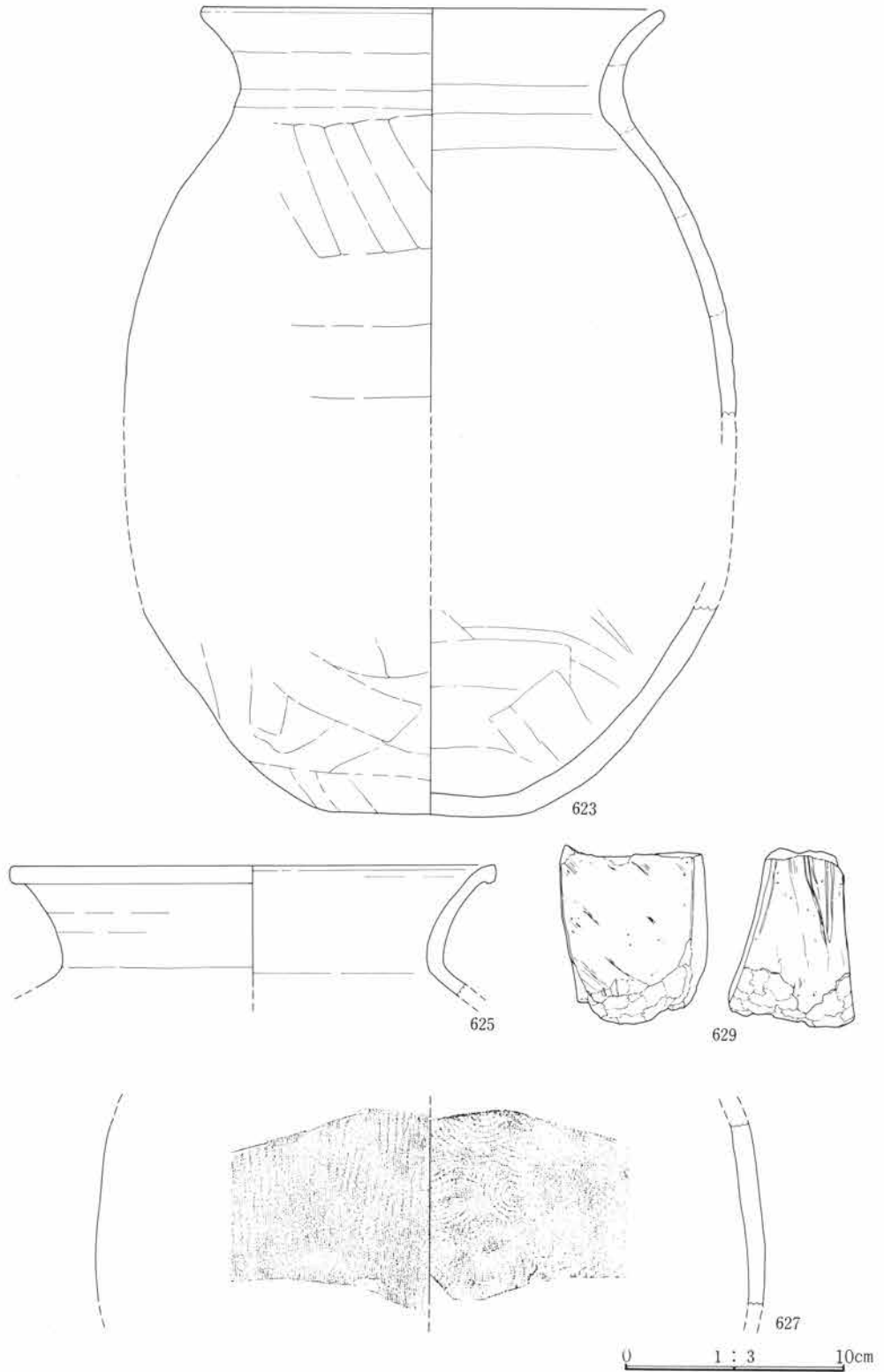
本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。60号住居跡、4号溝と重複し、本住居跡が古い。東辺側は、重複、攪乱により推定である。規模は、南辺で推定6.25m、西辺で4.00mを測り、方位は西辺でE-50°-Sである。平面形は、東西方向に長い方形を呈すると推定され、西辺は緩やかな弧を描く。床面は、ロームを踏み固め、全体に堅緻である。柱穴は、2本の支柱穴が3.55mの距離を持って確認された。径は約28cm、床面からの深さ30～50cmである。カマドは、南辺の西寄りで確認された。住居内に伸びる両袖は、ロームを掘り残し、河原石を推定4～5対貼付している。焚口には長甕を鳥居状に架している。煙道は、壁外にロームを掘り込んだもので、一様に焼けている。焚口から煙道までの長さは、約2mあり、焚口部前は57号住居跡同様に、方形に一段低い。貯蔵穴は、東南隅近くで長径1m、短径0.75m、深さ20cmの不整円形の土壇が確認された。遺物は、カマド内及び周辺に多く、土師器長甕、甗、坏、須恵器甕、砥石がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から古墳時代後期とする。 (小安)



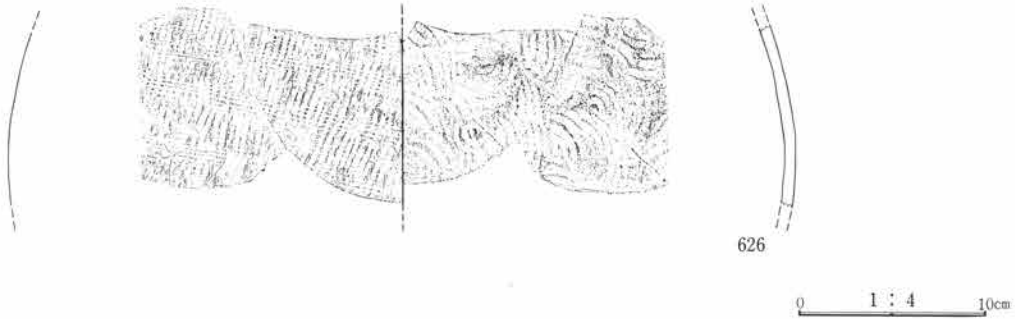
第144図 5区58号住居跡遺物図（1）



第145図 5区58号住居跡遺物図（2）



第146図 5区58号住居跡遺物図(3)



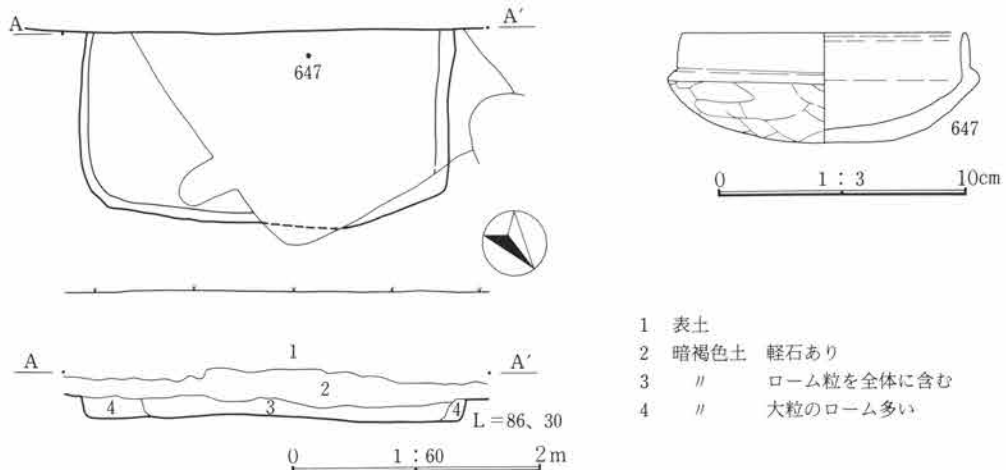
第147図 5区58号住居跡遺物図(4)

第 23 表 5区58号住居跡出土遺物観察表

(第144~147図、図版 67)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
616	坏土師器	□-13.0、高-4.5○略完存	砂粒、石粒含むが細。酸化、軟質。にぶい橙色。内面、黒色	底部浅く、丸い稜をもって、口縁部たちあがり、外行する。底部、ヘラケズリ調整。内面、黒色処理	
617	甕土師器	□-20.5、底-[6.9]、高-36.4○底部を欠く	砂粒、石英、片岩粒を含む。酸化、軟質。暗褐色	長甕。体下部にふくらみをもつ。口縁部の字に外反。体外面、タテヘラケズリ、内面、ヨコナデ調整	
618	甕土師器	□-20.0、底-[5.8]、高-31.8○略完存	砂粒、石英、片岩粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	長甕。平底。体下部に丸いふくらみをもつ。口縁部の字に外反。外面タテヘラケズリ、内面、ヨコナデ	
619	甕土師器	□-19.0、胴-20.3、底-[6.4]、高-31.5○略完存	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	長甕。平底。体中部で丸く張りをもつ。口縁部ゆるく、くの字に外反、端部沈線めぐる。体外面、浅いタテヘラケズリ、内面、ヨコナデ調整	
620	甕土師器	□-16.9、胴-[20.5]、高-(23.1)○ $\frac{3}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	体下部に丸いふくらみをもつ甕。口縁部ゆるいくの字の外反。体外面、浅いタテヘラケズリ、内面、ヨコナデ調整。丸底か	外面、スス附着
621	甕土師器	□-[10.2]、胴-17.1、高-(15.2)○ $\frac{3}{4}$	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	広口、短頸、球胴の甕。口縁部は直行。体外面、ヨコ、ナナメ、ヘラケズリ、内面、ヨコナデ調整	外面、加熱による剥落。内面、炭化物附着
622	甕土師器	□-[16.6]、高-(11.7)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石英、片岩粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	口縁部、ゆるく外反する、やや小型の甕。外面、タテヘラケズリ、内面、ていねいなナデ調整	
623	甕土師器	□-[21.0]、胴-[27.8]、底-[9.6]、高-[35.8]○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石英粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	口縁部、ゆるいくの字に外反する、丸胴の甕。底部、平底、体外面、浅い。タテ、ヨコヘラケズリ、内面、ナデ調整	同一個体と考えられるが、不完全な接合

624 5区58号住	坏土師器	口-[13.3]、高-(4.0)○小片	砂粒を含むが細。酸化、軟質。にぶい橙色	底部丸く、稜をもって口縁部たちあがり、ゆるやかに外行する。端部、丸味をもち、内側にかえりあり。底部、ヘラケズリ調整	
625	甕須恵器	口-[22.0]、高-(5.1)○小片	砂粒、黒石鉱物、石粒を含むが、細密。還元、硬質。灰白色	くの字に外反する口縁の甕。口縁端部、丸い外縁帯をもつ。ロクロナデ調整。器肉、薄手、均質	
626	甕須恵器	胴-[42.0]、高-(9.3)○胴部片のみ	砂粒を含むが細密。還元、やや硬質。にぶい黄橙色	大型の甕。体外面、平行タタキ目の後、5本1組のハケ目を数条、めぐらす。内面、同心円のタタキ目、器肉、薄手、均質	
627	甕須恵器	胴-[30.3]、高-(8.3)○胴部片のみ	砂粒を含むが細密。還元、やや硬質。灰黄色	甕。体外面、平行タタキ目、内面、細かい同心円のタタキ目。器肉、薄手、均質	
629	砥石	長-(8.0)、巾-6.4、厚-5.4、中央部で破損。流紋岩。4面に砥面を持つ。側面に線条痕が数条あり			
1420 参	埴土師器	頸-7.5、胴-14.2、底-4.3、高-(14.4)○口縁部を欠く	砂粒を含むが細。酸化、軟質。にぶい橙色	長頸埴。底部小さく、中央凹む。体中部で最大径をもつ、やや扁平の球胴。頸部、直線的に外行する。体外面、ヘラ磨き調整、やや粗。内面、ナデ調整。外面、赤色塗彩あり	床下土壇出土



第148図 5区70号住居跡遺構、遺物図

5区70号住居跡 (第148図、第24表)

本住居跡は、67号住居跡と重複して確認された。南半分は調査区外にある。規模は、北辺において2.95m、東辺1.50m以上となり、方位は北辺でN-43°-Eを示す。平面形は、方形を呈すると推定される。床面は、暗褐色土を踏み固めており、堅緻である。柱穴、周溝、カマドは、調査した範囲では確認されなかった。遺物は少なく、土師器坏がある。遺構の時期は、図示した坏と覆土中の少量の遺物の特徴から、古墳時代後期とする。(女屋)

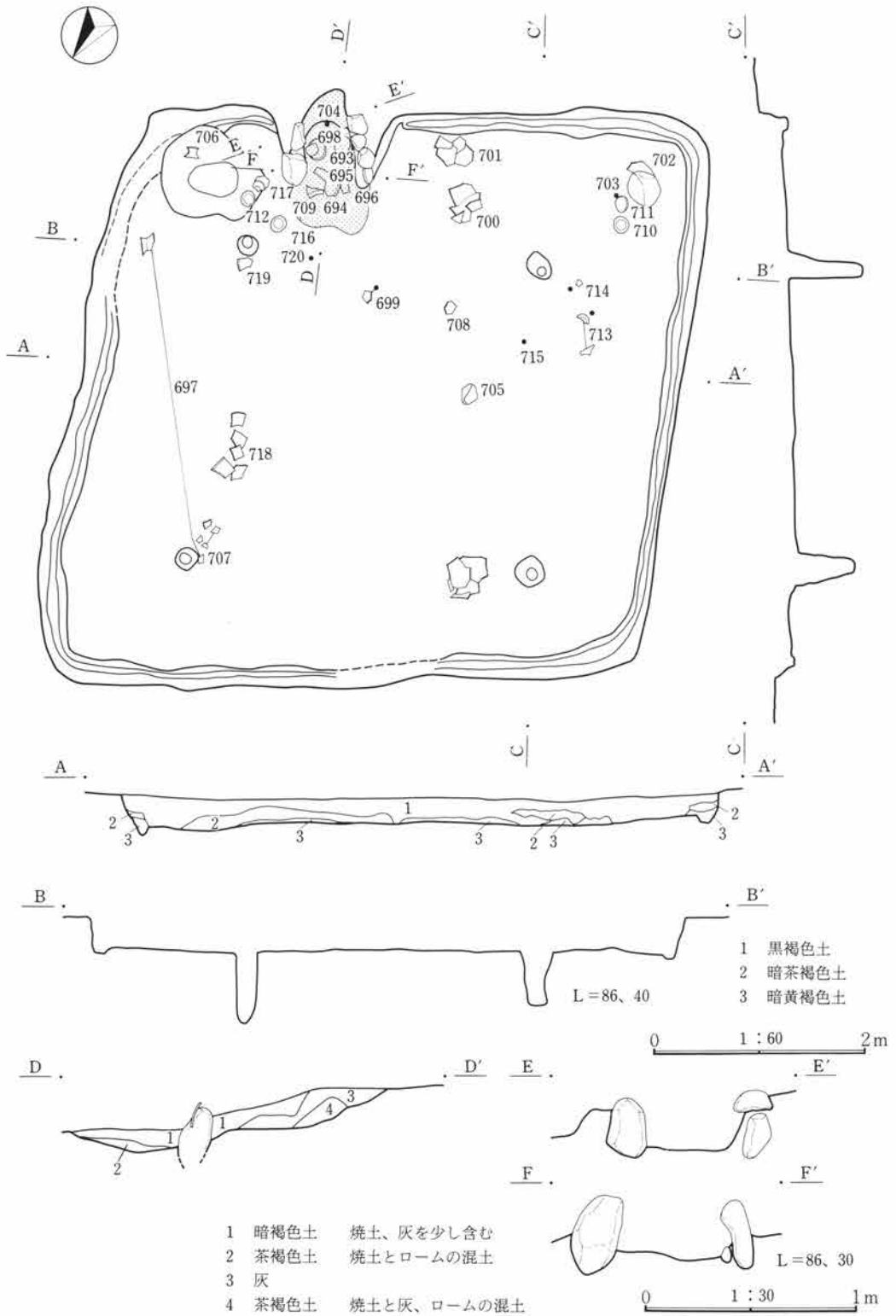
第24表 5区70号住居跡出土遺物観察表

(第148図)

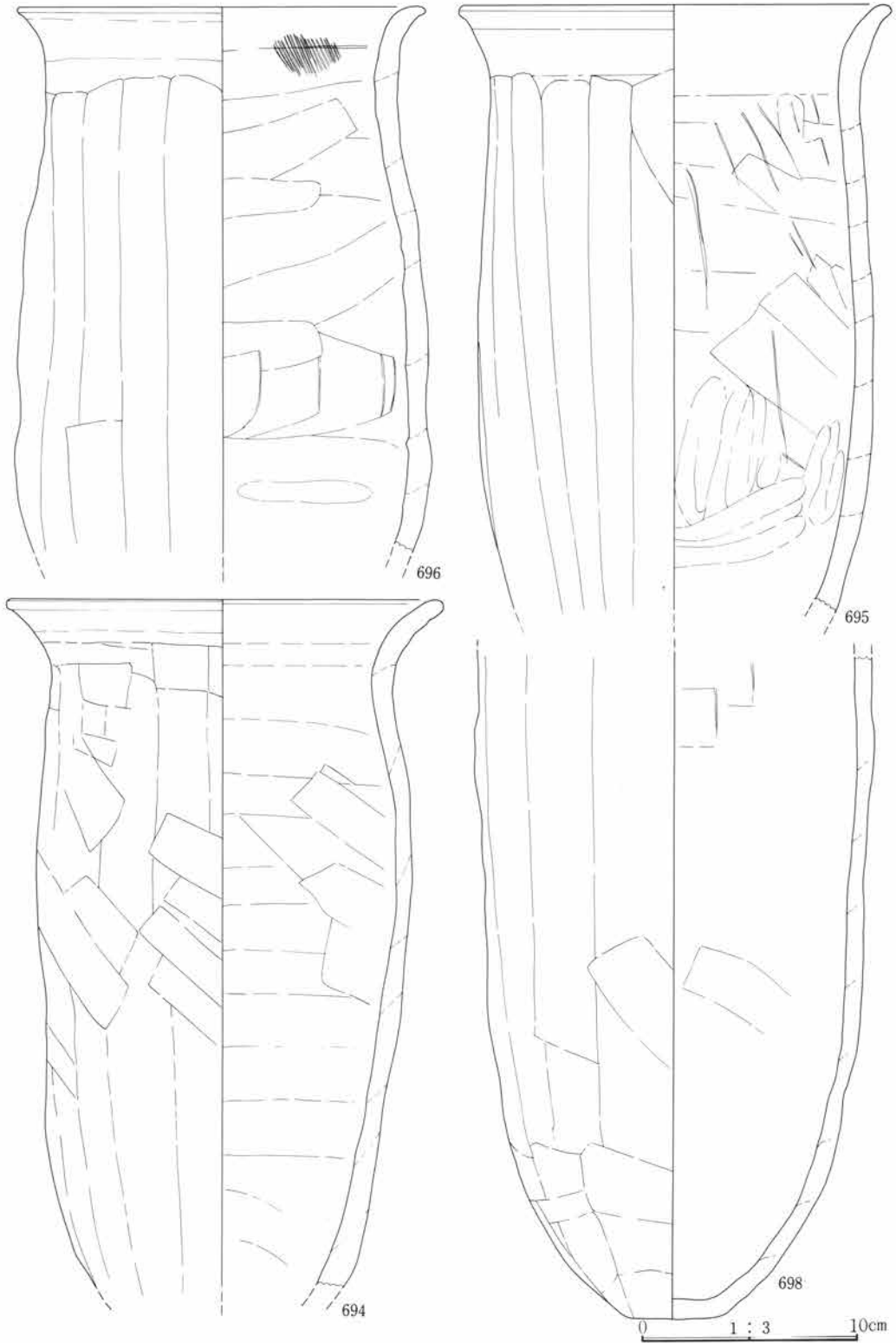
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
647	坏 土師器	口-11.4、高-4.4 ○略完存	砂粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい橙色	底部丸くひろがり、丸味のある稜をもって、口縁部たちあがる。口縁部やや内傾し、端部内側に沈線めぐる。底部、手持ちヘラケズリ調整	内外面、スス、炭化物付着

6区7号住居跡 (第149~154図、第25表、図版67・69)

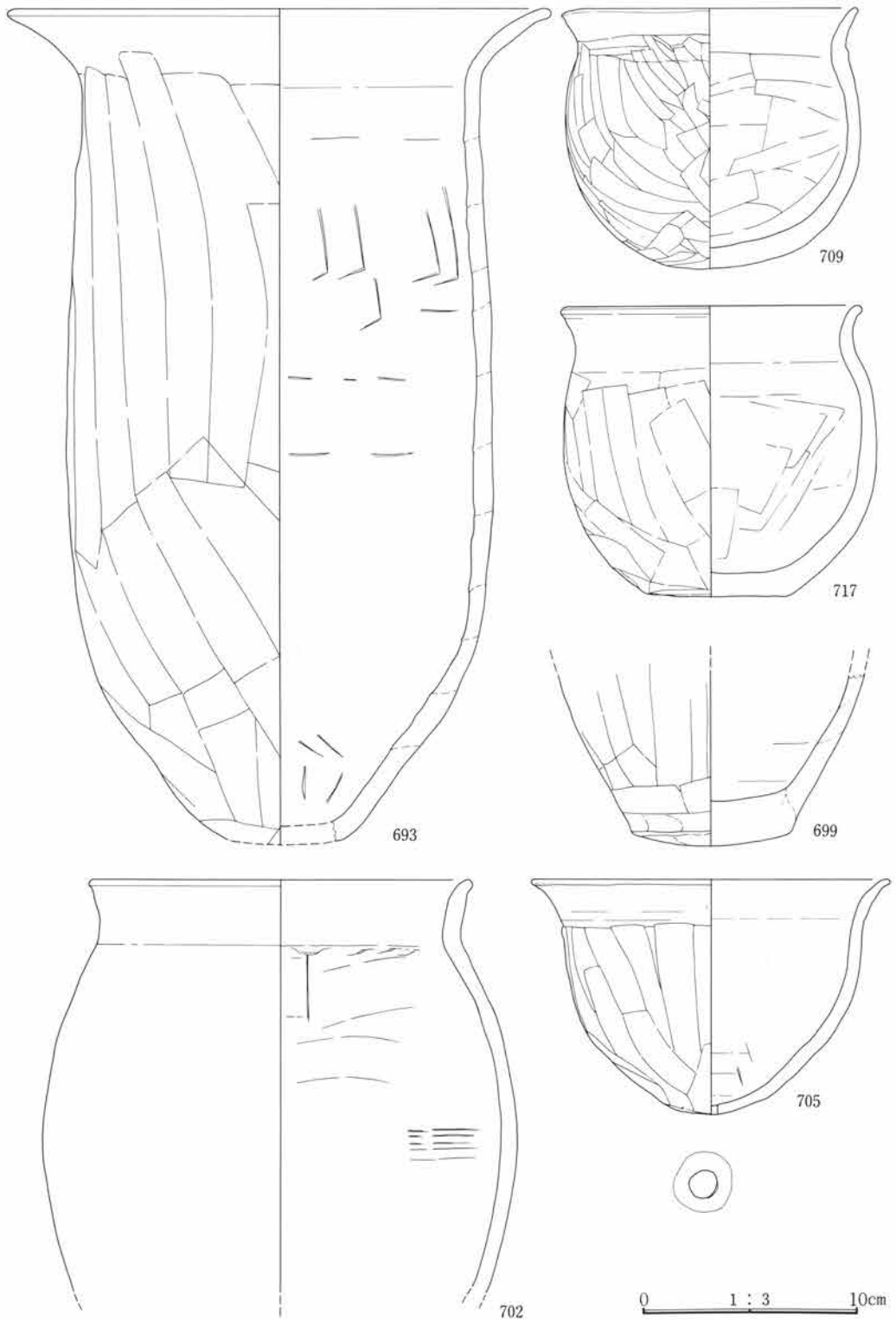
本住居跡は、基本土層の第4層暗褐色土で確認された。東辺と北辺の中程に風倒木痕があり、床面等の一部を確認できなかった。規模は、東辺で5.42m、西辺5.27m、南辺5.44m、北辺5.75mを測り、方位は西辺でE-52°-Sを示す。平面形は、菱形に近い隅の少し丸い方形を呈する。床面は、ロームまで掘り下げているが、風倒木痕があったために凹凸があり、やや軟弱である。柱穴は4本確認された。径20~27cm、深さは床面から51~68cmあり、柱間は2.75~3.25mを測る。平面形は菱形に近いが、4本の柱穴は方形を意識した、きちんとした間隔にあり、平面形に何らかの意味があるものか。周溝は、四辺をめぐる、カマド部分を除いて確認された。上幅は約20cm、深さは約5cmで、一部は風倒木痕のため不明である。カマドは、南辺の東寄りで石組みのものが確認された。両袖部分は地山を掘り残し、角閃石安山岩の転石を3~4石貼付し、補強している。カマド内には、長甕5個体が入り組んだ状態であり、うち2個体は焚口に鳥居状に架したものの、残るは両壁に立てかけた状態にある。中央を外れた袖寄りの位置で、支石と思われる石2個が立った状態にあったが断定できない。壁外へは舌状に伸びる程度で、全体の焼け方も弱い。貯蔵穴は、カマド左脇、東南隅を占める位置で、長径98cm、短径86cm、深さ35cmの円形土坑がある。遺物は、カマド、貯蔵穴のある南辺側寄りに多く、特にカマド右手前付近に角閃石安山岩、河原石の転石が集中している。石は、床面に密着し、平らな面を揃えているところもあり、工作台様のものか。カマド周囲に甕、丸胴の甕があり、その他散在して壺、高坏、坏、須恵器甕、短頸壺、蓋がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から古墳時代後期とする。(宮下)



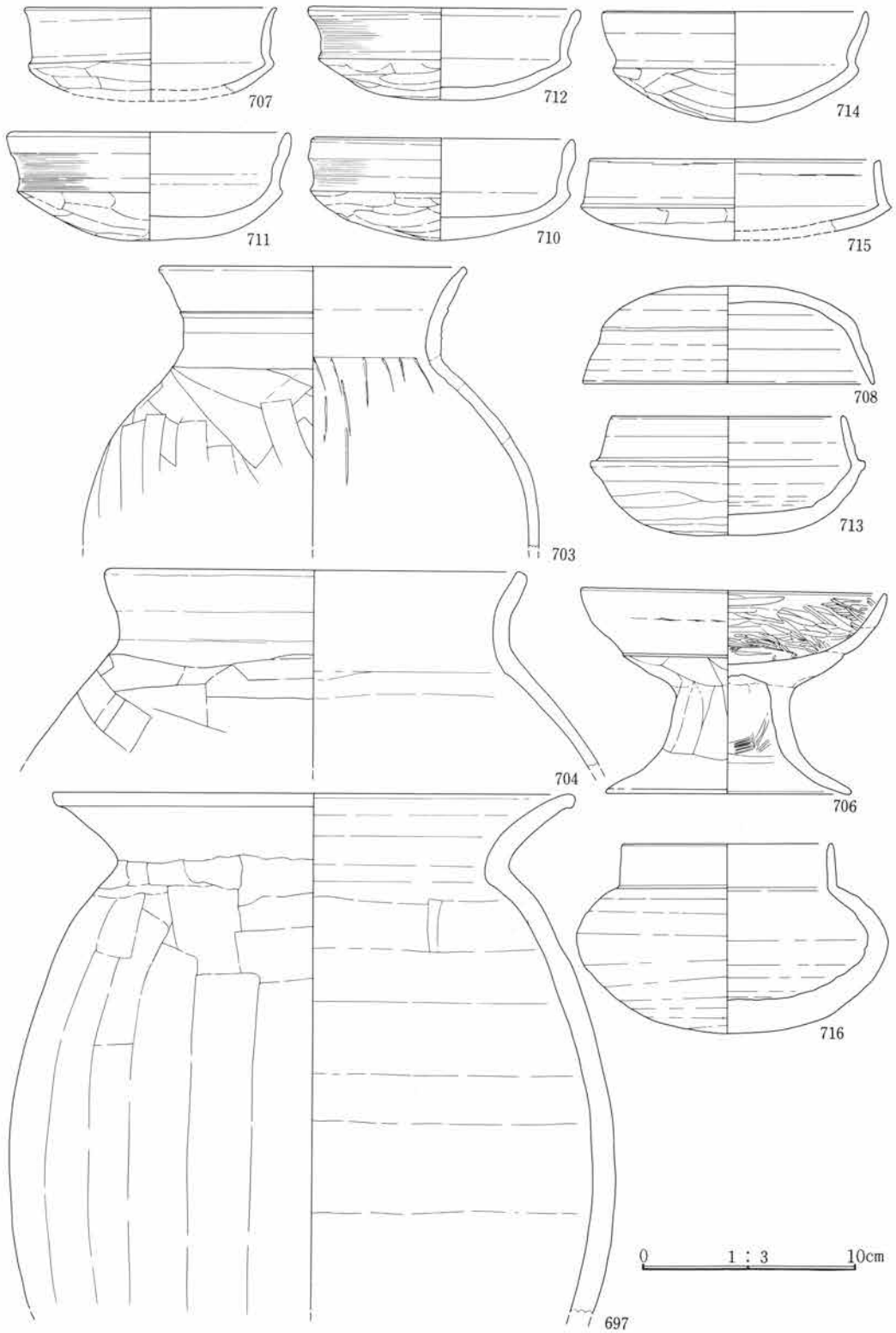
第149図 6区7号住居跡遺構図



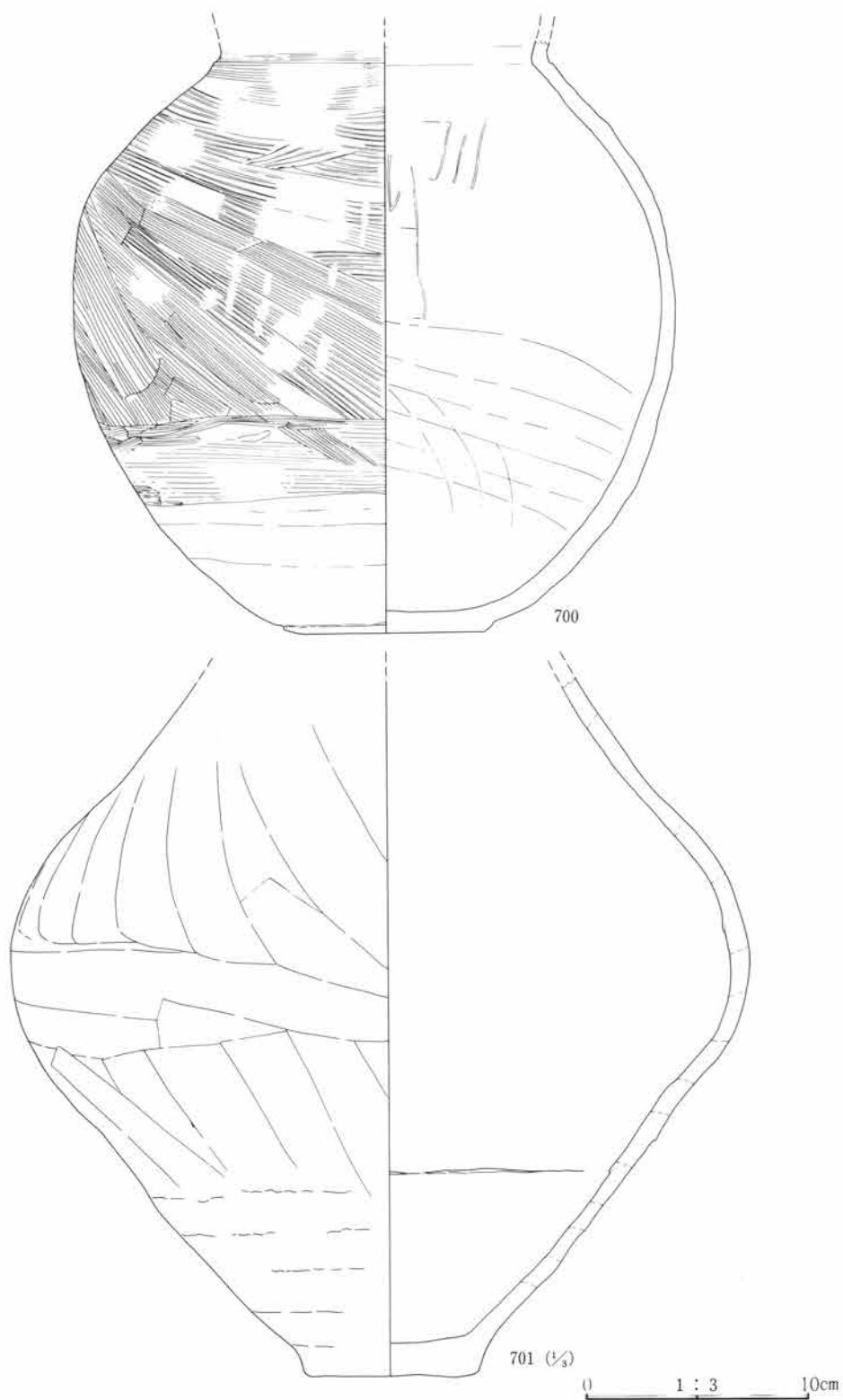
第150図 6区7号住居跡遺物図(1)



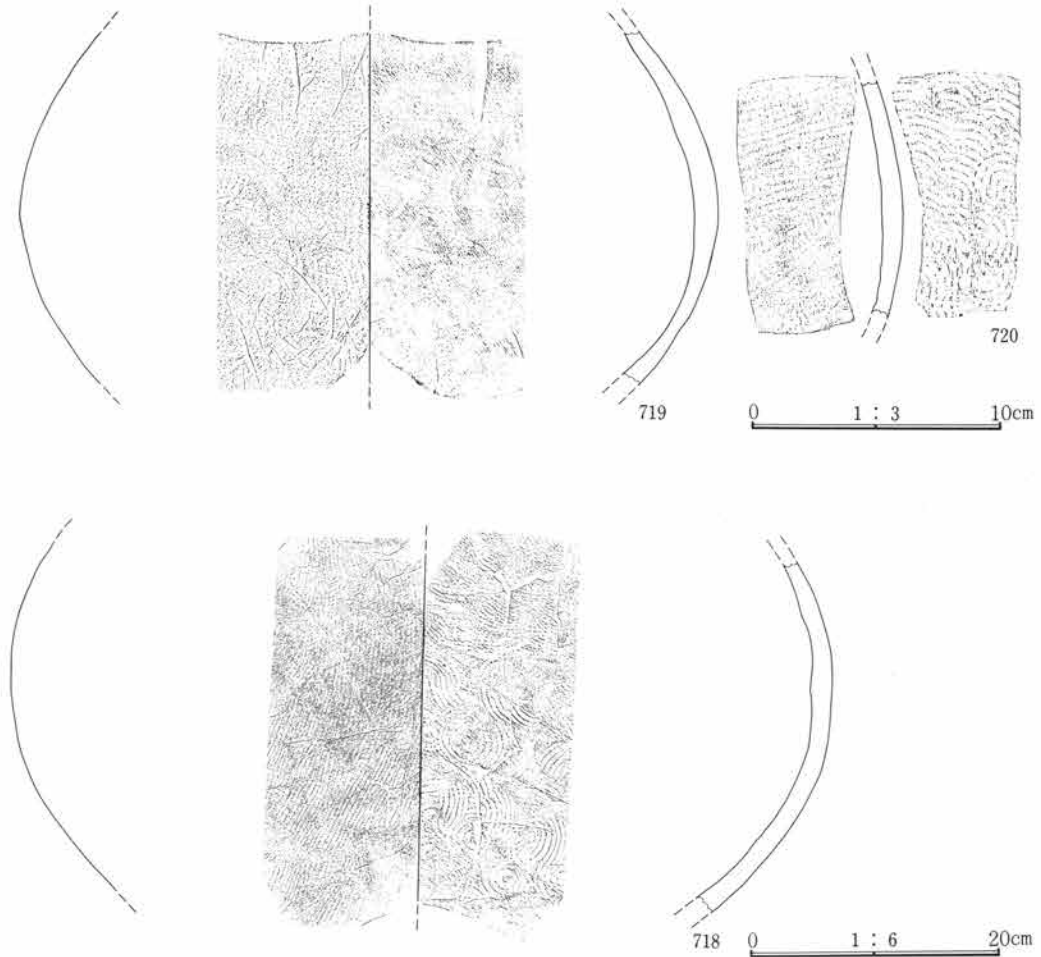
第151図 6区7号住居跡遺物図(2)



第152図 6区7号住居跡遺物図(3)



第153図 6区7号住居跡遺物図(4)



第154図 6区7号住居跡遺物図（5）

第25表 6区7号住居跡出土遺物観察表

(第150～154図、図版 69)

番号	土器種類	法量（口径・底径・器高） 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
693	甕 土師器	口-25.2、底-5.4、高-38.0 ○底部を欠く	砂粒、石英、片岩を含む。 酸化、軟質。褐色	長甕。口縁部大きく外反し、体下部で丸く、張りをもつ。体外面、タテヘラケズリ、内面、ヨコナデ調整	
694	甕 土師器	口-20.2、高-(31.5) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石英、片岩を含む。 酸化、軟質。橙色	長甕。口縁部大きく外反する。体外面、タテヘラケズリ、内面ナデ調整	
695	甕 土師器	口-[20.0]、高-(27.8) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石英、片岩、軽石を含む。 酸化、軟質。赤褐色	長甕。口縁部ゆるやかに外反、端部丸味をもつ。体外面、タテヘラケズリ、内面、ヨコヘラナデ、ユビナデ	
696	甕 土師器	口-[19.0]、胴-[19.4]、高-(25.0) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石英、片岩を含む。 酸化、軟質。黄褐色	長甕。口縁部ゆるい外反、端部外側にめくれる。体外面、タテヘラケズリ、内面、ヨコ、ナメナデ調整	

第6章 検出された遺構と遺物

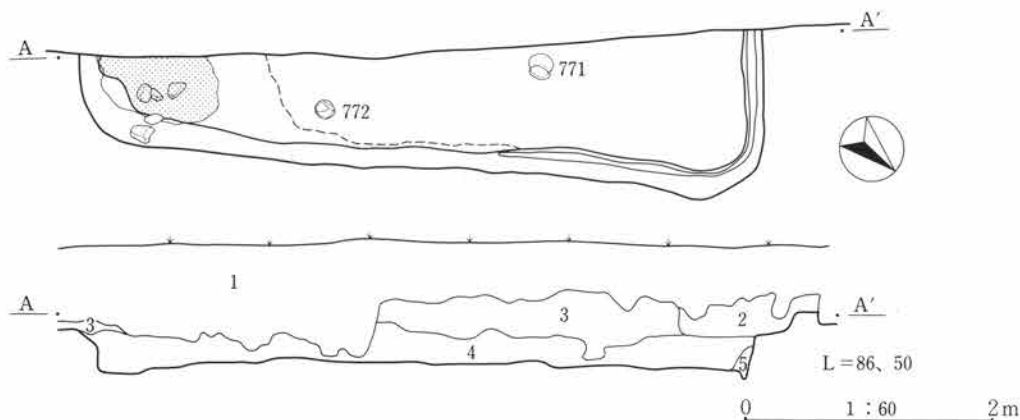
697 6区7号 住	甕 土師器	口-[24.4]、胴-[28.2]、高-(24.0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石英、片岩を含む。酸化、軟質。灰オリーブ色	口縁部大きく、くの字に外反する、丸胴の甕。体外面、タテヘラケズリ、内面、ヨコヘラナデ	内外面、スス、炭化物付着
698	甕 土師器	胴-[18.5]、底-[4.4]、高-(30.4)○ $\frac{2}{3}$	砂粒、石英、片岩を含む。酸化、軟質。褐色	長甕。体上部を欠く。底部、小さい平底、体下部でやや丸味あり。体外面タテヘラケズリ、内面、ヨコナデ	内外面、スス、炭化物付着
699	甕 土師器	底-7.4、高-(7.9)○底部のみ	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	底部凸状で、一度たちあがって、体部、丸く張りをもつ。体外面、浅いタテヘラケズリ、内面、ナデ調整	
700	甕 土師器	頸-[14.6]、胴-26.9、高-(26.1)○ $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒を含むが細。酸化、軟質。浅黄色	平底、球胴の甕。頸部しまって、凹線めぐる。体外面、ヨコ、ナナメの細かいハケ目、体下部ナデ調整。内面、ナデ調整	内外面、スス、炭化物付着
701	甕 土師器	胴-[33.6]、底-7.5、高-(30.8)○ $\frac{2}{3}$	砂粒、石英、片岩を含む。酸化、軟質。明黄褐色	底部、平底で一度たちあがり、体部大きくひろがる。体中部で丸く、ふくらみ、頸部へすぼまる。体外面、ナナメ、ヨコの浅いヘラケズリ、内面、ヨコナデ調整	
702	甕 土師器	口-[17.7]、胴-[22.0]、高-(19.0)○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。明褐色	口縁部、たちあがって端部で外反する、丸胴の甕。体外面、ナデ、表面アレ、内面、ヨコナデ	
703	甕 土師器	口-14.2、胴-[21.3]、高-(14.0)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	口縁部、たちあがり、二段の稜を作り、端部で外反する、球胴の甕。体外面、ヨコ、ナナメヘラケズリ	
704	甕 土師器	口-[19.2]、高-(9.0)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	広口、球胴の甕。口縁部、たちあがって、わずかに外反する。体外面、ヨコ、ヘラケズリ、内面、ナデ調整	
705	甕 土師器	口-16.6、底-2.7、高-10.8○完存	砂粒、石粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい黄褐色	底部、小さく、体部内湾して丸く、口縁部ゆるく外反する、鉢状の甕。底部、1個の穿孔。体外面、タテヘラケズリ、内面、ていねいなナデ	内表面剥落
706	高 坏 土師器	口-14.3、底-10.3、頸-5.8、脚裾-11.4、高-9.3○完存	砂粒、褐色石粒を含む。酸化、軟質。橙色、内面、黒色	底部やや丸く、稜をもって体部内湾する。脚部柱状、けずり出し、裾部ゆるくひらく。内面、ヘラ磨き、黒色処理	
707	坏 土師器	口-11.8、高-(4.3)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含むが細密。酸化、軟質。橙色	底部丸く、やや浅め、稜をもって、口縁たちあがる。口縁端部わずかに外反。底部、ヘラケズリ、器肉薄手	
708	蓋 須恵器	口-13.6、高-4.5○略完存	砂粒、黒色石粒を含む。還元、硬質。灰色	天井部丸く、丸い稜をもって、口縁部外行。天井部回転ヘラケズリ調整	
709	甕 土師器	口-13.6、高-12.0○完存	砂粒を含むが細。酸化、軟質。明赤褐色	小型の丸底甕。口縁部ゆるく外反。体外面、細かいヘラケズリ	体内外、スス、炭化物付着

2 14地区の調査 (古墳時代)

710 6区7号 住	坏 土 師 器	口-12.5、高-4. 7○完存	砂粒を含むが細。酸化、 軟質。橙色	底部、丸く、稜をもってたちあがり、 やや外反し、口縁端部直下でたちあ がる。底部、手持ちヘラケズリ	
711	坏 土 師 器	口-13.3、高-5. 0○完存	砂粒を含むが細。酸化、 軟質。橙色	底部、丸く、やや深め。稜をもって たちあがり、外反し、再び、口縁部 でたちあがる。底部手持ちヘラケズ リ。器肉、厚手	No710と近似す る
712	坏 土 師 器	口-12.8、高-4. 3○完存	砂粒を含むが細密。酸化、 軟質。橙色	底部、丸くやや浅い。稜をもってた ちあがり、口縁部、ゆるやかに外反。 底部手持ちヘラケズリ	
713	坏 須 恵 器	口-[11.0]、高- (5.5) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、黒色石粒を含む。 還元、硬質。灰色	底部、丸く深い。蓋受けの稜、明瞭 だが、丸味あり、口縁部、わずかに 内傾。底部、回転ヘラケズリ調整	No708とセット か
714	坏 土 師 器	口-[12.4]、高- 5.1○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含むが細。 酸化、軟質。橙色	底部、丸くやや浅く、丸い稜をもつ てたちあがり、わずかに外反する。 底部、手持ちヘラケズリ	
715	坏 土 師 器	口-[13.6]、高- [3.7] ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。赤褐色	底部、浅く、稜をもって、内傾ぎみ に口縁部たちあがる。口縁端部、わ ずかに内斜。底部手持ちヘラケズリ	
716	壺 須 恵 器	口-[9.8]、胴- 14.6、高-8.7○口 縁部を欠く	砂粒、石粒を含む。酸化、 硬質。浅黄橙色	広口、短頸壺。底部、丸底。ソロボ ン玉状の扁平な体部、口縁部直行、 体中部~下部、回転ヘラケズリ調整	
717	甕 土 師 器	口-14.0、底-6. 6、高-13.3○略完 存	砂粒、石英、片岩粒を含 む。酸化、軟質。明赤褐 色	平底、丸胴、口縁ゆるく外反する小 型の甕。口縁端部外側にめくれる。 体外面、ヨコ、タテヘラケズリ。器 肉、厚手、重い	内外、スス、炭 化物付着
718	甕 須 恵 器	胴-[66.2]、高- (28.0) ○ $\frac{1}{4}$ 胴部 片のみ	砂粒含むが、細密。還元、 硬質。灰色	大型の甕。体外面、平行タタキ目、 内面、同心円のタタキ目。器肉、厚 手	
719	甕 須 恵 器	胴-[28.0]、高- (14.0) ○ 胴部小 片	砂粒を多く含む。還元、 軟質。淡黄色	体部の丸い、やや小型の甕。体外面、 平行タタキ目、内面、円弧文のタタ キ目。器肉、薄手	
720	甕 須 恵 器	○ 胴部小片	砂粒、白色鉱物を含む。 還元、硬質。灰色	体部の丸い甕。体外面、平行タタキ 目、内面、細かい同心円のタタキ目 器肉、薄手。やや小型のものか	自然釉あり

6区18号住居跡 (第155・156図、第26表)

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。北辺側が確認されただけで、大半は調査区外に広がる。規模は、北辺3.26m、西辺は一部で1.16mを測る。方位は北辺でE-40°-Sを示す。壁は垂直に近く、高さ25cmある。床面はロームを踏み固め、平坦で堅緻である。周溝が西辺から北



第155図 6区18号住居跡遺構図



第156図 6区18号住居跡遺物図

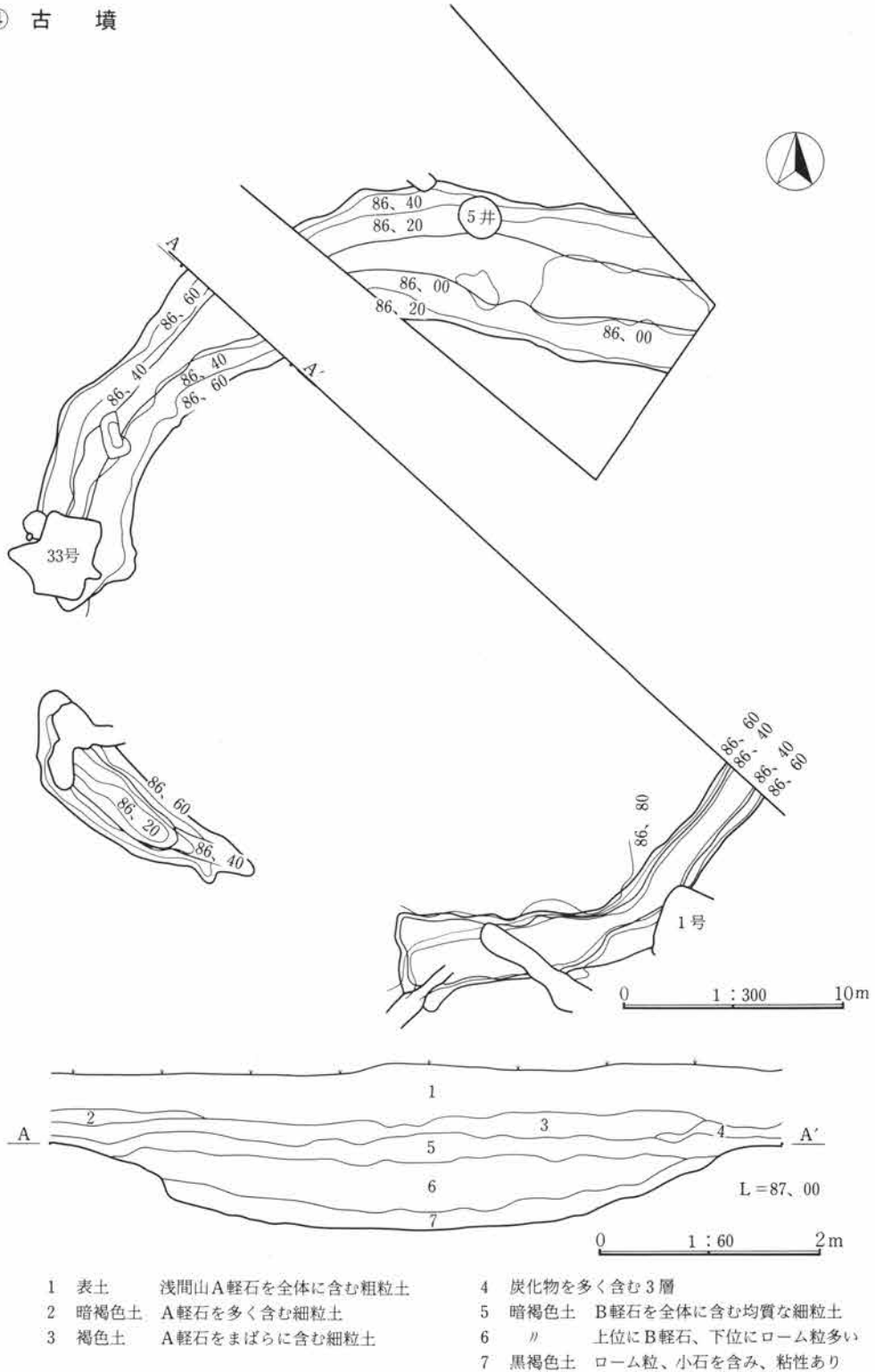
辺中央部付近までめぐり、上幅10~20cm、深さ8cmを測る。東北隅で大小5個の礫を伴って焼土があり、カマド付近の様子を示すか。遺物は、壁際に小型丸胴の甕、坏がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴により古墳時代後期とする。(女屋)

第26表 6区18号住居跡出土遺物観察表

(第156図)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
771	甕 土師器	口-13.7、胴-17.3、底-7.6、高-15.4○略完存	砂粒、石英、片岩を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	広口、球胴の甕。底部、平底。口縁部、ゆるく、くの字に外反する。体外面、ヨコヘラケズリ、内面、ヨコナデ調整	体外面、スス付着
772	坏 土師器	口-11.9、高-4.3○完存	砂粒を含むが、細。酸化、軟質。橙色	底部丸く、浅い。丸い稜と、沈線をめぐらし、口縁部たちあがり、わずかに外行して、再びたちあがる。底部、手持ちヘラケズリ	

④ 古墳

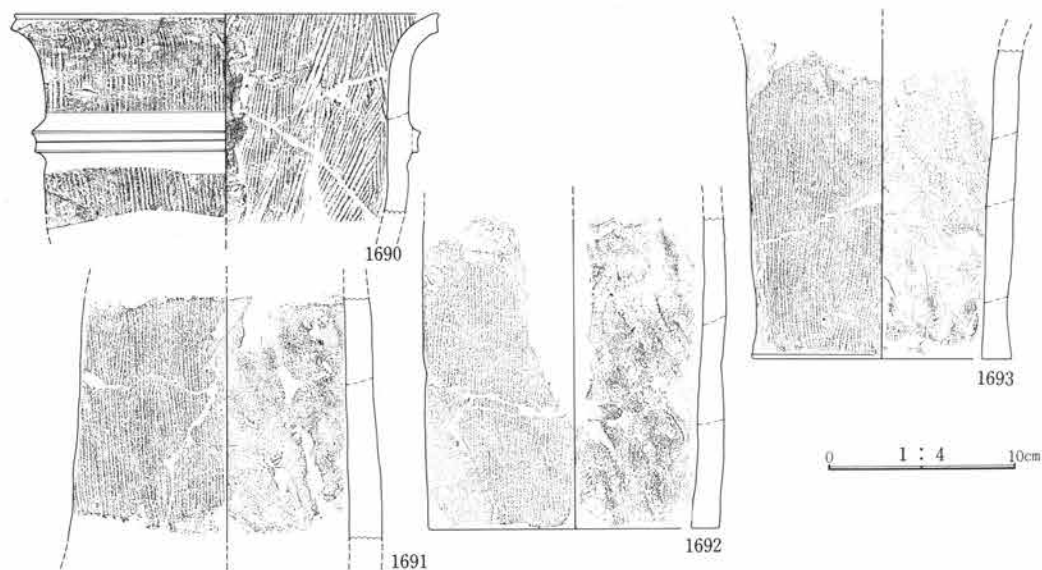


第157図 7区1号古墳遺構図

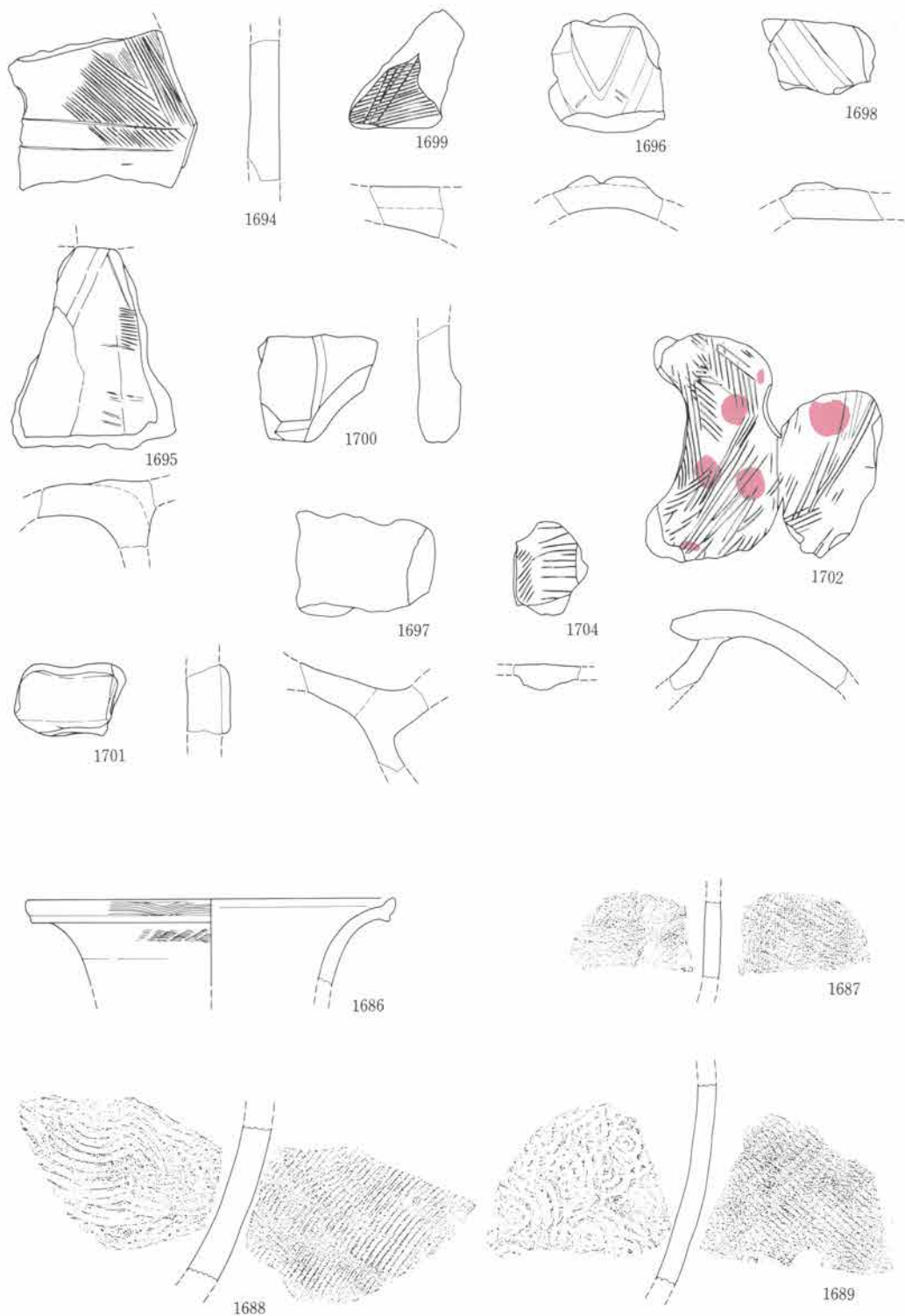
7区1号古墳（第157～159図、第27表、図版70）

この古墳は、3号古墳後円部東側に隣接して周堀だけが確認された。墳丘は、調査前に削平されており、道路により調査区が3ヶ所に分断され、確認の状況も各々で異なる。周堀内には、平安時代の1、33、54号住居跡等が重複し、墳丘下には縄文時代の住居跡1軒、古墳時代前期の方形周溝墓2基がある。

墳形は、東側に未調査部分があり推定によるが、周堀のめぐる様子から円墳とした。周堀確認を目的としたトレンチからは、平安時代の住居跡2軒（2、14号）があり、西側と南側の周堀と同様に周囲には平安時代の住居跡がめぐるものか。規模は、周堀の位置から南北26m、東西28mで、確認された6基の中では3号古墳に次ぎ、円墳としても大きい方である。周堀は、5号方形周溝墓と重複する部分で途切れるが、全周すると推定され、南に開口する。規模は、道路をはさんで確認状況が異なることもあるが、南で狭く浅いのに対して北では広く深くなる傾向がある。東南側で1.8m、最も広い北側では6.8mを測る。断面は浅いU字形を呈し、深さ約50cm、覆土の中位には浅間山B軽石の二次堆積が約15cmの厚さで見られ、この頃までには周堀が埋没している。下位には、長さ20cm前後の河原石が散在して見られたが崩落した葺石と推定される。南にも同様な状況が見られ、葺石は全体にめぐるものか。また、地山の整地面は、3号古墳と同じく、基本土層第4層の暗褐色土上面に求められる。主体部は、位置、形状とも不明である。遺物は、重複する遺構からの混入が多量にあるが、円筒・形象埴輪、須恵器甕等がある。出土箇所を特定できるものはないが、埴輪は西から北側にかけて多く、須恵器は南側で出土している。円筒埴輪は直径13～15cmに復原され、2、3号古墳と同様である。形象埴輪には盾等があり彩色を施されるものが数個体ある。古墳の時期は、埴輪の比較から6基の中で最も古い6世紀後半である。（女屋）



第158図 7区1号古墳遺物図（1）



第159図 7区1号古墳遺物図（2）

0 1 : 3 10cm

第27表 7区1号古墳出土遺物観察表

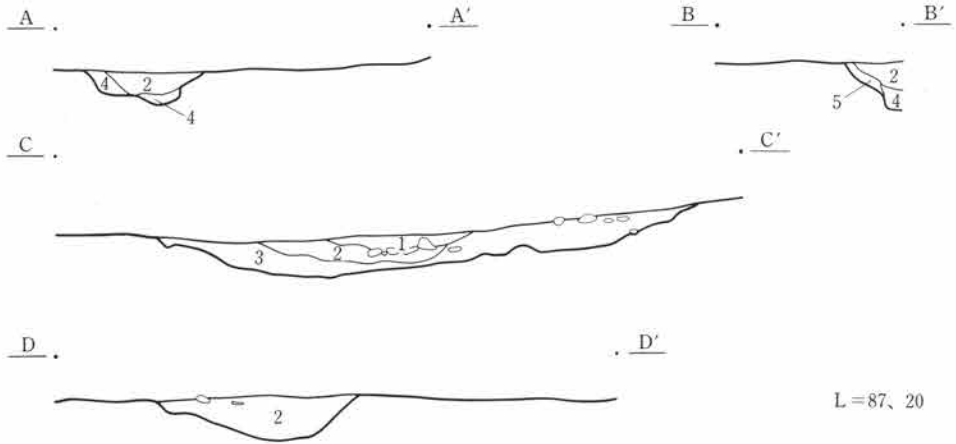
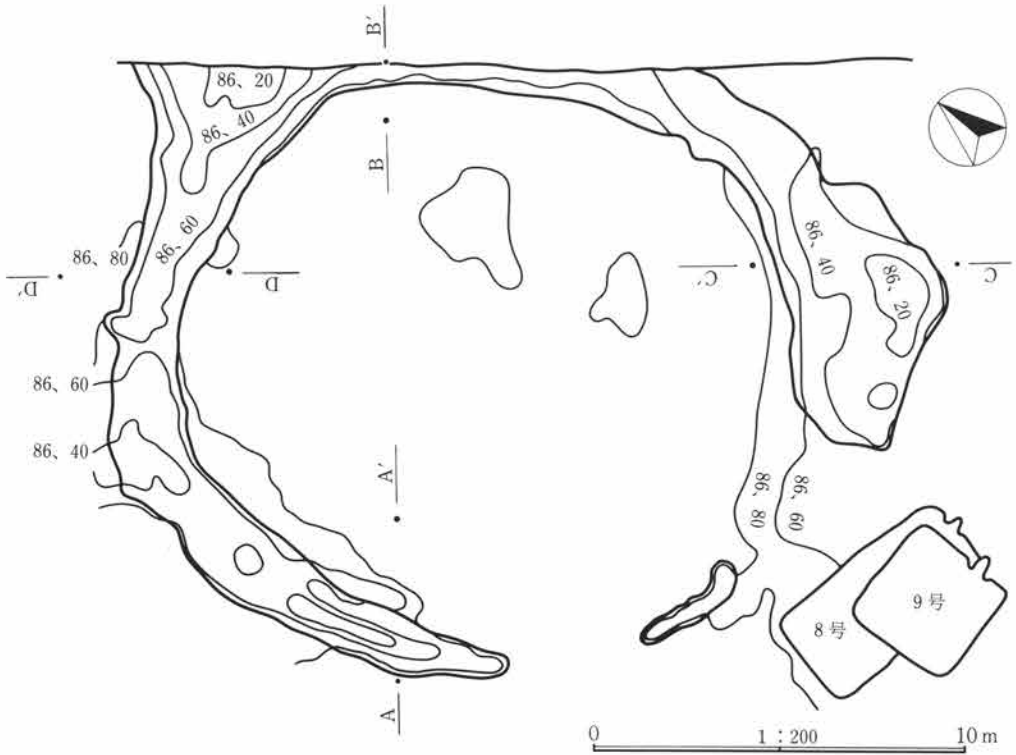
(第158・159図、図版 70)

番号	器種	部位	胎土・焼成・色調	口径・胴径・底径・器高	調整技法	備考
1690	円筒	口縁～胴部	砂粒、白色石粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。橙色	口-22.7、胴-19.2、高-(10.5)、厚-1.1	外面、タテハケナデ、内面、ヨコ、ナナメハケナデ、ハケ目、12本。凸帯、中央の凹む台形。ナデ	周溝フク土 註-ハケ目は2cm巾での本数を示す
1691	円筒	基底部	砂粒、白色石粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。橙色	底-[16.7]、高-(12.8)、厚-1.7	外面、タテハケナデ、ハケ目、11本。内面、タテ、ナナメナデ	周溝フク土
1692	円筒	基底部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	底-[15.4]、高-(16.5)、厚-1.4	外面、タテハケナデ、ハケ目、12本。内面、基底部の粘土巻きつけ痕あり、タテ、ユビ、ヘラナデ	周溝フク土
1693	円筒	基底部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	底-[13.8]、高-(16.5)、厚-1.4	外面、タテハケナデ、ハケ目、11本。内面、粘土積痕あり、タテユビナデ	周溝フク土
1694	形象器財一類	鱗部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.4	表面、うすいハケナデ、角の部分にむかって、二条の沈線がひかれる。裏面、ハケナデ、16本	周溝フク土
1695	形象器財一類 盾か	鱗上部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.4	表面、うすいハケナデ、台状の粘土紐、斜めに貼付、交叉する方向に沈線あり。胴部内面、粘土積痕あり	周溝フク土
1696	形象盾類	胴部?	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.4	表面、ていねいなナデ、丈の低い台形の、粘土紐V字状に貼付。裏面、ハケ目あり	周溝フク土
1697	形象盾類	鱗部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.3	表面、ていねいなナデ	周溝フク土
1698	形象盾類	胴部?	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.4	表面、ていねいなナデ、断面、扁平な台形の粘土紐、貼付	周溝フク土
1699	形象盾類	鱗部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-2.0	表裏、ハケナデ、二枚の粘土板を重ねて成形。ハケ目、15本	周溝フク土
1700	形象盾類	胴部か?	砂粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.6	表面、ナデ、扁平巾広の粘土帯貼付	周溝フク土

2 14地区の調査 (古墳時代)

1701 7区1墳	形 象 盾 鞆 類	胴部か?	砂粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.6	扁平巾広の粘土帯貼付	周溝フク土 1700と同一個体
1702	形 象 鞆	体部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	長-(10.3)、巾-(9.5)、厚-(1.2)	丸くカーブをもつ。表面、ハケナデ、タテ、ナナメハケ目、9本。円形赤色の文様あり	
1704	形 象 不 明	胴部か?	砂粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.2	ゆるいカーブの体部に粘土帯貼付、細、粗、二種のハケ目	

番 号	土 器 種 類	法量 (口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
1686	壺 須 恵 器	口-[17.0]、高-(4.0) ○小片	砂粒を含む。還元、硬質。灰色	口縁部、頸部よりたちあがって、大きく外反。口縁端部、沈線と波状文をもつ外縁帯あり。口縁内側、沈線めぐる。頸部、波状文、一段あり、クシ目、13本。ロクロナデ調整。器肉、薄手、均質。臑か	周溝フク土
1687	甕 須 恵 器	○小片のみ	灰色の小砂粒を含む。還元、硬質。灰白色	外面、平行のタタキ目、内面、同心円のタタキ目あり	周溝フク土
1688	甕 須 恵 器	○小片のみ	砂粒、石粒を含む。黒色斑文あり。還元、硬質。灰～灰白色	大型の甕。胴部片、体外面、平行タタキ目。内面、同心円のタタキ目あり。器肉、厚手	周溝フク土
1689	甕 須 恵 器	○小片のみ	砂粒、白色石粒を含む。還元、硬質。紫褐色	大型の甕。胴部片、体外面、平行タタキ目(直行する木目痕あり)。内面、同心円のタタキ目あり	周溝フク土



- 1 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む
- 2 黒色土 ローム粒、ロームブロックを含み、褐色土混入
- 3 黒褐色土 ローム粒多い
- 4 黄褐色土 ロームブロック全体に多い
- 5 橙褐色土 ロームブロック多い、かたくしまる

第160図 7区2号古墳遺構図

7区2号古墳（第160～163図、第29表、図版71・72）

この古墳は、5号古墳の東側に隣接し、東方には古墳総覧佐野村41号古墳がある。確認されたのは周堀だが東側は調査区外に続く。墳丘は、浅間山A軽石純層で埋没した溝との関係から近世後期頃には削平を受け、畑地となった可能性がある。墳丘規模は、周堀の位置から直径16～16.8mの円墳と推定され、確認面の基本土層第4層上では、わずかに高まりを残している。周堀は、重複する10号住居跡付近で浅く不明瞭になるが、ほぼ全周し南に開口する。規模は、上幅約2m、深さ約50cmを測る。北側は調査区外にむけて幅が広くなり、東南側でも別の溝状遺構と重複する覆土中には、拳大～長さ20cm位の河原石が多く、崩落した葺石と考えられる。この河原石と混在した状態で、南側を除いた範囲から朝顔型を含む円筒と形象埴輪、須恵器等が出土している。円筒埴輪は個体数も多く、全体からの出土傾向を持つが、形象埴輪は西側に多く見られた。この西側には、顔面を下にしたうつ伏せの状態ですばり像一体、馬形埴輪、器財埴輪が見られる。主体部は、確認面上で土壇が多く見られたが痕跡と断定するに至るものはない。古墳の時期は、埴輪類の特徴から1号古墳より新しく、3号より古い6世紀後半とされる。（女屋）

埴輪女子立像（第162図、第28表、図版71）

7区2号古墳からは、埴輪類の破片が周堀部の埋没土層内を中心に出土したが、それらの埴輪類のなかでは最も形状を残していたのが、この女子像である。墳丘西南側の周堀内に転落した状態で出土したことから、7区2号古墳では、墳丘西南側にかかる埴輪人物群の配列が推定されるが、他には円筒類、飾馬、盾、鞍と同定し得る破片が出土しているにすぎず、本埴輪女子像は、7区2号古墳に配置された埴輪人物群を構成する1体ということにとどまる。出土時、破損していた本女子像は、接合復原した結果、ほぼ上衣裾部より台部を欠失したもので、頭部から、腰部両腕の保存状態は良く、個体としての埴輪女子像の特徴を良く観察できる。

（各部位の寸法） 第28表のとおりである。推定し得るこの埴輪女子立像の全高は、残存部全高が、50.1cmである事から見て、75cm～85cm内外のものではなかったかと推定される。

（各部位の特徴） 頭部：側頭部で分銅形にくびれた板状の髪形で、奥行17.5cm、最大巾16.4cm、厚さは1.2～1.5cmである。上面は、ハケ目様に整形しているが、側部分は、櫛目を波状に刻んで毛髪を表現している点がめずらしい。額部は広く、眉上に細身の帯をめぐらし、その末端は耳朶に相当する「8」字形の耳環の上位環に掛ける状態に終わっている。大きめに表現された径4.0cm内外の耳環の結合部には、丸玉2ヶを飾っている。目は、柳葉形に刻んでいるが、両目とも上脛部に刻みを入れ、特に右目は、その部分が方形に開孔しているが、それが製作上の手違いによるものか、何らかの意図をもってなされたものか、判断しがたい。口鼻の表現は他例と大きく変わるころは見られない。頸部：丸玉の首飾りを表現している。やや間隔を置いて、径1.2～1.5cmの玉

第6章 検出された遺構と遺物

を配した単輪の首飾りである。胸部、胴部：乳房下から表面を縦方向の櫛目は10本前後の歯数の施文具によって行われたものと推定される。乳房の間隔は7.0cmである。腕部全体は小造りにつくられており、拇指を除く各指先は、指間に刻みを入れることにより表現している。

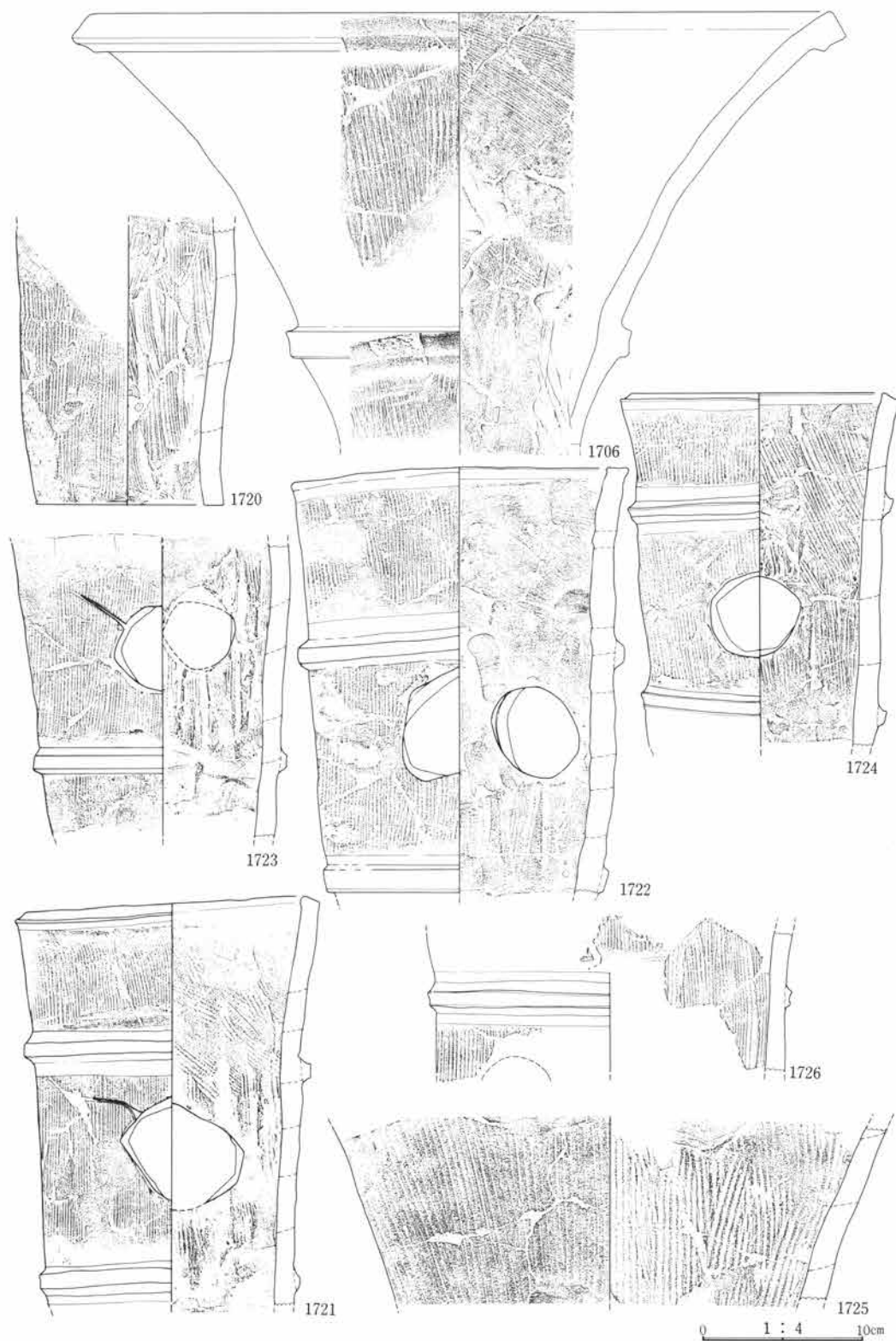
(胎土、焼成) 全体に赤色味を強く持った焼き上りである。胎土には、片岩質の砂粒も含まれていて、神流川又は鮎川地域での生産になるものと推定される。

(性格と制作年代) 両手を胸に添え、直立した姿勢を形どっているが、頭部は、前傾し、いわゆる俯き加減である。それが埴輪人物像として意識的につくられたものか、どうかの判断は、むずかしいが、結果的には、この埴輪人物像の沈んだ表情を強調している。俯き加減で直立した姿勢の埴輪女子像の事例は他にないわけではないが、それらは、襷掛けを表現し、巫女を形どったものと推定される。ところが本埴輪女子像の場合両手を胸に添え、威儀をただしている女人とするのが適わしい。埴輪女子像で両手を胸に添えている事例は、きわめて少なく、多くは、壺や杯を持ち、あるいは、ある種の行為を表すかのように片手を高くかざした姿勢のものなどを普通としている。それらは、古墳の「まつり」を司祭する巫女と供え物を捧持する女人、あるいは歌舞を演ずる踊子を形どったものである。本埴輪女子立像は、あえて、その性格を位置づけるとすれば、巫女を表現したものという事になるだろうが、巫女としての衣裳を表現してはいないという点が指摘できる。このような埴輪女人立像は「まつり」に直接たずさわる女人を表現したものではなく古墳に埋葬された人物か、あるいは「まつり」に列する近縁者を形どったものなのかも知れない。いずれにせよ、本埴輪女人像の制作年代は、6世紀後半から終りごろに位置づけられるものと思われる。

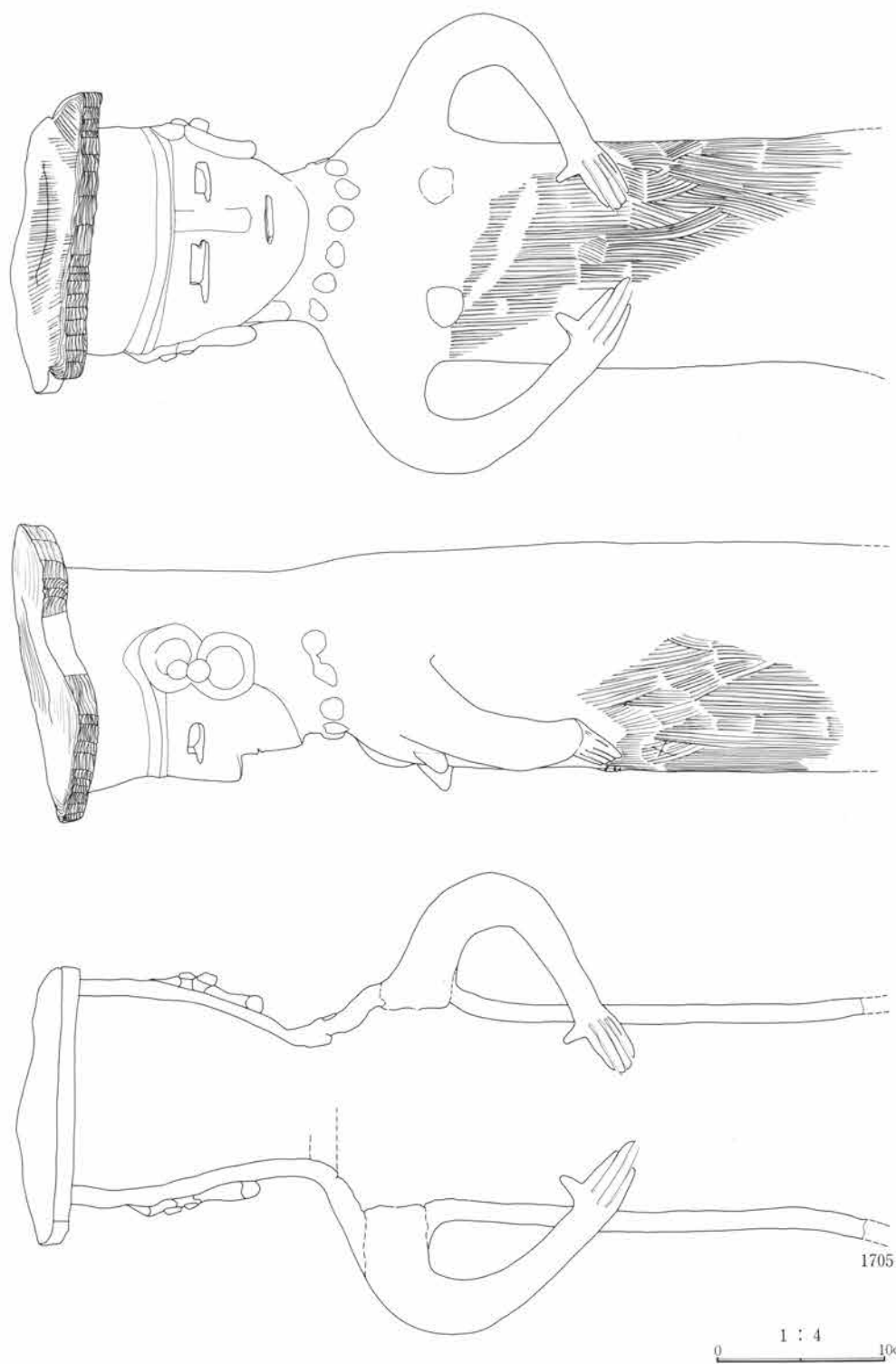
(梅沢重昭)

第28表 7区2号古墳出土埴輪女人立像計測値表 (単位:cm)

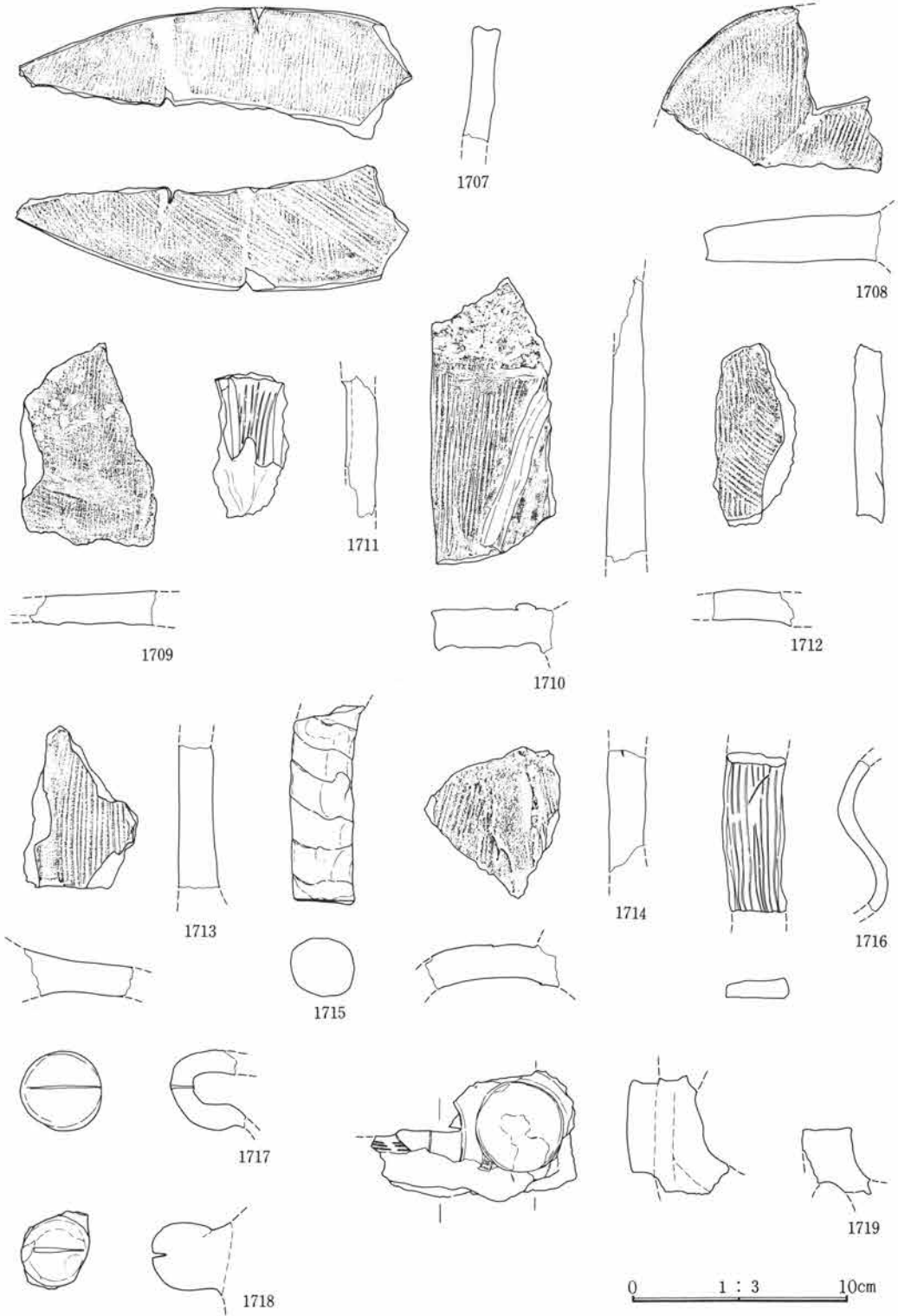
推定全高	残存高	頭部長	顔面長	顔面最大巾	肩部位	肩部巾	頸部廻	胸部巾厚	胴部巾厚	肘間隔
75.0~ 85.0	50.1	14.1 (前頂) 17.7 (後頂)	12.6	13.5	左 32.0 右 34.0	14.3	[29.5]	(巾) 13.0 (厚) 12.5	(巾) 13.3 (厚) 13.5	27.0



第161図 7区2号古墳遺物図(1)



第162図 7区2号古墳遺物図(2)



第163図 7区2号古墳遺物図(3)

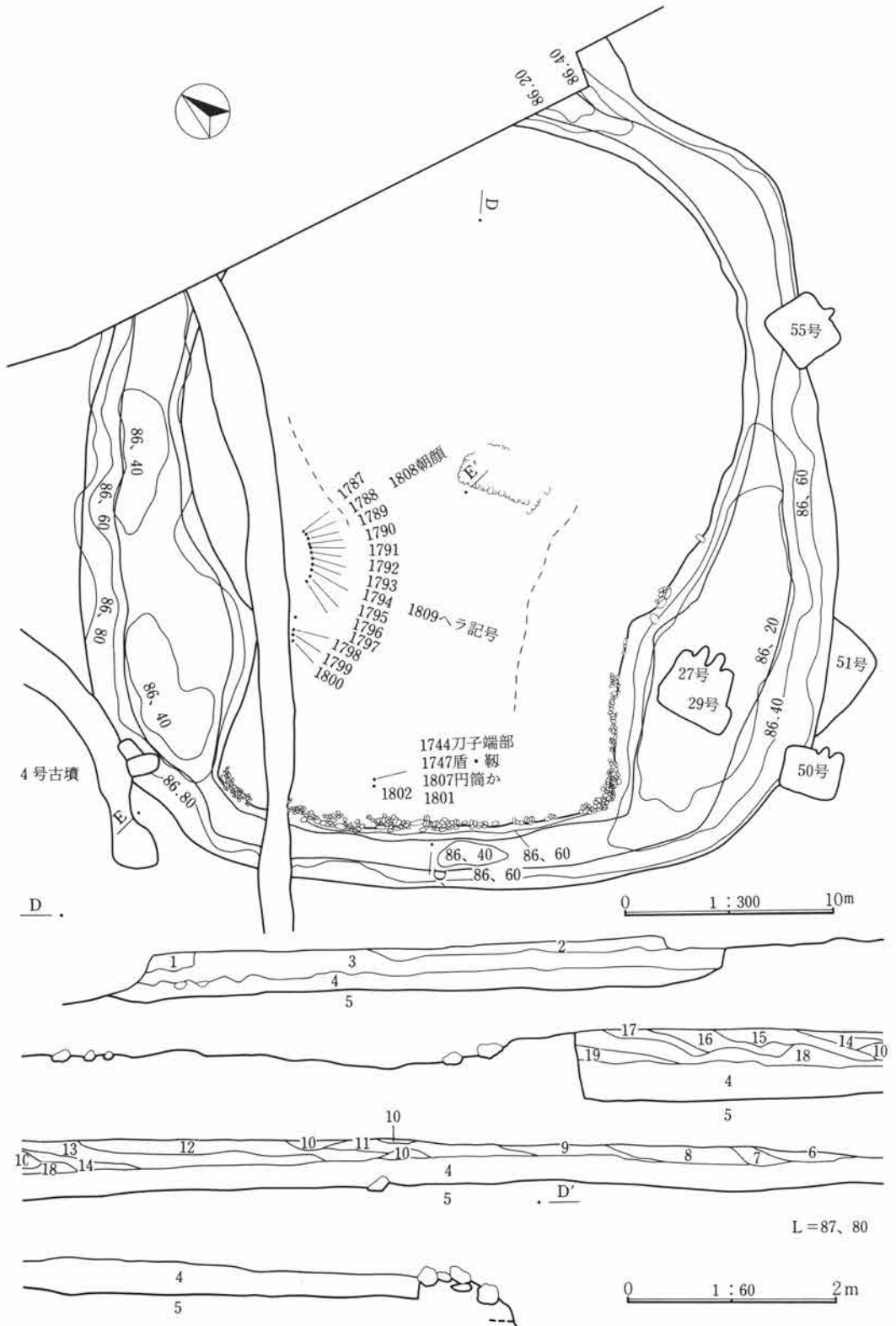
第29表 7区2号古墳出土遺物観察表

(第161~163図、図版 71・72)

番号	器種	部位	胎土・焼成・色調・器厚	口径・胴径・底径・器高・器厚	調整技法	備考
1706	円筒朝顔	上部	砂粒、石英質石粒を含む。酸化、やや硬質。暗赤褐色	口- [46.4]、胴- [15.2]、高- (26.8)、厚- 1.2	口縁部、外縁帯をもつ。胴部への変換部に帯めぐる。断面、台形。外面、タテハケ目、6本。口縁部内面、ナナメハケ目、12本。体部内面、ユビ、ヘラナデ。胴部内面、ハケナデ	ハケ目の本数は2cmの中内での本数を示す 西周堀出土
1707	形象盾類	上端の鱗部分?	砂粒、石粒を含むが、細。酸化、やや硬質。橙色	厚- 1.2	丸く弓状にカーブをもつ。表面、タテハケ目、ナナメハケ目、9本~10本	西周堀出土
1708	形象盾類	上端部?	砂粒、石粒を含むが、細。酸化、やや硬質。明赤褐色	厚- 1.7	丸く弓状のカーブをもつ。表面、タテハケ目。裏面、ナナメ、タテハケ目、11本	西周堀出土
1709	形象盾類	鱗部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	厚- 1.6	板状。表面、タテハケ目、端部方向はヨコハケ目。裏面、タテ、ヨコハケ目12本	東周堀出土
1710	形象類	体部	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。赤褐色	厚- 1.7	板状で、円筒部に鱗状にとりつく。表面、タテハケ目、11本。粘土紐貼付で、矢を表現。裏面、ハケナデ、ナナメ	西周堀出土
1711	形象類	小片	砂粒を含む。酸化、軟質。赤褐色	厚- 1.5	円筒胴部にとりつく部分か。表面、扁平台形の粘土帯、貼付、タテハケ目9~10本	西周堀出土
1712	形象類	小片	砂粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	厚- 1.4	円筒胴部。タテハケ目、ナナメハケ目。内面、ヘラナデ	西周堀出土
1713	形象類	小片	砂粒を含む。酸化、軟質。赤褐色	厚- 1.4	円筒胴部、鱗状のとおりつき部あり。タテハケ目、9本、ナデあり	西周堀出土
1714	形象類	胴部片	砂粒を含む。酸化、軟質。赤褐色	厚- 1.5	円筒胴部に、鱗状のとおりつき部あり。タテハケ目8~9本、ナデあり	西周堀出土
1715	形象人物?	男子頭髪部?	砂粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	径- 2.8	筒状の体部に、粘土紐、らせん状にまきつけ	周堀フク土

2 14地区の調査 (古墳時代)

1716 7区2号 墳	形 象	小片	砂粒を含む。酸化、軟質。赤褐色	巾-2.9、厚-0.6	扁平な帯状でS字状にまがる。表面ハケ目、8本	西周堀出土
1717	形 象 馬	鈴	砂粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	径-3.7、高-3.5、厚-0.9	中空。頂部に、切り込みあり	西周堀出土
1718	形 象 馬	鈴	砂粒を含む。酸化、軟質。明褐色	径-3.2、高-3.6	丸玉で、頂部に、切り込みあり。やや小型	西周堀出土
1719	形 象 馬	頭部、口の部分	砂粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	厚-2.2、円板径-4.0	口の表現と思われる切り込みと、円板貼付、粘土紐貼付あり。鏡板、銜の表現か、ハケナデあり	周堀フク土
1720	円 筒	底部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	底-11.7、胴-13.6、高-(17.1)、厚-1.3	内外面、タテハケ目あり、10本	北周堀出土
1721	円 筒	口～胴部	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	口-19.0、胴-15.9、高-(25.4)、厚-1.2	外面、タテハケ目、12本。内面、上部ナナメ、下部タテハケ目、9本。二段の凸帯、残る。断面台形	東周堀出土 透孔、2個あり 孔肩部にヘラ刻線あり
1722	円 筒	口～胴部	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。橙色	口-21.1、胴18.7、高-(26.3)、厚-1.7	外面、タテハケ目、9本。内面、上部ナナメ、下部タテハケ目、粘土積痕あり。二段の凸帯、残る	南周堀出土 透孔、2個あり ゆがんだ円形
1723	円 筒	胴部	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	胴-[17.5]、高-(18.0)、厚-1.3	外面、タテハケ目、10本。内面、タテハケ目、11本。一段の凸帯、残る	東周堀出土 透孔、2個あり 孔肩部にヘラ刻線あり
1724	円 筒	口～胴部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。赤褐色	口-17.4、胴-15.0、高-(21.9)、厚-1.3	外面、タテハケ目、10本。内面、上部ナナメ、下部タテハケ目、10本。二段の凸帯、残る	西周堀出土 透孔、2個あり ゆがんだ円形
1725	円 筒 朝 顔	胴部	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。明褐色	胴-[34.8]・[27.0]、高-(10.9)、厚-1.5	外面、タテハケ目、5本。内面、ナナメ、タテハケ目、6本	
1726	円 筒	胴部	砂粒、石粒を多く含む。酸化、軟質。赤褐色	胴-[22.7]、高-(8.5)、厚-1.2	外面、タテハケ目、10本。内面、タテハケ目、10本。一段の凸帯、残る	北周堀出土 透孔あり ヘラ刻線あり

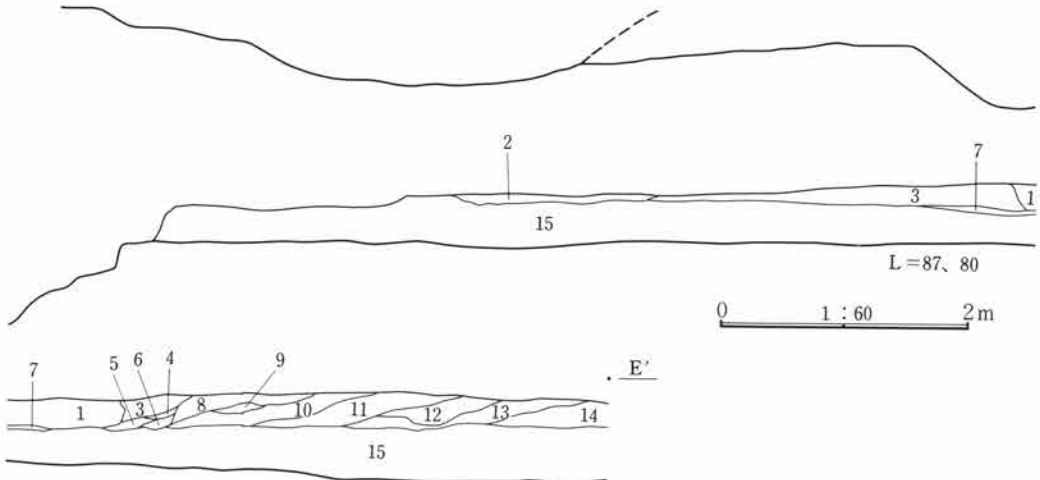


第164図 7区3号古墳遺構図(1)

2 14地区の調査 (古墳時代)

- | | | | | |
|----|------------|-----------|----|------------|
| 1 | かく乱 | | 11 | ロームと黒色土の混土 |
| 2 | 黒色土 | | 12 | 〃 |
| 3 | 〃 | | 13 | 〃 |
| 4 | ローム漸移土 | | 14 | 〃 |
| 5 | ローム | | 15 | 〃 |
| 6 | ロームと黒色土の混土 | ローム多い | 16 | 〃 |
| 7 | 〃 | ローム少ない | 17 | 〃 |
| 8 | 〃 | ロームはブロック状 | 18 | 黒色土 |
| 9 | 〃 | 黒色土はブロック状 | 19 | ロームと黒色土の混入 |
| 10 | ロームブロック | | | |

E .



E'

- | | | | | | |
|---|------------|---------------|----|----------------|-----------------|
| 1 | かく乱 | | 9 | 黒色土 | 大粒のロームを含む |
| 2 | 褐色土とロームの混土 | | 10 | 暗褐色土 | ローム粒多く、かたくしまる |
| 3 | 黒色土 | | 11 | 〃 | ローム細粒を含み、かたくしまる |
| 4 | 暗褐色土 | | 12 | 11層とロームブロックの混土 | |
| 5 | 黒色土とロームの混土 | | 13 | 〃 | 軽石を含み、かたい |
| 6 | 褐色土とロームの混土 | | 14 | 黒色土とロームの混土 | |
| 7 | 黒色土 | うすいレンズ状のロームあり | 15 | ローム漸移土 | |
| 8 | ロームブロック | | | | |

第165図 7区3号古墳遺構図(2)

7区3号古墳（第164～172図、第30表、図版73～76）

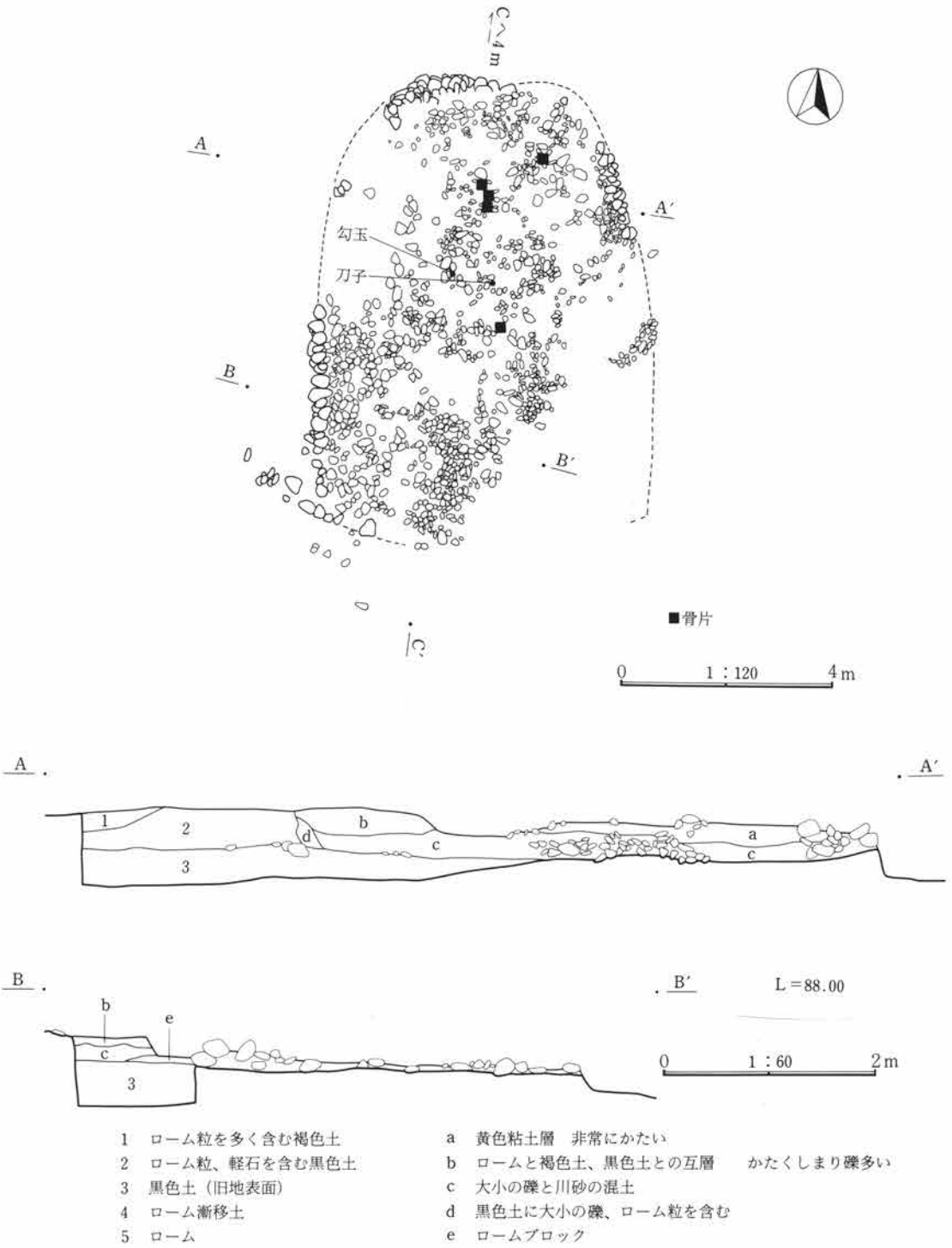
この古墳は確認された中では唯一の帆立貝形古墳で、周囲には円墳がめぐり中心的な位置を占める。調査前の状況は、北側から南にむけて削平を受け、北側には近世頃の溝が横断し後円部に若干の高まりを残す程度であった。後円部の先端は調査区の制約から未調査である。

墳丘規模は、推定全長32.5m、周堀を含めて約39m、前方部長6.5m、前方部端での幅18.2m、くびれ部幅16.5m、後円部直径26mを測る。前方部端は緩やかな弧をえがき、両角部を直線で結んだ場合の中軸線上での張り出す部分の長さ2mである。墳丘は、基本土層第4層に相当する褐色土上面(87.30～40m)で占地部分全体を整地をし、2段築成と思われるが上段の盛土が約30～60cm残っているにすぎない。整地面は北側から南への若干の傾斜を持つ。墳丘下には、古墳時代の56、57号住居跡や縄文時代の土壇等がある。

前方部端から後円部くびれ部にかけては上下2段の河原石から成る葺石列が残存する。上段列は、径5～10cmの玉石を幅1m位の帯状に敷いた根石列が後円部北側から前方部くびれ部付近にかけて見られる。下段列は、前方部端とくびれ部にかけて残りがよい。前方部端での残存する高さ約60cm、4段、傾斜角度30°である。葺き方は、地山のロームを整地面下約20cm削り出し、長さ30cmを越す石を横置きにし根石としている。その上に長さ約20cm位のやや小ぶりの石を互目小口積にしている。下段葺石列上端と上段葺石列基部との間は、幅約1mの地山削り出し平坦面(後円部北側で87.5m付近)があり、円筒埴輪列が樹立する。埴輪列は後円部北側のくびれ部付近にのみ残存するが、周堀内に破片状態での崩落が見られることから墳丘全体にめぐっていた可能性が高く、人物、器財等も含む。後円部に残存したものは、一部攪乱で途切れるが破片状態を含めて15個体ある。各埴輪は地山を5cm程掘り込み、15～20cm間隔で並んでおり、玉石を中に入れ置石としたものが数個体ある。

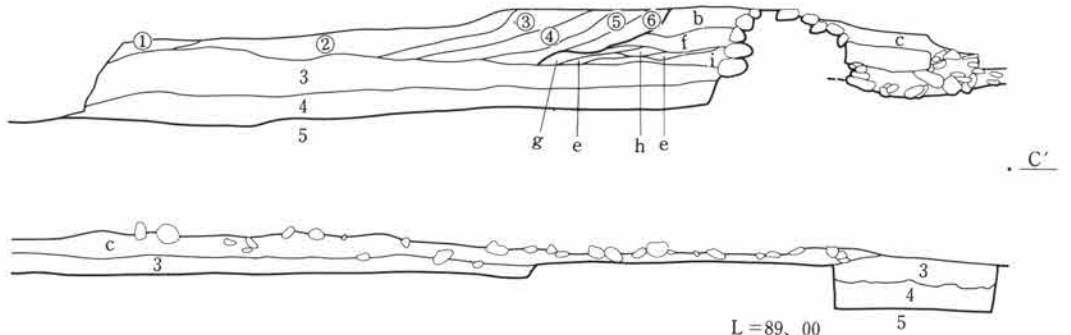
周堀は馬蹄形で全体にめぐる。後円部側での幅5m、深さ60cm、前方部端で4m、深さ50cm、両くびれ部付近で13～15m、深さも1～1.2mとロームを大きく掘り込む。断面は緩やかな傾斜のU字形をなす。覆土上位に浅間山B軽石の攪拌土が厚く堆積し、この下位から底面にかけて葺石、埴輪類が多量に崩落している。

主体部は、後円部南に開口する横穴式石室と思われるが、床面は半ば露呈し遺存状態は悪い。構築は墳丘全体の整地面を10cm下げ、平坦に踏んで長方形の堀方としている。開口部から見て左側から奥壁にかけて裏込め根石列が3～7段残る。長さ20cm位の角閃石安山岩の転石だけを用いて小口積にしている。この根石列西北隅から半径3.5mの半円状の範囲には、顆粒状に砕いた角閃石安山岩が整地面上にまかれていた。裏込めは黒褐色土とロームを互層で固く締め、床面下にも小砂利敷とロームとが続く。壁石等は根石も欠くが、奥壁には凝灰岩の削石を使用か。床面からは瑪瑙製勾玉1点、刀子残片のほかに骨片が3ヶ所で少量見られた。時期は、6世紀後半頃である。
(女屋)



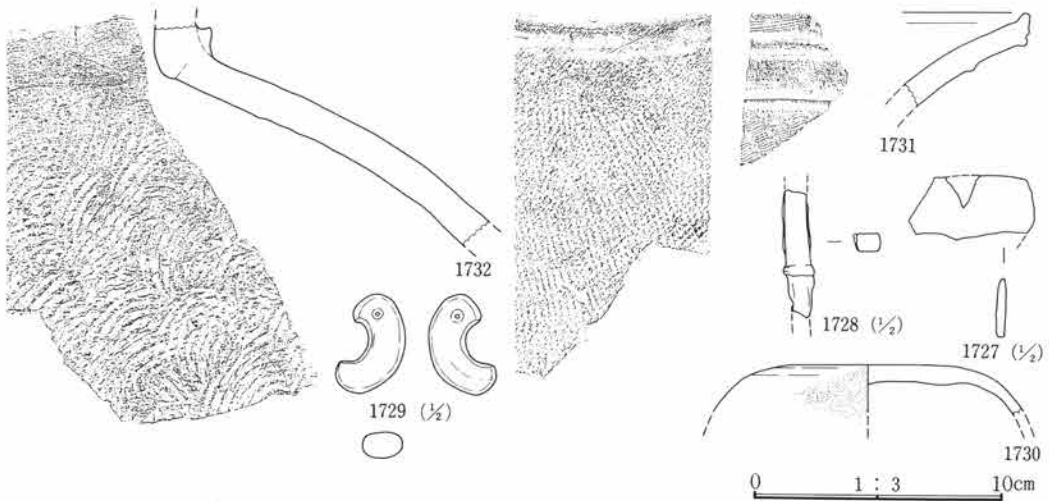
第166図 7区3号古墳石室平、断面図

C.



- 墳丘盛土① ロームと黒色土の混土
 ② 黒色土
 ③ ロームと黒色土の混土
 ④ //
 ⑤ // ロームはうすいレンズ状
 ⑥ // ロームは斑状のブロック

- a~e 第166図のa~e層
 f 黒褐色土 ローム粒あり、かたくしまる
 g // fより明るい
 h 黒色土ブロック
 i ロームと黒色土の混土

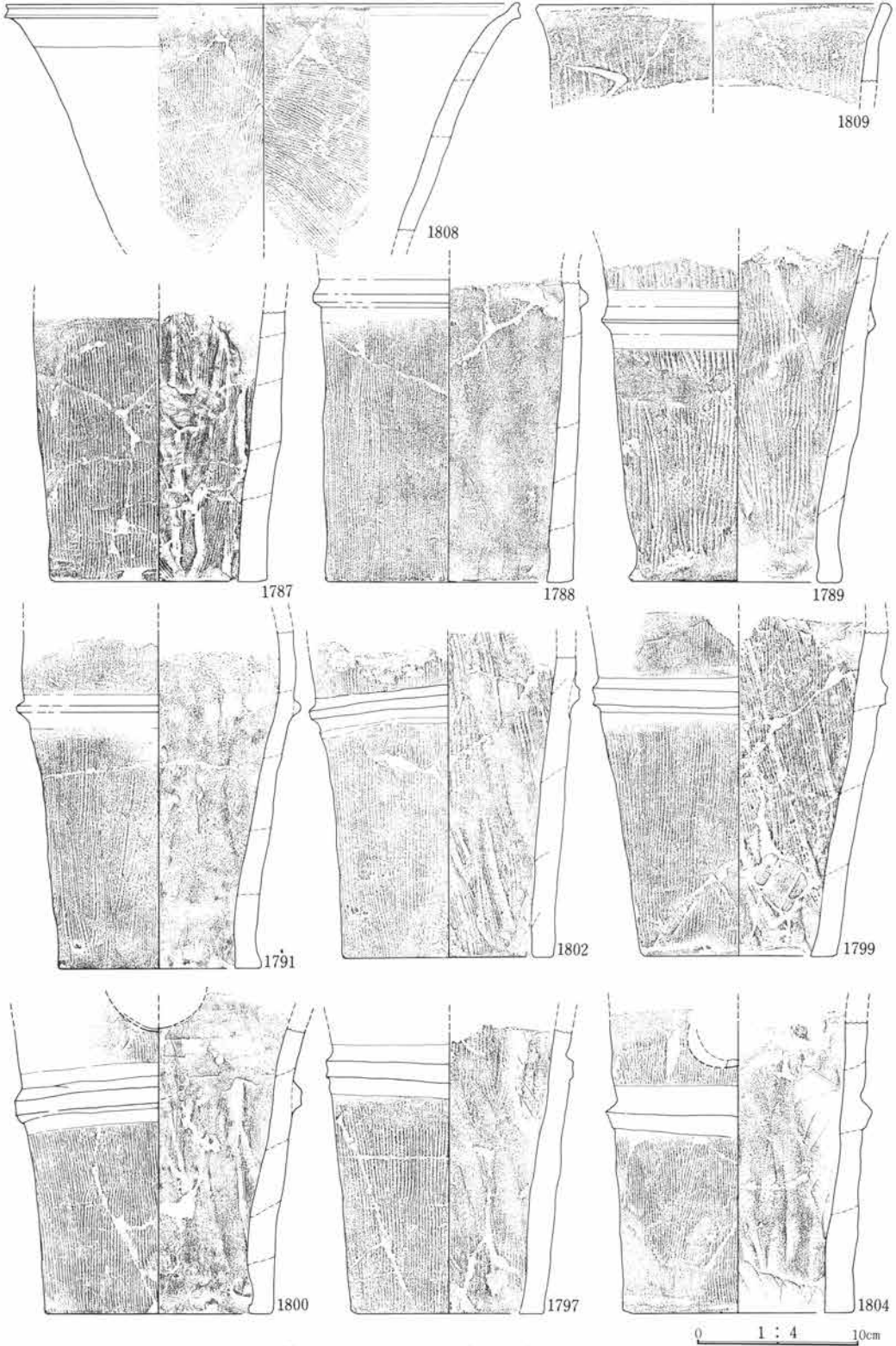


第167図 7区3号古墳石室平、断面図(2)、遺物図

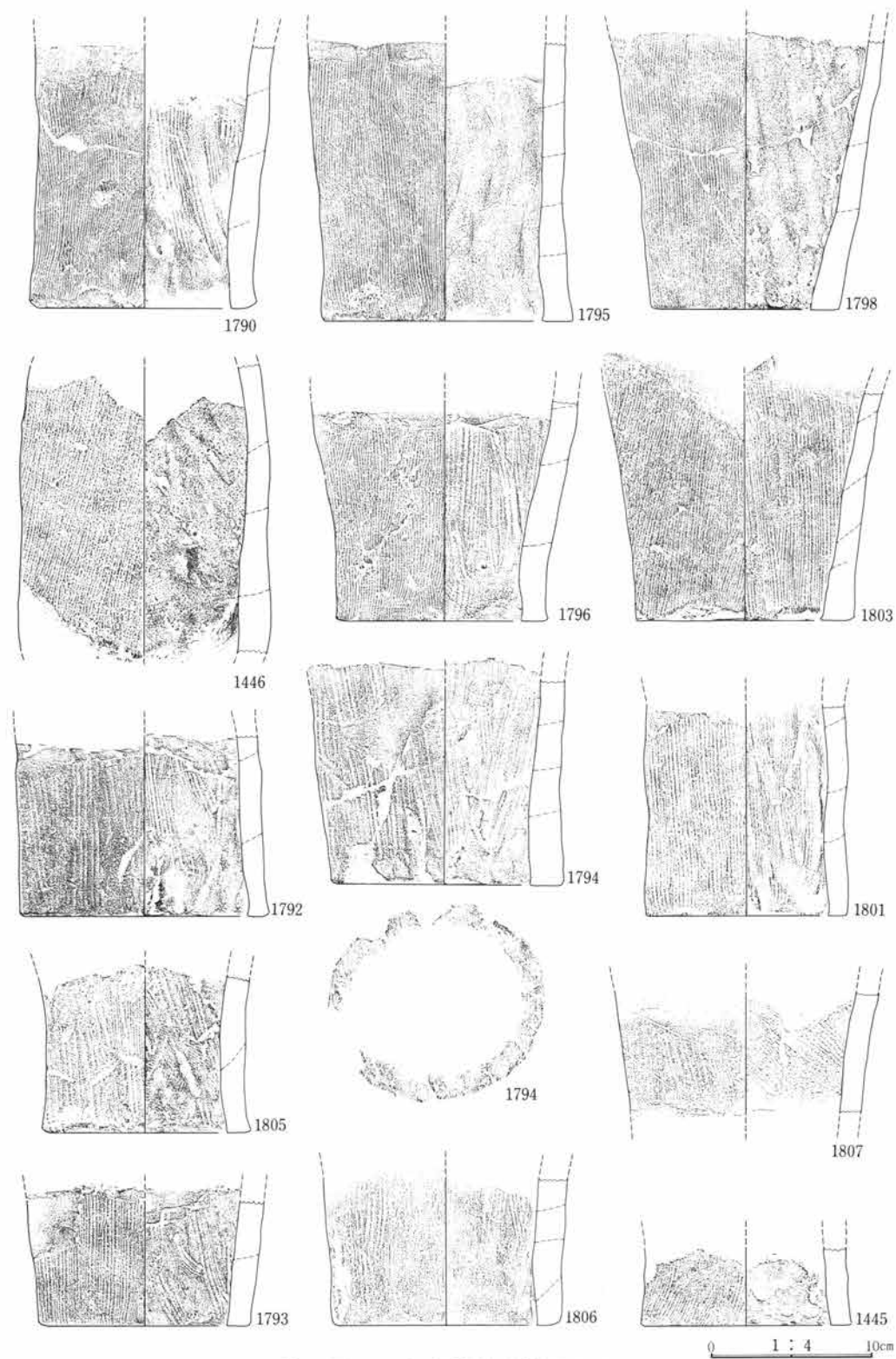
第30表 7区3号古墳出土遺物観察表(主体部)

(第167図、図版76)

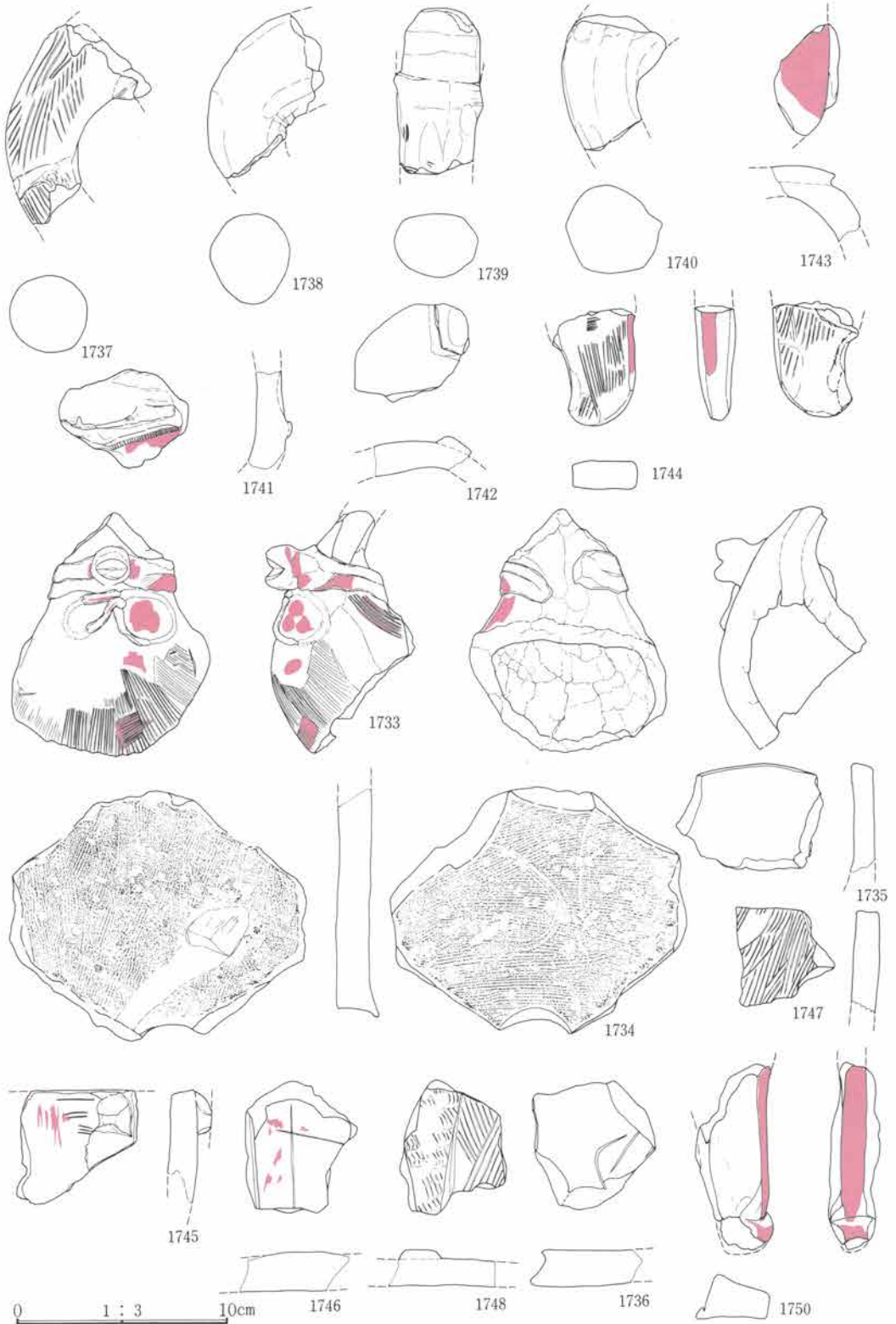
番号	種類	形態及び形状について	備考
1727	小札か? 鉄製品	長一(3.4)、巾一(1.7)、厚一0.25、端部、丸く、側端部、かまぼこ状断面をもつ。 板状の製品、小札の部分か	主体部出土
1728	鉄 鉄製品	長一(3.4)、巾一0.75、厚一0.3、鉄、柄の部分、断面、扁平な四角形、棘筵被式で、着柄部に木質残存する	主体部出土
1729	勾玉 瑪瑙	長一2.7、頭部一巾、1.0、厚、0.75、体部一巾、0.9、厚一0.8、端部一巾、0.75、厚、0.6、頭部から端部、半球状に内湾する。断面、やや扁平で、ていねいな研磨により面とりあり。頭部の小孔、両面穿孔、にごりのある琥珀色	主体部出土



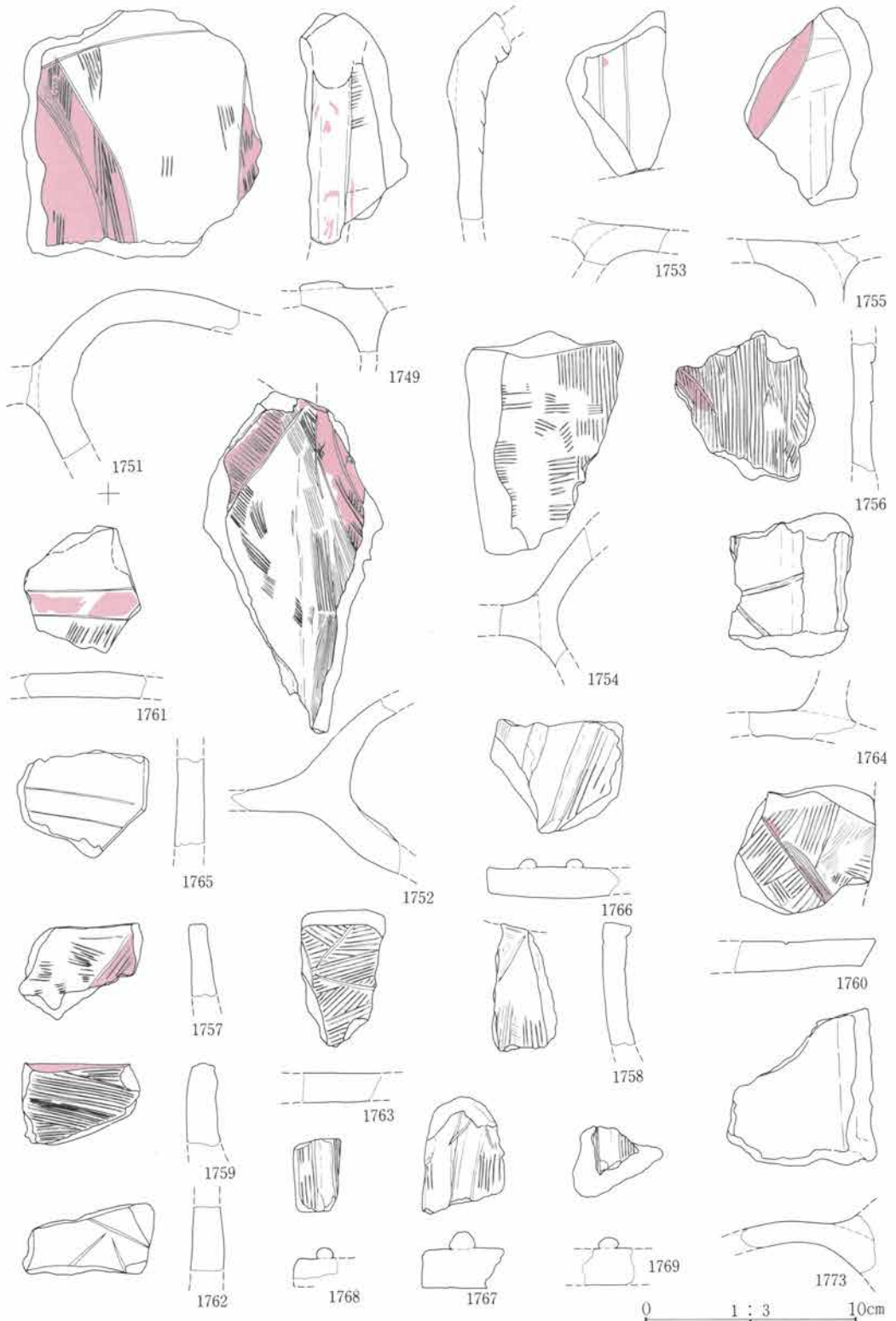
第168図 7区3号古墳遺物図(1)



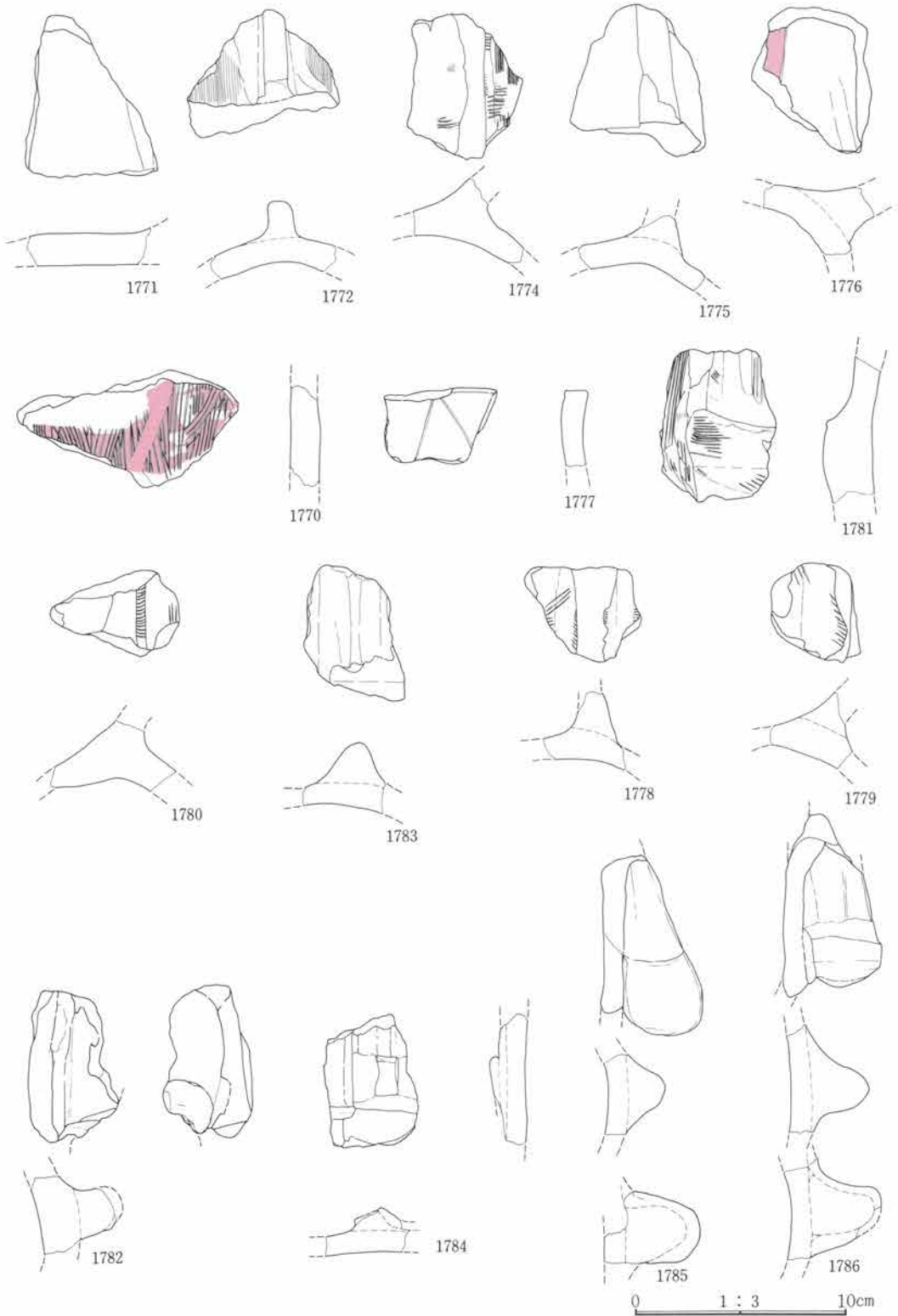
第169図 7区3号古墳遺物図(2)



第170図 7区3号古墳遺物図(3)



第171図 7区3号古墳遺物図(4)



第172図 7区3号古墳遺物図（5）

第30表 7区3号古墳出土遺物観察表

(第167～172図、図版 73～76)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
1730	環蓋須恵器	○小片	砂粒、白色石粒を含む。黒色斑文あり。還元、硬質。灰色	天井部。平坦で、肩部丸く、体部へ移行する。天井部～肩部、回転ヘラケズリ調整	主体部出土 自然釉あり
1731	甕須恵器	○小片	砂粒、白色石粒を含む。黒色斑文あり。還元、硬質。灰色	大きくひろく口縁の甕。口縁部、外縁帯をもち、沈線と波状文を施す。端部、内側に凹部めぐり。口縁下部に凸部めぐり、下位に波状文あり	後円部墳丘北側出土 自然釉あり
1732	甕須恵器	○頸部～胴部小片	砂粒、白色石粒を含む。黒色斑文あり。還元、硬質。灰色	大型の甕。体部、丸味をもつ。頸部しまつて、凸部めぐり。体外面、平行タタキ目、内面、同心円タタキ目	後円部墳丘北側出土 自然釉あり

番号	器種	部位	胎土・焼成・色調	口径・胴径・底径・器高	調整技法	備考
1733	形象 柄	体部～端部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	長- (11.4)、胴径- [9.1]、厚-1.2	体部、ハケ目、16本。端部に粘土紐、2本まきつけ、鉛貼付、下部に8字状に細紐貼付	体部外面、赤色塗彩あり
1734	形象 鬘か?	小片	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。橙色	長- (11.0)、巾- (14.0)、厚-2.4~1.5	板状、中央に透孔状の孔あり。表面、ナナメ、ヨコ、及び、弧状のハケ目裏面、ハケ目、粘土帯貼付痕あり。14本のハケ目	
1735	形象 盾 靱 類	小片	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	厚-1.0	鱗状の部分か、表裏ハケ目、細かく、うすい調整。裏面、ナデあり	
1736	形象 盾 靱 類	小片	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.7	板状、中央部、孔あり、表面ハケ目、1.5mm巾で14本、ヘラ描きによる鋸歯状文あり。裏面ハケ目	
1737	形象 人 物	右腕付け 根部分	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。橙色	腕径-3.6	体部へのさしこみ、ソケット状で、付け根部分、粘土まきつけ、ハケナデ、ナデ調整、手先にかけて、粘土貼付痕あり	7 D24G、出土(前方部北側、墳輪列) 武人か?
1738	形象 人 物	腕付け根 部分	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	腕径-4.0×4.4	ソケット状さしこみあり。ハケナデ、ナデ調整	墳丘
1739	形象 人 物	腕か?	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	径-3.0×4.0	体部にさし込む部分か。ハケナデ、ナデ調整	

2 14地区の調査 (古墳時代)

1740 7区3号 墳	形 人	象 物	腕	砂粒、石英、頁岩粒を含む。酸化、軟質。橙色	径-3.8×4.3	ソケット状で体部へさしこむ。ハケナデ、ナデ調整	前方部北側、7-5溝フク土
1741	形 人	象 物	頭部?	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.5	表面、剥落。ハケナデ、ナデ。粘土貼付痕あり	前方部北側、7-5溝フク土 赤色塗彩あり
1742	形 人	象 物	頭部?	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.5	カーブをもつ体部に、粘土帯、貼付。表面、ナデ調整、内面、ユビナデ	
1743	形 人	象 物	顔、左側部分	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.6	左頬部より首にかけての部分、頬、三角に赤色塗彩、首部、耳飾貼付痕	赤色塗彩あり
1744	形 人	象 物	刀の先端?	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。橙色	長-(5.3)、巾-3.2、厚-1.3	人物の携行する刀か。先端部、丸くカーブをもつ。表裏ハケナデ、細かめ	赤色塗彩あり
1745	形 不	象 明	小片	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.4	板状。わずかにカーブをもつ。表面、ハケナデ、粘土帯貼付痕あり	赤色塗彩あり
1746	形 盾	象 鞆類	小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.9	板状。片側、一部分、切り込みあり、表面、極く細かいハケ目、十字に刻線あり。裏面ハケナデ	赤色塗彩あり
1747	形 盾	象 鞆類	鱗部小片	砂粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.2	板状。表裏、ハケ目、1.5cm巾で7本	
1748	形 不	象 明	小片	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	厚-1.3	わずかにカーブをもつ。表面、ハケナデ、粘土帯貼付、帯上、ハケによる波状文あり。裏面ハケ目	
1749	形 盾	象 鞆類	体部	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.3	体部と鱗部の境部分。表面、ハケ目、ナデ調整。粘土帯、斜めに貼付。裏面、ヨコ、ナナメのハケナデ。内面、ナデ調整	赤色塗彩あり 北側埴輪列中
1750	形 象	象	小片	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。橙色	長-(8.9)、巾-3.4、厚-2.0	断面、扁平な四角形、棒状、端部丸く巻きつけあり。片端、本体に貼付けの痕跡あり。ナデ調整	西南周堀フク土側部、赤色塗彩あり 人物、髪か
1751	形 盾	象 盾	体部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	厚-1.4	断面、楕円状で、鱗部分とりつきあり。表面、細かい、タテハケナデ、ナデ、2本の沈線によって鼓状の文様あり。内面、タテナデ	沈線間に赤色塗彩あり

第6章 検出された遺構と遺物

1752 7区3号 墳	形 象 靱	体部、左 側鰭取付 け部	砂粒、石英、片岩 を含む。酸化、軟 質。にぶい橙色	厚-1.4	表面、ハケナデ、ナデ調 整、2本の沈線で施文。 裏面、ハケナデ、内面、 粘土積痕、タテユビナデ	前方部西辺中央 部出土 沈線間に赤色塗 彩あり
1753	形 象 靱	体部、鰭 取付け部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。橙色	厚-1.2	表面、ハケナデ、ナデ、 2沈線による施文あり。 裏面、ハケナデ。内面、 ナデ調整	北周堀出土 赤色塗彩あり
1754	形 象 盾 靱 類	体部、鰭 取付け部	砂粒、白色石粒、 片岩を含む。酸化、 軟質。橙色	厚-1.2	表面、ナデ調整、裏面、 タテ、ヨコハケナデ。内 面、粘土痕線、ナデ調整	7-5溝出土
1755	形 象 盾 靱 類	体部、鰭 取付け部	砂粒、石英を含む。 酸化、軟質。橙色	厚-1.4	表面、ナデ調整、2沈線 による施文あり。裏面、 タテ、ヨコハケナデ調整。 内面、粘土積痕あり	周堀出土 沈線間に赤色塗 彩あり
1756	形 象 不 明	体部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。橙色	厚-1.2	外面、タテハケ目、2本 の沈線による施文あり、 12本。内面、粘土積痕あ り、ナデ調整	沈線間に赤色塗 彩あり
1757	形 象 盾 靱 類	鰭部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。橙色	厚-1.2	表面、ハケナデ、ナデ調 整、2本の沈線による施 文あり。裏面、斜めのハ ケナデ調整	北周堀出土 赤色塗彩あり
1758	形 象 盾 靱 類	鰭部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。にぶ い橙色	厚-1.2	表面、ハケナデ、ナデ調 整。沈線による斜めの施 文あり。裏面、ハケナデ	西南周堀出土
1759	形 象 盾 靱 類	鰭部	砂粒、石英を含む。 酸化、軟質。にぶ い黄橙色	厚-1.5	表面、ナデ調整。裏面、 ナナメハケナデ調整	側端部、赤色塗 彩あり
1760	形 象 盾 靱 類	鰭部	砂粒、石粒、片岩 を含む。酸化、軟 質。明赤褐色	厚-1.4	表面、ヨコ、ナナメハケ ナデ、沈線による斜めの 施文あり。裏面、ヨコハ ケナデ調整	西南周堀出土 赤色塗彩あり
1761	形 象 盾 靱 類	鰭部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。橙色	厚-1.2	表面、ナデ調整、2本の 沈線による施文あり。裏 面、ナナメ、ヨコハケナ デ調整	西南周堀出土 沈線間に赤色塗 彩あり
1762	形 象 盾 靱 類	鰭部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。橙色	厚-1.3	表面、ハケナデ調整、沈 線による鋸歯状文あり。 裏面、ナデ調整	南周堀出土
1763	形 象 盾 靱 類	鰭部	砂粒、白色石粒を 含む。酸化、軟質。 橙色	厚-1.3	表面、ナナメ、ヨコハケ ナデ、沈線による鋸歯状 文あり。裏面、ナデ調整	7 D24グリッド 出土

2 14地区の調査 (古墳時代)

1764 7区3号墳	形 象 盾 鞆 類	体部～鱗 取付け部	砂粒、石英、片岩 粒を含む。酸化、 軟質。橙色	厚-1.2	表面、ナデ調整、沈線に よる鋸歯状文あり。内面 粘土積痕あり、ハケナデ	
1765	形 象 盾 鞆 類	鱗部	砂粒、石英粒を含 む。酸化、軟質。 明赤褐色	厚-1.3	表面、ナデ調整、2本の 沈線、鈍角に折れまがる 側端部へむけて横引き。 裏面、ナデ調整	7-5 溝出土
1766	形 象 鞆	体部	砂粒、石英粒を含 む。酸化、軟質。 橙色	厚-1.5	表面、ナデ調整。断面、 蒲鉾状の粘土紐貼付け て、矢の表現とする。裏 面ナデ調整	7C24グリッド 出土
1767	形 象 鞆	体部	砂粒、片岩を含む。 酸化、軟質。橙色	厚-1.8	表面、ハケナデ、ナデ調 整。断面、蒲鉾状の粘土 紐貼付け、先端、鎌の形 に刻線あり。裏面、ナデ 調整	
1768	形 象 鞆	体部	砂粒、石英粒を含 む。酸化、軟質。 橙色		表面、ハケナデ、ナデ調 整。断面、蒲鉾状の粘土 紐貼付	西周堀出土
1769	形 象 鞆	体部	砂粒、石英粒を含 む。酸化、軟質。 橙色	厚-1.7	表面、ハケナデ。断面、 蒲鉾状の粘土紐貼付。裏 面、タテハケナデ	
1770	形 象 盾 鞆 類	鱗部	砂粒、石英粒を含 む。酸化、軟質。 橙色	厚-1.4	表面、ハケナデ。ナナメ、 ヨコ。裏面、ヨコハケナ デ調整	周堀出土 表面、赤色塗彩 あり
1771	形 象 盾 鞆 類	鱗部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。橙色	厚-1.5	表面、ヨコハケナデ。裏 面、ナナメ、タテハケナ デ調整	
1772	形 象 盾 鞆 類	体部～鱗 取付け部	砂粒、石英粒を含 む。酸化、軟質。 明赤褐色	厚-1.2	胴部外面、タテハケナデ 調整、角ばった鱗状の凸 帯貼付。内面、ハケナデ	
1773	形 象 盾 鞆 類	体部～鱗 取付け部	砂粒、石英粒を含 む。酸化、軟質。 橙色	厚-1.0	胴部外面、タテ、ヨコハ ケナデ、ナデ調整。内面 ナデ	
1774	形 象 盾 鞆 類	体部～鱗 取付け部	砂粒、石英を含む。 酸化、軟質。橙色	厚-1.2	表面、ナデ調整。裏面、 ハケナデ。内面ハケナデ	周堀出土
1775	形 象 盾 鞆 類	体部～鱗 取付け部	砂粒、石英粒を含 む。酸化、軟質。 明赤褐色	厚-1.2	表裏、ハケナデ、ナデ調 整。内面、ナデ	
1776	形 象 盾 鞆 類	体部～鱗 取付け部	砂粒、石英粒を含 む。酸化、軟質。 にぶい橙色		表面、ナデ調整、斜めの 沈線による施文。裏面、 ナデ。内面、ハケナデ	7-5 溝出土 赤色塗彩あり

第6章 検出された遺構と遺物

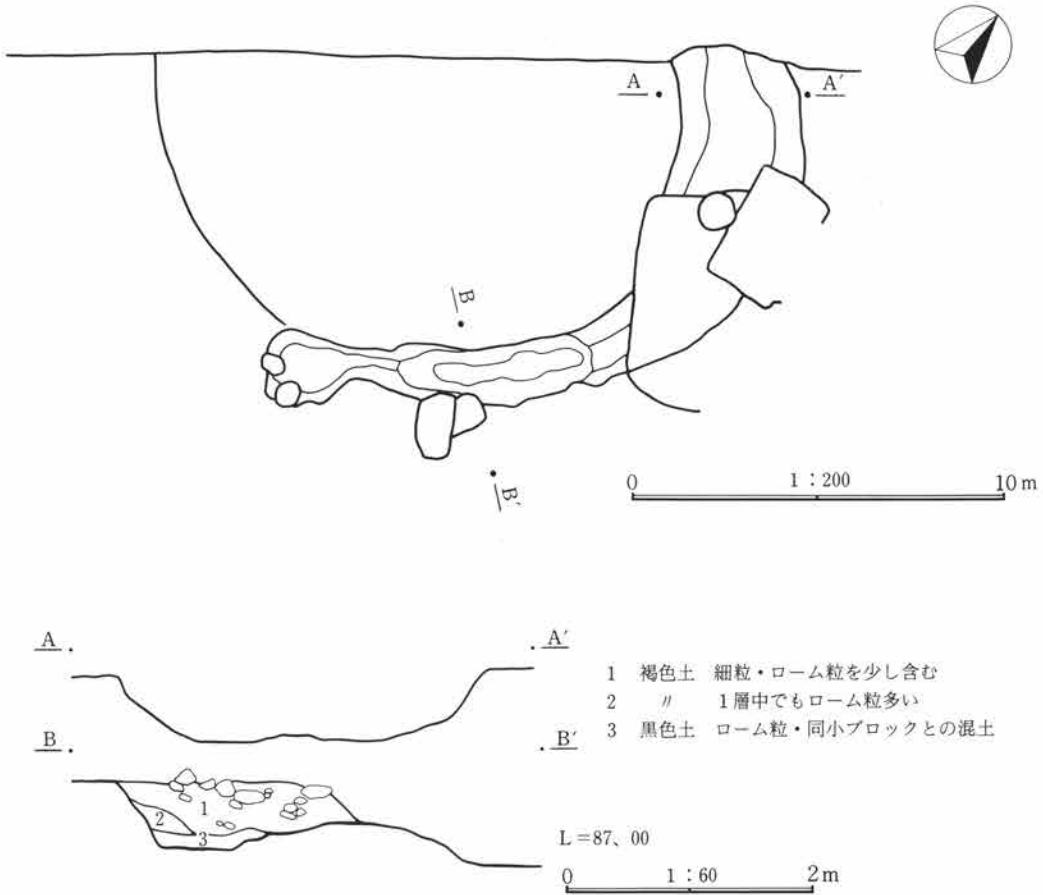
1777 7区3号墳	形 象 盾 鞆 類	鱗部	砂粒、片岩粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.0	表面、ハケナデ、沈線による鋸歯状文あり。裏面、ナデ調整	
1778	形 象 盾 鞆 類	体部～鱗取付け部	砂粒、片岩粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	厚-1.1	表面、ハケナデ、ナデ調整。内面、粘土積痕あり、ナデ調整	周堀出土
1779	形 象 盾 鞆 類	体部～鱗取付け部	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.1	表面、ハケナデ、ナデ調整。裏面、ナデ調整、内面、ナデ調整	
1780	形 象 盾 鞆 類	体部～鱗取付け部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.4	表面、ナデ調整。裏面、ハケナデ調整。内面、ナデ調整	周堀出土 赤色塗彩あり
1781	形 象 盾 鞆 類	体部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	厚-1.3	表面、ハケナデ後、L字状に粘土帯、貼付。内面、ハケナデ	周堀出土
1782	形 象 不 明		砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.5	表裏、ナデ調整。内面、ハケナデ、鱗状部、粘土巻付けて角を作る	周堀出土
1783	形 象 不 明	鱗部	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.2	表裏、ナデ調整。端部の丸い三角形の鱗、貼付。内面、粘土積痕あり	周堀出土
1784	形 象 不 明	体部	砂粒、石英、片岩粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	厚-1.0	外面、扁平な四角い断面の粘土帯、L字形に貼付。内面、ナデ調整	
1785	形 象 不 明	体部	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.0	表裏、ナデ調整。断面、端部の丸い三角形の粘土貼付。端部に粘土巻き付け、机の足状を呈する	西周堀出土 1783に似る
1786	形 象 不 明	体部	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。橙色	厚-1.0	表裏、ナデ調整。断面、端部の丸い三角形の粘土貼付。端部に粘土巻き付け、角を作る	墳丘北側出土
1445	円 筒	基底部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	底-[13.0]、高-(4.7)	外面、タテハケ目、2cm巾、12本。内面、ヨコナデ調整	
1446	円 筒	胴部	砂粒、石英、片岩を含む。酸化、軟質。黄褐色	胴-[15.3]、高-(17.5)	外面、タテハケ目、11本。内面、下位、ヨコ、上位、タテナデ調整	
1787	円 筒	基底部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	底-[13.5]、高-(16.4)、厚-1.7	外面、タテハケ目、2cm巾、9本。内面、タテハケ目、11本。底部、粘土紐、巻き付け痕あり	円筒列

2 14地区の調査 (古墳時代)

1788 7区3号 墳	円筒	胴～底部	砂粒、石英粒を含む。酸化、軟質。橙色	底-14.3、胴-16.0、高-(18.5)、厚-1.3	外面、タテハケ目、2cm巾13~14本。凸帯端部丸く扁平。内面、ヨコハケナデ、ていねいなタテナデ	円筒列
1789	円筒	胴～底部	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	底-12.9、胴-16.5、高-(20.0)、厚-1.5	外面、タテハケ目、6本。凸帯、丈の低い三角形。内面、タテハケ目、7本	円筒列
1790	円筒	基底部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	底-14.0、高-(14.0)、厚-1.7	外面、タテハケ目、13本。上部、ナナメハケ目、6本。内面、タテハケ目、9本	円筒列
1791	円筒	胴～底部	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	底-12.6、胴-16.8、高-(20.8)、厚-1.4	外面、タテハケ目12本。端部の丸い台形。内面、タテハケ目	円筒列
1792	円筒	基底部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	底-15.2、高-(11.0)、厚-1.4	外面、タテハケ目、12本。6本。内面、タテハケ目、10本	円筒列
1793	円筒	基底部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明褐色	底-13.0、高-(7.5)、厚-1.5	外面、下部、ヨコナデの後、タテハケ目、11本。内面、ナナメ、タテハケ目、12~13本	円筒列
1794	円筒	基底部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。赤褐色	底-14.5、高-(12.5)、厚-1.5	外面、タテハケ目、7本。内面、タテハケ目、9本。基底部、粘土巻き付け痕あり	円筒列
1795	円筒	基底部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。赤褐色	底-15.5、高-(17.0)、厚-1.5	外面、タテハケ目、13本。内面、ユビナデ、ヘラナデ調整。底部、ゆがみあり	円筒列
1796	円筒	基底部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。赤褐色	底-13.0、高-(13.1)、厚-1.7	外面、タテハケ目、13本。内面、タテハケ目、7本。底部、ゆがみあり	円筒列
1797	円筒	胴～底部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	底-12.0、胴-14.9、高-(17.4)、厚-1.6	外面、タテハケ目、12本。内面、タテハケ目、10本。胴部、ユビナデあり。底部、ヨコナデ、丈の低い断面台形の凸帯めぐる	円筒列
1798	円筒	基底部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。赤褐色	底-11.6、高-(16.4)、厚-1.2	外面、タテハケ目、13本。内面、ヨコナデ、タテナデ。底部、ヘラナデ調整	

第6章 検出された遺構と遺物

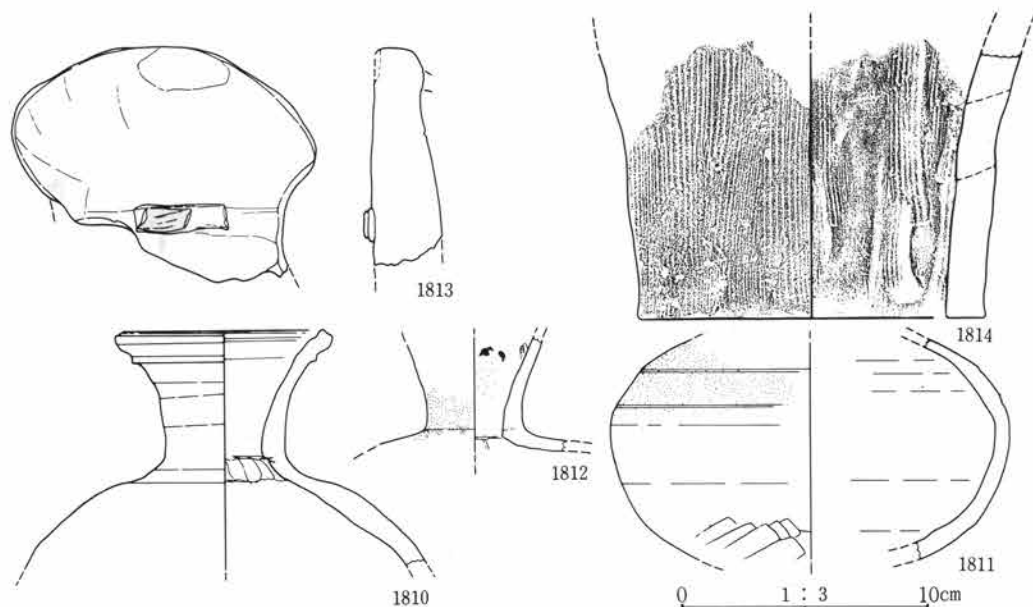
1799 7区3号 墳	円筒	胴～底部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。明赤褐色	底-12.2、胴-18.2、高-(19.0)、厚-1.4	外面、タテハケ目、2cm巾13本。丈の低い断面台形の凹帯めぐる。内面、タテハケ目、11本	円筒列
1800	円筒	胴～底部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。赤褐色	底-14.0、胴-18.0、高-(17.5)、厚-1.6	外面、タテハケ目、13本。断面台形の凸帯めぐる。内面、タテハケ目、13本。基底部内面、ヨコナデあり	円筒列 透し孔あり
1801	円筒	基底部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。赤褐色	底-[13.3]、高-(12.7)、厚-1.3	外面、タテハケ目、9本。内面、タテハケ目、9～10本	円筒列
1802	円筒	胴～底部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。赤褐色	底-[12.9]、胴-[16.5]、高-(18.5)、厚-1.6	外面、タテハケ目、11本。内面、タテヘラナデ、ハケ目。基底部、粘土巻き付け痕あり	円筒列
1803	円筒	基底部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。明赤褐色	底-13.4、高-(14.0)、厚-1.4	外面、タテハケ目、12本。内面、タテハケ目、10本。基底部内面、ヨコナデあり	円筒列
1804	円筒	胴～底部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。明赤褐色	底-[14.3]、胴-[15.7]、高-(17.8)、厚-1.4	外面、タテハケ目、13本。丈の低い断面台形の凸帯めぐる。内面、タテヘラナデ、ハケ目あり	西南周堀
1805	円筒	基底部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。明褐色	底-[13.0]、高-(9.3)、厚-1.5	外面、タテハケ目、13本。内面、タテハケ目、8本、13本	7C22グリッド
1806	円筒	基底部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。橙色	底-14.2、高-(8.8)、厚-1.8	外面、タテハケ目、6～7本。内面、タテハケ目。底部内面、ナデあり	
1807	円筒	胴部	砂粒多く、石粒含む。 酸化、軟質。にぶい褐色	胴-[14.3]、高-(7.4)、厚-1.4	外面、タテハケ目、6本。上下端、ヨコナデあり、2本の沈線によるヘラ記号あり。内面、ナナメハケ目、8本	円筒列
1808	円筒 朝顔	口縁部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。赤褐色	口-[32.0]、高-(14.0)、厚-1.2	外面、タテハケ目、ナナメハケ目、13本。口縁部外縁帯をもつ、ヨコナデ。胴部、ナデあり。内面、口縁、ヨコナデ、ナナメハケ目、14本	円筒列
1809	円筒	口縁部	砂粒、石粒を含む。 酸化、軟質。橙色	口-[22.2]、高-(4.7)、厚-1.0	外面、タテハケ目、6本、ヘラ刻線による記号あり。内面、タテハケ目、7本	円筒列



第173図 7区4号古墳遺構図

7区4号古墳（第173・174図、第31表、図版77）

この古墳は、南北を3号古墳と古墳綜覧佐野村42号古墳とにはさまれ、北側には5号古墳も隣接する。調査区の制約から南側1/2程を確認したにとどまるが、墳丘は調査前に削平されており、周堀の位置から直径14～14.5mの円墳と推定される。周堀は、東側から北にかけてめぐり、南側は部分的に不明瞭な落ち込みを残す程度であった。2号古墳と同様に南側に開口するものか。規模は、上幅2～3m、深さ約50cmを測り、断面は墳丘側が急な立ち上がりを示すU字形で、東南側にかけて一段と深くなる。覆土の上位～中位には、径20cmを越す角閃石安山岩の転石を殆どとする崩落層があり、葺石と推定される。確認された古墳のうち、5号を除く3基が河原石を葺石としているのに対して、この古墳が角閃石安山岩を使用している点が大きな特徴である。遺物は、周堀内に47、48号住居跡、8号井戸等が重複し、新旧混在しての混入遺物が多い。その中に個体数は少ないが、古墳に伴うものとして円筒埴輪、須恵器瓶がある。古墳の時期は、周堀の重複関係では3号古墳より新しく、出土遺物から6世紀後半～7世紀初頭とする。 (女屋)



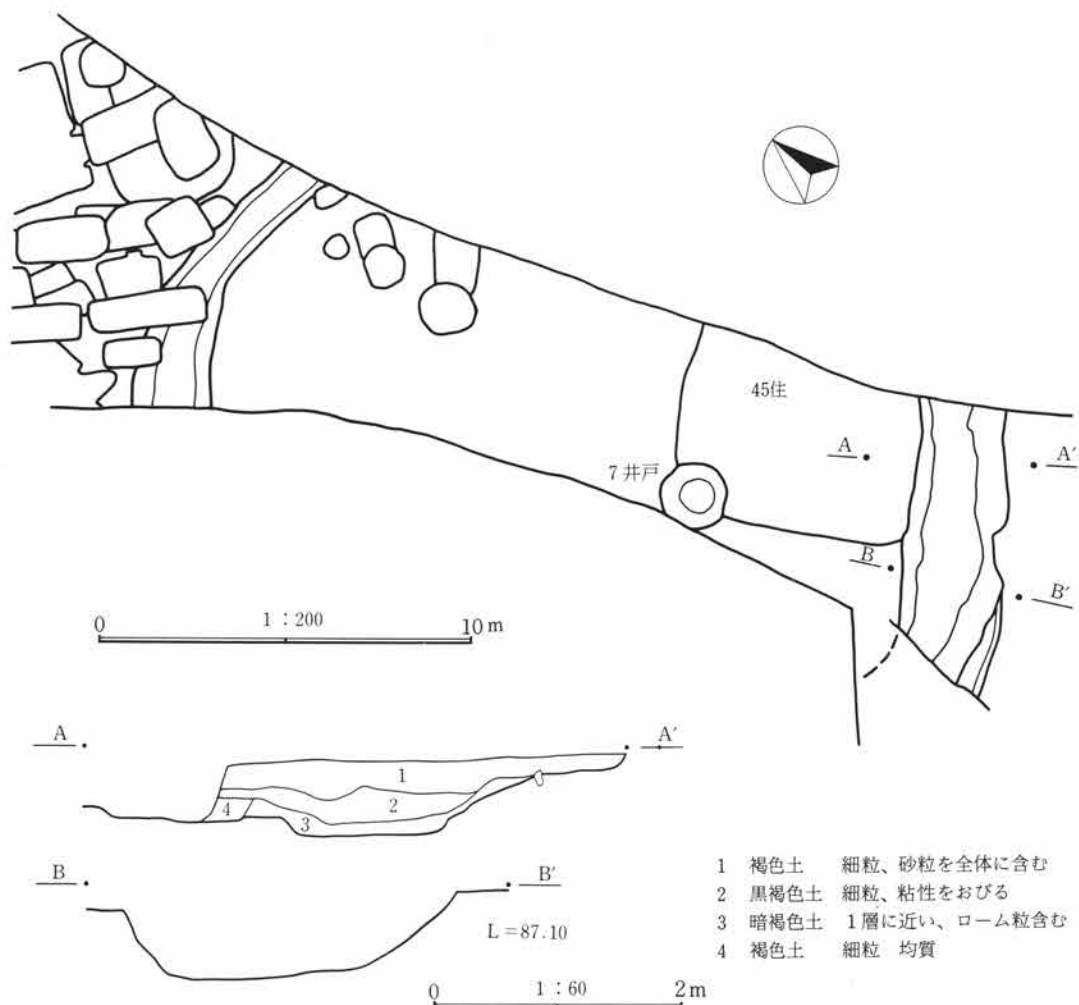
第174図 7区4号古墳遺物図

第31表 7区4号古墳出土遺物観察表

(第174図、図版 77)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
1810	瓶 須恵器	口-8.6、頸-4.8、 高-(9.3) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含むが、細密。黒色斑文あり。還元、硬質。灰黒色	肩部から体部、丸く張りをもつ。フラスコ形か、提瓶か。体部内面、同心円のタタキ目あり。内外、ロクロナデ調整。体部側端部に回転利用のカキ目あり。口頸部取付け、体部中央か。口縁部外稜。端部にも稜をもつ	西南周堀出土 自然軸あり
1811	瓶 須恵器	胴-[15.0]、高-(8.8) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、白色砂粒を含むが細密。還元、硬質。灰色	体部、中位で張りをもち、ソロバン玉状を呈する。二本の沈線めぐる、ロクロナデ調整。底部、ヘラケズリ	南周堀出土 自然軸あり
1812	瓶 須恵器	頸-3.9、高-(3.6) ○小片	砂粒を多く含むが、細。還元、硬質。灰色	頸部のみ。口縁部を欠くが、単口縁と思われる。頸部、取付け部、体部成型時の蓋痕跡あり	南周堀出土 自然軸あり

番号	器種	部位	胎土・焼成・色調	口径・胴径・底径・器高	調整技法	備考
1813	形象物	頭髪部	砂粒、石英を含む。酸化、軟質。橙色	端部巾-12.0、厚-2.6	分胴形の島田髷、頭頂部粘土紐貼付し、結び紐を表現する。ナデ調整	東北周堀出土 赤色塗彩あり
1814	円筒	基底部	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。赤褐色	底-[14.0]、高-(10.4)、厚-1.6	外面、タテハケ目、10~11本。内面、タテハケ目調整	周堀出土

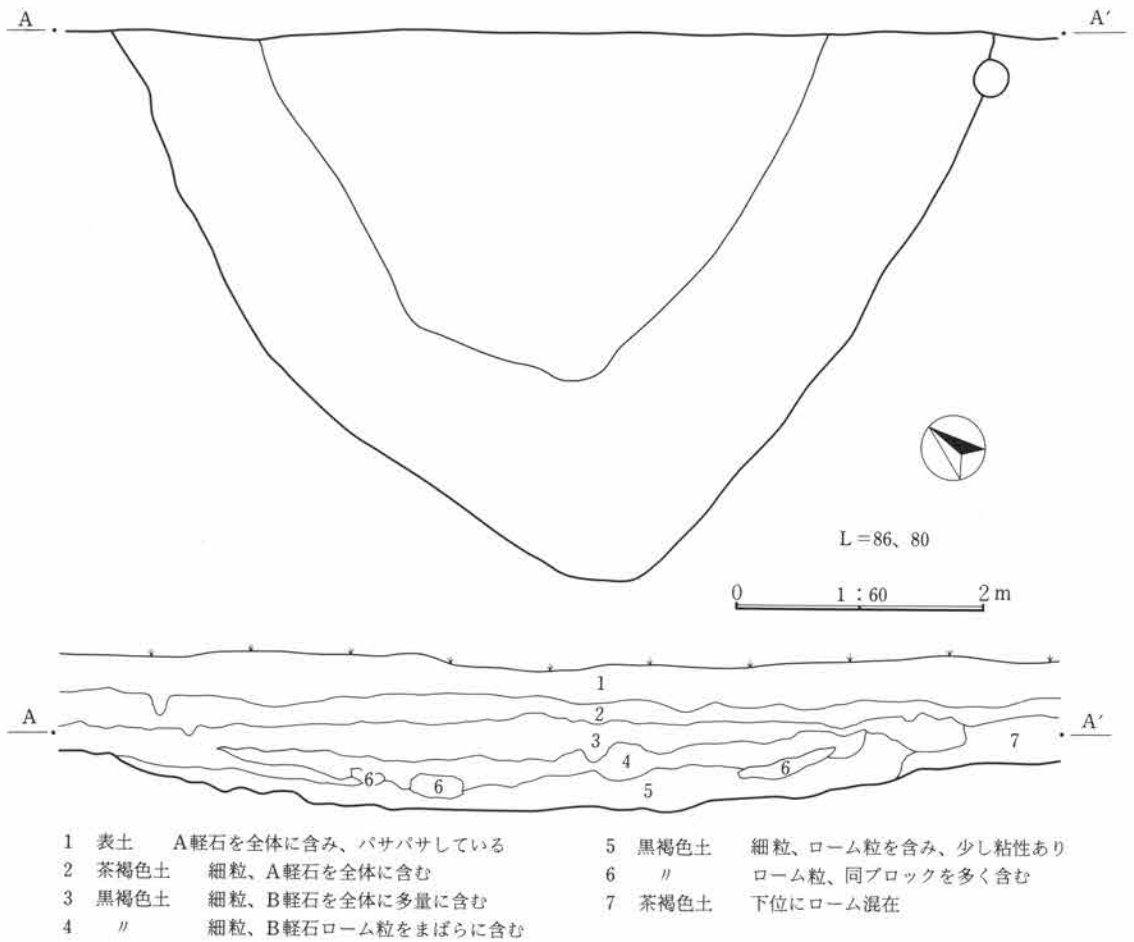


第175図 7区5号古墳遺構図

7区5号古墳 (第175図)

この古墳は、2号古墳と古墳綜覧佐野村42号古墳とにはさまれ、南に4号古墳が隣接する。墳丘は、2号古墳と同様に上面に浅間山A軽石で埋没した溝が横断するところから、近世後期以前には削平を受けている。調査で確認されたのは、南北の周堀の一部で、中央部をベルト状に横切っている。周堀位置から、墳丘規模は直径約19mの円墳と推定される。周堀は、上幅1.4～2m、南側での深さ約70cmで、断面はU字形を呈し、北側は浅くなり、上面には時期不明の長方形土坑群が重複する。葺石は、確認をした周堀内から河原石等が殆ど見られず、本来は無かったものか。遺物は、墳丘下にある45号住居跡からの混入が多く、周堀内でこれらに混在して円筒埴輪の破片が少量ある程度で、出土位置を特定できるものはない。主体部の位置及び形状も不明である。古墳の時期は、不明である。

(女屋)



第176図 7区6号古墳遺構図

7区6号古墳 (第176図)

この古墳は、1号古墳の北側で周堀の一部だけが確認されたものである。周辺には多くのピットがあり、8号、9号掘立柱建物跡と重複している。堀方の形状からして調査区外側の北側に大きく広がるものと推定されるが、現状では全く削平されていて周堀を残すのみである。

周堀の規模は、上幅6~7m、確認面のロームからの深さ約60cm、底面は平坦で、緩やかに立ち上がり中段を持つ。覆土は自然埋没の状態を示し、確認面付近のレベルに浅間山B軽石の二次堆積層が約20cmの厚さで見られた。遺物は底面に近くに葺石らしい河原石や破片状態の円筒埴輪が流れ込みの状態である。遺構の時期は、埴輪の存在等から隣接する1号古墳等と同様な6世紀後半頃のもののか。

(女屋)

3 ま と め

(1) 縄文時代

1 下佐野遺跡II地区の遺構について

II地区では、住居跡9軒、土壇21基を確認している。その分布は、4区11号土壇を南限とするが、4、5区は稀薄で、中心は7区にある。さらに8区及び北西の15地区A区へと続いている。遺構は、上面を削平され、古墳時代以降の遺構と重複し、7区にある古墳を始めとする遺構の覆土中に多量に含まれる遺物と考え合えると、より多くの遺構が存在した可能性が高い。

遺物で最も古いものは、前期黒浜式、諸磯b式、同C式土器が遺構外で少量出土している。

中期では、中葉の勝坂III式期の住居跡1軒と土壇3基が7区にあるが、散在する。後半になると、加曽利E II式から同E IV式期にわたる継続的な集落が営まれている。加曽利E II式期では、7区に住居跡1軒があり、他に遺構も遺物もないが、15地区A区にこの時期の遺構が確認されていることから分布は北西に広がると推定される。

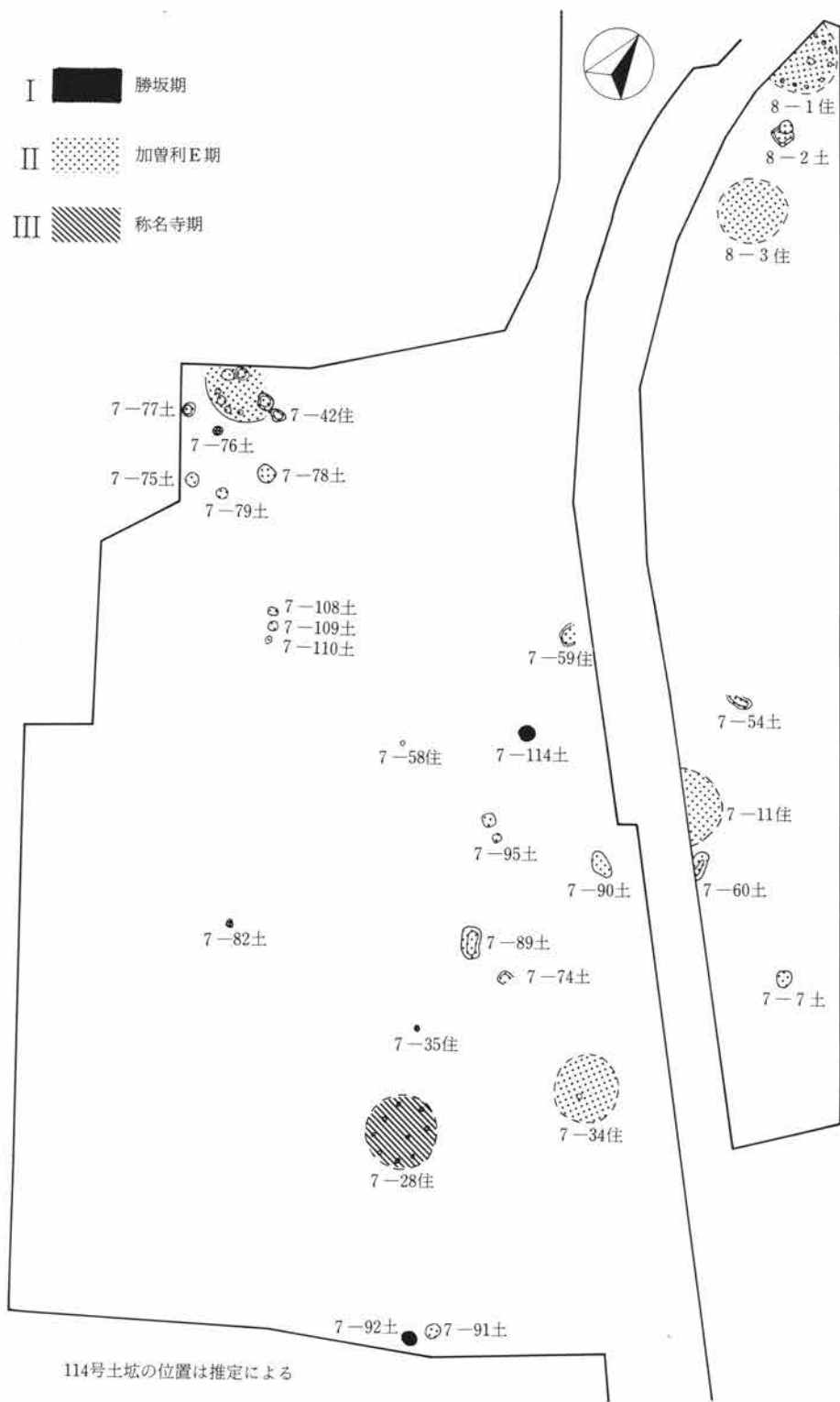
加曽利E III式は、本遺跡の最盛期で、7区を中心に住居跡5軒と土壇7基があり、遺構外の遺物も多い。その分布は、7区で西から北へと弧状にあり、北西へと続くことから烏川の崖線際に沿った半円形をなすと推定される。住居跡は弧状の外側に、内側には胴部下半を欠く深鉢形土器を使用した倒位埋甕を伴った7区108、109、110号土壇がある。弧の半径は約100mの規模か。

加曽利E IV式期になると、同E III式期と同様な傾向がうかがえるが、住居跡1軒、土壇3基と遺構数も少なく、7区42号住居跡、77号土壇を除き散在する。半円状の中央部付近に位置する7区42号住居跡（No. 1、3号土壇）や77号土壇からは、石棒、異型土器がセットで出土しており、祭祀の様相を持った遺構とも推定される。

後期は、遺物としては称名寺I式から加曽利B式土器まで出土しているが、称名寺II式期の住居跡1軒だけで、遺構数が減少する。遺物量からは称名寺式期までがピークか。

以上が時期別に見た遺構の特徴だが、次の点が指摘できる。

- (1) 全体の遺構分布は、烏川の崖線際に依拠した半径100m位の弧状をえがいて推移すること。外側に帯状にめぐる住居跡群、内側に土壇、埋甕を主とした遺構が集中する構造か。
- (2) 弧状分布は一集落とらえられ、前期と後期の様相は不明だが、中期中葉から後半にかけて中心を持つ、継続的なものであることが推定できる。
- (3) 土壇は、埋甕を伴うものと、石棒と異型土器をセットで出土したものがあり、墓と祭祀の様相とが混在したものか。



第177図 縄文時代時期別遺構分布図

2 遺構の時期及び出土土器について

II地区における縄文時代の遺構として住居跡9軒、土壇21基が検出され、遺構の時期は中期中葉から後期前半にわたっており、中期後半が中心である。埋甕や床面直上など明確な伴出土器によって型式別に時期区分し、概要を把らえておきたい。型式別時期区分にあたっては神奈川考古同人（1980）に準じて行った。

勝坂III式期

7区35号住居跡、82・92・114号土壇が該期に属する。1270～1272は114号土壇から一括出土した土器で共伴資料として考えられる（第31図）。1270・1271は勝坂III式、1272は勝坂III式から加曾利E I式の最も古い時期に比定され、勝坂式から加曾利E I式への過渡期併行であると思われる。

加曾利E II式期

7区11号住居跡が該期に属する。口縁部・頸部・胴部の三帯に文様帯を形成し、頸部無文帯を有する。口縁部文様は渦巻文が主であり、地文に撚糸文・縄文を施す。1100は胴上半部欠損しているが、胴下半部に撚糸文を施文している。

加曾利E III式期

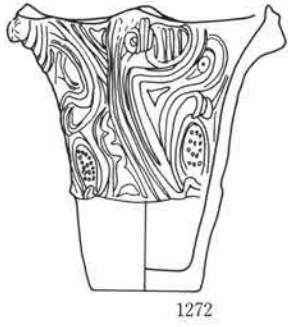
7区34・58・59、8区1・3号住居跡5軒と7区60・75・89・108・109・110号土壇7基が該期に属し、当遺跡の最盛期である。口縁部と胴部の文様帯に形成され頸部無文帯が消失し、口縁部文様帯は区画化され隆帯から沈線へ簡略化される。胴部文様帯は磨消文帯を有し、アーチ状・蕨手状の懸垂文を施文する。7区58号住居跡1155は、胴部に磨消文帯を有し、蕨手状の懸垂文を施しているが、頸部無文帯を残す事からIII式期でも古い段階に位置づけられよう。また、8区1号住居跡1163は、埋甕炉で胴部上半と底部を欠損する深鉢形土器で、隆帯により懸垂文で区画し、区画内に指なでを施し、中部地方の曾利系に比定される。この時期の特徴である連弧文土器群の伴出がないのも当遺跡の特色と言えよう。

加曾利E IV式期

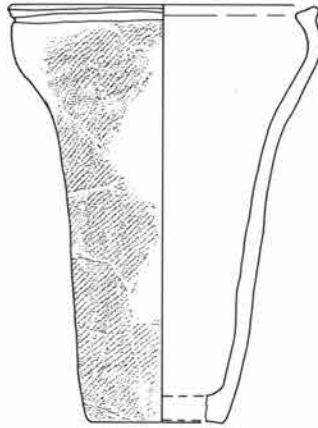
7区42号住居跡1軒と77・90・91号土壇3基が該期に属する。口縁部文様帯が消失し、磨消縄文を区画する沈線の細線化・曲線状化及び微隆帯や沈線による区画文が主体となる。1218～1221は77号土壇から一括出土した土器である。地文を持つ微隆起線や沈線により文様区画するものと、地文を持たず断面三角形の微隆起線で渦巻文を施文するものとに分かれ、前者である1218は橋状把手をもつ小型異形土器。後者の1219は瓢箪形注口土器であり、また、42号住居跡（No.1土壇内出土）1145は有孔鏝付注口土器片である。共に赤色塗彩を施しており、石棒を共伴している事から特異な遺構であり、遺物と言えよう。

称名寺II式期

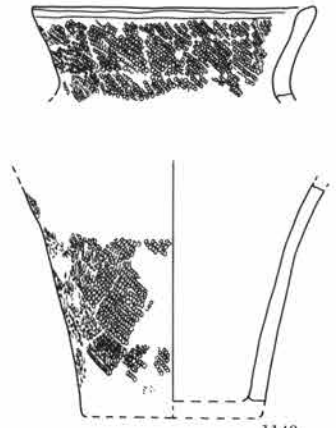
7区28号住居跡が該期に属する。文様は簡略化が進み、地文を持たず沈線によるJ字文を施文し、この時期の特徴を示している。



1272

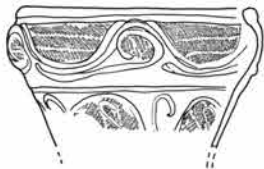


1271

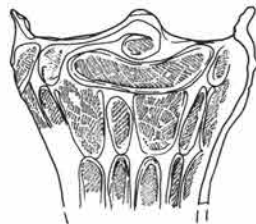


1143

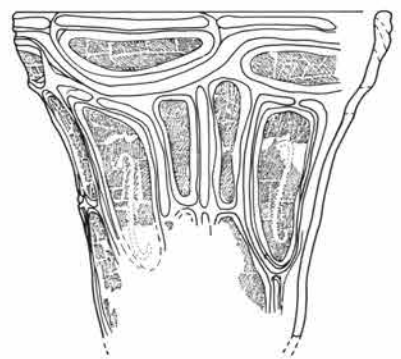
勝坂Ⅲ式



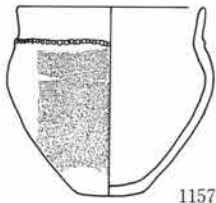
1155



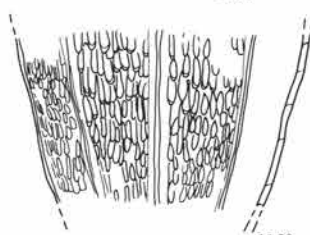
1269



1264

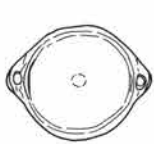


1157



1163

加曾利EⅡ・Ⅲ式



1218



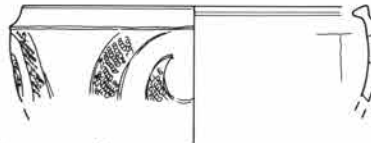
1219



1145



1221



1220

加曾利EⅣ式



1144



1111

称名寺式

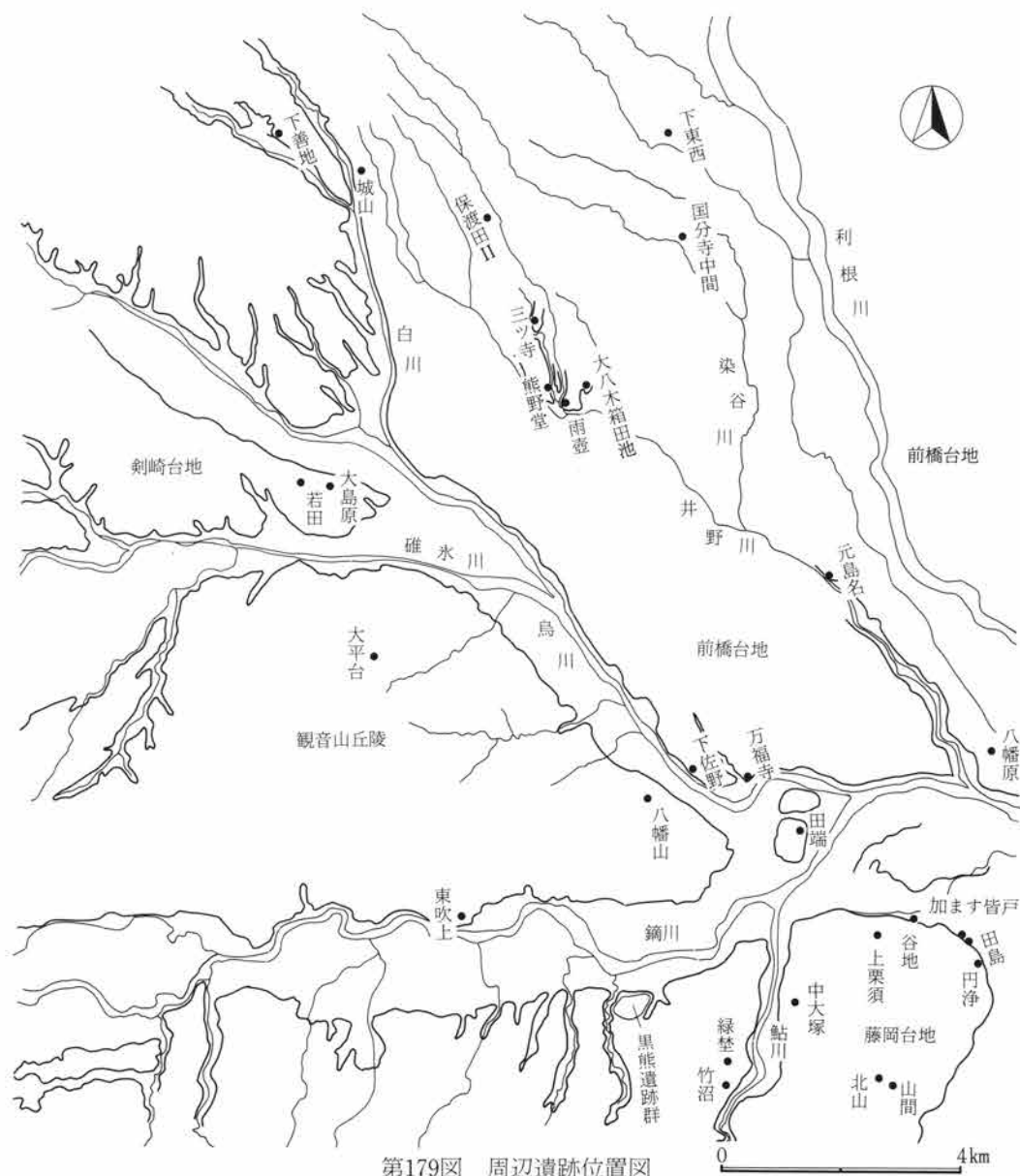
第178図 縄文土器集成図

3 下佐野遺跡と周辺の遺跡

県内での縄文時代の遺跡調査例は増加している。この10年間の動きを見ても、三原田遺跡を筆頭に整理、報告された遺跡は多い。県中央部に位置する赤城、榛名の両火山は周囲に、起伏に富んだ台地を発達させ、関越自動車道による調査等で集落規模を持つ遺跡が少なくない。これに対して、本遺跡のある県西部での調査は、住居跡数軒程度が大半で、研究史の上からは地域の概観をのべるにとどまっている。調査例のいくつかを拾うと、昭和47年から4次にわたる高崎市大平^{註1}台遺跡、同46年の高崎市若田遺跡^{註2}、最近では同56年から3次にわたる吉井町黒熊遺跡群^{註3}がある。このほか、本遺跡のある前橋台地及び以西では、住居跡数軒程度の調査が10遺跡ある。この項では、本遺跡の位置付けを周辺遺跡との関連の中でのべてみたい。

本遺跡は、烏川に依拠した中期全般にわたる遺跡である。安定した洪積台地である前橋台地に立地する。本遺跡と时期的、立地の点で対比し得る遺跡として、観音山丘陵上の大平台遺跡がある。ここは、碓氷川に面した標高230～240m付近の丘陵中に占地し、中期初頭五領ヶ台式から中期後半加曾利E式全般にわたる住居跡42軒、堅穴状遺構2基、土壇138基等が調査され、本遺跡周辺で最もまとまった資料がある。遺構の時期は、加曾利E I式から同E II式が中心で、集落としての規模も北へと広がる内容を持つ。遺物は、土器、石器のほかに石錘、耳栓、硬玉製大珠、滑石製飾石、土偶、異型土製品等が特異なものとして含まれる。土器の中には、中部高地の井戸尻、曾利式の影響が見られ、石器には鍋川、鮎川水系の緑泥片岩が多用される等の特徴があげられる。この土器に見る中部高地の影響や、特徴的石材の使用は、本遺跡とも共通し、県西部の遺跡の特徴の一つか。しかし、中部高地との関係は、前期の遺跡の中に神之木、有尾式土器の存在が明らかになりつつあり、中期に限定するものではない。^{註4}

本遺跡の次の特徴として立地がある。周辺遺跡の多くは、若田遺跡、黒熊遺跡群を例にとっても、河川には直接面せず、比高差のある洪積台地上にある。前橋台地を開析する井野川流域を見ても、榛名山東南麓の傾斜変換点とされる標高120m付近の低台地先端近くに遺跡^{註5}があり、現地形で平坦に見えながら遺跡占地に一つの傾向がうかがえる。本遺跡は直接河川に面し、この傾向から外れるが、藤岡台地及び周辺にも例外がある。敷石住居跡のある中大塚遺跡^{註6}は、台地中程に位置するが、上栗須遺跡^{註7}は先端部に、後・晩期の遺跡である谷地に至っては沖積底地に、埋設土器を伴っている。鍋川をはさんだ微高地にある田端遺跡^{註8}からも敷石住居跡が確認され、後・晩期頃に至って、安定した洪積台地上のほかに、河川沿いの低台地先端や微高地にまで遺跡が進出しているのがわかる。井野川流域の傾斜変換点以南の遺跡数の少なさ、弥生時代中期以降の遺跡により埋め尽されるが、後・晩期の動きを見ると本遺跡が中間的な位置を占めるものか。集落の構造でも、東方約1kmにある同時期頃の倉賀野万福寺遺跡^{註9}を考え合せると、半円状乃至帯状のあり方が推定でき、洪積台地上に面的に広がる大平台、若田遺跡等と、集落の構造、立地の点で対比が可能である。



第179図 周辺遺跡位置図

- 註1 群馬県教育委員会 『大平台遺跡発掘調査概報』 1974
 2 高崎市教育委員会 『若田遺跡』 『高崎市の文化財』 1972
 3 吉井町教育委員会 『黒熊遺跡群発掘調査報告書3』 1983
 4 秋池 武 新井順二 『群馬県における神之木式・有尾式土器について』 『信濃第35巻4号』 1983
 5 中・後期の住居跡がある雨壺、隣接して大八木箱田池等の遺跡がある。
 6 藤岡市教育委員会 『藤岡市中大塚縄文敷石遺構概報』 1974
 7 群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上栗須遺跡』 『年報3』 1984
 8 〃 〃 『田端遺跡』 『年報2』 1983
 9 高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会 『倉賀野万福寺遺跡』 1983

(2) 古墳時代

1 前期～後期の遺構

古墳時代の遺構は、本遺跡を最も特徴付けるものである。昭和9年編さんの『上毛古墳綜覧』には、佐野地区だけで約80基の古墳が登載され、佐野古墳群の名もある。また、東方約1kmの粕沢川左岸には、浅間山古墳、大鶴巻古墳といった、県内を代表する5世紀前半代の大型前方後円墳があり、これら古墳の変遷に関する論文^{註1}も多い。ここでは、古墳時代の遺構が密集するI地区が未整理であるため、II地区の遺構に関して分布傾向を時期別にあげる。

I、IIの調査区は、上記の佐野古墳群を南北に縦断する位置にあり、II地区だけでも前期から後期に及ぶ竪穴住居跡25軒(第32表)を主に、方形周溝墓5基、古墳6基、土塚2基が確認されている。I地区を合せた遺構の概数は、竪穴住居跡約70軒、方形周溝墓約22基、古墳36基にものほり、前期の竪穴住居跡や方形周溝墓は古墳群形成前段階の資料であり、古墳の殆どは、『上毛古墳綜覧』の登載漏れで、分布上の空白を補うものである。

遺構の分布する範囲は、II地区の5区南半を南限とし、I地区全体に及ぶ南北約1.3kmの崖線際に沿った帯状と推定されるが、古墳分布はこの範囲を上回り、時期が下るに従って漸次東南方向へ拡大しているものと考えられる。地形上の特徴としては、この帯状の範囲が崖線際の微高地状部分に相当し、東の粕沢川まで生産域と考えられる一段低い平坦地を持つ。II地区の遺構は、全体の中での南縁部の一画を形成し、7区のあり方は崖線際までの遺構分布を唯一見られる所である。以下、7区の遺構を基に時期別に動きを見ていく。

前期は、竪穴住居、玉作工房、方形周溝墓の三者が小群をもって構成され、互いに隣接しつつも重複をさけ、半ば一線を画す様な占地をしている。I地区A区の竪穴住居、方形周溝墓とは大きく一線を画し、6区との間にもその傾向が見られる。方形周溝墓は、ほぼ主軸を同じくして東西に並列し、3号、1号、2号、5号の構築順序が考えられる。5号に見る規模の縮小と占地のあり方は、墓域の限定された、一列の墓を感じさせる。4号は、3号に対峙する規模を持ち、別の一群か。この各遺構が小群をもって構成されることを傍証するものに玉作工房跡がある。合計7軒あるが、6区と7区とで地点を異にし、7区については後述する様に2～3軒を単位として3時期に細分される。そのあり方は、集落内専業工房で遺跡外への供給対象を持つのであろう。これら遺構の時期は、台付甕を始めとする土器の様相から、4世紀後半から5世紀初頭頃に求められ、弥生時代の伝統を欠いた、新たな集落として位置付けられる。

前期の小群単位で調査区全体に及ぶ分布のあり方に対して、中、後期になると5区北半付近に場を限定して竪穴住居が営まれる。調査区が遺構分布の中心を外れた可能性もあるが、全体の遺構分布の南縁部を形成しつつも、前段階とだけでなく、中期、後期各々が時的に半ば断絶した点の特徴である。この背景には、前期での竪穴住居群と方形周溝墓群とが小群をもって構成され、居住域と墓域とが隣接するというあり方が、中、後期になると占地が限定され、各々が時的に

第6章 検出された遺構と遺物

第32表 古墳時代竪穴住居跡一覧表

(1) 玉作工房跡

遺構番号	形状	法量(cm)	方位	炉、カマド	主柱穴	備考
6区9号	方形	545 × 548 × 26	N-58'-W	中央、地床炉	4	東南隅に工作用ピット 間仕切り内に複数工作用ピット 壁際に連結の工作用ピット 新旧2基の工作用ピット 西南隅に工作用ピット
7区22号	台形	615 × 540 × 4	N-3'-E	焼土分布	4	
7区23号	〃	665 × 570 × 8	N-9'-E	焼土3ヶ所	4	
7区24号	隅丸方形	709 × 686 × 50	N-0'-E	中央、地床炉	4	
7区30号	長方形	790 × 521 × 22	N-20'-W	西北、地床炉	6か	
7区41号	隅丸長方形	813 × 668 × 41	N-31'-W	中央、地床炉	4	
7区51号	方形	(600) × 600 × 24	N-19'-E	不明	4	

(2) 前期住居跡

6区20号	台形	460 × [485] × 10	N-46'-W	焼土分布	4	大型壺棺、墓に転用か 周溝全周、入口状施設か 3号古墳々丘下 3号古墳々丘下
6区22号	方形	460 × 476 × 38	N-47'-W	中央西、地床炉	4	
7区25号	〃	470 × 396 × 30	N-66'-E	中央北、地床炉	4	
7区45号	隅丸方形	(400) × [650] × 28	N-60'-E	中央北、地床炉	4か	
7区48号	〃	690 × 705 × 42	N-60'-E	中央東、地床炉	4	
7区56号	方形	621 × 625 × 40	N-52'-E	中央に焼土	4	
7区57号	〃	300 × [300] × 26	N-40'-W	不明	不明	

(3) 中期住居跡

5区7C	方形	630 × 653 × 32	N-25'-W	不明	4	石製模造品(円板)出土
5区69号	〃	520 × (250) × 30	N-64'-E	不明	4か	

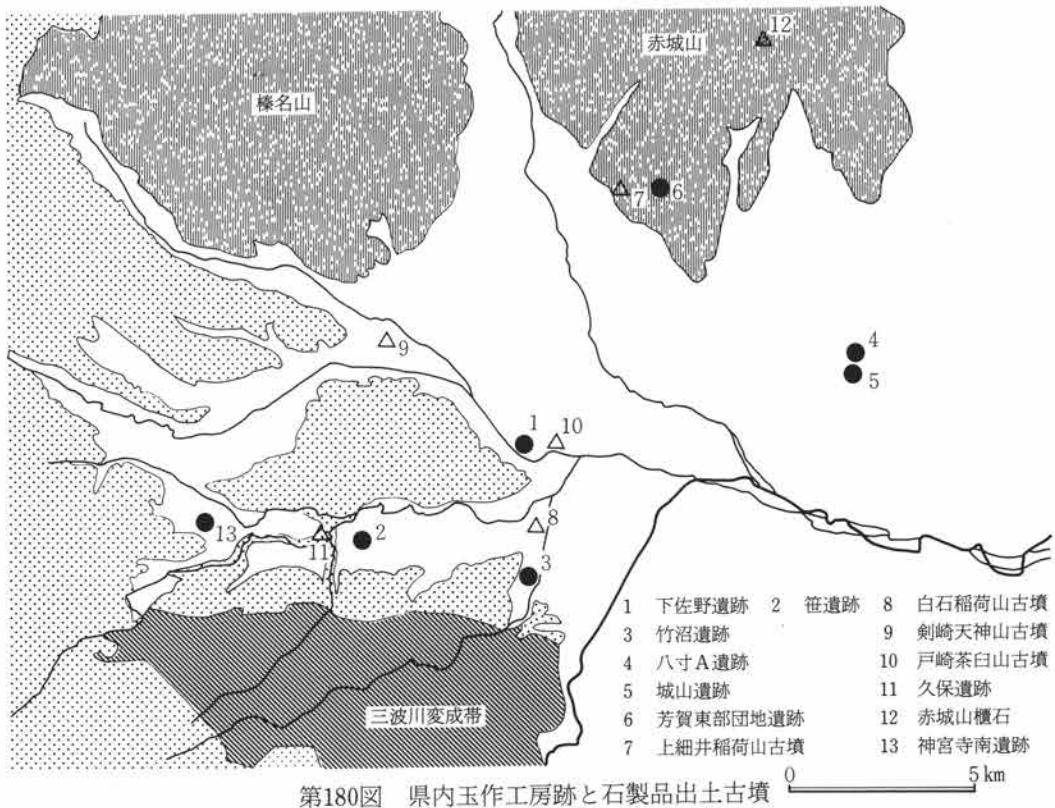
(4) 後期住居跡

5区2号	方形	530 × (420) × 21	E-13'-S	不明	4	須恵器大甕、土器投棄か 角閃石安山岩石組カマド	
5区4号	〃	530 × 505 × 45	E-43'-S	不明			
5区5B	〃	[500] × [380]	E-22'-S	不明			
5区5C	〃	[600] × [560]	E-86'-S	東辺中央、石組			
5区57号	〃	538 × 515 × 35	N-55'-E	東辺中央、石組			不明
5区58号	〃	[625] × 400 × 32	E-50'-S	東辺中央、石組			2
5区70号	〃	(150) × 295 × 16	N-43'-E	不明			不明
6区7号	隅丸方形	542 × 544 × 30	E-52'-S	東辺北、石組	4		
6区18号	方形	326 × (116) × 25	E-40'-S	東辺か	不明		

断絶するという特徴からして、墓域の拡大と古墳の築造が本格化したことが考えられる。また、その一方で、前期の遺構が粕沢川までの平坦地を生産域としていたのに対して、中期の段階になると、大鶴巻古墳、浅間山古墳の築造に象徴される様に、生産域が台地内側にまで拡大をし、新たな段階に入ったことを意味しよう。本遺跡でも5世紀前半に比定される長者屋敷天王山古墳があり、高塚墳墓の築造が本格化する。II地区の古墳は、前期の遺構を削平、重複している点で墓域の変質を示すものであろうが、円筒埴輪等の有無や占地のあり方からすると6世紀後半から7世紀前半にかけての群集墳の性格を持つか。

2 玉作工房跡

県内に於ける玉作工房跡は、昭和8年に伊勢崎市八寸城山遺跡、邑楽町篠塚八丁遺跡が製造跡の可能性を持つとして概要報告され、昭和36年に甘楽町笹遺跡での工房跡の調査、同39、41年には工房跡の報告と、その研究史は古い。笹遺跡以後もいくつかの遺跡が調査され、現在、工房跡としては7遺跡が集成される。その数は多くはないが、5世紀前半から6世紀前半の古墳には、白石稻荷山古墳、上細井稻荷山古墳、築瀬二子塚古墳に代表される様に、石製模造品が多く副葬されること、赤城山榎石や松井田町入山峠等の祭祀遺跡と古墳時代の集落跡からの滑石製模造品の出土量も多く、今後も工房跡の存在が十分に暗示される。



第6章 検出された遺構と遺物

集成をした7遺跡は、笹遺跡を除いて全容が発表されておらず、同列に評価できないが、その特徴として、①弥生時代後期を最古とし、古墳時代を通じたものであること。②遺跡の分布は、原石の産地と推定される「三波川変成帯」^{註6}の周縁に特定されず、むしろ遺跡数が増加すると予想される、古墳時代前期の段階から芳賀東部団地遺跡で示される様に、遠隔地での生産が開始されている。③成品には、勾玉、管玉、白玉、紡錘車等があり、藤岡市竹沼遺跡では白玉の製作工程が復原されている。本遺跡では7軒の工房跡が確認されているが、上記の特徴と比較しながら、工房内のあり方、製作工程と成品の特徴、工房群の推定と時期についてのべる。

県内の玉作工房跡（第180図）

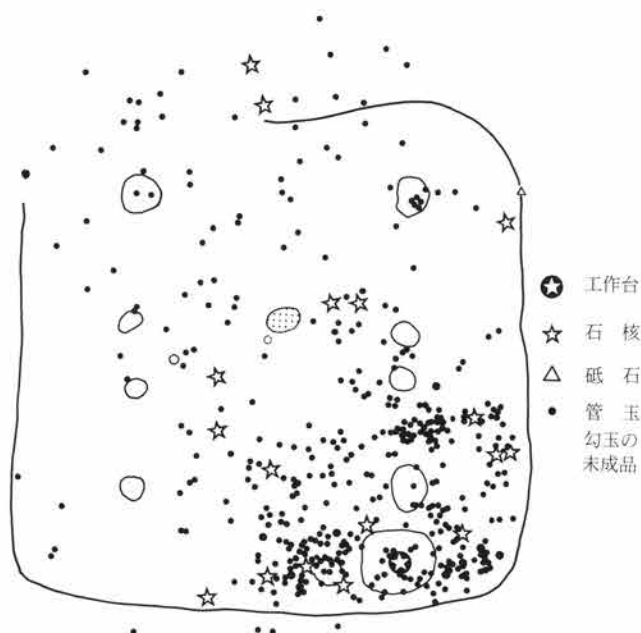
- | | | |
|---|---------------------------------|-----------------------|
| 1 | 下佐野遺跡 高崎市下佐野町長者屋敷 | 古墳時代前期7軒（管玉、勾玉、琴柱状品） |
| 2 | 笹遺跡 甘楽郡甘楽町大字小川字笹 | 弥生後期1軒、古墳中期1軒（勾玉、紡錘車） |
| 3 | 竹沼遺跡 藤岡市緑埜、西平井 ^{註7} | 古墳時代後期9軒（白玉、紡錘車） |
| 4 | 八寸A遺跡 佐波郡東村東小保方 ^{註8} | 〃 〃 2軒（白玉） |
| 5 | 八寸城山遺跡 伊勢崎市下植木町字城山 | 古墳時代（子持勾玉か） |
| 6 | 芳賀東部団地遺跡 前橋市鳥取町 ^{註9} | 古墳時代前期1軒（管玉） |
| 7 | 神宮寺南遺跡 富岡市宇田字恵下原 ^{註10} | 古墳時代後期か（剣形品、白玉か） |

工房内のあり方

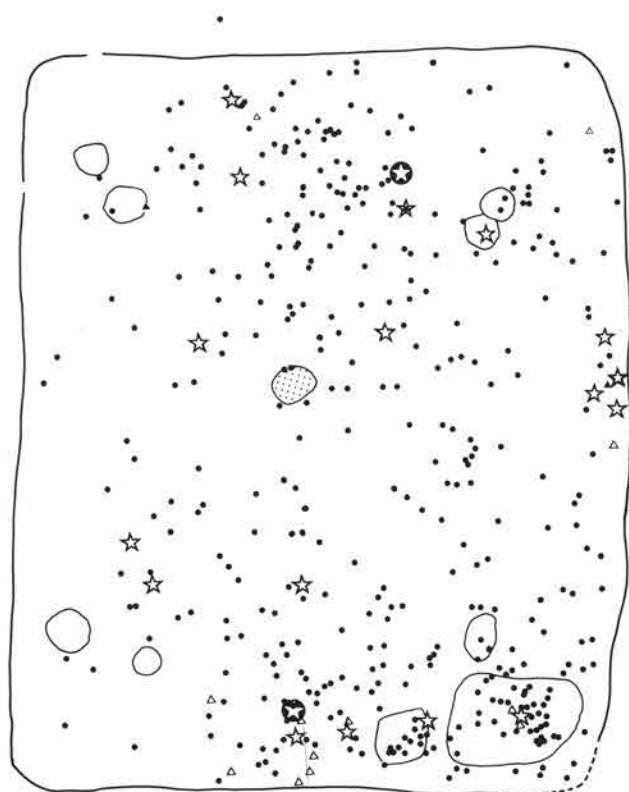
工房跡は、6区で1軒、7区で6軒の計7軒がある。平面形と規模等は第32表、遺物内訳は第33表に示したが、工房内の特徴について遺存状態の良好な7区24号、41号を代表例に記す。

平面形や規模は、長方形の7区30号を除いて、一般の住居と差のない一辺約5mの隅丸に近い方形を呈する。いずれも炉を備えるが、土器セットは貧弱で專業工房のあり方を示している。工作用の施設としては方形のピットが一般的で、東南や西南の隅にあり、複数例や間仕切りを伴うものの等の特徴があるが、7区30号だけ円形で壁際に並列している。いずれも遺物分布上の中心にあり、単数から間仕切り内複数のピットへと発展、完備したことをうかがわせ、工程別の機能分化と工人数を反映した一面を合せ持つ。

分布上の特徴は、6区9号、7区41号に代表させて二分類した。6区9号（第181図）は、工作用ピット周囲に分割以上の工程品と、主要な道具類が集中する機能集約型で7区30号、51号を類例とする。この型では、9号周辺グリッドで石核が散在していること、30号で大形剥片が少ないこと等から、屋外で荒割、調整工程、工房内で分割以降が行われた可能性を持つ。7区41号（第182図）は、床面全体で遺物が出土したが、炉を境界にして分布が二分され、各々に工作台を持つ機能分散型で7区22号、24号が類例にある。工程上の分布を厳密には分析していないが、北側で荒割、調整、南側で形割、穿孔等が行われたと推測され、一工房内で全ての工程が完結していた



第181図 6区9号住居跡未成品分布図(1/80)



第182図 7区41号住居跡未成品分布図(1/80)

か。24号は、床面だけで約2万点の遺物があり、その出土状態と道具組成からして、間仕切りされた西南隅工作用施設に機能が集約され、地点を異にする3点の工作台に残る痕跡や礫器の分布、北辺際を主とする調整剥片、分割品の集中分布等から、荒割・調整、分割・形割、研磨から仕上げの大別三工程が分業としてなされた形態を推定させる。工房内の空間利用も全体に広がり、上記二形態を合せた複合型ともできる。また、全体の様相としては、単数工作用ピットの集約型から分散型へ、さらに間仕切りを伴う複合型へという発展とできるか。

次に道具の組成は、台石、工作台、敲石、砥石、金属器がある。工房毎に個体差はあるが、製作が完結している点からすると基本的組成として大過ない。7区24号では、工作台3点、敲石5点、砥石約30個体があり、工作台は台石、敲打用、研磨用に対応する痕跡を持つ。6区9号の1点で敲打、研磨、台石を兼ねたものと対称的である。敲石は、長さ10~20cmの棒状河原石を用い、分割して長さを調整したものもある。砥石は、砂岩と片岩系統に素材が二分され、粗砥と中砥に相当か。また、形

第6章 検出された遺構と遺物

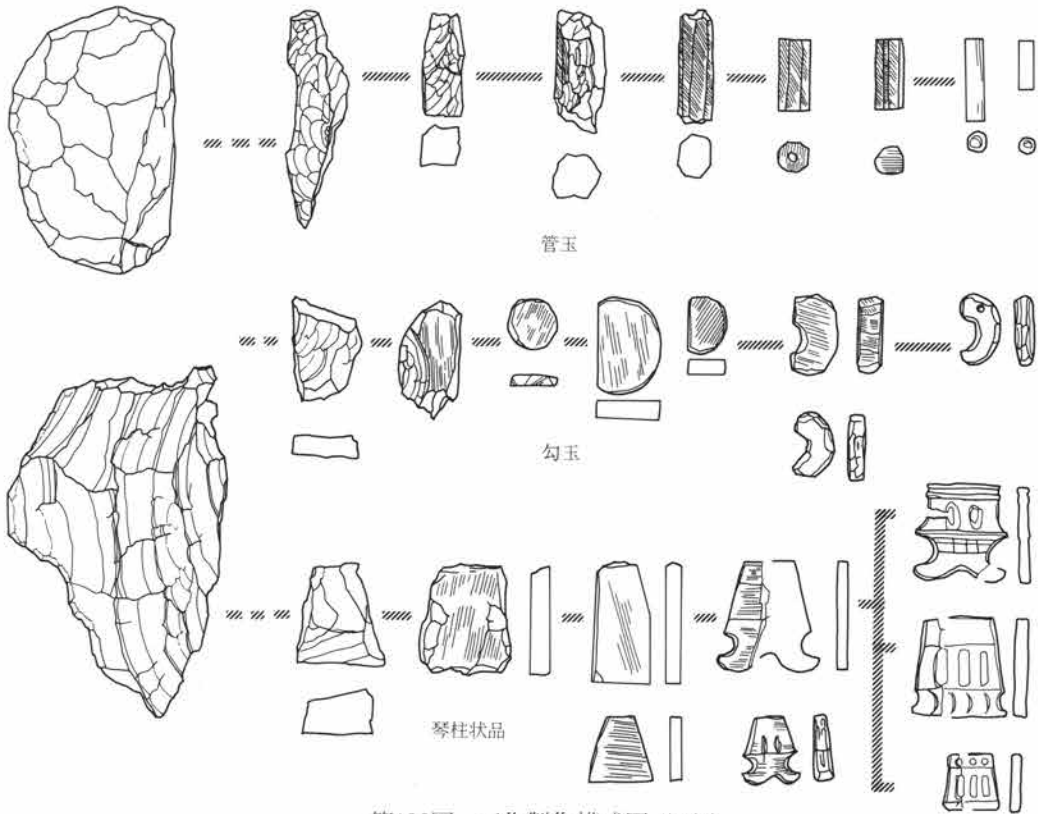
態上でも、半月形、蒲鉾形等の差があり、手持ち砥が主流をなす。一点のみ24号での置砥があるが、金属器研磨用か。金属器は出土例がないが、石核や剥片に残る荒割、調整の痕跡、管玉の分割や形割工程品に残る痕跡から、刀幅約2cmの鑿状の工具が多用され、穿孔具には錐がある。

土器類は、個体数が少なく、7区24号の台付甕、甑、埴のセットが例外的である。6区9号と24号で手捏土器が1～2個体伴出している。

第33表 工房跡別工程集計表

	6区9号	7区22号	7区23号	7区24号	7区30号	7区41号	7区51号	7区3方周	7区4方周
管玉 仕上	59	3	2	63	20	17	1		
穿孔	881	19	8	1620	180	239	15	3	
研磨	156	16	6	410	77	120	12		
形割	327	157	135	4123	888	932	544	70	
勾玉 仕上	1	1				3			
穿孔	5	2		43	2	3	2		
C字形	1	2	2	47	2	13	1		
半月形	16		1	52	1	19	10	1	
円板	11			2	1	6	1		
研磨		1		76	2	17			
琴柱状品	2	1		17	15	104	72	7	
白玉、囊玉				5		5			
石核	17	4	2	53		17	8	6	2
剥片	1280	85	36	1649	366	434	337	20	
チップ	約 8800	255	395	約 61750	約 4974	約 4800	1399	52	2
工作台	1		1	3		2	1		
砥石	1	3	1	58	1	12	4		
礫器			1	5	1	6			
土製品	1			2					
その他		1		5		1		3	
合計	約 11559	550	590	約 70000	約 6530	約 6750	2407	162	4

遺物集計は、確認面から床面下までの遺物を対象としたが、分布図作成は、床面上約10cmから床面下までを基準とした。



第183図 玉作製作模式図 (1/2)

製作工程 (第183図)

製作上の特徴には、全体に共通することとして3点がある。①主要な成品として管玉、勾玉、琴柱状品の3器種があり、工房毎を単位とした原石搬入から成品化まで一貫した生産であること。②主要3成品の中では、管玉が主導的位置を占め、残る2器種はその調整剝片を素材にし、一定量の原石から効率的に最大量の成品化を意図したものである。③7軒の工房跡が同一の技法により、管玉、勾玉等の玉類を継続的に生産していることである。

原石は、「三波川変成帯」に産地が求められる緑色を基調とした蛇紋岩類を主に、少量の瑪瑙、硅質頁岩があり、搬入時は長さ10~20cm大の垂角礫~円礫で露頭、沢地からの採取か。

工程は、管玉が石核作出、分割、形割、研磨、穿孔、仕上げの順で、勾玉、琴柱状品は管玉用石核作出の調整剝片等を素材にし、特定の石核を持たない。まず、管玉の工程から見ると、石核は幅広剝片を素材にした不定型と、それを長さ10cm前後の円盤状に調整した2種類がある。分割は、荒割から続いて石の目に沿い刃幅約2cmの鑿状工具で間接敲打をしているが、円盤状石核には「施溝」様の工具刃幅に相当する目印が付く場合が多い。この後、通例3分割され、中央部が長さ3cm、両端が2cm前後の形製品となり、成品の基本形を決定している。長さが優先規準で2cm以上のものはあくまで分割され、側面、端部の調整は従的存在である。研磨は、側面から端部の順で2、4、8面から稜を消しつつ多面体へ移り、直径1cm前後に仕上げる。研磨の方向は、

長軸に対して斜交するものが9割以上で、例外的に平行、直交例がある。穿孔は、棒状錐による両面からで各工程の中で最も破損度が高く、直前に凹痕を持つ少数例がある。仕上げは、再度の研磨と艶出しで、基本形には直径5mm前後、長さ2cmと1.50cm前後の二形態がある。

勾玉は、管玉用石核の調整剥片を素材にし、工程も管玉の分割以降と同様である。基本形は、板状剥片の側縁に若干の調整をして得る。研磨は、表裏から側縁の順で片側に厚みを残した円板状にし、薄い側縁から再研磨、半月形、C字形として両面穿孔する。円板状は、小型品のみで大型品は半月形に直ちに移行するらしい。仕上げは、残る稜線の研磨と艶出しで、刀子状工具の削り痕を持つものもある。管玉と同じく黒灰色を呈する。

琴柱状品は、勾玉と同様な素材と側縁調整、研磨順序を経て基本の台形状を得ている。下端の角状突起と中央の角窓は、刀子状工具による削りと艶出し研磨による。成品では3つの形態があるが、同一の工程であり、管玉と勾玉の工程を併用するかの様だが単品毎の製作か。

技法上の位置付けは、寺村光晴氏によると管玉が「八代・大和田技法」に近似し、^{註11}円盤状石核の「施溝」様工具痕を本遺跡の特徴とする。勾玉は、「オガクチ技法」に近似し、小型品に対応する円板状研磨品を特徴とする。琴柱状品は、基本的に勾玉と同様だが、金属器を特徴的に使用し単品毎の生産か。全体は、円盤状石核が定型化した技法を示す一方で、調整痕の少ない形割品の存在は、成品としての規格の意味を持つ長さを規準及び優先させ、個別生産から大量生産への移行を示すものであろう。

成品の特徴

各工房の成品には、管玉、勾玉、琴柱状品、白玉、囊玉、石墨状品があり、その出土量は第33表に示した。基本的には、上記の管玉以下3成品に代表される玉類のみを生産し、原石の殆どが、蛇紋岩類という広義の滑石質材に限定されることも共通した特徴である。この中で、主要な成品である管玉、勾玉、琴柱状品について、主な特徴をあげる。

管玉は、製作工程で見た様に素材と石核の点で、全成品の中で主導的な位置を占め、穿孔時の破損度等を考慮しても、出土量比そのままに最大量の生産か。形態上は、直径5mm前後、紐孔約1.50mmの細身に仕上げられ、長さ2cmと1.50cm前後に法量上の中心がある。これは、製作工程からも裏付けられ、全ての工房跡に共通することから規格をも意味しよう。

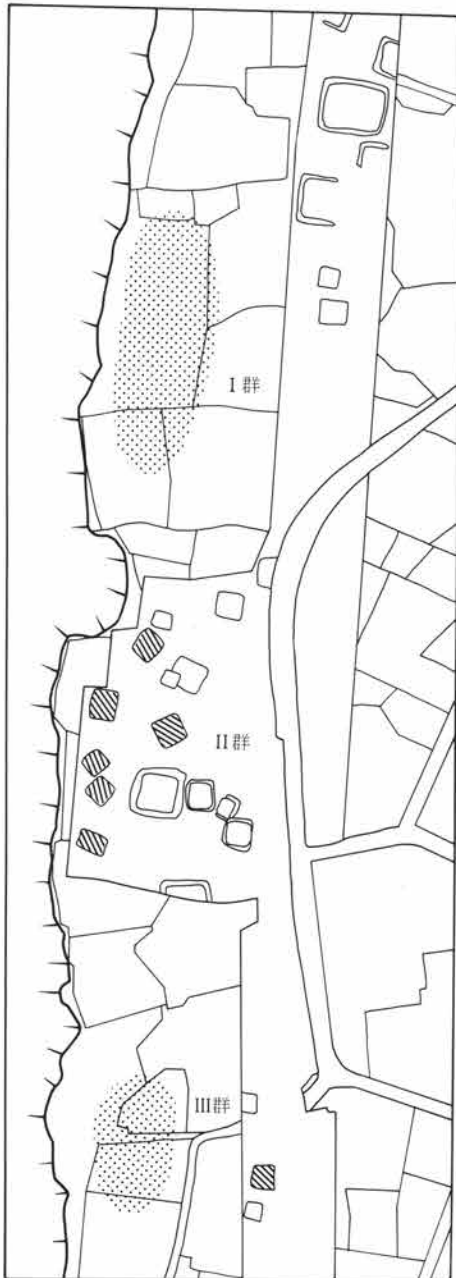
勾玉と琴柱状品は、数量比でこそ少ないが、素材という点で管玉とセットを成す補完の関係にあり、同様に大小の二形態がある。勾玉は、大分扁平化しているが、断面に少し丸みを残し、C字形も強いのが特徴である。色調は管玉同様に黒灰色を呈する。琴柱状品は、下端部の角状突起と上端近くの紐孔らしい小孔の有無により3分類される。上端には斜格子、矢羽根状の線刻が施され、中央部の角窓状のものを共通項としている。「琴柱形石製品」は、長軸に対してタテ方向に小孔が貫通するが、本例はヨコ方向に小孔、角窓状のものがあくために琴柱状として分類をした。用途には垂飾説もあるが、製作上等の特徴からすると3つをセットにした首飾りになるか。

工房群の推定と時期

7軒の工房跡は、6区で1軒、7区で6軒と地点を異にするが、いずれも古墳時代前期に属し、原石、技法、成品の点で同一の特徴を示し、一群としてのまとまりを持つ。特に7区の6軒は、周囲の遺構分布の状況、崖線際にまとまるあり方から一群を完掘した可能性が高く、6区についても崖線際に未成品類の分布範囲があり、これと合すると別の一群が存在するか。また、調査例を欠くが、7区の北約150m付近に中心を持つ未成品類の分布範囲があり、これも一群とすると、全体では地点を異にした工房群が3群で構成される。分布上は、崖線際に占地することを共通項とし、南北方向にほぼ等間隔にある。一般の住居群、さらには方形周溝墓群とは明瞭ではないが、互いに重複をさける状態で一線を画している。そのあり方は、寺村光晴氏分類の第Ⅰ期玉作のうち、「集落内專業集團」の形態に該当し、比較的規模も大きく、安定かつ画一的な生産形態かと思われる。現在の調査範囲を基に、各群に対して北からⅠ群、Ⅱ群、Ⅲ群とし、この中から完掘された可能性が高いⅡ群を代表例にして、構成と時期についてのべる。

Ⅱ群は6軒構成と推定される。その伴出土器、平面形と主軸方向、工作用施設のあり方に見る3点の特徴から、2軒ずつ3時期に細分をした。古い方から30号と41号、22号と24号、23号と51号の順で、41号や24号の工作用施設を新旧複数持つ例からすると、継続的に推移をした製作のあり方であろう。工房自身の特徴でも、一般の住居と大差のない、炉を備えた方形を基調とし、一様に壁際の隅に工作用施設を持った形態は、定形化したあり方を示している。

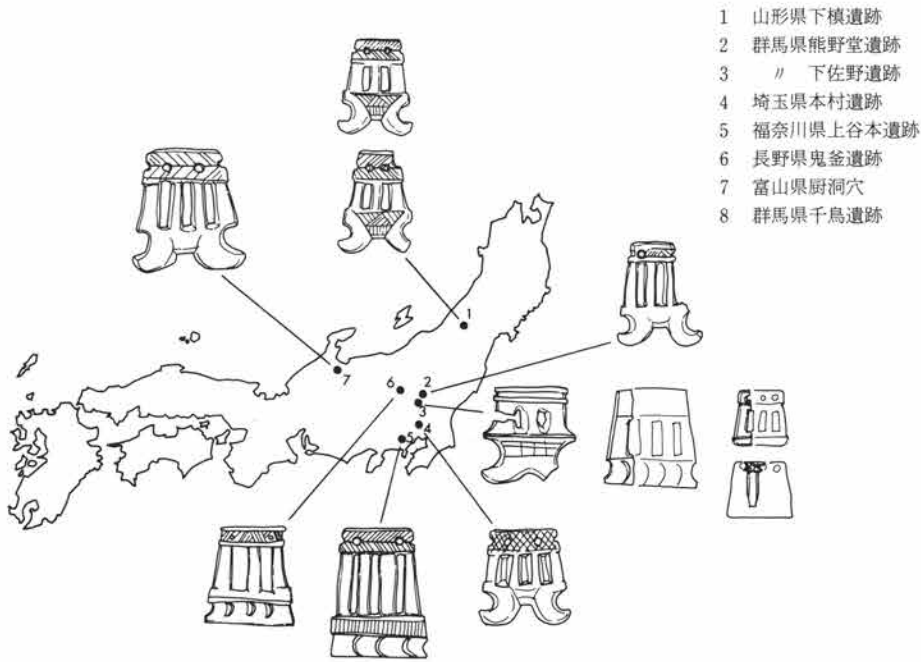
平面形状では、30号に見る長方形で工作用ピットに



 玉作工房跡
  玉未成品
散布範囲

第184図 工房群の推定図

機能が集約される形態から、隅丸に近い方形で工程上で分業が推定される様な24号への推移が特徴か。また、各工房は、原石搬入から成品化までが一貫した、工房毎を単位とする完結したあり方を持ち、成品に見る大小二形態は、一定量の原石から最大量を効率的に成品化するだけではな



第185図 琴柱状品分布図

く、主要3成品に共通することから、規格としての意味も強い。集落内のあり方としては、専門工房という点で一般の住居を背景にしたものであろうが、分布の上でも近接し、時期的にも符号する7区の遺構が対応しよう。時期は、各工房跡からの出土例が少ないが、台付甕、埴に見る特徴から、田口一郎氏による台付甕の編年第IV～V期に相当し、その年代観として4世紀末～5世紀初頭頃に求められる。全体のあり方としては、I群、III群ともII群の様相に近いと推定されるが、各群は2～3軒を単位として構成され、成品化に至るまでの過程では各々が独立し、3群併存の構成か。この時期を傍証する資料に琴柱状品がある。この成品は、亀井正道氏の「琴柱形石製品考」^{註13}の中では「本村型」として分類され、垂飾としての用途が考えられている。本遺跡の例では、製作工程が解明できたこと、形態上で全国の類例を網羅する3分類がされること(第183図)を特徴とし、製作上、成品上の特徴を理由に、単品としての用途もあるが、基本的には管玉と勾玉とセットにした首飾りの用途を考える。全国的な出土例としては、第185図に本遺跡のほかに7遺跡7例を集成したが、山形県下楨遺跡では5世紀前半代の谷柏式に、神奈川県上谷本遺跡では五領式に共伴するという。県内の高崎市熊野堂遺跡の1例も石田川式^{註14}に共伴し、本遺跡の年代観に凡そで沿うものである。その出土状態は、いずれも集落内から単独乃至それに近く、管玉や勾玉との共伴及び古墳からの副葬例はない。

これら玉類の供給先には、熊野堂遺跡の琴柱状品の例からすると、内外の集落に求められよう

が、本遺跡内でも住居内からの出土例は、管玉数例、主体部が不明なものが多い方形周溝墓に至っては皆無に近く、殆ど遺跡外に搬出されたか。橋本博文氏により、大泉町御正作遺跡等での報告例があり、その他数遺跡での可能性が示唆されている。このほかに高崎市鈴ノ宮遺跡での石田川期に属すとされるB区土塚があり、管玉、勾玉、白玉の出土がある。これらを除いて、成品製作と供給のあり方は明確な対応関係はつかめていない。

以上、本遺跡では、製作工程を明らかにできたが、供給関係は課題を残した。この供給関係は、同じ玉類を生産する前期の本遺跡と後期の八寸A遺跡とを比較すると、集落内専業工房集団と集落内特定工房という生産形態と規模の違い、管玉、勾玉から白玉等への対象器種の変化等が指摘でき、その背景にある工作者(集団)への規制と供給された範囲の大小を示していると考えられる。この間には、玉類に対する価値感の変化と多様化が介在し、古墳時代後期初頭頃から量的に増加する、粗製化した滑石製模造品等の出土状況が大きく反映しよう。本遺跡の様相は、原石地帯からの遠近はあれ、同じ前期の芳賀東部団地遺跡と比較すると、大規模であること、画一的な生産体系は大きな特徴であり、自己集落内に供給関係を持たないことは、より広い供給範囲とそれを統括した者を背景にしたと位置付けられる。また、玉作の系譜としては、技法上の観点を除くが、古墳時代前期に属す本遺跡を介在させると、鎭川流域での弥生時代後期、古墳時代中期の笹遺跡、鮎川流域での古墳時代後期の竹沼遺跡と合せて、時期別の流れをつかむことができ、この鎭川、鮎川流域は三波川変成帯を背後に控えた、玉作の伝統的地域とすることもできよう。本遺跡は、この流域からは外れ、古墳時代の前期に限定されるが、生産規模と原石入手の関係からすると、この流域に根ざしつつも一時的にせよ、外的要因で成立した工房群ではないか。

- 註1 甘粕 健 小宮まゆみ「前方後円墳の消滅」『考古学研究』23巻1号 1976
- 2 岩沢正作 「群馬県祭祀遺跡概観」『毛野』第5巻5号 1933
- 3 梅沢重昭 「笹遺跡—鎭川流域における滑石製品出土遺跡の研究」群馬県立博物館研究報告1、3 1964,66
- 4 外山和夫 「石製模造品類を出土した高崎市剣崎天神山古墳をめぐる」『考古学雑誌』第62巻2号 1976
この中で石製模造品類出土遺跡として、古墳、祭祀遺跡、集落跡が約130箇所集成されている。
- 5 井上唯雄 「赤城山権石と群馬の祭祀遺跡」『群馬文化』192号 1982
権石遺跡の再検討と県内の祭祀遺跡の類型化と概観をしている。
- 6 関東山地に始まり、中央構造線の外側に接して、中部地方の天竜川流域、紀伊半島、四国を経て九州佐賀関半島まで延長700km余りにわたる結晶片岩地域
- 7 前原 豊、綿貫鋭次郎、設楽博己 「竹沼遺跡 昭和52年度発掘調査概要」藤岡市教育委員会 1978
- 8 群馬県埋蔵文化財調査事業団 「年報」2 1983
- 9 前橋市教育委員会 「芳賀東部団地遺跡 I」 1984
- 10 富岡市教育委員会 井上 太氏教示、県遺跡台帳No.1839として登載、妙義町中央公民館に一部展示
- 11 寺村光晴 「古代玉作形成史の研究」吉川弘文館 1980
- 12 田口一郎ほか 「元島名将軍塚古墳」高崎市教育委員会 1981
- 13 亀井正道 「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』8号 1972
- 14 赤堀村千鳥遺跡32号住居跡も1例ある。伴出土器は4世紀第4四半紀に比定
松村一昭『千鳥遺跡、発掘調査概報』赤堀村教育委員会 1974
- 15 橋本博文 「群馬県内古墳出現期の諸問題」『第5回 三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』
北武蔵古代文化研究会 群馬県考古学談話会 千曲川水系古代文化研究所 1984

下佐野遺跡（13地区）出土の馬骨について

群馬県立前橋第二高校 宮崎重雄

1号馬

1号馬の埋葬されていた土坑は、溝状遺構の南端にあり、南北方向に長軸をもった長楕円形である。長軸、短軸の長さがそれぞれ1.5m、1.0mあり、深さが0.9mほどあって、床面は平坦である。遺骸は、頭部を北に尾部を南に向け、後方を振り返るような形で頭を首の上ののせている。臀部は側壁にかかってわずかに立ち上がり、前肢と後肢は腹部で交叉している。この状況から、この馬は死後硬直状態に至る前に埋葬されたものとみられる。

発達の良い犬歯が認められることからオスで、切歯の歯坎の状態および臼歯の咬耗度から、20歳をこえる老齢馬であると判断される。体高の推定に必要な四肢骨の全長が計測できるのは左中足骨と右橈骨の2個だけで、それぞれを用いて得られる値は133cmと131cmである。この平均の132cm前後が1号馬の体高と推定される。

当時の馬の姿態は、今日わずかに生き残っている在来馬に見ることができる。日本の在来馬には中・小の2型があり、中型馬には、体高124～142cmの北海道の土産馬、長野県の本曾馬、宮崎県の御崎馬が含まれ、小型馬には、体高105～120cmの沖縄県の与那国馬、宮古馬、鹿児島県のトカラ馬などがある⁽²⁾。明治以降に日本に入ってきた洋種の馬は、これらの在来馬より大きく、平均体高が168cmもある⁽³⁾。1号馬の体高は、中型在来馬に相当するが、形質的にこのうちのどれに最も近縁かは、遺骸の保存が不良で不明である。

1号馬は、歯冠高に示されているように咬耗が極度に進んでいて、ひどい異常咬耗を受けている。観察可能な右側の歯だけについてみると、下顎では、第2前臼歯が歯冠部を咬耗し尽くして、遠心側の歯根だけを残し、近心側の歯根を脱落させている。第3前臼歯も近心側と遠心側の歯根が互いに分離する直前まで咬耗が進んでいる。後臼歯は各歯とも歯冠部の周囲のエナメルを残すだけとなり、内側のエナメルはほとんど咬耗し尽くされている。上顎では、第4前臼歯、第1後臼歯の咬耗が特にひどく、前者は歯冠の周囲のエナメルを残すだけとなり、後者は歯冠の近心頰側と遠心頰側にそれぞれ5.2×1.2mm、4.5×0.7mmのエナメルがわずかに認められるだけである。左上顎第3切歯の唇側には歯根まで達する径3.5mmの孔があいている。

2号馬

2号馬の出土した土坑は南北に長い隅丸長方形で、南北1.6m、東西1.2m、深さ1mあり、床面は平坦である。2号馬も1号馬同様に頭を北側に尾を南側に向け横位に埋葬されていた。ただし1号馬のように前肢と後肢が交叉することなく、それぞれの位置で折り曲げられ、頭は土坑の側壁に立てかけられた状態になっていた。2号馬も発達の良い犬歯が認められたため、オスと判断

される。また、歯の咬耗度は20歳を越える老齢馬であることを示している。ただ1つ全長の測れた中手骨から得られた推定体高は119.2cmで、日本の在来馬の小型馬に相当する。2号馬も歯の咬耗は著しく進んでいて、左上顎の状況は、第1後臼歯付近がひどい歯槽膿漏を患い、歯槽骨が吸収を受けて大きく凹湾し、歯は脱落している。第2後臼歯も歯槽骨の吸収がひどく、咬耗が歯頸部、ところによって歯根部にいたるまで進んでいて、エナメル質はわずかに残っているだけである。また、極端な異常咬耗を受け、この歯の咬合面は全体的な咬合面に対し約30度傾斜している。この他の歯も左上顎では、咬合面に残っているエナメル質はほとんど外周だけである。下顎では第2後臼歯が脱落している。

1号馬、2号馬とも老齢による不健康な歯で咀嚼がままならず、栄養失調がもとで死亡したものであると思われる。廃馬同然の馬でも大切に死期にいたるまで飼育されていたようである。

3号馬

10個余の脊椎骨とそれに関節する肋骨だけが残存するのみである。保存が悪く、馬骨である確証は得られていない。しかし、近接した他の2つの土坑内の遺骸がウマであることや、骨の大きさなどから、馬骨である可能性はきわめて高い。

本遺跡の馬骨の特徴（第34表）

1号馬の橈骨は、全長が33.5cmあり、中型在来馬の最大のものに近い。長幅指数($\frac{\text{中央部幅}}{\text{全長}} \times 100$)は10.7で、トカラ馬の最大より大きい、木曾馬の最小より小さく、高崎市中尾遺跡の馬の11.3を大きく下回る。また、この馬の中足骨は、全長が26.3cmで、長野県御代田町の野火付遺跡の4号馬に等しく、木曾馬では小さめなものに相当する。長幅指数は9.9で、トカラ馬、木曾馬、鎌倉中世馬の最小値のどれよりも小さく、中尾馬の12.3よりは、はるかに小さい。以上のことから1号馬は、細めの四肢をもっていたことが考えられる。

2号馬の中手骨は、全長が19.7cmあり、トカラ馬より大きい、中型在来馬の最小より小さく、中尾馬のそれにはほぼ等しい。長幅指数は14.5で、木曾馬や鎌倉中世馬なみであるが、トカラ馬の最大よりは大きく、高崎市の大八木遺跡や中尾遺跡の馬のそれよりかなり大きい。1号馬と違って2号馬は太めの四肢をもっていたことをうかがわせる。

1号馬、2号馬とも、上顎、下顎のそれぞれの臼歯列長が馬格のわりに小さいが、ウマの歯では、歯頸部に近い方が歯冠近遠心径の小さいのが普通で、咬耗の極端に進んだ本遺跡のウマでは、それは当然なこととも言えよう。

馬骨の時代

本遺跡のすぐ近くの高崎市下佐野川竈石1230-1に所在する古墳からかつて埴輪馬が出土したことがあり、遠く古墳時代からこのあたりにウマが飼育されていたことを示している。しかし、本

(12)

遺跡の馬骨には、人工遺物の伴出がなく、細かな時代については不明である。包含層が二次堆積した黄褐色のローム様土層で、遺物の保存条件の良いものではないようだから、あまり古い馬骨とは思えない。とは言っても馬骨の形態は在来馬タイプであり、洋種の入ってきた明治後半以降のものではないだろう。一応江戸の後期から明治の初めあたりが予想される。この近くには、江戸時代に倉賀野河岸があり、船荷を積んで、中山道、大笹街道、入山道を行き来する駄馬がたくさんいた。⁽¹³⁾ 駄馬としては体高の低い方が荷が載せやすく、飼食代も安くて好まれたから、2号馬の方はもしかしたら、こういった陸上輸送用のウマだった可能性もある。体高が高く四肢の細めの1号馬の方は騎乗用として利用されたのかも知れない。

おわりに

本稿をまとめるにあたって、次の方々にお世話になった。ここに御芳名を記して感謝の意を表します。

中束耕志、女屋和志雄、関 邦一、渡辺雄吉、石川正之助、前沢和之、松本浩一、前原 豊、小林敏夫、堤 隆、林 幸彦

参考、引用文献

- 1 林田重幸 1957 馬における骨長より体高の推定法、鹿児島大学農学部学術報告 6、P P. 146~156
- 2 同 1974 日本在来馬の源流―「馬」森 浩一編、社会思想社 P P. 215~262
- 3 市川 収 1944 馬の生物学、創元社
- 4 群馬県教育委員会 1975 上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査概報 I
- 5 群馬県教育委員会 (助)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983 中尾 (遺構篇)
// // 1984 中尾 (遺物篇)
- 6 群馬県佐波郡境町教育委員会 1975、76、77 十三宝塚遺跡発掘調査概報 I、II、III
- 7 長野県北佐久郡御代田町教育委員会 1985 野火付遺跡出土の馬骨について―「野火付遺跡」付篇
- 8 林田重幸 1957 中世日本の馬について、日本畜産学会報、28、(5) P P. 301~306
- 9 岡部利雄 1953 木曾馬について―「日本在来馬に関する研究」第3編、日本学術振興会 P P. 75~162
- 10 林田重幸 1956 日本古代馬の研究、人類学雑誌、64、(4)、P P. 197~211および既出の(V)
- 11 Duerst J.U 1926 Vergleichende Untersuchugsmethoden am Skelett bei Säugetirn
- 12 芝田清吾 1969 日本古代家畜史の研究、学術書出版会
- 13 山田武磨 1961 上利根川の水運史―「利根と上州 上」、みやま文庫

第 34 表 下佐野遺跡 (13地区) の馬骨の計測値表

(単位 cm)

		下佐野 1号馬	下佐野 2号馬	大八木馬	中尾馬	十三宝塚馬	野火付 4号馬	鎌倉馬	木曾馬	トカラ馬
時代と(型)		江戸後期 明治初(中)	同左(小)	平安中期 近世中期(中)	近世前期 中期(小)	平安前期 (中)	平安 (中)	鎌倉後期 (小~中)	現生 (中)	現生 (小)
	測定者	宮崎・関	同左	(4) 宮崎 前沢	(5) 宮崎 前原	(6) 宮崎	(7) 宮崎・堤	(8) 林田	(9) 岡部 (*印は 林田)	(10) 林田
	推定体高 (現世は実体高)	132.0	119.1	130.8	116.7	?	131.0	小一平一大 109.0-129.5- 140.1	小一平一大	112.3
上顎骨	臼歯列全長	15.6	14.1	16.3	14.6	16.9	?		16.3-17.3-18.4	
下顎骨	下顎骨の長さ	39.8	37.5	39.4	39.2				41.0-43.0-44.4	37.0
	歯槽間縁の長さ	9.3	8.0	10.1	10.8				10.1-10.9-11.5	
	臼歯列全長	15.4	14.3	16.4	14.9	17.2			16.8-18.0-19.3	15.7
	第三後臼歯一下顎角	12.0	11.6		12.5				11.8-12.8-13.8	
	下顎体の長さ	27.6	24.9	26.5					27.7-28.7-30.4	
	下顎枝の長さ	14.7	14.6		14.8				14.8-15.8-17.1	
	筋突起の高さ	22.6		22.5					26.1-27.9-28.8	
	第二前臼歯での高さ		5.3	5.1	6.4				5.3-5.7-6.1	
第三後臼歯での高さ	10.5	9.0	10.9	10.5				10.4-11.3-11.7		
前肢	上腕骨の生理的長さ	25.8	24.7		24.7				26.1-26.8-27.5	
	橈骨最大長	33.5	26.3+	30.1				29.9-32.2-33.9	32.2-32.7-33.4	28.7
	中手骨最大長		19.7		19.4			20.1-21.6-23.0	21.8-22.4-23.0	18.5
	基節骨最大長		7.5		7.2					7.2
	中節骨最大長		4.4							
後肢	大腿骨々頭からの長さ	33.4	29.8		33.3				34.8-35.6-36.4	
	脛骨最大長	30.6+	26.6+						33.7-34.9-36.2	
	中足骨最大長	26.3	20.8+				26.3	21.7-25.2-27.5	26.0-26.7-27.4	22.5
指数	橈骨長幅指数	10.7			11.3				* 11.7-12.3-12.8	小一平一大 10.0-10.1-10.3
	中手骨長幅指数		14.5	15.3	16.5			13.2-14.3-15.6	* 13.2-14.1-15.5	13.7-13.9-14.3
	中足骨長幅指数	9.9			12.3			10.0-11.4-12.1	10.2-11.1-12.4	10.6-10.9-11.1

計測法はDuerst⁽¹¹⁾によった。

下佐野遺跡（13地区）出土の馬骨について

第 35 表 下佐野遺跡（13地区）出土馬歯の計測値表

（単位 cm）

1号馬

上顎・下顎	歯冠長	歯冠幅	歯冠高 (頬側)	エナメル厚 (頬側最大)
P ₂	3.54	2.25	—	—
P ₃	2.50	2.50	—	1.40
P ₄	2.47	2.53	1.40	1.60
M ₁	2.04	2.18	—	1.20+
M ₂	2.32	1.89	1.20	—
M ₃	3.30	2.19	1.30	1.50
P ₂	3.46	2.09	2.10	—
P ₃	2.36	1.79	1.52	—
P ₄	2.35	1.43	—	1.60
M ₁	2.18	1.35	2.0	1.30
M ₂	2.20	1.17	1.6	1.50
M ₃	3.06	1.26	2.0	1.50

2号馬

上顎・下顎	歯冠長	歯冠高 (頬側)
P ₂	3.0	1.1
P ₃	2.31	1.1
P ₄	2.02	1.4
M ₁	脱落	—
M ₂	2.31	?
M ₃	2.37	?
P ₂	2.67	0.4
P ₃	2.22	0.8
P ₄	2.00	0.7
M ₁	2.16	—
M ₂	—	—
M ₃	2.40	—

写 真 图 版



遺跡遠景(観音山丘陵から)



遺跡遠景(観音山丘陵から)



調査風景(1、2区付近)



全景(7、8区)



作業風景



作業風景



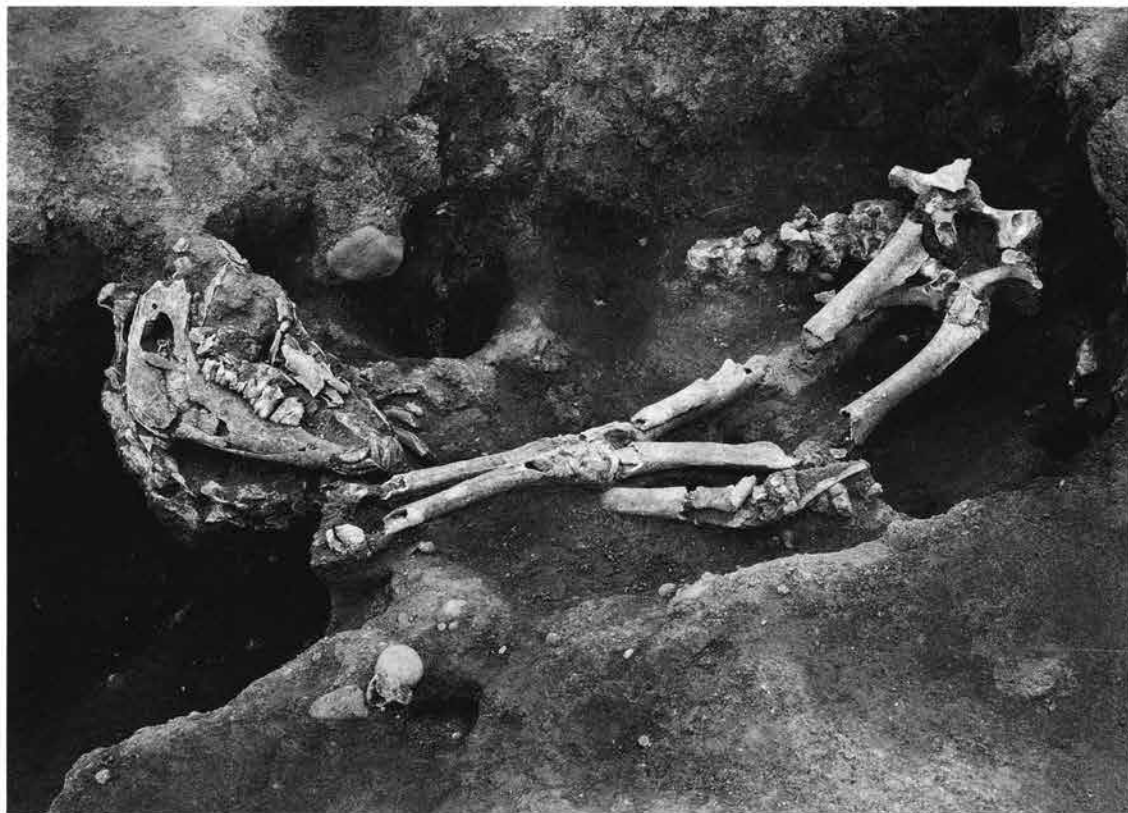
作業風景



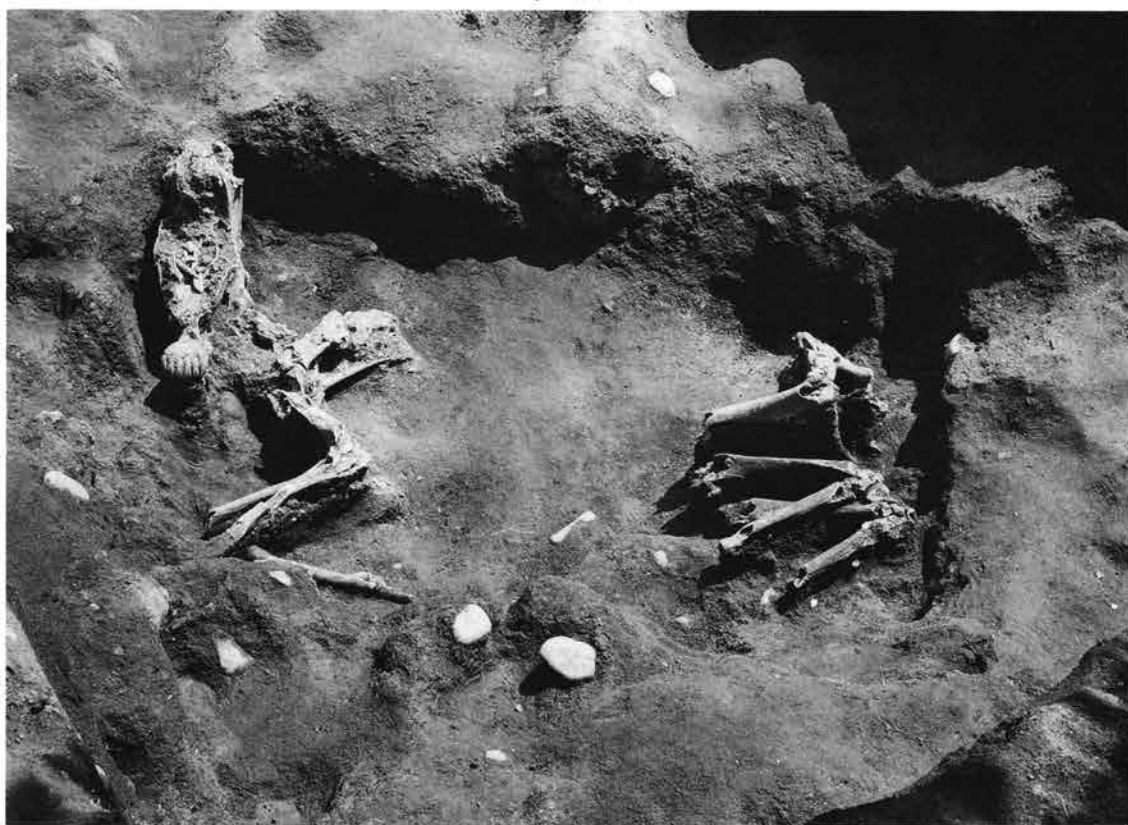
13地区全景(北)



1号、2号、3号馬骨(南)



1号馬骨(南)



2号馬骨(南)



3号馬骨(南)



2号溝断面(西)



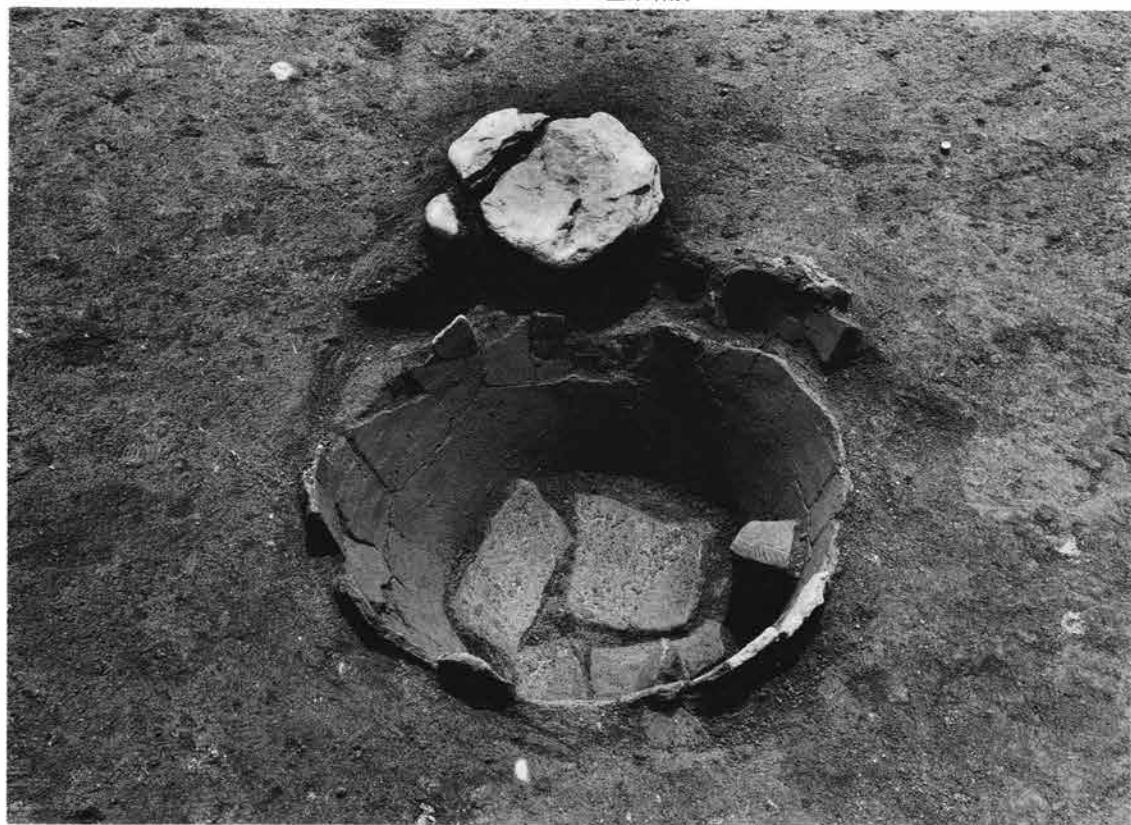
7区28号住居跡全景(南)



7区42号住居跡全景(南)



8区1号住居跡全景(南)



8区1号住居跡炉跡(南)



7区77号土坛(南)



7区82号土坛(南)



7区114号土坛(南)



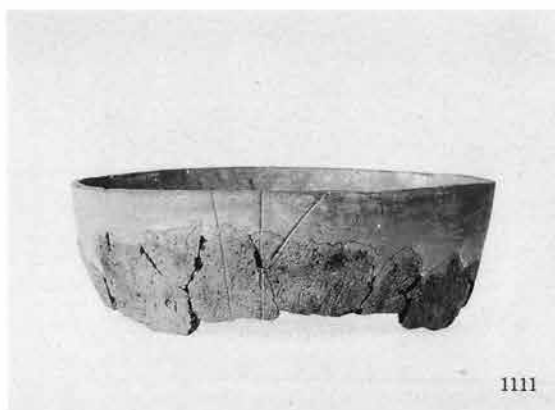
7区108号
109号
110号土坛(西)

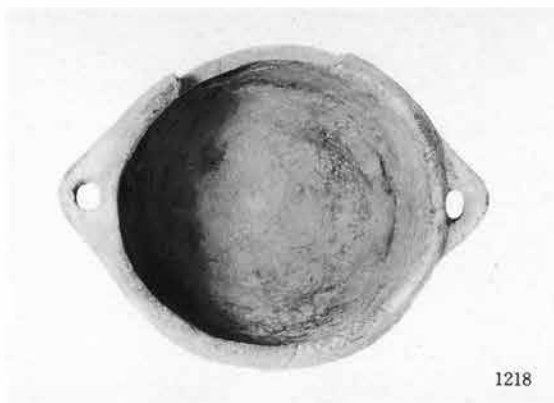
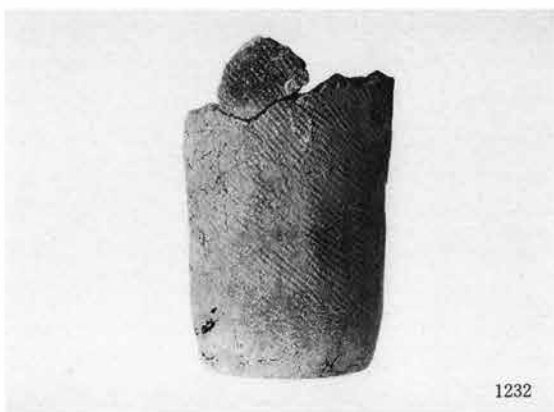
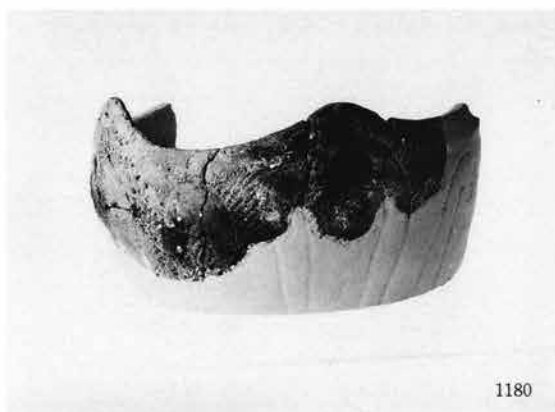


7区108号土坛(南)



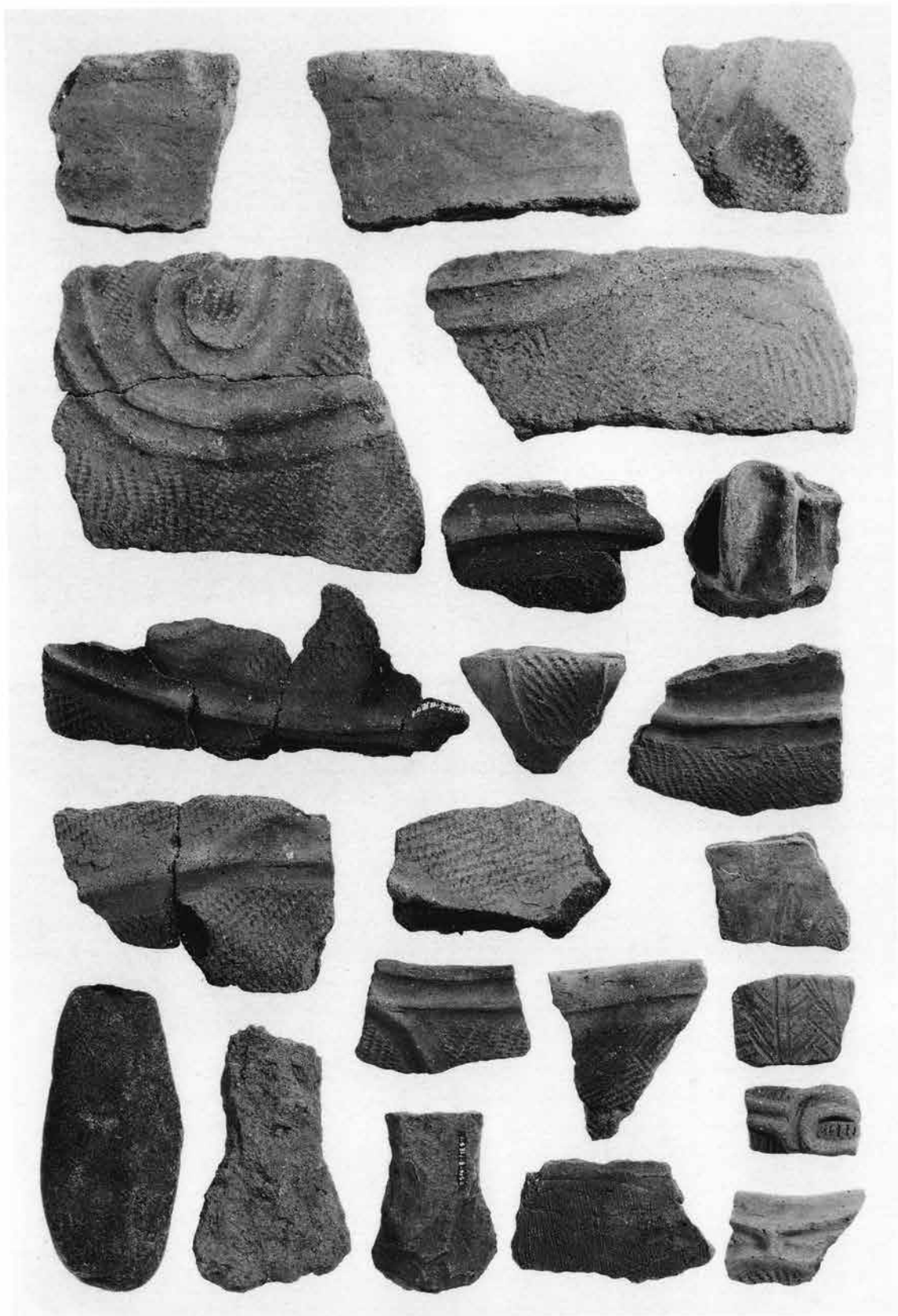
7区110号土坛(西)



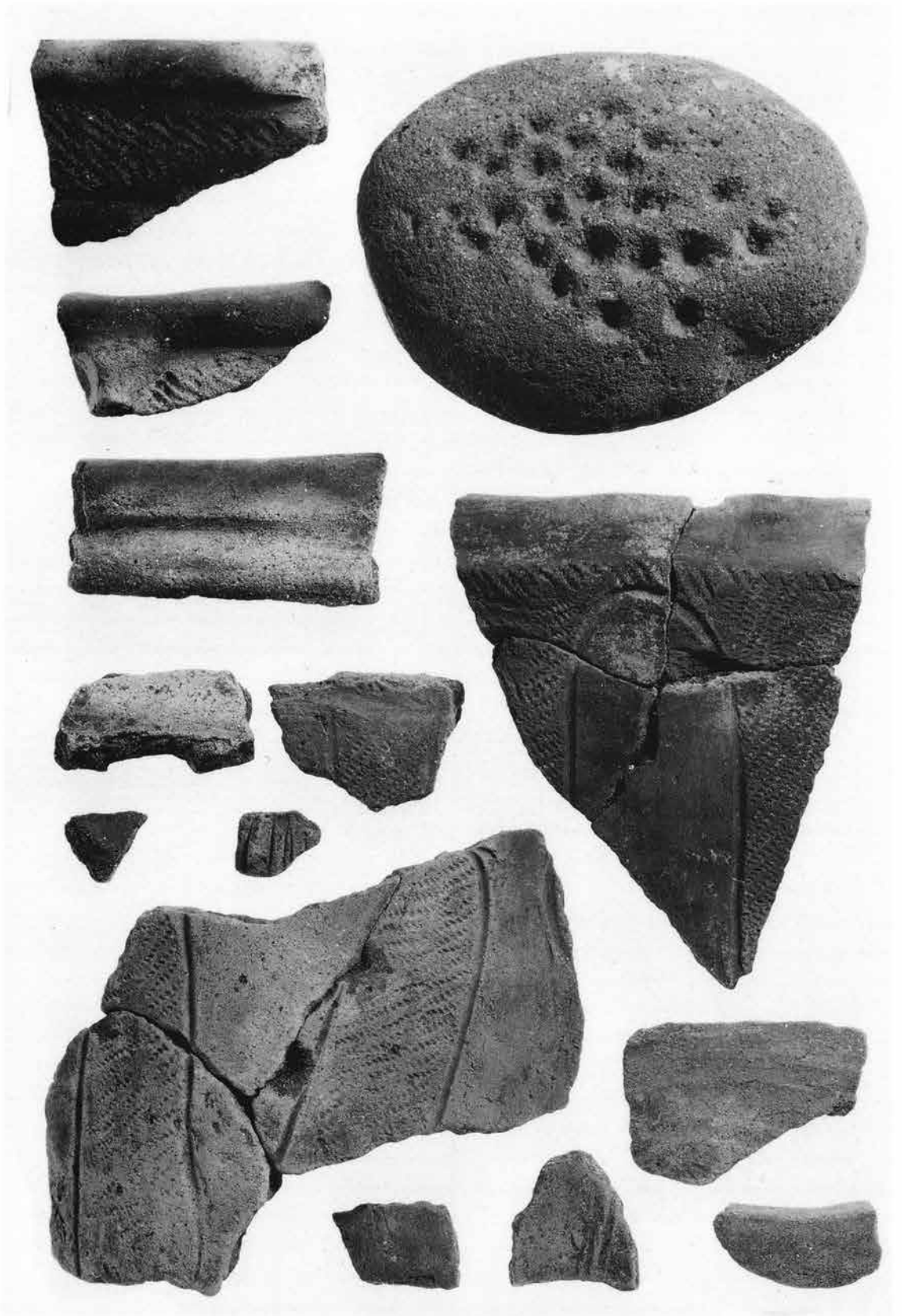




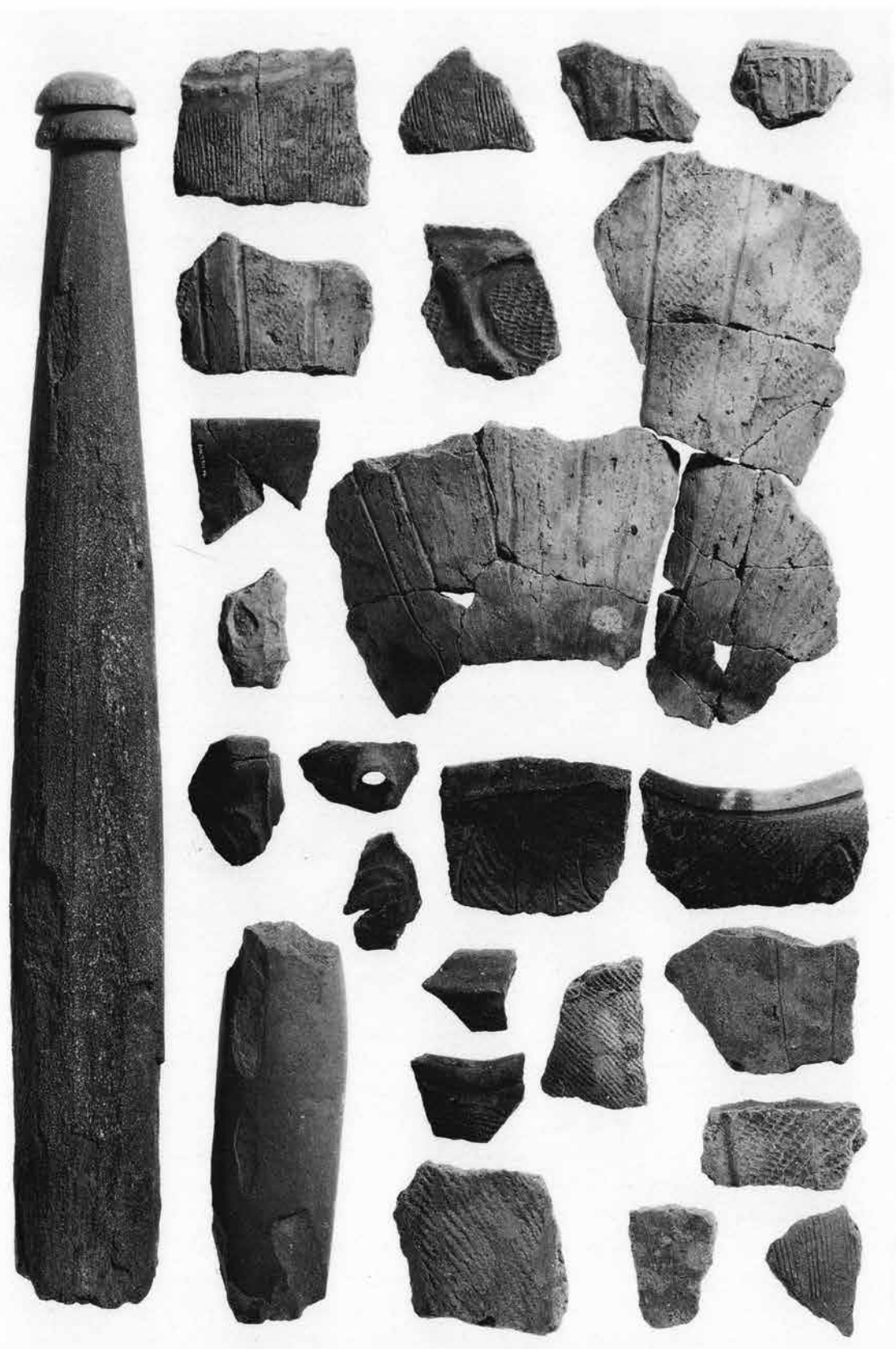
7区28号、34号、42号住居跡遺物



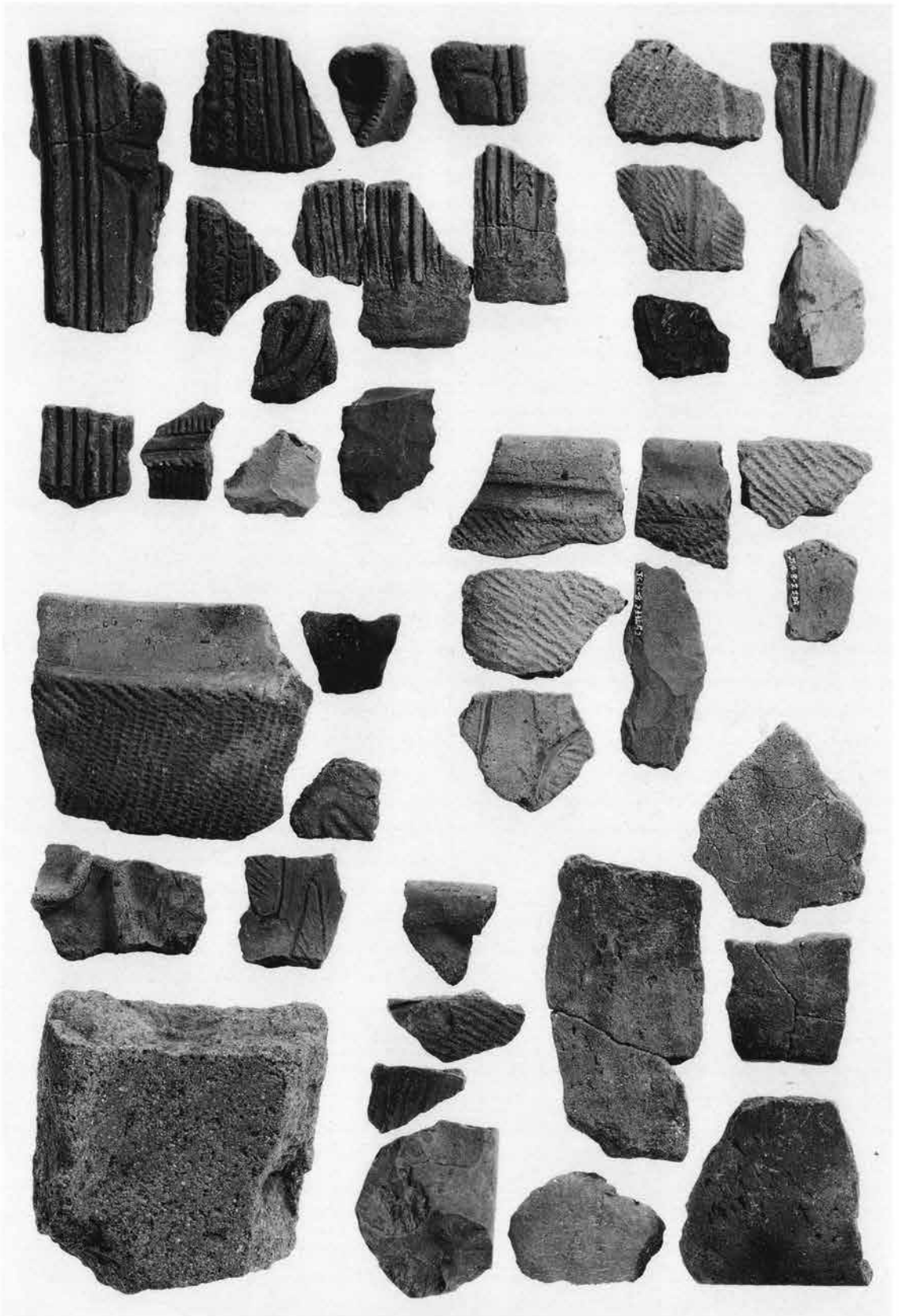
8区1号住居跡遺物



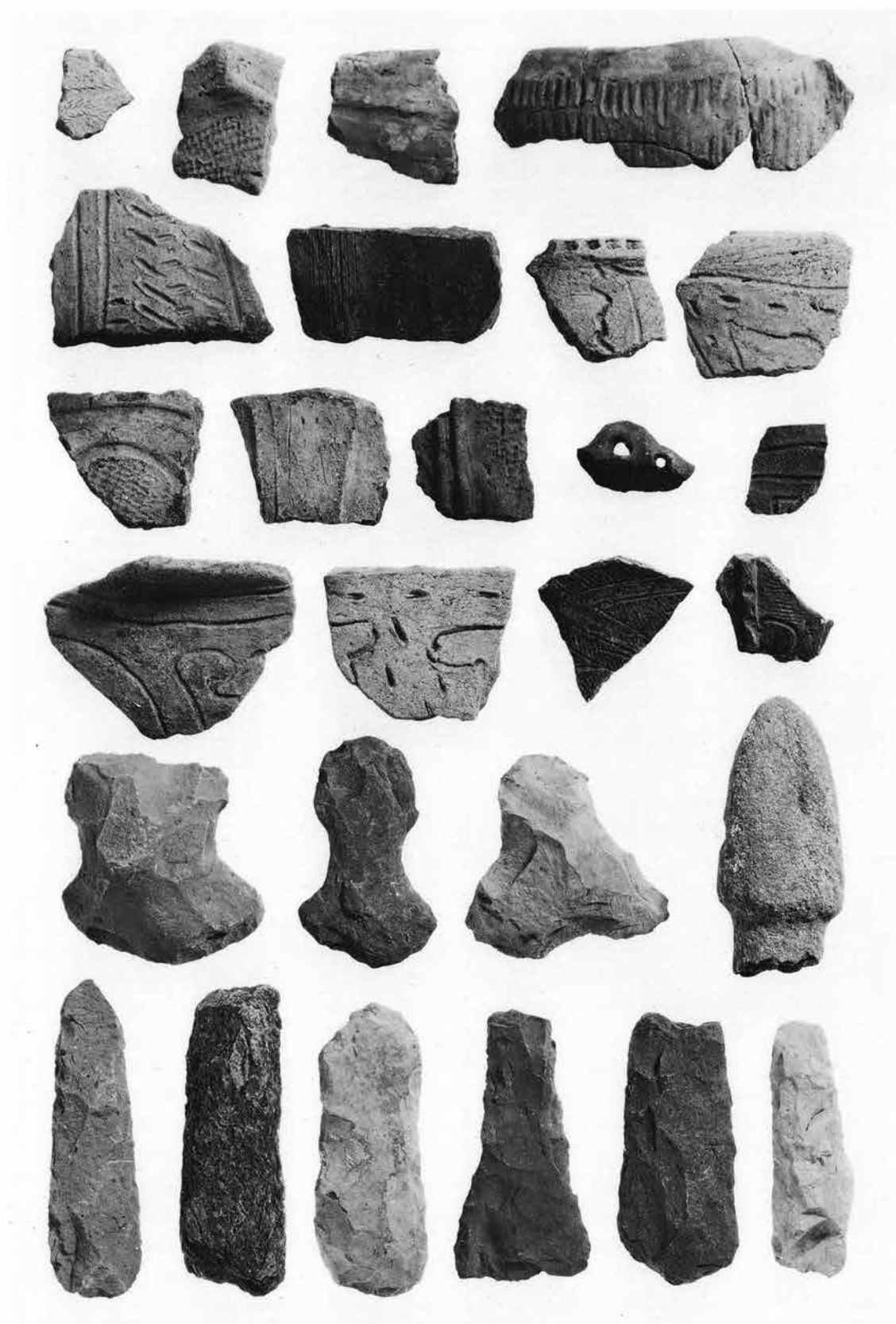
7区7号、91号土坛遗物



7区75号、77号土坛遗物



7区89号、90号、92号土坛遗物



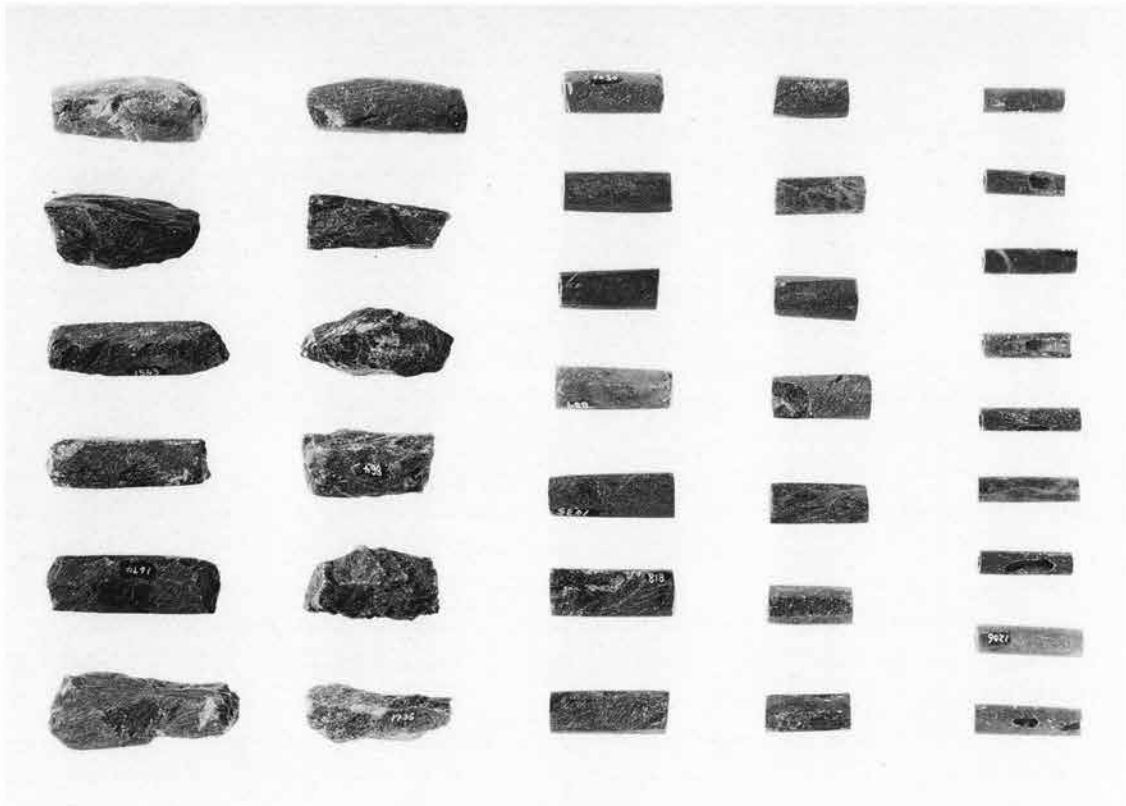
縄文遺構外遺物



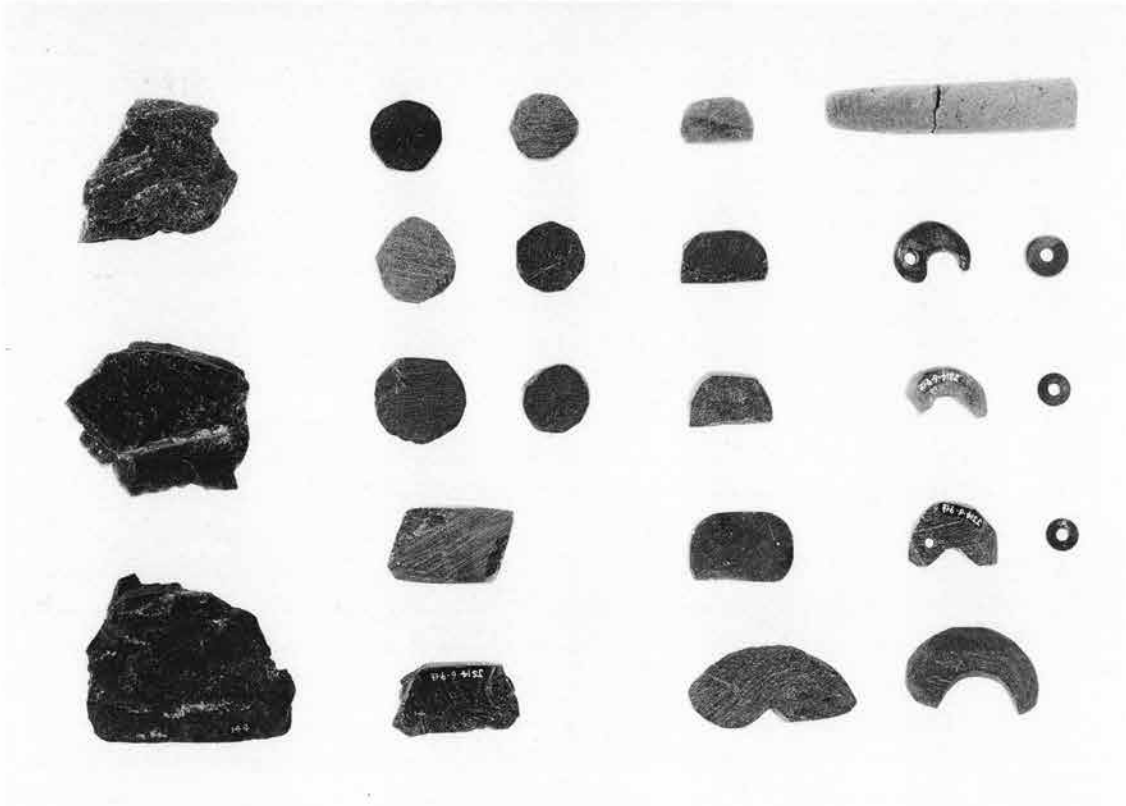
6区9号住居跡全景(南)



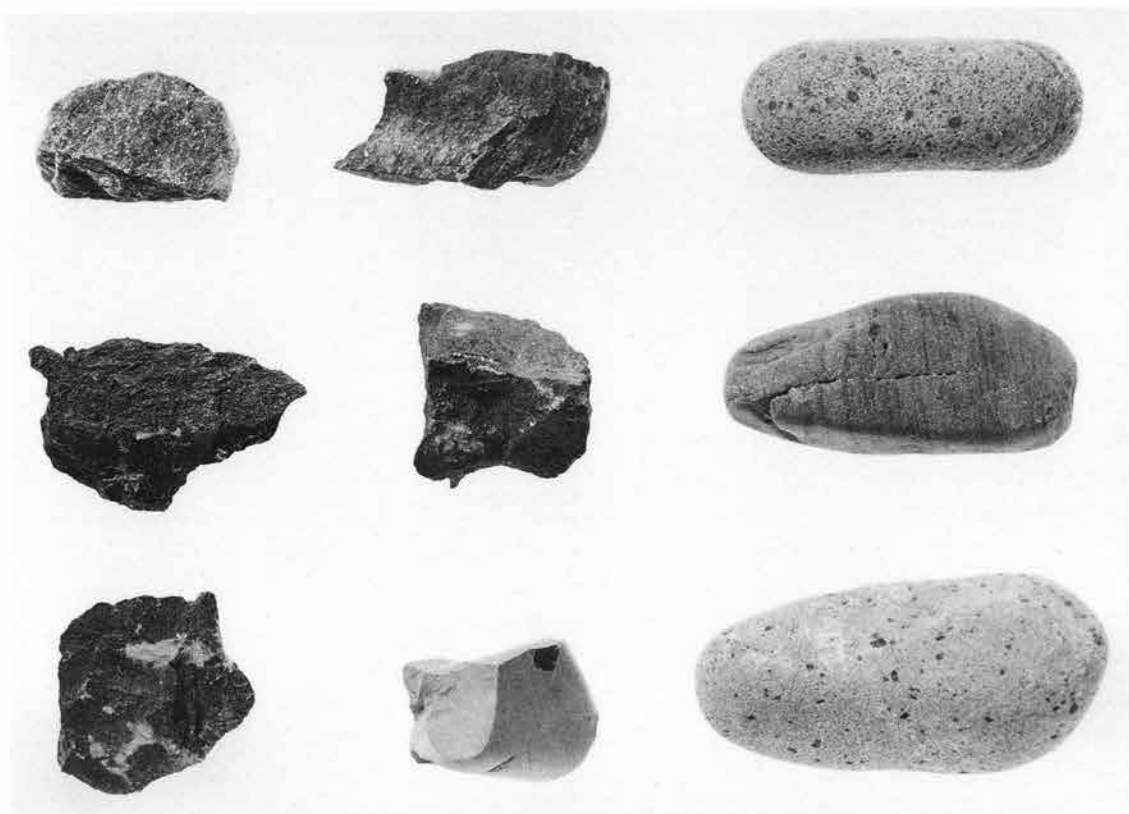
6区9号住居跡工作用ピット(西南)



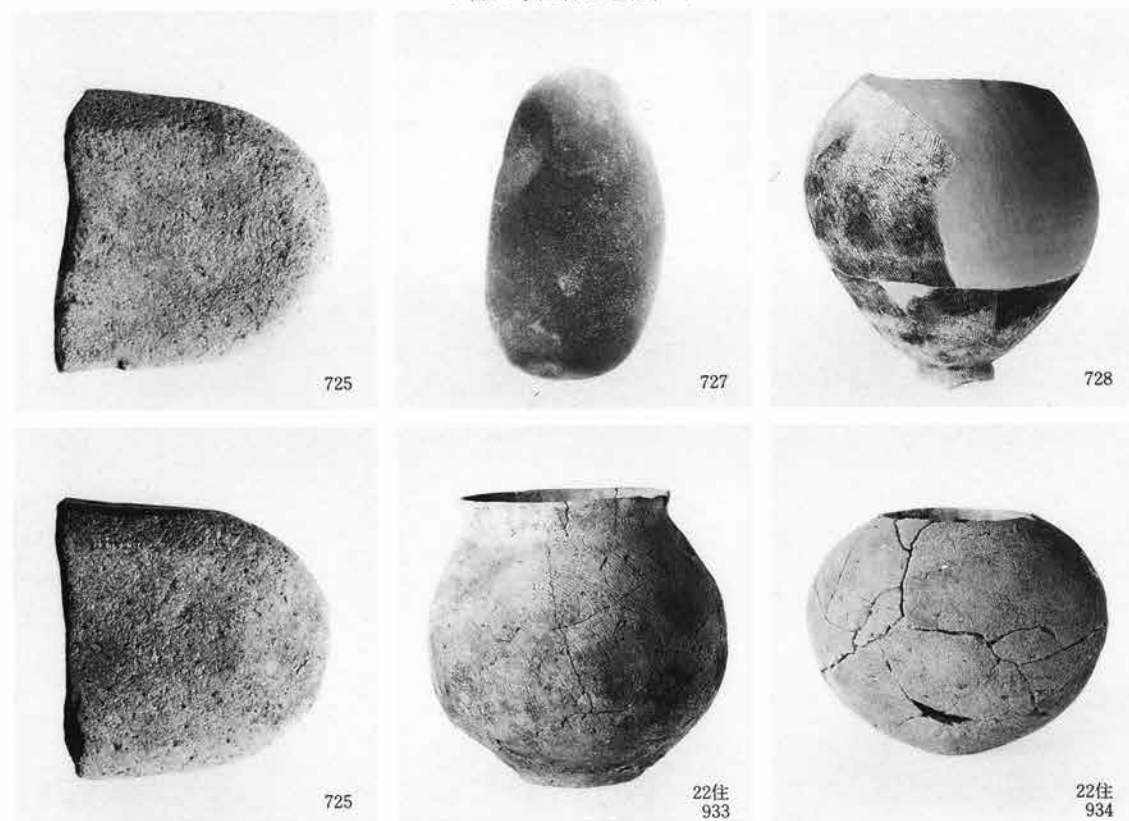
6区9号住居跡遺物(1)



6区9号住居跡遺物(2)



6区9号住居跡遺物(3)



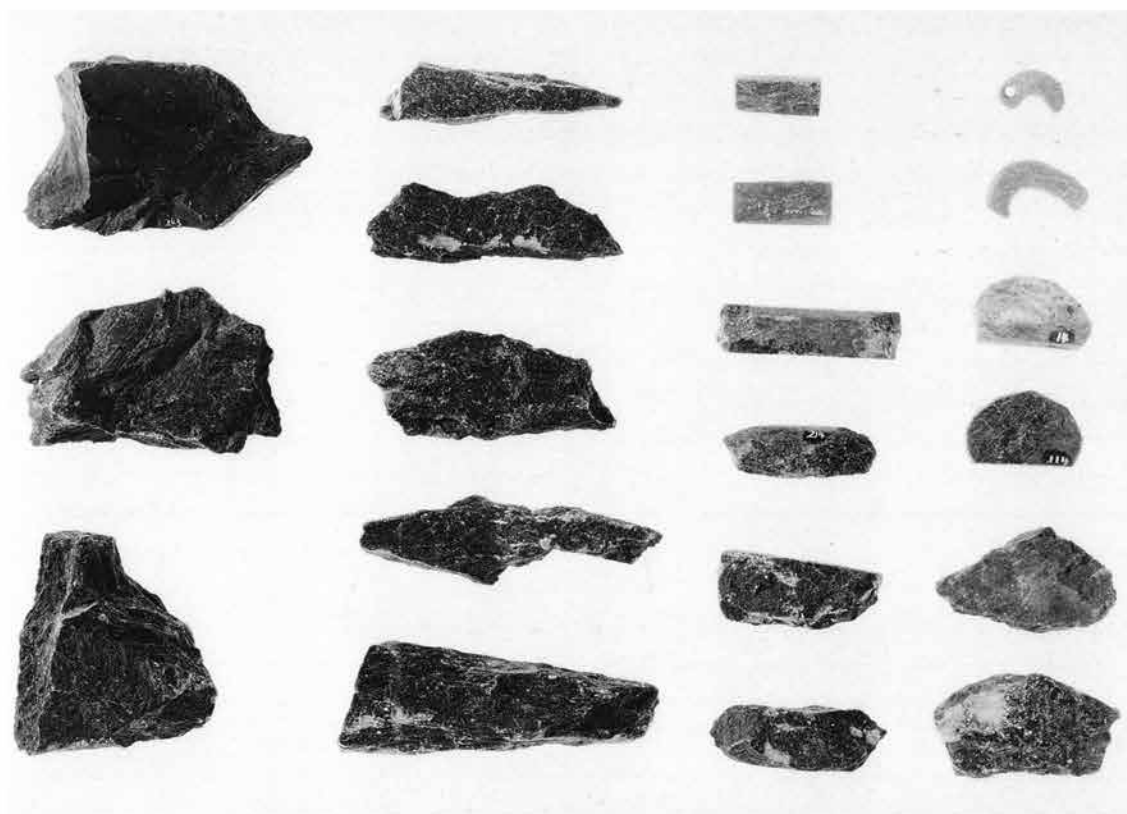
6区9号、7区22号住居跡遺物(4)



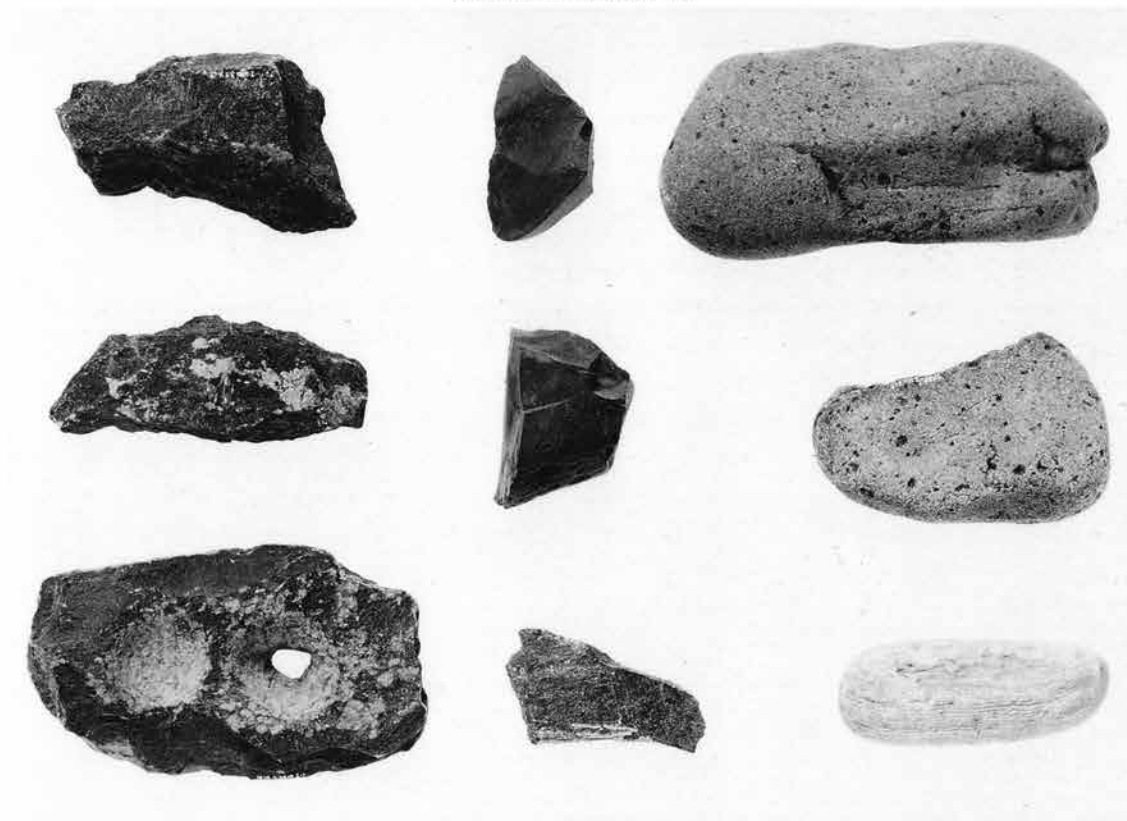
7区22号住居跡全景(南)



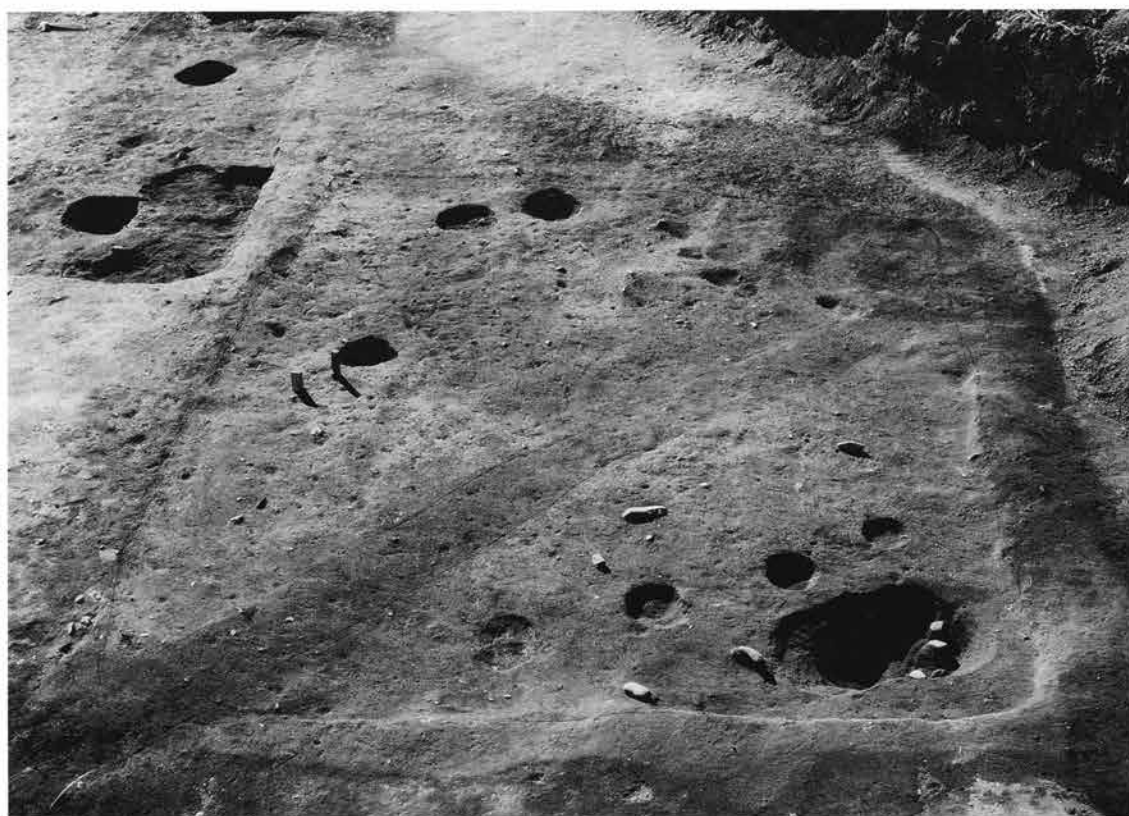
7区22号住居跡ピット内土器



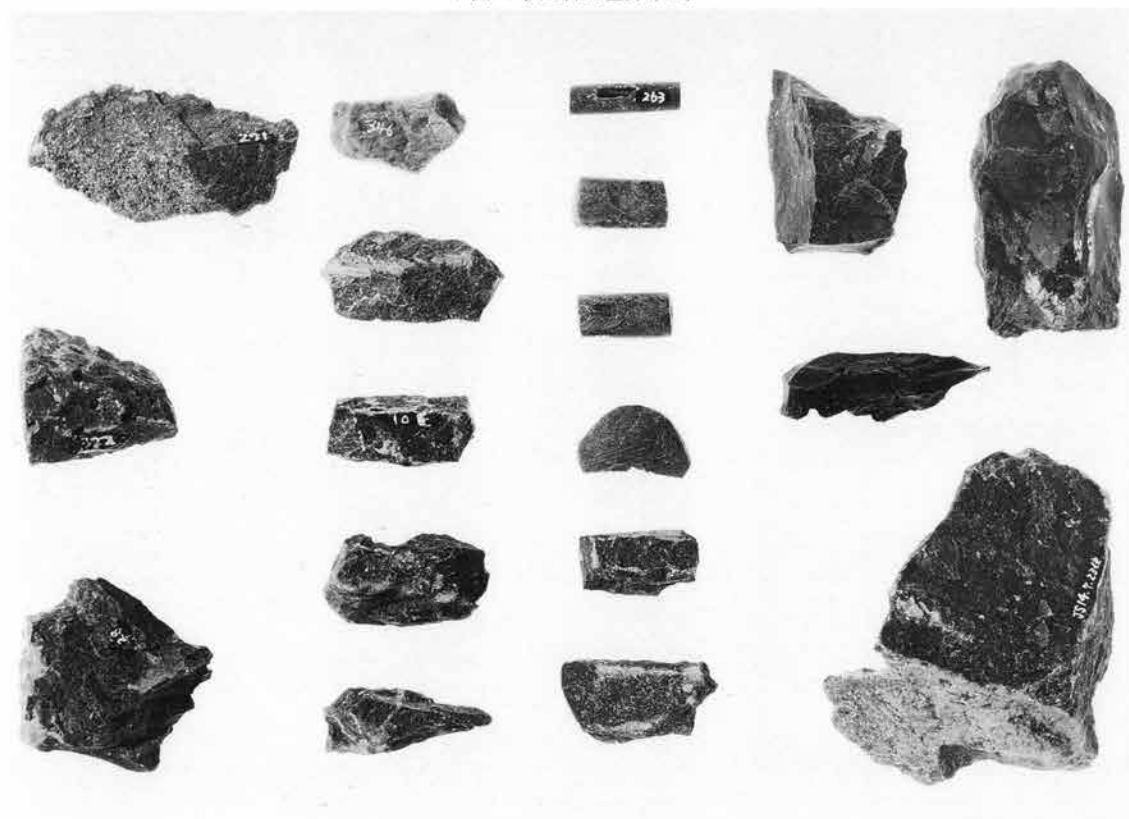
7区22号住居跡遺物(1)



7区22号住居跡遺物(2)



7区23号住居跡全景(北)



7区23号住居跡遺物



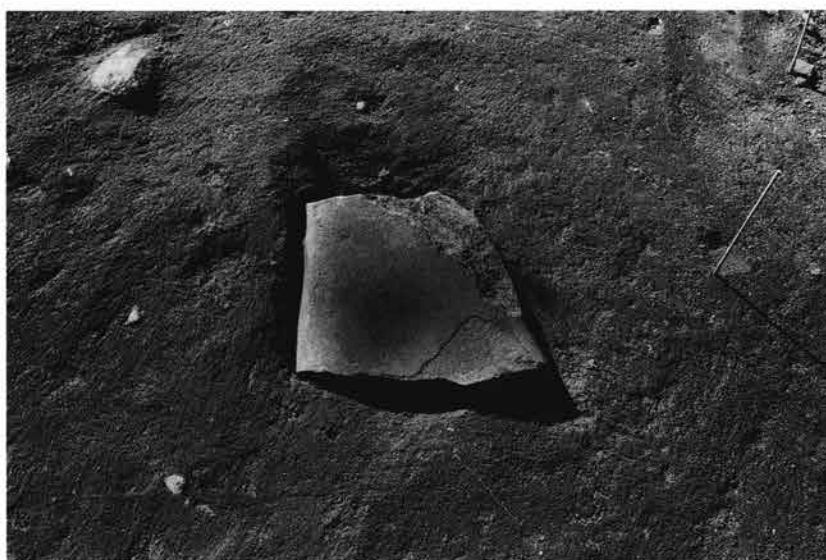
7区24号住居跡全景(南)



7区24号住居跡工作台と砥石



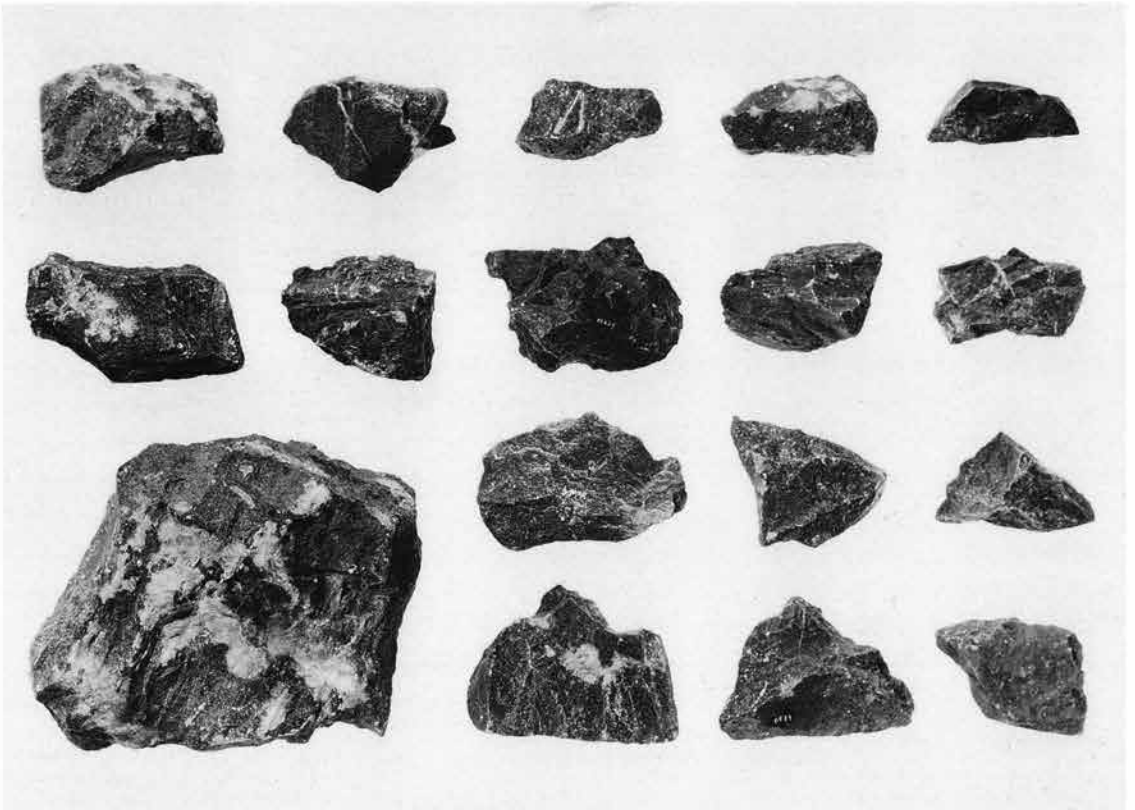
7区24号住居跡
未成品出土状態



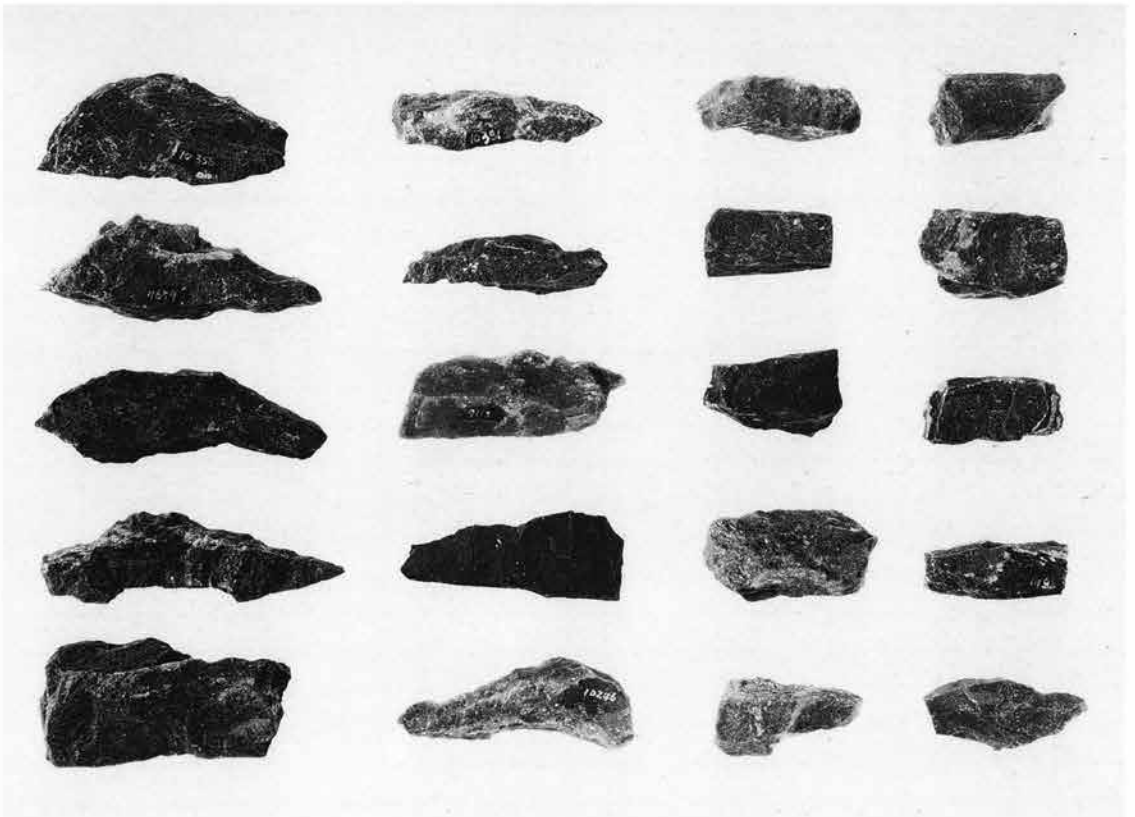
工作台



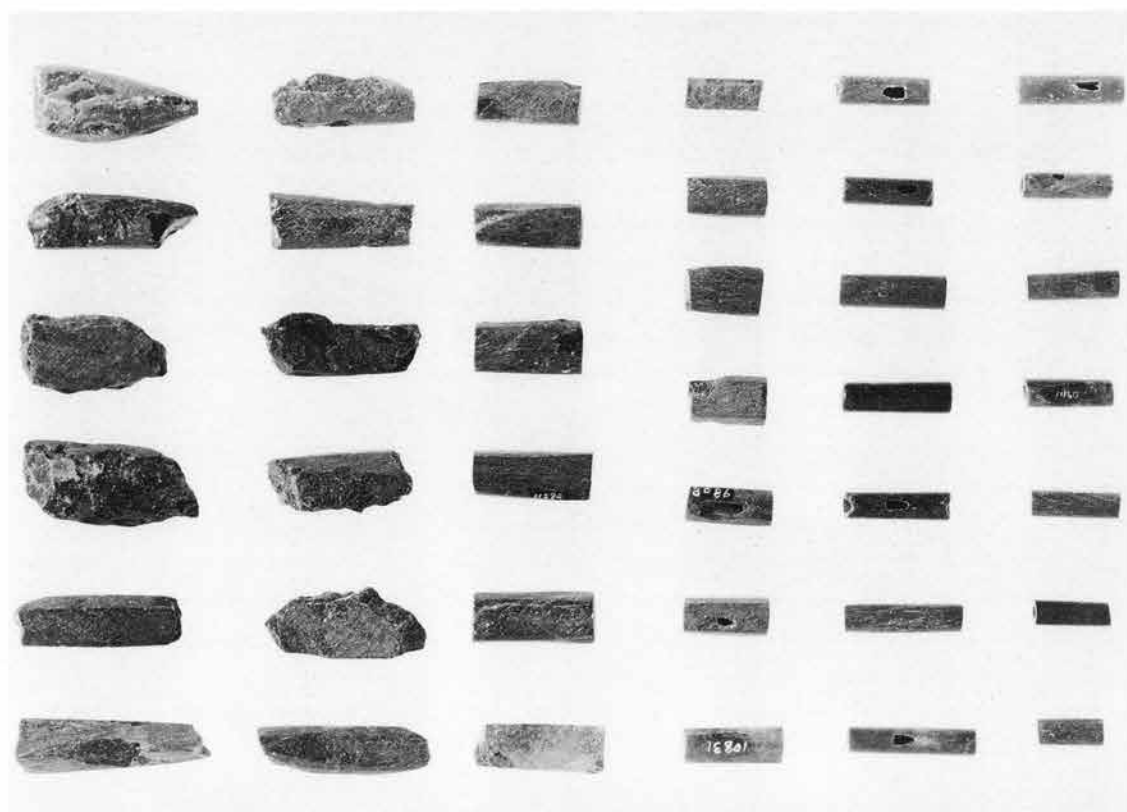
石核



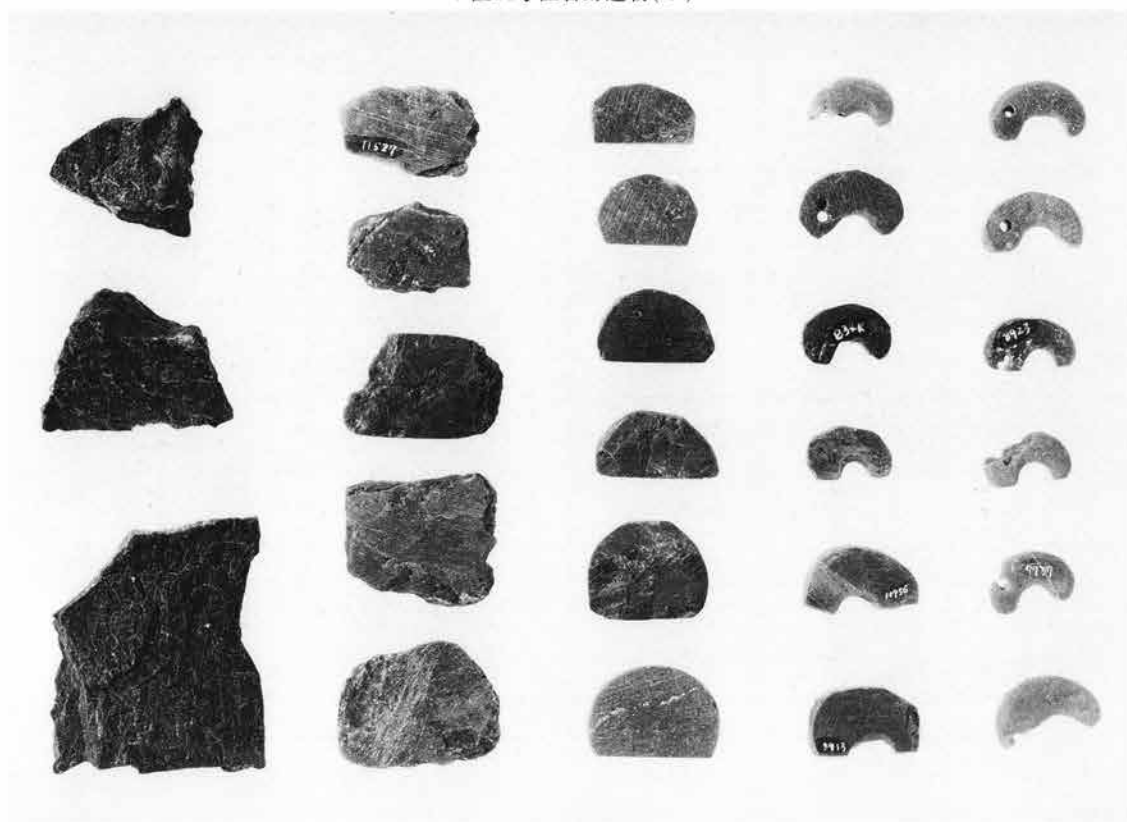
7区24号住居跡遺物(1)



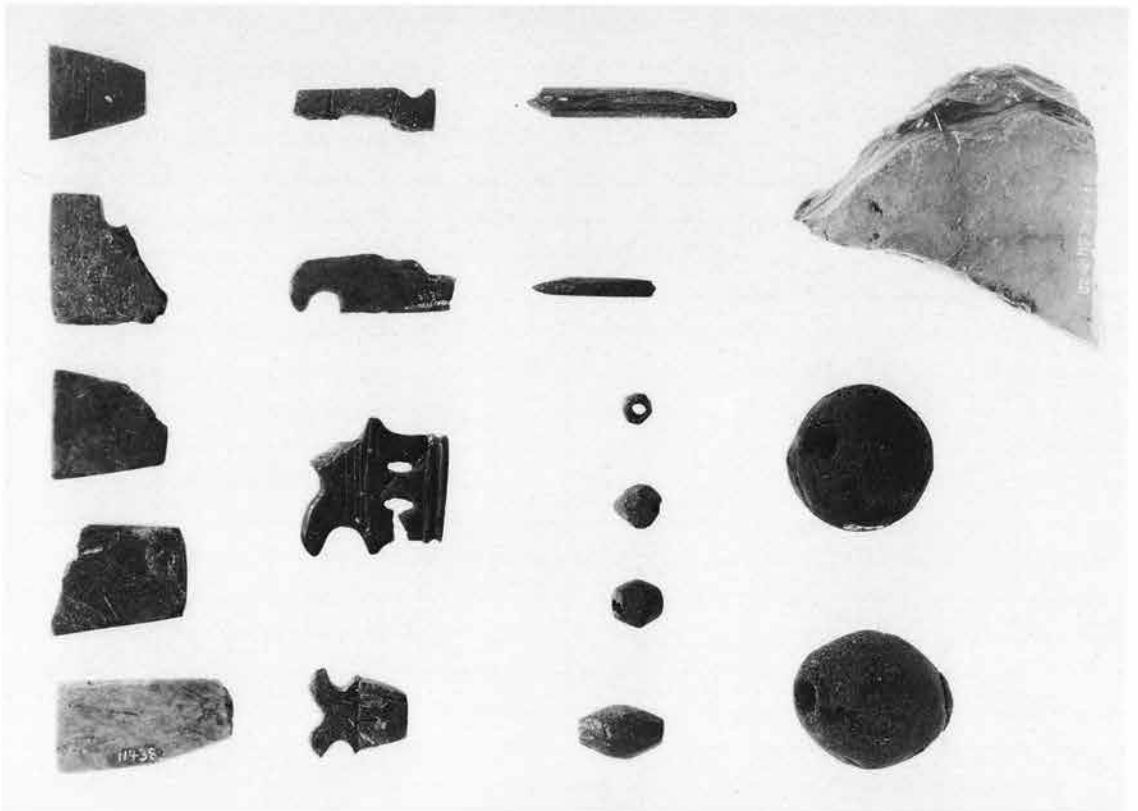
7区24号住居跡遺物(2)



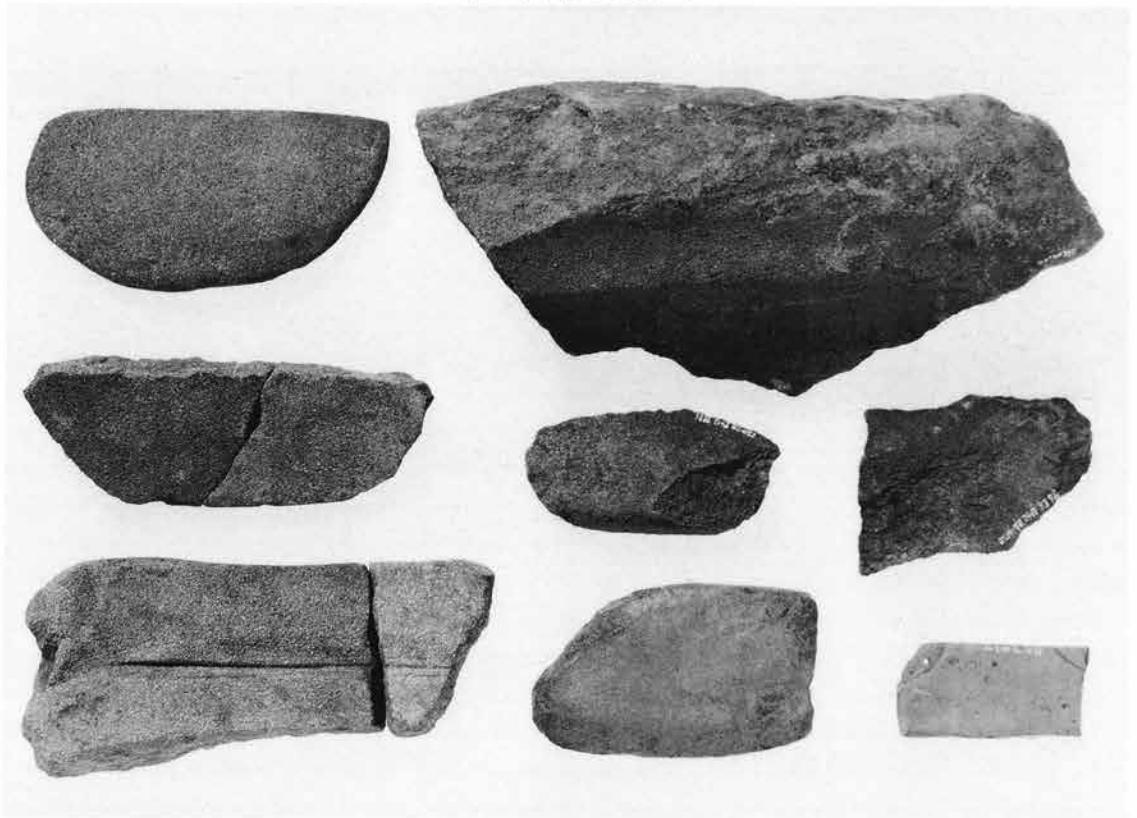
7区24号住居跡遺物(3)



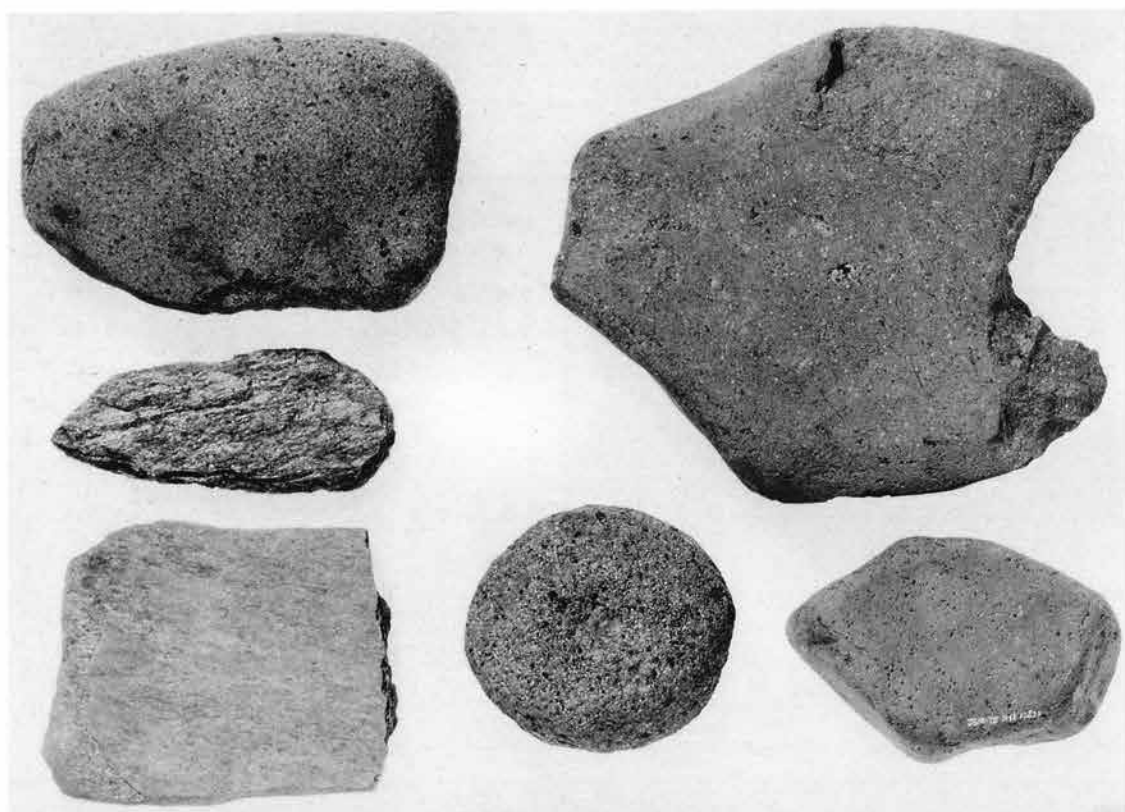
7区24号住居跡遺物(4)



7区24号住居跡遺物(5)



7区24号住居跡遺物(6)



7区24号住居跡遺物(7)



7区24号住居跡遺物(8)



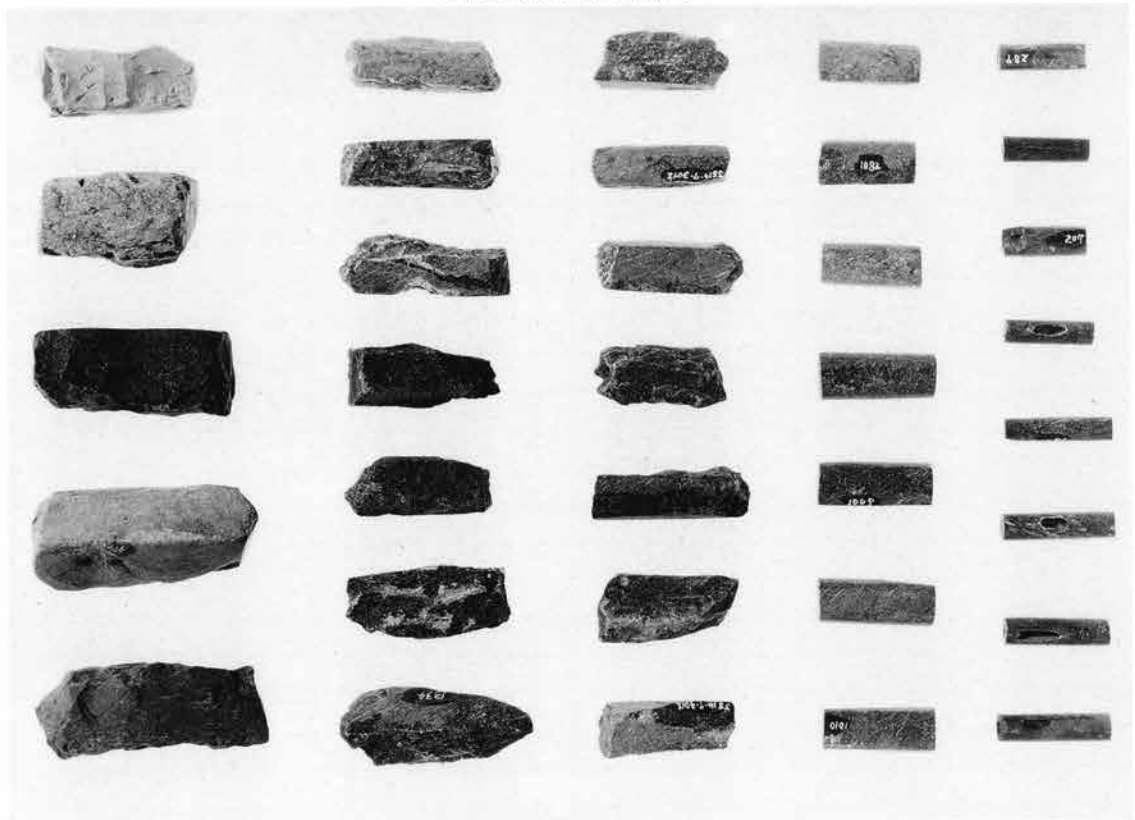
7区30号住居跡全景(東)



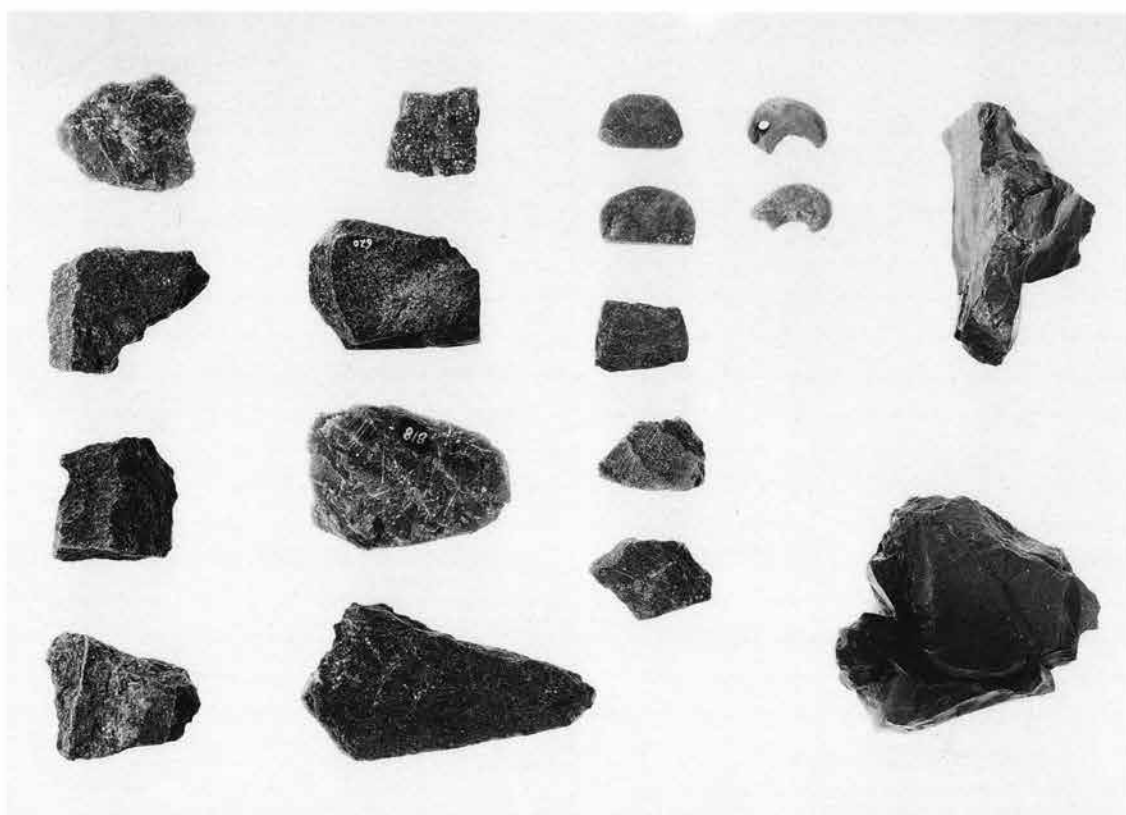
7区30号住居跡遺物出土狀態



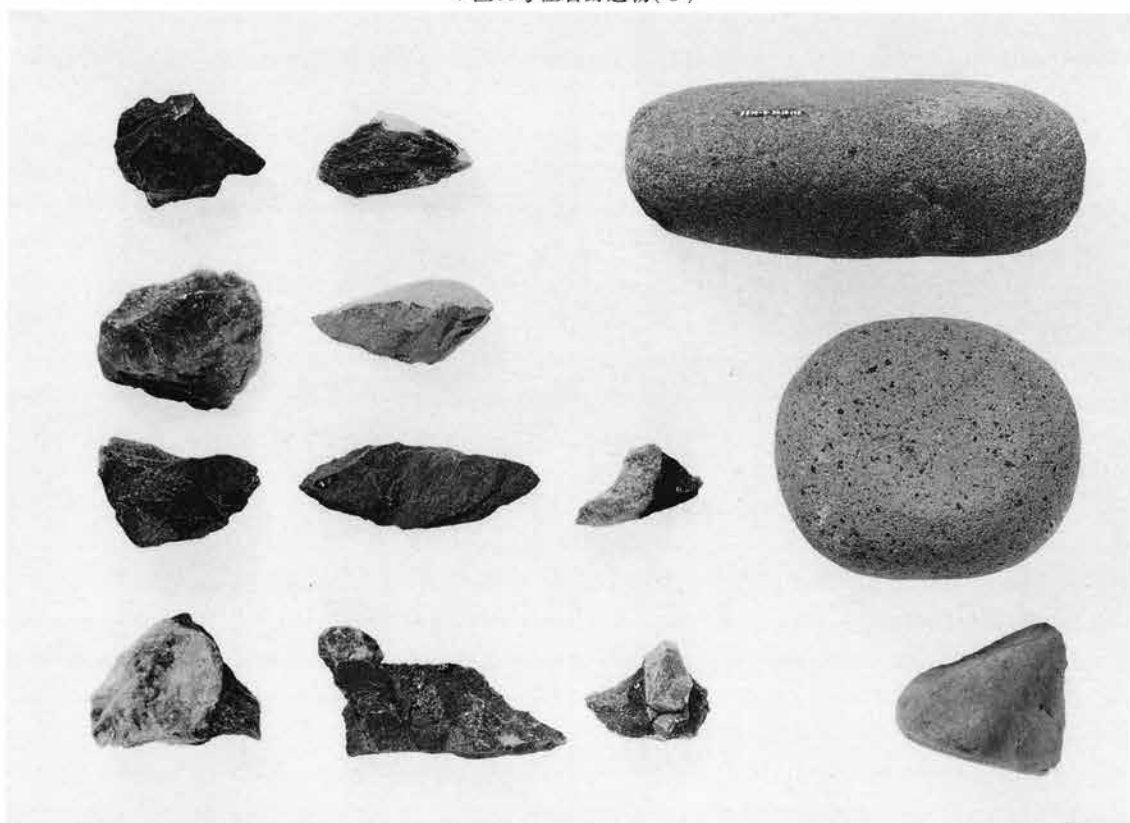
7区30号住居跡遺物(1)



7区30号住居跡遺物(2)



7区30号住居跡遺物(3)



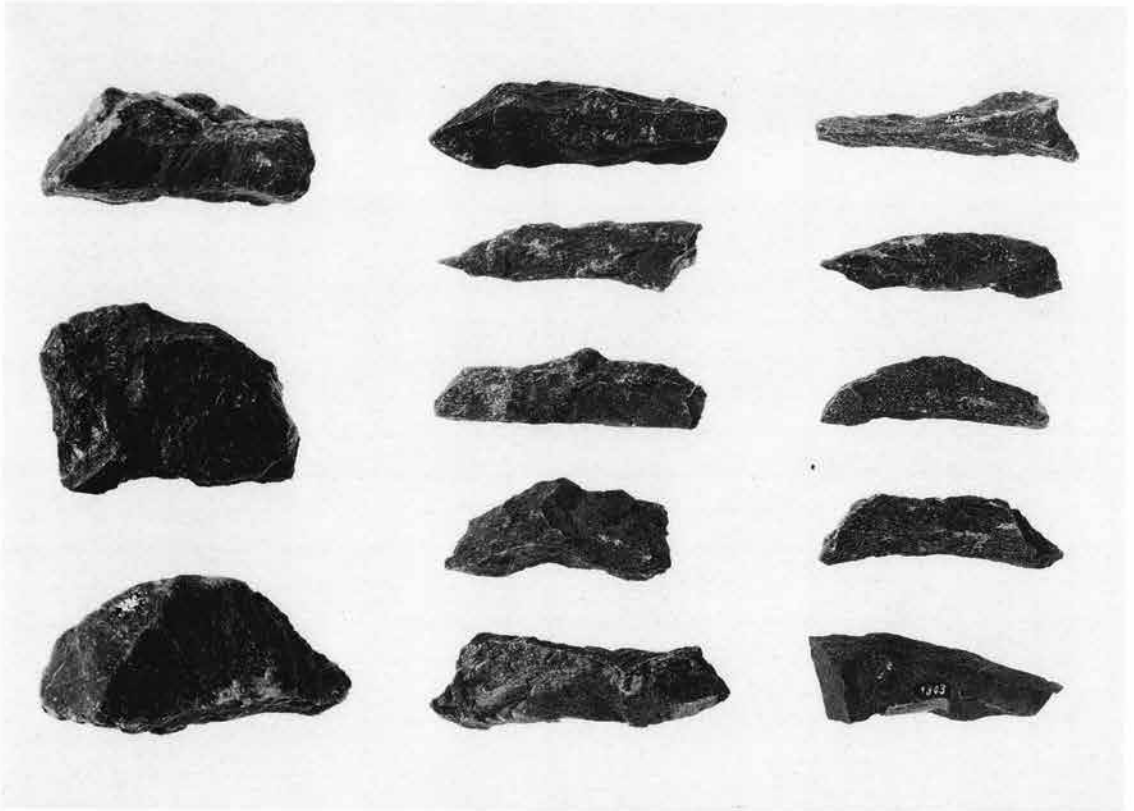
7区30号住居跡遺物(4)



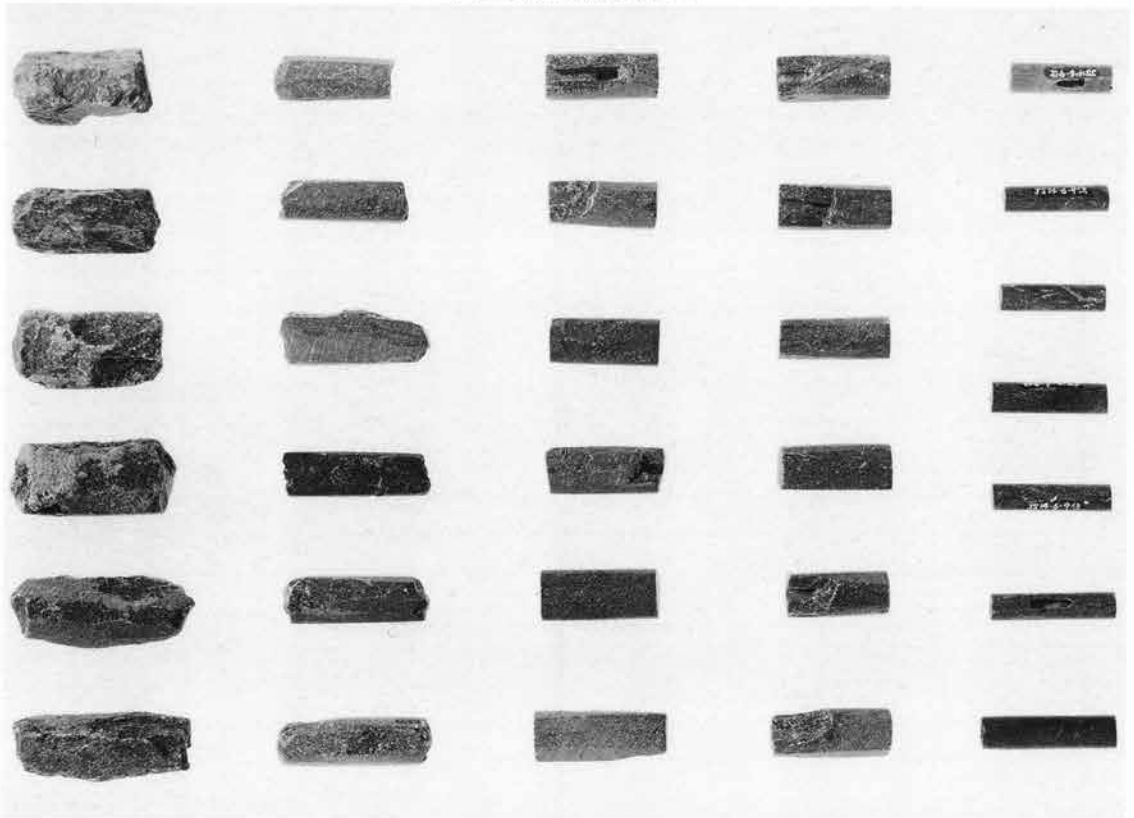
7区41号住居跡全景(東)



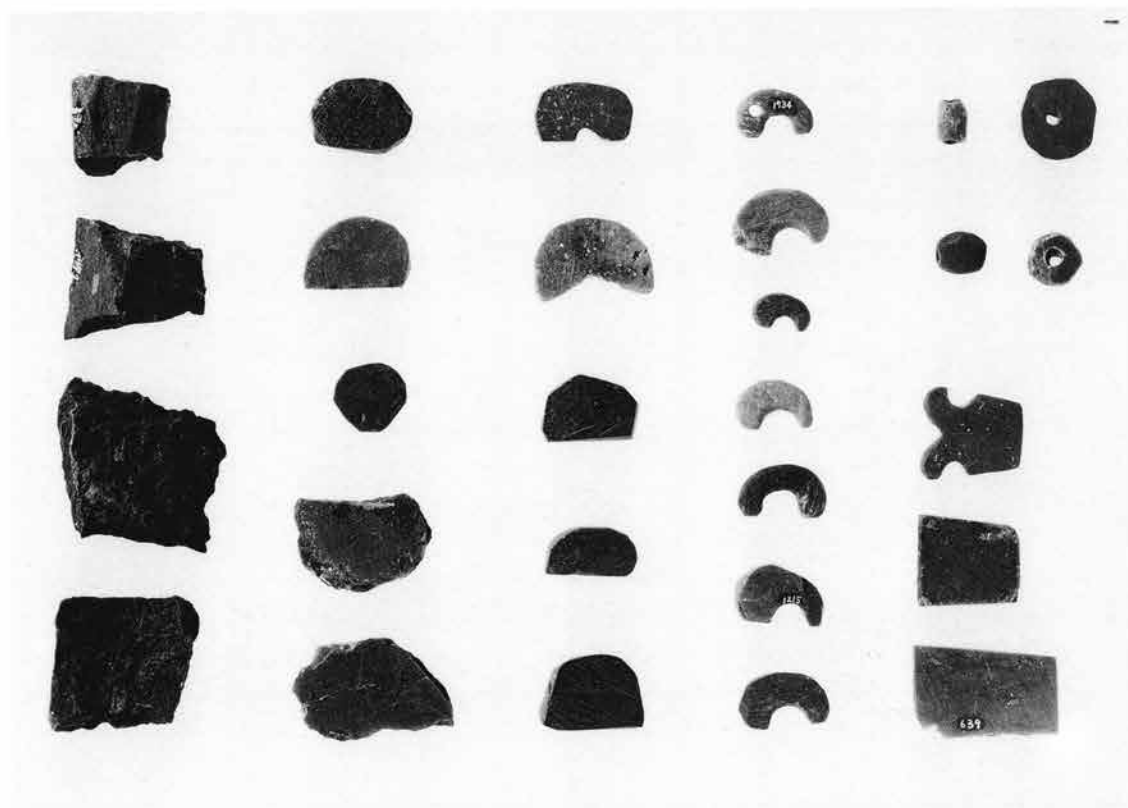
7区41号住居跡工作用ピット



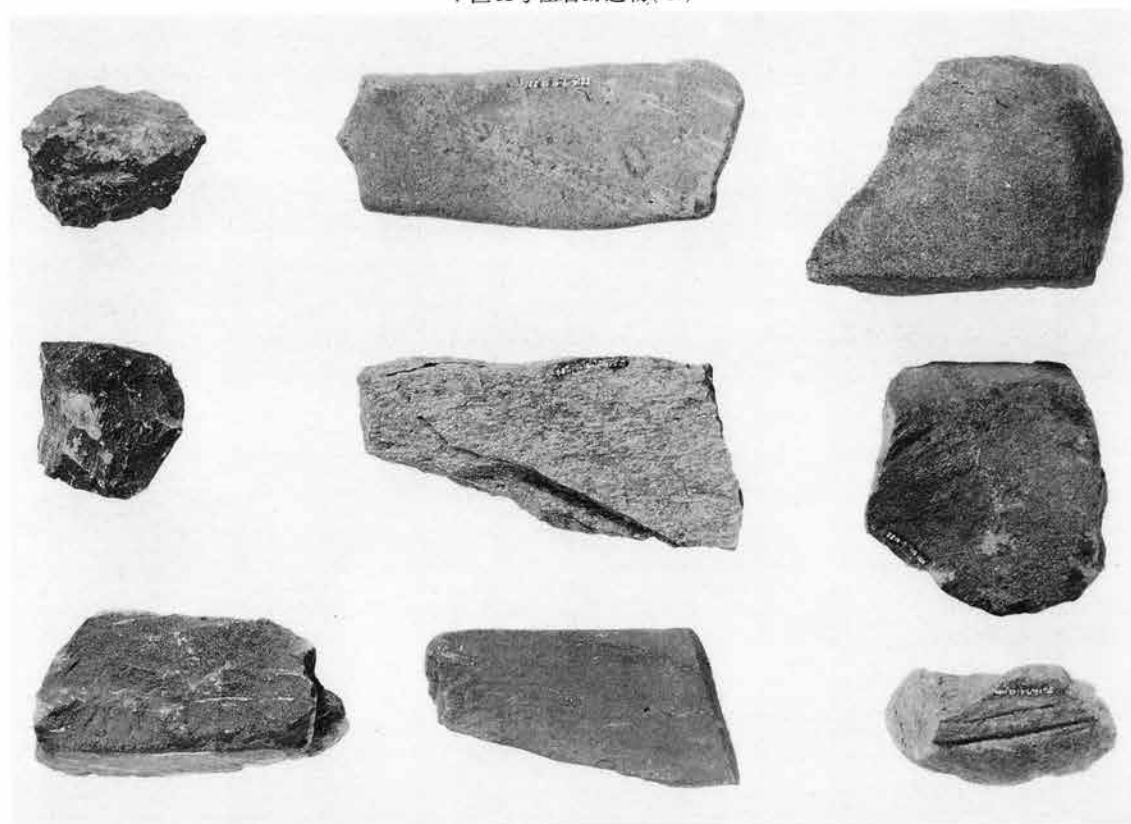
7区41号住居跡遺物(1)



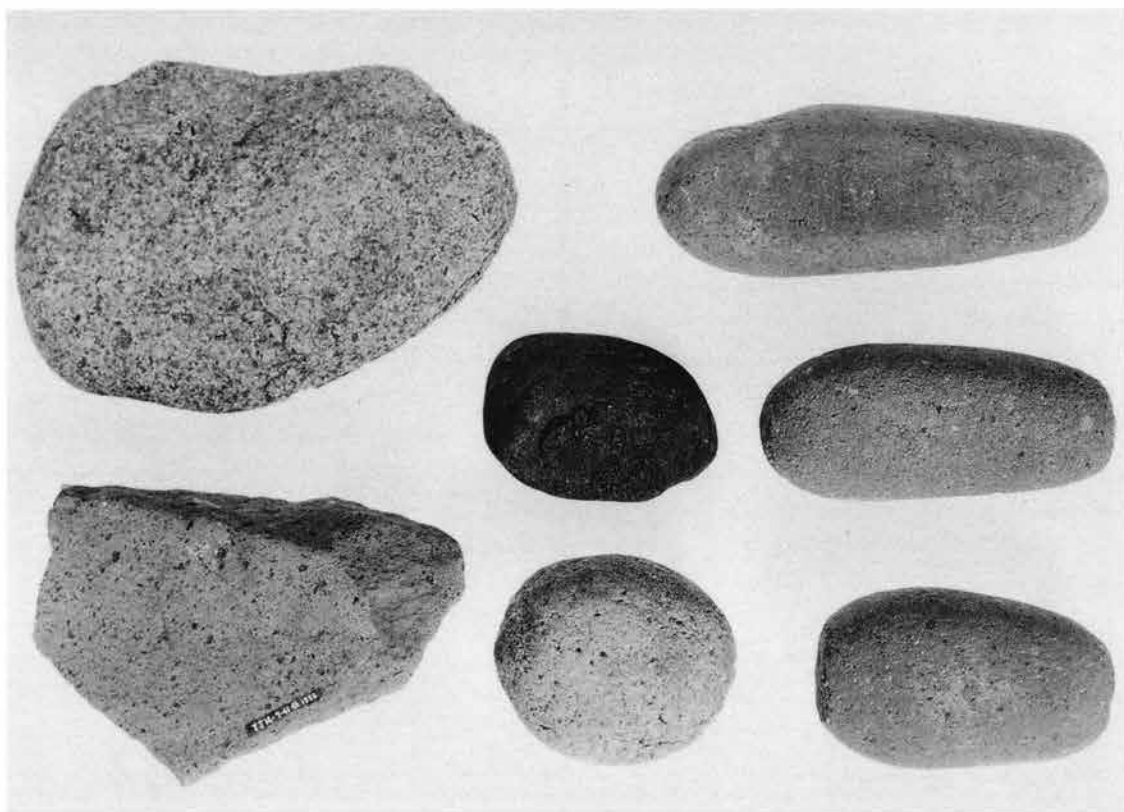
7区41号住居跡遺物(2)



7区41号住居跡遺物(3)



7区41号住居跡遺物(4)



7区41号住居跡遺物(5)



7区30号住居跡遺物(5)



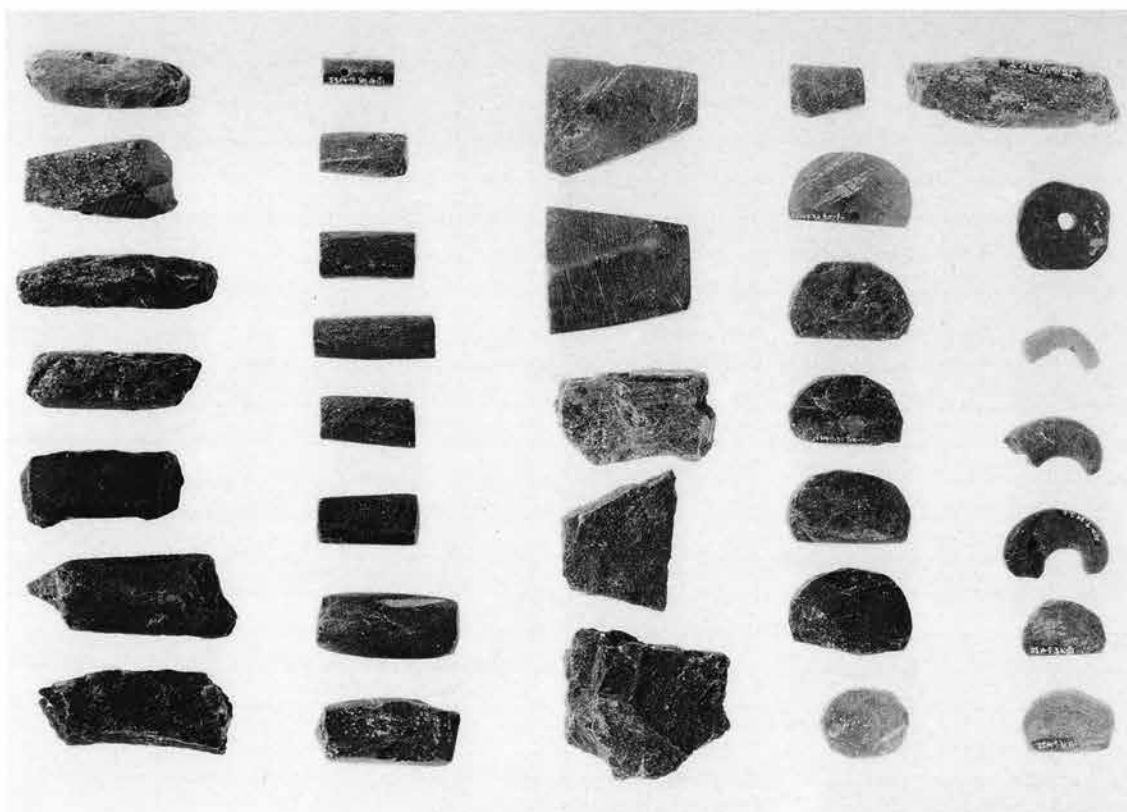
7区41号住居跡遺物(6)



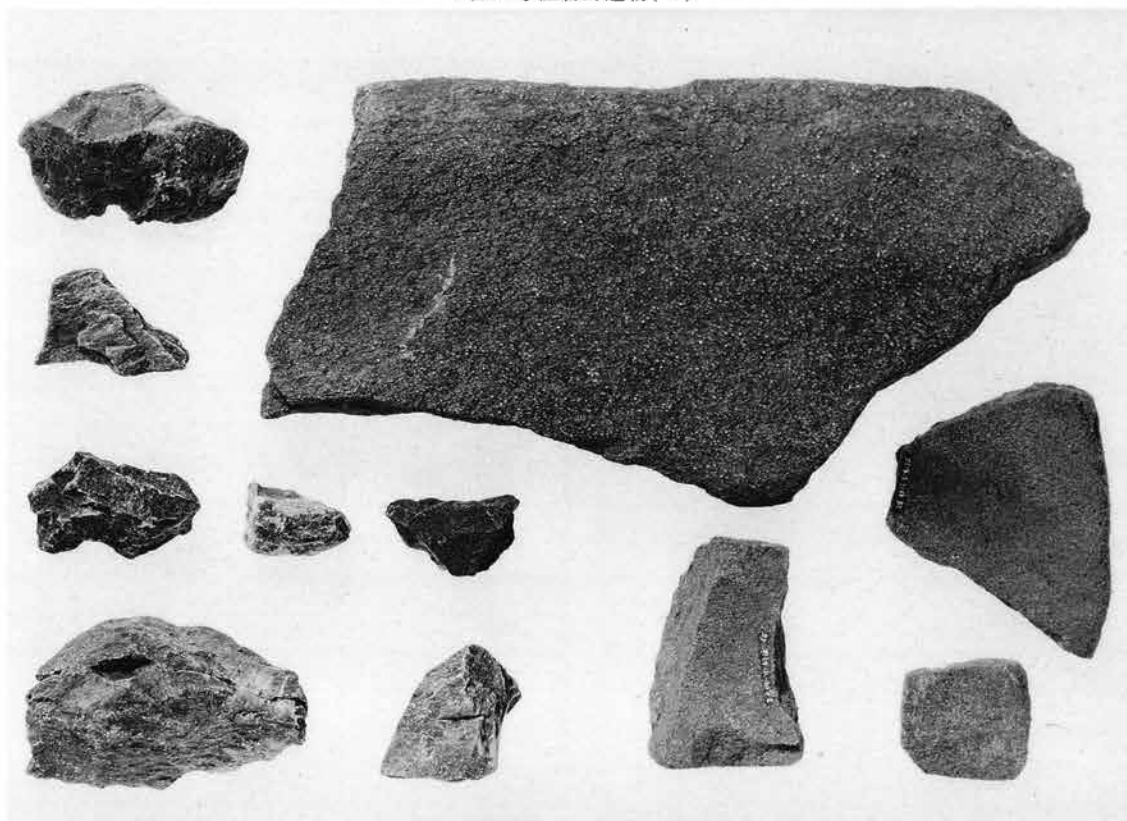
7区51号住居迹全景(西)



7区51号住居迹遗物出土状态



7区51号住居跡遺物(1)



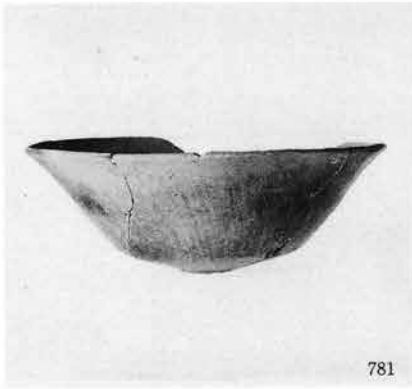
7区51号住居跡遺物(2)



6区20号住居跡全景(北西)



6区22号住居跡全景(北)



6区20号住居跡遺物



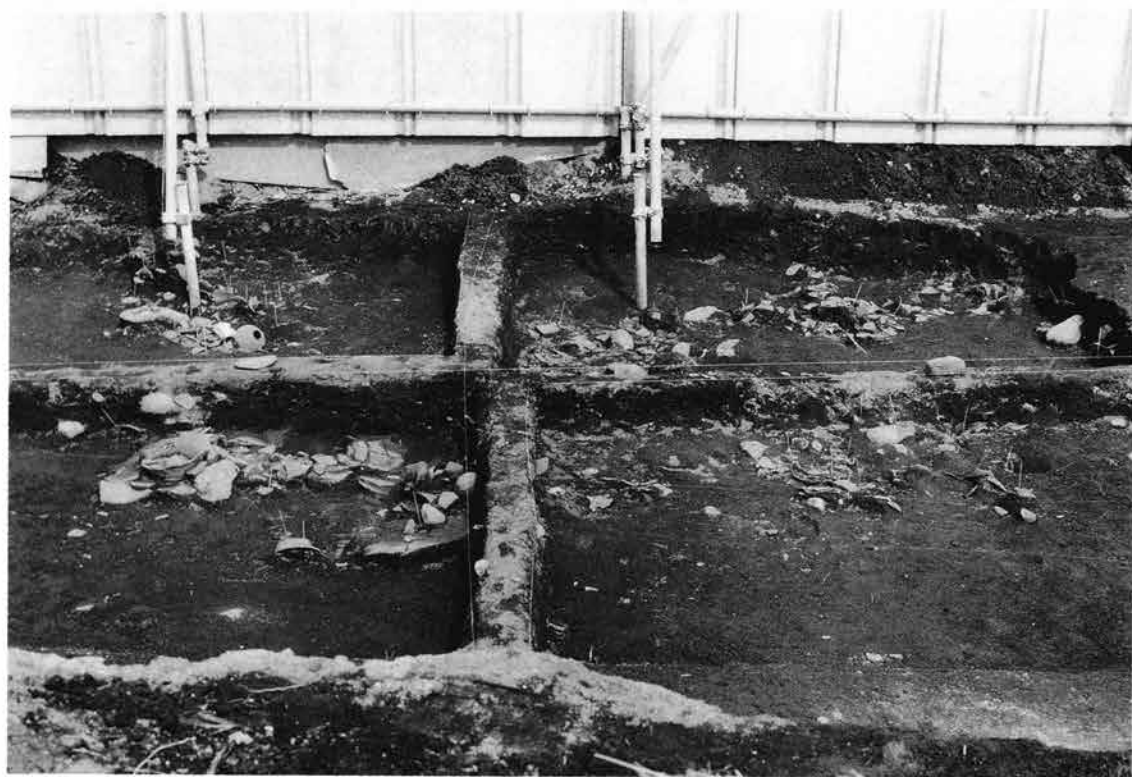
6区22号住居跡遺物



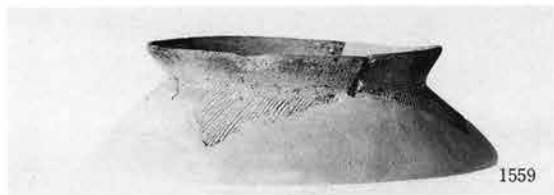
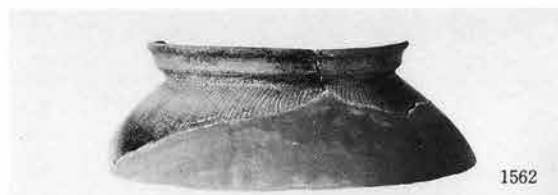
7区25号住居跡遺物



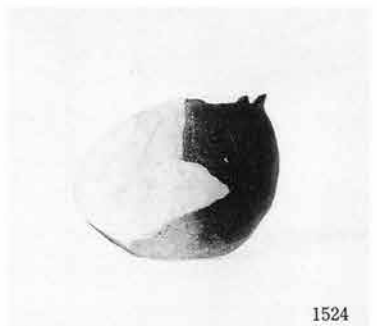
7区45号住居迹全景(南)



7区45号住居迹遺物出土状态



7区45号住居跡遺物(1)





1522



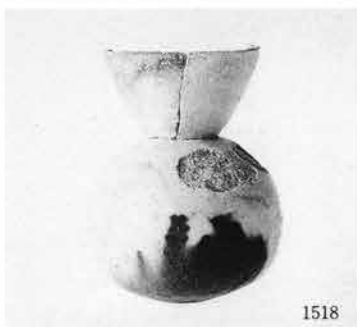
1532



1533



1517



1518



1519



1502



1503



1504



1505



1506



1507



1508

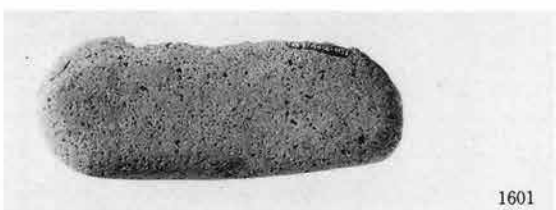


1509



1514

7区45号住居跡遺物(3)





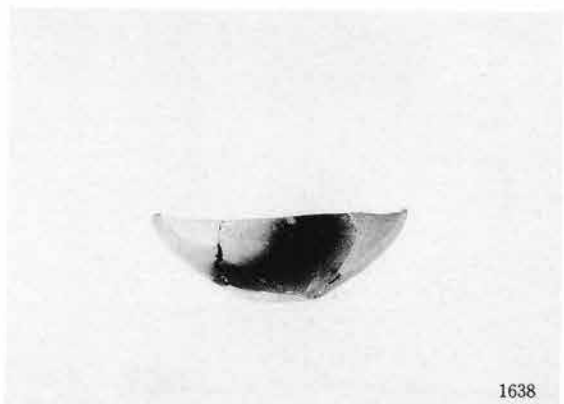
7区56号住居跡全景(西)



1637



1639



1638



1640

7区56号住居跡遺物



6区12号土坛全景(西)



6区12号、7区111号土坛遗物



7区1号、2号、3号、5号方形周溝墓(東)



7区1号方形周溝墓全景(西)



7区2号方形周溝墓全景(西)



7区3号方形周溝墓全景(南)



7区4号方形周溝墓全景(北西)



7区5号方形周溝墓全景(西)



1方
1645



3方
1647



3方
1447



3方
1653



3方
1652



3方
1651



3方
1649



3方
1648

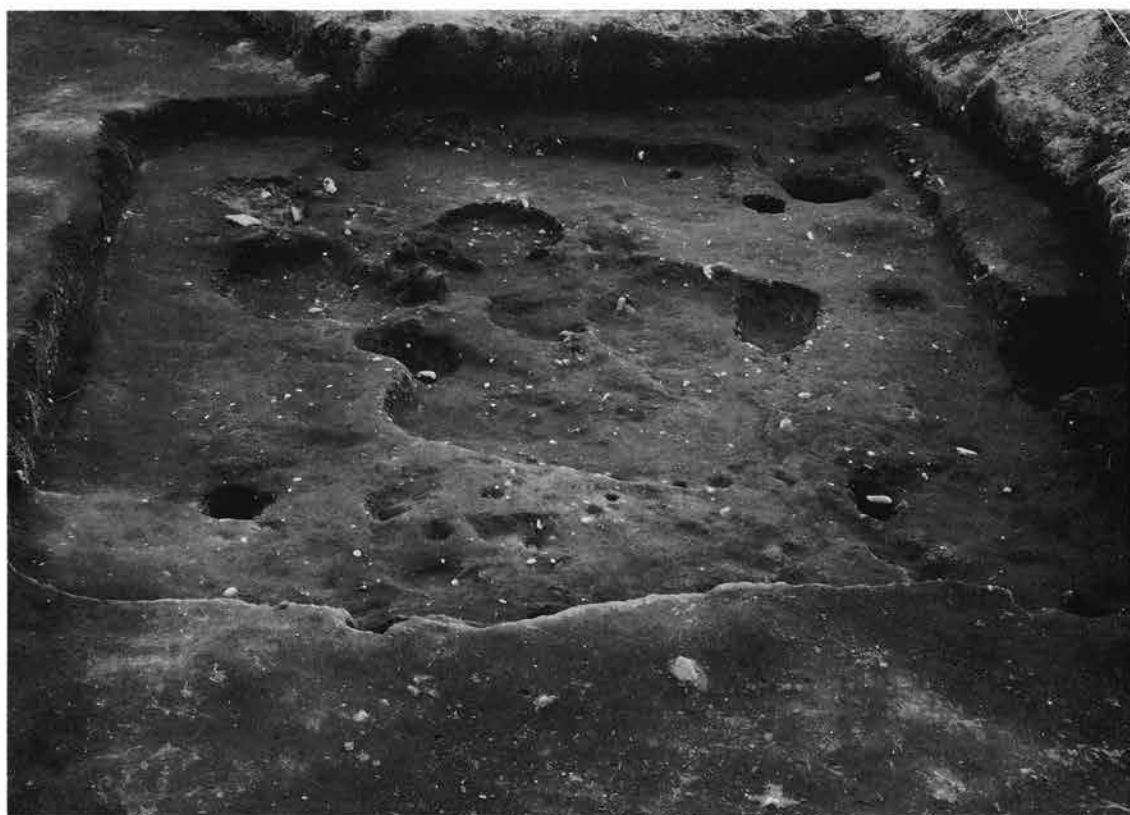


3方
1650



4方
1656

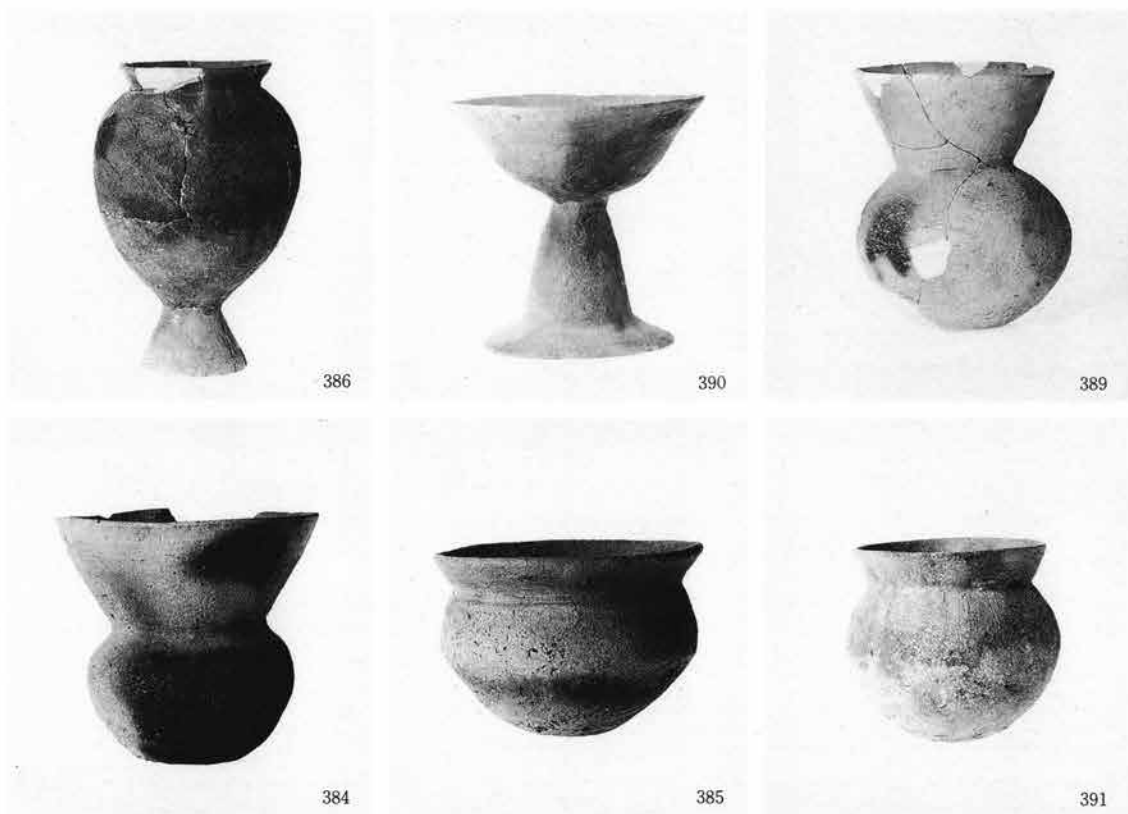
7区1号、3号、4号方形周溝墓遺物



5区7C号住居跡全景(北)



5区7C号住居跡遺物出土狀態(北)



5区7C号住居跡遺物



5区69号住居跡全景(北)



5区69号住居跡遺物出土状態(北)



638



639



645



642



640



644

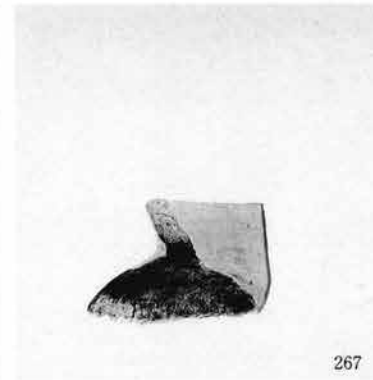
5区69号住居跡遺物



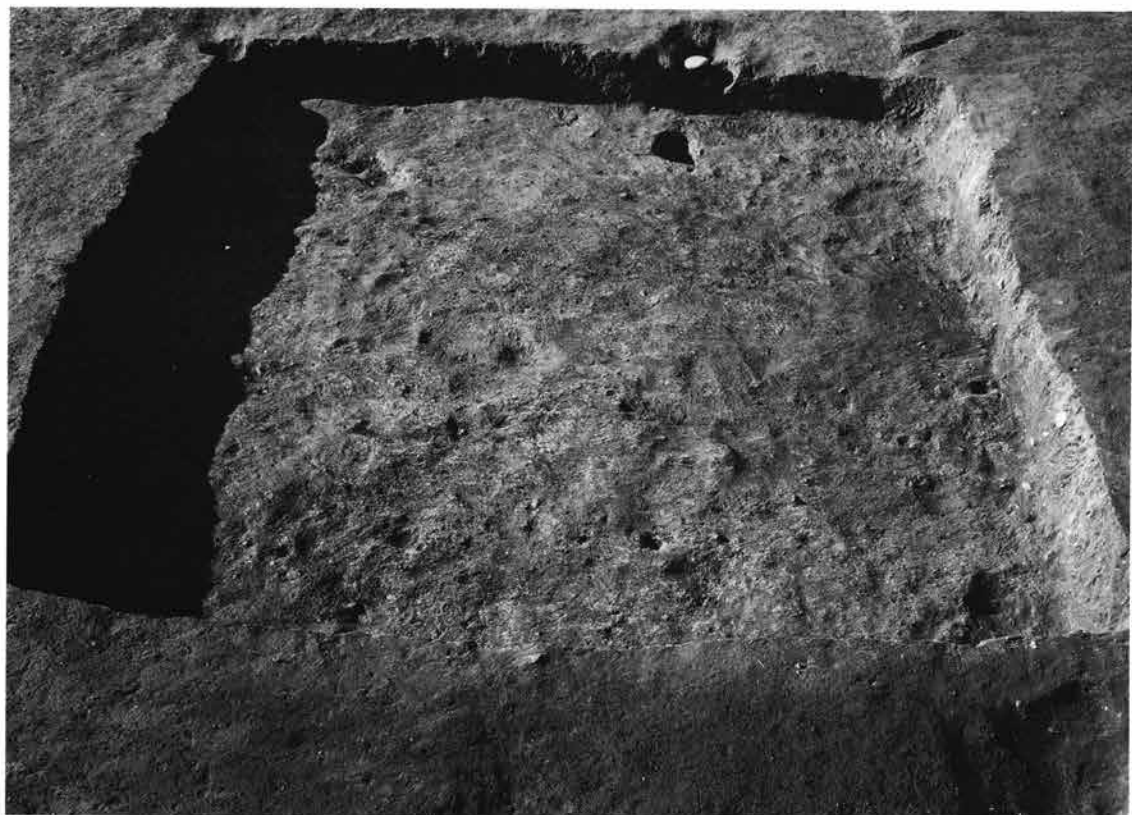
5区2号住居跡全景(西南)



5区2号住居跡遺物出土状態(南)



5区2号住居跡遺物



5区4号住居跡全景(東南)



5区4号住居跡遺物出土状態(東南)



5区4号住居跡炭化物出土状態



312



317



299



305

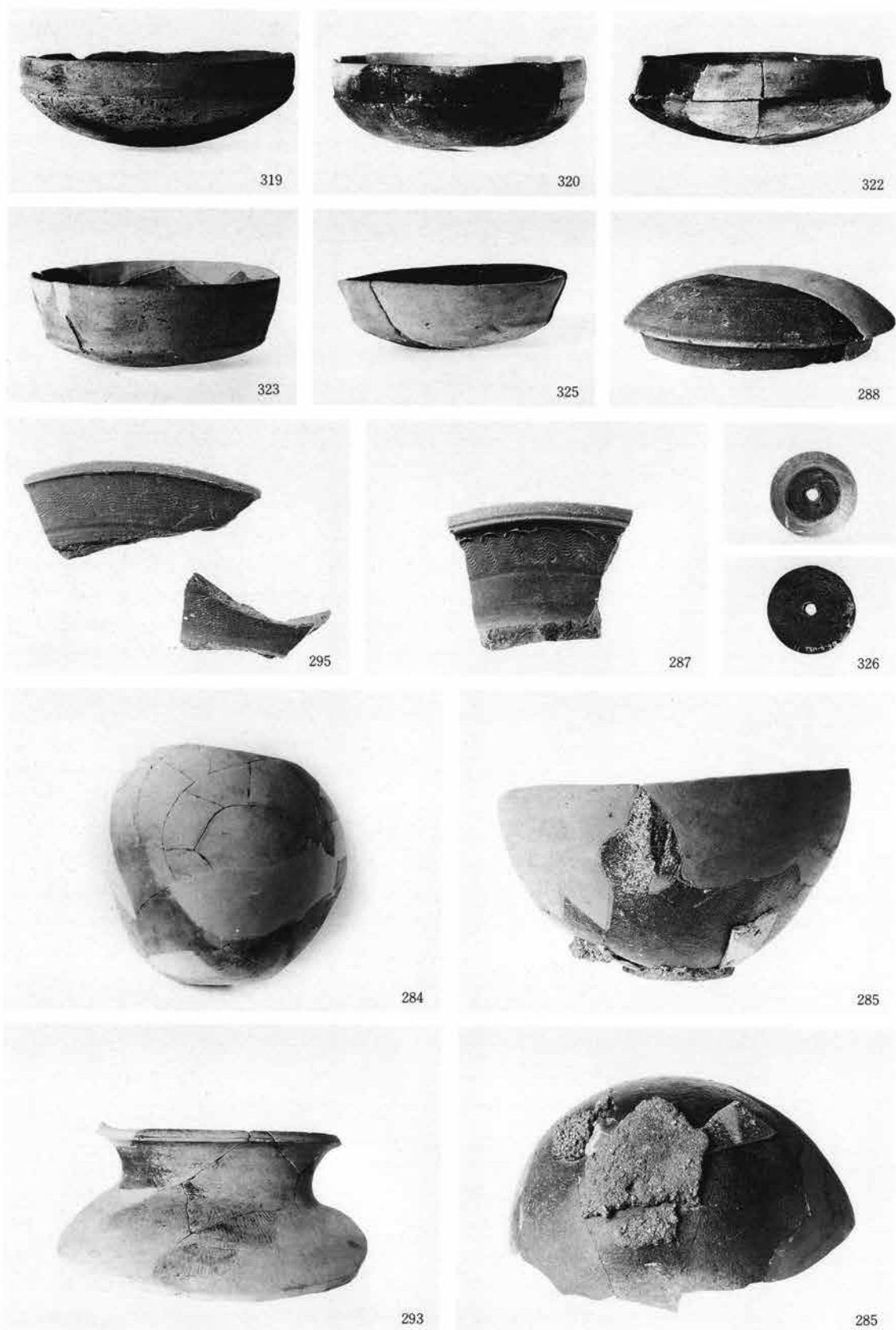


311



310

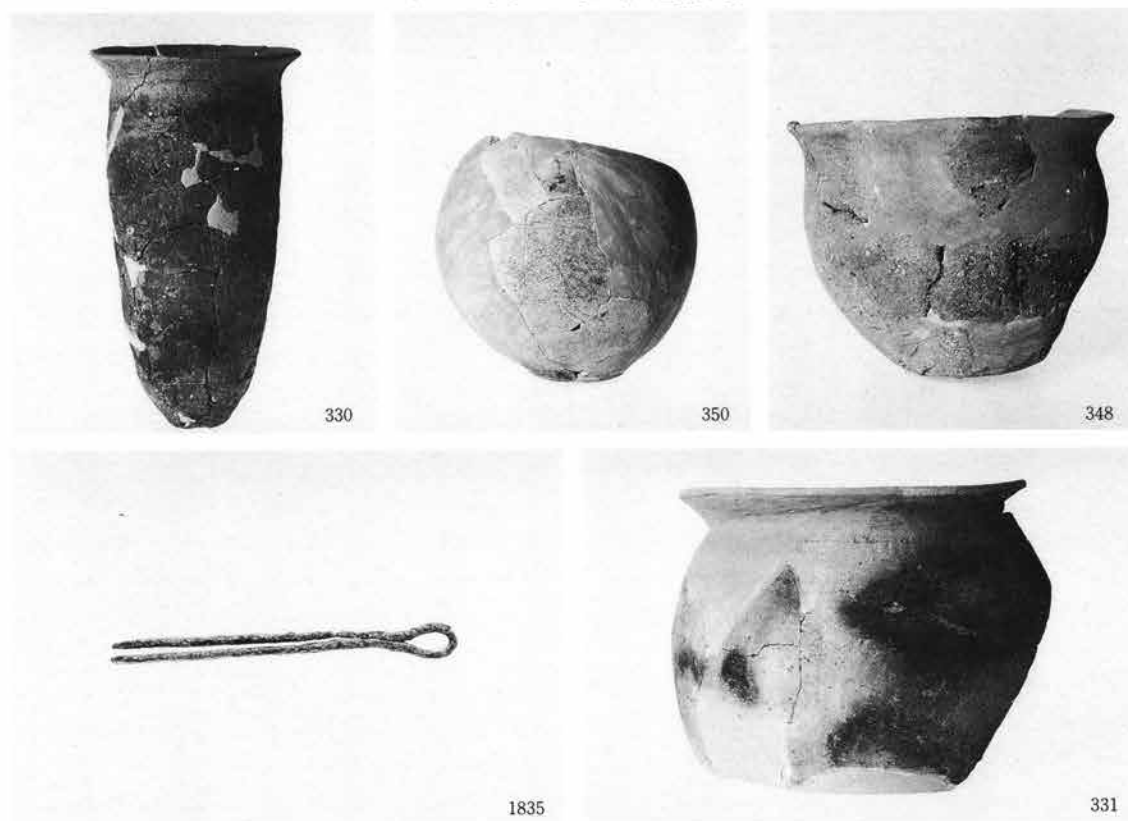
5区4号住居跡遺物(1)



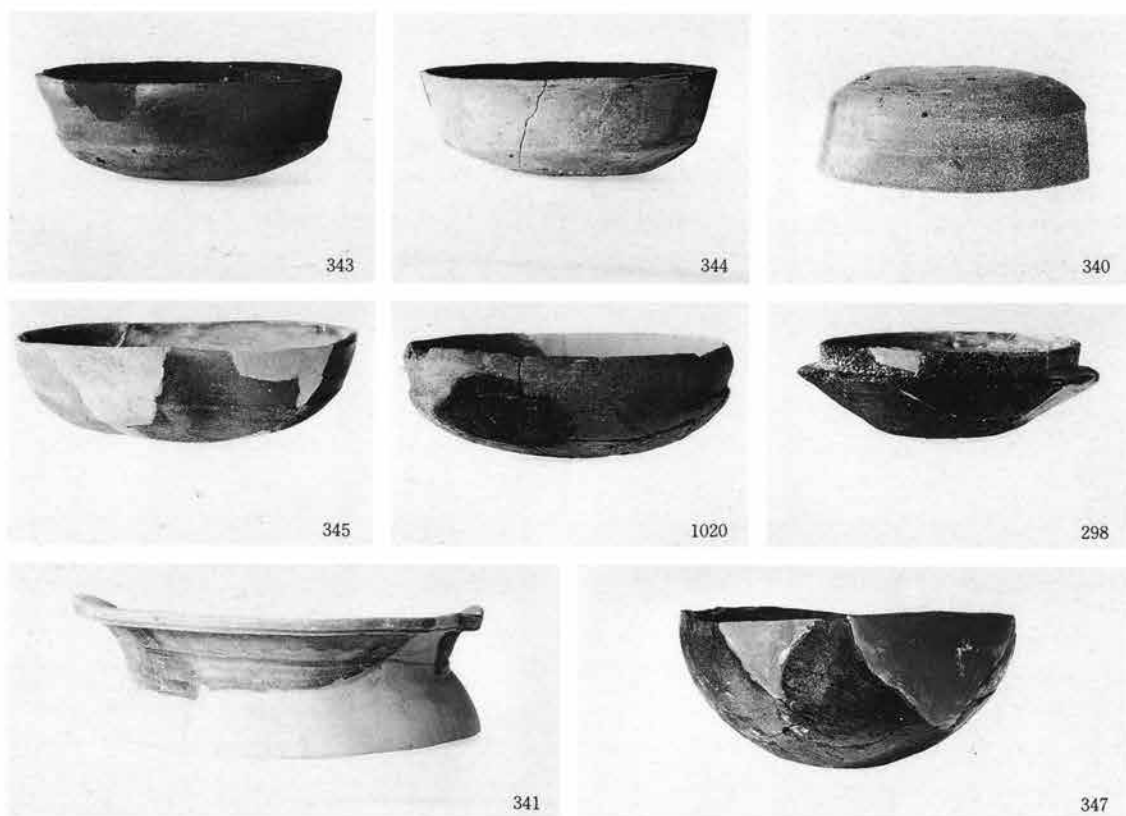
5区4号住居跡遺物(2)



5区5B号、5C号住居跡全景(北)



5区5B号住居跡遺物(1)



5区5B号住居跡遺物(2)



5区57号住居跡全景(西)



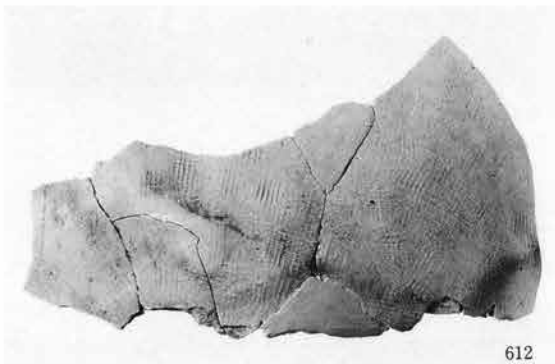
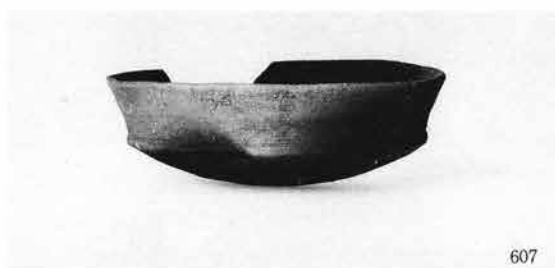
5区57号住居跡遺物出土状態(西)



5区57号住居跡カマド(西)



5区57号住居跡遺物(1)



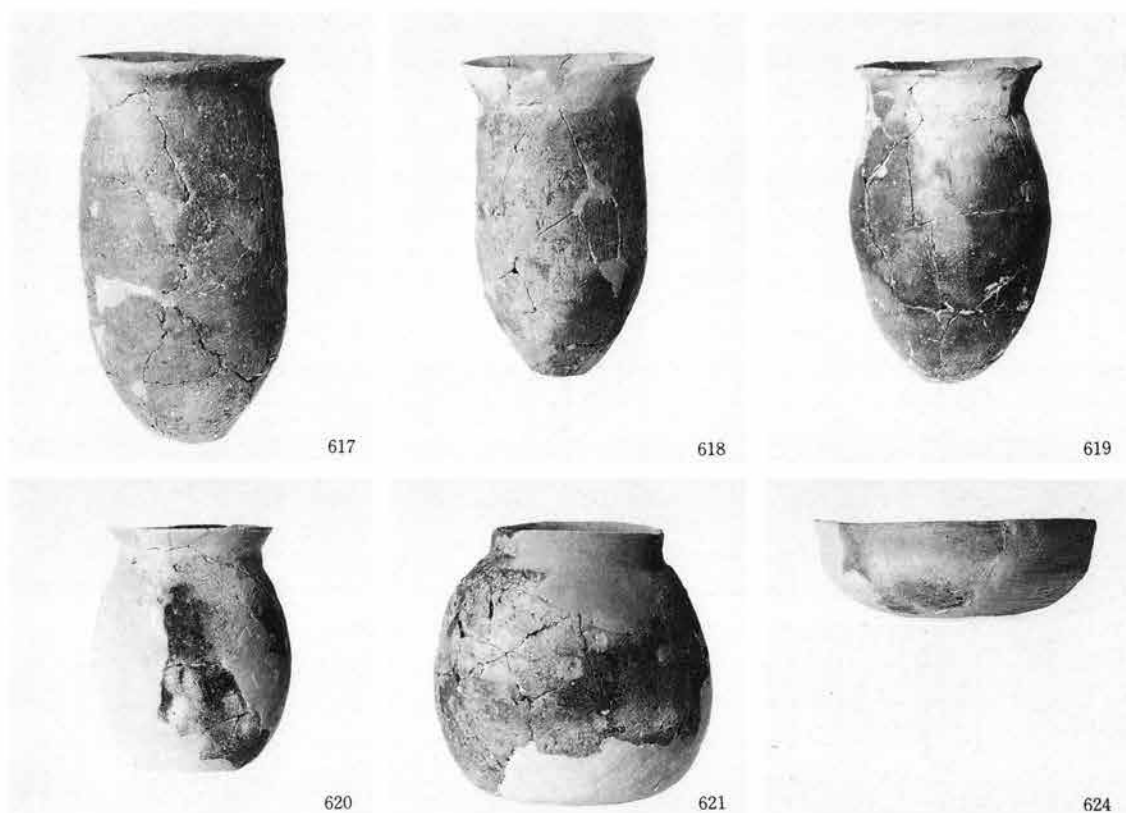
5区57号住居跡遺物(2)



5区58号住居跡全景(北西)



5区58号住居跡カマド(北西)



5区58号住居跡遺物



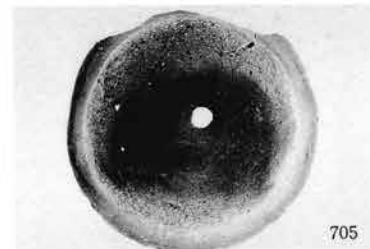
6区7号住居跡全景(北)



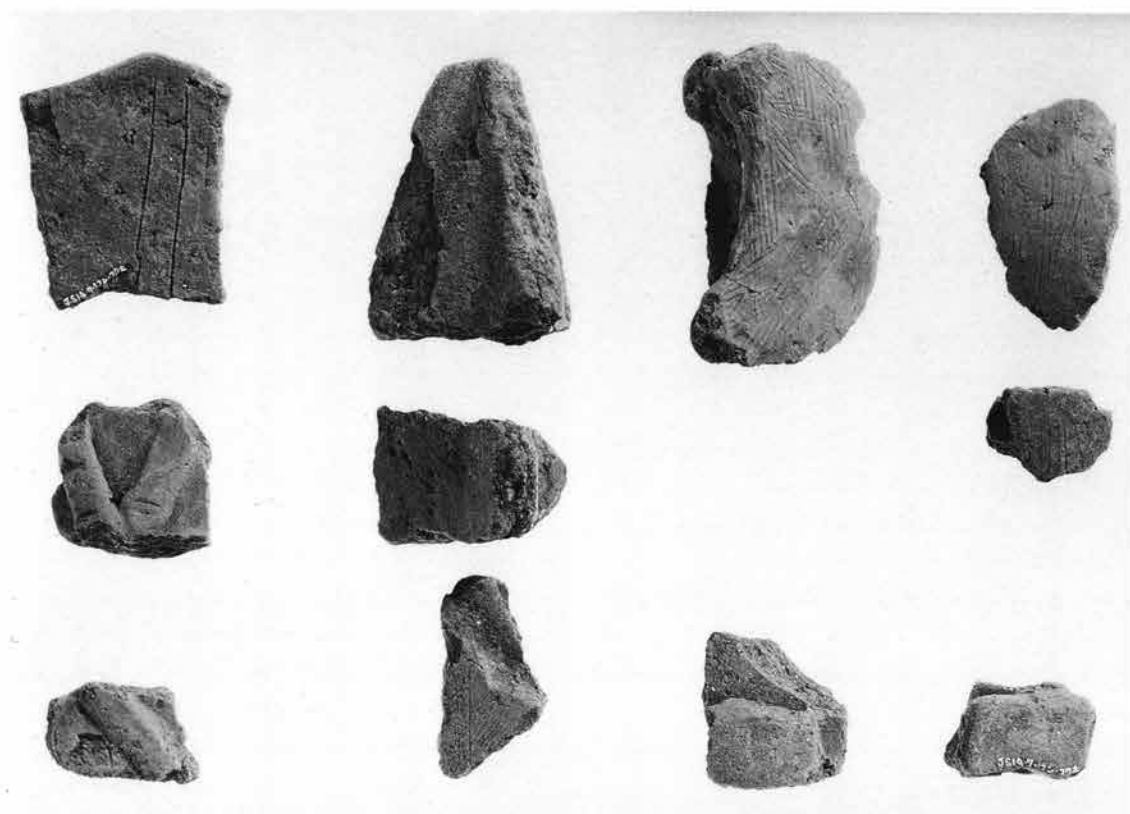
6区7号住居跡遺物出土状態(北)



6区7号住居跡カマド(北)



6区7号住居跡遺物



7区1号古墳形象埴輪



7区1号古墳から3号古墳を望む



7区2号古墳全景(西)



7区2号古墳人物埴輪



7区2号古墳形象埴輪



1706



1720



1724



1722

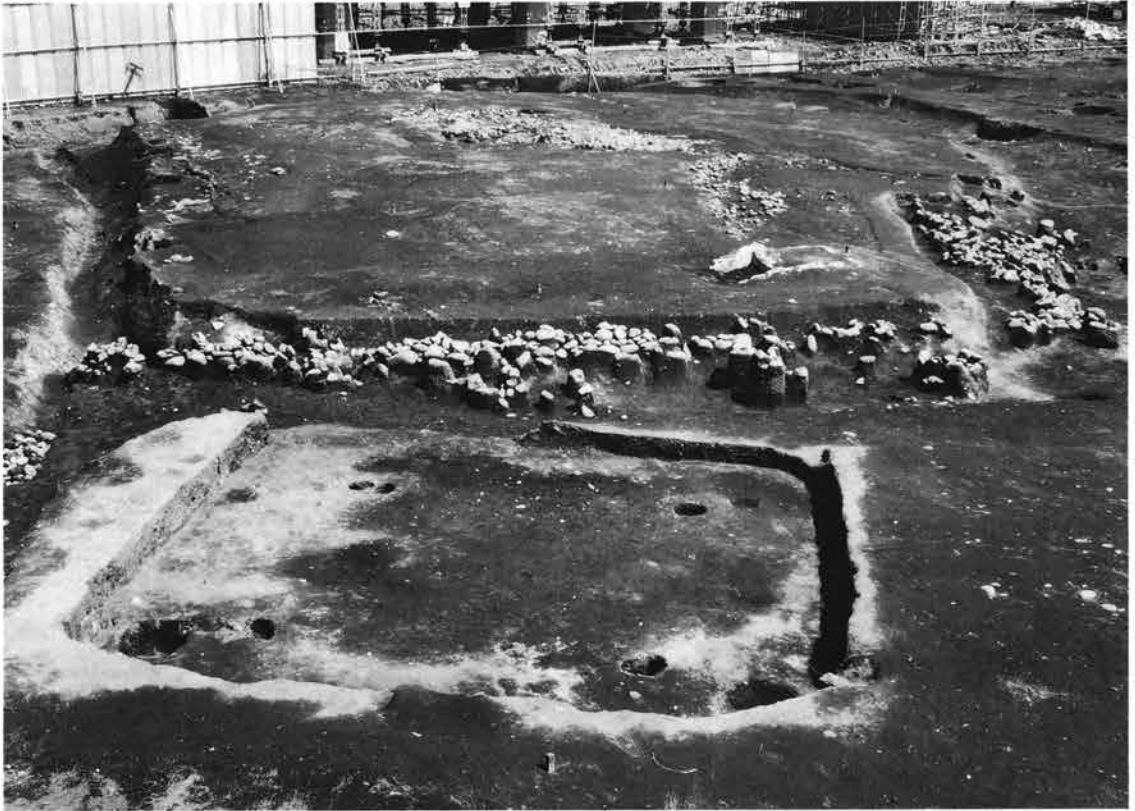


1721

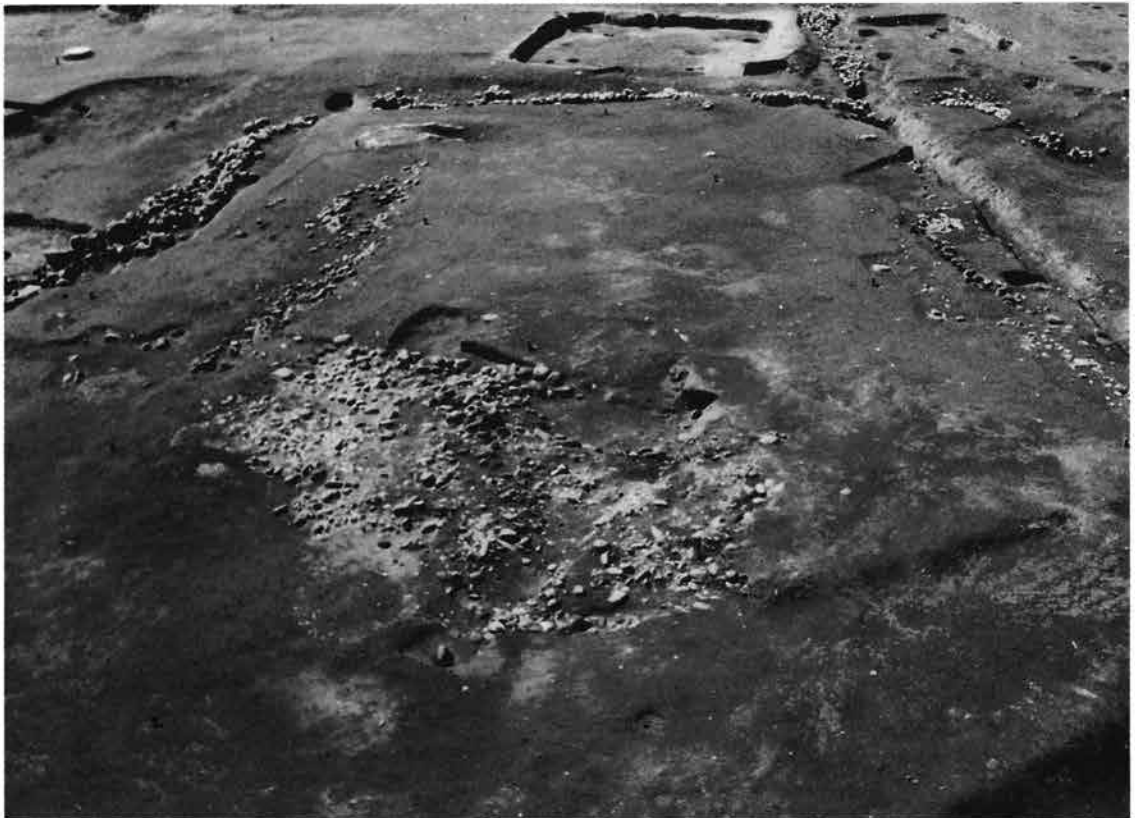


1723

7区2号古墳円筒埴輪



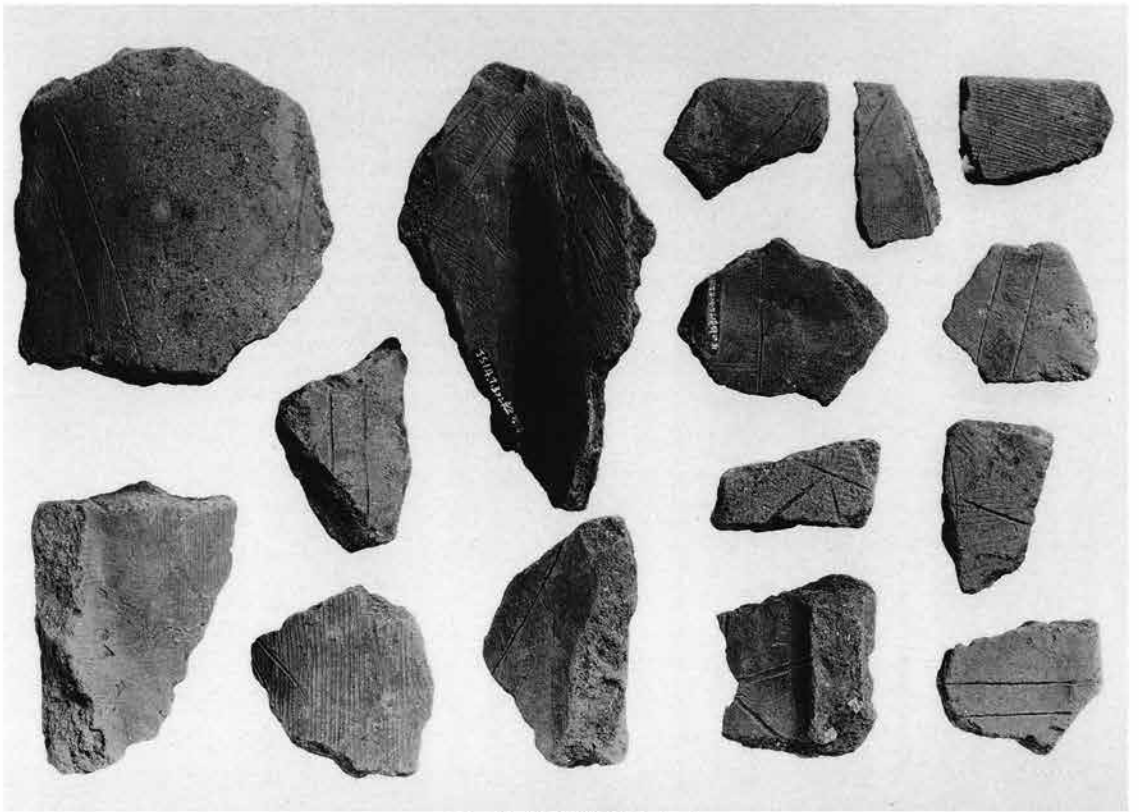
7区3号古墳全景(前方部から)



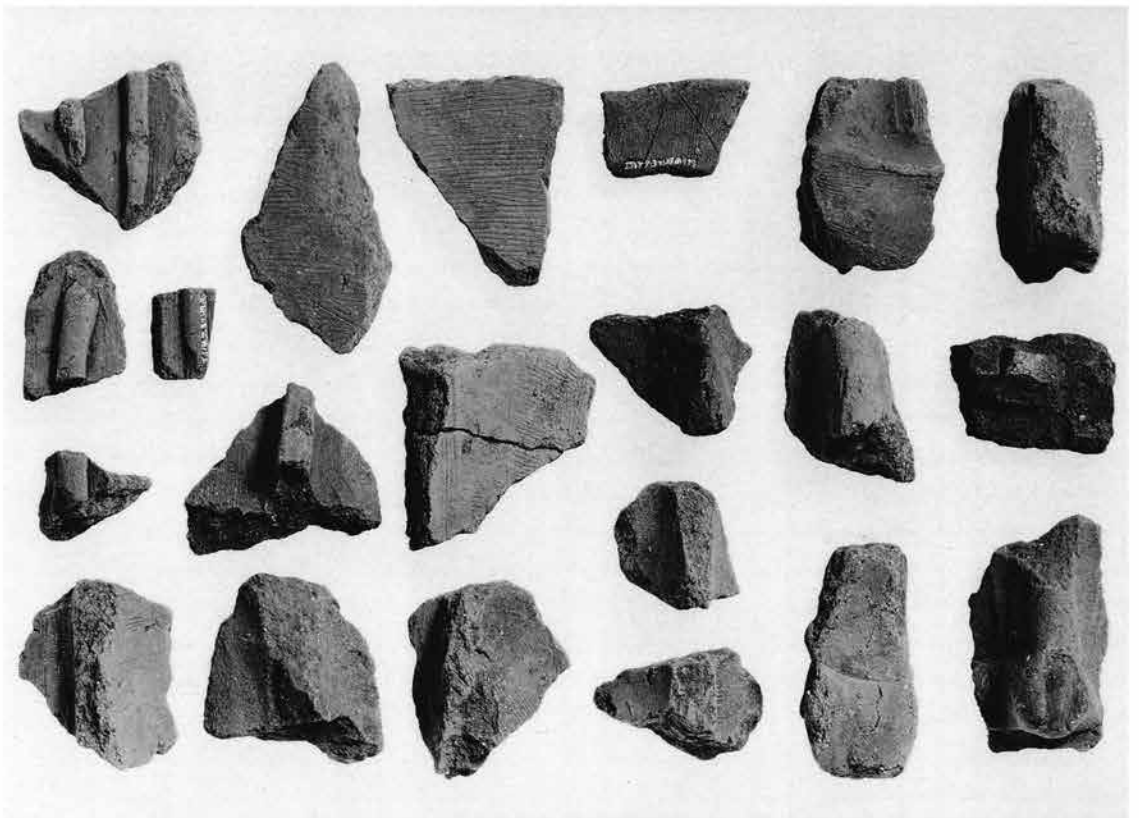
7区3号古墳全景(後円部から)



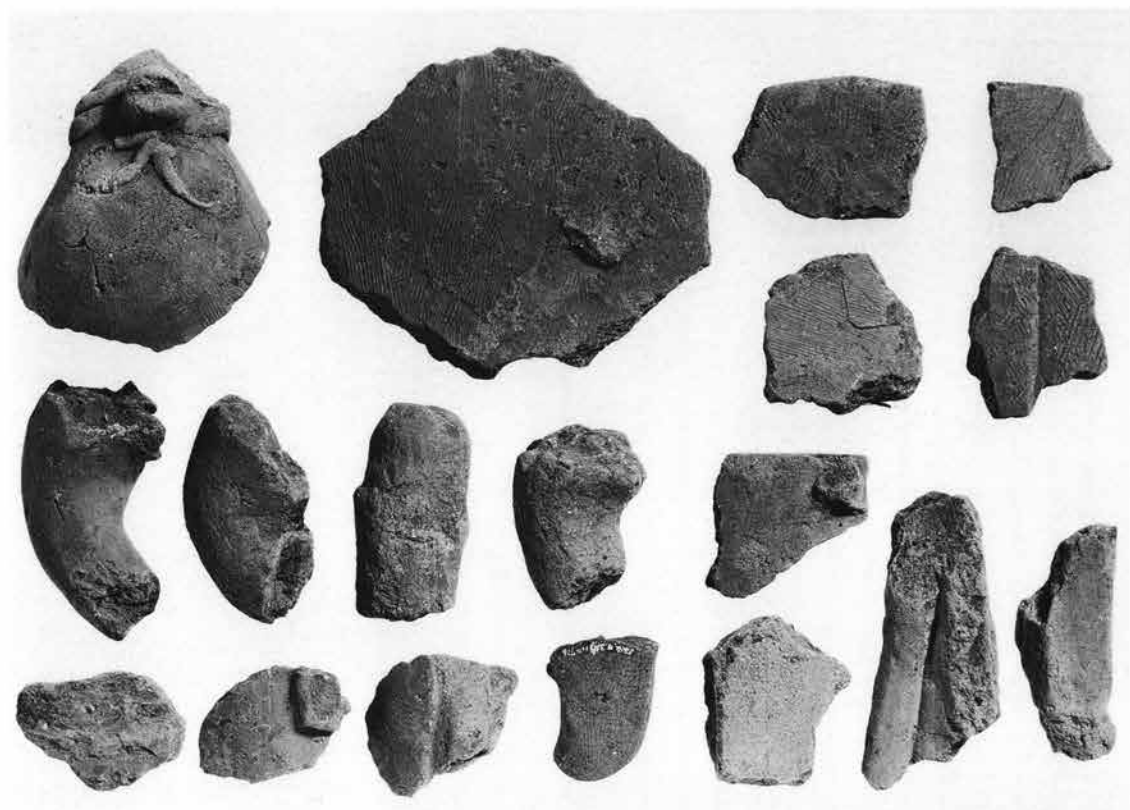
7区3号古墳円筒埴輪



7区3号古墳形象埴輪(1)



7区3号古墳形象埴輪(2)



7区3号古墳形象埴輪(3)



7区3号古墳主体部遺物



7区4号古墳全景(東)



1810



1811



1812



1813



1814

7区4号古墳遺物

下佐野遺跡II地区 (縄文時代) — 上越新幹線関係埋蔵
(古墳時代) 文化財発掘調査報告第6集—

印刷 昭和61年3月26日

発行 昭和61年3月31日

編集・発行 群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
(0279) 52-2511(代)

印刷 朝日印刷工業株式会社
